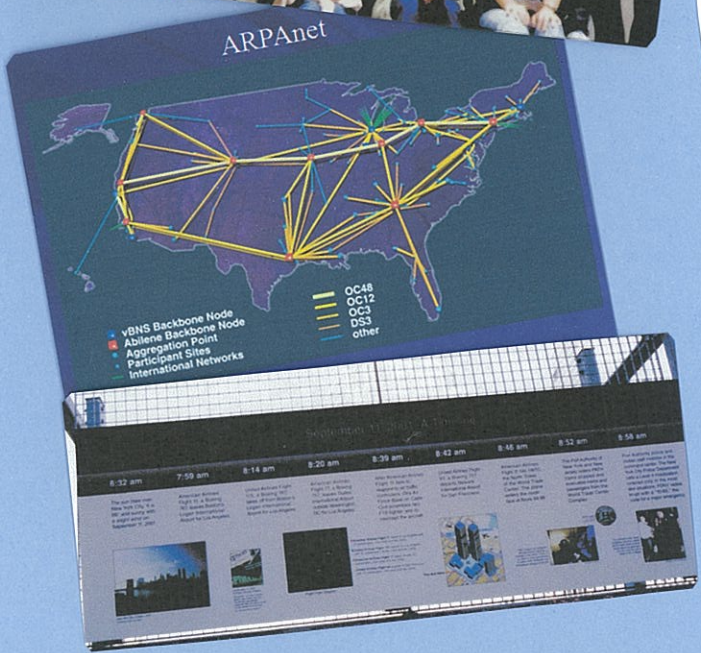




学びの場としての学術雑誌塾

1985-1990



表紙について

表紙に使用した写真はコラージュとして利用したもので、主に塾生の個人的な写真と「ウィキペディア」(オンライン百科事典)から得た画像です。

学びの場としての学術雑誌塾

1985年11月9日、4名の塾生で学術雑誌塾を始めました。きっかけは、同年夏の「医学図書館員研究集会」(JMLA)でした。そこで知り合った若い人達と、学術雑誌を対象にした自主的な勉強会を立ち上げることにしました。

医学系図書館で働くと、学術誌とそれを取り巻く科学コミュニケーションに関する知識の必要性を実感します。第1回の塾では、今後1年間の学術雑誌研究の予定が示され、歴史と生態学的な視点から接近を試みています。プログラムのモデルは、慶應義塾大学大学院で受けた津田良成先生の情報メディア論であり、「キー論文の訳読、調査、論文作成、発表」を行う内容としました。6回目になると3名の女子塾生が加わりました。塾は毎月の例会だけでなく、合宿を行い、例会後の飲み会を含め交流の場としました。塾での成果は、できるだけ医学情報サービス研究大会などで口頭発表し、最終的には論文化することを、あたりまえとして取り組んだものです。また、私の付き合いの範囲ですが、異なる世代の人々や異なる業種の専門家と出会う機会も企画しました。この塾は5年間の活動の後、休止となりました。塾生が増えるにつれ、勉強を目的としない参加も出てきたこともあり、自主的な学びの場という前提を確認する必要もありました。

塾を振り返り、通信や塾報、塾訳などを読み返し、純粹で大切な時間を過ごせたと思います。愛知淑徳大学の大学院やゼミは、塾の経験を発展させたもので、教育の原点であったと思います。今回、学術雑誌塾の全仕事をまとめる機会を得ました。私たちは何を考え、どこまで歩いていこうとしたのか。そして、どこまで歩いたのか。この電子版は、次の世代へ問いかけるための素材を提供しています。

学術雑誌塾塾長

愛知淑徳大学名誉教授

山崎 茂明

目次

まえがき 学びの場としての学術雑誌塾 山崎 茂明

目次

学術雑誌塾の思い出（順不同）

塾長、山崎茂明さん —我が師と共に歩んだ図書館員人生— ..	青木 仕
学術雑誌塾での活動と経験を振り返って	井上 三郎
医学図書館員のバックボーン	牛澤 典子
遠くまで歩いていったら —JAMA の表紙絵をめぐる旅—	木下(会田) 眞由美
学術雑誌塾での貴重な経験	小山(安藤) 越代
私のキャリア形成に果たした学術雑誌塾	佐藤(雨宮) 正恵
書くこと・思うこと	神場 清治
「遠くまで歩いて行こう」に支えられて	高井(小島) 久美子
学術雑誌塾への感謝	平輪 麻里子
ターニングポイントはフィラデルフィア行き	廣田 住友
私の医薬系 Librarian としての土台や人脈構築はここから始まった	宮内 洋一
現物確認主義で行こう	北川 正路
学術雑誌塾の思い出	山口 直比古
フィラデルフィア 1989 年夏	山崎 茂明

学術雑誌塾報告 1 私たちの 60 年代 (1988 年)

学術雑誌塾報告 2 Working with each other (1989 年)

学術雑誌塾報告 3 1990 年代に向けて (1990 年)

学術雑誌塾報告 4 遠くまで歩いていこう (1990 年)

学術雑誌塾通信 1 号(1985 年)~59 号(1990 年)

「学術雑誌塾」のこと 牛澤 典子
ほすびたる らいぶらりあん 27(4)2002 p. 334-338

塾長講義 山崎 茂明

- 1) 学術雑誌研究への手引
医学図書館 33(2) 1986 p. 99-110
- 2) Librarianship : 遠くまで歩いていくために
薬学図書館 35(1) 1990 p. 14-20
- 3) 医学図書館員の専門性をみがくために(一般/特集)
医学図書館 46 巻 3 号 Page254-260 (1999. 09)

電子版作成メモ 牛澤 典子

あとがき 廣田 住友

奥付

学術雑誌塾の思い出

— 2019 年寄稿 —

(順不同)

塾長、山崎茂明さん

—我が師と歩んだ図書館員人生—

私は塾と言えは初めに吉田松陰の「松下村塾」をイメージします。松下村塾は江戸時代末期に長州萩にあった私塾で、幕末より明治期の日本を主導した人材を輩出したことで知られています。また、松下幸之助の「政経塾」や俳優の仲代達矢が主宰し、妻で女優の宮崎恭子が創立した「無名塾」などが浮かびます。

私の塾といえは小学生当時通ったそろばん塾から始まり、英語塾、剣道塾、美術塾を思い出します。そして数十年後、学術雑誌塾になります。

松下村塾、政経塾、無名塾の設立は、いずれも主宰者の強いリーダーシップによるものと思われます。同様に学術雑誌塾も山崎茂明塾長の強いリーダーシップが大きかったと思います。私がまだ30代はじめに山崎塾長に巡り会えた事は幸運でした。人を育てる情熱があり、自らも率先して論文を執筆し、私にライブラリアンとしてのお手本を見せてくださいました。当時の山崎塾長の姿に若い人を育てたい、学術雑誌塾を主宰したいという情熱を感じていました。

山崎塾長と出会ってから40年が過ぎました。私は山崎塾長の5歳年下で、多くの委員会で同席し様々な協議を共に務めてきました。生物医学図書館員研究会代表幹事、医学図書館雑誌編集委員長、医学情報サービス研究大会代表幹事、医学図書館員セミナー実行委員長、薬学図書館協議会企画委員は山崎塾長の後任を務めました。

学術雑誌塾解散後、山崎塾長は愛知淑徳大学の図書館学教授に就任しました。2005年には私が筑波大学で情報学博士の学位を取得する時、外部大学の審査委員として学位審査に加わっていただきました。私と山崎塾長は医学情報サービス研究大会の幹事で35年以上のお付き合いです。

人生で生涯お付き合いする人間は数人ではないでしょうか。私の40年間にわたる図書館員人生において、研究者として教育者としてライブラリアンとして常に私の目標でありお手本である山崎塾長に巡り会えたことは、一番の幸運でした。

学術雑誌塾は5年間と短い期間でしたが、山崎塾長と科学コミュニケーションに関する時間を共有できて幸せでした。

國學院大學兼任講師・鶴見大学非常勤講師、元順天堂大学図書館
青木 仕

学術雑誌塾での活動と経験を振り返って

私が山崎茂明氏を塾長とする学術雑誌塾の門を叩いたのは現勤務先の図書室で仕事を始めて半年ほどたった頃であろうか。図書館勤務経験が浅く、すでに30歳を過ぎていた私を、山崎塾長はじめ塾生の皆さんは快く受け入れてくれたのを憶えている。塾生の皆さんは、図書館情報学を学んできた若い精鋭で、山崎塾長のお人柄が浸透したように真摯に勉強に取り組み、自主的に訪れた人に対してはとても親切であった。

私は不得手な英文和訳と格闘する中で、塾生の皆さんから図書館情報学に関するたくさんのお話を学んだ。その見返りというわけではないが、最年長の私は塾生の皆さんが躊躇するような、負担に感じるような役割を進んで引き受けようとした。力不足で失態を演じることもあったが、いつも懸命だったので恥ずかしいと思うことはなかった。

私が総合医学雑誌共同研究の発表を行ったのは、入塾して間もない1987年6月。第4回図書館情報サービス研究大会だった。アメリカの代表的な総合医学雑誌を基準にして、我が国の医学雑誌を総合性という観点から分析した。調査の過程で私はJAMA (Journal of the American Medical Association) に対する強い関心を持った。私はJAMAの歴史や科学コミュニケーションの中で果たす役割などを勉強しながら医学図書館員としての自分を作ろうと思った。

健康雑誌の調査研究は、塾生が増えた第3期にグループ研究活動として行ったものである。健康雑誌の執筆者の属性と記事を分析し、一般の人々が求めている健康情報とは何かを明らかにした。この調査研究は第14回生物医学図書館員研究会(1988年3月)で自分が、第5回図書館情報サービス研究大会(1988年6月)では共同研究者の宮内洋一氏が発表を行った。健康雑誌編集者に話を聞く機会もあり、医学図書館の世界で関心が高まっていたこの分野の調査研究は、参加者に好意的に受け入れられたと記憶している。

しかし口頭発表と論文化は別のことであった。2回の口頭発表の後、この調査研究を論文化する時、執筆をまかせられた私はうまくまとめることができなかった。記事の分析が不十分なため論理展開が粗くなり、説得力のある結論にみちびけなかった。私は論文化をしばらく放置せざるをえなかった。

その後『「1990年代に向けて」—学術雑誌塾報告3—』の編集長を務めた。私はこの塾報告で健康雑誌の調査研究の論文掲載を決め、かつて不十分だった調査を進めた。具体的には健康雑誌の特集記事を4つの類型に分類した。私は忍耐強く作業を進め、論文化を終えた。何よりも共同研究者の皆さんに自分の責任を果たせたのが嬉しかった。私はこの塾報告3で健康雑誌小特集を企画し、昭和大学図書館の板橋瑞夫氏に健康雑誌に関する論文の執筆を依頼した。そして板橋氏の優れた論文と並べて、私たちの調査

研究論文を掲載した。

学術雑誌塾では調査研究を行って、発表する、論文にするのは当たり前だった。この作業は私に自己発見をもたらしたが、しかし難問の連続で平坦な道ではなかった。人事異動で医学図書館員ではなくなった時、学術雑誌塾を去った。しかし学術雑誌塾での経験は、私の人生の様々な局面、とりわけ困難に直面した時の問題解決に活かされたと思う。

井上 三郎

医学図書館員のバックボーン

私が学術雑誌塾に入ったのは医学図書館に就職して2年目で、もう30年以上前です。職場の先輩、佐藤(雨宮)正恵さん、黒川玲子さんに慈恵医大図書館に連れて行ってもらいました。

山崎さんには本当に色々なことを教えてもらいました。科学論文のIMRAD(Introduction, Materials and methods, Results, And Discussion:イムラッド)形式が科学の根幹を支えていることや、ピアレビュー、二重盲検、リジェクトなどの言葉も教わりました。私たち塾生は英語の論文を読んで例会で発表し、研究もしていましたが、山崎さんも研究していました。ご自身の研究や調査で外国に行ったことなどを話してくださいました。山崎さんの研究する背中を見て、私たちは育ったのです。外国で描いたスケッチ、山崎さんらしい味のある絵も思い出します。

最近、私の勤務する病院でシンポジウムがありました。働きながら大学や大学院に行った医療職の方々が、その経験を話しました。興味深かったのは、同業の先輩がそうやって勉強する姿を見て進学を志したと、口を揃えて話したことです。私も学術雑誌塾で山崎さんが図書館で働きながら大学院で勉強したと聞いて、そんな人がいることに驚きながら、自分ももう少し勉強したいと思いました。運よく入学がなかったので働きながら大学院に行き、研究の一端を経験することができました。

ある時、山崎さんがMLA(米国医学図書館協会)の年次総会に行く、研究発表すると言い出しました。確か申し込みの締め切り間際か、締め切り後だったかで山崎さんはMLAとコンタクトは取ったけれど審査を通らなかったそうです。その後、発表はできなくとも参加するとおっしゃったので、他の医学図書館の先輩方と一緒に私も米国に行きました。当時の日本医学図書館協会の総会はかなり形式的な会でしたが、それに比べてMLA総会はたくさんの方が集まる大きな会で、いくつもの講演や研究発表、継続教育、展示やパーティやインフォーマルな集まりと盛りだくさんでした。

山崎さんはMLAで見てきたものを日本でも取り入れました。学術雑誌塾を始める前から生物医学図書館員研究会や医学情報サービス研究大会を立ち上げていましたが、そこに継続教育やインフォーマルコミュニケーションなどを多角的に盛り込んだのです。

こうして思い出しても、医学図書館員として初期に山崎さんにお会いしたこと、山崎さんのそばにいて、色々なことを経験したことは本当に幸運でした。

学術雑誌塾の活動中に大学院に進学したので皆さんと一緒に研究をしなかったのが心残りでした。けれど、JAMA(Journal of the American Medical Association)を見るたびに木下眞由美さんの「表紙絵」を、抄録を見れば山口直比古さんの「Structured

Abstracts」を思い出しました。遠かったのか近かったのか距離はともかく、私は学術雑誌塾で学んだことを医学図書館員のバックボーンとして歩いてきました。

東邦大学医学メディアセンター大橋病院図書室

牛澤 典子

遠くまで歩いていたら—JAMAの表紙絵をめぐる旅—

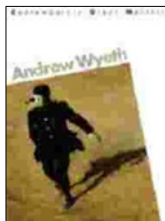
学術雑誌塾報告4「遠くまで歩いてゆこう」に「JAMA(Journal of the American Medical Association)の表紙絵をめぐる—その変遷と顔としての役割について—」を書き1992年に6年半勤めた医学図書館を離れた。2人の子を育てるうちに7年が経ち小学校の司書の職を得て5年働いた。そして中学校の図書館に転職して9年、さらに地元の公立中学校に移って5年。学校図書館司書の生活も、はや20年になろうとしている。

JAMAの表紙絵で取り上げたアンドリュー・ワイエスの“1946年冬(Winter 1946)”は自分の中学校時代の英語の教科書『ニューホライズン(東京書籍刊)』に載っていた。中学3年間英語の教科書を毎日暗唱していた私はこの絵の解説文を覚えていた。医学図書館に入るとJAMAにワイエスの絵を見つけた。そして解説を読むと中学生の頃の記憶がよみがえった。しかしJAMAの表紙絵の文を書いた頃、ワイエスの他の作品については知らないままだった。

2005年8月、グラウンドゼロ(世界貿易センタービル跡地)を見るためにニューヨークへ行き、ニューヨーク近代美術館(MoMA)でワイエスの“クリスティーナの世界(Christina's World) 1948年”を観た。絵の中心で草原に後ろ向きに座る女性は足が不自由で、家まで這って帰ろうとしていると知り、衝撃を受けた。

2007年8月、埼玉県で親子読書地域文庫全国連絡会の全国集会に参加し、会場に近い丸木美術館(東松山市)に立ち寄った。荒川上流に面した丸木美術館は、入ってすぐに丸木夫妻共同制作の“原爆の図”が置かれている。高さ1.8m幅7.2mの屏風絵は本や映像にまさる圧倒的な強さがあった。「原爆の図を誰でもいつでもここにさえ来れば見ることができるように」この美術館を建てた丸木夫妻の思いは今も消えない。

2017年10月、勤務校の生徒にたびたび薦めていた、この史代氏の『夕凧の街桜の国』と『この世界の片隅に』の舞台、広島を訪ねた。広島平和記念公園付近(広島市中区中島町)は、戦前は広島市有数の繁華街だった。『この世界の片隅に』では主人公北條すがすがが幼い頃江波からおつかいに行き周作と出会う街として描かれている。私が訪ねた日は豪雨後の急な晴天で、公園はひっそりしていた。私はすがすがが鉛筆で描いた産業奨励館のデッサンを思い出し、相生橋から原爆ドームを見つめて平和を祈った。



<参考資料 表紙 左より>

『ワイエス(現代美術3)』 瀧梯三 講談社 1993年

『原爆の図』 丸木位里/丸木俊 小峰書店 2000年

『夕凧の街桜の国』 こうの史代 双葉社 2004年

『この世界の片隅に 上』 こうの史代 双葉社 2008年

学術雑誌塾での貴重な経験

大学生の時図書館学実習で訪れたIMIC(国際医学情報センター)に影響され医学図書館の仕事に就いたが、何かモヤモヤしていた。そんな時職場の先輩古川さんに誘われて学術雑誌塾に参加した。

医学図書館員の先輩たちが英語の論文を読み、レジメにし、仲間の前で発表するという空間で、緊張しながらも気分が高揚したことが塾の活動を続ける原動力となった。英文抄読はハードだった。正直、学生時代よりはるかに頭を使ったのではないだろうか。しかし「図書館員として、図書館の利用者がどのように研究に取り組んでいるかを知るいい経験になる」といった言葉をどなたかに言われ、頑張ってみようと思った。

大学の卒業研究で山崎さんの論文を集めレフェリーシステムに興味があったので、山崎さんに会って話が聞けるのは魅力だった。そして小規模な病院図書室で働く自分にとって、塾で仲間と過ごす時間は貴重だった。他の人の発表は自分の刺激になったし、各方面で活躍している方たちと共有した時間は大きな財産になった。

『学術雑誌塾報告4』では、編集委員長を引き受けた。編集委員の雨宮さん、井上さん、北川さん、生出さんと打ち合わせしたり、印刷を頼んだ伸樹社しんじゅしゃの方に原稿を渡した事などは思い出せるのだが、目の前の仕事をこなすのに精一杯で自分が編集で何をしたのかはあまり覚えていない。しかし今手元に立派な報告書が残っているから、他の編集委員がかなり動いてくれたのだと思う。

土曜の午後の塾での活動だけでなく、女性ばかりのお泊り会や、関西グループとの米子合宿、サービス大会参加旅行など楽しかったことも鮮明に思い出す。雨宮さんには第九を歌う世界、真下さんには芝居を観に行く楽しさを教えていただいた。大村さんや川村さんとは仕事の共通の話題で盛り上がった。学生時代や職場の友人とはまた違った世界に、わくわくしていた。

先輩方に指導を受け、引き上げてもらい、様々なことを経験する機会を得た。勤務後に残って英語やデータと格闘したり、他の図書館を見学に行ったり。塾の活動が職業人としての自分の礎になっていたと今になって感じる。指導して下さった山崎さんの年齢を、すでに自分は超えてしまった。このような恩恵を受けた自分は、後の世代に何か残せるものがあるだろうか。塾の思い出を綴るこの機会に思った。

帝京大学医学部附属溝口病院図書室

小山(安藤) 越代

私のキャリア形成に果たした学術雑誌塾

早いもので学術雑誌塾での昭和の日々から30年以上も経ち、平成も終わって令和元年にこの原稿に向かっている。20代で駆け出しの医学図書館員だった私も、気が付けば来年春に還暦で定年を迎える。

社会人としても人としても迷ってばかりで未熟だった私が、転職をしながら司書資格だけで仕事を続けてこられたのも学術雑誌塾(以下、塾)のお陰だったと感謝している。司書はプロの専門職として研究的な視点を持ち、論文を読み、書き、発表すること。山崎塾長はじめ先輩方の、語る言葉以上に働きながらの学びを実践する姿をロールモデルとして身近に拝見したことは、職業人の背骨を作ってくれたのだと実感する。「映画や音楽を楽しむように、研究を日常にして楽しんでほしい」という塾長のメッセージは、折々に思い返していた。

30歳で図書館システムのベンチャー企業に思い切って転職し、全国の図書館を飛び回る日々となり、多くの図書館管理者や経営者の方々に接することで、「学ぶ」こと、アウトリーチすることの重要性を身に染みて感じた。アウトプットのためのインプットを渴望して40歳で退職したが、結局40代は育児と介護、自分の病気などのため派遣やパートの司書として仕事を続けていた。

50歳で病院図書室に正職員司書職として入職した。医療法で地域医療支援病院には共同施設として図書室設置が定められている。「病院には司書なんて贅沢品」という声も聞かれたが、病院職員として地域医療のために何ができるかを考え、EBLIP(Evidence Based Library and Information Practice : エビデンスに基づく図書室運営)を目指して、計画的・戦略的に図書室運営ができたことは塾で培った研究的な視点の賜物である。やっと念願の大学院へ進学できたのは50代半ばだった。「キャリアはジャングルジム」なので焦らずたゆまず…だと改めて思う。

ようやく国内外で発表の機会も持てるようになった。学会への参加や発表に心理的なハードルを感じずにいられるのは、若い頃に塾で経験したことが非常に大きい。自分の職業人生も一区切りとなり、次の世代へ御恩返しできるよう精進していきたい。そして自分も、そうした場を”Learning from Each Other”スピリットで若い方々に提供できるようになれば…と考えている。山崎塾長はじめご指導いただいた先輩方や塾生の皆様に、「ありがとうございました」と言いたい。

最後に、原稿依頼を受けた頃、塾の仲間の訃報に接した。早すぎるお別れが切ない。この場をお借りして心からご冥福をお祈り申し上げます。

佐藤(雨宮) 正恵

書くこと・思うこと

書くことは苦手だった。いや、今も、苦手です。
その証拠がコレ(この文章ですね)なのです。話が論理的に展開できないのが致命的ですね。

書かねばならぬ時に、毎度のことながら困ってしまいます。

しかしながら、書かないと、話さないと思いは伝わらない。当たり前のことです。

本を読むことや人の話を聞くことは苦手ではない。好きです。

山崎塾長の「日報を書いて、週報を書いて、月報を書いて…」あるいは「自分の中に取り込んだものを表現する必要がある」という話に考えさせられ「読んだり聞いただけでなく、書いたり話したりしなければならぬ」と、思い至るようになりました。

学術雑誌塾では、できないながらも書く努力を、あるいは話す努力をしたように思います。

塾の皆さんは聞き上手でしたし、会話することはとても楽しかったです。

ほぼ毎月、皆さんと会うことを楽しみにしておりました。

そして「論理的な文章を書くことは、ほぼ絶望的である」と白状してしまいますが、書くこと自体は好きになりました。苦手のままですが。

できる、できないは別として、学術雑誌塾では伝えることの大切さを学びました。

神場 清治

「遠くまで歩いて行こう」に支えられて

「一瞬、眠りに落ちて梅屋敷の駅を乗り過ごしてしまった」翌朝そう話すと、私を学術雑誌塾に誘ってくれた同僚の古矢さかえちゃんに「そんな言い訳~!!」って笑われました。それほどに私はサボってばかりの塾生で、共同研究のリーダーだった大村伸栄さんにはおんぶにだっこで、周りのみなさんにどれだけご迷惑をおかけしたか知りません。輪読の宿題も報告も原稿もちゃんとできない劣等生でした。ただ好奇心だけはあったようで、その当時真下美津子さんに「知らないことが分かるようになるのはおもしろい」と言っていたそうです。同じ仕事をする人々とのつながりやそこに広がっていく世界、学会や研究会で発表して成果を共有し積み重ねていくという世界を学部学生のうちによく理解しないまま社会に出た私にとって、塾は高等教育の場そのものでした。その道は険しいけれど一緒に歩いて行こうというメッセージと「ナント、オソロシー」と竜がつぶやいていた塾通信のイラストは忘れられません。

医学図書館にいた頃から27年が過ぎ、研究集会やセミナーにも参加していたので、塾だけでなく色々な方から受けた影響がごちゃ混ぜになって記憶に残っています。中でも、同じ志を持つ方々とのつながり方、懇親会での立ち居振る舞いについて教わったことは、のちにとっても役立ちました。そういった場での会話から研究テーマの種が見つかったり、講演会、セミナーの企画や科研費補助金の採択につながったりしました。また「本当にそうなのか？」と立ち止まってみる姿勢も身に付けたかもしれません。「報告書や論文をまとめることは専門的職業人の責務である、その体験を一度だけで終わらせることのないように願って止まない」という山崎茂明さんのメッセージは、長い間手帳の最終ページに貼り、心に刻んでいました。今から思うと、職種転換のきっかけとなったのも論文です。結婚を機に医学図書館から離れた私は、理工学部情報科学科を経て2003年にはラーニングテクノロジー開発室という部署の立ち上げに関わり、ICT(Information and Communication Technology: 情報通信技術)を活用した教育と学習をテーマとした研究と学科での教育を兼務することになりました。その中でICT活用型の授業実践が論文賞をいただいた頃から急激に仕事の内容が変わり、教員となって学位も取得しました。

毎年4月の新入生歓迎会の場で、私は必ず「共に学んでいこう」というメッセージを学生に送ります。塾のことを思い返すと、遠くまで歩いて行こうという言葉に導かれてここまで歩いてくることができたのだと思います。芽を出すタイミングは人それぞれ、厳しく見守っていただいたことに感謝するばかりです。

学術雑誌塾への感謝

私が東邦大学医学部図書館に勤め始めた頃、学術雑誌塾は月一回土曜の午後に館内のセミナールームで開催されていました。そういう状況でごく自然に東邦の先輩方にくっついて末席に座り、塾に参加するようになりました。参加しているだけで一人前の図書館員に近づいているような気がしたものです。塾の終了後は、皆で蒲田駅まで歩き途中の居酒屋さん(今も健在です)によく寄りましたね。

学術雑誌塾初期の思い出は、山崎塾長の指導のもと、日本生理学会員の業績約6,200点のデータを対象に生理学研究者の研究活動を調査したことです。パソコンのない当時、コピーした論文情報を一件ずつカッターで切り不要になった図書カードの裏側に糊で貼り付け雑誌ごとにまとめるという作業が続きました。地味な作業でしたが皆でやると結構楽しいものでした。現在でしたらパソコンであつという間に処理できますが当時はいったいどのくらいの間がかかったのでしょうか。図書カードをアルファベット順に並べる傾斜付きカード仕訳器も大活躍しました。このカード仕訳器は図書館リニューアル時に不要品として処分されかけましたが救出して大事に保管しています。

この調査結果は医学情報サービス研究大会で発表しました。記録を見るとその回は第6回大阪大会(1989年6月)で、塾生5名が口頭発表しています。私にとっては初発表でも緊張して質問にうまく答えられなかったのを覚えています。この調査は後日「日本生理学雑誌」に掲載されました。

他に思い出深いのは合宿でしょうか。私学共済の葉山の施設、自治医科大学の研修施設、京都の立命館大学にも行きました。こうした場での勉強や研鑽はもちろん、いろいろなことを語り合ったことも良い思い出になっています。皆若く、たくさんのことを吸収しようと輝いていたように思います。

学術雑誌塾では研究発表や小冊子の刊行など敷居が高かったことに挑戦する機会がありました。貴重な時間を割いて若い医学図書館員の研修の場を設けてくださった塾長には感謝の気持ちでいっぱいです。

いつの間にかその当時の山崎塾長の歳を越えてしまいましたが、山崎塾長が多忙な自分の仕事の傍らコツコツと勉強を続けること、後輩たちを育てることを自然体でやっていたことに改めて敬服している次第です。

東邦大学医学メディアセンター
平輪 麻里子

ターニングポイントはフィラデルフィア行き

「学術雑誌塾」（以下、「塾」）の活動期間は1985年11月から1990年12月頃までの約5年間であった。私は1985年4月から昭和大学図書館に勤務し、同年8月21日～23日に自治医科大学で開かれた第20回医学図書館員研究集会に参加した。この研究集会は全国の医学図書館41機関から経験3年未満の若手新人46名が3日間の講義を受講し、Medical Librarianshipの基礎知識の習得と親睦を深めた合宿形式で行われた。山崎茂明さんはこの第20回研究集会の実行委員会であった。

その後山崎さんの声掛けで、医学図書館の主要文献を翻訳し討論する「塾」が立ち上げられた。メンバーは山崎さんと1985年の研究集会に参加した男性4名、合計5名だった。なお、山崎さんが塾長と呼ばれるようになるのは「塾」メンバーが多数となったからだと思う。今「学術雑誌塾通信」（以下、「通信」）を見渡すと、英語が苦手な自分が本当に文献を翻訳していたのか信じ難いが「通信」に自分の名前が記されているので翻訳をして勉強していたのだろう。記録としての「通信」が存在しているのは記憶が曖昧な33年後の現在には有難い。記録することの大切さと保存しておく重大さを考え、論文やコラムをまとめる形で出版した「学術雑誌塾報告」（以下、「報告」）を4号刊行したことは「塾」の大きな財産といえよう。

私は「塾」終盤期の1989年8月に昭和大学図書館を退職したため、その後「塾」活動に積極的に関わることがなかった。医学図書館を離れたことで別の世界に入り、現在は他の塾生とは異なる仕事をしている。そのきっかけとなったのは昭和大学図書館を退職後、1989年9月に米国フィラデルフィアに留学中の山崎さんを頼ってフィラデルフィアに行き1ヶ月間（確か9/10～10/10まで）米国を遊学したことである（詳細内容は「報告書3」 33-38 『情報は現地調達』に記載）。自分にとってこの一人旅行が後にも先にも、また良きにつけ悪きにつけ大きなターニングポイントであったと思う。フィラデルフィア行きを快諾いただき山崎さんに感謝している。当時はコンチネンタル航空を利用しシアトル、デンバー経由のフィラデルフィア行きの乗継便で、シアトル・タコマ空港から山崎さんの滞在しているホテルに長距離電話して何とか山崎さんの声を聞けたが、山崎さんは「フィラデルフィア空港からタクシーでホテルまで来て」とのこと。山崎さんが空港まで出迎えてくれるのではとかなかなか希望ははかなく散った。不安を抱えての国内線乗継となった。たしか17万円弱の格安航空券で、シアトル・タコマ空港で予定していた便に乗りそこない1便後のデンバー行の乗継便に搭乗した。このトラブルのおかげでデンバー行の飛行機で隣席となった日本人女性と話をし、米国の生活スタイルについて色々教えてもらったことはとても良かったと記憶している。

この旅行で得たものは米国の豊かさ、自由さ、広大さ。具体的には米国プロフットボールNFL（ナショナル・フットボール・リーグ）の面白さ、米国の公共図書館の懐の深

さ。この旅行を通じて様々なことに興味を持ち視野が広がった。特に印象に残っているのは、旅行の帰路に立寄ったシアトルで、もう一試合NFLの試合を観戦したくてシアトルシーホークスの本拠地キングドームに行った時のことである。キングドームに到着した頃には試合が始まっていてスタジアム周辺は人通りがなくガラんとし、チケット売場でチケットを買おうとしたがsold outで寂しく歩いていると、スタジアムの警備員がそっと胸ポケットからその日のチケットを私に差し出してくれた。当時\$30と表示されたスタジアムの最上階席のチケットであった。何とも言えない嬉しさでこの米国旅行を終え、その後の人生をポジティブに生きて行こうと思った瞬間であった。

帰国後、ある旅行会社の採用試験を受けたが不採用だった。次に「塾」で興味を持った研究者の科学コミュニケーションやインフォーマルコミュニケーションの現場である研究会・学会運営責任者を募集している求人情報を見かけ、小さな理工系出版社であるR社に入社した。このR社で1990年3月から2000年11月の10年9ヶ月間、研究会事務運営の仕事をした(参考文献: 廣田住友「記者発表と学会発表」 医学図書館 40(3): 274, 1993)。具体的には国内・国外のシンポジウム運営・主催・共催、研究会誌の編集・発行、書籍の企画・編集の仕事を行った。科学コミュニケーション全般の業務に携わることで研究者とコミュニケーションすることの楽しさを知った。そして何よりこのR社に入ったことで図書館ではなく一般企業で働くことも経験できた。特に国際シンポジウム共催の事務局として、日本および海外の研究者との交流や施設訪問のアポイントメント、そして西海岸シリコンバレーのサンノゼ・サンフランシスコ、中西部オースチン・ダラス、東部ボストンで開催されたシンポジウムに同行したことは、科学コミュニケーションの現場を体感し外国訪問の勉強が出来た貴重な体験であった。

その後、図書館業務委託会社M社に入って、宇宙航空関連の独立行政法人JAXA筑波図書室で2003年4月から2013年3月の10年間、宇宙航空分野の専門資料を扱う司書となった。

自分は仕事に関してはつくづく飽きっぽい性格であるが、司書を退職して1989年9月に山崎さんを頼って行ったフィラデルフィア旅行が少なからず影響して、現在は旅行業界で働いている。なぜ旅行業界なのかとの問いには明確な答えはないが、8年前から始めた登山ができる仕事なら、体が動かせて楽しいだろうと考えたのである。2014年2月に「総合旅程管理主任者」(添乗員の仕事ができる国家資格)を取得。2014年4月より地元旅行会社J社で添乗員を始めた。2014年10月に「総合旅行業務取扱管理者」(旅行会社を設立できる国家資格)に合格し、2017年6月より旅行会社C社で専門ガイドの仕事を務めている。大きな声が発せられ、身体が丈夫な限りこの仕事を続けていきたい。

廣田 住友

私の医薬系Librarianとしての土台や人脈構築はここから始まった

私と学術雑誌塾との出会いは、入社後1年もたない1987年初頭だったと思います。当時、JMLAには中外製薬、塩野義製薬そして私が働いていた山之内製薬が加盟しており、JMLA関東支部の勉強会または、研究会に参加した時に学術雑誌塾のことを知り、自身の勉強のためにと参加したのが始まりだったと記憶しています。

毎月1回土曜日に開催される塾で学んだことは、医薬関連の情報サービスをするLibrarianとしての基礎、土台を固めることになったと感じています。

JAMA、NEJM、BMJ、Lancetの四大医学雑誌の歴史、成り立ち、目次からわかる特徴について調べ、気づいたことを発表し、山崎茂明塾長や板橋瑞夫さん、青木仕さんから私たちの調査では足りないことをレクチャーしていただき、私たちの新しい知見として蓄積していきました。また、塾が終わった後の懇親会や葉山や強羅での合宿も交流の場として楽しかったですが、お酒を酌み交わす席もいつも「そうなのか！」と思わせてくれるような新たな知識となるようなお話を聞いたこともその後の仕事に役立ったと記憶しています。それまでただ漫然と雑誌や論文を扱っていたのが、例えばNEJMに”Case records of the Massachusetts General Hospital”があることの意義、それぞれの雑誌のEditorialに現れる立ち位置や主張の違いについて、また、「日本医事新報」に「週間感染症発生動向調査」が毎月欠かさず報告されていることなど、塾に参加することがなければ気づきもしなかったし、個々の雑誌の歴史や役割を考え雑誌を扱う意義や面白さを感じるようになりました。

新たな知識を得ることだけではなく、自分で調査して発表する方法も、塾での毎月の発表やグループでの共同研究を通じて学ぶ大切な経験でした。独自の調査を積み重ね分析し考察を加えて、たとえ限定的な調査や分析でも必ず発表すること、オリジナルデータを集めてくることや、新しい視点で考察する大切さを教えてもらいました。私が既存のデータや統計数値を集めて分析しただけの発表をした時、山崎塾長から新しい視点の不足を指摘され自身の未熟さに気づいたこともありました。

同じ志を持った同世代のLibrarianが集って、テーマごとにグループを組み、あるいは単独で調査研究しディスカッションする場合は、本当に貴重な場だったし、ひとりでは学びきれない事を仲間共に学んで語り合うことで、雪だるま式に自身の知識が大きく広がっていったと思います。この塾で学んだこと、そしてともに学んだ仲間たちはその後の自身の仕事への向き合い方や仕事の価値観を考える上で大きな影響がありましたし、この塾という場で出会えた仲間は大切な財産であったと強く感じます。

山崎塾長はこの塾を「適塾」のようにしたいとおっしゃったと記憶していますが、塾で行われていた抄読、研究、発表、評価の流れや相互に教え合い学び合う姿勢は山崎塾長の考えに合っていたのではないかと思います。

短い活動期間ではありましたが、駆け出しの自分が、その後の土台となるような大切なことを濃密に学べたのは本当に奇跡のような時間だったと今でも感じています。

アステラス製薬(旧山之内製薬)

宮内 洋一

現物確認主義で行こう

学術雑誌塾の活動を通して教えられたことの1つに「自分の体で現物を確認することの大切さ」があります。

学術雑誌塾報告を30年ぶりに振り返っていますが、報告1つ1つが「データを集めて確認する」「論文を読んで自分なりに内容を確認する」という取り組みの積み重ねであることを実感しています。

確認の大切さで印象に残っていることがあります。1980年代に学術雑誌数の増大について述べる時、しばしば『リトルサイエンス・ビッグサイエンス』（デレック・プライス著、島尾永康訳、創元社、1970年）が引用されていたのですが、山崎茂明さんが「プライスの主張を無批判で受け入れてよいのか」と示したことがあります¹⁾。当たり前のように引用されている先人の主張も、原典に当たり自分の体で確認することの大切さに気づかされました。

学術雑誌塾顧問の板橋瑞夫さんからも現物確認の精神を感じました。板橋さんは『医学雑誌総合目録』の編集を担当していましたが、雑誌名に関しては表紙を見て確認するまでは「良し」としませんでした。表紙、背文字、奥付で雑誌名の表記が統一されていない時も「まず表紙の情報を優先する」とつねづねおっしゃっていました。全国から取り寄せた表紙のコピーの山に埋もれ、目録に記載する雑誌名を確認していた板橋さんの姿が脳裏に焼き付いています。

同じく顧問の青木仕さん、山口直比古さんも医学雑誌に書かれている内容をいろいろな角度からなめるように確認する過程で、学術雑誌の特徴や学術論文の傾向を発見しています。

学術雑誌塾が終了してから10年後に、大学院で学ぶ機会がありました。その際、自身の現物確認の方法が甘いことに気づきました。近道をしようとうわべだけを見てしまい本質を探求することができなかつたのです。現物確認をより確実なものにすることは、今もなお自分の課題です。

これからも、学術雑誌塾で学んだ現物確認主義の精神を大切にしていきたいと思っています。

1. 山崎茂明. 学術雑誌の成長をめぐる批判的検討. 情報管理. 1987; 29(10): 863-70. https://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/29/10/29_10_863/_pdf [accessed 2019-06-20]

学術雑誌塾の思い出

学術雑誌塾が活動していた1990年前後は、私は浜松医科大学附属図書館に勤務していたので、東京で開催されていた例会にはほとんど出席していませんでした。そのかわり地方で開催されていた合宿には何度か参加しました。思い違いがあるかもしれませんが、鳥取県大山の麓で開催された回や、自治医大での宿泊合宿などには参加しました。また、医学情報サービス研究大会にはたびたび参加しました。岡山での回など、新幹線岡山駅で立ち話をしたことなど記憶に残っています。

『学術雑誌塾報告』には何度か書きました。構造化抄録の紹介記事などはもしかすると日本でも初期の紹介であったと思います。その後順天堂にいらした青木仕さんが『医学図書館』などに何度かお書きになって、構造化抄録がよく知られるようになってきたと思います。『学術雑誌塾報告』を読み返すと、日本の雑誌や健康情報誌などを数集めて分析するなど、調査研究の基本的な手法をきちんと踏んでいる報告が多く「調査研究」がきちんと行われていたと思います。みなさん、お仕事が忙しく時間の無い中で、本当によく勉強していたと思います。

聖隷佐倉市民病院図書室

山口 直比古

フィラデルフィア1989年夏

1989年の夏、3ヶ月の短い留学であったが米国のCollege of Physicians of Philadelphia(以下、CPP)医学図書館に訪問研究員として過ごす機会があった。留学には、人と資料との出会いが欠かせない。

フィラデルフィアは米国有数の医学都市であり、ヘルスケア発祥の地でもある。米国最初の医学校(1765年)、薬科大学(1821年)、歯科学校(1863年)、そして病院(1751年)がある。19世紀中頃、米国の医師の25パーセントがフィラデルフィアだけで供給されていた。小児科、眼科、精神科などの専門領域の施設は、フィラデルフィアで最初に建てられた。そして民間の研究所、医学出版社、製薬企業、そして医学図書館などもフィラデルフィアで生まれた。

CPPは大学ではない。優れた医師から構成された専門職組織である。イギリスから独立して150年、米国の厚生労働省にあたるDHHS(Department of Health and Human Services)の役割を果たしていた。医学図書館としては、ペンシルベニア病院の図書室(1762年)が米国で最初の医学図書館として知られているが、規模から見ればCPPの医学図書館が米国の医学図書館の中心機関であった。CPPの役割がよく知られていないことは、その訳語から実感する。「フィラデルフィア内科医学校」「フィラデルフィア内科医師会」などはCPPの果たした重要性が見過ごされている。CPPはイギリスのRoyal Collegeに近い医師の専門職ギルドである。CPPの医学図書館はハーバード大学のフランシス A. カウンティ図書館、ワシントンの国立医学図書館と並び、米国内の三大医学史コレクションを構築してきた。19世紀の米国医学教育形成史に関する調査にはふさわしい機関であった。

1989年当時、東京からフィラデルフィアへ直行便は運行されておらず、ロサンゼルス、セントルイスを経由してフィラデルフィアに到着したのは深夜12時過ぎであった。タクシー乗り場も閑散としていた。宿舎のインターナショナルハウスまでタクシーで30分、ドライバーは小柄な黒人女性であった。ダウンタウンを過ぎペンシルベニア大学の近くに来た時、嬌声が聞こえ正装した男女のグループが目に入った。土曜の夜の定例イベント、サタデイトナイトフィーバーのざわめきであった。

CPPの訪問初日、医学史部門アシスタントであるジャックが、閲覧室にある主要な参考図書、人物事典、研究図書、医学教育図書、二次資料、目録、主要な学会誌などを解説してくれた。その後自分が用意した文献リストと照合をおこない、調査に利用できる資料と、そうでないものをチェックしていった。フィラデルフィア地区の逐次刊行物目録を調べてみると、CPPの医学図書館以外にペンシルベニア大学の生物医学図書館とジェファーソン医科大学の図書館が豊富な蔵書を持っていることがわかった。ジェファーソンの図書館長にライブラリー利用を相談に行くと、顔写真つきの図書館利

用カードをすぐ発行してくれた。書架は開架式、コピーは1ドルで20枚とれ安価で助かった。また、館内のLearning Resource Center (LRC) で、英文のタイピングや修正に困っていることを伝えると、マッキントッシュのワープロソフト、マックライトを教えてくださいました。マックとプリンタが用意された個室(セル)も自由に利用できた。3ドル14セントのフロッピーディスクを大学の書店で購入しLRCに戻った。そしてわずか15分のレッスンで、マックの使い手になることができた。

現在、研究に必要な古書籍はAbeBooks(エイブブックス)のようなオンライン書店を通して組織的に収集することが可能である。しかし当時は海外古書店の発行する在庫目録を入手し注文書を郵送して必要な書籍を集めていた。そのため私はフィラデルフィアでも自分の関心領域をカバーする古書店を見つけたいと思っていた。CPPの図書館員にリッテンハウス書店(Rittenhouse Book Store)を教えてください、すぐ訪問した。リッテンハウス書店は17丁目のリッテンハウス・スクエアに面した医学専門書店で、1階が店舗、2階が事務室、3階が古書部になっていた。海外の古書店は日本のような店売方式ではなく、在庫目録を定期的に編集しそれを元にビジネスを展開していた。リッテンハウス書店は親子で経営しており古書部は父君の担当であった。ある日父君が夏休みで9月末まで古書部を閉じるという。父君の話聞いた私が残念そうに見えたからか、半日ぐらい自由に見てもらってよいと部屋の鍵を渡してくれた。古書が目録の主題別に並べられ書誌情報が挟まっていた。書籍には顔があるから、手にとって眺めることは大切である。古書店主のおおらかな計らいには、励まされた気持ちがした。

愛知淑徳大学名誉教授

山崎 茂明

學術雜誌塾報告

1 (1988) - 4 (1990)

ISSN 0915-3675

総合研究

「私たちの60年代」

—— 学術雑誌塾報告 1 ——

1988

学術雑誌塾報告編集委員会

総合研究

「私たちの60年代」

——學術雑誌塾報告 1——

1988

學術雑誌塾報告編集委員会

學術雜誌塾報告編集委員会

委員長	廣田	住友
	古矢	さかえ
	神場	清治
	門屋	由美
	黒川	玲子
	宮内	洋一

まえがき

この「総合研究：私たちの60年代」は学術雑誌塾〔塾長：山崎茂明（東京慈恵会医科大学医学情報センター） 塾生：25名〕第3期で、1年間取り組んできたテーマの論文集です。この第3期は、昭和62年9月から「1960年代のアメリカ医学図書館活動と社会環境」の主題のもとに9,10月－アメリカの社会・経済・文化状況考察、11,12月－アメリカの医療状況考察、1,2,3月－アメリカ医学図書館の状況考察を行いました。その中で各自、自由テーマを選び月一回の塾の時に発表しました。そして、そのまとめとして、この論文集を出版しました。この塾の論文集は「学術雑誌塾報告」とし、今後も継続刊行していきます。

昨今はレトロブームで、各方面で「60年代」という時代が回顧され評価されています。「60年代」に関しては、塾生の殆どが1960年代前半の生まれですから、最初はピンときませんでした。しかし、山崎塾長の現在のIAIMSについてのアメリカ医学図書館訪問記に刺激されました。塾生は、60年代の事実を探し求め、自分の生まれ育った時代を振り返ってみました。そこで、実にたくさんのことが20年以上も前に起こり始めていたことを発見したことでしょう。「本論」において、様々なテーマが取り上げられています。が、しかし、一つのテーマが「60年代」全体を表しているのではありません。それらの論文は、一つの事実の断片からの考察です。各自のテーマはこれから先、未来に向かって自分にとって一番関心のあることです。おそらく、この「60年代」の事実、白黒（モノクロ）写真のイメージとして、頭に刻まれていると思われれます。

この論文集は、「本論」、「60年代の書誌」、「年表」、「学術雑誌塾小史」から成っています。「本論」は、〈図書館〉9編、〈科学・技術〉1編、〈医学〉2編、〈芸術〉2編、〈世相〉2編、〈産業〉1編、〈人種問題〉2編、〈大学紛争〉1編の項目順に配列しました。一人、約4ページの論文で、20編の論文が収録してあります。なお、引用文献・参考文献の書き方は「医学図書館」33巻 1986年までの旧執筆要項に準じました。

「60年代の書誌解題」は、「60年代」を記述した単行書64冊の書誌解題リストです。本論の主題に従い分類しました。「60年代」を詳しく知りたい人の書誌ガイドとなれば幸いです。「年表」は、1960年以前から1969年の本論の内容に関する主な事項を記載しました。

「学術雑誌塾小史」は、塾の創始から現在に至る約3年間の3期を、振り返りました。1期、2期それよりも3期での忙しさが思い出されます。

今、論文集「総合研究：私たちの60年代」を書き上げ出版し、一応のけじめを付けてみました。しかし、このけじめが単なる印だけに終らないためにも、これからが、学術雑誌塾は、大切だと感じた次第です。

最後に、忙しい中、貴重な体験をもとに「1960年代 医学図書館事情」と題した論文を執筆し、また、塾生の論文に関し御意見、御指導並びに援助をして頂いた、板橋瑞夫氏にこの場をお借りして、感謝の辞とします。

学術雑誌塾報告編集委員長
廣田 住友

目 次

まえがき	1
目 次	2
本 論	
〈図書館〉	
1960年代 医学図書館事情 (板橋 瑞夫)	5
60年代の米国医学図書館 (山崎 茂明)	10
: Handbook 第3版をめぐる	
60年代のLiterture Search (阿部 信一)	14
: MEDLARSへ、そしてMEDLARSから	
John H.Talbott と60年代の JAMA (井上 三郎)	18
1960年代の「医学図書館」を見て (北川 正路)	22
アメリカ医学図書館援助法とNLMの変遷 (熊谷 智恵子)	27
60年から80年代にかけてのOCLC (宮下 美香)	31
60年代の政府政策と学術図書館 (大村 伸栄)	36
Medical Library Associationの継続教育コースとライブラリアンシップ (牛沢 典子)	40
〈科学・情報〉	
スパートニック・ショックと60年代初期米国科学情報の状況 (宮内 洋一)	44
〈医学〉	
1960年代における米国の医学教育改革 (会田 真由美)	48
: Millis Reportは“何を”変えたのか	
「貧困との戦い」と「偉大な社会」の意味するところ (廣田 住友)	52
: ジョンソン米大統領1964年と1965年の一般教書より	

〈芸術〉	
アメリカン・ポップ・アートの隆盛 (黒川 玲子)	58
アメリカ映画 (真下 美津子)	62
: アカデミー賞からニューシネマまで	
〈世相〉	
60年代のアメリカのメディア (雨宮 正恵)	67
東海道新幹線 (吉田 宏子)	70
: 誕生とその背景	
〈産業〉	
農と食からの発想 (多胡 英樹)	74
: 60年代を振り返って	
〈人種問題〉	
黒人運動・黒人闘争・黒人革命 (平輪 麻里子)	77
人種差別 (神場 清治)	81
: 教育の機会均等にむかって	
〈大学紛争〉	
60年代の学生たち (川村 順子)	85
: いちご白書をもう一度	
60年代の書誌解題	89
年表	107
学術雑誌塾小史	111
研究発表記録	112
あとがき	113
: 60年代発見の旅のおわりに	
著者名一覧	114

1960年代 医学図書館事情

板橋 瑞夫

◎はじめに

さながら断層撮影の如くに1960年代を截ることを命ぜられたが、なかなか難しい。紛れもなくこの年代を生きては来た。しかし記憶と言うもの、点では比較的明瞭なものでも、線でとなると漠然となってしまう。ありきたりの表現になるが、日常の生活の中では、振り返る余裕はない。それは忙し過ぎるとも言えるが、専ら前方志向が信条だからとも言える。こんなわけでこの課題は、何とも私的には適切であったと思っている。

1960年代の図書館員は、誰もが敗戦の体験を持っている。敗戦は、いろいろな事を教えてくれた。一つには知らない事が多過ぎた。知らないから知ろうとして齟齬した。自己啓発・自己研修である。1月には、MeSHが誕生して、輸入された。対応しなければならない。8月には、医学・薬学図書館講習会が、1956年からの連続開催の最終回となって実施された。学ぶことから1960年代は始まったと言えるだろう。

◎MeSHの誕生

Index Medicus が復活。件名として、Medical Subject Headingsが誕生した。MeSHである。このMeSHが当時の医学図書館員にとって、好個の学習対象となった。薬学図書館員にとってのBeilstein's Handbuch der organischen Chemie に匹敵するものと言える。Beilstein を駆使するためには、多少の有機化学の知識が必要であるが、MeSHつまり医学用語は、解剖学、生理学、病理学などの形態分野ならば、分子式が必須となる化学分野と違って、読んで理解する事は必ずしも困難ではない。つまり読んでわかる点は、化学分野のそれより入門しやすい。もとより深淺の差はあっても、努力目標としてのMeSHの克服、理解は、誰の意識としても存在していた。MeSHを制せざる者、医学図書館員にあらずの気概に燃えていた。MeSH第1版は、Index Medicus Vol.1, No.1, Pt.2,ではなく、別途購入しなければならなかった。G.P.O.発売である。件名標目は、4,500語であった。この年代の最後1969年には、7,500語と増加した。収載分野も1965年に歯学関係、1966年に看護学関係、1968年に保健衛生学、遺伝学および獣医学関係、1969年には精神医学分野が加わって、充実がはかられた。この時期には日本語版の刊行よりも各自が翻訳しての意志が強固であったと思う。所謂、日本医学図書館協会出版物としての日本語版は、オンライン検索のための一般大衆向けとしてのもので、MeSH 1978年版からの作成である。

◎講習・研修・セミナー

第5回 医学・薬学図書館講習会が東京大学を会場として開催されたが、前述の如く計画の最終回に当たるものであった。この講習会は、日本医学図書館協会と日本薬学図書館協議会との共催による。この頃は両者にとって蜜月時代であった。ではどうしては不問に付してこの講習会は、①医薬学概論 ②書誌学通論 ③書誌学各論 ④応用書誌学 ⑤図書館通論を骨子として編成。この年は、医薬学概論として、小児科学、精神医学、皮膚科学、解剖学、無機化学、薬理学、物理化学、薬品製造学。書誌学通論として、雑誌整理

法、参考業務。書誌学各論として、小児科学文献、薬品製造学文献、解剖学文献、無機化学文献、薬理学文献。応用書誌学として、特殊専門図書館の資料構成。図書館通論として、現代図書館学の動向。グループ別討論として、専門図書館の動向などが取り上げられた。この講習会の意図は、数年間の連続開催により、一定期間に医・薬学の専門科目及び文献、並びに専門図書館員として必要な図書館業務に関し、一通り終了するよう長期計画を立て、毎年履修科目認定書を発行し、全課程履修者は、医・薬学専門司書として特別の資格認定を受けられることを最終目標とするということであった。しかし資格認定は実現しなかった。誰が認定するのか、認定されたらどうなるのか、意図はあっても具体性はなかったのではなからうか。関東での5ヶ年の計画を終えて、1961年からは関西での開催となった。参考までにその逐一を記録してみる。日本医学図書館協会と日本薬学図書館協議会の共催、後援は文部省、1961年8月21日～26日、大阪大学中之島図書館、解剖学、生理学、生化学、病理学、細菌学、薬学等の概論及び書誌、医学・薬学関係索引・抄録誌の解説と利用法。Beilstein's Handbuch der organischen Chemie の解説と利用法、文献検索法ほか。1962年8月20日～25日、京都大学薬友会館、内科学、外科・整形外科、薬化学、衛生・公衆衛生学などの概論及び書誌。本草書誌学、医学・薬学文献の動向と二次資料の関係。医学・薬学文献二次資料の解説と利用法。1963年8月5日～10日、神戸医科大学図書館、臨床医学概論、放射線学概論、耳鼻咽喉科学概論、法医学概論、分析化学概論そして各書誌について、Reference の機能と方法、Reference の解説と演習、実習。1964年8月24日～29日、神戸医科大学図書館、小児科学概論、皮膚科学概論、眼科学概論、生薬学概論、臨床抗生物質そして各書誌。Medical terminology、文献検索の機械化、Reference toolsの解説及び演習。1965年8月23日～28日、京都大学薬学部、細菌、ウイルス及び免疫学、産婦人科学、薬理学、歯科学、臨床検査法、物理化学、薬剤学及び公定書などの概論及び書誌、資料構成法、高次資料、速報誌・特許商業文献、海外出版社について、Reference tools の解説及び実習の以上である。東京での5年間と違って、関西での開催は、参考資料を使つての演習、実習が活発に実施されるようになった。次第に文献の検索が当然の業務になるほど、医・薬学図書館は変化してきたのである。医学、薬学の所謂、専門知識の講義は、京都大学を主に、神戸医科大学、大阪大学の教授、助教授などの教官によって行われた。所定の時間に概論としてまとめられた、あるいは、最近の話題を中心にされた等々の個性溢れるものであった。医学図書館員が薬学関連の講義を聴き、薬学図書館員は、医学関連科目の知識を吸収する。そして相互に図書館員としての交流を持ち、親睦を深める。いろいろな収穫があったと思う。しかしながら、医学図書館と薬学図書館との協力による講習会はこれが最後となってしまった。

1962年から64年にかけて、慶応義塾大学文学部図書館学科の主催で生物科学図書館研究集会が開かれた。これは生物科学分野における図書館専門職員養成の急務に鑑み、ロックフェラー財団の援助により行われたもので、長期、短期の講習のほかはこの研究集会が、日程5日間、関東、関西で実施された。これには、医学、薬学のほか農学を含めた生物科学分野の館員が、海外からの訪問教授により講義を受けた。海外とくにアメリカに追いつけ、追い越せの活気に満ちた集会であった。

1962年12月及び1963年11月、会期は2日間であったが、医学書院の主催で、医学図書館初級セミナーが開かれ、医学図書館のほか病院図書室からの参加を含めて、医学図書館概

説、図書の整理、運用などの講義が行われた。

◎川崎病と結核の治療

1961年1月5日、川崎富作医師は、熱があって、手足に膜様の落屑を生ずる猩紅熱の症状に加えて、紅斑様発疹、眼球結膜の充血、口唇のびらん、口腔発赤、頸部のリンパ線腫脹を伴った4才の男児に遭遇した。これが川崎病と言われる疾患の最初である。ついで類似の疾患7例を経験して、1962年10月13日の第61回日本小児科学会千葉地方会総会に於て「非猩紅熱性落屑症候群について」と題して発表した。(千葉医学雑誌 38巻 279頁 1962) その後、症例を加えて「眼・皮膚・粘膜症候群の20例」(日本小児科学会雑誌 69巻 274頁 1965) やがて、1967年 アレルギー 16巻 178頁に「指趾の特異的落屑を伴う小児の急性熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群、自験例50例の臨床的観察」という原著論文となる。日本で最初に発見されたということと病名の変遷というこの年代の一つの話題として取り上げたが、依然としてその病因を究明中である。

1966年にイタリーとスイスで共同開発されたリファンピシンによる結核の治療法の変換は、画期的なものであった。結核は言うまでもなく紀元前3000年のミラにみられる脊椎カリエス以来の業病である。日本では1918年に人口10万に対しての死亡率が257.1でその頂点を示したが1940年でも212.9を示していた。1950年には、同じ比で146.41、1960年には、34.2、1970年では、15.4、因に1985年では、3.9に減少している。これは、1944年のWaksmanによるストレプトマイシンの発見により、そして1950年のイソニコチン酸ヒドラジド、そして1966年のリファンピシンという次第に強力な抗結核薬の開発となり、必然的に大気、安静、栄養による基本的なそして歴史的な自然療法とも言える治療法から、人工気胸術、胸郭成形術などの外科療法などを経て、化学療法剤の出現となるのであるが、この抗結核薬について、静菌的、殺菌的、滅菌的治療の流れの中で、リファンピシンは滅菌的治療を可能にした。即ち規則的な服薬が金科玉条であり、これが確保されるならば入院も安静も必要ないし、栄養も常識的以上のものは要求されないという治療法となったのである。

◎日本医学図書館協会がらみでの10年間

1960年10月12日～14日 第31回総会は、東京医科大学を会場に開催された。過ぐる1957年に、日本大学医学部、日本医科大学、昭和医科大学、東邦大学医学部、大阪医科大学、関西医科大学、神戸医科大学、山口県立医科大学の加盟をもって、当時の日本全国46の医学部、医科大学の図書館完全加盟を実現させていた。名実ともに医学図書館の完全集団となったわけである。これが日本医学図書館協会のいまにいたる出発点という気がしないわけでもない。

「現行医学雑誌所在目録」が、欧文、国内欧文編と和文編の2分冊の形態で刊行され、ほぼ現在に到る基礎を確立した。この年外国雑誌 2,280誌 国内和文誌 1,040誌 国内欧文誌 145誌であった。参加館は127館であった。当時は協会加盟館のみならず、日本薬学図書館協議会加盟館のうち正会員、その他病院、研究所など医学関連機関の参加も多かった。目的を同一にする友好的な同志という意味合いであったろう。この目録1964年には休刊したが、爾来、完全な年刊となった。内容或いは形式的には、1963年以降は分冊を廃

し、1966年には国内欧文誌を和文編に併せて内国雑誌編とし、1967年には外国雑誌編を欧州語、露文、華・韓文の3本立てとした。なお参加館についても、1965年版に於て、薬学以外の非加盟館を大幅に整理して99館とした。従って、参加館、形式共に全く現在に近いものとなった。

1961年11月3日 東京大学医学図書館の竣工式が行われた。「東京大学百年史」のうち、東京大学医学図書館の建設の項からの引用『……このように基礎医学には「本館図書館」、臨床医学には「病院図書室」というように、基礎、臨床それぞれに中心的図書室活動をする場所がそだってきたけれども、図書そのものの実質的な管理は、ほんの部分的にとどまり、図書の所在、移動にともなう責任は、中央化されていなかった。ゆえに、これらの図書室活動を全体としてながめると、まことに不完全きわまるものであった。……それにしても、図書そのものがあちこちに分散していて、しかもそれを管理する統一的中心が確立していないことの不便は決定的で、運営上にも無駄が多くて、能率があがらず、近代的な図書館サービスを提供することはおもいもよらぬことで、ことに学生や部外者の利用という点にいたっては、その便宜は皆無にちかかった。……そこへ、チャイナメジカル ボード財団の申し入れがあり、そのきっかけで、夢想だにしなかった堂々たる中央医学図書館が、しかも東京大学医学部創立百年記念事業の最大のものとして生まれることになったのである。』この東京大学に於て、第32回総会が開催された。11月9日～11日である。東京歯科大学及び大阪歯科大学が加盟、初めて歯科の単科大学の参加が承認された。また、「医学雑誌総合目録 欧文雑誌編 第4版」収録機関数 48館 収録雑誌 2,875 種で1961年10月に刊行された。編集担当館は新潟大学であった。

1962年10月15日～16日 第33回総会は、奈良県立医科大学の当番で参加48館であった。第2代 緒方富雄会長から第3代 牛場大蔵会長への指名が行われた。

教科書、参考書類の例えば、岡島敬治の解剖学、加藤元一の生理学、須藤・隈川の医化学、緒方・三田村或いは、木村哲二の病理学、呉建の内科書といった歴史的名著が、医学書院発行の分担執筆による。新生理学 問田直幹ほか。病理学総論 鈴江懐ほか。病原微生物学 東昇ほか。小児科学 栗山重信ほかが1960年に、そして1962年に新組織学 西村秀雄ほか、1964年には、薬理学 島本暉朗と言うように様相を変え始めた。また日本内科全書などから、現代内科学大系、現代診断検査法大系などという戦後派と称すべきか中山書店の刊行するところとなってきた。

1963年8月27日～29日 弘前大学にて第34回総会。「医学雑誌総合目録 和文雑誌編 第4版」を1963年8月に刊行。50機関 2,421種の収録であった。新潟大学の担当で単独館による最後の編集となった。

1964年10月2日～4日 第35回総会広島大学にて開催。日本大学歯学部への参加が承認され、加盟館は49館となった。「Union Catalogue of Foreign Books in the Libraries of Japanese Medical Schools」刊行後の洋書総合目録については、各館の増加洋書のカードを集中管理して総合目録化し、各館の要請に回答をする方式を採用、慶応義塾大学に医学文献センターと称して設置、洋書の相互利用の便に供した。現在の「医学洋書総合目録」刊行までの中間的代行とも言えるが1979年までの所蔵については現在も活用されている。

1965年10月30日～11月2日 第36回総会は東京女子医科大学にて開催。その前年に準会

員入会細則が制定され、最初の加盟館として、放射線影響研究所、労働科学研究所、田附興風会医学研究所、塩野義製薬研究所、防衛庁航空自衛隊航空医学実験隊、国立公衆衛生院、愛知学院大学歯学部7館が準会員として承認された。正会員としては、北里大学を承認。アメリカでは「Bulletin of Medical Library Association」53巻にBrandonによる「Selected List of Books and Journals for Small Medical Library」の第1回が掲載され、このリストは現在も継続発表されていることは言うまでもないであろう。

1966年7月27日～29日 第37回総会は札幌医科大学にて開催。日本歯科大学の加盟承認、国家公務員等共済組合連合会、日本医師会、国立がんセンターの3館が準会員となる。さきの医学・薬学図書館講習会が終って、医学図書館研究集会在が発足、東北大学と九州大学の東西分割方式で各3日間。今回は図書館の利用機能の近代化が主題であった。なおこの東西分割方式は1971年まで続けられた。

1967年11月8日～11日 久留米大学担当の第38回総会は、創立40周年式典も併せ挙行。愛知県がんセンター、中外製薬株式会社総合研究所、山之内製薬株式会社中央研究所の3館が準会員として加入。

1968年11月7日～9日 第39回総会は、東京慈恵会医科大学の当番館。九州歯科大学の準会員加盟が承認。慶応義塾大学、東京医科大学、東京女子医科大学の新宿区内3館のテレックスによる交信が開始され、文献の相互利用の迅速化が実現した。

1969年10月15日～17日 和歌山県立医科大学にて第40回総会開催。天理よろづ相談所病院、琉球政府立医学図書館の2館の準会員加盟。従って準会員は16館となった。「日本自然科学雑誌総覧」及び「医学雑誌総合目録 欧文雑誌編 第5版」が大阪地区加盟館によって編集、10月に刊行された。雑誌総合目録は単独館編集から、地区による複数館の担当となったわけで、これが現在の方式となって続けられている。収録機関数は61館で、収録誌数は6,651誌を数えている。

かくて1970年へと移るのである。

60年代の米国医学図書館： Handbook 第3版をめぐって

山崎 茂明

Handbook of Medical Library Practice の第3版を購入したのは、1979年（昭和54年）2月19日でした。月日まで書けるのは、当時、買った洋書には自分の名前と購入年月日を記入していたからです。そのころ、私は埼玉医科大学の図書館で働いていました。大学卒業後約5年間のサラリーマン生活をやめ、鶴見大学の夏期講習を受け、図書館員の道へ進んでいました。しかし、29歳になってからの転職であり、新しい土地や職場に慣れず、自分の道を見つけられずにいました。ひとつの方法として、1978年の秋に慶応の大学院を受験してみました。医学図書館の領域で、最も主導的なペーパーを書いていた津田先生の門をたたいてみることにした訳です。試験は好運にも受かり、勤務先の理解も得て、退職せずに、6分の1だけの給与カットで通学許可を出してもらいました。迷いながらの20代でしたが、わずかながら自分の歩む方向を見い出したように思っていました。1970年に発行された Handbook の第3版を手にしたのは、そんな時期だったのです。

今でこそ、第3版の編者や寄稿者の名前から、様々な事柄を思いつくことができますが、当時は全く知らない人々でした。小規模病院図書館向けのコア・リストを作成した Brandon、睡眠研究者のインフォーマル・コミュニケーションを明らかにした S. Crawford、OCLC を創設した F. G. Kilgour、Bull Med Libr Assoc 誌の Journal Note 欄を書いている W. K. Beatty、そして Scott Adams、Louise Darling、Estelle Brodman などの名前が挙げられていました。アメリカ医学図書館界の黄金期であった1960年代の夢と現実が凝縮されたような書物だと思っています。それにしても、私が手にした Handbook 第3版は、出版後9年をへたものであり、70年代も終わろうとする頃に、この本を通して60年代のアメリカの医学図書館活動を理解しようとしていたこととなります。

この Handbook 第3版は実践的なマニュアルであろうと思っていました。しかし、実際読み出してみると、しっかりした理念に裏打ちされたものであることが少しずつわかってきました。大学をでた後、英語をほとんど読むこともなかった私にとって、時間のかかる読書でした。約1年間ぐらいかけて、半分ほどを読みました。アメリカの医学図書館の状況がわからないため、辞書を引いても理解できない点もあったように記憶しています。けれども、わからないといえば、日本の医学図書館の現状も、職場以外の他の医学図書館員の考えていることも、私には謎でした。近くにある同種の図書館がどの様に運営され、どんな顔をした人々がいるのか知りませんでした。

私の勤務していた埼玉医科大学は、秩父の山並が関東平野に落ち込んでいく斜面に沿って建てられていました。美しい自然があり、都会育ちの私には夜空の鮮やかさがとても印象的でした。高麗川の鹿台橋の近くで、上流にある鱒釣場から流れ落ちてくる鱒を釣ることも私の楽しみになっていました。また、冬から春への季節の変化は、毎日変わっていく様子が感じられ、野原や林の新緑はとても美しいものでした。ですから、団地の部屋で Handbook を少しずつ読んでいた私にとって、それは活字を通して遠い世界に想いをはせることだったのです。29歳で医学図書館員になった自分自身の居場所を確認するように、

Handbook を読んでいたように思います。

Handbook の3版の中で、第12章の“Library and its public”は、それまでの1版と2版にはない新しい章でした。そこには、医学図書館を親機関だけへのサービス組織といった狭い考え方でなく、地域社会の中に位置づけ、医療情報のより広範な提供を目指していることに目を開かれる思いでした。私自身、最も影響された章はF.G.Kilgourの“Research”（第8章）です。経験主義をこえ、新しい問題に出会った時、それを解決するための研究調査の必要性を説いたものでした。Kilgourは、後にOCLC（当時の Ohio College Library Center、現在の Online Computer Library Center）を創設した人であり、その頃はYale大学の医学図書館に勤めており、図書館資料の貸出調査を行ない、配架位置の変更やコンピュータを用いた雑誌文献ファイルの形成を試みていました。研究調査の重要性と、道具としてのコンピュータの有効性を、はっきりと認識していた訳です。

1960年代のアメリカは、1957年のスプートニク・ショックの後、科学技術政策や学術情報と教育などの面で、大きな影響をもたらしたワインバーグ・レポートをうけて、高等教育法（Higher Education Act）や医学図書館援助法（Medical Library Assistant Act）が制定され、医学図書館の世界が大きな変革をとげていた時代でした。

Index Medicus誌の改良のためにMEDLARSが開発され、当時パイロダクトでしかなかった磁気テープ版からコンピュータで検索していくサービスが開始され、それがコミュニケーション技術と結びついて70年代のオンライン時代へ流れていく基礎が確立されていました。医学図書館の新設や改築も進み、医学図書館員の教育にも力が入れられ、そしてコンピュータに代表されるような技術が現場に導入され、大きな力となってきました。

このような状況下で、Kilgourはコンピュータを医学図書館が自らを変革していくための大きな力になるものであることを理解していました。このことは、彼のその後の転進からもわかります。

しかし、たんに新しい技術を取り入れ、それにより古い体質を改革しようとしたのではなく、あくまでresearchという方法により、現在の問題を科学的にとらえ、その解決への道を探るといふ基本姿勢に立脚していることが重要なのです。

過去からの伝統や経験だけで新しい様々な問題の解決を達成させようとするのは困難です。図書館の業務が過去の反復だけであるならresearchなど必要ありません。図書館が研究世界と隣接していながら、研究世界における基本的方法を取り入れないのはおかしなことです。「図書館員は経験主義を廃棄し、他領域において有効であることが証明された研究調査手法を採用しなければならない」とKilgourは書いています。“調査研究とは何か”、“調査研究はどのように計画されるのか”、“調査研究のための技法”、“出版”、“研究助成金”、“どのように始めるか？”といった項目を挙げて記述しています。

問題に出会った時に、調査研究を行ない、結果を文章にまとめることによって、問題を客観的にとらえ、解決への論理を示すことは、研究者だけでなく職業人の基本的姿勢だということです。学内で図書館の役割を証明したり、新しいサービスを行なうための予算を要求するとき、報告書が必要になりますし、それがより広い世界で認められるためには、論文としてまとめることが必要になります。報告書や論文を通して、他の領域の人々は私たちの世界を理解することができます。私たちが日常サービスを通してつき合っている多くの研究者の世界は、研究成果を論文にして伝え合い認定していく社会です。それだけに、

調査を行ないペーパーを書くことの大切さを私たちは確認すべきだろうと思いました。

図書館関係のもので、最初に活字になった私の文章は、図書館雑誌に書いた1頁の記事でした。“図書館員になって1年”という特集に掲載されたものです。この原稿を書いていた頃、同時に自分の勤務していた図書館での雑誌欠号についての調査を行ない報告書をまとめていました。そして、内部的な報告書をもとに医学図書館誌へペーパーを投稿しました。それは、論文という形で外の世界へ向けて紙ヒコーキを投げたような行為でした。印刷された論文の反響はほとんどなかったように思いますが、それでも手紙のやり取りが始まったり、何かの会合で見知らぬ人から声をかけられたりしました。ペーパーを書くことを通して、自分の世界を少しずつ広げることができたように思います。勉強し発表することはコミュニケーション活動であり、人間としての基本的な喜びだということを知りました。

Handbook第3版という、アメリカ医学図書館の黄金期に書かれた言葉をカラピナにして、私は医学図書館員としての遅い出発をしていた訳です。会社勤めの中で学んだ最大のことは、報告書をまとめることの大切さであったような気がします。営業活動を終え、職場に戻り、まず日報を書きました。そして、月報、季報、年報があり、市場の概況などを把握し販売目標を立案しました。言葉の大切さを知り、記録された知識の提供にたずさわっているはずの図書館員が、自分たちの世界を記述しないのは奇妙な構図だと思えません。そんな感慨の中にいた私にとって、Kilgourのresearchの章は、とても心に沁みたようです。Handbookの第3版は、60年代のアメリカ医学図書館の状況を理解するためのすぐれたガイドになっていると同時に、大きな変動期の中で医学図書館員が自分たちの歩むべき道をどのようにして見出したのかを理解することができるように思えます。時代を越えて大切なことは、新しい意匠を追い求めるのではなく、リサーチに立脚した地道な歩みがすべてであると信じています。

Chapter 8. Research

BY FREDERICK G. KILGOUR,* *Director*

*Ohio College Library Center
Columbus, Ohio*

Since the publication of the previous edition of the *Handbook*, there has arisen a pressing need for new data and ideas to employ in the development of library systems. With the single exception of the introduction of photocopying techniques, there have been no major, general innovations in library practices or services in the first two-thirds of the twentieth century; in these circumstances there was no real demand or need for new information. In the last decade, however, knowledge has moved into a central position in society, and need for knowledge has generated urgent demands on libraries that cannot be met with traditional services. Libraries would be in desperate straits indeed, if they had no way to cope with the newer requirements for information other than traditional empiricism within the bounds of time-worn organization and procedures. Fortunately, the advent of powerful information processors in the form of computers has provided librarians with new means for developing novel library systems and services to attain new objectives. But now that it is possible to evolve hitherto unheard-of library methods, new data and concepts are prime requirements on which to base development. To produce this original knowledge, it is obvious that sophisticated research must be instituted, for research methods have long demonstrated that they are by far the most rapid and efficient for knowledge production.

The library advances of the past century sprang from experience. Empiricism is a slow, faltering, and unpredictable method for developing new knowledge. Still, empiricism served librarians adequately until recent years. Once a need arises for new knowledge to be immediately available, empiricism fails. This condition now confronts librarians; they must discard empiricism and adopt the methods of research that have proved so fruitful in other fields.

WHAT IS RESEARCH?

Research is a method for discovering new knowledge—an intellectual method. Indeed, it is most helpful to think of the research

* Formerly Librarian, Yale Medical Library, New Haven, Connecticut.

60年代のLiterature Search

—MEDLARSへ、そしてMEDLARSから—

阿部 信一

1、はじめに

日頃、文献検索係という仕事柄、各種データベースからオンライン検索する機会が多いのですが、その便利さにはただただ感謝で、その開発・改善にあたってこられた先人の方々には本当に頭の下がる思いです。特に、日常利用が多いのはMEDLINEなのですが、日本の医学関係データベースであるJMEDICINE (JICST・医中誌国内医学文献ファイル)の料金の高さや使いにくさ(相対的にです。あくまでも)から見るとその便利さは際立ってきますし、ましてや、そのフォローに医学中央雑誌(以下、医中誌)をマニュアルサーチした日には、MEDLINEのある時代に生まれてよかったなあとしみじみ思ったりします。

今回、「私たちの60年代」ということで、寄稿させて頂けることになりましたが、はっきり云って、私が生まれたのは1964年も既に暮れようかという頃でして、実際の自分の記憶としては、テレビのヒーロー番組の怪獣の名前を思い出すのがせいぜいで、60年代を語れるものなど何も持っていません。そのため、私にとっての60年代は資料から得た知識を、70年代、80年代の頭で勝手に加工してしまったものなのであり、多分に誤解や偏見を含んだものであることも否めません。したがって、幸いにこの小文をご覧頂ける諸先輩には、寛容なご理解と忌憚のないご意見、ご指導をお願いする次第です。

2、60年代への道程

現在のNLMは、1956年にNational Library of Medicine Actが成立してできたものですが、その前身は、LSGO(the Library of Surgeon General's Office, U.S. Army:合衆国陸軍軍医総監部図書室)がそもそもの始まりで、NLMでは、SGOが総監部用医学図書費の予算計上を始めた1836年を創立の年としています。ちなみにその金額は、当時の額で総監部予算2400ドル中150ドルでした。その後1865年、LSGOの責任者としてJohn Shaw Billingsが就任しまして、彼が初代図書館長ということになっています。彼は、公衆衛生学者であり、図書館人としても著名であったようで、また、南北戦争には軍医少尉として従軍したこともあり、Billingsの就任時のLSGOの蔵書数は1800冊位に過ぎなかったのですが、彼はその後、豊富な資金をもとに図書の実をはかり、8年後の1873年には5万冊以上にまで増加させました。

彼はまた、1879年にIndex Medicus(Index Medicus; a Monthly Classified Record of the Current Medical Literature of the World、以下、IM)、1880年には、Index Catalogue(Index-Catalogue of the Library of the Surgeon General's Office、以下、IC)の刊行を開始しました。ICは、1880年の第1巻以来全16巻となり、1895年に完結しました。ここには、16万8537点の単行書と51万1112件の雑誌論文に対する主題索引と17万6364点の単行書に対する著者名索引が含まれています。この目録は、その後4回、シリーズを繰り返し、1955年に5回目の途中で刊行中止となりました。

一方、1879年刊行のIMとは、いわゆるIndex MedicusのOld Seriesと呼ばれるもので、包

括的な医学雑誌論文索引誌として、ICよりも速報性に優れたものを意図して当初月刊で発行され、1926年まで続きました。しかしながら、ICもIMも、その収録速度の遅れは実際の利用価値を甚しく損ねていました。このため、1916年、AMA(American Medical Association)は、これとは別に、雑誌論文索引誌QCICML(Quarterly Cumulative Index to Current Medical Literature)を新たに発行します。以後しばらくは、これとIMとが並行して発行されました。

1922年、LSGOはAML(Army Medical Library)と、名称を変更しましたが、IM Old Seriesは財政困難から1926年で刊行中止となります。そして、AMLとAMA、さらには財政援助を行っていたCarnegie Instituteとで協議の末、従来2誌を合併する形で新たにQCIM(Quarterly Cumulative Index Medicus)の発行を決めました。当初は、AMAとAMLの協同で行われていましたが、その後1933年以降はAMAの単独となりました。

1939年に、第2次世界大戦が始まると、外国雑誌の入手困難、人員不足などによるQCIMの発行が遅れだし、他方、世界各地の従軍医学関係者からの情報要求に応える形で、AMLは1941年から週刊のCurrent List of Medical Literatureの刊行を始めました。その後、図書館での書誌サービス活動に対する検討委員会が設置され、1949年末、ICの刊行中止と機械化によるCurrent List of Medical Literatureをもとにした新索引誌の発行が勧告されました。これにしたがって、1950年、Current List of Medical Literatureの内容が改善されまして、年間累積索引などができたりしました。

1952年、AMLは3軍を代表するAFML(Armed Forces Medical Library)と名称を変更し、さらに1956年は、はじめに述べた National Library of Medicine Act が、Lister Hill、John F. Kennedy両上院議員が提出者となって成立した結果、公衆衛生局の一部局としてNLMとなりました。その後、編集業務の機械化の目処がたった1959年、NLMはAMAと協同で、新しい索引誌の発行を決めました。これが、Index MedicusのNew Seriesと呼ばれるもので、1960年から刊行が開始され、このときからMeSH(Medical Subject Headings)も発行されるようになったのです。当初、月刊版をNLMが、年間版をAMAが発行していたのですが、1965年から両方ともNLMが発行するようになりました。

かくして、1960年代へと突入して行くこととなります。

3、60年代

MEDLARS: Medical Literature Analysis and Retrieval System は、直訳すれば「医学文献分析検索システム」とでも云いましょうか、ともかく初めての機械検索システムと云えるでしょう。これは、NLMがCouncil on Library Resources(フォード財団の基金をもとに設立された助成機関)の助成金をもとにIMの編集の機械化を計画し、New Seriesでは、データの入力をすべて紙テープを使うなどするようになり、さらに、General Electric社の協力により1964年からIMを、1965年からICの作成を"Honeywell-800"というコンピュータを使って行なうようになったことに始まります。当初、MeSH用語の非常な不足や入力時の誤りに対する過小評価など、主に操作の手順上でいくつかの問題が起きたものの、最初の計画を多少変更するのみで済んでいます。しかしながら、実際の利用となると、UCLCなど、利用機関によっては"Honeywell-800"を使っていないところなどもあり、MEDLARSに対応するためにはプログラムを書き換えなければならず、中には完全に書き換えなければなら

い場合もありました。MEDLARSが"Honeywell-800"を採用したのは、当時のアメリカ政府各機関が"Honeywell-800"を導入していたために同じものを導入したのだということですが、実際に頻繁に利用する大学の多くはこの機種を使用していなかったため、この反省を踏まえて、その後は大学機関によく導入されているIBM機を利用するようになりました。

書誌作成用に入力されたデータは、そのまま検索用にも流用でき、NLMではこれをバッチモードで利用者にサービスを行なうようになっていきます。このシステムは遡及年限の短さなどの問題はあるものの、概ね好評であったようで、その影響については、Carolynの研究報告にも顕著にみられ、研究者の論文における引用文献数の増大などが起こっています。こうして、検索依頼は次第に増加していき、また、検索結果の提供まで2~3週間もかかっていたのですが、この回答時間の長さに対する改善の要求も増えてきたこともあって、これらの解決のためにオンライン検索サービスの開発へと研究・実験は発展していくのです。そして、その実現は70年代に待つこととなります。この他に、当初の計画にあったようですが、この入力データを使って、NLMはIM以外の二次資料の刊行なども行ったりします。

IMのNew Seriesで明けた60年代は、MEDLARSの登場で機械による文献検索というひとつの時代というものを画し、それに続くオンラインサーチの可能性を予見させながら暮らしていったと言えるでしょう。IM New Seriesでも特に画期的だったのは、MeSHの作成でしょう。現在のものから比べれば、実用的ではないものの、その後年々改訂を重ねる中で、医学用語のある程度の大系化を成し遂げたということ、その端緒を開いたのはこの60年代であったということは紛れもない事実です。現在、このMeSHの存在がIMをして、他のどの二次資料よりもその信頼性を際立たせています。そして、もうひとつのMEDLARSによる機械検索時代の幕開け。これらは決して別々のものではなくして、NLMの、否、60年代のアメリカ医学図書館界のひとつの成果であったと言えるのではないのでしょうか。

4、60年代以後

MEDLARSはその後、MEDLARS II、MEDLARS IIIへとバージョンアップがはかられていき、AIM-TWX などを経て、MEDLINEへとオンライン検索サービスが開発、普及していきます。70年代はじめには、その収録範囲の狭さや、永年の慣習などによりまだ利用者を十分に満足させるまでにはいかず、マニュアルサーチの補助的なものとして認識されていたことを示した調査報告などが見受けられます。しかし、図書館員などはその可能性について大きな期待を寄せていたようで、実際、その後、マニュアルサーチと対等に使い分けられるようになり、やがて主役の座をとって変わるまでになっていくのです。

5、終わりに

その後の医学情報の急増を考えると、60年代に於けるMEDLARSの出現が医学の研究に与えた影響は計り知れないものがあるといえます。山崎塾長が60年代を指して黄金時代と言われていましたが、Literature Searchという観点からみても例にもれずそれは確かに実感であります。しかしながら、当時、津田先生が述べられているように、その成功は一朝一夕になされたものではなく、John Shaw Billings以来のNLMの文献調整の伝統と、60年代当時の館長Frank B. Rogers博士と、書誌サービス部長のSeymour I. Taine氏、その他多くの協力者の研究の成果であり、さらにはその背後にある、アメリカ医学図書館活動のレベル

の高さ、層の厚さ、そして利用者の理解の深さ、といったもののひとつの結晶であると言えるでしょう。

今回、“60年代のLiterature Search”と銘打ってこの研究を進めてきたのですが、それというのも、当時の文献検索の有様というものを知っていく中で、現在に連なる流れのようなものを見いだし得るのではないか、そしてその特徴を知り、未来へと続く方向性といったものを自分なりに掴むことができるのではないかと考えたのです。今、つたない研究ではありますが、ひとまず終えてみて、60年代当時のエネルギーに圧倒され、触発されて、様々な事柄が自分の中で飛び交っています。ここから何が生まれてくるのか、また生み出さなければならないのか、よくわかりませんが、じっくり醸成させていこうと思います。

以上、最後までご覧いただきましてありがとうございます。この論文をまとめるにあたって、ご協力頂いた方々、ご迷惑をおかけした方々にお礼とお詫び申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 後藤敬治: MEDLINE—その背景とこれまでの動向, 医学図書館, 23(3):134-138, 1976.
- 2) 栗原進一: 米国国立医学図書館のデータベースサービス, 医学図書館, 35(1):19-31, 1988.
- 3) Austin, C. J.: MEDLARS 1963-1967. (小川治之他訳), 医学図書館, 16(1):47-64, 1969.
- 4) Carolyn, G. W.: The Impact of On-line Search Availability on Literature Retrieval Patterns of Reseachers, Bull Med Libr Assoc, 70(4):389-396, 1982.
- 5) Winifred, S.: Nonmediated Use of MEDLINE and TOXLINE by Pathologists and Pharmacists, Bull Med Libr Assoc, 64(4):382-391, 1976.
- 6) 津田良成: MEDLARS 医学文献の機械検索, 医学図書館, 10(3):60-69, 1963.

John H. Talbott と 60年代のJAMA

井上 三郎



図1 John H. Talbott, MD

John H. Talbott, MD (1902-)

多くの医師から、ことに学界の医師から容易ならざる墮落とみなされていたJAMAを譲り受ける。1959年の10月、AMAの学術出版部長と編集者に任命された。Talbott博士は学界の強い信頼と豊かな編集経験を持つ人であった。彼は自身がJAMAという雑誌で何をなすべきかを知っており、そして、そのことに精力的にとりくんだ。

博士は1970年の1月に名誉編集者となり、1972年までこの称号を保持していた。1971年にマイアミ医科大学医学部の臨床教授に指名され、現在はフロリダ州のキ・ビスケインに在住している。1902年の

8月10日、アイオワ州のグリネルで生まれ、ハーバード医科大学で医学博士号を得た。

1931年から1946年までの間、ハーバード医科大学の教授とマサチューセッツ総合病院の職員を兼務していた。AMAの幹部に加わった時、博士はバッファロー医科大学の医学部の教授であり、また季刊Medicineの編集者でもあった。

Journal of the American Medical Association(JAMA)は、1883年に創刊された。この年刊の会報から週刊の医学雑誌への移行は、1856年に創刊されたBritish Medical Journalの創刊と、その後10年の経緯に促されたものである。この事情は1880年におこなわれたLewis A. Sayerの会長就任演説によって知ることができる。

当時のアメリカ医師会(American Medical Association:AMA)にとって、編集者の選択は明らかに重要であった。Sayerの演説では“この協会が発行する機関誌がいかなるかたちになるろうとも、すでに認められた地位にある編集者をさがすことが必要となるろう。…その人は文学的な手腕と科学的な知識、そして、ジャーナリストとしての経験、少なくともジャーナリスティックな勤と機転を持ち”、その人はまた、“誠実であり、礼儀を重んじ、専門家としての知識と関心の水準を高め、そして、ひとつの目的のもとに自身に委ねられた力を発揮すべき人”であると宣言された。Sayerの立てた計画はNathan S. Davisによって実現されるにいたるが、この初代の優れた編集者にはAMAの命運が託されていた。

1960年代のJAMAはその歴史において深刻な危機を迎えており、編集者の選択の重要性はその草創期をほうふつさせた。

さて、1949年の政策上の出来事はAMAに組織的な変化をもたらしていた。特別会員という概念が崩れたことにより一律に会費が課せられることとなり、したがって、JAMAは会員の利益となっていたのである。この後援によってJAMAの発行部数は1949年の13万7,000部から1951年の16万7,000部へと増加していた。新しい製薬の開発、ことに抗生物質の紹介の絶頂期でもあったことにより、広告による収入は1951年の270万ドルから1959年の800万

ドルにまで跳ね上がることとなった。厚さは発行を重ねるごとに300ページを超え、1940年代後期の標準であった128ページとはここにおいて大きな差が生じていた。JAMAはこの時すでに119カ国から購読者を得ていたのである。

1950年代のほぼ全般にわたってJAMAの編集者をつとめたAustin Smithの主要な編集上の方向転換は、AMAの組織的な変化に対する彼の認知を反映していた。“私はこのように見ることができた”と彼は回想している。すなわち、“AMAは学術団体からいくぶん政治的な組織へと変化しており…私は支持したものもあつたし、また保留したものもあつたが…とにかくも、私の方針は、印刷された言葉を用いて科学的な情報と組織としての思想を運搬することにあつたのだ”と。かくして、SmithはAMAの各種の会議や委員会の動向、望むらくは、1951年の理事会報告で彼が述べたように、“各種の会議や部会、委員会などの活動により注意を傾け、彼等の仕事により知られるように、また彼等の文書がより広く使われるように”、おおよそ10の報告に対してひとつの割合で論文の出版を断念していったのである。

1959年に10カ月間編集方針を握ったJohnson F. Hamondのもとで、JAMAは常に健康な外観を示すにいたつた。JAMAは肥太り、時には145ページかそれ以上が論説の資源として委ねられることとなった。1950年代の半ばにおける鎮静剤の紹介によって発行部数は18万部近くまで増加することとなった。広告による総収入は着実に上昇を続けていた。しかし、こうした中で失われたものも少なくなかつたのである。過去の編集上の活気と火花はすでにここでは望むべくもなかつた。10年後、もうひとりのJAMAの編集者はこの事情について辛らつた批評を残している。すなわち、“1950年代のJAMAは”と、Hugh H. Husseyは述べている。“まるで巨大な獣やマンモスに共通するような—その大きさと重そうに歩く動作によって不活発を運命づけられた—保守的傾向に支配されていたようにみえるのだ”と。

Life誌の編集者であるCampionは、こうした1950年代のJAMAの危機にふれて次のように解説している。すなわち、編集上の威光の失墜は、学術雑誌にとってはことのほか重要な要素である。一般雑誌と異なつて、純粋な学術雑誌は学術論文に重く頼つており、あらかじめ割り当てられるか依頼される記事よりもその比重は高くなつている。一流の医師、科学者、そして、医学研究者達は、自身の業績がいわゆる科学社会の中で出版されるべき一定の段階にあると考える時に論文を書くのであり、彼等がその領域で最も権威のあるとみなしている雑誌にそれを託すのである。科学者は誰でも自身の原稿が採択されることを望んでいる。したがつて、たとえ採択されなくとも、権威の低い雑誌にでも送るものなのである。学術雑誌がその編集上の名声を失ひ始める時は、より望ましい、話題となるような原稿に対する最初の一撃をこうして失う時である。他の雑誌で拒否されたものを出版せざるをえないはめに陥れば、雑誌はその成長にまで被害を被ることとなり、その結果、入手できる記事の質においても失墜することとなる。時間がすぎれば、これは古典的な悪循環に転じていくのであると。

この墮落に傾いたとみられていたJAMAの転換をはかるため、1959年の10月の代議員会はJohn H. Talbottを編集者に任命したのである。彼は最も高い品質の原稿のパーセンテージの増加を早く、そして、たやすく獲得するために、84の医科大学の学部長あてにJAMAを利用した計画の概要を示している。彼の目的は、“高い品質の医学情報を専門家でない人と（彼の専門以外の領域の）専門家の両方に対して提供すること”にあつた。かくして、彼

は編集上の変革の警告として、その初期の号、1960年の4月23日号の表紙から出版社W. B. Saunders adの広告をはずしたのである。彼はこう発言している。この表紙こそは、“AMAの学術出版物を改良するための新療法の最初の紹介なのである”と。

Talbottは数多くの変革をおこなわなければならなかった。彼は内部から供給される豊富な資料を使ったSmithの方針とは逆に、会議や委員会の報告は他の記事と同様により詳しく見るつもりだが、特別な優先権は与えないと勧告している。“薬物委員会は協力してくれている”と、彼はその初年の終わりごろに報告している。“長いばかりで内容にとぼしい記事を短報にかえて提出してくれることによって。他の委員会の反響は必ずしも好意的ではなかったのだけれども”と。しかし、事態は次第に好転していったとみてよいであろう。彼が学術会議の科学部門の議長より提出された文書の出版を拒否したとき、1966年の代議員会は彼を支持したのである。

Talbottのおこなった変革の多くは今日的な意義を持つものであったといえよう。彼はニュース部門を初めて成功させた人でもあった。彼は科学的なニュースをより早く医師にもたらそうとした。ジャーナリストを編集スタッフに加え、科学の進歩と発展を報告するために各種の医学会議に送り込んでいる。AMAの活動に関するニュースを読者に知らせるためにAMA GRAMSという短い雑報の欄を紹介している。また、彼は製本の方法を図書のような平とじに改め、読者が記事をはぎとってより簡単に製本できるようにした。広告をはずした2色刷りの合成活字の表紙を初めて紹介し、これをしばらく用いた後に4色刷りの写真に改め、最終的に彼のもとで開発された表紙の体裁は1960年代の後半に紹介されることとなり、それは今日のような4色刷りの芸術作品の複製を使用したものであった。

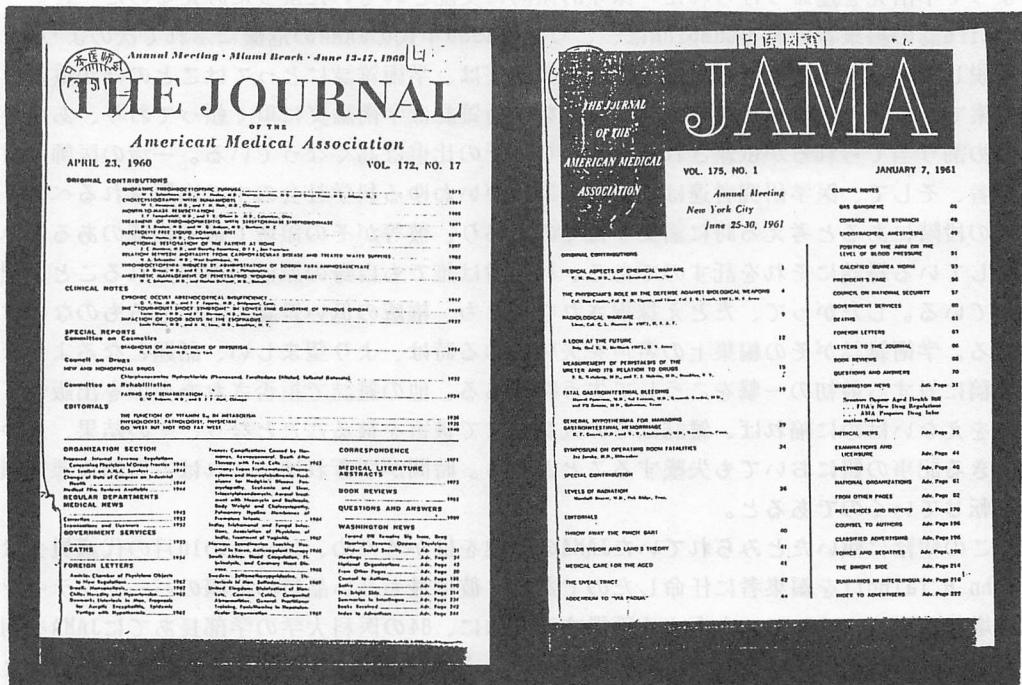


図2 広告をはずした1960年代のJAMAの表紙

Talbottはこの1960年代が終わろうとするとき引退し、新たに名誉編集者の地位に就くこととなる。その理由は、最後の2年間の市場要因が、彼の編集者としての力量を超えるものであったためであるとされる。事実、JAMAと他の出版物の広告料はここにおいて急激に下落しており、その総収入は1967年には1360万ドルであったが、1968年には1190万ドルとなり、1969年には1000万ドルまで下がるにいたっていた。かくして、1960年代初期には毎号300ページが標準であったJAMAは過去のものとなり、JAMAは、そして、同様にAMAはひとりの情熱的な編集者の引退を契機に、貧弱な予算と行政上の切迫の次の10年間、すなわち、1970年代へと入っていくのである。

参考文献

- 1) King, L.S.: The founding of JAMA, 1883, JAMA.; 250(2): 177-180, 1983.
- 2) Riley, R.W.: A century of editors, JAMA.; 250(2): 230-235, 1983.
- 3) Campion, F.D.: The AMA and U.S. health policy since 1940, Chicago, Chicago Review Press, 1984. pp. 490-498.

1960年代の「医学図書館」を見て

北川 正路

1. はじめに
2. 1960年代の「医学図書館」
3. 「医学図書館」を見て感じた1960年代の医学図書館の動き
4. 1960年代の来日外国人図書館員
5. おわりに

1. はじめに

「医学図書館」は、われわれ医学図書館に勤めるものにとって重要な雑誌である。「医学図書館」は1954年に創刊された30年以上の歴史をもった雑誌である。本レポートでは、1960年代の「医学図書館」を見て私なりに感じた1960年代の医学図書館界の動きをいくつかのトピックを選んでまとめた。

2. 1960年代の「医学図書館」

(1) 1960年代の「医学図書館」の外観

表1. 1960年代に発行された「医学図書館」

発行年	巻数	大きさ	発行頻度	ページ数
1960	7	A5	年6回	124
1961	8	A5	年6回	130
1962	9	A5	年6回	125
1963	10	A5	年6回	212
1964	11	A5	年6回	288
1965	12	A5	年4回	260
1966	13	A5	年4回	304
1967	14	A5	年4回	380
1968	15	A5	年4回	496
1969	16	B5	年4回	366

1960年代に発行された「医学図書館」は表1の通りである。

「医学図書館」と聞くとB5版で表紙は写真というイメージを描いてしまうが、1960年代の「医学図書館」は違う形態であった。表1のようにB5版になったのは16巻(1969年)からで、また表紙に加盟館の写真が載るようになったのは、10巻(1963年)からであった。

(2) 掲載内容

内容は原著論文の他に、資料紹介、協会・事務局などからのお知らせ、会議・講習の報告等多岐にわたっている。

本節では、掲載論文について、次の(a), (b), (c)の項目の分析を行った。

(a) 主題別分布

(b) 著者の所属機関の分布

(c) 参考文献の内訳

対象にしたのは、9巻(1960年)から16巻(1969年)に掲載された論文 224編で、対談、追悼文、講習の報告、書評、旅行記的なものは除いた。

(a) 主題別分布

表2は、掲載論文を主題ごとに分類したものである。

表2. 掲載論文の主題別分布

主題	件数
利用頻度・図書館統計	29
収集・受入・交換	23
図書館管理・運営	23
参考業務	19
図書館建築・施設	19
目録・分類・整理	16
機械検索	14
医学図書館一般	14
相互利用、地区活動、協力活動	13
機械化	12
情報収集ネットワーク	12
図書館員の教育	10
資料紹介	10
貸出業務	5
その他	5
計	224

なお、主題分けは、「医学図書館」の事項索引を参考にした。

(b) 著者の所属機関の分布

次に、論文の著者の所属機関別のリストを上位10番目まで表3にまとめた。

表3. 著者の所属機関

所属機関	件数
1. 慶応	59
2. 東大	23
3. 阪大	15
4. 徳島	12
5. 東北	11
6. 女子医	10
7. 神戸	8
7. 国がん	8
9. 九大	7
9. 札医	7

慶応は59件と最高だがそのうち12件が津田良成氏のもの、7件が関口昌樹氏のものである。多産の著者がいることが特徴であろう。ちなみに、国がんの8編のうち、7編が本田品子氏のものである。

(c) 参考文献の内訳

1960年代の「医学図書館」に掲載されている論文は、どのようなものを参考文献にしているか調べた。各論文の参考文献のリストにあげられているものを対象にした。表4のような内訳であった。その他には私信とかパンフレット類などが含まれる。

国内雑誌、外国雑誌の内訳は表5、表6のようになっている。

表4. 参考文献の内訳

内訳	件数
国内雑誌	296
外国雑誌	249
国内単行本	208
外国単行本	174
その他	14

表5. 国内雑誌の内訳

雑誌タイトル	件数
医学図書館	104
図書館界	26
図書館雑誌	21
Lib Sci	19
薬学図書館	18
きたさと	18
情報管理	12
科学技術文献 サービス	11
ドクメン研究	8
びぶろす	5
その他	54
計	296

表6. 外国雑誌の内訳

雑誌タイトル	件数
Bull Med Libr Assoc	102
Coll & Res Lib	16
Fed Proc	12
Lib Res Tech	10
Am Doc	9
Science	9
Spec Lib	8
JAMA	7
Lib J	7
J Doc	5
UNESCO Bull Lib	5
その他	59
計	249

国内雑誌は、「医学図書館」が、外国雑誌は「Bull Med Libr Assoc」が他のものに比べて非常に多く参考文献として利用されているのがわかる。表4-表6より、1960年代の医学図書館員がどのような文献から知識を得ていたかわかるだろう。

3. 「医学図書館」を見て感じた1960年代の医学図書館界の動き

1960年代の「医学図書館」を見てみると、1960年代、いろいろなできごとがあったことがわかる。それらからいくつか選んでまとめた。

(1) 米国医学図書館援助法案

1963年に米国の大統領科学諮問委員会がワインバーグ報告書を提出した前後から、科学情報活動の全国的な組織網形成に向かったの動きが盛んになってきた。医学分野においても1965年、医学図書館援助法案が成立するなどの大きな動きがあった(15巻:p. 277, 1968)。この法案の内容については、福留氏(13巻:p. 233-238, 1968)、渋谷氏(15巻:p. 51-60, 1968)らによって紹介されている。

医学図書館を直接対象とした法案が議会で提出され、その活動が国家的な広がりをもって認識されたことは、アメリカの医学図書館史上画期的なできごとである。

(2) N I S T 構想

次は、日本政府の情報政策についてである。

16巻(1969年)で、裏田武夫氏が、「N I S T 構想と医学図書館」という題のもと、首相の諮問機関である科学技術会議が、1969年10月31日、佐藤首相に提出した「科学技術情報の流通に関する基本的方策について」の答申について解説している(16巻:p. 112-115, 1969)。この答申は16巻のp. 116-139に掲載されている。

この答申では科学技術情報の流通に関する基本的施策としていくつか課題を提起しているが、それら課題のために科学技術情報の全国的流通システム(N I S T = National Information System for Science and Technology)を構想している。

裏田氏は、N I S T 構想と医学図書館との関わりなどについても言及している。

(3) M E D L A R S

いまでこそM E D L A R S という名を聞いたことのない医学図書館員はいないが、これは1963年に動き出したのである。「医学図書館」に最初にM E D L A R S の詳しい解説が出てきたのは、10巻(1963年)の津田良成氏によるものである(10巻:p. 60-69, 1963)。

その後もM E D L A R S 一般、索引、検索について説明した論文が出てくる。「医学図書館」は、米国で1963年に動き出したM E D L A R S について日本の医学図書館界に伝えるという役割も果たしていた。

(4) レファレンス

現在、多くの医学図書館は、レファレンス部門を設けサービスを行っている。

11巻 1号(1964年)は、「参考業務と参考資料」という特集を組んでいる。それを読むと当時はレファレンス・ワークが一般化されておらず、本格的にレファレンス・ワークを行っていない医学図書館があるということがわかる。

講習会・研究集会の記事を見ると、レファレンス・ワークについての講演、実演がよく行われている。また、総会の報告の記事を見ると、議題として、レファレンス・ワークのことが取り上げられていることもある。これらのことは、現在のようにレファレンス・ワークが一般化してきた一因であろう。

(5) Handbook of Medical Library Practice 3rd ed

山崎塾長は、Handbookの3版をめぐる文章を載せているが、1960年代の人がこの3版を心待ちにしていることが伝わる記事が出ている。

「Handbook… 3版の内容発表さる」(13巻:p. 60, 1966)

「Handbook… 3版の刊行は1968年に」(13巻:p. 301, 1966)

(6) その他

その他にも、興味あるできごとがたくさん載っていた。相互貸借の方法をいろいろ検討

している様子、複写機が改良されていく様子、アメリカ議会図書館で始められたMARC計画の様子等について説明した1960年代の動きが感じられる興味ある記事がたくさん載っていた。

4. 来日外国人図書館員

1960年代、何人かの著名な外国の図書館員が来日した。「医学図書館」に掲載されている、来日外国人図書館員の記事を参考に1960年代の来日外国人図書館員をまとめた。

(役職は来日当時のものである)

(1) Estelle Brodman 1962年 1967年

ワシントン大学医学図書館長

1962年：慶応大文学部図書館学科において生物科学関係図書館学を講義。

(8巻:p. 92, 1961/9巻:p. 58, 1962/9巻:p. 76, 1962/11巻:p. 1, 1964)

1967年：慶応大図書館学科で講演。

(15巻:p. 95-97, 1968)

(2) Alderson Fry 1963年来日

ウェスト・ヴァージニア大学医学図書館長

日本製の鋼鉄書架がどの程度のものであるかを調べるために来日。

(10巻:p. 179, 1963)

(3) Thomas E. Keys 1961年来日

メイヨー・クリニック図書館長

日本医学図書館協会第32回総会時に開催されるゼミナールの指導。

(9巻:p. 6-10, 1963)

(4) Keyes Dewitt Metcalf 1961年来日

ハーバード大学図書館名誉館長

東大図書館の管理、機構、運営の刷新について調査、助言。

(8巻:p. 38, 1961)

(5) Henrietta Perkins 1961年来日

エール大学医学図書館副館長

パーキンズ女史を囲んで東大医学部会議室でディスカッション。

(8巻:p. 88-91, 1961)

* 来日ではないが、驚いたことに第32回総会 (Keyes Dewitt Metcalf氏出席) には米国大統領 John F. Kennedy からメッセージが送られた。(9巻:p. 1-2, 1962 に掲載)

5. おわりに

現在われわれが行っている業務の多くが1960年代の方々が検討、奮闘していたことの延長上にあることがわかった。勤務時間内、ただ、事務的に業務をこなすだけで過ごしてしまう日が多いが、よりよいサービスを行うにはどの様に業務を改良していったらよいか考え、目標をもって仕事に取り組んでいこうと思った。”総合研究「私たちの80年代」”の内容を想像して。

アメリカ医学図書館援助法と NLMの変遷

熊谷 智恵子

I はじめに

1836年陸軍軍医総監室医学図書予算が計上された。NLMはこの1836年を創立の年としている。John Shaw Billings が軍医総監の頃(1865-1895)約12万冊だった蔵書が150年後の現在では約350万部にふえており、毎年約2万冊の単行書を収集し2万4千冊の雑誌をカレントに受け入れている。そして今や世界一の文献数を誇る国立医学図書館となっている。

この150年間の科学の発達はめざましく、医学の分野においても例外ではなく著しい文献量の増大をみせており、たとえば、IMの重さを年度ごとに計り文献情報の増大を比較検討して報告されるほどである。こうした中においてアメリカの図書館は私たち図書館員にとっては長い間模範として受け止められていた。それではなぜアメリカの図書館界がこんなにも発展したのか？ここでは私たちになじみの深い医学図書館に焦点を当てて、アメリカ医学図書館発展の原動力となったものは何だったのかを知るために60年代のアメリカの医学図書館、医学図書館援助法について書かれた論文を読みNLMの変遷と活動について自分なりにまとめて解釈してみた。

II NLMの変遷と活動

1836年に創立されたNLMは、1865年 Library of the Surgeon General's Office として正式に図書館の名をつけられた¹⁾。その後1952年 Armed Forces Medical Library と改称し、さらに1956年 National Library of Medicine となった。これは単なる改称ではなく行政的には、国防省から厚生省(Public Health Service)の組織下(図1)に変わったことにより、医療行政と医学研究および医学文献活動に責任を持つようになった²⁾。ここにサービス対象が軍隊から市民へと変わったことによりNLMの活動が大きな転換期を向かえたことになった。

19世紀前半から、増大する文献を組織的に検索するための索引誌・書誌が作られており、Library of the Surgeon General's Office でも1879年からは主題から医学文献へアクセスできる月刊の二次資料として Index Medicus を創刊している。その後、財政的困難により1926年刊行中止となったが1960年から再刊された。1965年には年刊版も発行されるようになった。また、1880年からは蔵書目録である Index Catalogue を創刊している。1950年代に入るとコンピュータ技術が開発され始め、増大している科学技術関連文献の索引作成を機械化するべく、1964年から Index Medicus の機械化編集が始まった。その結果、機械化編集の副産物としてバッチ処理による文献検索も可能となった。

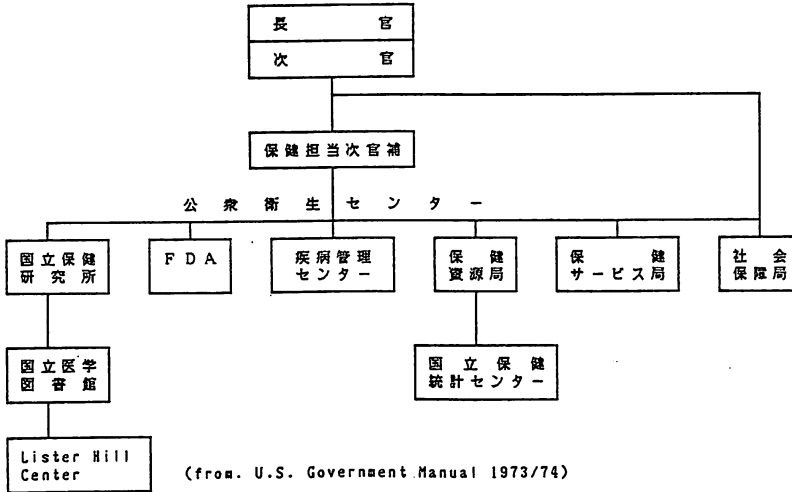
1965年NLMの最高運営機関である理事会の助言と助案により、初めて医学図書館を対象とした法律として Medical Library Assistance Act -医学図書館援助法-が制定され

た。この法律により医学図書館の財政的基盤が確立し、その活動が国家的に認められたわけである。その後、1969年同法は延長されている。

1968年にはNLMの別館として、医学情報伝達に関する研究開発部門の Lister Hill National Center ができた。Lister Hill National Center はアメリカのヘルスサイエンス分野での法律制定に功績のあった Lister Hill 上院議員の名前を冠したセンターでありコンピュータ及びコミュニケーション技術を利用して医学生物学分野の情報の組織化と流通、利用のあらゆる過程を改善する目的で作られている。

1971年MEDLARSのオンラインサービスが開始された。この時よりNLMはオンラインサービスの時代に入ったわけである。しかしこれまでのMEDLINEでは、訓練を受けた専門家には使えても、初心者や誰にでもすぐに使えるわけではなかった。しかし、1986年には検索の容易なCD-ROMによるGRATEFUL-MEDをフロッピー・ベースのソフトウェアパッケージにしてだしている（アメリカ国外での発売はまだしてないということである）。

図1 米国保健教育省組織図³⁾(1973/74,一部省略)



III 医学図書館援助法

1965年の医学図書館援助法（資料）が制定されるほんの少し前までは政府は図書館や情報の必要性について全く無関心であり、オートメーション化している図書館は極めてわずかであったが1967年には多くの図書館が、ごく小さな所でもオートメーション化していて、より多くの図書館がそれを検討していた。この時期のアメリカの図書館界は Matching Basis（政府が支給する資金に対して地方自治体たとえば町、学校、大学等が、それにさらに金額を加えて支給することで政府と国民がこの仕事に協力すること）により、拡充される一方オートメーション化も進んだ。実際 Special Library Association が1966年に1100以

上の図書館を対象におこなった調査によると50%以上がなんらかの形の機械設備またはオートメーションを持っており、他の20%の図書館は計画中か設置中であつた⁴⁾。このように医学図書館援助法により、NLMは医学図書館の発達を援助し、アメリカ国内の医学文献の供給源として奉仕するよう議会より委任された。NLMはその目的にかなうよう補助金をだして、コンピュータ時代の新しい技術革新に対応するよう医学図書館を充実させてその上で国家的な組織網を作るよう計画した。

援助計画のひとつに生物医学コミュニケーション・ネットワーク⁵⁾ (Biomedical Communication Network) がある。ここでは次のような組織関係をもっており、①BHL (基礎ヘルスサイエンス図書館) は情報ネットワークの入口で、国内に散在するヘルスサイエンス図書館である。ここで要求が満たされない場合には次の資源図書館に照会される。②この資源図書館は医科大学の図書館に相当する。また、③地域医学図書館においてはNLMが設置した11の地域 (1983年からは7地域) にサービスしており、全国への医学情報伝達を調整し容易にすることを目的とし、資源図書館の支援機能として働いている。④NLM (国立医学図書館) は世界最大の生物医学文献の蔵書を所蔵しており、基礎ヘルスサイエンス図書館、資源図書館、地域医学図書館の支援施設として機能しており、ネットワークの運営や管理、調整、計画策定に責任をもっている。これら4レベルの図書館が一体となってネットワークを形成し国内の医学保健専門家に情報を提供している。

資料 アメリカ医学図書館援助法

- (1) Construction Grants :建設—施設建設に対する援助
- (2) Training Grants :教育・訓練—図書館員の教育訓練に対する援助
- (3) Research Grants :図書館情報学の研究開発—図書館情報活動の研究開発
に対する援助
- (4) Resource Grants :図書館資料の拡充—図書館資料に対する援助
- (5) Regional Medical Library Grants :地域センター館育成—現存する医学図書館
にセンターの任務を委任する援助
- (6) Special Scientific Projects :医学研究への特別奨励
- (7) Biomedical Scientific Publications Grants :医学出版物への援助
- (8) (付録) Regional Branches of NLM :NLM分館の設立

* (1)-(5) 医学図書館員を対象

* (6)-(7) 医学研究者を対象

アメリカにおける生物医学コミュニケーション・ネットワークは日本の医学図書館協会加盟館における相互貸借とは比較にならないほどの有機的で幅の広い解放的なネットワークシステムである。これはNLMが国立図書館として医学図書館全体の運営に責任を持ち支援図書館として働くからである。

この地域医学図書館計画の推進力となった同法は相互貸借や研修、オンラインサービスの開発への費用援助のほかに基本的な蔵書構築への援助や、ヘルスサイエンス図書館の特別事業助成金も提供している。

III おわりに

こうした1960年代を中心としたアメリカ医学図書館の発展は、この時期がアメリカの科学や経済発達の総合的な到達地点にあったということのみならず、医学図書館のネットワーク作りをささえた図書館員 Matching Basis を支援する図書館員や市民、医科大学協会を中心とする数多くの Report 及び活動を忘れてはならないだろう。

引用文献・参考文献

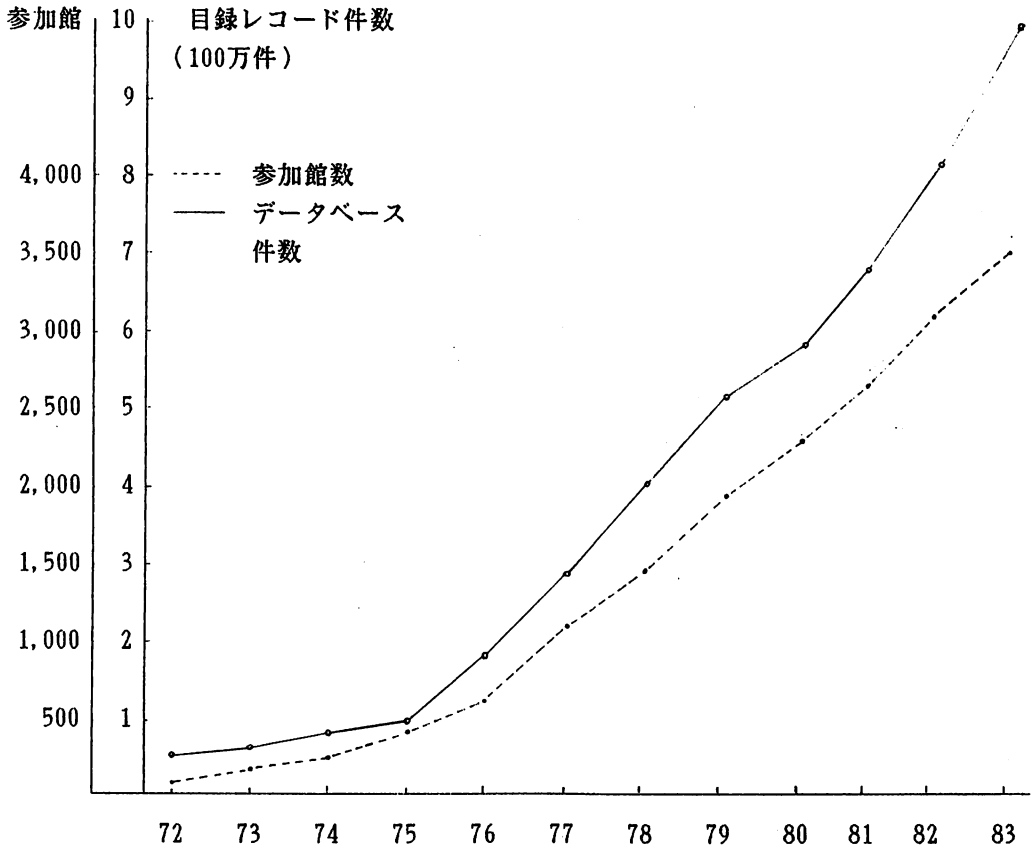
- 1)野添篤毅：医学情報サービスの現状と将来(1).あいまっく, 8(2):5-9, 1987.
- 2)福留孝夫：アメリカにおける医学図書館の動き.医学図書館, 13(4):233-238, 1966.
- 3)原田幸彦, 上田修一：アメリカ合衆国における医療情報システム.医学図書館, 20(3):205-216, 1979.
- 4)ブロードマン, E.: 最近のアメリカにおけるドキュメンテーションの傾向.医学図書館, 15(1):95-97, 1968.
- 5)Patricia, J.W. /Ruby, S.M.: ヘルスサイエンス図書館員の基礎知識. (菅 利信 他 訳) 東京, 日外アソシエーツ, 1986.

60年から80年代にかけてのOCLC

宮下 美香

1. OCLCとは何か

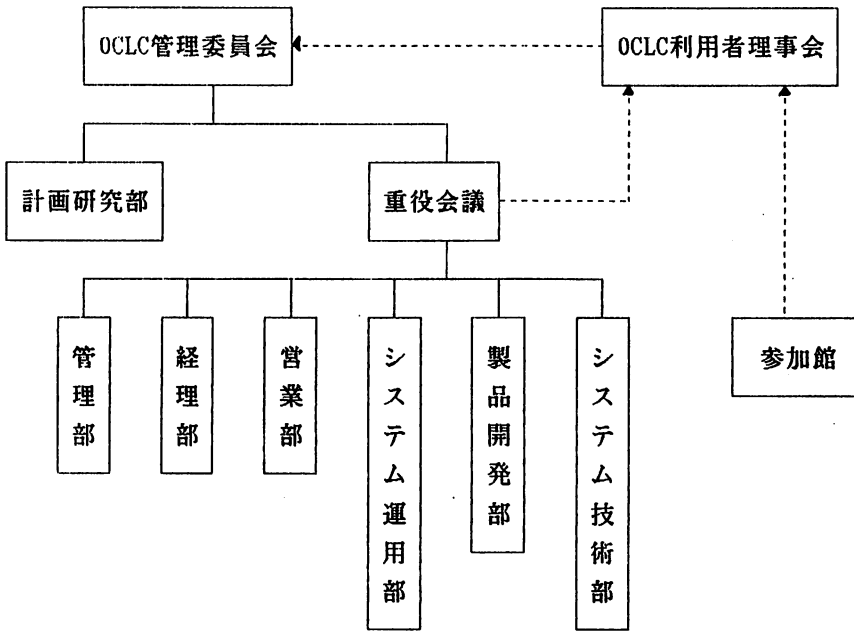
OCLCとは、Online Computer Library Centerの略語である。しかし、これは1981年に変更した名称で、1967年設立当時は、Ohio College Library Centerという名称であった。現在、OCLCは、1000万以上のレコードを収録した巨大なデータベースを有する企業体となっている。参加している図書館は、アメリカ以外にもカナダ、オーストラリア、ヨーロッパなど約6000機関、OCLCは発足当時より、目録レコード件数も、参加数も伸び続けている。



OCLCの目録レコード件数と参加館数の推移

2. OCLCの組織

1984年1月の報告では、OCLCはLibrarian, コンピューター技術者、経営専門家、営業マン、法律専門家など571人の専任職員とプロジェクトなどで必要に応じて一定期間雇われる非常勤職員からなっている。OCLC利用者理事会（OCLC User council）は、OCLCの利用者の代表とOCLCの管理委員の一部からなり、利用者の意見をOCLCの運営に反映させる活動をしている。OCLCの管理委員会（OCLC Board of Trustee）は16人の委員からなる会議で、予算、人事、運営方針、サービス料金などに関し、意志決定を下す。この委員会は、経営、法律、予算、行政、経済、会計、情報科学、通信、営業、図書館などの分野の専門家からなっている。16人の委員のうち8人は前委員会からの選出で、6人はOCLCの利用者理事から選出される。



OCLCの組織構成（1983）

3. OCLCのサービス

OCLCのサービスには次のようなものがある。

OCLCのサービスメニュー

	システム	サービスの概要	開始年
1	目録サブシステム	専用端末を導入し、オンラインで目録を作成する機能を提供する。作成された目録はオンラインで検索出来る他、カード磁気テープレコード又は受け入れリストとして受け取ることができる。端末に接続されたプリンタを使って図書やブックポケットにはりつけるラベルを印刷することもできる。	1971.8
2	相互貸借サブシステム	OCLCの参加館の所蔵レコードを調べて、自館の所蔵していない資料がいつ送られたか、発送した資料がいつ受け取られたかなどの状態を知ることができる。	1979.4
3	雑誌サブシステム	目録サブシステムで作成された雑誌の目録を検索できるほか、受け入れ、欠号請求、ユニオンリストが任意のグループに対して作成できる。	1975.1
4	集書サブシステム	発注、受け入れ、未着請求、会計などの業務ができる。またこれらの業務で発生した情報をいつまでも検索することができる。加えて、OCLCのオンライン住所録から出版社や書店などの有益な情報も検索できる。	1981.1
5	目録検索サービス	電話回線を使って、簡単な端末でOCLCのもつデータベースが検索できる。	1971.8
6	遡及変換サービス	カードや冊子になっている目録をコンピュータリーダブルに変換してくれるサービス。	1976

4. OCLCの歴史

OCLCができるまで

1867年 Ohio College Association(OCA)が設立。メンバーは12人。州立大学所属者も私立大学所属者もあった。

1951年 Akron, Denison, Kenyon, Oberlin, Ohio Wesleyan, Wooster大学の図書館員が集まって、図書館に関する研究会をつくる。

1952年 相互貸借に関する委員会が組織された。Ohio Library Association(OLA)という名称であった。委員会の論議の中心は雑誌のユニオンリスト、単行書の保管所、貸出サービスの3点について集中した。

1953年 OLAとOCAは合同委員会を設置し、協同で企画を進めていくことを決定。スポンサーに企画書を提出した。しかし、この企画書はあまり重んじられなかった。

1957年 合同委員会の副議長 J. H. Lancaster(Ohio Wesleyan)は、州立図書館のWalter Brahmに500ドルの援助を求める手紙をかいた。それは、それぞれ個々の図書館で持つべき共通の資料を協同で得ること、大学図書館で、検索の専門家を雇うサービスの為の費用だった。またこういった計画をすべて含んだオハイオの学術図書館を作る企画ができた。

1960年 John Nicholsonが合同委員会の委員長に任命された。その後6年間彼が委員長を務めた。その時、基本として強調されたのはユニオンカタログを作ることであった。

1962年 OCAはOhio州の学術図書館のいくつかの企画を成功させる為に1万ドルをその独自の基金として使うことを決意した。Wyman Parker(Wesleyan Universityの図書館員)はOhio州の図書館を回って質問をし、それをまとめて4つの勧告をした。その4つの勧告とは、1. Ohio College Association によって情報センターに相互貸借を行う場所を獲得すること。2. 大きな大学の側に別の情報センターの建物を作ること。3. できるだけ早く、マイクロプリントなどの中心的な資料を集める計画を始めること。4. センターの所長と職員をなるべく早く集めることであった。

1963年 OCAは、Parkerのレポートを認め、合同委員会は、目的が達せられたので解散した。OCAはParkerのレポートを基にさらに会合を持った。

1965年 OCAでは会合の中で、意見が対立するようになり、外部からOCA に対して、専門的意見を持つ人間を呼んで会合を開くようにした。その時呼ばれたのが、University Missouriの図書館長である Ralph H. ParkerとYale Universityの副館長であるFlederick G. Kilgourであった。Kilgourらは、「地域協同電算化ネットワーク」の設立を提案した。これは、集中電算化ファイルを使った共同分担目録システムにより、目録の重複的作成を減少させ、オハイオ州のカレッジの総合目録を形成することであった。

1967年 これらの勧告に従ってOCLC (Ohio College library Center)が設立され、Kilgourがその所長になった。

参考文献

- 1) 池田秀人 : アメリカ合衆国における図書館自動化システム. 東京, 紀伊国屋書店, 1984.
- 2) 猪瀬博ほか: 学術情報システムと大学図書館. 紀伊国屋書店, 1988.
- 3) Brancomb, L.C. and Rogeers, A.R. : The Conception and birth pangs of OCLC-an account of the struggles of the formative year. College and Research Libraries, 42(4):303-307, 1984.

60年代の政府政策と学術図書館

大村 伸栄

1. アメリカの政府政策

1960年代、アメリカの学術図書館は混乱を究めた。それは1957年スプートニクショックに始まる。政府は、宇宙開発競争の遅れによるあせりから科学技術の開発に力を入れ、その基礎となる教育政策にも力を入れ出す。

この時期の教育に関する主な法律として、

- Higher Education Facilities Act of 1963
- Higher Education Act of 1965
- Library Services and Construction Act of 1964
- Elementary and Secondary Education Act of 1965
- Medical Library Assistance Act of 1965

などがあげられる。

今回は、Higher Education Facilities Act と Higher Education Act の2法にしぼり、この政策が図書館に与えた影響について考えてみたい。

2. 政府政策とその影響

Higher Education Facilities Act of 1963 (高等教育施設法)は1963年12月16日制定される。この法律の目的は、1. 高等教育機関に対する補助金の交付や、貸し付け金の提供を通じて、学生数の急増に対処すること、2. 高まりつつある人材需要を満たすこと、である。¹⁾ 1960年には約 358万人だった高等教育機関の登録者数が、1970年には倍の約 792万人に増加している(表1)。政府はこの状態を見越して解決策として施設に対する補助金を支給した。補助金の交付期間は5年間で、コミュニティ・カレッジと技術専門学校の場合は施設の新築・増築に要する経費の40パーセントが、また公立・私立の4年制大学及び私立の2年制大学の場合は、自然科学、数学、現代外国語、工学を対象とする教育研究施設及び図書館の建設にあてる場合のみ補助金が交付された。

(「Medical Library Assistance Act」による補助金交付の対象となる医学部施設は、援助の対象から除外されている。)

この法律の結果として、1967年から1969年の間に210の図書館の増改築がおこなわれ、かかった費用は約43,600万ドルにのぼる。学部図書館の建設をおこなった大学はテキサス大やスタ

表1. 高等教育機関一登録者総数
(アメリカ歴史統計より)

年	人数(単位 千人)	対18-24才 人口比(%)
1950	2,281	14.2
1954	2,446	16.2
1957	3,226	21.2
1960	3,583	22.2
1962	4,175	23.6
1964	4,950	26.3
1966	5,928	27.7
1968	6,928	30.3
1970	7,920	32.1

ンフォード大など7大学、中央図書館の改築をおこなったコーネル大、UCLA、エモリー大など、またペンシルバニア大、ボストン大、ピッツバーグ大などは新しい中央図書館や大学院の図書館を新築した。

蔵書冊数もそれに応じて増加し、1960年初めには大学図書館の蔵書冊数は17,600万冊だったものが、1969年には32,400万冊にも膨れ上がった。²⁾

Higher Education Act of 1965 (高等教育法) は1965年11月8日制定される。第1章 大学の行う社会奉仕活動と成人教育活動に対する援助、第2章 大学図書館の拡充および図書館職員の養成、第3章 「発展途上の大学」の強化、第4章 学生に対する援助、第5章 初等・中等学校教員に関する事業、第6章 大学の設備拡充を目的とする財政援助、第7章 高等教育施設法の一部修正、第8章 雑則、からなる。

図書館に関する第2章では図書館資料(単行本、定期刊行物、その他の印刷物、マグネチック・テープ、レコード等)の購入に対する補助金として、1965/66 会計年度5000万ドル、1966/67 会計年度5000万ドル、1967/68 会計年度5000万ドルを、(1) 基本補助金、(2) 副補助金、(3) 特殊目的補助金、の3つにわけて支給することを決定した。³⁾

その結果1960年に100万冊の蔵書を持つ図書館は全国でも2校でしかなかったが、1969年には10の図書館で100万冊を越えることになった。⁴⁾ なお1986年、日本では11大学のみが100万冊をこえる蔵書を持つことをみても、いかに援助が大きかったかがわかると思う。

しかし、この援助も1960年代半ば以降になって縮小傾向を示すようになってきた。合衆国のベトナム戦争への本格的な介入による情勢不安によって、図書館・情報分野に対する援助が段階的に縮小されてきている(表2)。

表2. 高等教育機関—経常支出 [単位：百万ドル]
(アメリカ歴史統計より)

年	教育支出	図書館の支出	教育支出における 図書館支出(%)
1960	4,513	135	3.0
1962	5,768	177	3.1
1964	7,425	237	3.2
1966	9,951	346	3.5
1968	13,190	493	3.7
1969	13,835	572	4.1
1970	15,789	653	4.1
1975	27,548	1,002	3.6
1980	44,543	1,624	3.6

3. 図書館の機械化

また1960年代はコンピュータの時代であった。図書館も時代の波をかぶり、機械化への道を歩きだしていた。1960年以前の図書館の機械化は、マイクロフィルムやコピーサービスなどの技術であって、図書館員はそれにおびえることなく、黙々と機械を使いこなしていたが、コンピュータは図書館員に考える暇を与えないほど急速にひろまっていった。

1961年には米国議会図書館(Library of Congress)が、MARC (MACHine Readable Catalog)のフォーマットを試作し、1966年にMARCフォーマットによる目録データの配布が試験的に16の図書館に対して行われている。

1967年にはオハイオ州の54大学図書館が協力して、コロバスに非営利団体として地域センター(Ohio college library center)を設立し、コンピュータ処理を一括して行わせようとしていた。これが現在のOCLCの起源である。

またRLIN (Research Library Information Network) は、1967年スタンフォード大学のコンピュータセンターで開発された情報検索システムSPIRESを使って実現されたBALLOTSがその原型である。

MARCの配布サービス、Library of Congress とNational Library of Medicine and Agriculture による機械可読目録情報、逐次刊行物の所在情報などが60年代にうみだされている。

しかしまた、図書館はコンピュータによってふりまわされてもいた。図書館がコンピュータのコンソールとプリンターにとってかわられるだろうという不安、保守的な図書館員の反発、スピードはあがったが、それにかかるコストの問題。機械化をおこなううえで、解決すべき問題は山積みとなって残されていた。

4. 繁栄と衰退

このような変化に富む1960年代の学術図書館であるが、1960年代後半からの学生運動にまきこまれ、施設の破壊や閉館を迫られ、そして学生への懐柔策として様々なプランを大学側から要求されたりしている(開館時間の延長や図書館評議会など)。また1960年代後半からの社会情勢の変化に伴い、援助も削減され、1960年以前のような落ち着いた状態へともどっていく。繁栄から衰退へ、しかし各種の援助による建物と書物は残り、コンピュータも残った。1960年代は現在へと続く図書館の基礎が出来上がった時代といっても良いだろう。

図書館員の専門性もこの時代から盛んに討議されるようになった。1960年代以前には、ライブラリースクールを卒業しただけで、すぐに図書館員になれたが、この1960年代を境に膨れ上がった資料の山から必要な知識を求めることの出来る図書館員が要求されるようになった。なお、Higher Education Actは図書館職員の養成もうたっている。

1960年代の学術図書館を調べるにつれ、私には現在の日本の図書館界とだぶって見えるところが多かった。大学の乱立、図書館の機械化、図書館員の専門性、など1980年代の日本はまさに、アメリカの20年前を追いかけけているといってもいい。そして、1990年の日本の図書館を知るためには1970年代のアメリカを勉強する必要があることを感じた。歴史はまさに繰り返すのである。

引用文献

- 1)新井都男他：世界教育事典 資料編，増補改訂，東京，ぎょうせい，1980.
- 2)Lyle, G.R. : Reflections on academic libraries in the United States in the sixties. Library and Information Science, 9 :153-160, 1971.
- 3)新井都男他：同上
- 4)Lyle, G.R. : ibid.

参考文献

- 1)アメリカ合衆国商務省：アメリカ歴史統計 1, (高藤真等訳)，東京，原書房，1986.
- 2)福田都代：アメリカ合衆国における図書館・情報活動に対する研究援助の歴史的展開 (1957-1979年)，ドクメンテーション研究, 31(7):265-277, 1981.
- 3)世界教育史研究会：世界教育史体系 18(アメリカ教育史 2)，東京，講談社，1977.
- 4)日本図書館協会図書館年鑑編集委員会：図書館年鑑 1987，東京，日本図書館協会，1987.
- 5)池田秀人：アメリカ合衆国における図書館自動化システム，東京，紀伊国屋書店，1984.
- 6)牧野泰子：アメリカにおける大学図書館員の専門職化運動の行方，大学図書館研究, 25:32-38, 1984.

Medical Library Associationの 継続教育コースと ライブラリアンシップ

牛沢 典子

<はじめに>

第5回図書館情報サービス研究大会(1988 東京)において、図書館員の継続教育コースを企画することになり、その参考のため、筆者は米国医学図書館協会(Medical Library Association 以下MLA)で行なわれている継続教育(continuing education)コースについて調べた。その内容や実施状況をさかのぼってみていくにつれて、継続教育がMLAの他の活動と密接な関係があり、それらがMLAの職能団体としてのライブラリアンシップを確立する大きな力となっていることがわかったので報告したい。

<継続教育の概要>

MLAは、その会員の図書館員としての能力を向上させるために、資格認定や教育、奨学金の授与などの活動を行なっている。そのひとつとしての継続教育は、1964年の年次総会においてはじめて開設された。小規模な病院図書室で働く司書にも中規模以上の図書館での知識や技術を伝えることが最初の目的であった。最初は2コースで始まったものが徐々に拡張され、1988年で延べ90コースを越えた。

この継続教育コースは、MLAの年次総会や地域別の会議などに伴って開設される。たとえば、1987年の年次総会(Portland, Oregon)では会期中に19コースが設けられた。すべて8:30a.m.-17:00p.m.の一日コース、受講料は1コースにつき\$90である。講師はヘルスサイエンス図書館やデータベース提供機関などで働く専門家が担当している。

コースの内容は、大きく分けると次のようなものがある。

- ・ヘルスサイエンス一般または特定主題(薬学、腫瘍学、看護学、精神衛生学、獣医学、歯科学など)の語彙、参考資料、オンラインを使った検索
- ・資料の受入、目録、分類などの技術
- ・主題別・受講生の能力別のオンライン検索
- ・コンピューターの使い方とヘルスサイエンス図書館への応用
- ・ヘルスサイエンス図書館の管理運営
- ・その他(職場の人間関係、ニュース・レターの編集など)

<継続教育と出版活動>

もともと継続教育を始めるにあたって、MLAが出版した最初の単行書である“Handbook of Medical Library Practice”を使った2時間ずつの12のリフレッシャー・コースが、1958年の年次総会に伴い試みに設けられた。それが好評だったので、正式にコースを企画することが決定された。継続教育コースがスタートしてからも、受講した内容を仕事に反映できるよう、必ずテキストを用意している。その中のいくつかはMLAの出版物と

なっている。たとえば、CE 111 “ヘルスサイエンスの参考資料入門” のテキストとして “Introduction to Reference Sources in the Health Sciences (by Fred W Roper and Jo Anne Boorkman, 2nd ed., 1984)”、CE 114 “オンライン検索の必須事項 --有能なMEDLINEサーチャーとなるために--” のテキストとして “MEDLINE : A Basic Guide to Searching (by Susan J Feingros 1985)” が使われている。

<継続教育と資格認定 certification>

MLAではヘルスサイエンス図書館員としての資格認定・および再認定を行なっている。この制度は1949年にスタートし、1984年までに3,000人以上が認定された。その規約(1978年1月施行, 1981年9月改正)によれば、認定の条件は下記の通りである。

認定 (certification)

- (a) American Library Association 認可のライブラリースクールを卒業していること(つまり、個々の専攻する学部を終えたあと、大学院レベルの図書館情報学課程を終了していること)

かつ

- (b) MLAの実施する認定試験に合格すること

かつ

- (c) 過去10年間のうち2年以上、常勤のヘルスサイエンス図書館員として働いた経験のあること

再認定 (recertification)

- (a) MLAの実施する継続教育の履修

または

- (b) 最近の認定試験に合格すること

認定をうけたあとは、5年毎に再認定を受けなければならない。

この中の認定試験とは、サービス public service(閲覧, 参考業務, 相互貸借, 利用者教育など)、技術 technical service (資料の選択・受け入れ, 目録, 分類など)、管理運営 administration の3分野について必要知識が試されるものである。

この認定を受けることは、ヘルスサイエンス図書館で働くための絶対条件ではない。しかし、よりよいポストを得るために有利であることは、MLA News の求人欄から読み取ることができる。

ところで、規約によれば、継続教育コースを受講するのは再認定を受ける人たち、つまり、ヘルスサイエンス図書館員となって少なくとも3年以上の人たちである。このことから、コースの内容は全くの初心者向けではないことがわかった。

<MLA継続教育の創始期1960年代>

われわれ学術雑誌塾のテーマである1960年代は、MLAの継続教育コースにとっては創始期にあたっている。このコースを企画・開発し、運営を軌道に乗せるための様々な模索

が重ねられていた。

継続教育を運営している継続教育委員会は、Dr. Estelle Broadmanを委員長として1962年に設立された。ここでは、継続教育のための2年にわたる調査・研究が行なわれ、3rd International Congress on Medical Librarianshipにおいて委員会による最初の勧告書を示している。その中では、1. 年を追って引き継がれる段階別のコース、2. コースの内容の標準化、3. 地方在住・若い会員のための巡回教室が提案された。

また、1964年の第1回のコース開設にあたっては、下記の2点を打ち出した。

- ・テキストを前以て必ず用意すること
- ・講師の基準として OMLAの会員であること
 - データ処理の機器使用の正式な訓練を受けていること
 - 教育能力があること

このようにして継続教育コースは始められた。コースが拡大されるにつれ、委員会の役割も、コースの場所と日時の設定、講師の獲得、テキストの用意、参加者の登録、コースの評価、新しいコースの企画、講師への講義料の支払いと大変な仕事量になっている。そして、ようやく1972年、常勤のDirector of Educationの職が設置された。

また、認定規約の適用と関連して下記のような継続教育コースの拡大を図った。

- ・最新知識を求めている人や認定試験の準備をしている人の要求に応えるため、広い選択範囲を持たせる。
- ・初級、中級、上級の段階別コースの開発。図書館技術員のためのコースも導入する。
- ・セミナー、講演といったトピック的なコースの開発
- ・AV機器やコンピューター機器を使った個別指導を含む、変化に富んだコースにする
- ・国内で、もっと地域的にコースを提供すること。
- ・講師の拡充
- ・コースの開発や実施に、図書館教育者やライブラリースクールに協力してもらう。

以上のように、1960年代の手探りの時期に、継続教育は資格認定や出版活動と補い合っ
て会員の能力を高めるものとして位置付けられた。この後の継続教育が安定した活動を
続けているのは、その明確な方針に従って活動を進めてきたからだろう。

<私的ライブラリアンシップ論とまとめ>

「自分自身、または、自分を含む集団を

ライブラリアンという専門家として同定(identify)すること」

これが、図書館に就職して3年の私が定義するライブラリアンシップである。同定するためには、ライブラリアンというものの属性を知り、それを獲得しなければならない。その属性とは、医学図書館員である我々の場合、医学に関連する資料とその管理や利用者への提供、情報の流通機構の中での図書館の役割などを知ることだろう。特に、新しいメディアの出現によって学術情報の流通機構そのものが刻々と変化する今日、変化をうまく利用することが期待される。しかし、そのために図書館員が知るべきことは非常に多いので、混乱して知ることを諦めてしまう人もあるかもしれない。また、個々の図書館員の努力で網羅的な知識を獲得するのは並大抵のことではない。そこで、同じ目的で働く専門家の集

団の中で自分達に必要な知識を抽出し、それを集団全体が獲得する援助をするのが職能集団のあるべき姿だと私は思う。

このように考えると、MLAは医学図書館員に必要な属性を分析して継続教育や出版活動の形で示し、その属性を獲得した結果である資格認定によって、会員個々のライブラリアンシップはもちろん、職能集団としてのMLAそのもののライブラリアンシップを確立していると言える。また、そうすることによって社会の中での自らの能力と責任を明らかにしている。

以上、ライブラリアンシップを確立する継続教育の礎を築いた1960年代は、アメリカの医学図書館界を知るうえで興味深い時代である。

	'64	'65	'66	'67	'68	'69	'70
CE 1 図書館員のための基礎パンチカード原理	*	*	*				
CE 2 医学図書館における機械の利用	*		*	*			*
CE 3 システム分析・デザインの技術		*	*	*		*	
CE 4 一般生物医学参考資料		*	*		*	*	*
CE 5 図書館運営の人的要素			*	*		*	*
CE 6 入門 コンピューターとプログラミング					*		*
CE 7 管理運営のための量的基準					*		*
CE 8 歯科学文献レビュー				*	*		*
CE 9 Health Scienceの歴史資料					*	*	
CE 10 薬と薬理の情報源					*	*	
CE 11 相互貸借の技術				*	*	*	
CE 12 上級生物医学参考資料						*	
コース数	2	3	5	5	7	7	6
受講者数	198	250	232	178	293	267	201

1960年代に実施されたMLA継続教育コースと受講者数

REFERENCES

- 1) Roper,FW.: MLA continuing education activities,1964-1974: a decade of growth and development.Bull.Med.Libr.Assoc.,63(2):180-185, 1975.
- 2) Mayfield,MK.Palmer,RA.:Organizational change in the medical library association:evolution of the continuing education program.Bull.Med.Libr.Assoc.75(4): 326-332, 1987.
- 3) Preliminary Program for the 87th Annual Meeting of the Medical Library Association, Portland, Oregon, May 15-21, 1987. 14-21.

スプートニク・ショックと

60年代初期米国科学情報の状況

宮内 洋一

1. スプートニク1号打ち上げとその衝撃

1957年10月4日、ソ連はスプートニク1号という世界初の人工衛星打ち上げに成功した。この事件は、第二次世界大戦以降から1950年代にかけて、“パックス・アメリカナ”から“冷戦”へと変化はあったものの、常に世界のNO. 1として君臨してきたアメリカに大きなショックを与え、アメリカ国民はもちろん議会や政府までもがパニックに陥るほどの影響を及ぼした。

当時上院民主党院内総務だったリンドン・ジョンソンは、議会において“ローマ帝国は世界を支配した。なぜか？ 道路を建設する力があったからである。のちに大英帝国が世界を支配した。なぜか？ 船を持っていたからである。空の時代になり、我々が力を得た。飛行機があったからである。ところが今、共産主義者が大気圏外にその足場を築いたのである。”と発言している。

1961年、ジョン・F・ケネディが大統領に就任すると、ニューフロンティアのスローガンのもと、閣僚にハーバード大学やMITを中心とする学者を登用、知性の政治を打ち出した。同年、すでに有人衛星の打ち上げにおいても遅れをとってからは、科学技術の振興こそ国家の緊急事項と考えていた。

全ての前線において、ソ連に追いつけ、追い越せという感情がアメリカ全体を支配していた。現在の科学技術の遅れを打開するにはどうすべきか？ 従来の科学技術政策に対する徹底的な反省が行われ、1958年以降科学技術及び技術情報について政府が真剣に手を入れ始めたのである。

2. アメリカ政府と議会の情報技術促進への対処

1958年12月大統領科学諮問委員会 (President's Science Advisory Committee : PSAC) よりいわゆるBakerレポートが提出された (PSACは1951年トルーマン大統領により承認され、1957年より正式に活動を開始していた。委員長のWilliam O. Bakerは当時ベル電話研究所副所長)。このレポートは2部から成り、1つは「アメリカ科学の強化」、もう1つは、「アメリカにおける科学情報の普及と改善」と題するものであった。前者はアメリカ政府が科学技術情報のために、今後情報サービスをいかに強化していくのか？ その方策として政府がつくるべき機関、制度、援助、手段等について論ぜられている。後者はソ連のVINITI (全ソ科学技術情報研究所) を中心とする情報サービスの現状とアメリカの情報サービスとを比較して、アメリカでは現存する情報サービスを改善強化するほうが望ましいと報告している。

同じ年、National Defense Education Act も成立しており、その中において国立科学財団 (National Science Foundation : NSF) に情報活動の援助基盤を設置する事が提案されていた。アイゼンハワー大統領はこれらの勧告等に基づき、NSF に科学情報活動の調整機能をもたせる方針を打ち出し、NSF 内に科学情報サービス局 (Office of Science Information Service : OSIS) が設置された。また、OSIS の諮問機関として科学情報評議会 (Science Information Council : SIC) も設けられた。これらが後のアメリカの科学情報活動の基盤となっていった。

Baker レポートに続いて、1962 年大統領科学顧問 Jerome Wiesner は James H Crawford を委員長とする特別調査委員会を結成、アメリカ政府内の記録情報の流れを調査させ報告書を提出させた。この Crawford レポートは、政府関係の研究開発機関に対して技術情報活動を監督調整する人員や機関を設置するように勧告している。

1963 年 1 月 オークリッジ原子力研究所所長の Alvin M. Weinberg を委員長とする P S A C パネルより、“科学、政府、情報 (Science, Government and Information)” という画期的なレポートが提出された。このレポートは “情報の伝達は研究、開発の一部であり、研究開発に携わる全ての科学者、技術者、研究所、学協会、政府機関は研究開発それ自体に負っている責務と同様に、また同程度の意欲を持って情報伝達に対する責務を果たさねばならない。” といった一貫した視点のもとに “科学技術に関する情報がどのように発生し、蓄積され、検索され、要約されるかという情報流通の課程自体の検討” を行っている。このレポートに於ける主な勧告を以下に列挙する。

A. 科学技術界への勧告

- 1) 科学技術界は、技術情報の取扱いが科学にとって価値ある必須部分であることを認識しなければならない。
- 2) すべての著者は刊行されたものの検索について、一層の責任を負わなければならない。
 - a) 簡潔で報知的な表題の付与
 - b) Standard Thesaurus からのキーワード付与
 - c) 報知的抄録の付与
 - d) 不必要な発表を避ける
- 3) 情報取扱い技術が広く教育されねばならない。
- 4) 科学技術界は新しい中継法を探求し、開発しなければならない。
 - a) 専門情報センター
 - b) 中央寄託所 (デポジトリセンター)
 - c) 機械による情報処理
 - d) ソフトウェアの開発
- 5) 方法の統一性と互換性が望ましい。

B. 政府諸機関への勧告

- 1) 科学、技術に関する政府機関は、各々その責務の関連分野における情報活動に責任を持たねばならない。またこれらの機関は、その有する人材その他の機能の相当部分を情報活動の援助にさかねばならない。

- 2) この広範な科学技術の責任を果たすために、各政府機関は「管理手段」の一部ではなく「研究手段」の一部としての情報活動に高い責任をもつ視点を設定しなければならない。
- 3) 政府情報流通システムの全ネットワークは、連邦科学技術評議会の監督下におかれねばならない。
- 4) 政府及び政府外の各種情報流通システムは、技術情報交換所、OTS (Office of Science and Technology)、国立技術情報レファレンスセンターのような情報クリアリングハウスに連結されなければならない。
- 5) 政府諸機関は、各々その内部システムを効率のよい運営状態に維持しなければならない。
- 6) PSACは、科学情報の諸問題に不断の注意を払わねばならない。

さらに先見性に富んだこのレポートは、科学の本質について“科学は分割することのできないもの”であるとし、将来の科学技術の進展と情報流通とをからめて“時と共に狭い領域へと研究の追求が進めば、ますます異なった分野の文献への効率的な接触が必要となる。”と述べている。また、学術雑誌については、“自己批判制度による長い伝統をもっていることなど、存在自体が、科学、特に基礎科学の水準及びその正しさの維持に役立っている。”としている。この勧告を受けて、アメリカ政府機関は、専門情報センター設立に力を注ぎ、120余りのセンター設立に援助を施した。これは科学情報の統合、ひいては科学の統合性の確保を政府の責務として行動した現れであった。

これら3つの勧告は、その後のアメリカ情報活動を活気づけ、1964年から1965年の間の数種の図書館法の成立、CAS, NLM等の磁気テープによるデータサービス、DIALOG, ORBIT, MARC、などの開発へと結びついていった。

3. おわりに

スプートニクが打ち上がった年、わたしはまだこの世に生を授かっていなかった。それから11年と数カ月後、ケネディ大統領の約束通りアポロ11号が月に着陸した。テレビでみる月着陸の様子は妙にもったいぶった感じで、アームストロング船長がステップにしがみついたまま終わってしまうのではないかと思えるほどだった。

船長は言う“この一歩は小さな一歩だが、人類にとっては大きな躍進となろう。”と。

アームストロング船長の教訓めいた言い方は、人類初の宇宙飛行士となったガガーリンの第一声、“地球は青かった。”や、女性初の宇宙飛行士テレシコワの“わたしはカモメ”の様なおおらかさが感じられなかった。

当時あれほど騒がれたアポロ計画も、17号まで続いて12人ももの飛行士が月に降り立ったことなど、正確に覚えている人はほとんどいないことだろう。そして、あの頃より月が遠くなった様に感じられる昨今である。

参考文献

- 1) 篠原登：科学技術振興の基調. JICST, 6(1):4-9, 1963.
- 2) 中井浩：科学、政府、および情報—米国大統領科学諮問委員会の報告書をめぐって. 情報管理, 6(10):30-36, 1963.
- 3) 中井浩：米国における情報政策とその社会的背景. Library and Information Science, 14:15-22, 1976.
- 4) 田村晃児：アメリカ連邦政府の科学技術情報政策の反省と課題（Ⅰ）—NSFの活動を中心にして. 情報管理, 19(10):748-759, 1977.
- 5) 田村晃児：アメリカ連邦政府の科学技術情報政策の反省と課題（Ⅱ）—議会での議論および新しい動き. 情報管理, 19(11):827-839, 1977.
- 6) 福田都代：アメリカ合衆国における図書館・情報活動に対する研究援助の歴史的展開(1957-1979). ドクメンテーション研究, 31(7):265-277, 1981.
- 7) 日本ドクメンテーション協会：NIPDOCシリーズ 1, 科学と政府と情報—米国政府に対するワインバーグ報告—. 東京, 日本ドクメンテーション協会, 1966.
- 8) 日本ドクメンテーション協会：NIPDOCシリーズ 12, NISTとその周辺—科学技術会議の答申を中心として—. 東京, 日本ドクメンテーション協会, 1970.

1960年代における米国の医学教育改革 — Millis Reportは“何を”変えたのか—

会田 真由美

はじめに

米国の医科大学教育の教育方針、管理運営機構が他欧州諸国およびわが国の医学教育に与えた影響は大きい。本論文では米国における近年の医学教育制度改革をふりかえり、米国医科大学の卒業教育に転機をもたらした“Millis Report”に焦点をあて、現在までの米国医科大学教育の流れをカリキュラム改革を中心に追ってみる。

I. 近年における米国医学教育制度改革の歴史

1. 営利主義の医学校の乱立と Flexner 報告

19世紀後半から20世紀前半にかけて、米国では営利主義の低級な医学校が100校以上設立され、十分な教育もトレーニングも受けていない医師が激増した。

このような時代に、Carnegie 財団の支援を得てアメリカとカナダの医学校を歴訪した Abraham Flexner は、両国の医学校の大部分が商業主義的観点から運営され何ら教育的規制が存在していないことを指摘し、質の悪い医学校は廃校にして、医学校の再編成をすべきであると提示した。これがいわゆる Flexner Report である。

その後再編成された米国医師会(American Medical Association; 以下AMAと略す)と米国医科大学協会(Association of American Medical Colleges; AAMC)の強力な活動が始まり、基礎医学科目の充実や附属病院を活用した臨床教育の充実など、今日の米国医学教育の基本となる様々な改革が行なわれた²⁾。

2. Case Western Reserve 大学の改革の試み

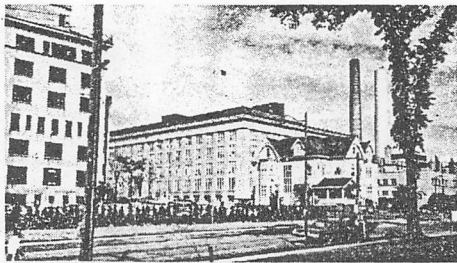


図1 Case Western Reserve 大学

Flexner について、米国の卒前医学教育の改革に大きな影響を与えたのは、1952年に開始された Case Western Reserve 大学(図1. Ohio 州北東部の Cleveland にある。1968年に Western Reserve 大学と Case 工科大学が合併して名称も Case Western Reserve 大学となった)での新しい試みである。当時この大学で唱えられていた医学教育の

構想として①Self Education と②Interdepartmental Teaching(あるいはCorrelated Teaching)があげられる³⁾。Self Educationとは、教員が学生に対して単なる知識の“うけうり”をするのではなく問題解決をなす能力を養うことで、Interdepartmental Teachingとは、一つのSubject、たとえば Cell Biology に対し、組織学、細菌学、遺伝学など関係する分野の科目を、協力して関連づけ教育することである。こうした Case Western Reserve大学の教育改革で、他医科大学のカリキュラムにもとり入れた具体的な改革案として、以下のことがあげられる³⁾。

a. Core Curriculum と Elective 課程

必修学科課程(Core Course)のほかに自分の好きな科目を選んで受講す

る選択学科課程(Elective Course)を設ける。

b. 関連、総合教育(Correlated and Integrated Program)

c. Free Time

週2日午後全部と土曜全日を自由時間とし、各自研究的実験や講義の消化などに使わせる。

d. 1 学年生に対する臨床医学の紹介

e. 多目的実験室(Multidiscipline Laboratories)と学生の実習設備の充実

3. 卒後教育の必要性の高まりと Millis 報告

Case Western Reserve 大学においてカリキュラムの大幅な改革が行なわれ、その影響が少しずつ他医科大学にも及びはじめた1960年代は、全世界で医学知識や医療技術が飛躍的に進歩をとげた時代であった。こうした医学医療の進歩で、各科の専門分化が進み、もはや医科大学の4年間の教育(米国ではカレッジ卒を前提としていたため医科大学教育は6年ではなく4年)では十分な知識と経験を持った医師を養成

することができなくなった。そこで医科大学卒業後の教育の重要性が高まってきた。そこで、AMAは当時の Western Reserve 大学総長 John S. Millis を委員長とする11人よりなる委員会を發足させ、この委員会は3年間にわたる調査・討論の末、1966年8月、医学卒後教育について種々の Recommendation (勧告)を行なう報告書を作成した。これが Millis Report(図2)⁹⁾である。

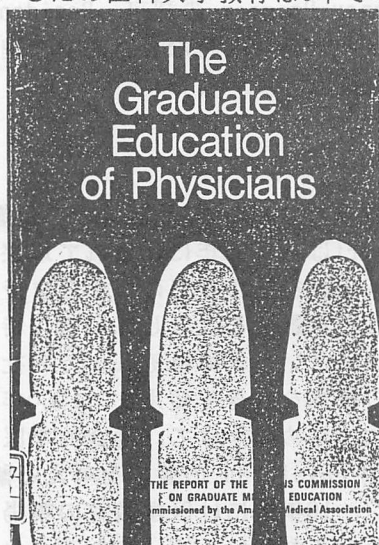


図2 Millis Report⁹⁾

II. Millis Report

1. 構成委員の特色

Millis委員長率いるこの委員会の特色は、何と云ってもその構成委員にある。11名のうち医師が3名のみで、他の8名は委員長のMillis博士も含めて医学外の人で、社会学教授、前米国医師会会長、前最高裁判所判事、会社社長などである。このよ

うな構成から、この委員会は Citizens Commission on Graduate Medical Education (傍線著者)と命名された。つまり、医学とは直接関係のない一般の人々を委員会に参入させることによって、医学にとらわれない広い視野から医学教育をとらえていこうという主旨をもった委員会であった。

2. Millis 委員会による勧告

Millis Reportは、Introduction の部分で最近の米国医学の傾向を概観した後、以下のような5つの勧告をしている。

(1) 総合的医療を行なう Primary Physicianの養成

Primary Physicianとは、高度な総合的医療を行ないうる医師で、特に内科の修練をつんだ上で自分の専門分野の修練を受けた医師のことである。患者が“まず最初に”訪れる医師、患者と最初に接触する医師という意味で、“Primary” Physician と名づけられた。患者の家族や患者の生活する地域

についての十分な掌握と、医学の広域に渡る深い知識が要求される。

(2) Intern制の廃止

医学の進歩にともない、Rotating Internshipの存在理由がなくなったので、Internshipを廃止し、直接 Residency(医科大学卒業後、大学の附属病院および関連病院で受ける臨床研修のこと。3年間内科の臨床教育のあとさらに2年以上の専門分科のトレーニングがある)の修練課程に進ませる。

(3) Basic Residency Program の開始

Internship の廃止にともない、専門分科にはいる前に一般内科または一般外科の修練課程として Basic Residency の課程を経るようにする。

(4) 医学・医療における大学の使命

大学は Medical Center として、教育・研究のみならず基礎医学の臨床医学への応用、優秀な医師の養成などを行なっていく義務がある。

(5) 卒後教育委員会(Commission on Graduate Medical Education)創設の提唱

今まで別々の機関で行なわれていた Residency Program の認可、Resident の採用、専門医の認定などを卒後教育委員会が一括して行なう。医学の進歩、社会の変化に合った卒後教育を検討し、改善していく。

III. Millis Report 以後の米国医科大学の変革

表1 CWRU医学部のカリキュラム¹²⁾

PHASE I	
Orientation	8 hours
Cell Biology	139 hours
Differentiated Cell	117 hours
Metabolism	113 hours
Cardiovascular-Pulmonary-Renal	151 hours
Tissue Injury and Disease	109 hours
Fundamentals of Therapeutic Agents	54 hours
Mechanisms of Infection	95 hours
Biostatistics	17 hours
Clinical Science	96 hours
PHASE II	
Musculoskeletal	98 hours
Reproductive Biology	84 hours
Nervous System	176 hours
Mind	72 hours
Respiratory	54 hours
Urinary Tract	86 hours
Cardiovascular	78 hours
Biostatistics-Integument-Legal Medicine	36 hours
Gastrointestinal	72 hours
Endocrine	52 hours
Hematology	68 hours
Clinical Science	120 hours*
*Includes hours Family Clinic Seminars	
PHASE III	
CORE CLINICAL PROGRAM (third year):	
Medicine	2 or 3 months*
Pediatrics	2 or 3 months*
Surgery	2 months
Obstetrics and Gynecology	2 months
Psychiatry	2 months
Vacation	1 month
ADVANCED PROGRAM (fourth year):	
Ambulatory Medicine	2 months
Options Program	7 months

1. 米国医学教育界における Millis Report の反響

この Millis Report は、1966年に出されて以来、1970年代そして1980年代後半の今日にいたるまで、米国医学教育界に大きな影響を及ぼしている。特に Primary Physician という名称はそれまでの社会における“医師”の概念を大きく変えた。1960年代後半から1970年代はじめにかけて、総合的な医療を行なう Primary Physician の養成を唱える論文が数多く出され^{5,6)}、10年後には医学教育の現場での実践的な評価がなされている^{7,8)}。また Rotating Internship を廃止して Resident に統合する基盤を作ったとして、1980年代の論文にも姿を見せている⁹⁾。

2. Millis Report 以後の米国医科大学の教育改革

Case Western Reserve 大学における1950-60年のカリキュラム改革および Millis Report がその後の米国医科大学教育にどう反映されているか、各医科大学のカリキュラムを見てみると、反映された点としては①Primary Physician 養成のための

卒前・卒後教育が行なわれるようになったこと②Intern が廃止され Residency 制度の統一・充実がはかられたこと③早期臨床体験が第1学年からカリキュラムに組み入れられたこと^{10,11)}などがあげられる。

反映されなかった点としては Case Western Reserve 大学における臓器系統別の統合(Integrated)カリキュラムがある。Case Western Reserve 大学では1学年(Phase I ; 表1参照)を除けばほぼ臓器系統別カリキュラムだが、他大学では基礎医学を学ぶ第1学年と第2学年は、各教科別に授業が行なわれている。これは、臓器系統別のカリキュラムが各教科の教師どうしの連絡を密にすることが要求されること、そしてそれは教師数が多くなると不可能であることなどが理由としてあげられる。

おわりに

1960年代は、他の分野と同じく米国医学教育においても現代の基盤が築き上げられた時代であった。医学教育の再検討が叫ばれている今日において、あの輝きにみちた60年代を振り返ってみることが、我々に与えられた医学教育に対する最も有効なアプローチの方法なのではないだろうか。

引用文献

- 1) 日本教育振興センター：米国の医学教育改革の動向—昭和60年度米国医学教育事情調査報告書—, 東京, 医学教育振興センター, 1987.
- 2) 七里元亮：WESTERN RESERVE 大学医学部の教育体制—Interdepartmental Teaching について—。日本臨床, 28(1):159-168, 1970.
- 3) 藤森聞一：欧米諸国の医学教育改革, 東京, 医歯薬出版, 1972.
- 4) Millis, J.S. et al.: The Graduate Education of Physicians. The Report of the Citizens Commission on Graduate Medical Education. Chicago, American Medical Association, 1966.
- 5) Gerber, A.: The Medical Manpower Shortage. J Med Educ, 42:306-319, 1967.
- 6) Pellegrino, E.D.: Planning for comprehensive and continuing care of patient through education. J Med Educ, 43:751-759, 1968.
- 7) Colwill, J.M.: Primary-care education in multiple specialties. N Eng J Med, 299(12):657-660, 1978.
- 8) Starfield, B.: Measuring the Attainment of Primary Care. J Med Educ, 54:361-369, 1979.
- 9) Graettinger, J.S.: The matching program. N Eng J Med, 304(19):1163-1165, 1981.
- 10) 吉田亮, 柿本泰男：医学教育の改善をめざして—アメリカ4大学医学部を視察して(第1報)—。医学教育, 16(6):449-458, 1985.
- 11) 亀谷忍：Case Western Reserve 大学医学部における医学教育—教育スタッフ・学生とのインタビュー—。医学教育, 13(6):423-426, 1982.
- 12) 亀谷忍：Case Western Reserve 大学医学部における医学教育—カリキュラム委員長とのインタビュー—。医学教育, 14(1):41-44, 1983.

「貧困との戦い」と「偉大な社会」の意味するところ： ジョンソン米大統領1964年と1965年の一般教書より

廣田 住友

現在、アメリカ合衆国（以下、単にアメリカ又は米国と書く）は巨額の貿易赤字、財政赤字、対外債務を抱え、経済的には国際競争力が弱まっている。他の分野、例えばスポーツ・文化の面でも過去のアメリカの地位は斜陽化し、パックス・アメリカナなるものは崩壊している。が、しかし、深夜番組のCNNニュースなどではアメリカで起こるどんな些細なことでも日本で報道されているのが現状である。一時期、NHKは夜11時台前後のニュース番組で各国のトップニュースを報道するプログラムをたてていたが、いつの間にかそれはなくなっている（ただし、最近、衛星放送でワールドニュースというものがあるようだが）。ということは、日米経済摩擦下ではあるが、日本は今、アメリカのことに凄く敏感でありもっと深くアメリカを知りたいと思い、いつかはアメリカは再生するだろうと願っていると思われる。

少し前の夕刊に次のような記事があった（資料①）。これは1987年1月28日に発表されたレーガン大統領の年頭恒例の一般教書である。レーガンは1987年は「卓越性の追求」というスローガンを掲げたのである。1980年、レーガンは「強いアメリカ」を主張し大統領選挙に勝ち、一期目はそれを実行しあらゆる面で強行姿勢を保った。が、しかし、それは膨大な軍事費を費やしたがために、財政破綻に拍車をかけ自国の経済力の弱体化を招き、現実的にはアメリカの国際競争力はついていないのに、二期目の後半になっても「強いアメリカ」を信じている。この一般教書で私の目を引いたのは「科学技術の振興」である。レーガンは「米国の競争力の基本は科学技術である」として科学技術、とりわけ基礎科学分野の振興方針を明確に打ち出したのである。

このように、米国大統領の一般教書はむこう一年間のアメリカ政府の政策方針を明らかにするものであるから、私は1963年に発表されたワインバーグレポートが、米国の情報政策の中で大統領（政府）のどのような方針で実行されていたのかを探るために過去に遡って、1960年代を中心に毎年の米国大統領の一般教書を調べることにした。

この時代のアメリカの状況は、ソ連が1957年8月26日大陸間弾道弾(ICBN)実験成功、同年10月4日人工衛星第一号スプートニクを打ち上げ成功で、「核の時代」の幕明けによる冷戦の時代とソ連の脅威により、科学技術の発展が叫ばれた時代であった。その国家政策の1つであった宇宙開発で言えば、ケネディ大統領のマキューリ計画からニクソン大統領のアポロ計画までである。それは第二次世界大戦後のアメリカの大繁栄がスプートニクショックにより崩れ、その遅れを取り戻そうとした時代である。当時、私はアポロ11号が月面着陸の衛星中継をテレビで見、新聞の第一面に月面上の宇宙船のカラー写真が大見出しで報道されていたのを鮮明に記憶している。よって、アメリカの60年代は凄くいい時代だったのだと思っていた。しかし、最近目にした現在のアメリカの状況を論説した論文では、次のように記してある。

「パックス・アメリカナ（アメリカによる世界秩序形成）」や「パックス・

ソビエティカ（ソ連による世界秩序形成）」の崩壊は、なにもいまに始まったことではない。それはすでに1962年の「キューバ危機」のころから顕現していた。あの時、米・ソ超大国は共滅の瀬戸際に立たされ、妥協した。つまり、両国は、自ら創出した「核の脅威」により、相互に排他的なエトス（民族精神）でもって世界秩序を形成するという野望を放擲（ほうてき）せざるを得なかったのである。ケネディ大統領は、「科学によって解放された暗黒の破壊力が、全人類を自滅に巻き込むまえに、東西双方で新しく平和への探求を始めようではないか」と訴えていた。—— 馬場伸也「パックス・ディプロマティカの時代へ」朝日新聞夕刊より引用——

これにより、アメリカの強さは1960年代初頭から崩れ始めていたことを知り、私は驚いた。というのは、小さい私（1962年生まれ）には冷戦及びベトナム戦争の泥沼戦は、アポロ11号ほどの衝撃はなかったのである。アメリカの抱えていた政治経済問題及び内政問題は理解しえなかったのであろう。

私が調べた教書の中には、ワインバーグレポートのみならず、他の政府の情報政策に関する記述も見当らなかつたが、1964年と1965年のジョンソン大統領の一般教書は、「貧困との戦い」（資料②）「偉大な社会」（資料③）というスローガンで、米国の内政問題を取り扱っていたのが目にとまった。というのは、それまでの教書にはあまり言及されていない内政問題が重要視されていたからである。なぜ、ジョンソン大統領は内政問題の解決を最重点に取り上げたのでしょうか。

ここで、「貧困との戦い」（資料②）と「偉大な社会」（資料③）について説明します。ジョンソン大統領は1964年1月8日に、彼にとって初めての年頭教書を議会に送ったのが一般教書「貧困との戦い」（資料②）で、その中で米国における貧困の追放を宣言した。その後、3月17日にこの問題に関する特別教書「貧困教書」を発表し、それと共にその具体的な法案として「1964年経済機会法案」を提出した。同法案は同年8月に議会で無修正で可決された。この経済機会法案は現在貧困の状態に陥っている者にはそこから脱却する機会を与え、将来貧困の状態に落ちるおそれのある者に対しては、それを未然に防ぐべき機会を与えることを目的としている。そして、この法案は次の五つの基本的な機会を与えるものである。①青年職業計画、②市町村との開発協力計画、③貧困戦争への任意参加制度、④労働者・農民援助計画、⑤貧困退治の統合本部としての経済機会局の設立。米国では「1935年社会保障法」が以前から制定されており社会保障の点では先進国であったが、しかし、連邦政府が国民の経済的保障を確保するという方向に進むことに対しては、常に根強い反対があった。その最も基本的な根拠は、たとえ経済的貧困の状態に陥ったとしても政府から給付を受けたのでは、個人の自由が制限され、また個人の尊厳が傷つけられるという考え方であった。

一方、1965年の一般教書「偉大な社会」（資料③）は、国際関係では米国が自由に対する侵略にあくまで戦うと同時に、共産圏との平和的理解を求めていく方針である。また、国内関係では「偉大な社会」建設の構想について詳細な提案をし、教育、貧困追放、保健、都市改造、減税など、かなり具体的な立法上の提案を行っている。このように1965年の一般教書もまた、詳報中の「国内関係」の「二、すべての人に機会を」に、「—— 老人のためには社会保障に基づいて医療施設を提供し、生活困窮者に対しては給付を増額す

ることによって。」とあることからわかる通り、内政政策に重点を置いている。このことが、具体的となったのが、1965年7月30日に制定された「高齢者健康保険制度 (Medicare)」である。これ以前には1935年に前出の社会保障法が成立し、1950年代から1960年代を通じてそれが改正され続け、そして1965年の高齢者健康保険制度に至った。

この「高齢者健康保険制度 (Medicare)」の依拠する基本原則として、つぎの三カ条があげられる。医師の開業や医療サービスの供給・運営などに連邦政府が介入するものではないこと (1801条)、患者による医療サービスの選択の自由を保障すること (1802条)、他の健康保険に加入するのは自由であること (1803条)。そして、この保険制度の仕組みは、高齢者病院保険と高齢者補足医療保険の二制度からなっている。前者が実質的に全高齢者に適用する最低の基礎給付であるのに対し、後者は任意加入の付加給付であり、前者による支払範囲をせまく限定し、医師の診療報酬の支払などは後者に組み入れて、医療制度の社会化への批判をかわずとともに、両制度とも管理主体を保健・教育・厚生省長官としているものの、給付したサービスに対する支払実務などに民間の健康保険業者などを利用している。よって、実質的には公私混合形態となっており、社会保険としては特色のある仕組みといえることができる。

アメリカの医療は自由診療制であったが、この高齢者健康保険法やその他の健康保険制度の成立に伴って連邦政府の介入が徐々に進んでいき、医師の力が弱まり行政に管理されていくのである。これを、契機にAMA (米国医師会) の力が弱まったと言われている。

1960年代のアメリカは、このように内政問題に関する法案を成立させなければならない時代だったのでしょう。しかし、政府が法案はつくったが結果として現実的にならなかった事の歪みが、1960年代末に生じ始めたのである。

最後に、ジョンソン大統領がいろんな問題を抱えそれらを解決しようとして政府の力を強めていった事の是非はどうあれ、彼の約5年間の新聞で報道された顔写真から感じたのは、だんだん窮地に追い込まれていく顔つきの険しさでした。それは、あたかも碁で形勢不利の時に碁盤を頭深く眺めるような表情です。

参考文献

- 1) 廣瀬輝夫：アメリカが大変だ！. 東京, 日本医療企画, 1987.
- 2) 織田五二七：医療の史的流れ. 日本医事新報, 3330:95-97, 1988.
- 3) 本間長世ほか著, アメリカ学会訳編：原典アメリカ史 第7巻. 東京, 岩波書店, 1982.

朝日新聞

1987年(昭和62年)1月29日 水曜日 36299号 (8頁)

国際競争力や科学技術 米は卓越性めざす

レーガン大統領が一般教書

エラン責任はすべて私 作

不正貿易には対抗 包括法案を議会提出へ



【ワシントン28日電】米大統領レーガンは28日、一般教書で、国際競争力や科学技術の面で米は卓越性をめざす。また、イランの核開発に責任を負うのはすべて私であると述べた。不正貿易には対抗するため、包括的な法案を議会に提出する意向を示した。

レーガン大統領は、一般教書の中で、米国の経済的強さを維持するために、科学技術と国際競争力を高める必要があると述べた。彼は、米国の教育制度を強化し、研究開発に力を入れるべきだと主張した。また、イランの核開発計画が国際社会の安全を脅かしているとして、その責任をすべて自分が負うと述べた。さらに、不正貿易が米国の貿易赤字を増大させていると指摘し、これを防ぐための包括的な法案を議会に提出する意向を示した。

レーガン大統領は、一般教書の中で、米国の経済的強さを維持するために、科学技術と国際競争力を高める必要があると述べた。彼は、米国の教育制度を強化し、研究開発に力を入れるべきだと主張した。また、イランの核開発計画が国際社会の安全を脅かしているとして、その責任をすべて自分が負うと述べた。さらに、不正貿易が米国の貿易赤字を増大させていると指摘し、これを防ぐための包括的な法案を議会に提出する意向を示した。

米大統領の一般教書要旨

「私は、この一般教書を通じて、米国の将来と、国際社会の安全について、あなたと話し合いたい。この教書は、米国の経済的強さを維持し、科学技術と国際競争力を高める必要があることを示している。また、イランの核開発計画が国際社会の安全を脅かしているとして、その責任をすべて自分が負うと述べた。さらに、不正貿易が米国の貿易赤字を増大させていると指摘し、これを防ぐための包括的な法案を議会に提出する意向を示した。」

レーガン大統領は、一般教書の中で、米国の経済的強さを維持するために、科学技術と国際競争力を高める必要があると述べた。彼は、米国の教育制度を強化し、研究開発に力を入れるべきだと主張した。また、イランの核開発計画が国際社会の安全を脅かしているとして、その責任をすべて自分が負うと述べた。さらに、不正貿易が米国の貿易赤字を増大させていると指摘し、これを防ぐための包括的な法案を議会に提出する意向を示した。

レーガン大統領は、一般教書の中で、米国の経済的強さを維持するために、科学技術と国際競争力を高める必要があると述べた。彼は、米国の教育制度を強化し、研究開発に力を入れるべきだと主張した。また、イランの核開発計画が国際社会の安全を脅かしているとして、その責任をすべて自分が負うと述べた。さらに、不正貿易が米国の貿易赤字を増大させていると指摘し、これを防ぐための包括的な法案を議会に提出する意向を示した。

朝日新聞
朝日新聞社
〒100 東京都千代田区西三丁目
電話 3141
B MISS NO. 1
日章
日本ノート

ジョンソン米大統領初の一般教書提出

「貧乏追放」を宣言

予算額、前年度下回る



ジョンソン米大統領

ワシントン24日午後11時電。米大統領ジョンソンは、24日午後11時、国会に一般教書を読み上げた。この教書は、米大統領が初めて提出した。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。

（3） 12版★ 昭和39年11月9日 木曜日

歴史と現在

「貧乏追放」を宣言したジョンソン米大統領は、この教書で、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。

米大統領の一般教書

「貧乏追放」を宣言したジョンソン米大統領は、この教書で、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。

貧乏追放を宣言

「貧乏追放」を宣言したジョンソン米大統領は、この教書で、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。

予算案は引

「貧乏追放」を宣言したジョンソン米大統領は、この教書で、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。



社会戯評

「貧乏追放」を宣言したジョンソン米大統領は、この教書で、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。

減税法案の早期成立

「貧乏追放」を宣言したジョンソン米大統領は、この教書で、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。

米安全保障

「貧乏追放」を宣言したジョンソン米大統領は、この教書で、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。

差別撤廃

「貧乏追放」を宣言したジョンソン米大統領は、この教書で、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。

道徳教育

「貧乏追放」を宣言したジョンソン米大統領は、この教書で、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。

平和を求めて

「貧乏追放」を宣言したジョンソン米大統領は、この教書で、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。

十億の提案

「貧乏追放」を宣言したジョンソン米大統領は、この教書で、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。

道徳教育

「貧乏追放」を宣言したジョンソン米大統領は、この教書で、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。

道徳教育

「貧乏追放」を宣言したジョンソン米大統領は、この教書で、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。教書は、貧乏追放を宣言し、1965年度の予算額を前年度より下回ると述べた。

11/11 11月11日 11月11日 11月11日

米大統領 一般教書を提出



年内に西欧
中国問題はふれず

【ワシントン4日電】ジョンソン米大統領は4日、一般教書を読み上げた。この演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。

朝日新聞

夕刊

自由民主党本部

東京 丸の内三丁目

電話 3-2111

金 500円

キヤンパイン

読者サービス部

〒100 丸の内三丁目

電話 3-2111

(3) 3版▲ 昭和40年1月5日 火曜日 第1011号

米大統領の一般教書

【ワシントン4日電】ジョンソン米大統領は4日、一般教書を読み上げた。この演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。

繁栄を維持する措置 投票権の障害は取除く

【ワシントン4日電】ジョンソン米大統領は4日、一般教書を読み上げた。この演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。

防犯に努力

【ワシントン4日電】ジョンソン米大統領は4日、一般教書を読み上げた。この演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。

公法防止の努力を強化

【ワシントン4日電】ジョンソン米大統領は4日、一般教書を読み上げた。この演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。

大蔵省が入国管理を厳格化する

【ワシントン4日電】ジョンソン米大統領は4日、一般教書を読み上げた。この演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。

入国管理を厳格化する

【ワシントン4日電】ジョンソン米大統領は4日、一般教書を読み上げた。この演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。

大蔵省が入国管理を厳格化する

【ワシントン4日電】ジョンソン米大統領は4日、一般教書を読み上げた。この演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。

入国管理を厳格化する

【ワシントン4日電】ジョンソン米大統領は4日、一般教書を読み上げた。この演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。演説は、国内政策を中心とし、中国問題についてはふれなかった。

アメリカン・ポップ・アートの隆盛

黒川 玲子

[現代美術とアメリカ]

第二次世界大戦を避けるためにシュールレアリストを中心とした多数の芸術家がアメリカに亡命したことが契機となり、その後のアメリカ美術は隆盛していく。それまであまり世界から注目されていなかったアメリカが、ヨーロッパの美術を乗り越える独自の美術を開花させたのである。そのころの形式は、「抽象表現主義」(Abstract Expressionism)と呼ばれ、米亡命後のカンディンスキーやポロックらの、烈しい筆跡をそのまま画面に生かした奔放で自由な表現様式をとる。

現代美術の特色として“反芸術”“反省的性格”ということがあげられる。あまりにも形式化し、細分化した美術そのものを根底から疑い、徹底した反省的態度で芸術を人間全体の問題にしようとしたのだ。描かれた「もの」よりも、描いている「行為」自体の意味を問うものとしては他にアクション・ペインティングやハプニングなどと呼ばれるものがある。一般に1945年以降のものを現代美術と呼ぶが、それは芸術の改新ではなく、芸術をどこまで人間の問題となしうるかということを問うてきた。

前述のシュールレアリストとはフロイト学説の影響を受けて、夢や潜在意識の世界のような現実とは掛け離れた形象の組み合わせに新しい啓示を求め、これを画面に再生しようとした人たちである。超現実主義といわれる。これは第一次大戦中およびその直後に生じた「ダダ」の発展したものである。ダダは虚無と幻滅の気分を反映し、非合理、幻想、アイロニーをもって社会的にも美学的にも因習や権威を嘲笑し、破壊しようとした。

ダダやシュールレアリスムから影響を受けたアメリカの芸術は「抽象表現主義」という流れをを展開していくが、1960年代になるとオブジェとして抽象的なものから現実の物体への関心が高まってくる。ニュー・リアリストと言われる人たちが現れてくるのである。絵画の主題を二次元的なものや身近な広告板、漫画などに見出だして私的なものや感情的なものを排除する方法である。これがポップ・アートと呼ばれ、アメリカ美術がクローズアップされることになる。

[ポップ・アートとは]

ニュー・リアリズム(新写実主義)ともいわれるように、主題を実際に商品としてあるような物や、日用品などの中に求めているものである。それまでの、崇高な芸術と大衆的な芸術とに分ける不明確で特権的な意識に挑戦し、その境界を取り外そうとする方向を持っている。

ポップ・アートの芽は1950年代にイギリスでめばえた。画家 R.ハミルトン、彫刻家 E.バオロツィらが評論家や建築家などとともに大衆社会における文化、芸術、マス・メディアなどの問題に関する討論会や展覧会を開催している。

そしてアメリカでは、1962年ニューヨークのシドニー・ジャニス画廊で開かれた「ニュー・リアリスト展」によってポップ・アートが注目されはじめた。出品した人は29名であ

るが、そのうちアメリカからはジム・ダイン、ロイ・リキテンシュタイン、クレス・オルデンバーグ、アンディ・ウォーホル、ジェームズ・ローゼンクィスト、ジョージ・シーガル、トム・ウェッセルマンの7名である。そこには石膏でつくった派手な色のパイや、カンバスの前にたてかけた芝刈機やピンク色に塗ったバス・ルームの壁、大きなカンバスに拡大された新聞の戦争漫画、本物のポスターそっくりのコカコーラやキャンベル・スープのデザインなどという作品が展示されていた。この展覧会が抽象表現主義以降の新しい美術の動向をはっきりと知らせるものになった。これにはフランスの「新しいリアリストたち」も出品しているが、彼らが量産品や廃品といった既成の「物体」に着目しているのに対して、ポップ・アーティストは日常生活に氾濫する既成の「イメージ」に着目したといえる。

この展覧会は初めヨーロッパでは、通俗的であるがゆえの痛烈な批判を浴びることになる。しかしその波紋の大きさに比例して、与えた影響には大きなものがあり、次第にポップ・アートが認められていくのである。後で示す「1960年代のアメリカの主な展覧会」を見ても分かるように、その頃の美術の形式は勿論ポップ・アートばかりでなく色々な流れが混在している。しかしかつて絵画を志す者がパリを目指したように、60年代のニューヨークが最も活動的な様相を呈するようになったのは、ポップ・アートの影響を抜きには語れない。

写真、広告、ポスターなどマスメディアを下敷きにした美術の先駆者としては、写真をもとにして人間の恐怖と苦悩を描いたフランシス・ベーコン(1909-)がいる。また'50年代に独特の芸術論を説いて回った作曲家ジョン・ケージ(1912-)もポップ・アートに影響を与えた一人である。ジョン・ケージの考え方は芸術と生活の間には境界はないというもので、コンサート・ホールの中の雑音や、表の通りから聞こえてくる騒音までも「音楽」にしてしまう。

ポップ・アートは風俗やファッションの世界とも交流しながら、若い世代の関心をあつめた点で特筆すべき動向を示した。社会が大量生産と大量消費をしはじめた1960年代、ポップ・アートもマス・プロダクションを目指したのだった。

[ポップ・アートという言葉]

ポップ・ミュージックと同じような意味で使われているというものや、「ダダ」のように子供の片言からとったという説もある。また、イギリスの評論家 L.アロウェイがアメリカの画家キタイの作品「ポップ」からとったともいわれている。1954年にアロウェイはこの言葉をアドマス(広告やメディアの強い影響下にある大衆)文化がつくりだした「大衆芸術」に対して初めて使った。そして1962年にはこの言葉を拡大し、ポピュラーなイメージを「芸術」の文脈で用いようとする芸術家の活動をも含めて言っている。

[ポップ・アートの代表的な人と作品]

Roy Lichtenstein (1923-)

The Journal of the American Medical Association のVol.258, No.1'87や、Vol.259, No.3'88の表紙にも登場している。彼はピカソやブラックらのキュービズムを意識した作品が多く、前述のJAMAの"Cubist Still Life"(図)もそうだ。また通俗漫画のひとつ

マを取り上げてステンレスの作品にしているのは有名だ。私は軽井沢高輪美術館で「赤ワインのある静物」という作品を見たが、単純な線と網点の平たんなイメージのものだった。つまりそのイメージがポップ・アートそのものであるというのは後で気付いたことなのだ。

Andy Warhol (1928? -1987)

「アンディー・ウォーホル展」を私は大谷石の石切り場跡で見た。洞窟のような暗くてひんやりしたその空間にアンディー・ウォーホルの作品がライトに照らされて浮かび上がり、その空間と作品がなぜかとてもマッチしているように思われた。

彼は画家であり、映画監督であり、「60年代の一種のヒーロー」であった。彼については謎めいた部分が多いのであるが、「もしあなた方がアンディー・ウォーホルについてのすべてを知りたいと思うのなら、ぼくの絵画や映画や、表現を見てほしい。そこにぼくがいる。その背後には何もない。」という彼の言葉がその在り方を如実に示している。

キャンベルのスープ缶を何個も連続して並べた作品や、マリリン・モンローの顔を何枚ものシルクスクリーンにした作品などが有名だ。一方「電気椅子」や「土曜日の惨事」などのように無言で社会に問いかけてくる作品も造っている。

[60年代あるいはその他]

ニュー・リアリズムがフランスでアンフォルメル派に対する反発として起こったようにアメリカでも抽象表現主義やアクション・ペインティングに対する反発として、ネオ・ダダやポップ・アートが登場してきた。ポップ・アートや廃品芸術は、大量生産と大量消費を特徴とする現代の都市生活における美術という性格をクローズアップさせている。身近な生活環境へ視注をそそぐことで人間と環境の、あるいは人間と芸術との直接的な関係という問題を浮かび上がらせている。60年代には他にもミニマル・アートやコンセプチュアル・アートなどがおこってくるが、この時期を境に美術の概念の変革がおきてきている。

技術以外はアメリカから10～20年も後進しているという日本の社会。そういう理由でか否かはわからないが、ポップ・アート隆盛から20年過ぎた今、日本でポップ・アートの展覧会が好評のようだ。人々にポップ・アートを受け入れる心的土壌が養われたからであろうか。都市型生活がそのアイロニーと一致するからだろうか。

という訳で日本の図書館もアメリカから遅れること20年、コンピュータの導入やシステムの構築等が検討されているが、単にアメリカの模倣に終わるのではなく真に自分達の必要とするシステムを目指すべく、これからの図書館界というものを考えていくべきだ、というようなことを今回この60年代というテーマを与えられ、考えるに及んだ。

参考文献

- 1) 金関寿夫:アメリカは語る。東京、講談社、1983。
- 2) Gidal, Peter :アンディ・ウォーホル。(チハーコバ・プラスタ訳)、東京、バルコ出版、1977。
- 3) 美術出版社編:現代美術入門。東京、美術出版社、1986。
- 4) 本間長世:今日のアメリカ(講座アメリカの文化 6)、東京、南雲堂、1969。
- 5) Stangos, Nikos編:20世紀美術。(宝木範義訳)、東京、バルコ出版、1986。

展覧会名

開催場所

動向

出品人

1959.10 「6つの部分の18のヘアニング」

ニューヨーク・ルーベン画廊 ハヘアニング

アラン・カブロー

12 「16人のアメリカ人展」

ニューヨーク・近代美術館 ネオ・ダダ

ジャスパー・ジョーンズ、
ラウエンバーグ

1961.10 「アッセンブリッジの芸術展」

” アッセンブリッジ(寄せ集め)

ジョーンズ、ニールスソラ

1962.10 「ニュー・リアリズム展」

ニューヨーク・シドニー・ニュー・リアリズム

P.ファイリッパス、

ジュニス画廊 (ポップ・アート)

R.リキテンシュタインら29名

1965. 2 「応答する眼展」

ニューヨーク・近代美術館 オブ・アート

アリジット・ライリーら

4 「ポップ・アートとアメリカの伝統」

ミルウォーキー美術センター

アラン・カブロー

10 「環境の中の彫刻展」

ニューヨーク市内

アランドレ、ケリー、ステラら

10 「読まれる絵・見られる詩展」

シカゴ現代美術館

アランドレ、ケリー、ステラら

1968. 7 「実在の芸術展」

ニューヨーク近代美術館

アランドレ、ケリー、ステラら

11 「機械展」

”

(レオナルドから現代までの機械を主題とする作品)

エステス

1969. 6 「ニュー・リアリズムの様相展」

ミルウォーキー美術センター スーパー・リアリズム

エステス

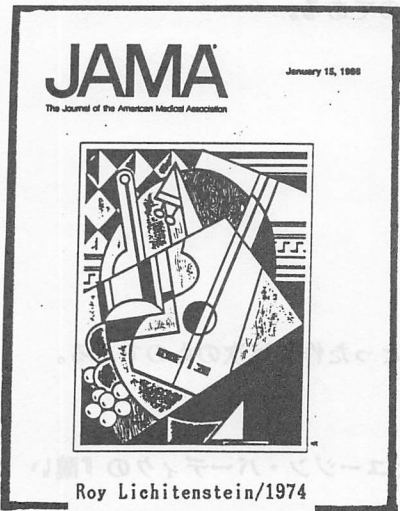


Andy Warhol/1962
マリリン・モンロー



Andy Warhol/1962
100個のキャンベル・スープ缶

* 1960年代のアメリカの主な展覧会 *



Roy Lichtenstein/1974
Cubist Still Life

アメリカ映画—アカデミー賞からニューシネマまで—

真下 美津子

「芝居は世界の鏡」といったのは、シェイクスピアである。とすれば、映画もまた、その時代を反映したものではなかろうか。特に国内では黒人問題、学園紛争、国外ではベトナム戦争をかかえこんでいた60年代のアメリカにおいては、より顕著であろうと思う。アカデミー受賞作品、ベトナムを描いた作品、アメリカン・ニューシネマをとりあげながら60年代を振り返ってみよう。

1. アカデミー受賞作品

アカデミー賞は、1927年 5月11日、映画芸術及び科学の質を向上させる目的によって設立された、映画芸術科学アカデミーの会員による投票で受賞作が決定される。対象となる作品は、ロサンゼルス地域の商業劇場で1週間以上、上映されたものに限られる。

受賞作品、主演男・女優賞は、表(1)の通りである。

1963年は、黒人問題がクローズ・アップされた年であり、シドニー・ポワチエがアカデミー賞史はじめて、黒人として、主演賞を受賞した。1939年度に『風と共に去りぬ』で、ハッティ・マクダニエルが助演女優賞を得ているので、演技部門では二人目である。彼は1969年 3月、黒人芸術文学アカデミーをニューヨークに創立し、ブラック・パワーの文化的な拠点を作った。

2. ベトナムを描いた作品

北ベトナムでは、1953年 3月15日、ホー・チミンが、映画制作配給機関設置の法令に署名し、『ディエンビエンフーの大決戦』が長編ドキュメンタリー映画としてはじめて制作され、1959年に、初めての長編劇映画『同じ河から』が、制作されることとなった¹⁾。

以後、長編劇映画として制作された主な作品は次のものである。

- 『ベトナムの少女』(1962)
- 『チ・ト・ハウ(ベトナムの若い母)』(1962)
- 『若い兵士クー・チン・ラン』(1965)
- 『サイゴンの少女ニユン』(1970)
- 『ふるさとへの道』(1971)
- 『愛は17度線を越えて』(1972)

それに対して、アメリカが描いたベトナム戦争に材をとった作品は次のものである。

- 『侵略』(1962、マーロン・ブランド主演)
- 1958年に発表されたウィリアム・J・レディーとユージン・バーディクの『醜い

『アメリカ人』の映画化。現実のベトナムを舞台としたものではなく、「サルカーン」という架空の分裂国家が設定されているー

『砲艦サンバプロ』（1966、ロバート・ワイズ監督、スティーブ・マックイン主演）
ー過去の植民地時代の中国に材をとり、揚子江に出動したサンバプロ号を描き、アメリカがベトナムの侵略者であること、若者が意味もなく殺される悲劇を訴えているー

『コマンド戦略』（1968、ウィリアム・ホールデン主演）
ーグリーン・ベレー誕生秘話ー

『グリーン・ベレー』（1968、ジョン・ウェイン主演）
ー1965年に発表されたロビン・ムーア原作の映画化。最初は戦争に疑問を抱いていた従軍カメラマンが、最後には戦争に共鳴するという右寄りの映画ー

この時期は『砲艦サンバプロ』のように、良心的なものもあったが、概して戦意を高揚させるものが多かった。

3. アメリカン・ニューシネマ

アカデミー受賞作品及び60年代前半は、あくまでもアメリカの夢と希望、正義の国・強い国アメリカが描かれた作品が多かった。そのほとんどが、ハッピー・エンドであり、国家、社会の利益と個人の幸福とが矛盾しないで共有できるという考えが基調になっていた。しかし、ベトナム戦争、黒人問題等が激化し、内外に矛盾を抱えこんだ60年代後半に至っては、それだけではすまなくなった。

1968年のコロンビア大学の学園紛争に始まるスチューデント・パワーの台頭がめざましくなり、矛盾に気づいた若者を無視したような映画は、価値がなくなった。

ローレンス・バスキアとウィリアム・ストローフはベトナム・ジェネレーションを1946年から1953年までに生まれたいわゆるベビー・ブーム世代とほぼ一致するものと定義し「彼らはドクター・スボック・ジェネレーションであり、スポーツニク・ジェネレーションであり、パプシ・ジェネレーションであり、さらにウッドストック・ジェネレーションでもあった。しかし最終的に彼らは、ベトナム・ジェネレーションになったのである。」と述べている²⁾。

このベトナム・ジェネレーションの若者たちは、「ドント・トラスト・オーバー・サーティズ（三十歳以上の大人を信じるな）」を合言葉に、ベトナム戦争に反対し、「ノット・ウォー・メイク・ラブ（戦争をやめて愛し合おう）」をかかげ、「ビートルズ」「ローリング・ストーンズ」「ボブ・ディラン」をBGMに動きだした。彼らは、それまでの「強く逞しく自信にみちたアメリカ人」から「弱々しく欠点だらけのアメリカ人」をスクリーンに求め、「ヒーロー」に対して「アンチ・ヒーロー」を選んだ。

それに火をつけたのが、1967年に発表された『俺たちに明日はない』だった。

これは当時無名だった、『エスクワイア』誌編集者のデビッド・ニューマンと友人のロバート・ベントンが脚本を書いた作品で、1930年代をかけ抜けていったボニーとクライド、ふたりのギャングが主役だった。

ラスト・シーンで87発もの銃弾をあびて死んでいくふたりの姿に、呆然として息をのみ、明るくなくても席をたてなくなった記憶がある。

この作品は公開された当時は賛否両論だった。しかし、女性批評家ポーリン・ケイルが『ニューヨーカー』で激賞し、12月8日号の『タイム』がカバー・ストーリーに取り上げ、「ニューシネマ、暴力、セックス、アート」とうたった。

これを契機に「アメリカン・ニューシネマ」とよばれる作品が次々に作られた。

『真夜中のカーボーイ』（1969、ダスティン・ホフマン、ジョン・ボイト主演）

『ワイルド・バンチ』（1969、サム・ペキンパー監督）

『イーザー・ライダー』（1970、ピーター・フォンダ主演）

『明日に向かって撃て』（1970、ポール・ニューマン、ロバート・レッドフォード主演）

『ウッドストック』（1970、'69年8月15日から18日まで開かれたロックフェスティバルを収録したもの）

『いちご白書』（1970、'68年コロンビア大学の学園紛争を描いた作品）

大作主義に甘んじていたアメリカ映画は、1963年制作の『クレオパトラ』の失敗を契機に、スター主義も影をひそめてきた。

1967年からは、それまでジョン・ウェインに代表されるような、逞しい「アメリカン・ヒーロー」から、ダスティン・ホフマンやピーター・フォンダが演じたギャング、ヒッピー等のおちこぼれ「アウトロー」が、それにとってかわった。ラストはハッピー・エンドではなく、主人公が惨めに死んでいくという作品が多くなった。

アメリカ映画は、1967年から確実に次の時代へ向かって、一步を踏み出したといえるだろう。

引用文献・参考文献

- 1)ベトナム民主共和国外国語出版：ベトナムーその文化と歴史と経済，1974.
- 2)Baskire and Strauss:The Vietnam Generation.Ed.by Horne,1986,pp.7.
- 3)中田耕治：アメリカン・ニューエイジ・シネマの美学，国文学臨時増刊「映像の世界」：118-122,1977.
- 4)キネマ旬報社：アカデミー賞50回事典，1981.
- 5)田山力哉：アメリカン・ニューシネマ名作全史，東京，社会思想社，1981.
- 6)生井英考：ジャングル・クルーズにうってつけの日，東京，筑摩書房，1987.

表(1) アカデミー賞作品、主演男・女優賞

()内は出演作 ☆は主な出来事

年度	作 品 賞	主 演 男 優 賞	主 演 女 優 賞
1960	アパートの鍵貸します	バート・ランカスター (I馬・ガントリ)	エリザベス・テイラー (バタフィールド8)
1961	ウエスト・サイド物語	マクシミリアン・シェル (ニューハム判)	ソフィア・ローレン (ふたりの女)
☆ジョン・F・ケネディ大統領就任			
1962	アラビアのロレンス	グレゴリー・ペック (アラバマ物語)	アン・バンクロフト (奇跡の人)
1963	トム・ジョーンズの 華麗な冒険	シドニー・ポワチエ (野のユリ)	パトリシア・ニール (ハッド)
☆ワシントンで人種差別撤廃のデモ行進 ☆バーミンガムの黒人教会で爆弾破裂事件 ☆ダラスでケネディ暗殺			
1964	マイ・フェア・レディ	レックス・ハリソン (マイ・フェア・レディ)	ジュリー・(リ・ホピンス) アンドリュース
☆ジョンソン大統領北爆開始			
1965	サウンド・オブ・ ミュージック	リー・マービン (キャット・バルー)	ジュリー・クリスティ (ダーリング)
1966	わが命つきるとも	ポール・ スコーフィールド (わが命つきるとも)	エリザベス・テイラー (ハ・ジ・コ・ウルフなんか こわくない)
1967	夜の大捜査線	ロッド・スタイガー (夜の大捜査線)	キャサリン・ヘプバーン (招かれざる客)

1968	オリバー	クリフ・ロバートスン (まごころを君に)	キャサリン・ヘアバーン (冬のライオン) バーブラ・ストライサンド (ファニー・ガール)
	☆ニクソン大統領就任 ☆マーティン・ルーサー・キング牧師暗殺 ☆コロンビア大学で学園紛争		
1969	真夜中のカーボーイ	ジョン・ウェイン (勇気ある追跡)	マギー・スミス (ミス・ブリティッシュの青春)
1970	バットン大戦車軍団	ジョージ・C・スコット (バットン大戦車軍団)	グレンダ・ジャクソン (恋する女たち)

60年代のアメリカのメディア

雨宮 正恵

<はじめに>

私は1960年に生まれ、物心着いたときには既にテレビの中に“戦争”があった。ベトナムの土にまみれた兵士たちが白黒の画面のニュースに映し出されていた。子供の頃は世界のどこかで戦争が行われていることが当然だと思っていた。ベトナム戦争が終結したとき、中学生になっていたが、それは学生運動と同じくらいに過去の歴史に思えた。60年代は終わったのだ。白黒の画面の時代、カルダンやクレージュが宇宙服をデザインした時代、日本が夢を描いていた時代。ブラウン管の中のおとぎの国は現実となった。今、日本はおとぎばなしを語る側になったのだ。かつてのアメリカのように……。どんな夢を語れるのか、どんな現実を見つめることができるのか、かつてのアメリカのメディアが残したものを調べることにより、その答えのヒントが得られるかもしれない。

<テレビ>

端正な容姿と若さをブルックス・ブラザーズのスーツに包み、ケネディ (KENNEDY, JOHN F.) が大統領選挙に出馬したのは1960年である。アイルランド系のインテリであるケネディの弱点は、その若さとカトリック教徒であることだった。しかし、それを逆に強みとしたのはテレビの力であった。NBCテレビがケネディの味方だった。1956年に副大統領となったニクソン (NIXON, R) は、1960年には共和党の指名を獲得、そしてケネディとのテレビ討論に応じる。テレビを通じての記者会見でユーモアと理性、その冷静な人柄を強くアピールして絶好調だったケネディになぜニクソンがテレビで対決する気になったのか。その理由は、候補指名演説の評判が良かったことやケネディとの対決を恐れたと言われぬため、そして彼自身がメディアの技術進歩に積極的であったことが挙げられる。直接選挙民に語りかけることができる、強大な力を政治家たちは理解しはじめていた。1965年には全米で500万台のカラーテレビが使用され、CBS、ABC、NBCの3大ネットワークは全面的なカラー放送に踏み切っている。

そして、それを最も効果的に使ったのがケネディであった。言わばテレビ・メディアが産んだスーパースターである。ケネディは新聞記者や雑誌記者以上に放送記者を優遇した。テレビ・ニュースが世論の流れを変えることを十分に理解していたからである。さらに1963年に30分のニュース番組が登場することにより、テレビの可能性はますます広がった。それまではニュース・ウィークやタイムなどの雑誌が国民の世論を代表していると考えられていたが、テレビははるかに強い、視覚に訴えるインパクトを持っている。とくに、ニュース番組のアンカーマンは大統領に匹敵するほどの影響力を視聴者に与えた。60年代後半には恐らくテレビ出演回数最多となる、CBSのウォルター・クロンカイトがその代表であろう。スウェーデンでは、アンカーマンは“クロンカイト”と呼ばれると言う。雑誌“ライフ”の契約ライターであったセオドア・H・ホワイトはこう言っている。

“(テレビの登場は) 手刷りの1ページの新聞から、回転式の印刷機へ移ったようなものだ。”

だが、視聴率という別の判断から見れば、客観的に見える映像も、実は操作されているとも考えられる。ベトナム戦争の初期の頃、ケネディ、ジョンソン両大統領はテレビ報道を自らの管理下においた。しかし、皮肉なことにこの戦争の矛盾と残虐性を明らかにしたのも又、テレビであった。1966年、上院議員フルブライトによるベトナム戦争公聴会はテレビで生中継され、反戦に力をかす結果となった。

<新聞>

若きスーパースターが1961年に大統領となった後に起ったのはベトナム戦争の泥沼と社会に拡がる幻滅と挫折であった。ケネディは言った、“Together”と。そして、“国家が諸君になにをしてくれるかではなく、諸君が国家の為になにができるかを問いたまえ”と。しかし、ケネディとその政府官僚の“Best & Brightest”なはずの人々が進んだのはベトナムへの道であった。ビリー・ジョエルは“Goodnight Saigon”の中でこう歌っている。

And we would all go down together.

We said we'd all go down together.

Yes we would all go down together.

アジアの小国の独立戦争を潰すために、大国アメリカが核兵器以外の総力を上げて戦い、そして敗北した。その間の流れはハルバースタム (HALBERSTAM, D.) の著作にくわしい。ハルバースタムはニューヨーク・タイムズ特派員としてサイゴンに赴き、30代にして伝説のジャーナリストと呼ばれ、ピューリッツァー賞を受賞した。

ワシントン・ポストは後にニクソンのウォーターゲート事件で名を馳せたが、ベトナム報道に関しては慎重であった。ベトナムに関するペンタゴンの極秘資料である“ペンタゴン・ペーパー”を掲載したのもニューヨーク・タイムズであった。

ロスアンジェルス・タイムスは1960年代後半に部数を2倍にふやし、成長を続けた。だが、日本の新聞と大きく違うのは、アメリカの新聞が地方紙としての性格を強く持っていることであろう。日本で言えば朝日、読売と言った全国的規模の新聞がなく、発行部数もはるかに少ない。だが、ベトナムに乗り込み、体を張って記事を書く新聞記者は日本の会社に比べて、個人商店のようなものと感じた。

<雑誌>

1968年、ニューヨークのタイム本社はグルンワルドが編集長になってからコンピューターによる校正を行いはじめ、雑誌の性格も正確で公正な報道を目指すようになった。これにより、ベトナム戦争のときには客観性に欠けていた報道がウォーターゲート事件ではその真価を発揮することになる。

ニューズ・ウィークも又、タイムとならんであげられる雑誌であり、中道路線はよく似ているところである。1961年、ワシントン・ポストのフィリップ・グレアムはニューズ・ウィークを買収した。

ライフはライフ・ブックスやレナート・ニルセンの胎児の写真をはじめ掲載するなど、自然科学寄りの性格を持つ。

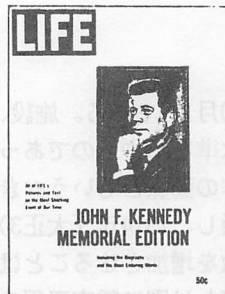
新聞、雑誌はテレビにはスピードで劣るのはやむをえない。しかし、そこには客観性と緻密な分析があるべきであり、それこそがベトナム戦争の矛盾と残虐性を理解するのに不可欠のものであったのだと思う。1970年代に入り、ウォーターゲート事件の際にアメリカの文筆メディアの真価が現れたのも偶然ではないだろう。

<THE END>

Oh year alright, are gonna be in my dreams tonight?
And in the end the love you take is equal to the love you make.

(word by John Lennon, 1969)

“ライフ”のケネディ大統領追悼号



“ライフ”に掲載されたベトナムでの戦死者たち

LIFE VIETNAM ONE WEEK'S DEAD

The faces shown on the next pages are the faces of American men killed in the war of the official announcements of their deaths—in connection with the conflict in Vietnam. The names, 242 of them, were released by the Pentagon during the week of May 28 through June 3, a span of special significance except that it includes Memorial Day. The number of the dead an average for any seven-day period during this stage of the war.

It is not the intention of this article to speak for the dead. We cannot tell with any precision what they thought of the political currents which drew them across the world. From the letters of some, it is possible to tell they felt strongly that they should be in Vietnam, that they had great sympathy for the Vietnamese people and were appalled at the enormous suffering. Some had voluntarily extended their tours of combat duty, some were desperate to come home. Their families provided most of these photographs, and many expressed their own feelings that their sons and husbands died in a necessary cause. Yet in a time when the numbers of Americans killed in this war (322—though far less than the Vietnamese losses, have exceeded the dead in the Korean War when the nation continues war) are week to week passed to look into the faces. More than we must know, many, we must know who. The faces of one week's dead, unknown but to families and friends, are suddenly recognized by all in this gallery of young America men.

May 28 - June 3, 1969

 Michael C. Williams, 28 Army, CA	 Robert L. Lawrence, 26 Army, CA	 William L. Anderson, 21 Army, WA	 Robert J. Anderson, 21 Army, WA	 Craig T. Rice, 18 Army, WA	 John C. Fagan, 21 Army, CA	 Robert M. Smith, 21 Air Force, WA	 James C. Galt, 21 Air Force, WA
 Ron J. Clark, 21 Army, VA	 James F. Wilkins, 19 Army, VA	 Monte Lamotte, 21 Army, PA	 Valentin Stankov, 21 Army, PA	 David Norman, 21 Army, PA	 Gene W. Madson, 19 Army, PA	 Carl C. Fagan, 19 Army, PA	 John W. Johnson, 19 Army, PA
 Cleveland Branning, 21 Army, VA	 Charles C. Post, 21 Army, VA	 James Patrick Peadar, 21 Army, VA	 Joe L. Buggs, 18 Army, VA	 William L. Gorman, 18 Army, VA	 Carl D. Carter, 18 Marine, VA	 Daniel L. Smith, 21 Army, VA	 James L. Sappington, 18 Army, VA
 William L. Lawrence, 21 Army, VA	 William D. Smith, 18 Marine, VA	 Richard J. Smith, 21 Army, VA	 Mark A. Shoverford, 21 Army, VA	 Mark A. Hines, 19 Army, VA	 Bruce Sanderson, 21 Army, VA	 Thomas F. Johnson, 21 Army, VA	 Clifford Adams, 19 Army, VA

東海道新幹線

— 誕生とその背景 —

吉田 宏子

I. 新幹線の歴史

はじめに

昭和33年7月、新幹線の計画が発表されたとき、世論は二つに分れた。世界の三馬鹿論（万里の長城・戦艦大和・新幹線）が飛び出し、世の知識人と目される人々が同調し、雷同したことから、どちらかというところと反対論者が多かったという。

「夢の電車」実現に取り組んだ国鉄スタッフ15,000人は、「空想村の人」といわれた。このような状況のなか、“夢”を実現させていった人々—その歴史と発想は、意外にも古かった。ここでは、高速交通時代の幕開けとして、1964年10月1日に開通した新幹線を取りあげ、その歴史と誕生、成長をみていくことにする。

1. 民営新幹線の計画

新幹線が開業したのは、1964年（昭和39）10月1日である。施設、輸送形態など、さまざまな面で20世紀後半における新しい鉄道の水準を示すものであったが、この前に何回かにおよぶ東海道本線の改良計画があった。日本の動脈ともいふべき東海道本線は、1889年（明治22）7月1日に、新橋—神戸間が全線開通し、1914年（大正3）には全線が複線化した。が、当時の技術水準では列車の速度や本数を増加させることは極めて困難であった。このような事情から、当時、既設の東海道本線とは別に電車専用的高速輸送線路を民間で計画する動きがおこっていた。これは最初の新幹線計画といえる。

この計画を立てたのは、当時、中国鉄道会社（現JR西日本津山線）の大株主であり、安田財閥の創始者、安田善次郎ら財界の人々が中心で、「日本電気鉄道会社」を設立し、東京—大阪間を6時間で結ぶ高速列車を30分毎に発車させる計画であった。だが、1906年（明治39）公布の「鉄道国有法」により、私設鉄道は、一地方の鉄道に限るとされ、私設鉄道企業がこれを建設することは不可能であった。しかし、当時、大部分の日本の鉄道が狭軌（1,067mm）であったのに対し、この鉄道が国際標準軌間（現新幹線ゲージと同じ1,435mm）を採用していたことは注目に値する。

2. 広軌改築論

狭軌の鉄道は、列車本数が増えるにつれ、輸送力の不足が目立ち始めた。後の東海道本線にあたる東海道線が全線開通した1880年—1890年代にかけて、日本の資本主義はその成立期に入っていた。しかも当時、軍部は対清戦争を準備しつつあり、国内の鉄道幹線を使って兵力を出港地に集中輸送する計画を進めていた。だが、この要請にこたえるためには当時の鉄道の輸送力はあまりにも低かった。軍部は、何回かにおよぶ改良計画を立てたがそれらの計画の中心になっていたのは、広軌（国際標準軌間1,435mm）への改築と複線化

であった。日本における広軌改築論は、まず軍部が主張したのである。

日露戦争後、日本が獲得したロシア東清鉄道南部支線（長春—大連など）は、南満州鉄道として日本の経営下に入った際、ロシアの1,520mmから国際標準軌間に改築されている。将来、日本と朝鮮、中国とを連絡輸送することが必要になったときには日本国内の線路も国際標準軌間にすることが、日本の東アジア支配の上から、さらに、資本主義の高度化に対応する輸送力増強の要請からも必要とされた。

その後この計画は、内閣に広軌改築調査委員会が設立され（1911年・明治44）具体化する動きがみられたが、政党の利害によって中止され、一部の地方鉄道を除いて狭軌のままその輸送力を増強する方策をとらざるを得なくなった。

3. 新幹線の前駆「弾丸列車」計画

1930年（昭和5）10月1日に運転を開始した東京—神戸間の特急列車「つばめ」は、当時の技術を集中した列車として登場したが、表定速度は68km、最高速度95kmで、国際的な特急列車の水準にはおよばなかった。これに対し、国際標準軌間を用いた南満州鉄道の特急列車「あじあ」は最高速度130kmで、狭軌と広軌の差が明確に現れていた。やがて日中戦争が開始され、国内幹線の輸送力が戦時輸送体制のもとで決定的な不足を告げるようになると、東京—下関間に国際標準軌間による別の複線を建設し、大きな単位の高速度列車を運転する計画（弾丸列車計画）が立てられた。この計画は、太平洋戦争が終局に近づき、工事の継続が不可能となり、1943年（昭和18年）に工事の全面中止となったが、かつて日本電気鉄道が計画した高速電車の方式と異なり、機関車牽引方式をとると同時に、より大規模な幹線を建設するという点にその特徴がある。

4. 新幹線実現へむけて

第二次大戦後、国内の鉄道は事実上マヒ状態にあり、輸送力は激減状態になっていた。このような状況のもと、東京—福岡を結ぶ広軌新幹線鉄道計画が民間で持ち上がった。これに対し、当時の運輸省鉄道総局長官、佐藤栄作は否定的見解を示し三度めの新幹線計画も実現しなかった。

日本の資本主義経済は、米軍の占領が終結する前後から、かつて見ることもなかった程活況を呈していた。いわゆる「朝鮮特需」である。これにより、鉄道の輸送需要も本格的な上昇期を迎えたが、この需要に対し、国鉄の各幹線では車両・施設の各方面で十分にまかなうことができない状態が続いていた。特に東京—神戸間の東海道本線では旅客・貨物ともに輸送力は飽和状態に達していた。このような状態を打開することを目的として、1956年（昭和31）国鉄は東海道線増強調査会を設置した。これはその後、国の交通政策のあり方という次元で決定が行われるべきであるという点から、政府の組織として1957年（昭和32）運輸省に日本国有鉄道幹線調査会が代って設立された。調査会では、1958年（昭和33）7月7日までに広軌別線、資金約2,000億円の新幹線を建設するという答申がまとめられ、8月21日調査会は廃止された。これと並行して国鉄の部内には1958年（昭和33）新幹線建設基準調査委員会が設置され基本的な事項の決定がすすめられた。こうして1959年

(昭和34)以降、新幹線の建設は予算化され、1959、運輸大臣から東京—大阪間の線路増設工事が認可されたのである。

当時の鉄道技術研究所は、技術的には、電車による高速運転を採用すれば東京—大阪間を最高時速250km、3時間で運転可能という結論を出した。この頃、各国では高速列車の運転技術を開発する動きが盛んとなり、国鉄でも積極的に取り組み、交流電化の実用化、モーターの軽量化などの技術を成立させ、1964年(昭和39)10月1日、東京—新大阪間が開業したのである。

II. ダイヤからみる新幹線

ここで、新幹線開業直前の昭和39年7月、開業時の昭和39年10月、東京—新大阪間3時間運転となった昭和40年11月のダイヤを比較してみたい。

1. 新幹線ダイヤ

昭和39年10月の開業時、東京—新大阪間の所要時間は、ひかり号で4時間、こだま号で5時間であった。東海道新幹線は、盛土や、切り取りといった土工区間が全線の53%を占め路盤が安定するまでの間、一部区間の最高速度を160km/hに制限したためである。

ひかり号は、東京駅毎時00分発、こだま号は毎時30分発でそれぞれ14往復設定されていた。

昭和40年11月のダイヤ改正では、全線において210km運転が可能となり、ひかり号は東京—新大阪間が3時間10分、こだま号は4時間10分で運転されると同時に大幅な増発がなされ、ひかり号は1日25往復、こだま号は東京—新大阪間に18往復、他に区間列車として東京—静岡間、静岡—新大阪間にそれぞれ2往復設定され、輸送力は60%増強された。

2. 在来線ダイヤ

新幹線開業直前の東海道本線は、東京駅発の列車として、電車特急が10本、ブルートレインが4本、電車急行が10本、客車急行が17本、準急列車が21本、普通電車が129本設定されていた。

電車特急は、いずれも昼行列車で、名古屋行き1本、大阪行き6本、神戸行き1本、宇野行き1本、広島行き1本が設定されていた。大阪行き2本を除く8本の列車は、こだま型と呼ばれる12両編成からなり、大阪寄り先頭車は、在来の展望車に代るパーラーカーが連結され、1等車4両、食堂車1両、2等車ビュッフェ合造1両、2等車6両と1等車の比率の高い豪華列車であった。

ちなみに、パーラーカーとは、6人用個室が先頭寄りに1人掛けのリクライニングシートが片側に6脚ずつ並べられた定員18名の豪華車両で、車内電話や、座席にはラジオのイヤホンジャックがあり、クッキー(泉屋、ユーハイム)や紅茶、コーヒーのシートサービス(無料!)などが備えられていた。この車両を利用するには、1等乗車券、特急券のほかに特別座席料金1,650円(昭和39年7月当時)が必要であった。

ブルートレインは、長崎行き、博多行き、大分・熊本行き、西鹿児島行きの計4本で、全て九州直通であった。電車急行は、大阪行き7本、姫路行き1本、広島行き2本が設定され、うち大阪行き2本、姫路行き、広島行き各1本は夜行であった。また、これにはすべて

寝台車が連結され、九州直通5本、山陽・山陰方面3本、関西線経由2本、北陸方面1本、大阪へ6本が設定されていた。ここで気がつくのは、電車急行も含め、東京-大阪間に夜行急行が7本設定されていたことである。

準急はすべて電車で伊豆方面への観光列車が10本、静岡-大垣といった東海地方へ11本設定されていることである。そのうち大垣行き1本が夜行であった。

さて、昭和39年10月の新幹線開業時の在来線東京発のダイヤは、電車特急は全て廃止され、ブルートレインが1本増発の5本、電車急行は2本減の8本となった。これは、いままでブルートレインは全て九州方面行きであったのだが、熊本・大分行き併結列車（行先が複数になる列車）が独立・運行したことにより、1本増えた。

電車急行は東京-大阪間が6本、伊豆方面に2本の計8本と、関西への急行が4本減少し、夜行も1本のみとなった。

客車急行は14本と、やはり3本減少し、東京-大阪間の夜行急行も2本減の4本となった。

準急電車は、東海地方方面へが3本減の8本となり、大垣行き1本は夜行で残った。伊豆方面は8本設定されている。

新幹線が増発され、スピードアップがはかられた40年11月のダイヤ改正では、ブルートレインの5本はそのまま変らなかったが、電車急行が4本に、客車急行が11本、準急電車が13本と優等列車がかなり削減された。電車急行は、大阪行きが2本、伊豆方面が2本の計4本が設定され、大阪行きは4本の削減となり、夜行の電車急行は廃止となった。客車急行は、大阪行きが2本減の2本となり、ほかに併結された1本があるので、計3本の減少となった。準急電車は、東海地方方面が6本削減の4本となり、夜行は廃止された。伊豆方面は、1本増発の9本となった。

おわりに

新幹線開業によって、それまで最も早い列車で6時間30分かかっていた東京-大阪間が3時間10分に短縮された。その結果、日帰りする場合の、現地における有効時間がそれまでの3時間から9時間に増加したため、東京-大阪間は、完全に日帰りビジネス圏となった。

表1 ダイヤの変化

列車名/年	S39/7	39/10	40/11
電車特急	10	0	0
ブルートレイン	4	5	5
電車急行	10	8	4
客車急行	17	14	11
準 急	21	18	13

参考文献

- 1) 相賀徹夫：全線全駅鉄道の旅，小学館，1981.
- 2) 相賀徹夫：日本鉄道名所4 東海道線，小学館，1986.
- 3) 原田勝正：新幹線の事典，三省堂，1987.
- 4) 全国時刻表，15（7）通巻166号.日本交通公社，1964.
- 5) 時刻表，40（10）通巻464号.日本交通公社，1964.
- 6) 時刻表，41（11）通巻477号.日本交通公社，1965.

農と食からの発想

(60年代を振り返って)

多胡 英樹

私が生まれ育ったのは、蚕糸業を営む農家で、近くには公害で騒がれた工場がある。小さな頃から野山で遊び、川でよく魚つりをした。農繁期は、桑取り、田植、稲刈り、麦ふみ、里芋掘り等を手伝いながら育った。今も懐かしく思い出されるのは、畑から取り立ての野菜やくだものがテーブルを賑わし、一家揃って和やかに食事をした事である。このようなライフスタイルも時が経つにつれ、徐々に工業化(=近代化)の波にさらされてきている。長い年月をかけて形成されたその地方独自の自然景観や歴史文化が変わりつつある。私の育った村の小学校の跡地は市営アパートとなり、山林はゴルフ場に、家の前の川はダム造成のため小川になってしまった。元来農村とは、四季があり、あらゆる生物の生態を包括し、自然に溶けこみ自在に個性的に働きながら互いに助け合い、支え合って、簡素であるがやさしく健康的な暮らしを営めるところだと思う。

私のふる里(農村)が変わった様に、今農業は大きく変貌しようとしている。

一つは「自由化反対、輸入阻止、生産調整」。これが今の農業団体による運動方針である。円高や世界的な農産物過剰による内外価格差の拡大、日米貿易収支の不均衡等による経済摩擦、農業保護政策の存在が農業の正常な発展を阻害している。日本が経済大国になった今日、牛肉やオレンジの自由化、国際的ルール違反を責められ、これは連日新聞を賑わしている事である。

二つ目は、農民の高齢化である。少なくとも今までは、他の産業からリタイヤした中高年が農業に流れていた。その上現在は後継者のいない農家が多くなり、後継者がいてもその農家に嫁ぐ女性があまりにも少ないために花嫁を海外に求めて、国際問題に発展しているケースさえもある。

三つ目は、農業収入に生計を依存しない第二種兼業農家(農業が従である農家)が多くなっている。これは、農産物の過剰供給、価格低迷で、農業をしないでも働きにいけば容易に現金収入を得ることができるためである。

実際に農業は今、新しい農業革命にみまわれている。

第一が、価格革命。農産物は過剰供給から価格上昇は期待できない時代にはいった。食糧制度下の生産者米価さえ下がりはじめた。

第二は、土地革命。農産物価格が国際的にみて高いのは、施設園芸や鶏や豚の施設型農産物での価格差が低く、米麦や牛などの土地利用型農産物が高い。このような価格差は、土地価格に起因する。農地の宅地化や借地化が目前にきている今、借地農業で規模拡大できれば、コストダウンが実現される。

第三が、人材革命。何をつくれば売れるかを考え、マーケティング能力に優れた経営者感覚をもった農業の担い手が要求され大きく変貌しつつある。

第四に、技術革命。バイオテクノロジーの進歩など、農民の利用可能な新しいテクノロジーが次々と出現している。

この4つの革命が十分展開すれば、農業は「大規模精密農業」に変貌していく。今は小規模農業が多いが、ここで大切なことは“精密農業”である。精密な科学的分析の上に立った作物の栽培管理、家畜の飼養管理農業になれば、生産性が向上、コストダウン、又品質も一段と高まる。その時こそ、国際競争力のある農業となっていくであろう。

もう一つが、高付加価値農業をめざす。これは、消費者が多様化し、低価格を要求するものと、高くても高品質であればよいものとに分かれる。アイデアとマーケティングの分かれ目となるであろう。「農業のサービス経済化」が進んできている。地域振興をあげるふるさと情報センターが提供するふるさと情報、無低農薬有機野菜の個人宅配、一村一品運動等があげられる。都会の消費者のために、農園の果樹を一本丸ごと確保し、時々来てもらおうという「ふるさとコーナー」は、その好例である。作物を育て出荷するだけでなく、豊かな自然と「オーナー気分」を付加価値にしたわけである。

農業革命は、1960年代のアメリカ(Golden Sixtyとよばれる)にみることができる。「世界のパンかご」と呼ばれているように、アメリカは世界の食糧基地である。飼料穀物の世界的な生産、貿易に占めるアメリカの比重が決定的に大きいからだ。1965-69年(5ヶ年年間平均)でみると、トウモロコシ、大豆の世界の総生産に占めるアメリカの割合は、45%、66%であるが、これら農産物の世界の総輸出に占めるアメリカの輸出比率は、55%、90%の高率になっている。小麦でも世界の総輸出量の約40%をアメリカが占めている。このように世界の農産物輸出に占めるアメリカの比重が高まり、今後のアメリカ農業のゆくえに関心が集まっていた。

あれだけ広大な耕地がありながら農家の規模拡大は、借地である。しかも、小作料も高い。又、若い農民はほとんどが州立大学の農学部を卒業した人達で「農業は知的ゲーム」といいきっている。

農業数と農業就業人口は1950年代から60年代にかけ急速に減少した。しかも、70年代になると減少テンポが鈍化した。これは、経済の停滞も一つの要因であり、もう一つは、石油危機後、技術革新の流れに方向転換したからである。

アメリカ農業が優先産業になった理由は、第一に育種の成果、第二に高収量品種の栽培管理ができる高い農業技術、第三に機械化、化学化が進み集約的な事である。これらのことにより、アメリカでは、大量生産、大量流通をたどり、より利益をあげられる農業になった。

いずれにせよ、農業は変わってきている。機械化、化学化によって重労働から解放され、ライフスタイルも次第に都市型に近づいてきた。一方で、その地域がもっていた歴史や文化は失われ、農村の近代化というより都市化がみられる。その反面、大量生産、大量流通、大量消費、それに伴う画一化、効率化による利潤優先が、人間性無視、大地からの収穫、自然の崩壊、緑や大気という地球の生命全体を目先の利益のためないがしろにしているのではないかと思う。

食も、それにより変わってきた。人々のライフスタイルが変わり、カウチポテト族、シングル族、ヤッピー、DINKS(共稼ぎで、子供がない家族)などが出現し、24時間スタイルの時代に入った。このため、多様な食事形態が現れ、それぞれにあった食をとるようになってきている。材料を選びその場で料理するアジアスタイル、24時間あいているファミリーレストランや外食産業、多種多様な民族料理店がふえている。

食の簡素化、機能化が目だちはじめ家族という“食の単位”の崩壊が始まり「孤食」となってきた。スーパー、デパートにいけば揚げるだけ、温めるだけ、蒸すだけの安易な商品が氾濫している。このような簡素化や機能本位が果してこれでよいのかと考えさせられる。

食の個性化も、進んできている。ハンバーガーやスナック類の軽食が一般化し、その選択の変化を楽しむことができる。手作り志向、有機農法の野菜や果実、健康食品や美容食品が話題にあがり、健康第一の節食時代といえる。

このような時代の波にのりおくれぬ農業が育たなければならない。安ければ買ってくれる時代は去り、いかに消費者が望むものを作るかが今後の課題である。農業もいろんな改良、工夫をし、その地域地域の特徴がだせなければならない。又、自然環境、社会環境、文化風土の安定基盤を強固にし、農業のイメージにふさわしい生活風景を維持発展させなければならない。

これは理想かもしれないが、農業は近代化産業にならなければならない。国々の気象条件を考え、経済の流れをみ、市場がなにを望んでいるかを考え、一番適したものを作れば必ず売れるはずである。そして農業は変貌し知識産業にも進出しなければならないと思うのである。

食なくしては、人間は生きていけない。現在、外国からの市場解放要求で、農業改革をしなければならない時期に直面している。農家に育った私が、サラリーマンとして何年かたった今、自分の考えで手足を動かし、太陽の下で汗を流して土を耕し、四季おりおりの種類豊富な作物を育てる。その作業により、季節を感じ、生命を感じながら生活する事が、自分自身のよりよい向上発展の糸口をみつけれられるのではないかと思うのである。

ここでもう一度、農とは、食とはを考えなおしてみるに、都市と農村との時間と距離を短くし農業を活性化させ、これからの人達が進んで参加出来るような「夢の産業」に発展させねばと思うのである。



黒人運動・黒人闘争・黒人革命

平輪 麻里子

<はじめに>

はだいろ（肌色）：人の肌のような、やや赤みを帯びた薄い黄色—岩波国語辞典第四版。日本人の肌は個人差があるにせよ、この一言で片づいてしまう。これは化粧品売り場に並ぶファンデーションの色見本でもわかる。一方、アメリカ黒人の肌色はバラエティに富んでいる。アリス・ウォーカーやローザ・ガイの小説に登場するのは、セピア色、はちみつ色、樫の木色、茶色、黒、褐色の人間たちで、その中の一人は濃茶色のメイクを拭き取りながら、白人の店には茶色のファンデーションが一瓶しか置いていないのをコボすという具合である。彼女たちの作品を読んで肌の色を意識するようになった。

アメリカは人種のサラダ・ボウルだそうだ。白、黄色、茶色、黒、赤い肌の人達は、セロリや卵やトマトのようにお互い混じり合わないところからきている。イタリア人、スペイン人、アイルランド人、韓国人、中国人、プエルトリコ人・・・らは自分たちだけの社会で暮らしている。しかし、これら移民たちと黒人は大きな違いがある。黒人だけが奴隷だったのだ。1960年代、アメリカを揺るがせた黒人たちの公民権運動を考えてみたい。

<奴隷としての歴史>

「邪悪、不道徳な色である黒い肌をした文字を持たない異教徒は、生物学的にみても最下等で補助的役割を果たす能力しかない、よって生まれながらの奴隷である。」と、白人は容貌や生活様式を自分と比較し、偏見と差別を強めていった。黒人は言語をはじめ固有の文化から引き裂かれ、自由を奪われ搾取された。1619年に新大陸アメリカに上陸した黒人たちは、やがて植民地開発の労働力として大量に供給され、1720年代には人種上のカースト制度とも言うべき奴隷制の中に取り込まれる。1776年、近代民主主義国家の基礎をうたいあげた独立宣言と憲法にさえも奴隷制が裏づけられた後、産業革命による繊維業界の急成長の影響で南部の綿花王国の奴隷数は増大した。そしてアフリカから運ばれて2世紀以上たった1861年—65年の南北戦争の結果、黒人は奴隷の立場から解放された。しかし、スカーレット・オハラに怒鳴られてばかりいたあのプリシーが奴隷の状況から脱してバラ色の毎日を送ったとは考えられないように、金銭に関わる経験がなく、最低の衣食住を主人から与えられていた奴隷の立場は解放前とそう変わらなかった。

化学繊維の発明で綿花栽培が落ち目になったことや、大戦時に軍需産業の労働力となったことなどにより、南部から北部の大都市へと大量の黒人が移住し、ゲットーが形成され公民権運動の温床になった。

<公民権運動への点火>

1. 人種差別にもとづくナチズムと戦うことによって、自国の問題を認識。また戦場や、都市部で人種差別の少ない社会を経験した黒人たちが目覚める。
2. 戦後ソ連の勢力拡大—民主主義国アメリカでの不平等を攻撃される。

3. 1950年代のアフリカ諸国の相次ぐ独立により民族意識が高まる。

以上3点が黒人を公民権運動に導いた主な理由である。

<闘争>

- 1955年 アラバマ州モントゴメリーでバスの白人座席に座った黒人女性が逮捕され、キング牧師が率いる黒人たちのバス・ボイコット運動がおこる
- 1960年 ノースカロライナ州グリーンズボロの白人専用食堂で黒人学生が抗議のシット・イン
- 1961年 「自由のための乗車運動 (Freedom Rides)」: 交通機関の人種隔離に挑戦し黒人と白人と一緒にバスで南部を旅行-白人による激しい妨害があるが政府の援助なし
- 1963年 奴隷解放100周年記念「ワシントン大行進」に黒人、白人約25万人が参加
- 1964年 公民権法成立-人種差別制度が法律で禁止
黒人指導者マルカムX暗殺
ミシシッピー州で大規模な黒人選挙権登録運動- 「Mississippi Freedom Summer」
- 1965年 新公民権法 (投票権法) 成立-影響力大で南部黒人の選挙権登録が進む
ロスの黒人居住区ワッツで大規模な人種暴動
- 1966年 「ブラック・パワー」のスローガン出現-白人の反発「White backlash」
- 1967年 アメリカ史上最大の都市暴動「Long hot summer」
- 1968年 キング牧師暗殺
- 1969年 ブラック・パンサー党指導者、警官隊に射殺される

<黒人の60年代>

キング牧師は市民的不服従の精神に基づく非暴力直接行動 (デモや座り込み) により団結すれば差別を撤廃できうることを証明した。しかし対する人種差別主義者は暴力で応えたのである。連邦政府も大統領のもとで黒人保護を拒み、その結果活動家の暗殺などを招いた。

1965年の新公民権法成立により南部の公民権闘争が一段落し、舞台は都市へと移る。法律上では既に平等な大都市の黒人たちの実質的差別に対する怒りが噴出したのである。南部で有効だった非暴力路線も都市の黒人地区の貧困問題には不十分と考える人々が戦闘的、反体制的な黒人運動団体を発展させる。「ブラック・パワー」とは、白人から与えられたどんな進歩にも不信を表明し温情主義を拒否するもので、人種の誇り、黒人の独立の達成のため黒人を分離すべきという主張である。そして1968年にキング牧師の暗殺という事件が起こり、黒人たちの間で戦闘的な運動への共感が高まったのだ。

公民権運動は多くの白人学生によってささえられた。彼、彼女たちは南部で黒人の意識向上を支援したり、SNCC (学生非暴力調整委員会) などの新組織で活動した。これは罪の意識を持つ白人が黒人と共に差別と闘うことにより自らの存在を確かめようとしたのが動機の一つかもしれない。しかし、「ブラック・パワー」が黒人の自立をもとめるスローガンとして叫ばれたとき、白人は黒人にとって不要の存在となったのである。黒人は白人を排斥することにより自らのアイデンティティを保とうとしたのだ。

<60年代その後>

60年代に燃え上がった公民権運動は未完のまま勢いを失った。何故か、その理由を私なりに考えてみる。

あまりの差別のひどさに立ち上がった黒人は、キング牧師と共に人種差別のない約束の土地を夢見た。しかし、黒人はその土地が存在しないことを知った。それならば、黒人全体に対する差別撤廃はあきらめ、自分のみ白人社会に融合するか、または居心地の良い黒人だけの社会に安住するか、という二つの道のどちらかひとつを選んだほうが生きやすくなる。自ら壁に頭をぶつけ痛い思いをするよりも、一生のうちに成し遂げられないことに全てを注ぐよりも、決して満足しているわけではないが前よりはだいぶ良くなった生活にこもったほうが安全だと考える黒人が多いのではないか。

60年代、頭脳を、体力を、時間を、ある人は命を消費して黒人を守るために闘った。今、その結果得た権利を元手に、頭脳を、体力を、時間を自分のために使い、地位を貯蓄している。いわゆる（黒人としては）かつてないほど生活水準が高い中産階級や、最近金権主義的イメージがあるバッピー（黒人版イッピー）の出現である。その半面「消費だけで貯蓄のヘタな黒人」という白人の作った通説を体現している黒人も多い。底辺の貧困層を形成している黒人は、今や70年代の約3倍にも増えている。両者の隔たりは大きく、かつてのように一つの目標に向かって奮進することは難しい。「アメリカの黒人は二つの人種によって嫌われる。ひとつは白人によって。もうひとつは黒人によって。」という古いセオリーはいまでも生きているのだろうか。

<おわりに>

黒人について考えるようになって今までとは違った見方をするようになった。例えば前出プリシーである。映画「風と共に去りぬ」で彼女は愚図でノロマで馬鹿で気がきかなくてスカーレットが怒って当たり前な奴隷のステレオタイプとして描かれている。今までは「もうっ、プリシーったらっ！」とアリアリしていた私であるが、今では彼女の悲鳴が奴隷としての叫びに聞こえてしまう。この映画は実に面白い映画であるが、黒人にとっては切ない場面が実に多い。蛇足ながらこの映画のマミー役で黒人初のアカデミー賞を受賞した（1940年）ハティ・マクダウェルは黒人であるという理由で受賞式には列席できなかった。彼女の胸中いかばかりか。（そのかたきを討つように、ホワイトハウスに最初に入った黒人は女優タルラ・バンクヘッドのメイド、ローズ・リレイである。）

60年代後半、理性に訴える方法から暴力路線へと移行した公民権運動はいわば抗議活動であり政治活動までには至らなかったが、60年代の黒人革命の結果、アメリカも黒人も大きく変わり黒人の地位も著しく向上した。しかし「White is beautiful」からやっつと「Black is beautiful」と言えるようになったのは黒人がアメリカに上陸してから300年後である。長い差別の歴史に急に終止符がうたれるとは考えられない。むしろ、差別や偏見のない社会はあり得ないと思う。人間には優越感をかきたててくれる相手が必要不可欠だ。他人を憐れむことの出来る自分に陶醉する楽しさもある。「ブラック・パワー」で有名なSNCC委員長ストクリー・カーマイケルの女性差別の言動が示すように、差別撤廃を求める黒人内部でも差別はもちろんあった。

理性では人種差別の存在は許せないが、性善説を信じるにしても、人種差別が世の中から抹殺されることはないと思う。これが私の人間に対する偏見であるならいいと思う。

参考文献

- 1) 磯村栄一編：現代世界の差別問題，東京，明石書店，1985.
- 2) 越智道雄：アメリカ「60年代」への旅，東京，朝日新聞社，1988.
- 3) 砂田一郎：現代アメリカ政治—60～80年代への変動過程，東京，芦書房，1985.
- 4) Chambers, B. . : アメリカ黒人抵抗史，(岡田泰行訳)，東京，明石書店，1987.
- 5) Glazer, N. : 人種のるつぼを越えて—多民族社会アメリカ，(阿部齊訳)，東京，南雲堂，1986.
- 6) Guy, R . : 女友だち，(加地永都子訳)，東京，晶文社，1980.
- 7) Walker, A. : 紫のふるえ，(柳澤由美子訳)，東京，集英社，1985.
- 8) 検証アメリカの黒人と白人. ニューズウィーク日本版，3(10) : 6 -21, 1988.

人種差別：教育の機会均等にむかって

神場 清治

I はじめに

合衆国上院に1970年に設置された「教育の機会均等にかんする特別委員会」が、最終報告『教育の機会均等にむかって』を提出したのは1972年のことである。ここにはそれまでのアメリカにおける教育上の人種差別の実態が述べられている。その内容は60年代の黒人差別と深く関わっていると思う。黒人の教育問題を材料として差別について考えてみたい。

II 差別について考えたこと

“差別”に対して初めて興味を持ったのは、藤村の「破戒」を読んだ中学生の時であった。——主人公丑松が、父に『絶対に云ってはならない』と口止めされている自分の“身分”を隠して苦悩しながら生きてきたが、最後に父の戒めを破り、自分が被差別部落出身者であることを告白してしまう。そして教師である彼が、教え子たちに対して、自分が身分を隠していたことと、不浄な人間であるということをややめる。——という話であった。

“丑松はいったいどうなってしまうのか？”という推理小説を読むような感覚で幾晩か夢中になって読んだ記憶がある。「破戒」は面白かった本であると同時に、それまで私が知らなかった日本人による日本人の差別の存在を教えてくれた。

その日本人による日本人の差別を知らなかった中学生の私は、日本人による朝鮮人の差別や白人による黒人の差別は知っていたように思う。何故だろうか…。それは多分、差別する側とされる側にハッキリと区別するもの（国籍や皮膚の色）があるからであろう。

「破戒」を読み終えた時、「差別とは酷いものだ。丑松は可哀そうだ」という感想を持ったが、丑松が「自分が不浄な人間である」ことを皆にあやまったことに対しては疑問を持たなかった。この世に不浄な人間などいるはずがないのに、私は「不浄な人間が清浄な人間に対してあやまるのは、当たり前」と無意識のうちに思っていたのではないだろうか。その時私は差別する側に立っていたのだと思う。

差別というものは、差別する側と差別される側の二つの立場があって初めて生じるものである。そしてその二つの立場しか無いと思う。

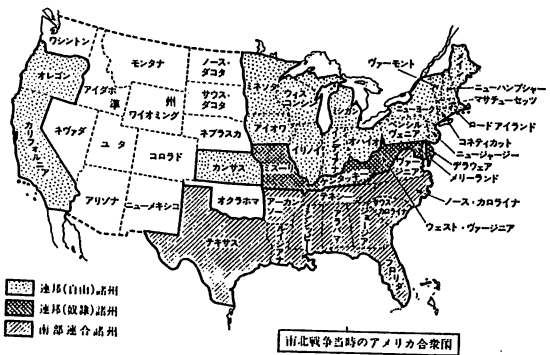
現在、南アフリカ共和国では日本人は「名誉白人」などと言われているが、これは侮辱以外の何物でも無い。ここで「名誉白人」でいることが名誉であると考え、差別する側に回るか、侮辱であると考えて差別される側に立つか。自分自身の意識によってどちらの側にも立つことができる。まず、その点を認識しなければならないと思う。差別とは、人間が作り出すものであり、作り出した者にとって都合の良い状態とは、被差別者を自分たちに合せて啓蒙するか、無知のまま放っておくかではないだろうか。そう考えた時、教育の問題は、非常に重要な意味を持つてくる。

Ⅲ アメリカ黒人の歩み：初の上陸から『教育の機会均等にむかって』提出まで

『教育の機会均等にむかって』提出までの歴史的背景を理解するため「アメリカ黒人史略年表」の中の教育に関連のあるところを抜き出して、年表を作ってみた。

アメリカ黒人史略年表（「アメリカ黒人の歴史」より抜粋）¹⁾

- 1619 ヴァージニア植民地ジェームズタウンにオランダ船が入港、20人の黒人を年季奉行人として売却
- 1787 ニューヨークで初のアフリカ人自由学校を同地の奴隷解放協会が建設、生徒40人。
- 1855 マサチューセッツの学校で人種差別を撤廃
- 1863 奴隷解放宣言
- 1896 最高裁の判決「分離」はすれども平等
- 1909 全国黒人向上協会（NAACP）の創立
- 1920 南部農村から北部都市への黒人人口の移動このころから激しくなる
- 1950 NAACPを中心に教育上の人種差別を攻撃
- 1954 連邦最高裁、公立学校での分離教育を違憲と判決
- 1956 101名の南部議員、共学に対して団結。アラバマ大学で黒人の入学をめぐる紛争。
- 1959 この年まで、アラバマ、ジョージア、ルイジアナ、ミシシッピー、サウスカロライナの諸州、まったく共学を実施せず
- 1962 黒人学生メレディス、ミシシッピー大学入学事件
- 1970 ニクソン大統領、差別撤廃は漸進的に行なう旨の教書発表。「教育の機会均等にかんする特別委員会」設置
- 1972 『教育の機会均等にむかって』報告



まず、気が付くのは1896年に出された最高裁判決「分離はすれども平等」が、それから60年たった1954年に違憲とされたこと。白人と黒人が一緒に学ばねばならないとしたことは意義のあることである。次に北部と南部では、その対応に大きな差があること。北部では差別撤廃に積極的であることに對し、南部では差別することに積極的である。また、17世紀に制定された各植民地の「黒人法」には黒人に読み書きを教えることを禁止する事が定められていた。そのことから、白人の“被抑圧者に対して教育を与えない”という姿勢を知ることができる。次に、教育の中に蓄積された差別が1972年にどのように把握されたのか、みてみたい。

IV 合衆国上院「教育の機会均等にかんする特別委員会」報告、『教育の機会均等にむかって』

1970年の初め、「教育の機会均等にかんする特別委員会」が上院に設置された。この委員会が、ほぼ3年にわたる綿密な調査研究ののち、1972年12月31日に提出した最終報告が、『教育の機会均等にむかって』(U.S. Senate, Select Committee on Equal Educational Opportunity, Toward Equal Educational Opportunity)である。1955年のモントゴメリーのバス・ボイコット闘争後に高まった黒人の差別廃止運動がそのまま60年代の激動の時代に突き進んでいった。『教育の機会均等にむかって』は、1970年に委員会が設置され、1973年に報告書が提出されていることから解るように、60年代の様々な問題と無関係ではあり得ない。従ってこの報告書を考えることによって60年代の黒人差別を浮き彫りにすることができると思う。

まず、「教育の機会均等にかんする特別委員会」が、教育の機会均等という概念を、どのように考えているかという「人生におけるさまざまな機会というものが、一人ひとりの能力や選択に応じて与えられ、何人も、社会における人種的、宗教的、社会的、経済的、その他の集団への所属いかんによって成功する機会を奪われない、というのがアメリカの民主主義制度の根本的な目標である。この目標がどこまで実現されているかが、アメリカ社会における機会の均等ならびに教育の機会均等の程度をはかる基準である。」と考えている。次に、実現されるべき教育の機会均等にたいしては「学校教育の成果という観点からみれば、社会のなかの各集団における同等の能力を持ち同一の選択を行なう一人ひとりが、社会生活に参加し、そこで成功する機会をひとしく享受する時、教育の機会均等は達成されているということができる。」そして現実に存在する不平等をどのように把握しているかという、「教育の機会均等は、学校教育の過程やそこに含まれている諸要素のなかに不平等が存在しないかどうか、という観点からも定義されなければならないのであって、本報告は、教育の過程における不平等の要素にも多大の関心を払うものである。不平等の要素とは、具体的に例をあげれば、人種や社会的経済的な階層にもとづく生徒の分離、教育予算の不均衡な配分、人種上の少数集団の児童の学校内での処遇などである。」としている。

生徒の分離とは、南部の諸州が、1954年に分離教育を違憲とした最高裁判決後も、様々な方法を講じて分離教育をあくまで維持しようとして1959年まで共学を実施していないことを指している。また、教育予算の不均衡な配分とは、教育費の基本的財源を地方団体の不動産税に求めたことによって富裕な学校区と貧しい学校区に、予算上の差がでることである。

教育の機会均等を以上のように把握した委員会は、これまでのアメリカの公教育について、つぎのような反省を加える。「今日においても、これまでのアメリカの歴史をつうじても、生まれた場所、皮膚の色、言語、出身国、文化的背景、両親の社会的・経済的地位といった諸要因が、各人の生活圏や受ける教育の質をもっぱら決定している。アメリカの公立学校制度は、白人として生まれついていない児童、母語が英語でない児童、あるいは、たんに貧しい家庭の児童を、あまりにしばしば見捨てているのが現実なのである。」²⁾

この報告書は、現実を率直に捉えたものとして画期的なものであると思う。不平等の要

素を経済的なものと人種的なものとの大きく2つのものとして捉え、今日においてもそれらの要因が、影響を与えているとしている。上院に設置された委員会が、人種差別の存在を認めているのである。そのような意味において問題を正面から捉えた立派な報告である。1972年にこのような報告書が提出されたのは、60年代に大きく揺れ動いたアメリカ社会の現実を直視せざるを得なくなったことの反映だと思う。

V おわりに

アメリカに於ける黒人差別は、1619年、初の黒人“輸入”から始まっている。その後350年間、様々なことがあったが『教育の機会均等にむかって』は、差別の現実を直視し、反省を加えた有意義な報告である。私たちは、差別を作り出すこともできるし、その解消に向って努力することもできる。また、私たちは差別する側に立つ事もできるし、される側にも立たされ得る。その時のために現実を直視する目を養うことが大切である。

アメリカの差別問題は、決して他人事ではない。日本の教育問題にも、様々な差別が存在している。それらの事を考える上でも『教育の機会均等にむかって』は、示唆に富んだ報告だったと思う。

本田勝一の「アメリカ合州国」の中に次のような一節がある。

「コロンブスがアメリカを“発見”したって?!」

と、ハーレムのある書店で50歳前後の黒人がせせら笑った——

「ふざけるな、とはこのことですよ。何万年も前にアメリカ・インディアンが発見して住みついていたんだ。コロンブスは白ブタどもの侵略の先兵として、アメリカに“到着”しただけのことじゃありませんか。それに、コロンブス以前から西アフリカの黒人国が大西洋を横断してインディアンと交易していた歴史がある」³⁾

なるほどそう言われてみれば確かにそうである。この黒人が言っていることは、私が世界史の時間に習ったこととは、違う。それはつまり、立場が変われば物の見方も変わるということであろう。

私たちは、差別する側の目ではなく、差別される側の目で、物事を見て、判断しなければならぬし、そういう意識を持ち続けなければならないと思う。

最後に昨年亡くなった千葉敦子さんの一言「差別されていることに気がつかない人は、差別していることにも気がつかない。」

引用文献

- 1) Franklin, John Hope : アメリカ黒人の歴史。(井出義光等訳) 東京, 研究社, 1978.
- 2) 大塚秀之 : アメリカ合衆国史と人種差別。東京, 大月書店, 1982.
- 3) 本多勝一 : アメリカ合州国。東京, 朝日新聞社, 1970.

60年代の学生たち—いちご白書をもう一度—

川村 順子

【はじめに】

1960年代もまた他の年代と同じように様々な出来事があった。それらは1960年代特有の出来事ではなく、50年代や、それ以前からの続きであり、その後も70年代や今日へと続いてさらにこれからも続くのである。

学生運動も60年代に初めて起こった現象ではなく、それ以前にもあったように思う。朝日ジャーナルをながめてみると、60年では既に韓国にて学生によるデモが起こっていて、61年には「現代の学生運動」なる本が出版されている。そして学生運動が、現在だって終わってはいないというのは、時として辺境の相模原の某大学にすら、突如構内にたて看板が現れることもあるからである。

【学生運動とは】

さて、学生運動とは具体的にどのようなものであったのか。60年代のアメリカを意識して追求してみる。

行動形態を挙げてみると、大規模なデモ、すわりこみ（シットイン）、大学本部の占拠、警官隊との衝突、学生側のストライキ並びに教授側の授業放棄など、そして不服従。結果的に大量の逮捕者が出たり、停学・退学処分が行われた。

それから彼らが掲げた主張にはどんなものがあったのか。言論の自由を求める運動（FSM=Free Speech Movement）、人種差別反対運動、黒人の公民権（シビル・ライツ=Civil Rights）運動、そしてベトナム反戦運動がその主なものであるが、後にはデモなどで処分の決まった学生の処分撤回などの要求もあった。

ここで実際に起こった事件を紹介しようと思う。

《バークレーにて》

1964年12月のはじめ、アメリカのカリフォルニア大学バークレー校で学生たちのすわりこみデモが起き、これに参加した一千人の内、八百人までが逮捕されたという。

ことの起こり=当大学の門前にて、学生がパンフレットの配布、募金演説その他の活動を（もともと、こうした政治的活動は実は禁止されていたが）何年来もの習わしで行っていた。学校当局は規制していなかった。ところが学外より抗議があつて、9月14日、大学のキャンパス内と市街地に面した校門脇の場所での政治活動を規制すると学生部長よりの書簡が出された。これに対し「不公平」との意見がFSMとなって発展したのである。

9月30日、8人の学生が不法活動及び不法集会参加などのかどで無期停学処分を受けた。翌日公民権運動にかかわっていた学生が門近くで演説を始めた為、逮捕されそうになり、これに対して、怒った学生たち三千人が逮捕にきたバトカーを取り囲み、32時間クギづけにしてしまった。同時に講堂ですわりこみが行われた。この時点でやむなく、交渉が行われ、結果デモは解かれ、逮捕者は釈放され、8人の停学処分の学生たちの扱いについては教

授会に委ねられた。

11月20日、当局側は「学生の政治活動を問題になった場所を含め一定の場所で認める、但し、その学生の政治活動というのは合法的なものであるという保証が必要である。」と妥協案を提示したが、学生側は「政治活動が合法的かどうかは裁判所が決める問題で大学がすべきでない。」と主張した。そして学長が8人に厳格な処分を決定したことを契機として12月2日から3日にかけて大学本部を学生が占拠し、州知事の要請により、警官隊の学内乱入ということになったのである。

その後、クリスマス休暇を経て、1月に入って、パークレーの分校長が交代し、この分校長が自分の権限で暫定的な新しい規則を出し、これが、先の問題になった地点での学生の活動を認める等の、非常に緩やかな条件であったので学生側の運動は自然に収まったような形になった。

このときの闘争の主旨はFSMであり、発端となった政治活動や演説などは他の運動であったかも知れないが、学園内の権利というものを強く要望している。

《ハーバードにて》

1967年、ダウ会社（ナバーム弾をつくっている）の求人係リービット氏がハーバード大学に求人を訪れた際、SDS（民主的社会のための学生連合）の平和デモが始まった。と、そのうち彼が面接を行うことを物理的に不可能にするため、すわりこみが開始された。そうして、それぞれ違った見解を持つ学生たちもすわりこみに参加した。大学関係者たちは、彼を解放してやろうといういろいろ努力し、結局デモ参加者が彼と話し合い、その結果、デモ参加者たちは自分たちにはダウ会社のナバーム弾製造を阻止することは出来ないが、大学当局のダウ会社歓迎を阻止することはできるかも知れないと気づいた。そこでリービット氏を解放し、その後ダウ会社・中央情報局（CIA）・軍部の求人を拒否すること、デモ参加者を一人も処罰しないことを大学側に要求した。

この闘争では、最終的に運動に参加したものが、実は同じ目的で固まっていなかったもので、後に内部分裂を起こしている。又、大学側の処分も、きわめて緩やかで、放校となったものは一人もなく、謹慎処分を受けたもの81人、戒告を受けたもの171人であった。

《コロンビアにて》

1968年4月末、コロンビア大学にて、大学本部のあるロウ・ライブラリーを含め5つの建物が2度にわたって占拠された。大学当局は、警官隊を導入し、学生五百数十人の逮捕となった。このとき、アメリカには珍しく、ニューヨークの下町に赤旗がひるがえった。

このとき、学生たちの要求は3つあった。

1. 大学が市から借り受けた近くの公園に建設中の新体育館は建設を中止すること。なぜなら、近隣住民（主として黒人）の使用部分と、大学生（主として白人）の使用部分とを区別していて、人種差別を行っているから。
2. アメリカの有名大学、研究所十数機関で組織される防衛分析研究所（IDA=Institute for Defense Analysis）は、高度の戦略のみならず、ベトナム戦争にも使用されている破壊兵器や内乱弾圧用の武器開発に従事しているものであるから、コロンビア大学のこれへの参加を取りやめること。

3. 屋内デモを禁止するカーク総長の最近の命令に違反するかどで処分された6人の「民主社会のための学生運動 (SDS) の学生の処分撤回。

この闘争は、あの「いちご白書」であり、映画化もされている。

【日本との相違点】

日本国内では学生達の要望は、安保闘争や、大学（学内）の自治権であったり、体制へ不満というものが主流であったように思う。勿論、ベトナム反戦平和運動などもあったが、国内の問題に対するものは先に掲げたものが主流ではないだろうか。

一方アメリカでは、人種差別に対する運動もあり、やはりアメリカは多民族国家であると実感させられた。日本では人種差別問題といえば同和問題が対応するかも知れないが、全体に共通する主張には掲げられなかったように思う。

また、ベトナム反戦という主旨があり、その説明からアメリカの大学が防衛や軍事研究にかなり従事しているとの印象を受けた。さらに企業の研究機関的な部分があることも見逃せないと思う。最近日本でも企業の融資（寄付？）によって学科（研究室）が増設された例があったが、そのニュースの折にもアメリカではそういった例は以前から少なくないとのことであった。関連して本来の学問とは何かという問題も投げかけられている。

そういった企業と学問の場との癒着をいち早く感じ取り、アメリカの学生たちは反発していたのではないだろうか。

【現代社会から】

日本では、学生運動の嵐が過ぎた後、学生たちは無気力・無関心・無感動の三無主義者といわれた時があり、そして今では新人類といわれている。現代では一致団結や闘争の時代ではなく、個人至上主義ともいべき風潮がある。自分の生活範囲以外のことにに関して、無関心かつ行動も起こさない。自分達の趣味の世界に生きているといった感じであろうか。

歴史的にみても学生は革命運動や低開発国の民族独立運動に重要な役割を果たしてきた。時として結集する学生のパワーが、政治面を含め、時代に変化を生んだ。例えば、極論かも知れないが、幕末の勤皇攘夷も一つの学生運動ではないだろうか。

果して何ができたのかを問うよりも、理想があり、実現しようという活力があり、それに向かおうとしたエネルギー。たとえ、結果として何も残らなくても、何かを変えられると信じて行うその生真面目さ。それらは、この現代では個々としては存在しても、集合としては見いだせない。

【さいごに】

さいごに、学生運動という言葉であるが、これは類義語として他にもいろいろある。学園紛争、大学闘争、スチューデントパワーetc. 私個人としては、スチューデントパワーというのが気に入っている。理想や主義やなにもかもをひっくるめて学生たちが何かをやろうとしていたそんな情熱を想い浮かばせられるからである。

【引用文献・参照文献】

- 1) ミヲ・レイノルズ：アメリカのライトイン運動，朝日ジャーナル，9(1):p.4-5,1967.
- 2) アメリカ大学生の政治活動(米「ネーション」12月21日号より)，朝日ジャーナル，7(2)
:p.60-61,1965.
- 3) 綿貫謙治他：バークレー事件からの教訓，朝日ジャーナル，8(11):p.137-145,1966.
- 4) ジョージ・ロス：ハーバード大学生の反戦抗議，朝日ジャーナル，10(4):p.115-120,
1968.
- 5) P.G.アルトバック他：座談会スチューデントパワー(12)アメリカ，朝日ジャーナル，
10(37):p.35-39,1968.
- 6) 特集”社会爆発”としての大学紛争，朝日ジャーナル，10(52):p.4-25,1968.
- 7) 鶴見良行：スチューデントパワー(26)アメリカ，朝日ジャーナル，10(52):p.35-37,
1968.
- 8) 鶴見良行：スチューデントパワー(27)アメリカ，朝日ジャーナル，10(53):p.35-38,
1968.
- 9) 山口光朔：変貌するバークレー，朝日ジャーナル，14(14):p.21-25,1972.
- 10) 高瀬昭治：新しい価値の信者たち，朝日ジャーナル，14(44):p.44-49,1972.
- 11) ジェームズ・クネン：いちご白書. 東京，角川書店,1970.
- 12) D. リースマン他：大学革命. 東京，サイマル出版,1968.
- 13) IDE大学教育研究会：世界の大学問題Ⅰ. 東京，東京大学出版会,1969.

I've had only one brother
from may 20 1987.
There was the sword of wood
in my brother's room.
When my friend found it,
he murmured, "That's Yukio Mishima."
* * *
There have been the sword
in the hollow room.
I can understand that mean only a little.

60年代の書誌解題

<図書館>

Handbook of medical library practice. 3rd ed.

Ed. by G.L. Annan, J.W. Felter - Medical Library Association, 1970.

アメリカ医学図書館界の黄金時代であった1960年代の所産ともいえる。実際的な内容だけでなく、医学図書館サービスを支えていく理念や研究調査法も詳述しており、現在でもその内容は新鮮さを失っていない。

Medical bibliography in an age of discontinuity.

By Scott Adams - Medical Library Association, 1981.

スコット・アダムスは、第二次世界大戦後の医学書誌学の巨人であろう。Index Medicus だけでなく、Excerpta Medica, Science Citation Index などの発展について、生物医学研究や情報政策の動向をふりかえりながらまとめている。

Reader in medical librarianship.

Ed. by Winifred Sewell - Greenwood, 1973.

この本は“Readers in Librarianship and Information Science”シリーズの一冊で、医学図書館に関連する41の論文から成るリプリント集である。それらの論文は1962年から1972年にかけて発表されており、約半数は Bulletin of Medical Library Association 誌に掲載されたもの。内容はⅠ.医学図書館をとりまく環境、Ⅱ.専門家としての医学図書館員、Ⅲ.サービスのための医学図書館の機構、Ⅳ.医学図書館の種類、Ⅴ.医学図書館ネットワーク、の5つに分れている。特にⅠ.医学図書館をとりまく環境では、医師の教育や医学情報の流通機構などについての論文も含まれているので、1960年代の米国医学図書館界を展望するのに、適当な一冊である。

市民の図書館 増補版

日本図書館協会編 日本図書館協会 1976

図書館への市民の願いに応えるため、図書館はいま何をすべきかを3つのテーマにまとめ、市民に力強く紹介した最初のもの。①サービスの最前線での司書たる者の心構えや倫理、②市民の生活に一步も二歩も近づいてサービスしようという図書館の熱意、③BM(Book Mobile)等を駆使して図書館をもっと市民のために仕上げようという工夫が述べられている。これはいずれも図書館サービスの草分けである日野市立図書館の実践に基いている。中心的な論点は「(サービスポイントは)身近かに、(新鮮な資料は)豊富に、(図書館員は)親切に」であるが、専門職たる我々がいつも振り返らねばならないエッセンスが、1960年代の実践成果を通して生き生きと表わされている。まさに必読・再読の書と言えよう。

〈科学・情報〉

アメリカジャーナリズム報告

立花 隆 文芸春秋社 1984

「ベスト&ブライテスト」の著者であるハルバースタムや、ウォーターゲート事件報道のウッドワード記者などとの対話にもとづいた体験的ジャーナリズム論である。



断絶の時代

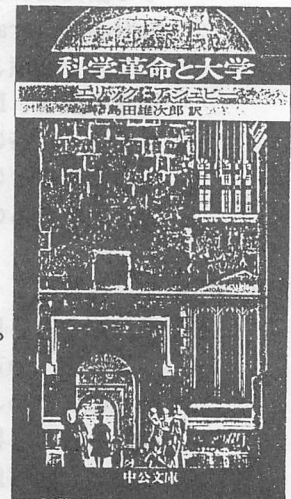
P. F. ドラッカー著 林 雄二郎訳 ダイアモンド社 1969

本書の副題は、“来たるべき知識社会の構想”である。原著の刊行とほぼ同時に、日本で翻訳が出版された。発売後3ヵ月で、30刷が印刷されたベストセラーである。大学紛争が新聞紙面をにぎわしていた時代に、1970年代の情報に重きを置いた社会の到来を冷静に予見していた。60年代の社会を理解するための教科書であり、日本について多くの記述がなされている。

科学革命と大学

エリック・アシュビー著 島田雄次郎訳 中央公論社 1977

60年代の社会問題を代表するものに大学紛争がありました。ここで様々な問題が露呈されたことになりましたが、大学の在り方も問われました。当時、朝日ジャーナル誌をはじめ、多くの大学論が論じられた。



科学技術情報ハンドブック

日本科学技術情報センター 1977

日本の情報活動機関を中心に書かれたハンドブック。海外の情報提供機関の現状や提供情報の種類、内容等も豊富。各機関の設立背景、歴史的展開、年表なども掲載されている。参考文献の記載もあり、重宝する。

ミハイロフ科学技術情報概論 (NIPDOCシリーズ 10)

日本ドクメンテーション協会 1969

1965年にソ連科学技術情報研究所所長ミハイロフらによって著された、“科学情報概論”の抜粋翻訳である。当時のソ連の情報科学教育の質の高さがうかがえる。1960年代の東欧諸国の情報活動について記載あり。

科学の科学

M. ゴールドスミス A. マカイ著 是永純弘訳 法政大学出版局 1969

J. D. バナールの有名な書物「科学の社会的機能」(1939)の刊行25周年を記念して刊行されたものである。科学それ自体を考究し、人間のコントロールをはずれることのないように注意することが勧告されている。60年代の巨大科学の時代における良心的科学者の論集である。

科学の科学・科学情報

D. プライス著 島尾永康訳 創元社 1970

“Little Science, Big Science.”の原題で、1963年にコロンビア大学出版部から発行された。科学文献の指数的成長を示し、科学社会学の古典になっている。1972年の石油ショック時までの、戦後経済の高度成長や巨大科学の隆盛を背景に、多くの読者を得た。批判的に読まれる必要があり、一部科学的なデータ処理がなされていない部分があるが、60年代の科学を知るための必読書であることに間違いはない。



N I S Tとその周辺 (NIPDOCシリーズ 12)

日本ドキュメンテーション協会 1970

科学技術会議が1969年10月31日に答申した科学技術情報の全国的流通システム構想(N I S T構想)の全文をまとめた一冊。クリアリング機能の整備、中央ディポジトリや各種センターの設置、国際情報流通協力、人材育成、情報処理技術の開発等の方策について協議されている。日本のワインバーグ・レポート的答申である。

メディア論：人間の拡張の諸相

M. マクルーハン著 栗原 裕 河本仲聖訳 みすず書房 1987

本書はUnderstanding Media: The Extensions of Man, 1964.の全訳である。「われわれの時代が全一、共感、自覚の深さにあこがれるのは、電気技術に自然に付随するものである。われわれの時代の前の機械工業の時代は、私的な見解を激しく主張することが自然の表現の様式であるとかんがえた……われわれの時代の特徴は課せられたパターンに反発することだ。われわれは、突然、物や人にその全体としての存在を主張させてみたくなっている」。活字と機械の技術のあと、現代の諸メディアは人間をどう変えるか。現代文明と新しい人間環境へのスリリングな予言である。(裏表紙より)

科学と政府と情報 (NIPDOCシリーズ 1)

日本ドクメンテーション協会 1966

いわゆる、ワインバーグ・レポートの全訳。科学者、技術者、研究所、政府における情報伝達の責任について明確に言及している。また、このレポートの、図書館界の反応に対する見解を述べた、'Second Thoughts on Scientific Information'という講演の主要部分も掲載されている。

<医学>

ジャパニーズドクター：アメリカに日本医学を植えた男

廣瀬輝夫 講談社 1987

著者は現在ニューヨーク医科大学臨床外科教授である。彼は豊かなアメリカ時代に留学し帰国したが日本の水に合わず、1959年に渡米し1960年代に充実した研究生活をおくり、米国永住を決意し現在に至っている。彼は1960年代は、米国医学が黄金時代であったと定義している。その中で、彼自身も世界で初の心臓バイパス手術を成功させ、無血人工心肺を発明したりした。



神々の沈黙

吉村 昭 角川書店 1972

1967年、初の心臓移植が、南アフリカ共和国の外科医クリスチャン・バーナードにより行なわれた。本書には、このバーナードの手術を中心に、1968年札幌医大で和田寿郎とその外科グループにより行なわれたものを含むいくつかの心臓移植について、担当医の性格、野心、挫折、患者の心境、心臓提供者の出現...等、手術にまつわる事がらが書かれている。提供者の死の判定等、1980年代の日本でも議論されている問題もでてくる。

欧米諸国の医学教育改革

雨森間一 医歯薬出版 1972

1972年に発刊された本書は、当時の欧米主要諸国の医学教育改革について概観しており、併せて各国の医学教育の歴史にも言及している。それはいわば“1960年代に至るまで”といった感じで、60年代のアメリカ医学教育並びにその他の国々の医学教育について概観するには手ごろなものと思う。この中で取り上げられているのは、アメリカ、イギリス、西ドイツ、フランス、スウェーデンについてで、わが国についても若干述べている。古い本ではあるが、文体などから当時の雰囲気（医師不足や大学紛争等）なども感じられ、参考になるところ大であった。また、巻末に付記されている引用文献も有用であると思う。

ウイルスと人間

甲野禮作 玉川大学出版部 1981

スモンがキノホルムによる薬害であることは、今日すでに常識化され、キノホルムの販売中止がすでになされている。しかし、スモン発生当時は、ウイルス説が主張され、新聞報道などでセンセーショナルにとりあげられたため、患者やその家族への社会的疎外(差別)がなされ、社会問題化した。科学者として、スモンの原因を追求し、薬害であることを明らかにした。スモンが学会で広く検討されるようになったのは、1961年の第61回日本内科学会のシンポジウムからである。それ以来薬害説に固まるまで10年を要した。

苦海浄土：わが水俣病

石牟礼道子 講談社 1972

「くだんの有機水銀とその他“有機水銀説の側面的資料”となったさまざまな有毒貴金属類を、水俣湾内にこの時期もなお流し続けている新日窒水俣工場が彼の前に名乗り出ぬ限り、病室の前を横ぎる健康者、第三者、つまり彼以外の、人間のはしぐれに連なるもの、つまりわたくしも、告発をこめた彼のまなざしの前に立たねばならないのであった。安らかにねむってください、などという言葉は、しばしば、生者たちの欺瞞のために使われる。」公害という名の恐るべき犯罪—人間が人間に加えた汚辱—水俣病。昭和28年1号患者発生以来十余年、水俣に育った著者が患者と添寝せんばかりに水俣言葉で、その叫びを、悲しみ怒りを自らの痛みとし書き綴った「わがうちなる水俣病」。「苦海浄土」は1969年にはじめて一本にまとめられた。



<宇宙>

ザ・ライト・スタッフ：7人の宇宙飛行士

トム・ウルフ著 中野圭二 加藤弘和訳 中央公論社 1981

アメリカにおける初期宇宙開発時代の様相を、徹底的な取材をもとに描いたノンフィクション(ニュー・ジャーナリズム)。歴史的展望のもと、1960年前後のアメリカの政治、精神、社会や人間の姿も、明確に描いている。



宇宙からの帰還

立花 隆 中央公論社 1985

60年代の宇宙開発競争を、宇宙飛行士とのインタビューにより明らかにしていった。語られているキーワードは、神と人間、科学技術と精神、宇宙と地球…。地球と宇宙との物理的距離、それは同時に精神的に大きな振幅を飛行士にもたらした。この体験は、人類が経験したことのないものであった。

〈産業〉

覇者の驕り：自動車・男たちの産業史

デイビッド・ハルバースタム著 高橋伯夫訳 日本放送出版協会 1987

これは、フォード社の栄光と破滅のノンフィクションである。アメリカ合衆国、フォード社の歴史を「The Reckoning（報い）」という観点からみたのである。その中で、ケネディ、ジョンソン政権のもとで国防長官を務めたロバート・マクナマラが登場する。彼は1950年代にフォード社に「神童」の1人として迎えられ1960年に社長の地位についたが、その後すぐにケネディ大統領に国防長官に任命され、ジョンソン大統領時代にはベトナム戦争の収拾に活躍した。彼のような人物が、1960年代に必要なとされたこと自体がアメリカの1960年代という時代を象徴していたのだと思われる。

マツハの恐怖

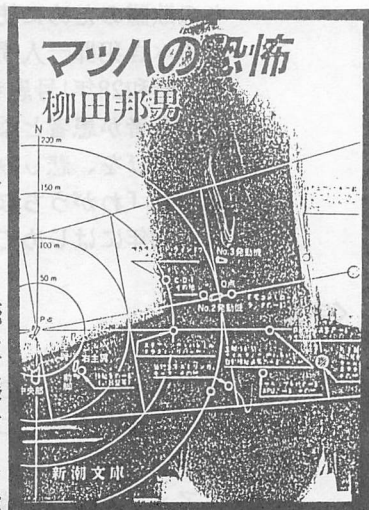
柳田邦男 フジ出版 1968

1966年2月5日から3月5日の、わずか1ヵ月の間に起きた、3件の連続航空機事故の原因を追求した本格ノンフィクション。第3回大宅壮一ノンフィクション賞受賞作品。

トーラス独走す

プレジデント社 1988

これは、まったく、今度オートラマから発売されたトーラスという名の車（文中では名車とある）の宣伝である。が、アメリカ車の発展の歴史についても触れられていて、60年代のデトロイトを中心として、自動車販売の状況等についても窺い知ることができる。ケネディの乗っていたリンカーン・コンチネンタルに代表されるアメリカ車の、60年代について想いを馳せることも一興ではないだろうか。



〈芸術〉

スペクタクルの六十年代

渡辺 淳 平凡社 1987

ひとつの境としての、《六十年代》という近過去には地球的規模での共通の顔が鮮明に浮かび上るし、この時代に世界が大きく転換したことは確かだろう。スペクタクル芸術は、世界的レベルで見て、重要な動きが60年代のフランスに集中的に見出せるからで、この出来事をあつかうことは、一種、世界の出来事を占うことができる。60年代は、フランスになお創造の活力があふれている最後の栄光の時代でもある。

アメリカン・ニューシネマ '60 - '70 (別冊太陽)

平凡社 1988

題名より明白でござりますが、アメリカン・ニューシネマの特集です。「俺たちに明日はない」を始めとして、108件の米映画作品について、一作品ごとにタイトル、発表年、名場面の写真に加え、あら筋や監督、出演者等の説明がされています。さらに、囲み記事にて、俳優（ジェーン・フォンダ等）や、その時代の事柄についての説明も盛り込まれています。映画をとおして、服装・流行り・出来事等60年代を垣間見ることができる一冊です。後半に構成者の川本三郎氏、小藤田千栄子女史のコメントがあり、両人のこの時代の見方が興味深いところです。



アメリカ1960年代：新たな感性の誕生

M. ディクスタイン著 今村楯夫訳 有斐閣 1986

原題はGate of Eden: American culture in the sixties.である。「シェイクスピアとキングズバーク、文学と映画、ベートーベンとロックの両方を甘受した文化」の時代であった60年代。20代の若さで60年代を過ぎた著者が振り返って見た「エデンの門」とは何か。

ぼくはプレスリーが大好き

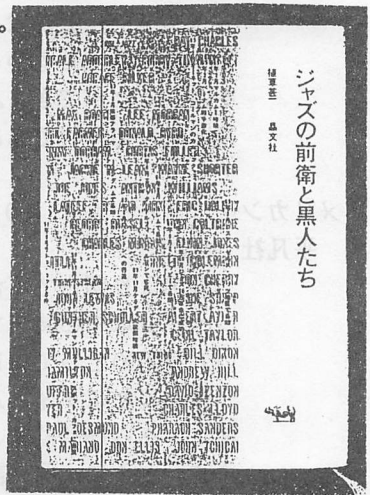
片岡義男 角川書店 1974

1950年代以降のアメリカ・ポピュラー音楽の変動を、社会、文化、経済、政治状況のなかで解き明かそうとしたものではないだろうか。スピード感のある文章が、音楽の流行を語りながら、アメリカ社会の構造的変化に肉迫した硬派の書物である。

ジャズの前衛と黒人たち

植草甚一 晶文社 1967

「社会の現状にたいする不満感、画一的なものを拒絶しようという意気込み、過去と現在の慣習へむけられた激しい反抗と攻撃、これがいろいろな度合いで混じり合いながら表現されるのがニュー・ジャズであり『ニュー・シング』なのだ。けれど注意しなければならないのは、その底流として生活を享受しようというロマンチズムが流れていることである。彼らは何かをもとめている。その説明しにくいものがく自由〉なのだといっている。」いわゆる「ニュー・ジャズ」は、アメリカ史上はじめての大きな規模で行なわれた黒人の開放闘争とともに生れたものである。とりわけそれは都市およびゲットーにおいて、しばしば最も急進的であった闘争の鍵を握る一要素ともなり、運動の主動的組織と結びついていた。本書は、1964年におこなわれたイヴェント「ジャズの十月革命」の周辺をおびた資料の渉獵の果てに徹視的に、そして同時代的にあとづけている。



〈世相〉

麻薬書簡

ウィリアム・バロウズ アレン・ギンズバーグ著 諏訪 優ほか訳 思潮社 1986

アメリカのビート詩人、アレン・ギンズバーグと、彼の麻薬の師とされるウィリアム・バロウズとの書簡集であり、三部から成る。第一部はバロウズが Yage という麻薬を求めて南米を旅した時に書き送ったもので、ここで会った人々、Yage を手にするまでのこと、その効果が彼の感覚でとらえられている。第二部は数年後にギンズバーグが南米に行ってアヤウアスカという麻薬を使って視たイメージを克明に描いたもので、その表現は詩を思わせる。ここで、自己を追求することを恐れた彼はバロウズに返答を求め、自分自身を見つめよという答を得る。第三部、ギンズバーグの自我意識は変貌をとげる。麻薬が、本質を追求しようとする原動力となり得るらしいことと、これが Musician が麻薬を使用する理由の一つらしいことを知った。

ジョン・ウェインはなぜ死んだか

広瀬 隆 文芸春秋社 1982

この作品は1950年代から1970年代までのアメリカ史の一面である。医学翻訳家である著者は、ジョン・ウェインの死亡記事を読んで癌で死ぬ映画スターが多いことに気付き、ある仮説を立てて問題点を掘り下げて焦点にライトを当て、その影に映った現代の日本の姿に警告を発している。

196Xレトロ大百科

アンテナ・ハウス編 ミリオン出版 1987

60年、ゴダールは言った。「勝手にしやがれ」。東京オリンピック、ケネディ暗殺、ビートルズ来日、三億円事件、アポロ月面着陸、etc…。興奮と混乱の60年代の中で、子どもたちはウルトラマンにヒーローを見出し、街はVANの袋を小わきにかかえた男たちや、ミニスカート、トンボメガネの女たちであふれていた。文化の先端を、若者たちが占領しはじめた時代、それが60年代——。(本文より)といった具合に、文化・TV・子どもたち、ファッション・スポーツ・映画・雑誌・音楽から60年代を証明する一冊。たくさんの写真が楽しい。巻末に60年代を知るための文学案内付。

アメリカ性革命報告

立花 隆 文芸春秋社 1984

60年代は、様々な権威や価値感に変動がおきた時代であった。60年代後半の政治革命の季節のあとにおとずれた性革命をレポートしている。

億万長者はハリウッドを殺す 上・下

広瀬 隆 講談社 1986

著者の歴史分析の方法は特異である。すなわち、「Who's Who」、「Who was Who」の二冊の本を歴史にあてはめてゆくことにより、この百年間に目ざましい発達をとげてきたアメリカの歴史の舞台裏を我々に見せてくれる。ここにすばらしい著者のことばがあるのでこれを借りよう。——ここまでは過去の100年史である。(中略)「歴史」の二文字は古い過去を感じさせるが、事實は違うようだ。そのことを知っていただくため、目の前の動きにも光を当ててみた。歴史は動き、われわれはこの線上に乗っている。歴史は現代であり、明日だったのだ。——



<アメリカ社会>

アメリカと日本

江崎玲於奈 三笠書房 1980

人類に国境はないとよく言われる。しかし、国によって求める「幸福」は違っており、価値基準にも特色がある。江崎博士は、アメリカと日本の価値観の違いを理解することによって未来への提言を試みたのだ。本書ではアメリカの価値観を中心に紹介されているが、それは日本を顧みる材料とするべきである。

原典アメリカ史 7

アメリカ学会編 本間長世ほか著 岩波書店 1982

これは、1961年から1976年までのアメリカ史を扱っていて、第1部「概説」、第2部「原典及び解説」にそれぞれ分れている。「概説」では「世界政策の挫折と転換」、「国内政策の転換とその背景」、「価値観の対立と混迷」の章があり、そこで記載されている34項目が「原典及び解説」という形で詳しく取り上げられている。著者の一人、本間長世が「第7巻の序」で次のように言及している。「レーガン政権登場の意義を理解するためにも、1960年代及び70年代をアメリカ人がどう生きてきたかを、歴史の記録となるべき原典に即してふり返ってみる必要があるとされているのである。」

アメリカンカルチャー 2:60'S (日本風俗じてん)

石川弘義ほか監修 三省堂 1981

本書は、現在の日本に生きている“文化”に、アメリカがどのように影響を与えたかを示す、全3巻のうち第2巻である。(第1巻 1940年代後半期と'50年代。第3巻 1970年代)現在、何の不思議もなく使っているクレジットカードやジーンズ、インスタント食品、またワイドショーやスーパーマーケット、ミニスカートも、すべて60年代にアメリカの影響をうけて日本の生活に浸透したものである。本書は、これら日常生活の中の製品、文化等を45項目にわけて、その歴史をたどることにより、60年代の日本とアメリカの姿を浮びあがらせている。



現代世界ノンフィクション全集 24:ガラスの紅いバラ, わたしのように黒く, ベトナム戦争の内幕

筑摩書房 1967

この全集の最終巻であるが、アメリカの60年代の3つの出来事が収載されている。それぞれ個別の作品であるが、著者は当時、特派員等の仕事でそれらに直接的に関わった人々である。ルポルタージュであるが、事件までの背後関係についても詳しく述べられていて、大変参考になった。著者、訳者はそれぞれ、ネリン・E・ガン、内山敏と、ジョン・ハワード・グリフィン、関口功と、ウィルフレッド・バーチェット、毎日新聞社外信部である。

ヒッピー、ブラック、プロテスタント (アメリカの世紀 8, 1960-1970)

TIME-LIFE BOOKS編集部編 高橋 正訳 西武タイム 1985

精力的な理想主義の波が起り、民衆が社会に身をもってコミットメント(参与)しようとする気風が生れた60年代のアメリカを、暗殺者、黒人、ミニスカートの女、宇宙飛行士など当時のアメリカの“シンボル”の写真で語る。

今日のアメリカ

本間長世編 南雲堂 1969

「講座アメリカの文化」というシリーズの中のこの一冊は、出版された当時の最も新しいアメリカという視点で書かれている。内容は経済、文学、黒人作家、ユダヤ系作家、演劇、美術、マス・メディア、ラディカリズムというように文化全般にわたっている。文末には各項目ごとに分けられた参考書目が上げられており、各文章末にも参考・引用文献が載っているので、さらに深い追求も可能である。編者が増刷のあとがきにも書いているように、1960年以降の時代の性格を探るためにも、1960年代を第二次世界大戦後の歴史的流れの中で位置付けようとしている本である。

〈ベトナム戦争〉

ライカでグッドバイ：カメラマン沢田教一が撃たれた日

青木富貴子 文芸春秋社 1981

ベトナム戦争に材をとった「安全への逃避」で、1966年にピューリッツァー賞をとり、1970年、カンボジアで34歳の生涯を閉じるまでの、カメラマン沢田教一の足跡をていねいにたどった本である。饒舌な文章よりも彼の写真で語られる、ベトナム戦争批判は、胸にするどくくびいてくる。

ベスト&ブライテスト 1 - 3

D・ハルバースタム著 浅野 輔訳
サイマル出版会 1976

理想主義者のケネディとベトナム戦争の非道さが、実は同一のものであることを描き出した大著である。医学図書館界の黄金時代であったアメリカの60年代は、同時に戦争の時代であったのだ。

ひしがれた巨人アメリカ：ベトナムでの失敗と明日の戦略

ハンソン・W・ボールドウィン著 吉本晋一郎訳 原書房 1973

何故ベトナム戦争でアメリカがベトナムに手こずって、解決に時間がかかってしまったかについての著者の解説。そしてベトナム戦争がアメリカ国民に与えた影響。また、アメリカが世界の中でどう見られるようになったか、アメリカ人である著者の見解が述べられている。



ベトナム戦争神経症

C.R. Figley編 辰沼利彦監訳 岩崎学術出版社 1984

“復員米兵のストレスの研究”と副題にあるこの図書は、“ベトナムで戦ったアメリカ人にベトナム戦が与えた長期的な心理的影響に関する最初の総括的報告”（前書きより）です。1964年から1973年まで、アメリカ人はアジアの小国の民族革命運動を潰すために戦いましたが、その過程で且てない大規模な反戦運動がおこり、60年代を特徴づけました。過去の戦闘と祖国の拒否によるストレスで苦しむ姿は“タクシー・ドライバー”等の映画や音楽、小説で見受けられますが、本書は治療者の科学的立場から、1978年にフィグレイによって出版され、防衛医大精神科グループにより1984年に日本語訳が刊行されました。“ベトナム復員兵を社会と歴史はどうみるか”と題したエピソードだけでも読むに値します。

<人種問題>

アメリカ合州国

本田勝一 朝日新聞社 1970

著者が1969年の5月から11月までアメリカ合州国に滞在した時のルポ。アメリカ原住民や、黒人の差別される側からみたアメリカを描こうとしている。「私たち日本人の知っているアメリカ史は白人によって書かれたものであり、アメリカ原住民や黒人にはそれぞれのアメリカ史があるのだということを認識しなければならない。」ということ強く訴えている。



自由への大いなる歩み：非暴力で闘った黒人たち

M. L. キング著 岩波書店 1959

1955年から1年間、モントゴメリーで差別待遇の廃止を求めたニグロ市民のバス乗車ボイコット闘争が行なわれた。本書はこの闘争の指導者M. L. キング牧師の手による、この闘争とその勝利の記録である。闘争中の彼の悩みについて、また信仰によりそれらを克服していく様子についても素直に書かれており、読む者に広い心と勇気を与えてくれる。5年前、スティービー・ワンダーのコンサートへ行ったとき、M. L. キングをたたえ、彼の誕生日を祝日にしようという歌「ハッピー・バースデー」が演奏されていた。多くの人の働きで彼の誕生日は祝日となった。1968年4月4日に暗殺された彼は、1980年代の今でも大きな影響力を持っているのだと感じた。

アメリカ黒人抵抗史

ブラホード・チャムバース著 岡田泰行訳

明石書店 1987

新大陸にスペイン人によって黒人が運ばれてから、1968年にマーティン・ルーサー・キング牧師が暗殺されるまでのアメリカ黒人運動通史である。各時代の運動指導者（黒人とは限らない）の演説や著作、新聞記事などが盛りこまれ、生々しい黒人差別とそれに抵抗した人々の主張に触れることができる。原題は“Chronicles of Black Protest”で1968年にアメリカで出版された。

アメリカ 黒人抵抗史



<大学紛争>

戦後の若者たち：叛逆の現場検証

福島菊次郎 三一書房 1980

言葉でなく写真を通して得る情報の多様性をあらためて確認する。60年代の学生運動がいかなるものであったのかを、この写真集から感じとって欲しい。言葉で理解しようとする必要はあるまい。しっかりと見つめることがすべてである。

全共闘グラフィティ

高沢皓司文／編 勝木雄二 小島由美子構成／
レイアウト 新泉社 1984

1969年1月19日東大安田講堂占拠を代表とする全共闘運動の軌跡を、カラー写真、新聞記事、当時大学構内や街頭で配られていたビラなどをふんだんに掲げながら、追いつける。当時の流行歌のレコードジャケットや歌詞、インスタントラーメン、ミニスカートなどのヒット商品の写真も数多くあり、まさに“60年代グラフィティ”である。巻末に「60年代闘争の書誌」として60年代の様々なテーマを扱った図書の表紙写真と解題を付す。



安保世代1,000人の歳月：国会突入の日から...

大歳成行 講談社 1980

60年代安保闘争時代にまさに青春を“生きて”いた彼は、彼女は、何を見、何を想い、何を叫んだのか？ 名もない戦士であった彼ら全員の青春にスポットをあてる。

60年安保：センチメンタル・ジャーニー

西部 邁 文芸春秋社 1986

60年代、東大教養学部の自治会委員長であった著者が、彼と共に60年代を駆け抜けていった幾人かの“非行者”の肖像を描く。

いちご白書：ある大学革命家のノート

ジェームズ・クネン著 角川書店 1971

1965年頃から、くすぶりだしてきたコロンビア大学の紛争を中心に、ひとりの男子学生が（サブタイトルには、大学革命家となっているが、普通の学生である）ベトナム戦争、黒人問題に疑問をいだき、そのかわりが日記形式で語られている。—— 戦争のための宣伝をする者たちが監獄に入れられないのは奇妙ではないか。かわりに監獄は平和を求める者たちでいっぱいだ。殺人を拒否する者が犯罪者になる。生きる権利を行使することは法律に違反する。まったくもって奇妙だとぼくはつくづく思う。—— 印象に残る言葉だ。

〈小説・戯曲〉

敬老週間（大江健三郎全作品 6）

大江健三郎 新潮社 1966

本書は、10年間外界との交流を断ってきた老人に、外界について話をするように雇われてきた大学生が、老人を失望させないために1980年代のイメージを語ろうとするが、戸惑い、逆に1960年代を浮びあがらせてしまうという筋である。雇われてきた大学生が社会に失望していること、将来の社会への希望がないこと等が伝わってくる。大江健三郎の作品には、他にも、劣等感の固まりの少年が〈右〉へ回心していく様子が1960年代の社会を浮き彫りにして描かれている「セヴンティーン」等、1960年代の社会を伝えてくれるものがいろいろある。これらは、現在も問題となっている核兵器、在日朝鮮人、天皇制…の問題について考えていく上でも読むに値する。

69 Sixty nine

村上 龍 集英社 1987

この小説は、1969年に、著者が高校生だった時起こったことの一部を書いた自伝的青春小説である。彼は、「あとがき」で「これは楽しい小説である。こんなに楽しい小説を書くことはこの先もうないだろうと思いつつ書いた。」と言っているが、彼の言う「楽しい小説」とは私は思わなかった。「テニスボーイの憂鬱」のほうが、主人公が好きな事をやっていた点で「楽しい小説」だと思う。しかし、また彼は「あとがき」で次のようにも記している。「楽しく生きるためにはエネルギーがいる。戦いである。わたしはその戦いを今も続けている。退屈な連中に自分の笑い声を聞かせてやるための戦いは死ぬまで終わることがないだろう。」

ビートルズの優しい夜

小林信彦 新潮社 1982

ビートルズの日本公演の頃の時代とそれをめぐる人間模様を描いた作品である。TVタレント、深夜放送のDJ、コメディアンなど、華やかなマスコミの世界の表層に漂いながら本当の自分の姿を探しあぐねている男たち——ビートルズと共に生き、共に去ったひとつの時代への挽歌ともいえる作品である。

微熱少年

松本 隆 新潮社 1985

ビートルズの日本公演の切符をめくり、恋人と自分自身のために、少年は最後に危険な賭けをした。混血美少女のエリーと「ぼく」そして様々の人物が織りなす、美しく、哀しい物語である。自分自身の心の中に“少年”を持ち続ける人に是非おすすめ。

ノルウェイの森 上・下

村上春樹 講談社 1987

この小説はこれまでに僕が一度も書かなかった種類の小説です。そしてどうしても一度書きたかった種類の小説です。これは恋愛小説です。ひどく古ぼけた呼び名だと思うけれど、それ以外にうまい言葉が思いつけないのです。激しくて、物静かで、哀しい、100パーセントの恋愛小説です。——（表紙帯より）人生における最も甘美な季節を60年代に過ごした著者の時代への想いが、限りなく優しくちりばめられている一編。

真情あふるる軽薄さ 〈戯曲集『狂人なおもて往生をとぐ』に収録〉

清水邦夫 中央公論社 1970

1969年、『真情あふるる軽薄さ』が、蜷川幸雄の演出により、新宿文化劇場アートシアターで上演された時、新宿は全共闘運動を中心に改革を叫ぶ人々の熱っぽい空気をもっとも反映している街だった。エネルギーに満ちていた。舞台に、いつおわるとも知れない、また、いつ先へ進めるかわ



からない行列があるだけで、その行列に苛立った青年が列を乱そうとするが、彼は機動隊員そっくりの服装をした者達に撲殺されてしまう。秩序を根底からゆるがそうとする者に、圧力かける当時の状況をするどくついた作品である。

<人物>

ライシャワー自伝

エドウィン・O・ライシャワー著 徳岡孝夫訳 文芸春秋社 1987

原題は、「My life between Japan and America」で一個人の自伝である。ライシャワー氏は1961年4月27日に駐日大使となった。しかし私は勿論当時のことは知らず、氏が「ザ・ジャパニーズ」の著者であることしか知らなかった。氏はB I J (Born in Japan)で日本史家で大変な親日家であるが、氏の生きた環境はすばらしかったのだという羨望の思いがした。氏の駐日大使時代が記されている「第5部 日本に使して—1961~1966—」の中で、60年代に日本政府とアメリカ政府との板挟の状況下で、日本で生き自国アメリカのことを考え、批判、評価していた氏の行動により、日米関係の一側面を眺めることができた。

小林信彦60年代日記

小林信彦 白夜書房 1985

作者の日記の中から60年代という時代の表出に関係のある部分を選んで載せたという。各年の表紙には月別のトピックスが掲載されており、これを見るだけでも時代の流れがわかって興味深い。読み進めるうちに、小林が、60年という時代に自分自身、こだわりをもって生きてきたことがわかる。その折々での小林の顔が浮かび上がってくる。

サルトルの晩年

西永良成 中央公論社 1988

1964年ノーベル文学賞に選ばれたサルトルは「信条として個人と個人の間には差別を生じ得る事態をいっさい拒否している」としてそれを断った。実存主義者である彼は“自由”は責任、罪責、悔恨、罪を伴うゆえ、自由を人間に課せられた重荷とみている。しかし、彼は自由を人間的尊厳の唯一の源泉であるとしている。1960年代には絶頂期にあったサルトルであるが、その後精彩を失い、1980年の彼の死後は時代はほとんど彼を顧みなくなってしまう。しかし彼は偉大な今世紀最後の哲学者である。著者はそのあまりにも大きな、あまりにも多様な存在にこだわってこれを著した。

若き実力者たち：現代を疾走する12人

沢木耕太郎 文芸春秋社 1973

このルポルタージュは1972年の作品である。沢木は25歳。あとがきでつぎのように述べている。“当てもなく目的もなく始めた旅だった。汽車に乗っていて不意にどうしようもなくその駅に降りたくなる。そんな風にして12人の人物と出会った。”60年代を生きた人の鼓動が聞えるはずだ。

〈その他〉

カムイ伝 1 - 21

白土三平 小学館 1967-1971

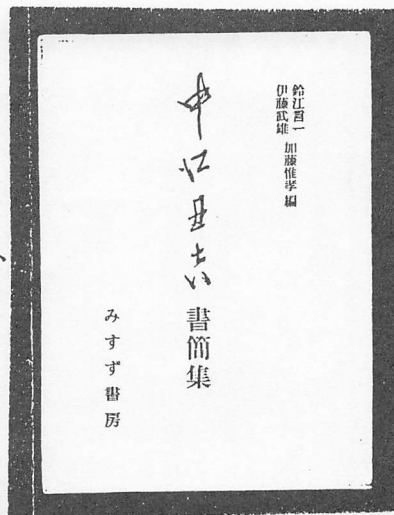
抜け忍カムイを軸に展開する大河劇画である。物語は1640年から約20年間にわたり、日置藩を舞台として描かれている。士農工商、そして非人、権力者の為の身分制度、経済政策等、複雑な社会機構の説明がなされる。(当時の大学生がマルクスを理解するため?に読んだという話をきいたことがある。)著者は後記の中で「三部作のうち第1部が終わったところだ」と書いているが、『カムイ伝』は60年代の激動の時代だからこそ描き得た作品であり、今後、続編を読むことはないだろうと思っていた。しかし、奇しくもこの春17年ぶりに再開されるという。どのような展開になるのか楽しみである。



中江丑吉書簡集

鈴江言一 伊藤武雄 加藤惟孝編 みすず書房 1964

「中江丑吉は明治に生まれ、東京で修学を終った後、大正の初め中国北京において社会人のスタートを切り、そのまま全生涯をその地に終始した稀らしい生活者であった。無師無統の一学究として、一九四二年八月、太平洋戦争のさなかに、五三年の生涯を終えた。時事を談じ、現代を憂慮し、とくにディアレクチックについては、満州事変を契機として、烈しい態度で日本帝国主義の戦争方向を批判し、ファシスト軍国主義者の行きつく運命を容赦のない先見性をもって予言し、聞く者を戦慄させた。彼の現代史への批判、鋭い歴史観、北京の生活と感情、人間的愛憎を示した率直なもの、父兆民を語る率直な愛情、また四季の推移のまにまにうつろう北京の風物描写の中での繊細な感性の動きなど、この私信のうちに描写されている。」自ら「無名の個」としての生を自覚的に生きぬいたこうした異数の哲人の人と思想をはじめて世に紹介したのもわが国の1960年代であったといえよう。



年 表

年	図書館・情報	科学	その他の動き
1960 以前	<ul style="list-style-type: none"> * National Defense Education Act 制定 (アメリカ, 1958) * Baker Report の提出 (アメリカ, 1958) * John H. Talbott JAMAの編集者に任命される (アメリカ, 1959) 	<ul style="list-style-type: none"> * ソ連スプートニク1号打ち上げ (ソビエト, 1957) 	
1960	<ul style="list-style-type: none"> * Index Medicus New Series 開始 (アメリカ) 		<ul style="list-style-type: none"> * ローマオリンピック (イタリア) * 池田総理大臣が高度経済成長政策を発表 (日)
1961	<ul style="list-style-type: none"> * J I C S T電子機械検索装置導入 (日) 	<ul style="list-style-type: none"> * James D. Watson Francis H. C. Crick DNAの左螺旋構造を解明 (アメリカ) * 世界初の有人宇宙船ボストーク1号打ち上げ (ソビエト) * アメリカ初の有人宇宙船マーキュリー打ち上げ (アメリカ) 	<ul style="list-style-type: none"> * John F. Kennedy 第35代大統領に就任 (アメリカ)
1962	<ul style="list-style-type: none"> * Crawford Report の提出 (アメリカ) * マーシャル・マクルーハンの電子メディア論発表 (カナダ) 	<ul style="list-style-type: none"> * サリドマイドを市場より回収 (イギリス, フランス) 	<ul style="list-style-type: none"> * キューバ危機 * ミシシッピ大学に初の黒人学生入学 (アメリカ) * マリリン・モンロー死去 (アメリカ) * ニューヨーク、シドニー・ジャニス画廊で「ニュー・リアリスト展」開催 (アメリカ)
1963	<ul style="list-style-type: none"> * Weinberg Report 提出 (アメリカ) 	<ul style="list-style-type: none"> * 初の商業原子炉建設 (アメリカ) 	<ul style="list-style-type: none"> * Kennedy 大統領広範囲な公民権法案を議会に提出 (アメリカ)

1963	<ul style="list-style-type: none"> * Higher Education Facilities Act制定 (アメリカ) * 「中小都市における公共図書館の運営」刊行 (日) 	<ul style="list-style-type: none"> * 初の衛星中継放送が、イギリス、アメリカ間で行われる (イギリス、アメリカ) 	<ul style="list-style-type: none"> * Kennedy 大統領暗殺 (アメリカ) * Johnson 副大統領第36代大統領に就任 (アメリカ)
1964	<ul style="list-style-type: none"> * NLMがMED-LARSのサービス開始 (アメリカ) * Library Services and Construction Act 制定 (アメリカ) 	<ul style="list-style-type: none"> * 東海道新幹線運行開始 (日) 	<ul style="list-style-type: none"> * 東京オリンピック (日) * 公民権法成立 (アメリカ) * トンキン湾にてアメリカの駆逐艦雷撃される。報復として北ベトナム基地を爆撃 (アメリカ) * Johnson 大統領が「貧困との戦い」における「全面勝利」訴える (アメリカ)
1965	<ul style="list-style-type: none"> * Higher Education Act 制定 (アメリカ) * Medical Library Assistance Act 制定 (アメリカ) * Library Services and Construction Act 制定 (アメリカ) 	<ul style="list-style-type: none"> * 世界初の民間衛星アーリー・バードによる、ヨーロッパ、アメリカ間の電話通信、テレビ通信の中継開始 (アメリカ) 	<ul style="list-style-type: none"> * 新公民権法成立 (アメリカ) * アメリカ軍北爆開始 (アメリカ) * 高齢者のための健康保険計画をうたったメディケア・メディケイド法がアメリカ医学会の反対を押し切って立法化 (アメリカ) * Johnson 大統領は年頭教書で「偉大な社会」計画の概要を発表 (アメリカ) * ロンドンに初のミニスカート登場 (イギリス)
1966	<ul style="list-style-type: none"> * LCがMARC提供開始 (アメリカ) * Freedom of Information Act 制定 (アメリカ) * National Advisory Commission on Library 設置 (アメリカ) 	<ul style="list-style-type: none"> * ボーイング747就航 (アメリカ) 	<ul style="list-style-type: none"> * アメリカ初の黒人上院議員当選 (アメリカ) * 文化大革命 (中)

1967	* OCLC 設立 (アメリカ)	* 世界初の心臓移植 手術に成功 (南アフリカ)	* 六日戦争 (イスラエル、アラブ)
1968	* Higher Education Amendments 制定 (アメリカ) * National Standard Reference Data Act 制定 (アメリカ) * DIALOG シス テム開発 (アメリカ)	* 初の超音速旅客機 Tu-144 飛行 (ソビエト) * 326,000 t の大型 タンカー就航 (アメリカ) * 日本初の心臓移植 手術行われる (日)	* Robert F. Kennedy 上院議員 暗殺される (アメリカ) * 黒人活動家 King 牧師暗殺 される (アメリカ) * メキシコオリンピック (メキシコ) * クイーン・エリザベス 2 世号 就航 (イギリス) * Johnson 大統領が北爆中止を 宣言 (アメリカ) * 超高層の霞が関ビル完成 (日)
1969	* NIST 構想が答 申される (日)	* 超音速旅客機コン コルド初飛行 (フランス、イギリス) * アポロ 11 号月面 に着陸。人類が初め て月面を歩行 (アメリカ)	* Nixon 第37代大統領に就任 (アメリカ) * 東大闘争安田講堂閉鎖解除 (日)

(この年表は、本論集を中心にまとめたものである)

学術雑誌塾小史

学術雑誌塾は、1985年11月9日に生まれました。第1回の塾に集まったのは、浜田、平石、廣田、北川の4君でした。ささやかな第1歩です。学術雑誌についての基本的な文献を読み、調査をしていくことを決めました。最初の1年間は、17世紀以来の学術雑誌の歴史に関する論文と、学術雑誌数について定量的に調査したペーパーを読み、そしてIndex Medicus掲載誌の国別分布変化を調査することにしました。また、活動の記録と連絡のために“学術雑誌塾通信”を発行しました。

学術雑誌塾をはじめようと思った理由は2つあります。1つは、自然科学系の図書館で働いていくうえで、学術雑誌についてより深い理解が必要であると痛感したこと。もう1つは、それも若い人々を対象にして勉強会を開催する必要があると考えたからでした。しかし、実際の参加者がどれくらいいるのか不安もありました。

塾をはじめて6ヶ月後に、3名の女性塾生が入会しました。神岡、黒川、牛沢の3名で、塾がとても明るくなりました。入塾の条件は、図書館員になって原則として3年以内であること、そして英語の論文を1つ訳して提出することでした。文献コピーの余白が、訳の書き込みで真っ黒になっている人もいました。きっと苦勞したにちがひありません。1986年の6月には、塾の最初の共同研究発表を札幌の第3回図書館情報サービス研究大会で行ないました。この年の末までに、その後9名の入塾者があり、総勢16名になりました。

1987年になり、塾生も増えたので、4つのグループに分かれて小グループ研究を行ないました。2月には、第12回生物医学図書館員研究会で、“Index Medicus掲載誌の国別変化”の続報を発表しています。5月には、鎌倉天園へハイキング、6月には倉敷で行われた第4回図書館情報サービス研究大会で、2つの小グループ研究を発表しました。グループ研究を行なったことで、塾生同志のコミュニケーションも良くなってきたようです。この年の9月に、葉山で合宿を行ないました。そして、次のテーマとして、「総合研究：私たちの1960年代」を決め、各自の関心主題から取り組んでもらいました。12月には、自治医科大学で雪中合宿を行ない、良く学び良く遊びの1年でした。

学術雑誌塾は、学術雑誌を中心テーマにおきながら、文献を読み、調査を行ない、発表することを基本にしています。自分自身で問題を発見し、解決の道を論理的に展開できる力をつけてもらいたいと願っています。そして、若い人々のコミュニケーションの輪が広がれば良いと思っています。1988年の4月には、塾生も26名となりました。そこで、塾生の選挙により6名の幹事を選び、廣田君が幹事長になりました。塾の運営全体を、この幹事会で議論しながら楽しくやっていければと願っています。

研究発表記録

- ・ Index Medicus 収載誌の国別分布変化

平石 充、他

第 3 回 図書館情報サービス研究大会 (1 9 8 6 年 6 月)

- ・ Index Medicus 収載誌の国別分布変化 (第 2 報)

雨宮正恵、他

第 1 2 回 生物医学図書館員研究会 (1 9 8 7 年 2 月)

- ・ 日本医学会分科会の専門雑誌の機能の変化

多胡英樹、他

第 4 回 図書館情報サービス研究大会 (1 9 8 7 年 6 月)

- ・ 日本の総合医学雑誌の分析

井上三郎、他

第 4 回 図書館情報サービス研究大会 (1 9 8 7 年 6 月)

- ・ 健康雑誌を分析して

井上三郎、他

第 1 4 回 生物医学図書館員研究会 (1 9 8 8 年 3 月)

あとがき：60年代発見の旅のおわりに

塾長 山崎 茂明

なぜ60年代なのかと正面から問われても、きちんとした答を出すことは困難です。ただし、個人的には、60年代を見直すことで、80年代の現在の自分たちの状況をとらえることが出来るのではないかと考えています。80年代の医学図書館を考えると、アメリカで提出されたIAIMS（統合型学術情報マネージメント・システム）のコンセプトとそれにつづくムーブメントが、最も大きなインパクトになると思います。このことは、私自身がアメリカの旅を通して実感した事柄です。もちろん、日本の医学図書館界が、どれだけIAIMSの理念を受けとめられるかについて、疑問もない訳ではありませんが、いずれは対応しなければならぬと思います。日本の医学図書館、そして何よりも日本の医学図書館員が、自分達のアイデンティティをかけて、問い直す機会であると思います。

アメリカの旅もあと10日程になったニューヨークのSushi-Barで、コーネル大学の医学図書館を間もなくリタイアする秋山さんと夕食をともしました。私はアメリカ医学図書館協会のポートランド大会からはじまり、シンシナティ、ワシントン、ボルティモア、フィラデルフィア、ニューヨークとつづいた旅の印象を話したり、アメリカと日本の図書館員や図書館のちがいなどについて意見をかわしました。その時、1950年代の末から医学図書館員として生きてこられた秋山さんに、IAIMSを中心とした80年代の状況が、60年代の医学図書館援助法、MEDLARS、RMLプログラムなどを生んだ医学図書館の黄金時代と似ているのではないかという質問をしてみました。秋山さんの答は、イエスというものでした。アメリカの医学図書館界がIAIMSをめぐる、静かに着実にチャレンジしている姿が、私の旅の印象でした。

私にとって60年代は青春グラフィティのなつかしい時代になります。しかし、60年代に生まれた塾生諸君にとっては、全くの歴史的過去になります。私にとって60年代は思い出の対象ですが、塾生のみなさんにとっては新しい未知なる発見の時間です。世代の差はあるものの、現在を正しく認識し、将来への展望を明らかにしていくために、60年代の医学図書館活動をめぐる多様な状況を調査してみました。私たち1人1人の60年代発見の旅の記録が、この論文集です。

なお、この小冊子の刊行にあたり、板橋顧問より貴重な原稿をいただくことができました。最後になりましたが、廣田編集委員長をはじめ、古矢、神場、黒川、宮内、門屋の各委員に感謝したいと思います。

著者名一覧

- 板橋 瑞夫 昭和大学図書館 〒142 品川区旗の台1-5-8
(学術雑誌塾顧問)
- 山崎 茂明 東京慈恵会医科大学医学情報センター 〒105 港区西新橋3-25-8
(学術雑誌塾塾長)
- 阿部 信一 東京慈恵会医科大学医学情報センター 〒105 港区西新橋3-25-8
- 会田 真由美 杏林大学医学部図書館 〒181 三鷹市新川6-20-2
- 雨宮 正恵 東邦大学医学部図書館 〒143 大田区大森西5-21-16
- 平輪 麻里子 東邦大学医学部図書館 〒143 大田区大森西5-21-16
- 廣田 住友 昭和大学図書館 〒142 品川区旗の台1-5-8
- 井上 三郎 日本医師会図書室 〒101 千代田区神田駿河台2-5
- 神場 清治 関東通信病院図書館 〒141 品川区東五反田5-9-22
- 川村 順子 麻布大学図書館 〒229 相模原市淵野辺1-17-71
- 北川 正路 東京慈恵会医科大学医学情報センター 〒105 港区西新橋3-25-8
- 熊谷 智恵子 国家公務員等共済組合連合会 〒105 港区虎ノ門2-2-2
中央図書室 虎の門病院内

黒川 玲子	東邦大学医学部図書館	〒143 大田区大森西5-21-16
真下 美津子	国家公務員等共済組合連合会 中央図書室	〒105 港区虎ノ門2-2-2 虎の門病院内
宮下 美香	国際医学情報センター	〒151 渋谷区千駄谷4-22-8 松栄ビル南館
宮内 洋一	山之内製薬中央研究所図書室	〒174 板橋区小豆沢1-1-8
大村 伸栄	神奈川歯科大学図書館	〒238 横須賀市稲岡町82
多胡 英樹	国際医学情報センター	〒105 新宿区大京町30
牛沢 典子	東邦大学医学部図書館	〒143 大田区大森西5-21-16
吉田 宏子	日本医師会図書室	〒101 千代田区神田駿河台2-5

総合研究「私たちの60年代」

— 学術雑誌塾報告 1 —

1988年6月18日 発行

編集 学術雑誌塾報告編集委員会
(委員長：廣田 住友)

発行 学術雑誌塾
(塾長：山崎 茂明)

印刷所 ㈱ 伸樹社

〒101 東京都千代田区三崎町1-1-13 菅谷ビル3F

TEL: 03(291)-4408(代)

「Working with each other」

——學術雜誌塾報告 2——

1989

學 術 雜 誌 塾

「Working with each other」

——學術雜誌塾報告 2——

1989

學 術 雜 誌 塾

學術雜誌塾報告編集委員会

委員長	黒川	玲子
	平輪	麻里子
	廣田	住友
	井上	三郎
	神場	清治
	北川	正路

まえがき

学術雑誌塾で行なってきたことを形に表そうということになって二度目の初夏を迎えます。そして木々の緑の輝きが増すこの候に、萌黄色の表紙の「学術雑誌塾報告集2」が出来上がりました。

昨年は「私たちの60年代」という総合タイトルのもとに、1960年代の医学図書館界とそれを取り巻く社会情勢について見てきました。それ以後、塾の第4期ということになりますが、この1年間は「日本の総合医学雑誌」というメインテーマで5グループが独自の歩みを始めました。各グループによってその手法、進み具合は違いますが、〈グループ研究〉のところでその成果がまとめられています。〈個人論文・エッセイ〉は、メインテーマにこだわらず自由に書かれた散文の欄です。

〈コラム〉にはユニークな塾生一人一人の塾との関わり方が述べられています。十人に十様の生き方があるように、十人いれば十通りの塾との関わり方があって当然で、その人なりの接点を持ちながら、塾へと集ってくるのです。人数が増えてきて、話しをしたこともない人がこんなことを考えているのかという驚きをもったり、塾生同士のコミュニケーションの一助となるかもしれません。

「勉強」とは自分との闘いです。それは誰かによって評価され得る類のものではありません。高度成長時代の申し子のような私たちは点数評価というものに慣れてしまい、そういう風な目に見えて評価されるものでなければ価値がないと考えがちです。

評価、それは例えば医療でいえば保険点数にならないものは廃除されてしまうという危険性があります。また経済的評価ばかりが優先されてしまうと、お金にならないものは廃除されてしまう。若い者、強い者、カッコ良いものがすばらしいというような単純な価値観が現在の日本を覆っています。

けれども私たちの勉強は、塾長にアドバイスを求めることはあっても、今言った意味での評価は出来得ません。そして勉強の成果が目に見えて図書館業務に反映し、お給料がすぐにアップすると言う訳でもありません。そんな、目に見えないもののために集まり、勉強していこうとする塾生が私は好きです。山崎氏の言葉を借りれば、自分達のアイデンティティを問うものなのかも知れません。

最初の一步を踏み出すというのはなかなか勇気のいることです。けれど皆で少しずつでも一歩前へ踏み出していけるかも知れません。そんな意味合も込めて今回のタイトルは「Working with each other」としました。

そして、山崎塾長はじめ、山口、青木、板橋の4氏からは珠玉の名編が寄せられ、〈寄稿エッセイ〉に載せられています。いずれも渋くて読みごたえがあり、後に続く私たちにとって示唆に富む内容のものです。最後になりましたが、お忙しい中原稿をお書き下さいました4氏に感謝の意を表します。

学術雑誌塾報告編集委員長
黒川 玲子

目 次

まえがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

目次・・ 2

<グループ研究>

生理学論文集から見たわが国の生理学研究者の研究活動 (平輪 麻里子 ほか)・・ 5

明治期の眼科医学雑誌 (廣田 住友 ほか)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

Review of the editorial Peer Review (黒川 玲子 ほか)・・・・・・・・・・・・ 32

国内発行の医学分野のコア・ジャーナル (大村 伸栄 ほか)・・・・・・・・・・・・ 50

<個人論文・エッセイ>

新聞記事で考えたこと (神場 清治)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77

BLDSCの広報活動 (熊谷 智恵子)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81

その朝 -上野英信への恋文- (真下 美津子)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85

米国医学図書館協会 (MLA) 年次総会参加ガイド (牛沢 典子)・・・・・・・・・・・・ 90

<寄稿エッセイ>

学ぶことの自由と持続 (山崎 茂明) 95

Structured Abstractsは抄録界の新星となるか! (山口 直比古) 98

自己における【書くこと】の意味 (青木 仕) 101

青春彷徨 芝居入門 (板橋 瑞夫) 105

<コラム>

塾とのかかわり方について 109

英文抄訳リスト (1-4期) 121

研究発表記録 125

あとがき 126

執筆者一覧 127

生理学論文表題集から見たわが国の生理学研究者の研究活動

平輪麻里子 井上 三郎 北川 正路
山崎 茂明 *酒井 敏夫
(*東京慈恵会医科大学名誉教授)

I. はじめに

わが国の生理学研究者の研究活動を定量的に把握するために、昭和61年度生理学論文表題集を対象に調査を行った。研究者は、研究成果を仲間うちの討論会といったインフォーマルな段階からはじめ、学会発表をへて、学術雑誌というよりフォーマルなメディアに発表しているものである。これらの発表業績を分析することにより研究発表の現状をとらえることができるであろう。口頭発表の中心となっている会議はなにか、最も多くの論文が掲載されている外国雑誌はどれかといった様々な分析を通し、日本における生理学分野の研究活動の現状調査を試みたものである。

II. 調査方法

「昭和61年度生理学論文表題集」(日本生理学雑誌49(号外), 1987)に掲載された会員の業績を調査対象とした。日本生理学会では、会員が1年間に生産した論文や学会での発表演題抄録などの業績を所属教室ごとにまとめて、論文表題集として毎年報告している。1986年当時、日本生理学会会員は約3300人であった。データ整理は以下のように行った。

1. 昭和61年度生理学論文表題集をコピーする
2. 1論文ごとに切りはなし、標準図書カードにはりつける
3. 執筆言語(日本語、その他)により大別する
4. 雑誌、単行本、会議抄録、その他レポート類に分ける
5. 4で分けた各々をタイトルごとにまとめ、ランクリストを作る
6. 不明データの確認を行う

問題点が3つ生じた。1つは会員からの報告遅れなどによる前年度の繰り越し分が混入していたこと。2つめは重複データの存在があったこと。それは複数の研究機関に所属している人の論文が、各々の教室業績としてあげられていたり、あるいは所属の異なる人たちの共同研究による論文が、それぞれの共著者のもとで挙げられていたことによる。3つめは、教室によって学術論文以外のエッセーや新聞記事などを掲載しているところとしていないところがあり、論文表題集に掲載する業績の定義がはっきり決まっていなかったことであった。

以上の点が問題になったが、これらを調整せずに処理を行った。

なお、今回の調査との比較をするため、すでに行われている山崎¹⁾の昭和51年度生理学論文表題集の調査結果を使用した。前回では重複データの削除が行われており、今回とはデータ処理が異なっている。

Ⅲ. 結果と考察

1. 概要

全データ数は6211、そのうち8点が判別不能であり、計6203点を分析対象とした。

表1は研究者の発表業績を、発表媒体別にわけた内訳である。雑誌が4129編を占め全データの66.6%を掲載していた。そのうち1979編は原著、短報、速報を含めた論文であり、2150編が雑誌に掲載された抄録発表であった。単行書は外国・国内共同出版22編を含め351編で、5.7%を占めた。学術雑誌に掲載されたものではなく、抄録集や予稿集などに発表された会議抄録は1444編であり23.2%にあたる。これらの抄録発表を雑誌掲載の抄録と合わせると3594編となり、これは全データの57.9%になった。その他には文部省科学研究費によるもの、厚生省特定疾患に関する報告、そして学会論文集など合計で279編となり4.5%を占めた。

研究発表の媒体としては学術雑誌が主要なものであり、そして論文表題集に記載された業績の57.9%が、口頭発表記録である抄録であった。以下、発表媒体からみた分析を行うものである。

表1. 研究者の研究発表媒体の内訳

	外国	国内和文	外国・国内 共同	国内欧文	計 (%)
雑誌論文	777	912		290	1979 (31.9%)
雑誌抄録	351	1708		91	2150 (34.7%)
単行書	73	229	22	27	351 (5.7%)
会議抄録	733	621	*90		1444 (23.2%)
その他		279			279 (4.5%)
合計					6203 (100.0%)

*国内開催の国際会議

2. 雑誌論文

雑誌に掲載された論文は1979編で全体の31.9%を占めていた。これら論文を掲載した雑誌を、外国雑誌、国内和雑誌、国内欧文誌に分けて各々掲載誌別にランクリストを作成した。

2-1. 外国雑誌論文掲載ランク

外国雑誌への論文発表は777編であり全データの12.5%を占めた。掲載誌別にランクリストを作成した(表2)。777編の論文は177誌の雑誌に掲載されていたが、ランクリスト上位20誌による累積論文数は408編となり、全掲載分の52.5%を占めていた。

1位はBrain Resで、生理学の代表的な学会誌ではなく、商業的速報誌であった。2位のNeurochem Resの2.4倍と他誌を引き離している。なお、前回の調査でもBrain Resが1位であった。速報誌は他にも、Neurosci Lett, Brain Res Bullと上位に現れている。

またもう一つの特徴は雑誌の専門主題からみたもので、Brain Res(1位)、Neurosci Lett(4位)、Brain Res Bull(8位)、Exp Brain Res(12位)、J Neurosci(13位)と神経生理学系の雑誌が上位にきていることである。1970年から83年までの日本生理学大会における演題数を調査した酒井²⁾によれば、分類項目にみる演題数の増加は、中枢神経系、感覚系といった神経生理学分野にこの傾向が強いと報告している。また、前回の調査においても中枢神経生理学雑誌がリストの上位を占めていた。生理学領域において、神経研究生理学を中心とした活発な研究活動が推測される。

10年前の調査結果と今回のランクリストを比べてみると、前回の調査時点に存在しなかった雑誌、あるいは創刊したばかりの雑誌群、すなわち1975年創刊のNeurosci Lett, 1976年創刊のNeurochem Res, Brain Res Bullが今回上位を占めていた。逆に前回3位であったExperientiaは50位へランクを下げ、6位だったProg Brain Resはランクリストから後退した。アメリカ生理学会が刊行しているAm J Physiolは10位から3位へと順位をあげ、論文数も前回の4倍に増加した。一方、イギリス生理学会が刊行しているJ Physiolは、前回の2位から5位へと順位を下げた(論文数は変わらず)。掲載論文数ランクからみて、J PhysiolとAm J Physiolの地位が逆転した。

2-2. 国内和雑誌論文掲載ランク

国内和雑誌への論文発表は912編で、これは全データの14.7%であった。掲載誌のランクリストは表3である。1位は名古屋大学の「環境医学研究所年報」、3位は岡崎国立共同研究機構の「生理学研究所年報」と研究機関の年報が上位を占めた。2位の「医学と生物学」は医学生物学領域における速報誌であり、10年前も1位と掲載論文量が多かった。学会誌の「日本生理学雑誌」は13編(11位)を掲載しているだけであり、10年前よりランク(5位)と論文数(24編)がともに減少していた。

10年前と今回のランクリストを比較すると、外国雑誌より順位の変動が大きいことがいえる。外国雑誌リストでは新しい雑誌の参入による順位の変化程度だったが、国内和雑誌においては今回のリストの上位38誌中24誌までが前回のランク外であった。

2-3. 国内欧文誌論文掲載ランク

国内欧文誌への論文発表は290編であり、全データの4.7%を占めた。掲載誌のランクは表4に示した。1位は74編を掲載したJpn J Physiolであり、全掲載論文の25.6%を占め、生理学領域における研究論文の主要な発表媒体として機能していることを示している。

2-4. 和文論文、欧文論文の比率

雑誌論文を執筆言語という視点から分析してみた。国内和雑誌912編、国内欧文誌290編と外国雑誌777編合わせて1067編であり、和文、欧文論文が46.1%対53.9%とほぼ同じ比率で生産されていた。10年前は和文が欧文の2倍生産されていたのに比べ欧文論文が増加した。

3. 雑誌抄録

雑誌に掲載された抄録は、2150編で全データの34.7%を占めていた。

以下、外国雑誌、国内和雑誌に分け、各々掲載誌別にランクリストを作成し分析した。

3-1. 外国雑誌抄録掲載ランク

1位はNeurosci Resが178編を掲載し、全掲載分の50.7%を占めていた(表5)。この雑誌は、日本神経科学協会が国際誌を目指して³⁾オランダのエルゼビア社と協力し、1984年に創刊した雑誌である。このNeurosci Resが会議情報を積極的に掲載し、神経科学分野のコミュニケーション活動に寄与していることが分かる。

3-2. 国内雑誌抄録掲載ランク

全掲載総数1708編中62.9%、1,074編を1位の日本生理学会雑誌が占めている(表6)。国内における学会発表は日本生理学雑誌を中心に掲載されており、口頭発表の場として機能している。日本生理学会においては、国内欧文誌への論文掲載が1位であったJpn J Physiolを原著論文の発表媒体として機能させ、日本生理学会誌を口頭発表の場とする、といったような雑誌による役割分担がみられた。

4. 会議抄録

会議録に掲載された抄録は1444であり、全データの23.2%を占めていた。この件数は、雑誌と会議録に掲載された抄録を合わせた全抄録数3594の40.2%に相当する。抄録の発表媒体としては、日本生理学雑誌に掲載された1079件の抄録をのぞくと、会議抄録は学術雑誌以外の媒体に掲載される傾向にあった。それでは、わが国の生理学研究者の口頭発表における中心となっている内外の会議はどのようなものか、ここでは日本生理学会総会をのぞいた各種の会議について見ていくことにする。

4-1. 外国会議抄録ランク

外国で行われた会議の会議録および予稿集に掲載された抄録は733件であった。この中、最も掲載が多かったのは表7から、国際生理科学連合(IUPS)大会の会議録の254件(34.7%)であり、2位は同じく国際生理科学連合の衛星シンポジウムの会議録の52件(7.1%)であった。これによりわが国の生理学研究者の海外での口頭発表は、もっぱら国際生理科学連合大会を中心に行われていることがわかる。1986年の7月には、カナダのバンクーバー第30回国際生理科学連合大会が開催されている。勝木⁴⁾によれば、国際生理科学連合は、1889年にスイスのバーゼルで第1回大会を開催したInternational Congress of Physiologistsを母体として、1972年に結成されたものである。3年ごとに開催されており、世界の

生理学者の集合体として生理学研究の中心的機能を果たしている。

また、3位にはアメリカの神経科学協会の年次大会の抄録集の17件が続いていた。同じく勝木は、この神経科学協会については、次のように記している⁴⁾。「現在各国で神経科学が急速に若い人たちの間に発展している。この理由は単に生理学のみならず、形態学、薬理学、生化学、免疫学など広い意味での生理学全般について、学際的な科学として新しい分野が開けてきたため、大きな推進力で各分野に変化を促し、合同して大きい学会を開く機運が生まれてきた。米国における神経科学協会がその最たるもので、米国のIUPSに勝る力となりつつあり、他の国でもこの傾向は同一である。」

4-2. 国内会議抄録ランク

国内における会議に掲載された抄録は621件であった。表8 から、最も多かったのは、第10回神経学術集会の72件であり、日本体育学会の第37回大会の46件がこれに続いていた。神経科学への偏りが注目されてきたが、日本生理学雑誌が国内においては口頭発表の中心的な機能をはたしているため、外国で行われた会議抄録ランクリストと比較すると分散の傾向にあった。

4-3. 日本開催の国際会議抄録ランク

日本で開催された国際会議に掲載された抄録は90件であり、表9から、独協医科大学での第1回ニューロエソロジー国際会議の衛星シンポジウムの30件が最も多かった。次いで、第7回国際眼研究学会の15件、4位には国際宇宙生物科学シンポジウム、そして、6位には第11回国際電子顕微鏡学会が位置していた。

4. 単行書

単行書は、国外単行書73件、国内単行書229件、国内欧文単行書27件、国内・国外協同出版単行書22件で、計351件であった(表1)。

国外単行書は、単独著者によるものは少なく、複数の著者によるものを編集したものが多かった。また日本人と外国人共同で書かれたものも多かった。そして、国内単行書も複数著者によるものが多数を占めていた。国内単行書の1位は「生理学(入来正躬編, 文光堂)」、2位は「新生理学大系(医学書院)」というように、入門書、教科書的なものが上位に多くあった。

6. その他

その他は279件で、報告書、学会論文、インフォーマルな配布資料等が含まれている。学会論文が75件と一番多かった。そして、文部省関係65件、厚生省関係49件と続く。文部省関係は、科学研究費、特定研究のもの、厚生省関係は特定疾患、委託研究が多くを占めていた。

IV. おわりに

昭和61年度生理学論文表題集を対象として、わが国の生理学研究者の研究活動の現状調査を試みた。この表題集は、日本生理学会会員の研究成果を報知し、研究の理解を深め合

うためにも重要である。また、この表題集に類したものは他の学会では全く見ることがなく、生理学分野の業績の記録という点からも有用である。しかし、この調査を進めるにあたって、改善の必要があると思われる点があった。今後の論文表題集のために次の3点を提言したい。

1. 「業績」の定義を確立する必要がある。教室により掲載基準がまちまちであり、学術文以外のもも掲載されている例があった。業績の定義を明確にすべきであろう。

2. 研究を発表した言語に基づいて表題集に表記するか、発表言語が識別できるようにする。欧文で表記している全てが必ずしも欧文で発表されているわけではなかった。特に抄録にその例が多く、まぎらわしい。

3. 略語の統一をはかる。雑誌名の略で、JapaneseをJapと略する教室が多数見受けられた。国際的にはJpnとすべきである。この他、自己流の略語もあり、統一が望まれる。また国内和文雑誌の誌名を略するのは、避けた方がよいであろう。

本調査が、日本生理学会論文表題集の今後の発展に寄与できればと願っています。

文献

- 1) 山崎茂明：わが国の生理学研究者の論文掲載傾向。第7回医学図書館員セミナー論文集，日本医学図書館協会，1-10，1981.
- 2) 酒井敏夫：大会演題数とプログラム編成の分類項目。日本生理学雑誌，46(1):37，1984.
- 3) 伊藤正男：IUPS理事就任と神経科学。日本生理学雑誌，46(1):10-13，1984.
- 4) 勝木保次：国際生理学連合（IUPS）大会をいつ日本に持ってこられるか。日本生理学雑誌，46(1):8-10，1984.

表2. 外国雑誌論文掲載ランクリスト

ランク	雑誌名	論文数	累積%
1.	Brain Res	87	11.2
2.	Neurochem Res	34	15.6
3.	Am J Physiol	30	19.4
4.	Neurosci Lett	26	22.3
5.	J Physiol	25	26.0
6.	Pflugers Arch	22	28.8
7.	J Neurophysiol	19	31.3
8.	Brain Res Bull	18	33.6
9.	Comp Biochem Physiol	17	35.8
	J Comp Neurol	17	38.0
11.	Physiol Behav	16	40.0
12.	Exp Brain Res	15	42.0
13.	J Neuroscience	14	43.8
14.	J Auton Nerv Syst	13	45.4
15.	Eur J Pharmacol	10	46.7
16.	Biochem Biophys Res Commun	9	47.9
	Biomed Biochim Acta	9	49.0
	Biophys J	9	50.2
	Nature	9	51.3
	Thromb Res	9	52.5
	その他	369	47.5
	計	777	100.0

表3. 国内和雑誌論文掲載ランクリスト

ランク	雑誌名	論文数
1.	環境医学研究年報	69
2.	医学と生物学	48
3.	生理学研究所年報	29
4.	宇宙航空環境医学	27
5.	日本平滑筋学会雑誌	26
6.	医学のあゆみ	20
7.	神経研究の進歩	18
8.	病態生理	15
9.	血液と脈管	14
	Clinical Neuroscience	14
11.	日本生理学雑誌	13
12.	神経科学	9
	脳研究会会誌 (neurosciences)	9
	代謝	9
	呼吸と循環	9
16.	Japanese Journal of Sports Science	8
	実験医学	8
	産業医科大学雑誌 (J UOEH)	8
	その他	559
	計	912

表4. 国内欧文誌論文掲載ランクリスト

ランク	雑誌名	論文数
1.	Jpn J Physiol	74
2.	Biomed Res	52
3.	Environ Med	17
4.	Jpn Heart J	16
5.	J Biochem	13
6.	Tohoku J Exp Med	10
7.	Bull Tokyo Dent Coll Proc Jpn Acad	8
	その他	92
	計	290

表5. 外国雑誌抄録掲載ランクリスト

ランク	雑誌名	抄録数
1.	Neurosci Res	178
2.	Neurochem Res	23
3.	J Muscle Res Cell Mortil	20
4.	Chemical Senses	15
5.	Int J Biometeorol	13
6.	Sleep Res	12
7.	Biorheology	11
	J Dent Res	11
	その他	68
	計	351

表6. 国内和雑誌抄録掲載ランクリスト

雑誌名	抄録数
日本生理学会誌	1074
その他	634
計	1708

表7. 外国会議抄録掲載ランクリスト

ランク	会議名	抄録数
1.	Proc IUPS	254
2.	IUPS Satellite	52
3.	16th Annual Meeting Soc Neuroscience, Ab	17
4.	Symposium on molecular mechanism of muscle contraction	13
6.	1st Int Conf Clinical Application of Photosensitization for Diagnosis and Treatment	11
	その他	386
	計	733

表8. 国内会議抄録ランクリスト

ランク	会議名	抄録数
1.	第10回神経科学学術集会	72
2.	日本体育学会第37回大会	46
3.	生理学中部談話会	21
4.	西日本生理学会	20
5.	日本癌学会総会	19
	日本肥満学会	19
7.	第39回日本自律神経学会総会	15
8.	第16回日本脳波・筋電図学会学術大会	12
9.	日本生理学会中国四国地方会	11
10.	第7回日本炎症学会	9
	第32回日本宇宙航空環境医学会総会	9
	その他	368
	計	621

表9. 日本開催の国際会議抄録掲載ランクリスト

ランク	会議名	抄録数
1.	1st International Congress of Neuroethology	30
2.	7th International Congress of Eye Research	15
	Electrogenetic Pumps in Biomembranes	
4.	International Symposium on Biological Sciences in Space	10
	8th Annual Meeting ICPS Commission on Gravitational Physiology	10
6.	11th Int Cong on Electron Microscopy	3
	International Symposium on Physiology of Stressful Environments	3
	Symposium on Underwater and Hyperbaric Physiology	3
	その他	16
	計	90

明治期の眼科医学雑誌

廣田 住友

平石 充

渡辺 貴夫

1. はじめに

我々のグループは、明治期に刊行された雑誌の創刊号の調査をした。まず、医総目と文編第6版により明治期に発行された雑誌247誌を抽出した。そこで、この247誌の所蔵も抽出し、それらの現物調査をし、表紙、発刊の辞、奥付を複写記録することにした。まず、自館から始め、次に都内の所蔵館そして歴史の古い京府大・東北大・千葉大・北大・金沢大の図書館に足を運んだ。そこで、目録上のものだけでなく、それぞれの図書館の書架から明治時代に刊行された雑誌も確認した。すなわち、医総目に掲載記述のない雑誌のことである。また、東大の明治新聞雑誌文庫を尋ねて所蔵目録により、約80誌確認した。これらのことより、数多くの雑誌を調べることが出来た。それらを創刊年順に配列したものが表1である。総数351誌で、現物確認は271誌である。

2. 明治期に刊行された雑誌について

雑誌を年代順に並べた表1から、特徴的に言えることを列挙すると、

1. 明治2年 外人教師による講義録の出現「日講記聞」（明治2年）
2. 明治6年 最初の医学雑誌と呼ばれている「文園雑誌」（明治6年）発刊
3. 明治10年頃 衛生関係誌の発生「内務省衛生局雑誌」（明治9年）
4. 明治15年頃 学校校友会誌の出現「成医会月報」（明治15年）
5. 明治20年頃 学会誌の登場「東京医学会雑誌」（明治20年）
6. 明治22年頃 各科医学専門誌の出現

と、特徴付けることが出来る。以下に、この6事項について説明を加える。

2-1、外人教師による講義録の出現「日講記聞」

我々が東大の明治新聞雑誌文庫で確認したのは図1の「官版 日講記聞」である。大木⁽¹⁾によれば、日講記聞の種類は8種と記されている。これらの日講記聞は、雑誌ではなく医学校で講義した口述の講義録集である。



図1

2-2、最初の医学雑誌と呼ばれている「文園雑誌」

この「文園雑誌」は、小野寺⁽²⁾、谷津・鈴木⁽⁴⁾により、日本で最初の医学雑誌と定義づけられている。現時点では、まだこの雑誌の現物確認は行っていない。医総目にはこの雑誌の掲載はなく、前出の小野寺の論文により東北大学図書館所蔵、山崎文庫目録より順天堂にあることがわかるのみである。「文園雑誌」の1号は、明治6年6月(1873)、田代基徳により発刊され、5号までで廃刊。この5号で廃刊したことは、同じく田代基徳により明治11年に創刊された「医事新聞」の第2号32ページの「社告」に

「文園雑誌 五冊

此書ハ囊ニ田代家熟学徒ノ訳藁ヲ採録刊行スル者ニシテ我医事新聞ノ前集ト謂フモ可ナリ今般版主ニ請ヒテ合冊トナシテ郵送ニ便ニシ且其価ヲ廉ニス」

とあることによりわかる。しかし、まだ目にしていないのでぜひ現物を確認したいものである。

2-3、衛生関係誌の発生「内務省衛生局雑誌」

明治9年「内務省衛生局雑誌」、明治10年「衛生局報告」などの国政による報告書が相次いで刊行された。「内務省衛生局雑誌」は、わが国最初の衛生行政雑誌である。後の明治13年には、「衛生雑誌」、「衛生叢談」、「衛生廃談」などが創刊された。また、明治16年6月には、「大日本私立衛生会雑誌」が発行され、その後各地の私立衛生会の支会からもそれぞれの衛生会雑誌が発行された。

2-4、学校校友会誌の出現「成医会月報」

明治14年5月1日、高木兼寛は夜間医学校を設立し、それを成医会講習所と称した。そして、翌年15年2月に「成医会月報」を発行しドイツ医学に対抗して、英国医学の普及に努めた。

2-5、学会誌の登場「東京医学会雑誌」

明治20年3月東京医学会の機関誌として「東京医学会雑誌」が、創刊された。これに先立つこと明治19年に最初の地方医学会誌である「輔元会雑誌」が熊本で発行され、明治20年に新潟で「北越医会会報」が発行された。そして、明治22年頃から各地の医学会から医学会誌が現われた。

2-6、各科医学専門誌の出現

明治20年代初期に刊行された各科医学専門誌を挙げると、
明治22年 「産科婦人科研究会月報」、「井上眼科研究会報告」、「裁判医学会雑誌」
明治24年 「歯科研究会録事」、「歯科雑誌」
明治26年 「眼科雑誌」、「歯科攻究彙報」、「耳鼻咽喉科雑誌」
等があり、明治30年頃より各科医学専門誌の発行が数多くなった。

3. 明治期の眼科雑誌

明治期に創刊された眼科の医学雑誌で、「日本眼科学会雑誌」(明治30年)と「眼科臨床医報」(明治39年)の2誌は、現在も継続刊行されている。前者は最初の臨床専門学会である日本眼科学会の機関誌である。後者は長岡の一眼科医、桑原勇七郎氏の個人雑誌であった。また、桑原氏は「日本眼科之証明」(明治38年)という明治時代すべてをカバーする抄録雑誌を刊行したことで有名である。一方、井上眼科病院が発行母体となった「井上眼科研究会報告」(明治22年)は日本最初の眼科雑誌で、後には「井上眼科同窓会会報」

(明治31年)がある。このように、明治期にすでに数多くの雑誌が創刊されていた。そこで、それぞれの雑誌の流れを調べたので、明治期における眼科医学雑誌の概略を述べる。

ここで、なぜ眼科という専門分野を選んだのかの理由を列挙すると

1. 明治22年に日本最初の眼科雑誌「井上眼科研究会報告」の発刊
2. 日本最初の臨床系学会である日本眼科学会の機関誌である「日本眼科学会雑誌」が明治30年の創刊
3. 長岡の一眼科医、桑原勇七郎氏の個人雑誌であった「眼科臨床医報」(明治39年)の発刊
4. 上記の「日本眼科学会雑誌」、「眼科臨床医報」は現在まで継続刊行されている
5. 桑原氏による明治期眼科の文献抄録集に「日本眼科之証明」(明治38年)がある
6. 「日本眼科之証明」以外の二次資料に「眼科臨床月報」がある
7. 比較的眼科の歴史についての文献が多いので参考とする資料が数多ある

となる。以下に個々の雑誌を取り上げ、学問の発生から学会の誕生、そして二次資料の出現について考察する。

3-1. 「井上眼科研究会報告」1号 (図2)

発行日 明治22年4月25日
 編集者 井上達也
 発行所 井上眼科研究会
 書誌事項 年3回発行

1号(明治22年)-15,16号(明治28)//

井上眼科研究会の井上達也による、わが国最初の眼科雑誌である。井上眼科研究会は、明治22年4月から隔月に集合して研究討論をし、その研究会会誌として「井上眼科研究会報告」が創刊された。明治28年、井上達也の死去の後には、彼の養子となった井上達七郎が明治31年3月に井上眼科同窓会を設立して、7月30日に「井上眼科同窓会会報」(図3)を発行した。この「井上眼科同窓会会報」の1号に掲載の「井上眼科同窓会創立主意書」により、井上眼科研究会が、日本眼科学会に合併した事実がわかる。

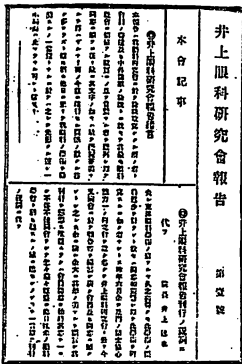


図2



図3

3-2. 「眼科雑誌」1巻1号 (図4)

発行日 明治26年7月
編集者 大西克知
発行所 眼科雑誌局
書誌事項 1巻1号(明治26) - 3巻2号(明治29) //

1巻1号の52ページの「謹告」に、創刊時の協力者の名前の記載並びに「眼科雑誌発刊ヲ計画セリ東西ノ新知識ヲ蒐集シテ新眼科学ヲ恵ミ交ルニ遠古ノ偉事卓見ヲ以テシテ日本眼科学ヲ富マシメ斯学ノ核実ヲ露暴シテ各眼科家ノ共有物タラシメンヲ冀ヘハナリ」とある。

この「眼科雑誌」は、「日本眼科学会雑誌」の前誌である。

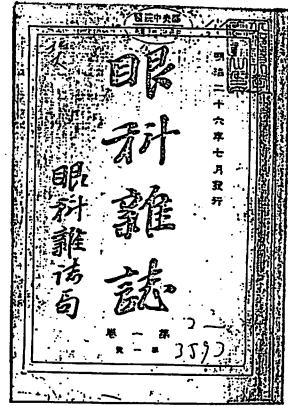


図4

3-3. 「日本眼科学会雑誌」1巻1/4号 (図5)

発行日 明治30年4月
編集者 大西克知
発行所 日本眼科学会
書誌事項 月刊
1巻(明治30) -

この雑誌は、前出の「眼科雑誌」を引き継ぎ、編者も大西克知である。発行母体の日本眼科学会は臨床系では全国組織をもつ最初の学会として明治30年2月27日に第一回日本眼科学会の総会を開いた。ここで、日本眼科学会の創設についてのべる。最初の眼科専門医家の集まりは明治17年12月15日で東大眼科教室の人々を中心で、眼科専門会を起こしたが、約1年で解散した。明治22年には、前出の「井上眼科研究会」が発足した。

のちに留学帰りの大西克知が、ドイツのハイデルベルヒ眼科学会のような学会の必要性を感じて、明治27ごろから須田卓爾、川上元治郎と三人で学会を創ろうとし、当時の眼科の大御所、河本重次郎東大教授に相談したが固辞された。それで明治29年の暮れにまた、相談しに行きやっと了承を得た。このように、学会が創設されて学会誌が発刊され現在に至っている。

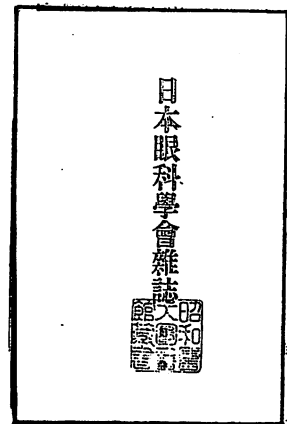


図5

3-4. 「眼科臨床医報」1号 (図6)

発行日 明治39年12月25日
編集者 桑原勇七郎

発行所 桑原文庫
 書誌事項 1号(明治39) - 35卷(昭和15) : 眼科臨床医報
 36卷(昭和16) - 39卷(昭和19) : 綜合眼科雑誌
 40卷(昭和21) : 眼科臨床医報

図6の表紙の左上には「明治38年11月以来月次発行」とあるが、奥付、第三種郵便物認可の日付から判断して発行日は明治39年12月25日である。はじめは、原著が中心であったが第3巻より国内文献の抄録が掲載される。現在の「眼科臨床医報」の年間索引、それに毎号の眼科関係雑誌別の抄録の掲載は、この時代から始まり、「日本眼科之証明」の伝統を引き継ぐものである。



図6

3-5. 「日本眼科之証明」1巻 (図7)

発行日 明治38年5月31日
 編集者 桑原勇七郎
 発行所 眼科研究会
 書誌事項 1巻(明治38) - 6巻(昭和8)

この雑誌は明治初年からの眼科論文の抄録誌である。

各巻の収録範囲は次の通りである。

- 第1巻 自明治初年至明治33年
- 第2巻 自明治15年至明治37年
- 第3巻 自明治15年至明治39年
- 第4巻 自明治40年至明治43年
- 第5巻 自明治44年至大正3年
- 第6巻 自大正4年至大正7年



図7

第1巻の巻頭には当時の著名な眼科教授、眼科医の祝辞があり、桑原勇七郎による「本書発行に就て」には「本邦にては明治初年より我科学の専門雑誌ありしや、或は一定の雑誌にのみ眼科貢献ありしや、抑々又、年々隔々年に此等の文章を集成するものありしや、蓋し左様の者一も存じあらず、若し夫れ以上の三点の一、何れか完備せしならば予は全く今日ん学有るを要せざりしならむ 此等のもの総じてなき又止を得ざるなり、然れども若し諸雑誌諸新報の索引丈け出来居りしならば、吾が同僚の便宜は幾許ぞや・・・」とある。桑原勇七郎は、ドイツのナーゲル氏年報(Jahresbericht uber die Leistungen und Fortschritte im Gebiete der Ophthalmologie)を見本とした。大正5年度ごろより抄録の掲載は「眼科臨床医報」になった。

3-6. 「眼科抄録月報」1巻1号 (図8)

発行日 明治44年4月1日
 編集者 中村辰之助
 発行所 東京医科大学眼科抄録会
 書誌事項 月刊
 1巻(明治44)-5巻(大正2):眼科抄録月報
 6巻(大正3):泰西眼科医報
 7巻(大正4)-32巻(昭和15):中央眼科医報
 昭和16:眼科臨床医報、実験眼科雑誌と
 合併し総合眼科雑誌[36(昭和16)-39(昭和
 19)] //

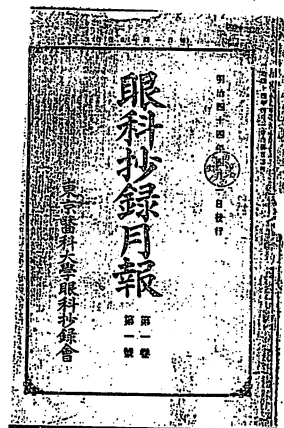


図8

発刊の辞には、「・・・之ヲ我ガ東京医科大学眼科医局ニ見ルニ泰西ノ新説ヲ載セル学術雑誌八月報ニ週報ニ積ンデ机上ニ堆ク其廣汎治博ナル到底一個人ガ能ク小閑時ヲ偷ミテ以テ悉ク綜該シ得ル処ニ非ズ。是ヲ以テ医局同人夙ニ相謀リテ抄録会ナルモノヲ組織シ各自其涉獵セル処ヲ交換シ以テ学界ノ大勢ニ後レザラン事ヲ期セリ。然シテ其梗概ノ空シク同人ノ裏ニノミ葬リ去ラルルハ是レ恨事ノ一ナリ。本邦眼科界ニ於イテ未ダ此種ノ抄録ノ公ニセラレタルモノアルヲ聞カズ從テ親シク原著ニ親炙セザルノ人ハ泰西学界ノ現状生ニ通ズル能ハズ是レ恨事ノ二ナリ。・・・」とあり、外国語文献の抄録誌である。中央眼科医報と誌名変遷してからは、原著も掲載するようになる。

3-7. 「東京眼科病院年報」1巻1号 (図9)

発行日 明治34年
 編集者 井上豊太郎
 発行所 東京眼科病院
 書誌事項 1巻1号//

謹告には、「東京眼科病院年報ハ出版時日不定ナレモ少ナクモ年中一回以上発刊スル積モリナリ併シ普ク発売ノ目的デナク只院友ニ配布シ併テ院友ノ動静ヲ報スルニアレハ院友ニハ必ス毎巻送呈スルモ若シ院友外ノ医士諸君ニシテ講読シ下サルナラハ本巻ハ65銭ニテ本郷区春木町半田屋医籍商店ヨリ発売シマスカラ同店ヨリ購求シ下サル様ニ願イマス」とあるが、1巻1号を出しただけで廃刊している。

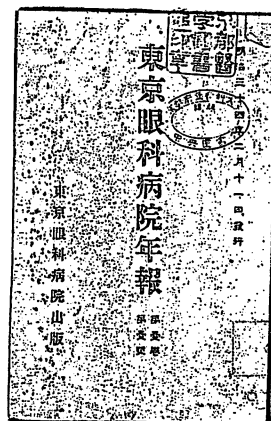


図9

3-8. 「眼科新知識」1巻 (図10)

発行日 明治39年
編集者 井上通泰
発行所 吐鳳堂書店
書誌事項 1巻(明治39) - 2巻(明治40) //

1巻の目次をみると原著の他に各国の眼科教授講師
姓名や、外国の有名教授像の紹介がある。発刊の辞等
はなし。

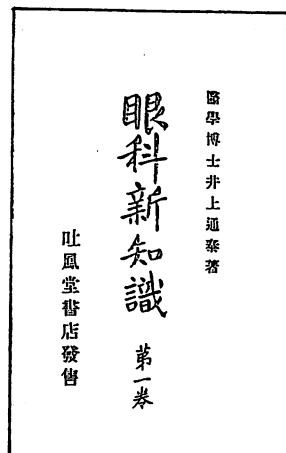


図10

3-9. 「宮下眼科医院同窓会雑誌」、「河本博士眼科研究会雑誌」について

明治31年に「宮下眼科医院同窓会雑誌」1,2号、明治44年東大眼科教室から「河本博士眼科研究会雑誌」が発刊されたが現物は不明のようだ。

4. おわりに

今回明治期に刊行された雑誌の創刊号の現物確認により、眼科医学雑誌の創刊号を中心にして報告した。現在、表1でリストアップした雑誌について詳しい考察は行っていない。よって、今後は、それらの「発刊の辞」を考察し、またそれぞれの雑誌の経過を調べる予定である。そして、目録に掲載のない雑誌を追跡調査それらの所蔵館を明らかにし、明治期に刊行された雑誌の書誌目録・所蔵目録を作成するのが最終目標であり、夢である。

最後に、本調査で来館、閲覧、複写に御協力していただいた各図書館の方、特に北海道大学医学部図書館の庄司・高瀬氏、金沢大学医学部図書館の細川氏にこの場で感謝の礼を述べさせて戴きます。特別な取りはからい有難うございました。また、この調査に助言をしていただいた東京女子医科大学図書館の堀江氏にも感謝しております。

引用文献・参考文献

- 1) 大木利夫：明治初年に発行された日講記聞について。医学図書館，10:30-34,1963.
- 2) 小野寺俊治：日本医学雑誌の発達について(1).日本医事新報，1728:47-50,1957.
- 3) 小野寺俊治：日本医学雑誌の発達について(2).日本医事新報，1736:88-95,1957.
- 4) 谷津三雄、鈴木勝：わが国最初の医学雑誌。日本医史学雑誌，29:118-119,1983.

- 5) 近藤禧祇男：「東京医事新誌」－明治初期の医学雑誌についての考察．医学図書館，20(2):141-152,1973.
- 6) 谷津三雄：内務省衛生局雑誌の内容．日本医史学雑誌，32:213-214,1986.
- 7) 鈴木勝、谷津三雄：明治10年前後の医事衛生．日本医史学雑誌，25:216-217,1979.
- 8) 大滝紀雄：成医会講習所設立の頃．日本医史学雑誌，28:277-278,1982.
- 9) 福島義一：日本眼科学の先覚；井上達也(1848-1895) 伝補遺．日本医史学雑誌，27:324-334,1981.
- 10) 酒井シズ：日本眼科学会の歴史．日本眼科学会雑誌，91(臨増):11-16,1987.
- 11) 三国政吉：眼科臨床医報80年の歩み．眼科臨床医報，80(10):2213-2234,1986.
- 12) 中泉行正：日本近代眼科開講百年史；その1．臨床眼科，26(11):1345-1353,1972.
- 13) 中泉行正：日本近代眼科開講百年史；その2．臨床眼科，26(12):1438-1447,1972.
- 14) 成田武二：日本医学の発達，東京，日新医学社，1956.
- 15) 福島義一、山賀勇：日本眼科全書，第1巻 眼科史，東京，金原出版，1954.
- 16) 三国政吉：日本眼科と新潟，新潟，新潟大学眼科同窓会，1972.

表1. 明治期の医学雑誌 (*現物確認済み)

*日講記聞(大阪医学校)	1(明治 2年12月)
*医事雑誌(東京)	1(明治 6年11月)
文園雑誌	1(明治 6年)
Mitteilungen der Deutschen...	1(明治 6年-9年)(1873-76)
陸軍医事雑誌	1(明治 7年)
*医学雑誌	1(明治 8年 5月)
荘内医学会会報	1(明治 8年 6月)
*講筵雑誌	1(明治 8年 9月)
*順天堂医事雑誌	1(明治 8年10月)
*医院雑誌	1(明治 8年11月)
*中外医事新聞	1(明治 8年 6月)
内務省衛生局報告	1(明治 8年)
〔内務省〕衛生局年報	明8(明治 8年)
東京築地病院報告	1(明治 8年)
*内務省衛生局雑誌	1(明治 9年 4月27日)
*医事雜報	1(明治 9年 5月)
明七雑誌(愛媛)	1(明治 9年)
農業雑誌	1(明治 9年)
西医雜報	1(明治 9年)
*養生雑誌	1(明治 9年)
*東京医事新誌	1(明治10年 2月25日)

- * 医範新説 1(明治10年 4月27日)
- * 起癪病院医事雑誌(仮名読新聞社) 1(明治10年 6月)
- * 衛生局報告 1(明治10年)
- 衛生新誌 1(明治10年)
- 衛生雑誌(静岡) 1(明治10年)
- 医事雑誌(金沢) 1(明治10年)
- * 医事新報(名古屋) 1(明治11年 7月28日)
- * 杏林新話 1(明治11年 9月10日)
- * 東京薬学新誌 1(明治11年11月23日)
- * 医事新聞 1(明治11年)
- * 刀圭雑誌 1(明治11年)
- * ようじょうのほん衛生新誌 1(明治11年)
- * 温知医談 1(明治12年 3月27日)
- * 医事集談 1(明治12年 3月)
- * 療病院雑誌 1(明治12年 3月)
- 博物雑誌 1(明治12年)
- 脚気病院報告 1(明治12年)
- * 中外医事新報 1(明治13年 1月20日)
- * 東京薬舗雑誌 1(明治13年 1月20日)
- * 博愛社報告 1(明治13年 2月再刷)
- * 衛生叢談 1(明治13年 3月24日)
- 東京医事新聞 1(明治13年 5月 6日)
- * 神奈川県衛生課報告 1(明治13年 5月)
- * 弘医月報 1(明治13年 7月13日)
- * 宮城病院雑誌 1(明治13年 7月28日)
- * 衛生雑誌(埼玉県衛生課) 1(明治13年 7月)
- * 養生雑誌 1(明治13年 9月20日)
- * 愛知県公立病院及医学校第一報告 1(明治13年12月)
- * 中央衛生会年報 1(明治13年12月)
- 衛生麈談 1(明治13年)
- * 神奈川県地方衛生会日誌 1(明治13年)
- * 起癪病院医事雑誌(後藤昌盛) 1(明治13年)
- 教育衛生新誌(新潟) 1(明治13年)
- 岡山県衛生年報 1(明治13年)
- 東京化学会誌 1(明治13年)
- 東京薬事雑誌 1(明治13年)
- * 東洋学芸雑誌 1(明治14年10月10日)
- * 薬学雑誌 1(明治14年12月)
- * 大阪府衛生報告 1(明治14年)
- * 島根県衛生課通報 1(明治15年 1月20日)

- * 成医会月報 1(明治15年 1月)
- * 千葉県聯合医会雜誌 1(明治15年 2月15日)
- * 海軍医事報告撮要 1(明治15年 7月)
- * 和漢医林雜誌 1(明治16年 2月 1日)
- * 起癪病院医事日誌 1(明治16年 5月)
- * 大日本私立衛生会雜誌 1(明治16年 6月)
- * 大日本私立衛生会大阪支会報告 1(明治16年11月)
- 大日本衛生新誌 1(明治16年)
- 岡山県衛生年報 1(明治16年)
- * 理学協會雜誌 1(明治16年)
- * 舖元会刀圭新誌 1(明治17年 2月24日)
- * 芝私立衛生会雜誌 1(明治17年 9月)
- * 獸医学会誌 1(明治17年12月15日)
- 法定伝染病患死者一覽 明治17年
- 大阪医報 1(明治17年)
- 陸軍省医学学校防疫研究報告 331(明治17年)
- 陸軍省医務局年報 1(明治17年)
- * 刀圭志林 (明治17年)
- * 漢洋医通 1(明治18年 3月 9日)
- * 京都医事雜誌 1(明治18年 4月)
- * 大日本私立衛生会千葉支会雜誌 1(明治18年 5月 3日)
- * 大日本医事全誌 1(明治18年 5月25日)
- * 大日本私立衛生会島根支会雜誌 1(明治18年 6月14日)
- * 大阪興医学社報告 1(明治18年 6月)
- * 陸軍軍医学会雜誌 1(明治19年 1月)
- * 人類学会報告 1(明治19年 2月10日)
- * 秩父医師講習会雜誌 1(明治19年)
- 大日本藥業新誌 1(明治19年)
- * 衛生試験彙報(内務省) 1(明治19年)
- 輔元会雜誌 1(明治19年)
- * 順天堂医事研究会報告 1(明治20年 1月15日)
- * 北越医会会報 1(明治20年 2月 4日)
- * 東京医学会雜誌 1(明治20年 4月20日)
- * 国政医学会雜誌 1(明治20年 4月28日)
- * 医事評論 1(明治20年 5月10日)
- * 海軍衛生部報告 統計之部 1(明治20年 6月)
- * 衛生令纂(新潟県衛生課) 1(明治20年 7月15日)
- * 緒方病院医事研究会申報 1(明治20年10月10日)
- * 衛生叢譚 1(明治20年12月 1日)
- * 医事評論新編 1(明治20年12月25日)

- * J Coll Sci Imper Univ Tokyo 1(明治20年)(1886/87)
- * Mitteilungen aus der... 1(明治20年)(1887)
- 日本薬理学文献集 1(明治20年)
- 植物学雑誌 1(明治20年)
- 東京大学医学部薬理学教室論文集 1(明治20年)(1887/1925)
- * 京都医学会雑誌 1(明治21年 1月28日)
- * 婦人衛生会雑誌 1(明治21年 2月 2日)
- * 愛媛衛生雑誌 1(明治21年 3月31日)
- * 動物学雑誌 1(明治21年11月15日)
- * 対馬通俗衛生会雑誌 1(明治21年11月20日)
- * 大日本獣医会誌 1(明治21年)
- 大日本私立衛生会松前支会定時報告 1(明治21年)
- 大日本帝国陸軍省統計年報 衛生之部 1(明治21年)
- * 東京慈恵医院報告 1(明治21年)
- * 北海道医事講談会月報 1(明治22年 1月25日)
- * 産科婦人科研究会月報 1(明治22年 2月20日)
- * 同好医会雑誌 1(明治22年 2月28日)
- * 畿近外科学会報告 1(明治22年 3月 3日)
- * 衛生新誌 1(明治22年 3月25日)
- * 大日本私立衛生会金沢支会年報 1(明治22年 3月26日)
- * 私立奨進医会雑誌 1(明治22年 4月 8日) - 医談
- * 薬劑誌(薬劑誌社) 1(明治22年 4月15日)
- * 大日本私立衛生会飯田支会雑誌 1(明治22年 4月19日)
- * 広島国政医学講習会雑誌 1(明治22年 7月20日)
- * 東京鍼灸治会講義録 1(明治22年10月 9日)
- * 岡山医学会雑誌 1(明治22年12月13日)
- * 医事新論 1(明治22年12月23日)
- * 新座入間通俗衛生談話会雑誌 1(明治22年12月)
- * 普通衛生雑誌 3(明治22年)
- 玄洋医会月報 1(明治22年)
- * 玄洋医海月報(吉扞之撰(栞)) 1(明治22年)
- 医学科通信講義 1(18)(明治22年)
- 医学研究(福岡) 1(明治22年)
- * 井上眼科研究会報告 1(明治22年)
- * 大阪興医学社月報 1(明治22年)
- * 裁判医学会雑誌 1(明治22年)
- * 薬劑誌(東京薬劑師会事務所) 1(明治22年)
- * 実地医報 1(明治23年 4月25日)
- * 大日本私立衛生会栃木支会雑誌 1(明治23年 6月)
- * 一中医会月報 1(明治23年10月)

* 日本医学会誌	1(明治23年12月20日)
衛生療病誌(東京)	10(明治23年)
陸軍獣医士廐	9(明治23年)
徳島医学会雑誌	1(明治23年)
* 歯科研究会録事	1(明治24年 3月22日)
* 福井県医学会雑誌	1(明治24年 4月25日)
* 千葉医学会雑誌	1(明治24年10月20日)
* 東京獣医新報	1(明治24年11月 3日)
* 日本赤十字	1(明治24年12月29日)
兵庫県医会雑誌	1(明治24年)
歯科雑誌	1(明治24年)
* 薬業雑誌	1(明治24年)
* 大阪医学研究会雑誌	1(明治25年 3月16日)
* 東北医学会会報	1(明治25年 4月 8日)
* 弥生会医務月報	1(明治25年 4月30日)
* 国家医学	1(明治25年 5月 8日)
* 国家医学講義録	1(明治25年 5月30日)
* 広島医事新誌	1(明治25年 7月28日)-軌近より
* 愛媛連合医会報告	1(明治25年 8月13日)
広島県医会記事	1(明治25年)
法医学会雑誌	56(明治25年)
* 研瑤会雑誌	1(明治25年)
* 日本医事雑誌索引	1(明治25年)
日本薬業新誌	1(明治25年)
大阪医学校校友会雑誌	1(明治25年)
* 済生学舎医事新報	1(明治26年 1月15日)
* 歯科攻究彙報	1(明治26年 2月 7日)
* 軍医学校業府国文之部	1(明治26年 3月26日)
* 医談	1(明治26年 6月11日)
* 私立薬学校薬事月報	1(明治26年 7月 4日)
* 衛生宝鑑	1(明治26年 7月10日)
* [日本薬剤師会] 会報	1(明治26年 8月25日)
* 繼興医報	1(明治26年11月 5日)
* 大日本医会報告	1(明治26年)
* 眼科雑誌	1(明治26年)
軍医学校業府	1(明治26年)
医事新報(東京)	2(明治26年)
医事集宝	1(明治26年)
医事週報	4(明治26年)
耳鼻咽喉科雑誌	1(明治26年)

日本衛生新聞	1(明治26年)
* 名古屋好生館医報	1(明治27年 2月25日)
* 京都医事衛生誌	1(明治27年 7月10日)
* 愛知医学会雑誌	1(明治27年 7月)
* 顕微鏡	1(明治27年 8月21日)
医海時報	5(明治27年)
日本橋区衛生協会雑誌	1(明治27年)
* 巢鴨病院医事年報	1(明治27年)
* 小児科	1(明治28年 4月20日)
* 一高志林	1(明治28年 7月15日)
* 北多摩郡私立衛生会雑誌	1(明治28年 8月 9日)
* 細菌学雑誌	1(明治28年12月 5日)
* 北陸人類学会誌	1(明治29年 5月 3日)
* 衛生新報(静岡)	1(明治29年 5月20日)
* 日進医学	1(明治29年 7月 5日)
* 大日本私立衛生会福島支会雑誌	1(明治29年 7月 6日)
* 歯科医学叢談	1(明治29年 7月27日)
* 中外薬報	1(明治29年 8月25日)
* 十全会会誌	1(明治29年11月25日)
* 鎮西医報	1(明治29年11月30日)
芸備医事	1(明治29年)
助産之摺	1(明治29年)
* 陸軍獣医事	13(明治29年)
* [京都府医学校] 校友会雑誌	1(明治30年 1月22日)
* 日本眼科学会雑誌	1(明治30年 6月)
* Annat Zool Jpn	1(明治30年)(1897)
* 公衆医事	1(明治30年)
* 芝私立衛生会会報	1(明治31年 2月 5日)
* 工業化学雑誌	1(明治31年 2月15日)
* 台北医院報告	1(明治31年 4月)
* 井上眼科同窓会会報	1(明治31年 7月30日)
* 通俗衛生(大阪)	1(明治31年 8月20日)
* 台湾総督府製薬所事業年報	1(明治31年)
* 台湾医事雑誌	1(明治32年 2月25日)
* 胃腸病研究会会報	1(明治32年 2月)
* 産科婦人科学雑誌	1(明治32年 3月15日)
* 水産講習所試験報告	1(明治32年 3月31日)
* 歯学研鑽	1(明治32年 4月 5日)
* 歯科長交々々報	1(明治32年 4月 8日)
* 獣医学友会会報	1(明治32年 8月13日)

- * 関西産科婦人科学会報告 1(明治32年12月20日)
- 癌ニ因ル死亡統計(実数及平均) 明治32年
- 広島衛生医事月報 1(明治32年)
- 胃腸病ニ因ル死亡統計 明治32年
- * 児童研究 1(明治32年)
- * 産婆学雑誌 1(明治33年 1月16日)
- * 大日本私立衛生会飽海支会会報 1(明治33年 2月15日)
- * 愛知医学校同窓会雑誌 1(明治33年12月)
- * 日本外科学会誌 1(明治33年)
- * 婦人と子ども 1(明治34年 1月29日)
- * 東京眼科病院年報 1(明治34年 2月11日)
- * 岩手済生新報 1(明治34年 4月10日)
- * 大阪医学会雑誌 1(明治34年 8月17日)
- * 静岡県医学会会報 1(明治34年 9月25日)
- * 北海医報 1(明治34年10月30日)
- * 衛生事務誌 1(明治34年12月15日)
- 防長医事 3(明治34年)
- 衛生談話 2(明治34年)
- * 皮膚病学及泌尿器病学雑誌 1(明治34年)
- * 北陸医会報告 1(明治34年)
- 季刊養育院 1(明治34年)
- 濃飛医学会雑誌 1(明治34年)
- 農林省農事試験場報告 17(明治34年)
- * 臨床摘録 1(明治34年)
- * [東京慈恵医院医学校] 校友会雑誌 1(明治35年 2月18日)
- * 神経学雑誌 1(明治35年 4月 1日)
- * 医科器械月報 1(明治35年 6月 1日)
- * 日本消化機病学会雑誌 1(明治35年 8月22日)
- * 台湾医学雑誌 1(明治35年 9月20日)
- * 中央婦人科学雑誌 1(明治35年10月)
- * 日本聯合医学会誌 1(明治35年10月)
- * 治療新報 1(明治35年)
- 医事業業新聞 1(明治35年)
- 日本保険医協定会報 1(明治35年)
- 日本聯合医学会軍陣医学部会誌 1(明治35年)
- * 日本帝国人工動態統計 [明32](明治35年)
- 東京府薬剤医師会会報 1(明治35年)
- * 東京薬学誌 1(明治35年)
- * 薬叢 1(明治36年 3月 1日)
- * 日本婦人科学会報告 1(明治36年 5月)

- * 理学界 1(明治36年 7月 5日)
- * 齒科医学会会報 1(明治36年10月23日)
- * Mem Coll Sci Engin Kyoto Imp Univ 1(明治36年)(1903/08)
- * 学校衛生 1(明治36年)
- * 日本内科学会会誌 1(明治36年)
- * 岡山医学専門学校校友会雜誌 1(明治36年)
- * 独仏英最新医学月報 1(明治37年 3月15日)
- * 京都医学雜誌 1(明治37年 4月15日)
- * 衛生学及細菌学時報 1(明治37年 5月25日)
- * 日本医学 1(明治37年10月13日)
- * 日本衛生学会雜誌 1(明治37年11月 1日)
- 衛生新報(東京 衛生新報社) 1(明治37年)
- * 医学中央雜誌 1(明治37年)
- 岩手県衛生年報 明35(明治37年)
- * 東京府巢鴨病院年報 1(明治38年 3月31日)
- * 臨床薬石新報 1(明治38年 6月15日)
- * 若越医談 1(明治38年 6月)
- * 治療薬報 1(明治38年 8月 1日)
- * 獣疫調査報告書 1(明治38年 8月 8日)
- * 人性 1(明治38年)
- 女医界 1(明治38年)
- 九州薬学専門学校々友会雜誌 1(明治38年)
- * 日本眼科之証明 1(明治38年)
- * 緒方病院産婆看護婦同窓会雜誌 1(明治38年)
- * 日本婦人科学会雜誌 1(明治39年 1月15日)
- * 同仁 1(明治39年 6月10日)
- * 臨床彙講 1(明治39年 7月 1日)
- * 信濃衛生(月刊) 1(明治39年 7月25日)
- * 眼科臨床医報 1(明治39年)
- * 眼科新知識 1(明治39年)
- 醸造試験所報告 7(明治39年)
- 台湾農友会会報 1(明治39年)
- * 福岡医科大学雜誌 1(明治40年 1月)
- * 衛生評論 1(明治40年 2月11日)
- * 緒方婦人科学紀要 1(明治40年 5月 5日)
- * 医事月報 1(明治40年 5月15日)
- * 電音計診断雜誌 1(明治40年 6月25日)
- * 癌 1(明治40年 8月)
- * 化学的食養雜誌 1(明治40年10月)
- * 治療新典 1(明治40年)

茨城県医学会誌	3(明治40年)
* 盛岡高等農林学校学術報告	1(明治40年)
* 東洋医事新報	1(明治40年)
* 東京市駒込病院報告	1(明治41年 2月24日)
* 耳鼻咽喉科京都臨床	1(明治41年 3月)
* 外科臨床講義録	1(明治41年 5月25日)
* 齒科新報	1(明治41年11月30日)
* 同攻医会会報	1(明治41年12月28日)
道修薬報	5(明治41年)
* 東京慈恵会報告	1(明治41年)
* 臨床集報	1(明治42年 1月 1日)
* 東洋医界	1(明治42年 2月25日)
* 陸軍軍医団雑誌	1(明治42年 3月)
* 薬事月報	1(明治42年 4月25日)
* 熊本医学専門学校校友会雑誌	1(明治42年 6月10日)
* 会報(埼玉・入間郡医師会)	1(明治42年 6月)
* 刀圭新報	1(明治42年 8月10日)-医談より
* 陸軍獣医団報	1(明治42年 8月15日)
* J Coll Agric Imper Univ Tokyo	1(明治42年)(1909)
* 日本帝国死因統計	[明39](明治42年)
〔陸軍省〕臨時脚気病調査会報告	1(明治42年)
* 金沢医学会会報	1(明治43年 3月10日)
* 山田病院院友会雑誌	1(明治43年 3月10日)
* 臨床月報	1(明治43年 3月15日)
* 高医学士同窓会業報	1(明治43年 9月15日)
* 大東医事新報	1(明治44年 1月10日)
* 眼科抄録月報	1(明治44年 4月 1日)
* Sci Rep Tohoku Univ Ser 1 Math...	1(明治44年 4月 6日)(1911)
* ポケット臨床月報	1(明治44年 4月15日)
* 最近之臨床医学	1(明治44年 6月 1日)
* 中央医海新報	1(明治44年 8月 5日)
* 日新医学	1(明治44年 9月)
* 朝鮮医学会雑誌	1(明治44年12月29日)
* 日本病理学会会誌	1(明治44年12月)
* Verhand der Japan Pathol...	1(明治44年)
* [朝鮮総督府] 医院年報	1(明治44年)
* 保健彙報	1(明治44年)
九大小児科同門会々報	1(明治44年)
* 内科学雑誌	1(明治44年)
* 東京市衛生試験所報告:事務的報告	甲(明治44年)

- | | |
|--------------------|----------------|
| * 東京市衛生試驗所報告:學術的報告 | 乙(明治44年) |
| * 心理研究 | 1(明治45年 1月) |
| * 医事公論 | 1(明治45年 3月15日) |
| * 台灣總督府研究所報告 | 1(明治45年 3月) |
| * 医家独逸語雜誌 | 1(明治45年 4月12日) |
| * 海軍軍医会会報 | 1(明治45年 5月) |
| * 最新之治療 | 1(明治45年 7月10日) |
| * Dental Bee | 1(明治45年) |
| [陸軍省] 臨時脚氣病調查会業報 | (明治45年) |
| 漸強医会会誌 | 1(明治45年) |

Review of the editorial peer review

- I. はじめに 黒川 玲子
1. レフェリーシステムとは
 2. レフェリーシステムの調査・研究
 3. 日本における調査・研究
- II. Peer reviewの定義 安藤 越代
1. 編集過程のpeer review
 2. 用語法について
- III. Peer reviewの意義 雨宮 正恵
1. 学術雑誌の質の維持
 2. ふるいおとし
 3. その他のメリット
- IV. Peer reviewの問題点 木下真由美
1. レフェリーの偏見
 2. peerやレフェリーの質の問題
 3. 出版の遅れ
 4. 時間的・金銭的費用の消費
- V. おわりに 阿部 信一
1. 論文審査としてのpeer review
 2. よりよいシステムを目指して
 3. peer reviewの今後
- VI. まとめ 宮内 洋一

I. はじめに

1. レフェリーシステムとは

学術雑誌に一つの論文が掲載されるまでのプロセスには、その分野内での幾重ものフィルターが存在する。まずは研究のアイディアの段階で消えるもの、仲間内での口頭発表、学会の発表等で淘汰され、やっと雑誌に投稿するところまで来ても、さらにその論文が出版に価するかどうかについてより厳しい審査が行われる。また、ある雑誌が掲載を却下した論文が他の雑誌へ流れたり、その段階で消えたりするものもある²²⁾。一つの研究成果が論文として人々の目に触れられるようになるまでには、このようなプロセスを経るのである。このようなフィルターは一般に、(Editorial) Peer Review とともにレフェリーシステムとも呼ばれるが、このフィルターによる質のコントロールがなされてきたが故に、学術雑誌はフォーマルコミュニケーションの最も主要なメディアとしての地位を確立してきたといえる³⁶⁾。

質を維持するということは、情報源としての信頼性を高めるということである。論文の著者と読者の双方が、採用基準の厳しい雑誌を好む傾向にあり、Morgan はそれを偶然ではないと述べている²²⁾。科学知識の質の維持について、科学者は責任を負っているのである。また、レフェリーシステムにおいて審査に当たるレフェリーが匿名であったり、報酬を受けないといった献身的な姿勢は科学者以外の人々の驚きとなっている³⁸⁾。科学者にとって同時代の科学知識に責任をもつということは、論文を書いたり、他の人が書いた論文を審査するということなのである。

2. レフェリーシステムの調査・研究

審査された研究と審査していない研究とを区別したのは、1665年に創刊されたPhilosophical Transactions of the Royal Society が最初とされている³⁾。以来、仲間による論文の審査は広く行われてきた。しかしながら、このレフェリーシステムに人々の関心が向いたのは、1971年の Zuckerman & Mortonの調査が発表されてからだといえる³⁶⁾。学術雑誌の誕生以来じつに3世紀もの間レフェリーシステムは灰色のペールに包まれていた訳である。

かつて Garvey が、「レフェリーが科学的質の高い原稿を選ぶ際に採用する基準について、また選択の決定がどの程度公平かつ一貫しているかについて、ほとんど調査が行われてこなかった」と述べたように¹³⁾、レフェリーシステムについて発表された多くの論文の中で、実際に調査を行っている論文は非常に少ないのである。3世紀にわたって、論文の執筆・投稿、審査、出版というプロセスが科学コミュニケーションの一つのパターンとして確立されてきた以上、その検討は正当かつ重要であることはいうまでもない。今でも、レフェリーシステムが論文の著者にとっては不透明であり、リジェクト(掲載拒否)の理由が分からないといった著者の憤りの手紙がときどき雑誌に掲載されていることからみても、今後さらに調査が行われる必要がある。

最近では、1985年に Lock が “A difficult balance” を発表している³⁰⁾。彼は長い間 British Medical Journal(BMJ) の編集者をしてきた経験からこの本を著した。Editorial peer review in Medicine という副題が表すように、この本は医学雑誌の編集過程における論文審査について書かれたものである。その中には、1979年に BMJ に投稿された 1551 論文の審査過程についての調査結果が載せられており、それらをふまえた上での改善点も述べられている。Lock は科学を4つの局面で捉えている。1つめは漠然とした推測、仮説の部分、2つめは発見の部分、3つめは学問上の大躍進の部分で、最後が学問として標準的なものになる局面である。そしてレフェリーシステムが科学の研究を評価するいかに重要な部分を担っているかということを示している。この Lock の “A difficult balance” の影響は大きく、その後に発表されたレフェリーシステムについての論文のほとんどに引用されており、1986年の JAMA に書評も掲載されている³¹⁾。

3. 日本における調査・研究

日本では山崎が1981年に「大学医学雑誌」、1982年に「医学・自然科学雑誌」のレフェリーシステムについての調査結果を発表しているが^{32)、35)}、その後、この種の調査論文は見当たらない。彼はまた、レフェリーシステムについてこれまでに行われた調査・研究をレビューにまとめている³⁶⁾。そこでは、1965年の Orr & Kassab の生物医学分野についての調査から、1981年に山崎と梶原が行った大学医学雑誌についての調査・研究にいたるまでをまとめている³³⁾。

山崎がレフェリーシステムのレビュー論文をまとめたのは1982年である。今回われわれは、科学コミュニケーションの核をなすともいえるレフェリーシステムについて学ぶ意味で、山崎のレビュー以後に発表された論文を中心に検討した。以下に、その成果をまとめる。

II. Peer review の定義

1. 編集過程の Peer review

研究者は、研究成果を論文にまとめ、その専門分野の学術雑誌に投稿する。投稿された論文は、雑誌の編集委員会により雑誌に掲載するか（受理）、掲載しないで著者に返すか（却下）が決定（論文の採否決定）される。

当然のことながら、論文はその雑誌の投稿規定をふまえて書かれており、この投稿規定というフィルターを通過した上で更なる内容についての評価が行なわれている。内容が、その雑誌に掲載する論文として妥当か否かについては、例えば（表1）に青木が示すような様々な視点から評価が行なわれている¹⁾。しかし論文が扱う領域の専門知識をもたない編集者が論文の内容を評価することは極めて困難なことである。そこで、編集者は、その領域の専門知識を有するとされる研究者（専門家）に内容についての評価を依託する。評価を依託された専門家は、“その雑誌に掲載するのにふさわしい学術論文であるか”、“その雑誌に掲載するのにふさわしい学術論文であるためには、どこをどのように訂正すればよいのか”等、編集委員会に意見を述べ、それに基づいて委員会では論文の採否決定を行なう。このような過程を経て受理された論文だけが、学術論文として出版されるのである。

以上の学術論文の編集過程で専門家が行なう評価のことを、“Peer review”あるいは“Referee”と称している。これについて Lock は、“論文の長所についての専門意見の編集者のよりどころの1つとして存在するのであり、訂正するにしろ、訂正しないにしろ、論文を出版するために受理するのか、却下するのかについての最終的な決定をするのではない”¹⁹⁾と、最終的な論文の採否決定をするのは編集委員会であることを強調している。

表1 論文の評価基準1例¹⁾

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 以前に発表された論文・研究ではないか（オリジナリティの有無）2. 異なった専門領域を扱ってはいないか（雑誌の専門領域）3. 研究方法・論理構造等の明かな間違いはないか |
|--|

2. 用語法について

これまでの述べてきた“編集者のための専門意見を述べる者”のことを、雑誌編集者間では、“Peer review”あるいは“Referee”と称している。

“Peer review”は、生物医学分野の代表的索引誌である Index Medicus（以下、IMと称する）のキーワードとしても用いられている語である。そこでIMの“Peer review”の項目をみると、学術雑誌の編集過程で行なわれているもの²¹⁾の他に、実際の診療活動で行なわれているもの（医師の臨床行為の評価）等、が含まれていた。また上記の二つの“

Peer Review” 以外にGRANT（研究の助成金）のための“Peer Review”が行なわれていることも Smith により報告されている²⁹⁾。

次に、語の本来の意味から考えるために、Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary を参照すると、

Reviewer : 1. (新刊書などの) 批評家、評論〔書評〕家、評論雑誌記者。

2. 検閲者

Referee : 1. 問題の決定、解決を委任された人。

2. (競技、試合の) 審判員、レフェリー。

3. 身元〔信用〕照会先、身元保証人。

4. (出版の前にする科学) 論文校閲者〔審査員〕

5. 〔法律〕(裁判所または当事者が依頼する) 仲裁人、調停者、審査員、鑑定人。

とある¹⁸⁾。この“Reviewer”の1、また“Referee”の4は、共に情報の出版に関わる者の名称であるが、“Reviewer”の1はすでに出版された情報に対して評価する、つまり書評をする者のことであり、編集過程で評価する者とは全く異なる。これに対して、“Referee”の4は、出版以前の情報の審査をする者、つまり編集過程で評価する者を示している。

前述のように“Peer Review”という用語は、医学・学術研究の分野において、異なる3つの行為に対して用いられているというだけでなく、“Reviewer”自体にも“出版前の論文を評価する者”という意味はない。これに対して、“Referee”という用語は、医学・学術研究の分野においては、出版以前の論文を評価することに対して用いられているだけである。これらのことから、“編集者のための専門意見を述べる者”のことを表現するのに、より混乱を少なくするためにも“Referee”という用語を使用するのが妥当ではないだろうか。

1981年にInternational Federation of Scientific Editors Association (IFSEA) の第2回会議で、“reviewing とは、(本のreviewのような) 出版されたものについての判断に限るべきであり、refereeingとは、出版される以前のものの質の判断のことに用いるべきである”という勧告がされた。しかし、Lock によれば、この勧告もほとんど効力を発揮することなく、依然として編集者の間でこの2つの用語の混乱は続いているようである¹⁹⁾。

III. Peer review の意義

1. 学術雑誌の質の維持

自然科学系の学術雑誌に論文を掲載するために審査が何故必要なのだろうか。その理由はいくつか考えられるが、第一に雑誌そのものの質を高め、維持してゆくためであり、ひいては科学全体の情報の信頼度を高めるためであろう。

ハーバード大学公衆衛生学部の Bailar は、New Engl J Med の中で、「(Peer Review とは) 科学技術雑誌において、その分野の専門家 (Peers = 仲間) が、雑誌に掲載する論文を査定・評価すること」であり、「熟考されていない、オリジナルでない論文を排除したり、適切な考えを持った論文を守ったりして、雑誌の質を保持する」のがその意義であると述べている³⁷⁾。

学術雑誌の発行においては、その質を維持していくことが、読者を獲得して生き延びるための最善の道であり、学術論文に審査が必要な理由もここにある。

Garvey が述べているように、「雑誌論文に伴う同僚による審査のプロセスは、科学における質の管理の最も重要な点」である¹³⁾。Garvey はまた、自らの政治力によって、反対意見を封じ込め、ソヴィエトの遺伝学の発展を妨げた Lysenko の例を挙げ、科学研究の正しい方向づけのために必要なシステムであるとしている。Garfield のいう「レフェリー制 (=Refereeing) とは、提出された論文が、その分野に受け入れられたことを保証することである」¹²⁾ことは、逆にいえば、革新的な研究が受け入れられにくいということでもあるのだが、Garvey はこれを「科学全体として多分不公平を被ることはないであろう」¹³⁾と、仕方ないこととしている。

2. ふるいおとし

第2の理由は、全て掲載するには物理的に不可能な、膨大な量の論文を却下するためのシステムとして目下のところ、Peer Review 制度が最適であるためであろう。

Garvey は、「ここ数年の却下率の全般的な上昇は、届いた原稿の数の増大に直面して、この滞貨をできる限り少なくするための企てであるように思われる」と述べている¹³⁾。例えば、Baue の調査によれば、1979年～'83年まで、Arch Surg に寄せられた論文3,776のうち、Acceptされたのは、1,251(35%)で、2,325(65%)が却下された³⁾。これを受けて Baue は、「Peer Review 制度は完全とはいえないがこの種の選抜方法としては最高のものであり、科学誌の品質保証でもある。そのため、著者、読者、レフェリー、編集者がそれぞれの権利と役割を認識し、バランスを保つことが重要だ」と述べている。

3. その他のメリット

その他の理由としては、「臨床医学分野において“いかに臨床に適した論文であるか”が大切であるが、Peer Review はこれに大きな役割を担っている」ことが挙げられる²²⁾。

また、Garvey の指摘する通り、「原稿のレフェリーや研究申請の審査員として、科学誌は明らかに科学情報の流れの先頭に立っている。原稿のレフェリーの場合、科学者は、数ヶ月の間公表されるはずのない最近完成したばかりの研究について読む機会を持つ。また研究申請の審査の場合、リサーチフロントでの次の進歩のためにどんなことが計画されているかを知る機会を持つ。明らかに、これらのことは最初に観察、発見、解題、記述、説明等を行うことが目的であるようなシステムにおいては軽視することのできない利点」であることも見逃せない点であろう¹²⁾。

Peer Review には、レフェリーの偏見、発行の遅れ等の多くの欠点があり⁹⁾、革新的な論文を掲載することで、活発な議論を狙う編集者とのつながりや、また「明確な基準としてのガイドライン、客観的尺度、被 Review 者からの反論の機会のなさ³⁾」などの多くの問題をはらんでいるシステムなのである。

しかし、Peer Review 制は過去300年に恒って行われてきている。「科学の崩壊を防ぐ重要な部分」を担っており、そこにこそ意義があるのである⁹⁾。正に、「このふるい落しの過程は、科学にとって常に重要であったし、今日原稿が殺到している全ての権威のある雑誌にとって、審査制度は主に研究の主流に位置する成果を報告している原稿を処理する点で有効である厳格なシステム」なのである¹²⁾。

IV. Peer review の問題点

1. レフェリーの偏見 (BIAS)

(1) 革新的研究に対する偏見

ピアレビューにおいて最も危惧すべき問題点は、革新的な研究に対するレフェリーの偏見である。科学の進歩に欠かせない革新的な研究は、ほとんどの場合徹底的に否定される。Cole⁷⁾らが、「仲間(peer)たちは、今起こっている、あるいはこれから起こるであろう重要なことよりも10年前に起きた重要なことについて、より意見が一致するものなのである」と述べているように、レフェリーたちは、過去に多くの人々が提唱してきた方法や理論については肯定的で、今までに一度も目にしたことがないような方法や理論は受け入れようとしにくい傾向がある。

(2) レフェリーどうしの統一性のなさ

ピアレビューにおいてレフェリーたちの意見が一致しないことは多くの人々が指摘している。

表1 496の投稿論文を判定した2人のレフェリーの一致度

Data	Degree of Concurrence (% of total)			
	1	2	3	4
	Rejected papers (401)	39.7	31.1	17.5
Accepted papers (95)	50.5	33.7	10.5	5.3
All papers (496)				
Observed	41.8	31.7	16.1	10.4
As determined by chance	30	29	24	17

NOTE: (1) Both reviewers gave identical ratings, i.e., A-A, B-B, etc. (2) Reviewers differed by one step, i.e., A-B, B-C, or C-D. (3) Reviewers differed by two steps, i.e., A-C, B-D. (4) Reviewers disagreed totally, i.e., A-D.

* Dr. Ronald Goldberg collected and analyzed these data.

出典: Ingelfinger, FJ. Peer review in biomedical publication. (1974)

Ingelfinger¹⁵⁾は、New England Journal of Medicine が受け付けた5ページ以上の長さを持つ496論文を対象に、レフェリー間の判定の一致度を調査している(表1)。判

定をA・B・C・Dの4段階にし、不採用論文と受理論文にわけ、偶然の一致 (as determined by chance)による一致率と比較した。2人のレフェリーの判定が合致したものは41.8%で、偶然の一致率である30%よりは高かったが、残りの58.2%はレフェリーの意見が分かれたことになり、半数以上意見が一致しなかったことがわかる。

Dixon⁹⁾は、American Journal of Medicine、Annals of Internal Medicine、New England Journal of Medicineの3誌に1975年と1981年に掲載された肺疾患関係の39論文を対象に、National Institutes of Health (NIH)で肺疾患部門を担当している者を外部の審査員にして、“いかに臨床に適したものであるか”という観点で審査を行った。1つの論文は2人の外部の審査員に渡され、その2人の間で食い違いがなければ審査員の決定は受諾され、食い違いがあれば編集委員会側で判断を下す。その結果、39論文のうち25論文が外部の審査員に受理され14論文が却下された。受理された25論文のうち17論文が臨床に適したものと判断され8論文が臨床に適していないと判断された。外部の審査員に受理されなかった14論文は編集委員会が審査を行い、8論文が臨床に適したものの、6論文が臨床に適していないと判断された。すなわち外部の審査員と編集委員会双方で25論文(64パーセント)が臨床に適した論文と判断されたわけである。Dixonは、出版されて年月が経ってもこういった著名な雑誌に掲載された論文が64パーセントという率で“臨床に適したもの”と判断されたことを述べながらも、1975年と1981年の出版の時点で質の高い論文が審査で落とされたかもしれないこと、掲載された論文でも約1/3(36パーセント)は臨床に適していないと判断されたことなどを指摘している。そして彼は“臨床的な適切さ”という点において審査員どうして様々な矛盾が生ずるこのような状況の下では、編集委員会こそが、偏った論文選択を阻止しバランスの良い審査をうながしていく力を持つのだと強調している。

レフェリーどうしの意見が異なった場合は、どう対処すべきなのだろうか。O'Conner²³⁾はこう述べている。「もしレフェリー間の採否意見が大きく異なったならば、その論文は出版せよ。何故ならばそこに何か人を動かすものがあるからだ」そして、レフェリーどうし意見が分かれるような様々な評価が存在する論文は、編集委員会ができるだけ掲載する方向へもっていくべきだとしている。

(3) 有名な著者への偏向・有名でない研究者に対する偏見

Peters と Ceci²⁴⁾は、著名な心理学関係の雑誌に掲載された論文のうち13論文を選び、中味を変えないで著者の所属、氏名、論文のタイトル、前書きの部分を変えて、その論文が載った雑誌に再投稿した。その結果、13論文のうち3論文が再投稿を見破られ、1論文は受理され、残りの9論文はリジェクトされた。リジェクトされた理由はオリジナルでないということではなく、内容が貧弱であるためであった。彼らはこの研究結果は中央のエリートへの偏向、地方のものに対する偏見を明らかにしていると述べている。このように、レフェリーたちは大規模な機関に所属する著名な研究者の論文は採用し、地方の機関の研究者や無名の研究者の論文は不採用にする傾向がある。

2. Peerやレフェリーの質の問題

ピアレビューを行いうる peer (=同等の地位にある人、同輩、同僚、仲間)とはどんな人なのか、誰がレフェリーになる資質を備えているのか、といったことに関する基準は存在しない。また、客観性や公平性、公正さの程度などは明確に設定できるものではない。

Stossel³⁰⁾はレフェリー(reviewer)の社会的地位と審査の質について、Journal of Clinical Investigation 誌の1,600人のレフェリーが行った1983年1年間の審査を対象にして調査を行った(表2)。まずレフェリーの地位を“高い”“ふつう”“低い”に分け、審査の質を、“良い”“ふつう”“不十分”に分けた。表2を見ると“不十分な”審査は“高い”地位のレフェリー中多くの割合を占め、“ふつう”の地位のレフェリーは“ふつう”の審査を行う率が他の2つの地位の審査員より高く、“低い”地位のレフェリーは最も高い割合で“良い”審査を行っていることがわかる。また彼は地位の高いレフェリーほど論文審査の依頼を断わるという調査結果も出している。そして、雑誌の編集者が、“適さない”審査員、すなわち審査を依頼しても、断わったり不十分な審査しかしない審査員を選んでいるのではないかと疑問を投げかけ、地位は低いながら能力がある研究者が、良い審査を行っていることが広く知られるべきであると述べている。

表2 reviewer の地位と審査の質

Table 3. Reviewer Status and Quality of Reviews.*

REVIEW QUALITY	REVIEWER STATUS		
	"HIGH"	"MIDDLE"	"LOW"
	% of reviews		
"Good"	56.6	55.0	73.5
"Fair"	24.9	36.1	17.7
"Poor"	18.4	8.9	9.8

*The effect of status on review quality is statistically significant at the level of $P < 0.01$, as determined by chi-square analysis.

出典: Stossel, TP. Reviewer status and review quality. (1985)

Clayton と Boyle³¹⁾は、看護学関係の雑誌30誌の編集者を対象に審査が行われているかどうかの調査を行っている。回答のあった25誌のうち23誌が審査を行っていたが、ほとんどの雑誌においてある論文を掲載するかしないかの最終決定は編集者サイドで行われていた。また「審査を行っていない」2誌においても、論文の掲載の際には3名以上の読者が論文を審査していた。彼は、レフェリーの持つ研究の専門的意見は雑誌の編集に関する知識とは異なることを指摘し、レフェリーグループの基準に合った論文よりも読者のニーズ

に合う論文が選ばれるべきでありその読者のニーズは編集者が一番良く知っていることを強調している。

“peer”による審査において忘れてはならない問題が、“論文の盗用(fraud)”である。Lock²⁰⁾は、1970年代から1980年代にかけての多数の論文の盗用を“科学コミュニティにおける誤った評価にありがちなもの”と述べ、論文の盗用が頻繁に起こる理由として、レフェリー制のピアレビューの不適切さ、たとえば、①限られた費用の中で新しいことを行なったり発見したりしなければならないプレッシャー ②否定的な結果がきらわれること ③「質より量」が良しとされる「出版するか消えさるか」という行動様式 (publish or perish syndrome)などを挙げている。そして、もっと編集者やレフェリーが、論文中の疑わしい部分、たとえば明らかに著者が多すぎるとか、二重投稿または“salami”の出版(1つの研究を複数の論文として書くこと)、矛盾するデータなどに注意するようになれば、誤った出版は防げる、と提案している。

3. 出版のおくれ (delay in publication)

Ingelfinger¹⁵⁾は、ピアレビューシステムはばく大な時間をがつがつと食う (gobbles up time in huge) と表現している。そして、論文が受理されてから出版されるまで平均33日かかり、レフェリーによっては原稿を受け取ってから編集委員に戻すまで8週間、16週間、ひどい時は32週間もかかることがあり、原稿が全然戻ってこないこともあると述べている。編集委員会がレフェリーを選ぶ時間や、編集者とレフェリー、レフェリーと著者が電話や手紙で原稿についてやりとりする時間、編集者がレフェリーに原稿を戻してくれるよう催促する時間などを加えれば、さらに時間がかかっていることになる。

4. 時間的・金銭的費用の消費

Crawford⁸⁾は、British Medical Journal に投稿された各論文のピアレビューにかかるコストは1984年では平均48ポンド (72ドル) と計算されると述べ、Bulletin of Medical Library Association においては、審査員が投稿論文を読み、批評し、審査するのに2～4時間、編集者が審査員や著者と話し合いをし最終的な評価するのに4時間、長い論文や特別な協議を必要とする論文にはさらに時間がかかるとしている。そしてそのような時間と費用をかける価値が各論文にあるのかと問われることがよくある、と述べている。

Bailar²⁾は、編集者、レフェリー、著者が研究に費やせる専門的時間の消費、出版の遅れ、レフェリーシステムを通過して最終的に掲載されることになった論文の質の悪化、そして科学に貢献したかもしれない文献がリジェクトされたことによる損失などが、レフェリーシステムの主な費用 (cost) であるとしている。Smith²⁹⁾は、雑誌論文のピアレビューと助成金のピアレビュー両方の場合において、検討、審査、討論に莫大な時間的・金銭的費用がかかることを強調している。

以上述べてきたように、ピアレビューにおける様々な問題点——たとえば、革新的な研究が却下されたり、無名な著者の論文が却下されたり、出版が遅れたり費用がかかったりといったこと——は、すべてレフェリーの持つ偏見、レフェリー制の性質から生じていることがわかった。また、レフェリー1人1人の審査の内容について調べてみると Stossel

30) が指摘しているように社会的地位の高いレフェリーが論文の審査依頼を断わったり、質の低い審査をしていて、むしろ社会的地位の低い若いレフェリーの方が適切な審査を行っているという事実も明らかになった。

医学領域の成長によって、誰1人として広がる領域全てを把握することが不可能になり、スペシャリストの時代となってきた現在の¹²⁾、学術雑誌論文の審査において、専門的知識を持つレフェリーはどうしても必要なのであるが、こういった問題点の多さは無視できないものがある。

こういった問題点、とくに革新的な研究が却下され人々の目にふれずに消しさられてしまうのを防ぐ鍵を握っているのが、“編集者”である。また、自らの研究の向上と科学進歩への貢献をはかるために雑誌を依りどころとしている“読者”こそ、編集者への働きかけ (letter to the editor, correspondenceなど) によってその雑誌を変えていく力を持っているのである。このように現在のピアレビュー問題点を解決していく力を持っているのは、編集者と読者だと言えるのである。

V. おわりに

1. 論文審査としての Peer Review

前項でも述べているように、“Peer Review”という言葉は、様々な意味に用いられている。今回私たちが取り上げている学術雑誌の論文審査の他に、研究助成金の申請に対する審査や医療行為についての同僚審査などの意味も一般的である。これらの意味の混同が、科学コミュニケーションのこの種の制度についての論議において誤解と混乱を招いているようである。例えば、雑誌論文の審査と研究助成金申請の審査とは、前者が研究が既に行われてしまった後の審査なのに対して、後者は研究が行われる以前にその計画について審査するわけで、おのずとその意味合いは大きく違っている。学術雑誌の投稿論文に対する審査について、Feinstein は「既成事実をつきつけられる」と表現している¹⁰⁾。このような誤解を避けるために、学術雑誌の論文審査には Lock が著書“A Difficult Balance”の副題に用いたように“Editorial Peer Review”とすとか、山崎のように「レフェリーシステム」と表現するのが妥当である^{19, 34)}。ここでは、レフェリーシステムという表現を用いることにする。

これまでにみてきたように、学術雑誌の編集過程におけるレフェリーシステムは多くの問題点を有している。それらにもかかわらず300年以上もの長い間、科学コミュニケーションの核としての地位を保ってきたのもまた事実である。それは、レフェリーシステムが長期間にわたって必要なものとしてみなされてきたことを意味し、またレフェリーシステムに替わるだけのものがこれまで現れなかったことの裏返しでもある。レフェリーシステムについて論じた多くの論文においても、様々に問題点を指摘した上で結論としては、現状におけるレフェリーシステムの有用性を認め、その改善方法と展望を述べているものがほとんどである^{2, 22, 29)}。つまり、完全ではないけれども現存のこの種の制度としては最善のものであり、各学術雑誌の編集者もそのことは十分わかった上で、なおその効果に満足しているのである³⁶⁻²⁷⁾。

2. よりよいシステムを目指して

ここでは前章を受けてレフェリーシステムの問題点に対する対策について概観し、今後の展望についてまとめてみる。指摘されている問題点をまとめると、①偏見、②不正・盗用、③遅れ、④費用の4つに大別されよう。この中で、①と②については審査に当たるレフェリーの質の問題といえ、③と④は制度的ないし技術的な問題といえる。

(1) レフェリーの質

レフェリーの質の問題は、どういう人をレフェリーとして選抜するかということと、レフェリーの主観にあまり左右されない客観的な審査方法の導入の2点にまとめられるかと思う。レフェリーの選抜については、編集者に大きく関わってくるが、Martin と Irvine

は、このような問題を防ぐために、レフェリーの所属をチェックしたり信頼できるレフェリーを確保することを挙げている²¹⁾。一般に、論文の審査には複数のレフェリーが当たるが、その際に所属の異なるレフェリーを起用したり、レフェリーどうしでの意見の不一致には編集者が適正なコントロールを行うことが大切である²⁴⁾。結局、レフェリーの質とその審査内容については、編集者が大きな責任を負っているといえる。Kapp は、法医学雑誌でのレフェリーシステムの調査から、法医学関係の論文の審査について、編集者にとって論文を選ぶ際にレフェリーとしての法律家の助言は重要であり、編集者にはそのような助言を求める責任があるとしている¹⁶⁾。

また、King は、Peer review プロセスを完全なものとするために改善すべき点として以下の4つの条件を挙げている¹⁷⁾。

- ① (審査結果に) 反論する権利を研究者 (筆者) に与える
- ② 他分野の研究者や外国の同分野の研究者をレフェリーに登用する
- ③ 審査の基準に明確なガイドラインを設ける
- ④ 審査過程に客観的な尺度を用いる

この種の意見は他にもみられ、レフェリーの保守性や偏向に対する歯止めとして有効といえる。革新的な研究に対するレフェリーの偏見に関して、Garvey は、半世紀の間その業績が認められなかった Polanyi の例を示しながら、誤った研究の発表が科学の発展に及ぼすマイナスに比べれば、革新的な研究が欠落する危険性はある程度は仕方がないとしている¹³⁾。

(2) 制度的・技術的問題

公正で完璧な審査をしようとするればするほど、それだけ時間と費用がかかるのがふつうである。また、論文審査が学術雑誌の質の維持という点で重要な機能を果たしている以上、安易に合理化するわけにもいかない。Lock が“Difficult Balance”と述べたのは、まさに実感である。

とはいえ、あまり審査に時間がかかると、先取権争いのために審査の比較的緩い学術雑誌や他のメディアへの発表が促されてしまい好ましくない。レフェリーシステムについて技術的・制度的に短縮が可能な部分は改善すべきであり、これまでもいくつか論文が発表されている。

それぞれの論文に適当なレフェリーを選ぶのに、コンピュータを使うことは、統計的に効果があり、編集者の負担を軽減する¹⁴⁾。JAMA でも、6000人近いレフェリーの選定に、コンピュータを導入しており、毎週メンバーの入れ替えを行い、システム自体の完全性の強化も行っている。ただし、JAMA 編集者の Williams は、このシステムはあくまでも補助的なものであり、完全に人間の業務に変わるものではないとして、コメントはレフェリーや編集者が行うと述べている²¹⁾。

論文審査にチェックリストを導入している例として、Gardner は BMJ の例を紹介している。BMJ では、General Check List と Clinical Trial Check List とを日常的に導入しており、統計的な審査方法の一つとして評価されている¹¹⁾。

また、研究助成金の審査制度では、引用分析などの科学的尺度の研究が盛んである²⁹⁾。

科学的尺度の導入は、レフェリーの偏向の是正や機械化への応用などをもたらすだけに、学術雑誌の論文審査方法としてもこの種の研究がより大切となってくる。

レフェリーシステムに要するコストについては、そのシステムとしての重要性を考えればある程度は仕方がないともいえるが、タイム・ラグ等の問題の改善に伴い軽減されていくと考えられる。

3. Peer Review の今後

論文審査におけるレフェリーの偏見の問題については、レフェリーシステムについて述べている論文のほとんどで取り上げられている。山崎がいうように、情報の質の自己コントロール制度がその専門領域にとってプロフェッショナルとしての必然の機能であり、そこにおける審査を通過することがその専門領域に認知されたことを意味するならば³⁷⁾、それまでにない革新的な研究が廃されてしまうのはある面では当然ともいえる。レフェリーシステムを廃止したことによる失敗例を山崎は紹介している³⁷⁾。

医学雑誌の編集者の多くもレフェリーシステムの有効性を主張しており、BMJ編集者のBaueは、著者とレフェリーと読者と編集者とがそれぞれの役割を認識し、機能していくならば、レフェリーシステムは有効であると述べている³¹⁾。また、コンピュータの導入について、New England Journal of Medicineの編集長のRelmanは、医学情報の初期の担い手として、コンピュータが印刷体メディアに完全にとってかわることは疑わしい、としている。彼は、コンピュータには「おもしろい」とか「オリジナルである」、「重要である」といったキーワードはなく、その導入によって、予期しなかったものを発見するという読者の楽しみが失われてしまう、と述べている²⁵⁾。山崎も、雑誌編集過程に技術的変化が起きたり、Electronic Journalなどが主流になったとしても、依然として科学コミュニケーションにおいてレフェリーシステムは重要な要素であると述べている³⁷⁾。

このように様々に論じられているレフェリーシステムも、実際の調査・研究はまだまだ少なく、今後この種の調査・研究を行っていくことが大切になってくるだろう。今年シカゴで、医学雑誌のレフェリーシステムについての国際会議が、AMAの後援で行われる。医学分野の主要な編集者が集まって、どのような話し合いが行われるか期待されるところである。

VI. まとめ

以上、ピアレビューの定義、意義、問題点、今後の展望を述べてきた。まとめてみると、ピアレビューの定義はまだ漠然としており、定まっていない。言葉についても医学分野では「ピアレビュー」が優勢だが²⁶⁾、一般的には「レフェリーシステム」の方が使われており、1980年の 2nd International Conference of Scientific Editors でもレフェリーシステムという言葉に統一が計られたようだ。

ピアレビューの長所は、要約すれば「科学の質を維持するのに必要なものである」と言うことが出来る。そして科学の崩壊を防ぐものとしてこれに代わるものは今の所他にない²⁷⁾。

しかし、ピアレビューのシステムはよい面ばかりを持つ訳ではなく、そのあり方などの是非をめぐって、絶えず論争のタネにもなっている。科学の発展のためになくはならない「革新的な論文の否定」をする可能性のあることが、ピアレビューの短所であると言える。これはつまり同一分野内のレフェリーは、保守化の傾向があるということである。

この偏向を是正するためには、レフェリーと編集者の役割分担が必要である²⁸⁾。編集者は掲載に迷うような論文、レフェリー間の意見が食い違ったような論文は、雑誌に掲載するようにし、読者の議論を待つような姿勢が望ましいのであろう。

最後に、ここではレフェリーシステム全般について観てきたが、医学分野、自然科学分野、人文科学分野など学問の中味によって、そのシステムは自ずと違った形になっていると言うことを付け加えておく。

引用文献

1. 青木信仰. 科学論文の評価—レフェリー制度をめぐって. University Press 11(10) : 24-8 , 1982.
2. Bailar JC. Journal peer review : the need for a research agenda. New Engl J Med 312: 654-657, 1985.
3. Baue AE. Peer and/or Peerless Review. Arch Surg 120 ; 885-8, 1985.
4. Berk RN. Threats to the Quality of Peer-Reviewed Radiology Journals: Identification of the Problem and Possible Solutions. AJR 150 : 19-21 , 1988.
5. Carney MJ. A difficult balance: editorial peer review in medicine. JAMA 256(2) : 255 , 1986.
6. Clayton BC, Boyle K : The refereed journal: prestige in professional publication. Nursing Outlook, 29: 531-534,1981.
7. Cole S, Cole JR, Simon GA : Chance and consensus in peer review. Science,214 : 881-886, 1981.
8. Crawford S: Peer review and evaluation of manuscripts. Bull Med Lib Assoc 76 (1):75-77, 1988.
9. Dixon GF : The peer review and editorial process : a limited evaluation. Am J Med, 74: 494-495, 1983.
10. Feinstein AR. and Spitzer WO. The Peer-Review Process-and an acknowledgement of our peerless reviewers. J Clin Epidemiol 1989 ; 42 : 1-4.
11. Gardner MJ. Use of check lists in assessing the statistical content of medical studies. BMJ 292(6523) : 810-2 , 1986.
12. Garfield E. Refereeing and Peer Review. Part1. Opinion and Conjection on the Effectiveness of Refereeing. Current Contents. 31 ; 3-11, 1986.
13. Garvey WD. (津田良成他訳) コミュニケーション. 敬文堂, 1981.
14. Gordon MD. Computer-assisted referee selection : a look at the option. Communication Technology Impact 5(11) : 5-12 , 1984.
15. Ingelfinger FJ : Peer review in biomedical publication. Am J Med,56:686-692, 1974.
16. Kapp MB. Legal Discussions in Medical Literature : Is There Adequate Peer Review?. Med Law 7 : 317-21 , 1988.
17. King J. A review of bibliometric and other science indicators and their role in research evaluation. Journal of Information Science 13 : 261-76 , 1987.
18. 小稻義男編. 研究社新英和大辞典. 第5版. 研究社, 1980.
19. Lock S. A difficult balance ; Editorial peer review in medicine. London , Nuffield Provincial Hospitals Trust , 1985.
20. Lock S : Fraud in medicine. Br Med J, 296: 376-377, 1988.
21. Martin B.R. and Irvine J. Assessing basic research : some partial indicators of scientific progress in redioastronomy. Research Policy 12 : 61-90 , 1983.

22. Morgan P. Peer Review in the medical journals. *BMJ* 292 ; 646, 1986.
23. O'Conner M : Editing scientific books and journals. Wells, Pitman Medical, 1978.
24. Peters DP, Ceci SJ : Peer-review practices of psychological journals : the fate of published articles, submitted again. *Behav Brain Sci*, 5:187-195,1982.
25. Relman AS. The purposes and prospects of the general medical journal. *Bull NY Acad Med* 64(8) : 876-80 , 1988.
26. Rennie D. et al. International Congress on peer review in biomedical publication. *JAMA* 261(5) : 749 , 1989.
27. Rennie D,Knoll E. Investigating peer review.*Ann Intern Med* 109(3):181,1988.
28. Robin ED. and Burke CM. Peer Review in Medical Journals. *Chest* 91(2):252-5.
29. Smith R. Problems with peer review and alternatives. *BMJ* 296 ; 774-7, 1988.
30. Stossel TP : Reviewer status and review quality : Experience of the Journal of Clinical Investigation. *New Engl J Med*, 312(10): 658-659, 1985.
31. Williams E. The process of peer review of scientific manuscripts. *JAMA* 260 (12) : 1761 , 1988.
32. Williamson JW. Quality assurance in The Netherlands : Part 1. A evaluation of the CBO peer review experience in hospital care. *Aust Clin Rev* 5(19) : 160-7 , 1985.
33. 山崎茂明. 大学医学雑誌のレフェリーシステム. *情報管理* 24(2) : 122-31 , 1981.
34. 山崎茂明. 学術雑誌レフェリーシステムの役割. *看護展望* 7(9) : 16-20 , 1982.
35. 山崎茂明. わが国の医学・自然科学雑誌のレフェリーシステム. *Libr Inf Sci* 20 : 27-39 , 1982.
36. 山崎茂明. 学術雑誌レフェリーシステムの展望. *大学図書館研究* 21 : 33-42, 1982.
37. 山崎茂明. 学術雑誌のレフェリーシステムの今後. *情報管理* 25(12) ; 1071-6,1983.
38. 山崎茂明. 学術雑誌の成長をめぐる批判的検討. *情報管理* 29(10) : 863-70,1987.
39. Zuckerman H. Patterns of evaluation in science : institutionalisation, structure and functions of the referee systems. *Minerva* 9 : 66-100 , 1971.

国内発行の医学分野のコアジャーナル

大村 伸栄
小島 久美子
浜田 秀生
宮下 美香
川村 順子
江口 敏一

I. 総論

I-1. はじめに

医学領域の学際化が言われる中、医学雑誌は年々刊行され続けている。医学図書館員として増え続ける雑誌に対して、内容を把握し、その雑誌が自館でどのように使われるか、専門家間の評価はどうか、図書館での共同利用を含めた相互利用性があるか、という点を評価しなければならない。しかし、一口に雑誌の評価といっても、掲載論文の質の評価は難しく、とても図書館員の手におえるところではなく、他の視点で雑誌を評価する必要が生まれてくる。

Bradfordの法則によると、雑誌は「Core Journal(核雑誌)」「Leading Journal(重要雑誌)」「Peripheral Journal(周辺雑誌)」にわけられる¹⁾。「コアジャーナル」はある分野に関連する論文を非常に多く掲載している少数の雑誌群であり、その分野の研究の中心であると言える。だが、図書館において「コアジャーナル」と云うとき、それは利用の多い雑誌、所蔵の多い雑誌、評価の高い雑誌など様々な要素を含む。

本田はどのような種類の雑誌が基本的に必要かということをしすKey Journalを判定する要素として、1.必要かつ有益な情報を含んでいること、2.多くの研究者に利用できる形態で発表される情報であること、3.主要二次文献に収録されていること、4.利用頻度が多い、5.引用文献・参考文献として頻繁に引用される、と5つの条件をあげている²⁾。また山崎は医学分野のコアリストの構成として、1.利用の中心となるBasicなもの、2.臨床活動に必要なClinicalなもの、3.より研究レベルの強いResearch的なもの、4.co-medical部門や医学関連分野のもの、の4つからなるとしている³⁾。

今回私達は、1.最新の、質的に高い論文が掲載されている、2.研究者が比較的容易に入手できる、3.二次資料に収載されるなど専門家から高い評価をうけている、4.引用される率が高い、の4つをコアジャーナルの条件として考えた。また、大学図書館におけるコアジャーナルではBrandonリストにみられるような病院図書室を中心とした臨床系の雑誌ばかりではなく、基礎的な、また教育的な雑誌も必要であることも考慮に入れてコアジャーナルを考えた。

I-2. コアジャーナルの選出方法

コアジャーナルの選出方法には、図書館の利用調査による方法、引用分析による方法、図書館における所蔵調査による方法、二次資料収載状況による調査方法、専門家による評

術などの方法が上げられる。どの方法も以下のような特徴があげられる。

①利用調査(貸出・複写件数、相互貸借等)による方法・・利用者の生の声が得られやすいが、半面調査母体となる図書館内部の資料に左右されやすく、総合的な評価は得られにくい。⁴⁾

②引用分析による方法(Journal Citation Reportsを利用する方法、特定の雑誌における引用調査)・・外国雑誌はJournal Citation Reports(以下JCRとする)によって容易に雑誌のランキングが示せるが、当然のことながら和文誌については対象となっておらず、国内の雑誌については、総合的な報告はされていない。限定した分野(例えばがんや歯科)での報告はなされているが、論文掲載数の多い雑誌が有利という点があり、Impact Factorを出さねば正確な分析は出来ない。⁵⁾⁶⁾⁷⁾

③図書館における所蔵調査による方法・・大学や病院の研究者が容易に入手できる資料として、図書館での所蔵が多い雑誌ほど重要であるという発想からこの方法が検討されているが、国内発行雑誌には交換寄贈という入手経路をもつ雑誌が多く、入手しやすい雑誌が上位を占める可能性もある。⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾

④二次資料収載状況による調査方法・・国内外の二次資料に収録されているかを調べることで、その雑誌がどのように評価されているかを調べる方法であるが、和文誌は国外の二次資料に収録されにくいという点、またこの方法は評価としての価値はあるが、収録していることが即「コア」であるとは言い難い点を考慮に入れる必要がある。¹¹⁾¹²⁾¹³⁾

⑤専門家による評価(アンケート、寄稿者による分析)・・アンケートによる調査では、その調査対象となる専門家を選ぶ基準、また専門家の個人的な主観に結果が左右されやすい¹⁴⁾。寄稿者の分析は、寄稿者と論文の質との相関関係の実証は難しい。

以上述べたように、コアジャーナル選出においては単一の方法では偏りができ、総合的な評価が得られにくい。選出には複数の手法を用いて多角的に検討する必要があると考えられる。

I-3. 調査方法

今回私達は、図書館における所蔵調査による方法を取り、医学図書館の所蔵状況からみた「所蔵コアジャーナル」を抽出した。これは、研究者が入手しやすい雑誌を所蔵状況から判断しようとしたものである。

方法として「現行医学雑誌所在目録 1988(以下、現行とする)」の「国内雑誌篇」を用いて、国内発行雑誌2820誌について、医学図書館・歯学図書館・その他の加盟館・薬学図書館・協力館、の5つにわけて所蔵館数を算出した。次いで、総所蔵館数順に雑誌を並べ替え、収録館136館中50%にあたる68館が所蔵している346誌をリストアップし、さらにその346誌についてUlrichによって与えられた分類、発行形態(商業誌・学会誌・研究機関誌・その他)、発行部数、発行頻度、1988年1号の論文数、入手方法(寄贈・購入・その他)を調査した(図I-1)。これらの調査から、346誌についての傾向、購入誌の傾向、欧文誌の傾向、Ulrichの分類をもとにした雑誌の分類、分類ごとの雑誌の傾向などを考察した。

ただ、これらの結果はあくまでも「所蔵コアジャーナル」の傾向であって、総合的に評価したコアジャーナルの選出ではないことをここでお断りする。(大村 伸栄)

コア・ジャーナル チェック・リスト

雑誌名 _____

No _____ 総数順 _____ 位 _____ 分類 _____

1. 発行形態 商業誌・学会誌・研究機関誌・その他

2. 発行部数 年間 部

3. 発行頻度 週刊・隔週・月刊・隔月・季刊・年刊

4. 論文数 1988年 1号 原著論文()
 総説 ()
 その他 ()

5. 雑誌の入手方法 寄贈・購入・その他

図I-1.コア・ジャーナル調査票

II. 所蔵館数からみた分析

まず現行の国内雑誌篇に収録されている2820誌(実数は2743誌)のそれぞれについて医学図書館(75館)、歯学図書館(15館)、その他の加盟館(12館)、薬学図書館(28館)、その他の協力館(6館)の5つに分けて所蔵館数を数え、雑誌ごとの所蔵館数の総計を出した。ここでコアジャーナルとしてこれから扱っていく雑誌の集合を、この結果を用いて2820誌から限定しようと考えた。方法に問題があらうかと思われたが、今回は収録館136館の50%にあたる68館が所蔵している、2820誌中の上位346誌(以下、上位346誌とする)をとりあえずこの調査で扱うこととした。当然この346誌ではコアジャーナル選出にあたって十分な範囲をカバーしているとはいえないが、今回はこの範囲にとどめ、次回の調査を待つこととした。上位346誌について医学・歯学・薬学の各分野別図書館がそれぞれ持つ傾向や、これらの所蔵の重複といった角度から見て、コアジャーナルにより近い集合に絞れないかと、館種別にみた上位所蔵誌より分析を始めてみた。

II-1. 館種別の上位所蔵雑誌の調査

まず対象となっている上位346誌の持つ傾向だが、分類、発行形態、刊行頻度についてみると以下のような結果が得られた(分類は1雑誌が2分野以上の分類にあてはまる場合があるので合計は346誌にはならない。)。

表Ⅱ-1 <分類>

医学一般	146 誌	40.7%	循環器疾患	6 誌	1.7%
歯科学	19	5.3	耳鼻咽喉科学	5	1.4
薬理・薬学	16	4.5	小児科学	5	1.4
外科学	14	3.9	眼科学	5	1.4
衛生学	11	3.1	内分泌疾患	5	1.4
内科学一般	9	2.5	微生物学	5	1.4
癌	8	2.2	皮膚科学	5	1.4
精神科学	6	1.7	麻酔科学	5	1.4
産婦人科学	6	1.7	その他	282	
呼吸器疾患	6	1.7			

表Ⅱ-2 <発行形態>

商業誌	95誌	27.5%
機関誌	150	43.4
学会誌	87	25.1
他	14	4.0

表Ⅱ-3 <刊行頻度>

年刊	54誌	15.6%
季刊	63	17.9
隔月刊	52	15.0
月刊	136	39.3
他	41	11.8

これによると分類別では「医学一般」が約40%を占め、その他では、臨床系の雑誌が多く上位を占めている事がわかる。「その他」の項目が多いのは、この表で、各項目の誌数が4誌以下のものを「その他」としているためであって、このことからこの上位346誌は各項目に広く散らばっているということが言える。

発行形態は、機関誌が半数近くを占め、商業誌と学会誌が残りを二分している。これは先の「医学一般」に分類されるものの多くが、機関誌であることに深く関わっている。ここに所蔵からコアジャーナルを考えることの問題の一つがあると思われる。

刊行頻度は月刊誌が特に多いが、そのほかはあまり差が無い。

次に、各分野別の傾向を知るため、各分野の90%にあたる館が所蔵する雑誌について、同じように見てみた。医学図書館は67館が所蔵する128誌が対象となり(346誌中32%)、歯学図書館は13館が所蔵する126誌(346誌中36.4%)が、薬学図書館は25館が所蔵する12誌(346誌中3.5%)がそれぞれ対象となっている。(分類では多い項目のみ挙げた)

表Ⅱ-4 <分類>

	医学	歯学	薬学
医学一般	60	54	1
外科学	10	4	
産婦人科学	5		
小児科学	4	4	
内分泌疾患	3	2	1
呼吸器疾患	4		

内科	5		
皮膚科学	3		
歯科学	2	19	
生化学	2	4	2
衛生学	5	3	
薬理・薬学		5	
耳鼻咽喉科学	1	4	
科学	1	3	1
化学			4

表Ⅱ-5 < 発行形態 >

	医学	歯学	薬学
商業誌	42.3 %	30.2%	27.5%
機関誌	41.4	44.4	43.6
学会誌	13.5	22.2	25.1
その他	2.7	3.2	3.8

表Ⅱ-6 < 刊行頻度 >

	医学	歯学	薬学
年刊	9.0	4.8	15.3
季刊	18.9	27.8	17.6
隔月刊	9.0	14.3	15.1
月刊	48.6	39.7	39.6
他	14.5	13.4	12.4

以上から対象誌の数は充分といえないが次のことがわかる。

1. 薬学図書館では、雑誌のばらつきが明らかであり、そのため90%で所蔵している雑誌について調べても薬学図書館としての所蔵の傾向がはっきりしない。
2. 医学図書館、歯学図書館については医学一般が大きく占め、臨床系の雑誌が多いことは上位346誌と変わらない。
3. 歯学図書館では、歯学が特に多い。
4. 薬学図書館では、年刊が特に多い。

Ⅱ-2. 各分野別館の所蔵の重複

Ⅱ-1. で述べた各分野別の所蔵の傾向は、各分野別所蔵の90%にあたる館が所蔵する雑誌について調べたものである。これらの雑誌の重複する部分が、医学・歯学・薬学それぞれの図書館で重要とされている雑誌であるという意味で、現行による所蔵コアジャーナルに近いものと考えることができるのではないかと思った。そこでこれらの重複を、医学・歯学・薬学の各分野図書館に限って調べたところ、科学・Journal of Biochemistry・代謝・医学のあゆみ、の4誌が重複していた。さらに対象を各分野別所蔵館の50%にあたる館が所蔵する雑誌に拡げて調べたのが表Ⅱ-7である。

このほとんどが、基礎系の雑誌または「医学一般」である。また、刊行頻度を見ても、年刊がかなりはいつており、これは、最新の情報を求めるといった雑誌の性格と合い入れないものがあり、現行の所蔵から見たコアジャーナルのリストであるとはいえない。

この原因として、薬学図書館の所蔵傾向の影響が考えられる。というのは薬学図書館の加盟館の数が少ないこと、所蔵雑誌が医学図書館のそれと重ならない部分がかなりあるこ

表Ⅱ—7 重複雑誌35誌

雑誌名	所蔵館	発行形態	発行頻度	発行部数	入手方法
医学のあゆみ	131	商業誌	週刊	9,100部	購入
科学	129	商業誌	月刊	29,000	購入
代謝	129	商業誌	月刊	8,000	購入
蛋白質・核酸・酵素	121	商業誌	月刊	15,000	購入
Journal of Biochemistry	118	学会誌	月刊	2,650	購入
医学図書館	117	その他	季刊	1,500	購入
学術月報	114	その他	月刊	5,000	購入
生化学	114	学会誌	月刊	12,000	購入
川崎医学会誌	113	機関誌	季刊	1,200	寄贈
聖マリアンナ医科大学雑誌	110	機関誌	季刊		寄贈
薬学図書館	108	その他	季刊	1,200	寄贈
防衛医科大学校雑誌	107	機関誌	季刊		寄贈
Kawasaki Medical Journal	107	機関誌	季刊	1,800	寄贈
公衆衛生院研究報告	105	機関誌	季刊	1,500	寄贈
日大歯学	101	機関誌	隔月	2,100	寄贈
日本薬理学雑誌	98	学会誌	月刊	3,850	購入
ビタミン	97	学会誌	月刊	1,800	購入
薬局	97	商業誌	月刊	15,500	購入
情報管理	95	商業誌	月刊	10,000	購入
サイエンス	95	商業誌	月刊	28,987	購入
蛋白質・核酸・酵素 別冊	94	商業誌	不定		購入
Annual Report of Shionogi Research	93	機関誌	年刊	1,350	寄贈
Japanese Journal of Antibiotics	93	学会誌	月刊	2,000	購入
薬学雑誌	92	学会誌	月刊	4,500	購入
共済医報	89	機関誌	季刊	1,660	寄贈
科学朝日	88	商業誌	月刊	95,000	購入
Journal of Antibiotics	86	機関誌	月刊	2,100	購入
国立予防衛生研究所年報	86	機関誌	年刊		寄贈
化学	84	商業誌	月刊	12,000	購入
化学と生物	83	学会誌	月刊	9,000	購入
東邦大学医学部業績年報	75	機関誌	年刊		寄贈
科学技術文献サービス	72	その他	季刊		寄贈
東北薬科大学研究年報	72	機関誌	年刊	500	寄贈
最近の新薬	70	商業誌	年刊	20,000	購入
生物物理	70	学会誌	隔月	3,000	購入

となどから、所蔵の重複する部分のみを取り出す時、薬学図書館で所蔵していない部分は、落ちてしまうと思われるためである。そのため、この医学・歯学・薬学図書館の所蔵の重複から、直接コアジャーナルを選出することは難しいと思われる。 (小島 久美子)

Ⅲ. 入手方法からみた特徴

上位346誌の状況を入手方法(購入・寄贈)別に区分し、それぞれが発行形態別・執筆使用言語別・発行頻度別・所蔵館数別・所蔵館種別にどのようなになっているか、またその傾向が判定可能かを調べた。その結果、以下の通り判明したので報告し、同時に入手方法からみた所蔵コアジャーナルの特徴についてもふれる。

Ⅲ-1. 上位346誌の発行形態別・使用言語別内訳

上位346誌の内訳を雑誌の発行形態別にみたものが表Ⅲ-1Aである。またこれを雑誌の本文に用いられている言語別にみたものが表Ⅲ-1Bである。以上の結果、上位346誌のうち、購入誌は商業誌・学会誌・その他の発行形態をとり和文で書かれており、寄贈誌は機関誌の形態をとり欧文で書かれている場合が多いと言える。

表Ⅲ-1A: 発行形態別内訳

	商業誌	学会誌	機関誌	その他
購 入	84 誌	66 誌	9 誌	9 誌
寄 贈	11 誌	21 誌	141 誌	5 誌
計	95 誌	87 誌	150 誌	14 誌

表Ⅲ-1B: 使用言語別内訳

	和 文	欧 文
購 入	153 誌	15 誌
寄 贈	145 誌	32 誌
計	298 誌	47 誌

Ⅲ-2. 雑誌の発行頻度が入手方法へ及ぼす影響

雑誌の発行頻度の高さが入手方法の違いに現れているのではないかと仮定し、発行頻度別に購入誌と寄贈誌の数を算定した。その結果、入手方法と発行頻度との間には相関関係が認められた。即ち、年7回以上発行の雑誌は購入によって入手され、隔月刊以下発行の雑誌は寄贈によって入手されている場合が多いということである。発行頻度は入手方法に影響を与えていると言える。

表Ⅲ-2：入手方法と発行頻度との関係

	週刊	旬刊	月刊	年8 回刊	年7 回刊	隔月 刊	季刊	年3 回刊	年2 回刊	年刊	不定 期刊
購入	2	2	120	1	2	22	9	0	1	8	1
寄贈	0	0	16	0	1	30	54	7	23	46	1
計	2	2	136	1	3	52	63	7	24	54	2

Ⅲ-3. 雑誌の入手方法が所蔵に及ぼす影響

雑誌の入手方法の違いが所蔵状況に現れているのではないかと仮定し、上位346誌の所蔵館数上位順に購入誌と寄贈誌の数を算定した。その結果、入手方法と所蔵状況との間には相関関係が認められた。即ち、136館中73館で購入している274誌の内訳は、購入によるものが142誌、寄贈によるものが132誌と購入誌が優位であるのに対し、72館所蔵293誌の場合、購入によるものが146誌、寄贈によるものが147誌と寄贈誌優位と逆転する。この状況は73館以上所蔵館および72館以下所蔵館でも同じで、一般に所蔵館数の多い雑誌ほど購入によって入手され、少ない雑誌の入手方法は寄贈に頼っていると言える。

表Ⅲ-3：入手方法と所蔵状況との関係

	100館	73館	72館	68館
購 入	24 誌	142 誌	146 誌	168 誌
寄 贈	14 誌	132 誌	147 誌	178 誌
計	38 誌	274 誌	293 誌	346 誌

Ⅲ-4. 雑誌の入手方法が館種別所蔵に及ぼす影響

雑誌の入手方法の違いが館種ごとの所蔵状況の差に繋がっているのではないかと仮定し、多くの図書館で所蔵(おおむねその館種の80%以上の図書館で所蔵)されている雑誌のうち、購入によるものと寄贈によるものの割合を調べた。その結果、JMLA加盟館のうち歯学図書館は寄贈の、医学図書館・その他の加盟館は購入の割合が高くJMLA加盟館以外の薬学図書館・その他協力館も同様に購入の割合が高か

表Ⅲ-4. 入手方法別の館種間の差異

	その他 加盟館	薬 学	その他 協力館	医 学	全 体	歯 学
購 入	85.3 %	81.3 %	58.3 %	54.0 %	52.5 %	51.1 %
寄 贈	13.5 %	18.7 %	41.7 %	46.0 %	47.5 %	48.9 %

った。館種ごとに収集方法(購入・寄贈)が少しづつ違い、それはJMLA加盟館であるかないか、またはその図書館の設置母体が何かによって変わってくる様に思われる。

Ⅲ-5. 入手方法からみた所蔵コアジャーナルとは何か

日本の医学図書館界における国内医学雑誌の収集状況を、入手方法の観点から雑誌流通状況(発行形態・執筆使用言語・発行頻度)および雑誌所蔵結果(所蔵館数と購入率との関係・館種ごとの購入率の差)について数量的に分析してきた。その結果をまとめたものが表Ⅲ-5である。

即ち、所蔵館数の多い雑誌(所蔵コアジャーナル)は、発行頻度が高く、発行母体も医学図書館として入手し易い所のものであり、それは主に購入によって入手されていることが判った。

これらの結果は、国内発行の医学分野の所蔵コアジャーナルの一般的傾向と考えられる。医学図書館界で所蔵コアジャーナルが構築される場合、その雑誌群は

表Ⅲ-5：上位346誌の入手方法からみた特徴

入手方法	流通状況			所蔵結果
	発行形態	発行頻度	使用言語	所蔵館数
購入	商業誌 学会誌 その他	頻 繁 年7回以上	和文	73館以上
寄贈 含：交換	機関誌	ま れ 隔月刊以下	欧文	72館以下

このような特徴をもつのである。逆にいえば、これらの特徴をもたない雑誌は所蔵コアジャーナルとは成りにくいと言えるのではないか。さらに言えば、所蔵コアジャーナル以外の雑誌で何らかの方法によって重要と判定されたものは、重要だが所蔵されにくく利用の機会も限定される恐れがある。今までRare Journalと言われてきたものは、このように価値が高く利用予想も多いが、所蔵がきわめて少ないものと考えられていたのではないか。

入手方法からみた所蔵コアジャーナルとは、入手し易い雑誌群、所蔵され利用を待ち受ける機会の多い雑誌群とすることができる。それには雑誌の流通状況が影響を与える。入手方法は利用者・研究者にはほとんど問題にされないが、我々医学図書館員が主役になり、利用者に対して効果的な提供をする際、最重要課題になる、まさに我々自身のためのものである、と言えるのではないか。

(浜田 秀生)

IV. 国内欧文誌の傾向

IV-1. 国内欧文誌について

国内欧文誌は、国内発行誌の中でも特殊な存在である。それは、国内発行誌ではあるが、

(購入誌リスト)

雑誌名	所蔵館	発行形態	発行頻度	発行部数
医学のあゆみ	131	商業誌	週刊	9,100部
科学	129	商業誌	月刊	29,000
代謝	129	商業誌	月刊	8,000
蛋白質・核酸・酵素	121	商業誌	月刊	15,000
医学中央雑誌	118	商業誌	旬刊	4,500
Journal of Biochemistry	118	学会誌	月刊	2,650
医学図書館	117	その他	季刊	1,500
学術月報	114	その他	月刊	5,000
生化学	114	学会誌	月刊	12,000
日本医事新報	112	商業誌	週刊	45,000
最新医学	112	商業誌	月刊	9,000
日本臨床	110	商業誌	月刊	9,600
臨床検査	109	商業誌	月刊	12,000
生体の科学	107	商業誌	隔月	3,000
総合臨床	107	商業誌	月刊	9,500
癌の臨床	106	商業誌	月刊	3,800
医学と生物学	105	その他	月刊	1,000
臨床病理	104	学会誌	月刊	7,000
Japanese Journal of Cancer Research	102	学会誌	月刊	12,500
国民の福祉の動向 厚生指標別冊	102	商業誌	年刊	17,500
厚生指標	102	商業誌	月刊	4,500
治療	101	商業誌	月刊	12,000
診断と治療	101	商業誌	月刊	8,500
公衆衛生	100	商業誌	月刊	3,200
順天堂医学	99	機関誌	季刊	3,000
ホルモンと臨床	98	商業誌	月刊	5,000
日本医師会雑誌	98	機関誌	月2	108,500
日本薬理学雑誌	98	学会誌	月刊	3,850
ビタミン	97	学会誌	月刊	1,800
薬局	97	商業誌	月刊	15,500
麻酔	96	商業誌	月刊	4,000
耳鼻咽喉科・頭頸部外科	95	商業誌	月刊	4,000
情報管理	95	商業誌	月刊	10,000
呼吸と循環	95	商業誌	月刊	4,500
サイエンス	95	商業誌	月刊	28,987
手術	95	商業誌	月刊	10,100
外科	94	商業誌	月刊	6,300
国民衛生の動向 厚生指標別冊	94	その他	月刊	4,000
内科	94	商業誌	月刊	13,500
蛋白質・核酸・酵素 別冊	94	商業誌	不定	
Japanese Journal of Antibiotics	93	学会誌	月刊	2,000
Microbiology and Immunology	93	学会誌	月刊	1,500
臨床皮膚科	93	商業誌	月刊	3,000
小児科臨床	93	商業誌	月刊	6,200
アレルギー	92	学会誌	月刊	4,350
臨床外科	92	商業誌	月刊	7,500
臨床科学	92	商業誌	月刊	7,500
薬学雑誌	92	学会誌	月刊	4,500
Medicina	91	商業誌	月刊	18,000
日本内分秘学会雑誌	91	学会誌	月刊	4,500
日本消化器病学会雑誌	91	学会誌	月刊	15,000
臨床放射線	91	商業誌	月刊	6,000
Acta Pathologica Japonica	89	学会誌	月刊	3,600
日本耳鼻咽喉科学会会報	89	学会誌	月刊	8,700
日本内科学会雑誌	89	学会誌	月刊	25,500
日本整形外科学会雑誌	89	学会誌	月刊	14,400
外科治療	88	商業誌	月刊	9,700

雑誌名	所蔵館	発行形態	発行頻度	発行部数
科学朝日	88	商業誌	月刊	95,000部
小児科診療	88	商業誌	月刊	6,700
皮膚科の臨床	87	商業誌	月刊	4,200
形成外科	87	商業誌	年7	2,000
臨床と研究	87	商業誌	月刊	6,000
癌と化学療法	86	商業誌	月刊	6,500
外科診療	86	商業誌	月刊	6,000
医科器械学	86	学会誌	月刊	4,300
移植	86	学会誌	隔月	2,500
胃と腸	86	商業誌	月刊	13,000
Journal of Antibiotics	86	機関誌	月刊	2,100
肝臓	86	学会誌	月刊	5,200
日本化学療法学会雑誌	86	学会誌	月刊	4,500
日本生理学雑誌	86	学会誌	月刊	3,000
日本小児科学会雑誌	86	学会誌	月刊	11,700
臨床免疫	86	商業誌	月刊	6,000
神経研究の進歩	86	商業誌	隔月	3,000
日本病理学会会誌	85	学会誌	年刊	3,450
日本血液学会雑誌	85	学会誌	年8	3,700
臨床眼科	85	商業誌	月刊	4,300
整形外科	85	商業誌	月刊	8,500
病院	84	商業誌	月刊	6,500
化学	84	商業誌	月刊	12,000
日本老年医学会雑誌	84	学会誌	隔月	4,550
臨床血液	84	学会誌	月刊	4,300
耳鼻咽喉科臨床	83	学会誌	月刊	3,300
化学と生物	83	学会誌	月刊	9,000
日本癌学会総会記事	83	学会誌	年刊	13,500
日本皮膚科学会雑誌	83	学会誌	月刊	6,500
臨床脳波	83	商業誌	月刊	2,500
小児科	83	商業誌	月刊	6,600
医学教育	82	学会誌	隔月	2,000
Japanese J of Experimental Medicine	82	機関誌	隔月	800
日本外科学会雑誌	82	学会誌	月刊	21,500
Bibliography on Stomach Cancer	81	その他	隔月	1,100
Brain and Nerve (脳と神経)	81	商業誌	月刊	4,000
胸部外科	81	商業誌	月刊	3,000
日本医学放射線学会雑誌	81	学会誌	月刊	5,200
臨床泌尿器科	81	商業誌	月刊	3,500
産婦人科治療	81	商業誌	月刊	7,300
産科と婦人科	81	商業誌	月刊	8,000
精神医学	81	商業誌	月刊	5,600
Chemical and Pharmaceutical Bulletin	80	学会誌	月刊	3,500
臨床婦人科産科	80	商業誌	月刊	3,200
臨床整形外科	80	商業誌	月刊	8,000
整形・災害外科	80	商業誌	月刊	6,500
Japanese Journal of Pharmacology	79	学会誌	月刊	2,300
Japanese Journal of Physiology	79	学会誌	隔月	1,600
耳鼻と臨床	79	機関誌	隔月	1,650
からだの科学	79	商業誌	隔月	40,000
日本公衆衛生雑誌	79	学会誌	月刊	6,200
細胞	79	商業誌	月刊	5,000
全国胃がん登録調査報告	79	その他	年刊	
遺伝	78	商業誌	月刊	12,000
医用電子と生体工学	78	学会誌	季刊	10,000
看護学雑誌	78	商業誌	月刊	50,000
日本眼科学会雑誌	78	学会誌	月刊	8,100

雜誌名	所藏館	発行形態	発行頻度	発行部数
日本細菌学雑誌	78	学会誌	隔月	3,500部
日本産科婦人科学会雑誌	78	学会誌	月刊	16,700
臨床栄養	78	学会誌	月刊	18,000
心臓	78	商業誌	月刊	5,000
衛生化学	77	学会誌	隔月	3,000
眼科	77	学会誌	月刊	6,500
解剖学雑誌	77	学会誌	隔月	2,300
日本気管食道科学会会報	77	学会誌	隔月	2,800
産婦人科の世界	77	商業誌	月刊	6,800
日本泌尿器科学会雑誌	76	学会誌	月刊	5,100
肺と心	76	商業誌	季刊	2,500
日本衛生学雑誌	76	学会誌	隔月	2,800
日本眼科紀要	76	学会誌	月刊	2,250
日本胸部臨床	76	商業誌	月刊	5,000
小児外科	76	商業誌	月刊	4,000
通信医学	76	学会誌	月刊	4,200
眼科臨床医報	75	学会誌	月刊	3,000
日本病理剖検輯報	75	機関誌	年刊	500
泌尿器科紀要	74	商業誌	月刊	2,300
Japanese Circulation Journal	74	学会誌	月刊	9,000
耳鼻咽喉科展望	74	学会誌	隔月	2,000
日本口腔科学会雑誌	74	学会誌	季刊	4,800
西日本皮膚科	74	学会誌	隔月	3,000
労働科学	74	商業誌	月刊	2,000
Archives of Histology and Cytology	73	学会誌	隔月	700
真菌と真菌症	73	学会誌	季刊	1,300
心身医学	73	商業誌	年7	3,500
周産期医学	73	商業誌	月刊	8,000
Japanese Heart Journal	72	機関誌	月刊	800
臨床病理 臨時増刊特集号	72	商業誌	月刊	7,000
臨床神経学	72	学会誌	月刊	4,900
精神神経学雑誌	72	学会誌	月刊	6,300
月刊薬事	71	商業誌	月刊	
皮膚科紀要	71	商業誌	季刊	1,000
放射線科学	71	商業誌	月刊	4,000
JAMA日本語版	71	商業誌	月刊	50,000
結核	71	学会誌	月刊	4,000
日本法医学雑誌誌	71	学会誌	隔月	1,200
歯界展望	71	商業誌	月刊	25,000
お茶の水医学雑誌	70	機関誌	季刊	400
最近の新薬	70	商業誌	年刊	20,000
生物物理	70	学会誌	隔月	3,000
小児内科	70	商業誌	月刊	6,000
Congenital Anomalies	69	学会誌	季刊	1,700
看護技術	69	商業誌	月刊	60,000
厚生白書	69	その他	年刊	18,900
日本癌治療学会誌	69	機関誌	隔月	9,550
臨床麻酔	69	商業誌	月刊	3,800
糖尿病	69	学会誌	月刊	4,000
ウイルス	69	学会誌	年2	2,600
現代化学	68	商業誌	月刊	18,500
保険と年金の動向 厚生指標別冊	68	その他	年刊	10,000
血液と脈管	68	学会誌	隔月	3,000
図書館雑誌	68	その他	月刊	12,000

言語が外国語であるという点である。だから、国内欧文誌は国内発行誌の中に入れられるが、他の国内和文誌にない特徴も見られるのではないか。そういった考えに基づいて国内発行誌に行った分析を国内欧文誌にも行ってみた。ここで、「現行」収録雑誌数、発行形態、入手方法、発行部数の4つから分析を行った。

表IV-1 欧文誌の割合

	国内発行誌	国内欧文誌	割合
総所蔵数	2743誌	199誌	7.3%
上位誌	346	47	13.6

IV-2. 「現行」収録雑誌数

「現行」収録の国内発行誌は、2820誌になる。そのうち実数として使えるのは、2743誌である。その中で国内欧文誌は199誌あった。「現行」収録雑誌数における国内欧文誌が国内発行誌の中に含まれる割合は、全体の7.3%になる。

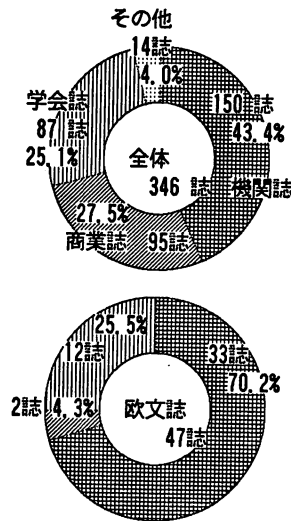
それに対して上位346誌の中の国内欧文誌の数を調べたところ、47誌であった。上位346誌の中に国内欧文誌が含まれる割合は、13.6%となる(表IV-1)。

上位346誌の中に国内欧文誌が含まれる割合が高いのは、上位346誌を所蔵館から見たコアジャーナルとすれば、国内欧文誌は国内発行誌の中でもコアジャーナルに含まれる割合が高い事が言える。

IV-3. 発行形態について

上位346誌について全体の発行形態の割合は、機関誌が、150誌で、全体の43.4%を占め、次に商業誌が95誌で27.5%、次に学会誌が87誌の25.1%となった。346誌に含まれる国内発行欧文誌47誌についても同様に調べたところ、機関誌が、33誌で70.2%、次に学会誌が12誌で25.5%、次に商業誌が2誌で、4.3%の割合になった(図IV-2)。

国内発行誌と国内欧文誌との発行形態の割合を比較すると、国内発行誌が、機関誌、商業誌、学会誌の順に割合が高いのに対し、欧文誌は、機関誌、学会誌、商業誌の順になっている。国内欧文誌の発行形態の割合は、全体と比べて、機関誌が高く、商業誌は、低い事がわかる。



図IV-2 発行形態

IV-4. 入手方法について

入手方法について上位346誌を調べたところ、購入は168誌で全体の48.6%、寄贈は、178誌で全体の51.4%であった。上位346誌に含まれる国内欧文誌47誌について入手方法を調べたところ、購入が15誌で31.9%、寄贈が32誌で68.1%であることがわかった(表IV-3)。

この結果を比較してみると、国内欧文誌は、全体の傾向と比べて、寄贈の割合が、高い事がわかる。

表IV-3 入手方法からみた傾向

	国内発行誌	国内欧文誌
購入	168誌(48.6%)	15誌(31.9%)
寄贈	178誌(51.4%)	32誌(68.1%)

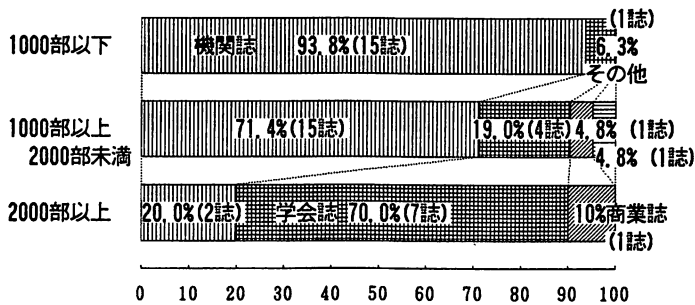
IV-5. 発行部数について

発行部数の傾向をみるとそのほとんどが、2,000部に満たない(全体の78.7%を占める)。ここから欧文誌の特徴が掴めないか。発行部数と発行形態の相関関係、発行部数と入手方法の相関関係を表した。

IV-5-1. 発行部数と発行形態の相関関係

発行部数と発行形態の相関関係をIV-4図に表した。発行部数は、1,000部未満、1,000部以上2,000部未満、2,000部以上の3つのグループに分けた。

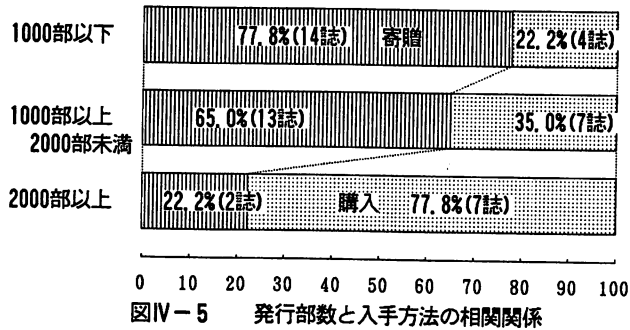
これを見ると、1,000部未満では機関誌の割合が高く、93.8%を占める。この傾向は、1,000部以上2,000部未満でもあり、71.4%を占めている。2,000部以上になると学会誌の方が、機関誌より割合が高くなる。商業誌は、全体を通して割合が低く、1,000部未満ではまったくない。



図IV-4 発行部数と発行形態の相関関係

IV-5-2. 発行部数と入手方法の相関関係

発行部数と入手方法の関係をIV-5図に表した。これを見ると、1,000部未満では、寄贈の割合が高く、寄贈77.8%に対して購入が22.2%となっている。この傾向は、1,000部以上2,000部未満でもあるが、1,000部未満よりは、購入の割合が高くなり、寄贈65.0%、購入35.0%になっている。2,000部以上になると購入の割合が高くなり、購入77.8%、寄贈22.2%になっている。



IV-6. 考察

国内欧文誌について国内発行誌に行った分析を用いて比較してきたが、国内欧文誌の特徴がでたように思う。それによると国内欧文誌は、機関誌が多く、商業誌は少なく、また寄贈の割合が高い。発行部数では、1,000部以上2,000部未満がいちばん多いのだが、発行形態の中でいちばん多かった機関誌については、1,000部未満が93.8%になっている。またそのような1,000部未満の発行部数の雑誌は、97.8%が寄贈になっている。こういったことから現在の医学分野における国内欧文誌の傾向として商業ベースにのっていない特異な存在である事が言える。

(宮下 美香)

(国内発行欧文誌リスト)

	所蔵館	発行形態	発行頻度	発行部数	入手方法
Journal of Biochemistry	118館	学会誌	月刊	2,650部	購入
Kawasaki Medical Journal	107	機関誌	季刊	1,800	寄贈
Japanese Journal of Cancer Research	102	学会誌	月刊	12,500	購入
Bulletin of the Yamaguchi Medical Journal	100	機関誌	年刊	630	寄贈
Fukushima Journal of Medical Science	99	機関誌	年2	1,200	寄贈
Nagoya Journal of Medical Science	96	機関誌	年刊	750	寄贈
Wakayama Medical Reports	95	機関誌	年4	650	寄贈
Dokkyo Journal of Medical Science	94	機関誌	年2	1,100	寄贈
Annual Reports of Shionogi Research	93	機関誌	年刊	1,350	寄贈
Japanese Journal of Antibiotics	93	学会誌	月刊	2,000	購入
Microbiology and Immunology	93	学会誌	月刊	1,500	購入
Nagoya Medical Journal	91	機関誌	年4	750	寄贈
Acta Medica Kinki University	90	機関誌	年2	1,100	寄贈

Jikeikai Medical Journal	90	機関誌	季刊	1,000	寄贈
Kitasato Archives of Experimental Medicine	90	機関誌	季刊	810	寄贈
Acta Pathologica Japonica	89	学会誌	月刊	3,600	購入
Acta Medica et Biologica	88	機関誌	季刊	600	寄贈
Shimane Journal of Medical Science	88	機関誌	年刊	500	寄贈
Journal of Antibiotics	86	機関誌	月刊	2,100	購入
Mie Medical Journal	86	機関誌	年3	1,000	寄贈
Journal of Osaka Dental University	84	機関誌	年2	1,200	寄贈
Yokohama Medical Bulletin	84	機関誌	年6	1,000	寄贈
Japanese Journal of Experimental Medicine	82	機関誌	隔月	800	購入
Medical Journal of Osaka University	82	機関誌	年2	1,000	寄贈
Tumor Research:Experimental and Clinical	82	機関誌	年刊	2,500	寄贈
Bibliography on Stomach Cancer	81	その他	隔月	1,100	購入
Biken Journal	81	機関誌	季刊	1,300	寄贈
Diabetes Journal	81	商業誌	季刊	7,300	寄贈
Chemical and Pharmaceutical Bulletin	80	学会誌	月刊	3,500	購入
Japanese Journal of Clinical Oncology	80	機関誌	年2	1,250	寄贈
Japanese Journal of Pharmacology	79	学会誌	月刊	2,300	購入
Japanese Journal of Physiology	79	学会誌	隔月	1,600	購入
Acta Medica Okayama	78	機関誌	隔月	620	寄贈
Tokai Journal of Experimental and Clinical Medicine	78	機関誌	隔月	1,700	寄贈
Bulletin of the Tokyo Medical and Dental University	77	機関誌	季刊	1,000	寄贈
Acta Medica Universitatis Kagoshima	76	機関誌	年2	380	寄贈
Japanese Journal of Medical Science	76	学会誌	隔月	1,100	寄贈
Osaka City Medical Journal	75	機関誌	年2	500	寄贈
Japanese Circulation Journal	74	学会誌	月刊	9,000	購入
Archives of Histology and Cytology	73	学会誌	隔月	700	購入
Bulletin of the Osaka Medical School	72	機関誌	年2	520	寄贈
Japanese Heart Journal	72	機関誌	月刊	800	購入

Asian Medical Journal	71	商業誌	月刊	1,500	寄贈
Yonago Acta Medica	71	機関誌	年3	650	寄贈
Congenital Anomalies	69	学会誌	季刊	1,700	購入
Kumamoto Medical Journal	69	機関誌	季刊	450	寄贈
Journal of Nihon University School of Dentistry	68	機関誌	季刊	1,400	寄贈

V. コアジャーナルと分類

医学分野のコアジャーナルを調査するという目的にて、様々な調査を行うためのデータ作成の一つとして上位346誌の分類付を行うこととした。

この動機として、例えば、どのような分野の雑誌に図書館での人気があるのかという傾向も現れるであろうし、また今後の調査にてもっと分野毎のコアジャーナルというものを突き詰めていくためには、各分野毎に振り分け、その分野内での調査を行う必要があると考えたからである。

そこで、まず、雑誌の情報源として図書館などで広く利用されているUlrich's International Periodicals Directory 1988-89(以下、Ulrich's と略す)を使用して、雑誌の分類付けを行うことにした。346誌中、161誌についてはUlrich'sに掲載されていたので、各雑誌が分類されている項目名を拾い、この項目をその雑誌の分類と定めた。その他のものでは、Serials Directoryに11誌掲載されていたので、やはりその分類項目を採用した。さらに、このUlrich'sとSerials Directoryを参考にして日本語の分類表を作成した。これは、Ulrich'sのMedical Sciencesのうちの各語を日本語に置き換えたものに、若干項目を加えたものである(表V-1)。Ulrich's等に掲載されていない雑誌については各分担者が、この日本語分類の内に当てはめて分類付けを行った。

この結果、分類順に並べてみると、同じ分類の中で違和感のある雑誌、また一分類には押し込められない雑誌なども見受けられた。そこで若干の手直しを行った。この指針として、以下の3点を考慮した。

1. 2つ以上の分野に属すると思われる雑誌は、各々に重複させて分類付けを行う。
2. 単科大学の紀要、また分野の名前が雑誌名に含まれている紀要などは、その分野の中に収める。
3. 医学一般には原著を含んでいないような年報類を含める。また大学の紀要類も多いことから、医学一般では、その発行形態にて細分化した分類を行う。

こうして最終的に分類項目となった分野と346誌の内訳は表II-1に示す。

この方法について、はつきり述べておくべきことは、2点ある。まず、参考書誌記載の分類を採用したことであるが、これは、我々作業者が、医学図書館での経験年数が浅いこと

や医学分野などの知識レベルがまちまちであることなどから、統一された概念による分類付けが行えるのかという懸念があったことと、そしておそらくは我々による分類よりも信頼がおけるであろうということがその理由である。また、今回は特に極めた分類を行うのが目的ではなく、次への踏台としての作業であるので、なるべく簡便であるほうが望ましいと考えた上での手段とした。

次に日本語に置き換えたものいくつか語を加えた点であるが、Ulrich'sでは世界の雑誌を対象にしていること、欧米での医学分野についての考え方を反映していることなどから、日本国内の雑誌を分類する場合には、多少手直しするべきであると考えたからである。しかし、抜本的な改革という大それたことは行えないので、足りないと思うもの一東洋医学などを補った。また概念そのものが欠落しているらしい内科一般については、日本においては重要と考え、あえて加えることとした。

さらに、この作業を見直す内で今後の検討課題として思い付くままを述べる。医学関連分野、例えば科学などの分類に問題はないのか、加えて医学分野のコアジャーナルにこれらの分野の雑誌も含めていくのかということである。これは、見方を換えると医学分野がどういった分野と関連が深いかを示す興味深い材料ではあるのだが、コアジャーナルリストを作成する上では、どこまでが必要としていくか判断に苦慮している。

また医学分野だけでも各項目について、もう少し統合していくべきではないか、また項目間の相関を考え、整理していくべきではないかという案もある。と言うのは、今後各分野別に、コアジャーナルリストを作成していきたいと考えているが、これまで挙げた分野全部を行うには些か時間がかかるように思え、やはり絞った上に分野を選択して調査していくのが定石であろう。

無論雑誌の分類というものは、雑誌そのものの内容も逐次変化していくものであり、一義的なものにはなり得ない。また現在でも様々な方法による雑誌の分類についての報告がなされ、研究されている。本来ならば、分類のみを大テーマとして掲げる性質のものではないかと考える。しかし、さきに提示したように、コアジャーナルの分析を行う上で、せめて雑誌群を分野ごとの塊にすることが急務であったし、また後々基本リスト作成の暁には、利用者への便宜を図ることができ得るなどと甘い夢を抱きて、この作業に取り組んだのである。

この作業、実際に一つ一つの雑誌について資料を作成していくことにより、学術雑誌塾でのグループ研究を行う目的の一つ、より医学図書館員としての知識を養うことは、果たしたのではないかと生意気ながら考えている。

(川村 順子)

表V—1 分類表

(Ulrich's)	(Serials)	(独自分類)
Medical Sciences	Medicine	医学一般 大学雑誌・紀要 その他団体の機関誌
Allergology and Immunology	Allergic, Metabolic, Nutritional Diseases	免疫学
Anaesthesiology		麻酔学
Cancer	Neoplasma, Neoplastic	癌
Cardiovascular Diseases	Cardiovascular Diseases	循環器疾患
Chiropractics, Homeopathy, Osteopancy	Homeopathy	整骨学・同種療法
Communicable Diseases		感染症
Computer Applicatins	Computers and Computer Science	コンピュータ関係
Dentistry	Dentistry	歯科学
Dermatology and Verereology	Dermatology	皮膚科学
Endocrinology	Endocrinology	内分泌疾患
Experimental Medicine, Laboratory Medicine		実験医学
Forensic Sciences	Forensic Medicine, Medical Jarisprudence	法医学
Gastroenterology	Internal Medicine	内科学一般
Hematology		血液学
Hypnosis		睡眠学
Nurses and Nursing	Nursing	看護学
Ostetrics and Gynecology	Gynecology and Obsttrics	産婦人科学
Ophthalmology and Optometry	Ophthalmology	眼科学
Orthopedics and Traumatology	Orthopedics	整形外科科学
Otorhinolaryngology	Otorhinolaryngology	耳鼻咽喉科学
Pediatrics	Pediatrics	小児科学
Psychiatry and Neurology	Psychiatry, Psychopathology	精神医学
Radiology and Nuclear Medicine	Radiology	放射線医学
Respiratory Diseases	Respiratory Diseases	呼吸器疾患
Rheumatology		リウマチ
Sports Medicine		スポーツ医学
Surgery	Surgery	外科学
Urology and Neophrology	Urology	泌尿器科学
	Geriatrics	老人医学
Hospitals	Medical Centers, Hospitals	医史学・社会医学
	Musculoskeletal Diseases	医療施設
	Neurology	骨・筋肉疾患
	Pathology	先天異常
	Toxicology	病理学
Pharmacy and Pharmacology	Pharmacy	中毒
Public Health and Safety	Public Health and Safety	薬理・薬学
Nutrition and Dietetics	Nutrition and Dietetics	衛生学
Environmental Studies		栄養学
		救急医学
		環境医学
		家庭医学
		治療学・リハビリ
		熱帯医学
		臨床検査
		微生物学
		解剖学
		東洋医学
		寄生虫学

(Ulrich's)	(Serials)	(独自分類)
Industrial health and Safety		医療器具
Physical fitness and Hygiene		産業と安全
		健康医学
Sciences : Comprehensive works		科学
Chemistry		化学
Biology	Biology	生物学
Biological Chemistry	Biochemistry	生化学
Biophysics	Biophysics	生物物理学
Botany	Botany	植物学
Cytology and Histology	Cytology and Histology	細胞・組織学
Entomology		昆虫学
Genetics	Genetics	遺伝学
Microbiology	Microbiology	微生物学
Microscopy	Microscopy	顕微鏡
Ornithology		鳥類学
Physiology	Physiology	生理学
Zoology	Zoology-Vertebrate and Intertebrate	動物学
Veterinary Science	Veterinary Medicine, Animal Culture	獣医学
Abstracting, bibliographies, Statistics		索引 (二次資料)
Library and Information Science		図書館

VI.分野別の傾向

上位346誌を独自の分類表にもとづいて分野ごとに振り分けた。そして、その分類別のリストによって各分野別のコアジャーナルを選び出したかったが、各分野ごとのタイトル数が少な過ぎるものが多かったので、コアジャーナルを選定するには問題があると判断した。そこで、発行形態、入手方法、発行部数、発行頻度の4つから特徴をみとめることにした。また、タイトル数の多い分野については、その分野の特徴もみとめた。

VI-1. 発行形態、入手方法、発行部数、発行頻度からみた特徴

VI-1-1. 発行形態

各分野ごとに商業誌、学会誌、機関誌、その他の雑誌の占める割合を調べた。割合が50%をこえる分野を比率の高いものとした。その結果、商業誌の比率が高い分野が最も多く全体の22.9%あった。学会誌の比率が高い分野が全体の10.4%で、機関誌の比率が高い分野が全体の4.2%、その他の雑誌の比率の高い分野が全体の2.1%であった(図VI-1)。



図VI-1

VI-1-2. 入手方法

各分野ごとに購入誌と寄贈誌の占める割合を調べた。割合が50%をこえる分野を比率の高いものとした。その結果、購入誌の比率が高い分野が多く全体の41.7%あった。一方、寄贈誌の比率が高い分野は少なく全体のわずか4.2%しかなかった(図VI-2)。



図VI-2

VI-1-3. 発行部数

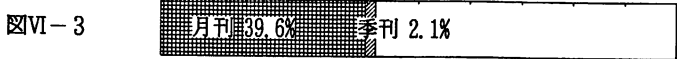
発行部数の多さが雑誌の重要度を計る一要因になっているのではないかと仮定した。そこで、各分野ごとに発行部数が多ければ多いほど上位になる傾向があるかどうかを調べた。その結果、発行部数のより多い雑誌がより上位を占めている分野は全体のわずか6.3%であった。それゆえ、発行部数が多ければ多いほど重要であるとはいえないので発行部数は雑誌の重要度の尺度にはならない。

VI-1-4. 発行頻度

発行頻度の高さが雑誌の重要度を計る一要因になっているのではないかと仮定した。そこで、各分野ごとに発行頻度が高ければ高いほど上位になる傾向があるかどうかを調べた。その結果、発行頻度のより多い雑誌がより上位を占めている分野は全体のわずか8.3%にす

ぎなかった。それゆえ、発行頻度が高ければ高いほど重要であるとはいえないので発行頻度は雑誌の重要度の尺度にはならない。

さらに、週刊、月刊、季刊、年刊の発行頻度別に各分野ごとの占める割合を調べた。その結果、最も多かったのが月刊誌の比率が高い分野で全体の39.6%であり、季刊が2.1%で、その他の週刊、年刊の比率が特に高い分野はなかった(図VI-3)。

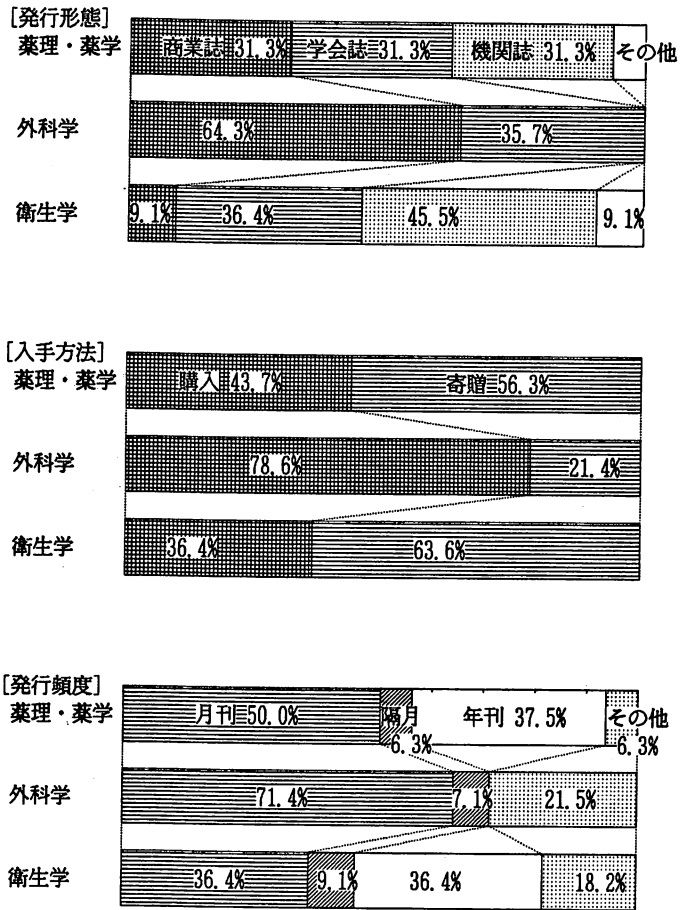


図VI-3

VI-2. 分野別の特徴

全分野の中で特に誌数の多かった医学一般と歯科学と薬学・薬理学と外科学と衛生学を取り上げてそれぞれの特徴をみてみた。医学一般と歯科学は寄贈の大学紀要類が非常に多くなっている所以これらの分野ではそのリストをコアジャーナルの選定には使わず、薬学・薬理学、外科学、衛生学をひとつのコアジャーナルリストと見て分析した。

まず、薬学・薬理学は、発行形態では商業誌と学会誌と機関誌が等しく31.3%であり均等している。発行頻度では月刊誌が50.0%と半数を占め年刊が37.5%となっている。入手方法では購入が43.7%、寄贈が56.3%となっている。次に、外科学では発行形態では商業誌が64.3%と多く残りが学会誌の35.7%である。入手方法では購入が78.6%と非常に多くなっている。発行頻度では月刊が71.4%と非常に多くなっている。最後に、衛生学では、発行形態では学会誌と機関誌が同じく36.4%で、入手方法では寄贈が63.6%と多く、発行頻度では月刊と年刊が等しく36.4%であった(図VI-4)。



図VI-4

(江口 敏一)

	発行形態	発行頻度	入手方法
(薬理・薬学)			
日本薬理学雑誌	学会誌	月刊	購入
薬局	商業誌	月刊	購入
薬学雑誌	学会誌	月刊	購入
医薬の門	商業誌	隔月	寄贈
日本化学療法学会雑誌	学会誌	月刊	購入
Japanese Journal of Pharmacology	学会誌	月刊	寄贈
田辺製薬研究報文	機関誌	年刊	寄贈
Tokyo Tababe Quarterly	機関誌	不定	寄贈
中外医薬	商業誌	月刊	寄贈
東北薬科大学研究年報	機関誌	年刊	寄贈
和漢薬研究所年報	機関誌	年刊	寄贈
月刊薬事	商業誌	月刊	購入
最近の新薬	商業誌	年刊	購入
岐阜薬科大学紀要	機関誌	年刊	寄贈
Chemical and Pharmaceutical Bulletin	学会誌	月刊	購入
漢方研究	その他	年刊	寄贈
(外科)			
外科	商業誌	月刊	購入
臨床外科	商業誌	月刊	購入
外科治療	商業誌	月刊	購入
形成外科	商業誌	年7	購入
外科診療	商業誌	月刊	購入
移植	学会誌	隔月	購入
日本外科学会雑誌	学会誌	月刊	購入
胸部外科	商業誌	月刊	購入
日本外科系連合会会誌	学会誌	年2	寄贈
日本消化器外科学会雑誌	学会誌	月刊	寄贈
小児外科	商業誌	月刊	購入
手術	商業誌	月刊	購入
北海道外科雑誌	学会誌	年2	寄贈
耳鼻咽喉科・頭頸部外科	商業誌	月刊	購入
(衛生学)			
公衆衛生院研究報告	機関誌	季刊	寄贈
公衆衛生	商業誌	月刊	購入
国民衛生の動向 厚生指標 別冊	その他	月刊	購入
国立予防衛生研究所年報	機関誌	年刊	寄贈
感染症学雑誌	学会誌	月刊	寄贈

日本公衆衛生雑誌	学会誌	月刊	購入
衛生試験所報告	機関誌	年刊	寄贈
日本衛生学雑誌	学会誌	隔月	購入
四国公衆衛生学雑誌	機関誌	年刊	寄贈
北陸公衆衛生学会誌	学会誌	年2	寄贈
住友産業衛生	機関誌	年刊	寄贈

Ⅶ. まとめ

医学図書館における所蔵コアジャーナルとは何か。その特徴をつかみ研究情報を整備・提供する環境(医学図書館界)を見直すため、所蔵率上位の国内発行医学雑誌346誌を対象として館種別(医学図書館・歯学図書館・薬学図書館・等)、和文誌・欧文誌別、入手方法別(購入・寄贈)、雑誌流通状況別(発行形態・発行部数・発行頻度)、および分野別(独自分類表に基づく)に分析した。加えて初めて雑誌の分類化というものの考察を行った(Ulrich's International Periodicals Directory 1988-89をもとに補足訂正)。

その結果は以下の通りである。

- 1) 上位346誌(所蔵コアジャーナル)は機関誌が中心であり、購入によって入手されている(73館以上所蔵の雑誌は購入、72館以下では寄贈によっている)。
- 2) このうち国内欧文誌(特に発行部数が少ない機関誌)は所蔵コアジャーナル率が高いが、大部分は寄贈によって入手している。
- 3) 所蔵コアジャーナルが購入によって入手される場合、発行頻度が高く和文で書かれた商業誌・学会誌といったCirculation能力の高いものが中心である。
- 4) 分野別にみた場合、月刊の商業誌を購入によって入手している場合が多い。ただし、歯科学(寄贈によって機関誌を入手)、医学一般・皮膚科学・内科学・耳鼻咽喉科学(発行頻度が高い)、内分泌疾患・放射線医学・眼科学(発行部数が多い)の分野ではそのような傾向は弱い。
- 5) 館種別の所蔵状況からみると、購入率の高い薬学図書館において所蔵コアジャーナル化が進んでいる(または所蔵に個性がみられない)。

以上の結果から、所蔵コアジャーナルの全貌が浮かんでくるだろう。即ち、流通性の高い雑誌、購入誌、国内欧文誌はその性格の一部を兼ね備えている、またそれが所蔵される状況からみると、分野間のかたよりは少なく、特定分野の雑誌では所蔵コアジャーナルとはなりにくいと。

今後、この結果を他の調査結果と重ねあわせてコアジャーナルが選出されてゆくだろう。そして医学図書館界全体にバランスの良い国内発行医学雑誌群が構築されると信じる。

(浜田 秀生)

引用文献

- 1) 仲本 秀四郎：ブラッドフォードの法則．ドクメンテーション研究，33(5):217-227，1983.
- 2) 本田 品子：がん研究のための主要雑誌—一つの試み—．医学図書館，17(1,2):105-115，1970.
- 3) 山崎 茂明，山田 いく子：中規模医学図書館における外国逐次刊行物コレクションの構築．医学図書館，28(2):92-99，1981.
- 4) 河野 しげみ ほか：北野病院図書室における図書利用分析への考察．医学図書館，34(1):33-45，1987.
- 5) 水津 正義：引用文献分析による国内発行歯学雑誌の評価—コアジャーナルとマイナージャーナル—．医学図書館員セミナー論文集，13:17-24，1986.
- 6) 野村 謙：歯学領域のCore Journal—神奈川歯学の分析を中心に—．医学図書館員研究集会論文集，18:109-120，1983.
- 7) 田中 久文：国内の総合的臨床医学雑誌における引用文献調査．医学図書館，11(5):221-233，1964.
- 8) 村上 宏：雑誌の選択とCore Journal．医学図書館，24(3):105-110，1977.
- 9) Tonosaki M. and Ide T. : Core Foreign Medical Journals in Medical School Libraries in Japan．医学図書館，33(3):253-283，1986.
- 10) 井出 唯敬 ほか：日本医学図書館協会加盟館の外国雑誌コレクションの現状(1977-1982)．医学図書館，31(2):132-144，1984.
- 11) 近藤 英子，仙友 友子：日本の医学雑誌の二次資料収録状況—特にIndex Medicusを中心として—．医学図書館，32(2):121-146，1985.
- 12) 津田 良成 ほか：Index Medicus収録和雑誌および協会加盟館における重要和雑誌．医学図書館，12(4):231-259，1965.
- 13) 箭内 克臣：国内医学雑誌主題別リスト—J I C S T国内医学文献ファイル収録誌を対象として—．医学図書館員セミナー論文集，10:240-257，1983.
- 14) 慈道 佐代子：学術雑誌の収集に関するアンケート調査について—DataをJournal Citation Reports(1975年版)と組み合わせて—．大学図書館研究，11:75-88，1977.

参考文献

- 15) Lambert, Jill: 電子時代の学術雑誌.(日本図書館協会情報管理委員会訳) 東京，日本図書館協会，1989.
- 16) 篠本 有希，上田 修一：遺伝子工学のコアジャーナル．Library and Information Science，22:31-45，1984.
- 17) 山崎 茂明，緑川 信之：臨床医学重要誌を対象としたMAPPING．医学図書館，30(1):61-63，1983.
- 18) 山崎 茂明：引用関係マップによる学術雑誌コレクションの分析．医学図書館，34(1):25-32，1987.
- 19) 高山 正也，磯部 修子：専門・実用雑誌のコアジャーナル選定方法—販売部数と広告料金の選定に与える有効性の検討—．Library and Information Science，24:93-

- 112, 1986.
- 20) 上田 修一 ほか：日本の医学雑誌の現状. *Library and Information Science*, 25 :113-122, 1987.
 - 21) 高多 享：経済学分野におけるCore Journal. *書誌索引展望*, 2(5):288-302, 2(6): 365-390, 1978.
 - 22) 土井 六郎：引用文献の計測による園芸学分野のKey Journals-選定とその一所蔵調査例-. *大学図書館研究*, 6:43-50, 1975.
 - 23) Brandon, A.N.: Selected list of books and journals for the small medical library. *Bull. Med. Libr. Assoc.*, 75(2):133-165, 1987.
 - 24) Usdin B.T.: Core list of medical journals: a comparison. *Bull. Med. Libr. Assoc.*, 67(2):212-217, 1979.
 - 25) Garfield E.: Significant journals of science. *Nature*, 264:609-615, 1976.
 - 26) Kilgour F.G.: Use of medical and biological journal in the Yale Medical Library. *Bull. Med. Libr. Assoc.*, 50:429-449, 1962.
 - 27) Garfield E.: Japanese journals... what they cite and what cites them. *Current Contents: Life Science*, 19(9):5-10, 1976.
 - 28) *Ulrich's international periodicals directory 1988-89*. New York, Bowker, 1988.
 - 29) 現行医学雑誌所在目録-1988年度受入医・歯・薬学及関係誌-. 東京, 日本医学図書館協会, 1988.
 - 30) *Serials directory: an international reference book*. Alabama, EBSCO, 1986.

後世に残す 山崎 語録

(塾生たちのモノログ・・・文責：編集委員)

自分はいかにできなかつた、ということ語るのが「発表」だ。

自分の歩きをしよう。

勉強と言うのは誰かが教えてくれるのを待っているだけではだめなんだ。

ストレスに強い人間なんていないよ。

かあっこいい！！

みんな最短距離で研究しているように見えるけど随分回り道をしているんだよ。

新しいトピックに飛びつく人より地味でもコツコツ勉強する人がいいなあ。

僕たちはいつか終わる者だけど、仕事を遺したい。

新聞記事で考えたこと

神場 清治

1 はじめに

学術雑誌塾において現在グループ研究を行っている。私たちのテーマは、医学分野において一つの主題がどのように成長発展するのかということの記事の数量をはかることによって国別、雑誌別の比較をしようとするものである。例えば、ある疾病についての論文が最初にどのような分野の雑誌に掲載され、次第にどのような分野へと移り変わっていくのか。あるいはまた、日本と外国を比較した時、雑誌記事の流れ方に何か違いがあるのかというようなことを調査している。まだ途中なのでどのような結果が出るか解らないが、この場では、この調査を行うに当たって考えていたことをまとめてみたい。

2 今までの調査活動を振り返る

塾においてグループ活動に参加するのは今回が3回目である。今回の調査のテーマを決める前に前2回の調査を振り返ってみた。前々回は“総合医学雑誌の比較”についての調査であった。日本の総合医学雑誌は、JAMA や New England Journal of Medicine (NEJM) の影響を受けているだろうと考えて、日本の7つの雑誌と JAMA, NEJM をコンテンツの項目で比較した。その結果、強いて言えば「医学のあゆみ」が NEJM 型であり「日本医事新報」が JAMA 型であるといえるかもしれないということになった。しかし日本には、総合医学雑誌と呼べるものは無いのではないかという感想を持った。

前回の“健康医学雑誌”の調査では、一般市民から見た医療情報ということで、「毎日ライフ」、「わたしの健康」、「暮しと健康」、「壮快」の4誌の比較を行った。これらの雑誌には、専門的な医療情報を患者に解りやすく伝えようとするものと、患者に治療法や健康増進法を紹介しようとするもののふたつの種類があることが解った。生物医学図書館員研究会の時に「わたしの健康」と「暮しと健康」の編集者の話を聞くことができた。この時にふたつの雑誌の編集方針の違いを知ることができた。「暮しと健康」では、信頼度の高い医療情報しか掲載しないということであったが、「わたしの健康」の方は、たとえ何人かのうち一人にしか効果がない情報でも紹介する場合があるということであった。その違いは、私達の調査の結果とも一致していたと思う。「毎日ライフ」、「暮しと健康」は学術的であり、「わたしの健康」と「壮快」はどちらかというあまり学術的ではない、というのがひとつの結論であった。

しかし、おかしなことかもしれないが、あまり学術的ではないと考えていた「わたしの健康」の編集者の「ある治療法が何人かのうち一人にしか効果がない情報でも紹介する」という言葉に何故か共感を覚えた。一般市民にとっては難しい医療情報を平易に解説してくれる記事も大切だが、それ以上に精神的な支えや、希望を与えてくれるものが必要なのではないかと思っただからである。

3 スクラップ

以上のふたつの調査から、総合医学雑誌と呼べる雑誌の無い？日本と、外国との医療に対する考え方の違いと、わざわざ健康医学雑誌を購入して読んでいる患者の側からみた医療に、今まで以上に関心を持つようになった。そこで自分自身の興味を再認識するために今まで溜めた新聞のスクラップを読み返してみようと考えた。

スクラップといってもたまたま目に止まった、ちよつと気になった記事を集めたにすぎないものであるが、1984年から1989年まで26件の記事があった。そのうち特に関心を持ったものを紹介してみたい。

まず、遠藤周作さんの短い連載

《1984.10.2-5 こんな医療がほしい(1-4):「心あたかな病院」キャンペーン報告記》

《1985.9.24-27 いのちと医療を考える(1-4)》という2つの記事がある。

1984年の方では「日本の病院は一流の水準にあるが、人間的なあたかさの配慮となると欧米の病院に劣る」と言う書き出しで始まり、「患者の心理をふまえての治療がされなかったことは、学界で『患者の心理』がメインテーマになったことがないことでもよくわかる。」そして「大切なのは夕食の問題ひとつをとっても患者の身になって考えてやっているか、どうかの『あたかさ』の問題なのだ。」「病気にかかった人間は肉体だけでなく、心にも痛手を負っている。傷は体と心との両方にあるのだ。..残念なことには、現在の日本の病院では、肉体重点主義の傾向があり、苦しむ患者への言葉の配慮が軽視されている」。

それから約1年後の1985年の文章は、《“生命と倫理報告書を”読んで》という副題が付いており「医師会長や医大のえらい先生だけではなく、実際の病院長や現場の医師や看護婦さんの声をぜひきくべきだと私は思う。」「依然として日本の医学は患者心理を重視しないで治療をしている」としている。

この遠藤周作さんの意見に対するものとして1年後の

《1987.3.18 痛み知った手術を受けた外科医の教訓》という記事がある。

「外科医が手術を受けてどう感じたかをテーマにした、学会として型破りの討論会が日本消化器外科学会で企画され話題を集めた。」のだが、ここではそれぞれ、医師が患者の立場に立った提言を行っている。

《1987.4.8 カラを破った医学会総会》

では「日本医学会が『ヒューマニティー』を3本柱の1つに据えて総会を開いた」ことが紹介されている。このなかでの“いす論争”は面白い「医師はひじ掛けのついた立派ないすに座り、患者には粗末な丸いすが用意されている。これではいいコミュニケーションはできない」という問題提起に対して「医師は八時間も座り続けるのだから立派ないすで当然」という“ある地方医師会長”の発言。さらに「患者だつて心地よいいすにすわりたい。医師に会えるまで何時間も硬いベンチで待たされているのだから」という再反論。

「日本医学会総会始まって以来」のいくつかの試みが行われ、「ともに働く人々や患者を尊重した日本医学会総会のこの姿勢を、今後、日本のすべてのお医者さんに貫いてほしい。」希望の持てそうな記事である。遠藤周作さんが提言している“患者の立場に立つ”ことを始めようとする医学会の姿勢に期待したい。

《1988.5.26 ガリバーの目(2):ベルギー入院体験・患者に冷たい日本》

【ベルギー入院体験】は、特派員の体験入院報告記である。予約制なので外来で待たされないこと。病室のスペースが1人6畳分あり、広いこと。食事のメニューが充実していることなどが紹介されている。

【患者に冷たい日本】では『朝6時40分から午後2時まで病院で過ごした8時間近くの間で私がしたことといえば、2分の診療を受け、2分の診断を聞き、2分の支払いを済ませただけです。あとはひたすら待つ、待つ、待つ……』という体験談から始まって、『まずくて冷たく変わりばえのしない』入院食のことが書かれている。「厚生省が『基準給食の承認基準』に『適切な時間に、適温の食事を出す』ことを加え、その改善に乗り出したのは、つい今春のことである。」と結んでいる。

またこの記事のなかで「『ほかに聞きたいことはないか』、と医師、インターン、看護婦に繰り返し聞かれ、質問が種切れになってしまった」ニューヨーク特派員の経験や、プライバシー保護のために病室に名札を掲げない国にアメリカ・中国・フィリピンがあることを紹介している。

《1986.8.25 知られたくない権利もある:悪習・・・病室の患者の名札》

という記事では、ある病院の院長が「名札があると医者・看護婦と面会人には便利だが、患者本人には全く不必要。その証拠に、米国や欧州のどこへ行っても、名札を見たことがない。病院として患者の『知る権利』に十分こたえ、また『知られたくない権利』を守るのは重大な責任だ」と述べているし、ある病院管理学者の「患者の診療・事務処理となにも関係のない職員が、その気になればいくらでも情報を引き出せる仕掛けができつつある。診療記録の厳重な守秘方式をつくらないと、いずれひどい人権侵害が起ころかねない。そう思っていくら話しても、病院経営者の関心はまだ低いですね。」という発言もある。

いくつかの記事を紹介しました。医療専門誌や健康医学雑誌の情報ではなく、新聞記事のスクラップという最も消極的な情報収集でも多くのことを知ることができる。患者からみた医療（食事やプライバシーのこと）を考える場合、多くの場合欧米を始めとする外国を手本にしなければならない、ということが解る。それは医師の立場からも患者の立場からもいえることだと思う。

4 おわりに

遠藤周作さんが、「我々一般市民も健康保険をはじめとして今の日本の医学界が困っている問題に関心がなすすぎる。」また、医療に対する報道について「なぜ検査づけ、薬づけをする病院があるのか、その事情と原因を我々に教えてくれるべきなのである。そうすれば、今の日本の病院が直面している問題が一般市民にもわかり、これをなんとかせねばならぬとわかってくる。その時、この社会問題をめぐって病院や医師や一般市民がはなしかえる『場』ができてくるはずだ。この『場』をつくるのがジャーナリズムの仕事のひとつであろう。」と要望している。そして最後に「私のキャンペーンは医師と看護婦と一般市民が力をあわせて、今の病院をもっと心あたかなものにしたという、ささやかな運動である。」と、とても建設的な意見を述べている。そしてその『場』の中に自分自身が入り考えて行けるようになればいいと思う。

また、医療に対する患者の意識の変化や、患者に対する医師の意識の変化によって医療情報の扱われ方も今までとは、違うものになってくるであろう。医学図書館も医師だけでなく患者に対して也正確な情報を与えるサービスを行う時代になるのではなかろうか。そういう時代がきたならば“心あたたかな図書館”で自分自身の病気に対する情報を得たいものだ。

グループ研究に当たって興味を持っていることをまとめようとしたが、それをどのように調査に結び付けて行くのか考えていかなければならない。塾長に指摘された「調査研究活動は夢見るような非現実的なものではなく、実行可能なものから始めなければならない」ということを肝に銘じて地道な活動を続けていきたい。

新聞記事リスト	1984-1985読売	1986-1989朝日
1984.6.13	ちぐはぐな“生命論議”：避妊法を制限して中絶薬の解禁とは	1987.9.11 学ぶ価値ある在宅医療：常識を破るスウェーデンの実験
1984.10.2-5	「心あたたかな病院」キャンペーン報告記(1-4)：こんな医療がほしい	1987.10.5 病院づくりの夢実現：基本は「人間を大切に」
1985.5.24	医療に人間性の回復を：技術レベルを超え「なにが幸せ」の視点で	1987.10.17 ひと：医療情報センターをつくる弁護士
1985.9.24-27	いのちと医療を考える(1-4)	1988.1.25 現代の信頼：患者の不安を直視する必要
1986.8.25	知られたくない権利もある：悪習・・・病室の患者の名札	1988.4.14 がん患者安楽死させた：実習医の告白で論争
1986.9.5	中毒110番	1988.5.26 ガリバーの目(2)：ベルギー入院体験・患者に冷たい日本
1987.1.6	働く女からの手紙：ドクター	1988.6.1 死を見つめる(8)：教わる心を日常に
1987.3.11	エイズ感染者の人権守れ：プライバシー軽視は受診回避招く	1988.8.5 公衆衛生学の講義充実を：日本に欠ける「健康を考える教育」
1987.3.18	痛み知った手術受けた外科医の教訓	1988.8.29 医薬品関係の報道は慎重に：副作用監視システムの確立を急げ
1987.4.3	声：万人納得する脳死の基準を；それでも怖い臓器移植の道；学会にほしい患者側の視点	1988.9.6 ホスピス運動とモルヒネ
1987.4.8	カラを破った医学会総会	1988.12.31 「がん告知」この人たちの場合：告げても後悔告げなくても後悔
1987.5.20	人命は重し...されど(3)：どこまで治療すべきか	1989.1.16 生命倫理はつまみ食いではなく
1987.6.5	余白を語る：ガンによる最期に示す生の証の燃焼	1989.2.12 病院のトイレ：より近くより清潔に

BLDSCの広報活動

熊谷 智恵子

I はじめに

British Library の文献供給サービスセンター部門である British Library Document Supply Centre-BLDSC- は、日本の図書館から資料の複写申し込みの可能な海外のサービスセンターとして、私のいる病院図書室にとってもなじみ深い所である。少し古い資料だが、1984年3月のある5日間のサンプル調査では、海外からのリクエスト6,328件のうち日本が第一位(13%)になっている報告がされている。ちなみに第二位はフランス(11%)、第三位スペイン(8%)、第四位アメリカ(7%)であった。これと比較される資料として1981年の調査では、第一位アメリカ(12%)、第二位フランス(10%)、第三位日本(8%)、第四位スペイン(7%)があげられている。¹⁾こうした調査からもBLDSCの活動の広がりを強く感じたので、最近のBLDSCの活動について調べてみた。

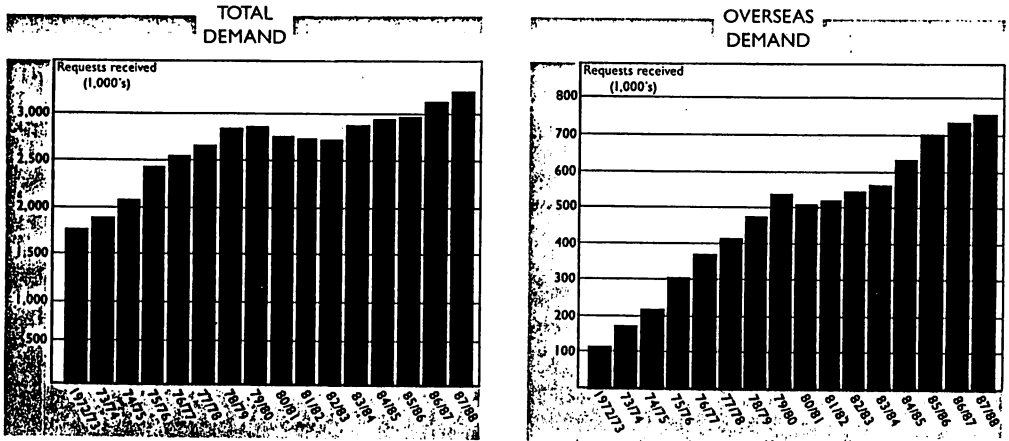
II BLDSCの歩み

British Library は思ったよりもずっと若く、今年創立16年を迎える。それ以前のイギリスの図書館のサービスは、各種の機関あるいは組織に属した図書館ごとにおこなわれていた。1969年 Frederick Dainton卿を議長とするNational Library Committee の勧告により1972年 British Library 法ができた。この結果、これまで個々の図書館でおこなっていたサービスを集中化することとなった。同法により1973年4月 British Library が発足した。

一方、BLDSCの前身である National Lending Library for Science and Technology (NLL) は、1956年11月ロンドンにおいて Department of Scientific and Industrial Research - 科学と技術の本と雑誌の公共貸出サービス機関 - として計画されたが、NLLと呼ばれるこの新しいサービスのためにスタッフが補充されて、1961年8月ロンドンから Boston Spa, へ移転した。1962年11月5日、NLLはロンドンの Museum Library を引き継いでその仕事を開始した。その頃のNLLは、25,000タイトルの Monographs、12,000タイトルの現行の雑誌、125 Miles のマイクロフィルム、120人のスタッフを有しており、その初めての年のリクエストは13万件にものぼっていた。

1971年 Boston Spa, に Lending Division が提案され、NLLと National Centre Library が合併された。そうして、1973年 British Library 法によって組織された British Library へNLLのスタッフや記録のいくらかは移ってきた。こうして British Library Lending Division - BLLD - が始まった。NLLから始まって12年後の1974年には年間200万件ものリクエストが寄せられるようになった。1985年9月 BLLDは British Library Document Supply Centre - BLDSC - とその名称を変えた。1986年には262万タイトルの Monographs と5,300タイトルの現行の雑誌を受け入れ、1,700 Miles のマイクロフィルムと750人のスタッフをかかえ、

300万件にもおよぶ年間リクエストをこなしている²⁾。その後もBLDSCへのリクエスト件数は増えており、BLDSCが作った1972年から1988年までのリクエスト (Total demand 及び Overseas demand) は図①の通りである。



図①

- BLDSC FACTS & FIGURES

April 1988 - より

III BLDSCの活動

BLDSCは主な役割として、イギリスの図書館ネットワークを支えて図書の貸出と複写を提供している。また、海外の図書館へは複写サービスをしている。これらのもととなる資料の量は1988年4月のBLDSC FACTS & FIGURESによると次の通りである。

III-1 収集

① Serials : 20,200タイトル保有し、54,600タイトルの現行の受け入れをしている。資料の入手方法は全体の80%を Subscription Agent に依頼し、残りの20%は直接購入及び寄贈によっている。

② Monographs : 2,710,000冊保有し、寄贈をのぞいて45,000冊受け入れている。収集の基本は Serials と同じであるが、英語でかかれたもの他 (他の言語でかかれた) 単行書はリクエストにより購入する。

③ Special Materials : グレイリテラチャーと呼ばれる、報告書・会議録・翻訳物・学位論文・政府刊行物などで、通常の本籍販売ルートを通らないため確認及び入手が困難な文献である。BLDSCではこれらの収集に力をそそいでおり、グレイリテラチャーや他の困難な資料の収集を行う専門部門として Special Acquisitions を設けている。ここでは Conference Proceedings を240,000件保有し、2,000件受け入れている。また、翻訳物や、音楽・ロシアの科学技術分野での単行書などがある。たまにあることだが、学

位論文がレファレンスの中にあつたりするとその入手の困難さに驚いたりするがここではそうした問題は解決される。BLDSCでは1970年からイギリスの大学に呼びかけて、学位論文を Boston Spa, に送り BLDSC でマイクロ化して各大学へ送り返すシステムを導入している。学位論文のマイクロフィルム数は7,600件保有し、年間6,000件受け入れている。

Ⅲ-2 広報活動

BLDSCの広報活動の中心となる Newsletter としての Document Supply News は現在、年5回発行されており、世界中の利用者へダイレクトメールとして無料で送られている。これ以前は British Library News として毎月発行されていたが、1985年からは、British Library Document Supply Centre Newsletter として No.13 (1987年9月)まで続いた。そしてNo.14 (1987年12月)から現在の名称に変更された。その内容は BLDSC のサービス案内・出版物紹介・組織の変更知らせ・年間統計などからなっている。たとえば、Section 紹介では各部局のサービス内容とその量・ポリシーなどにふれている。もちろん、スタッフの紹介も忘れておらず記事の半分近くが各々の部局におけるスタッフの写真で、時にはスタッフの名前入りでの紹介だったりしてとてもなじみやすい。

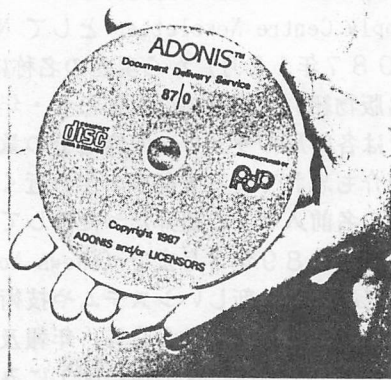
手元にある1986年6月から1989年3月まで (News No.6 から News No.20) の最初に現れた記事について調べてみると、新しいシステムや技術についての紹介記事は全体の56%、BLDSCの歴史についての記事は20%、年報及び業績、人事の動きについては20%となっている。また、このニュースの他に図①にみるように年間の業績統計を数字とグラフでわかりやすく表している“FACTS & FIGURES”が年に一度発行されている。

Ⅳ 新しいサービス

BLDSCでは、最近の注目すべき (BLで重点を置いていると思われる) サービスについての宣伝パンフレットを送って来る。それらによると、たとえば、Urgent Action Service -緊急処理サービス- については、急いで文献必要としている時に有効なものであり、24時間体制でFAXによりリクエスト文献が処理されるシステムで、受信後数時間で応答があるというもので、料金はたとえば日本だと基本料金4クーポン券+FAX分4クーポン券+処理枚数分の通常料金である。これを高いと考えるか、安いと考えるかは文献を必要とする利用者の緊急度との兼ね合いということだろうか。ちなみに1987-1988年の緊急処理サービスは24,000件である。

また、News やダイレクトメールに頻繁に登場するサービスのひとつにCD-ROMによる Biomedical Journal 中心の219件の一次情報文献からなっている、ADONIS (図②)がある。ADONISは西ドイツのシュプリンガーやイギリスのパーガモン、ブラックウエル、オランダのエリゼビアが、かれらの共同事業体としてADONIS Consortium を設立したもので、具体的には雑誌が発行されてから10日以内にIndex をつけてCD-ROM化し、各国の代理店に送られて来る (CD-ROMは週一度追加される)。

代理店では、CD-ROMドライブ、パソコンを使い利用者からの注文を電話・FAX等で受けて全文の copy を提供するというものである。入力されているデータは全掲載論文、写真、図表等も含んでおる。ADONISサービスの最大の特徴は著作権がクリアされている点にある。また、文献の複写に関連してはその著作権について多くの問題をはらんでいたが、ここでは出版社側はADONIS Consortium よりロイヤルティーを受けることが出来るという点と、進んだ出版の形態であるエレクトロニクスパブリッシング -電子出版- を応用して対応できるという点において、出版物のCD-ROM化をはかり、出版物の今後のありかたを検討しているのだろうか。このようにBLDSCが扱うADONISは今後、文献の複写サービスと著作権についていろいろな問題を提起していくのではないだろうか。



図②

BLDSC Newsletter
No.12 1987

Our experimental CD-ROM

参考文献

- 1) British Library Lending Division Newsletter. No.1, 1985.
- 2) British Library Document Supply Centre Newsletter. No.8, 1986.
- 3) 真島 一：“BLDSC International User Cours”に参加して。情報と科学の技術，38(4):173-176, 1988.
- 4) John Chillag：グレイリテラチャーの収集 -BLLDの展望-。情報管理，28(9)：760-65, 1989.
- 5) 平野皓正：アドニス計画の現状と将来。医学図書館，31(1):53-54,1988.

その朝 — 上野英信氏への恋文 —

真下 美津子

その朝、いつものように朝刊をひらいた私の目にとびこんできたのは、まったく予期だにせぬ、いや、決して、事実として認めたくもない記事だった。

真空状態とは、あのようなことなのだろうか。まわりからすべての音と色がきえうせ、キーンと体の中にだけ音がかけめぐり、宇宙へほうりだされ、浮遊しているような頼りない心もとない感覚だった。

「どうした。」遠くから聞こえてきたような彼の言葉に、やっと我をとりもどし顔をあげたが、言葉はなく、とめどもなくぽたぽた落ちる涙の中で、その記事をさししめすのが精一杯だった。

1987年11月21日、午後6時30分、食道ガン、64歳

私があれば敬愛し、かつては、その人の生きる土地で、自分も一緒に生きたいと思ったその人の、死亡記事だった。その人がいつも傍らにおいていたピースの青い缶が、鮮烈な光で私をおそった。

数年前、自分の生きる意味、目的、果してこのまま生きつづけていいのだろうかという怖れ、疑い、居場所を探しあぐねていた私に、ひとりの友人が、「あなたの生まれた島のことが書いてあるよ。」そういつて、差し出してくれた一冊の本『追われゆく坑夫たち』が、その人との出会いにつながった。

「かつて、広島で被爆し、広島地獄を見、その地獄を生きた人間の一人として、この地獄から逃れるには、人間そのものとしての地獄を生きるよりほかに途はない。」と、京都大学中国文学科を中退し、筑豊の闇の中へおりにいった。そこを終の棲家とさだめ、古い炭住を改造し、『筑豊文庫』と名づけた。そこは、いわれない差別をうけ苦しんだ人達、自分の半生を文字にしたくとも、文盲のためそれさえかなわない人達、そんな底辺で生きることを強いられた人達が、自由に心と体をのぼせる場所として作られ、その人は集まってくる人達の声の文字にした。

「『三たび許すまじ原爆』という歌があるが、そんな歌さえくちざさめない気分なのだ。三たびも四たびもない。私はいまなお一度目を許すことができないのである。誰がなんといおうと、ぜったいにあの一度目を許せないのである。さらにいえば、誰かのせりふめくが、それを許す私を許せないのである。呪縛というべきか自縛というべきか、いずれにせよ、この救いがたい、我ながら凄まじい妄念そのものを原点として、私は平和を考えるほかないのである。理路整然たる平和論を私は信じないし、信じたくもない。」

その人のあまりにも激しく、また、弱い立場の人間にむけるまなざしのあたたかさ、そして、あまりにも『強い優しさ』に心ひかれ、矢も盾もたまらず、西へ向かう列車にとびのつた。

玄関に掲げられた『筑豊文庫』の文字を見たとき、まるで搖籃のなかにもどったような、

なつかしさと暖かさを感じた。

長身で、黒ぶちのめがねの奥の目は、慈愛にあふれおだやかで、突然の訪問者である私のまとまりのつかない話にも、いやな顔ひとつせず、じっと耳をかたむけてくれた。

その人は、世の中で人が人を差別することほど卑劣なことはないと考える、まったく差別意識のない自由な人だった。

そして、その人の傍らには、まるで菩薩様のようなやわらかい表情の晴子夫人が、ひっそりとしていてくれた。

散歩の途中でみつけたという名もない野の花が、さりげなく、その人の手で活けられ、夫人の心のこもった手料理でひとときをすごし、忘れられない秋の一日となった。

「自分のやりたい事を10年続けてごらんなさい。そうすれば、きっと何かがみえてきます。」

「自分には時間がない。書きたい事がもつともつとあるんです。」

「誰かが、この世のありようをきちんと整理して、記録して残しておかなければ。」

その人は、日本のエネルギー政策が産み落とした棄民を追い求め、南米へ散った元坑夫たちの姿を『出ニッポン記』にまとめ、沖縄からメキシコ、キューバへと渡った労働者一族の記録『眉屋私記』を書いた。

自分がガンであることを知り、1987年2月入院、放射線治療の後、5月に退院したが、『眉屋私記』の続編を書こうと沖縄へ出立の8月の朝、ひどいめまいを感じ再入院。それから数カ月、ガンと戦いながらも、とうとう巨木は大きな音をたてて倒れた。

「記録文学は、時間をおしむな、金をおしむな、命をおしむな。」

いつもそういつていたその言葉通り、燃焼してしまった。

その人によって、日本の記録文学という新しい分野が開かれ、その人の死によって、幕を閉じたといっても過言ではないだろう。

1988年1月25日号の『週刊読書人』で、『ノンフィクションをめぐる最近事情』を特集し、その中で、鎌田慧氏が次のように書いている。

「日本のルポルタージュ史が上野英信をもちえたことは誇りであり、救いである。坑夫たちは、彼にありつたけの話をし、彼はそれを書いた。たしかに彼が希ったように、小ヤマの坑夫たちが立ちあがって、坑夫の歴史を変えるまでには至らなかった。しかし、坑夫たちの憤怒の情念はしっかり書きとめられたのである。（中略）彼の訃報を聞いて、記録文学がおわったと感じた。」

私は、自分が今まで生きてきて、かつて一度も後悔したことはなかった。しかし、上野さんを失ってしまったことは、どんなに悔やんでも、悔やんでも……。 （誤解を恐れず、あえて言うなら、今一緒に暮らしている彼を失うよりも、別の意味でつらい事だった。） その人も、志しなかばでたおれ、どんなにか無念であったろうと考えると、やるせなく、慟哭の日々が続いていたが、今は、その人が『筑豊文庫』に遺した、数多くの貴重

な資料の散逸を防ぎ、その整理をしなくてはと、めそめそしながらも思いはじめている。

また、私でさえ、こんなにつらく、胸がつぶされる思いなのだから、夫人はさぞやと、その胸中をおもんばかってつらかった。

「今まで、原稿の清書をしたり、ふつうの夫婦に比べて一緒に過ごす時間が、たくさんありました。決して楽しい夫婦ではなかったけど、いい夫婦だったと思います。上野からたくさんの事を教わって、私の中に上野英信が大きく入り込んでいたから、喪なつた時は、自分の中から無理やりひっぱりだされてしまったみたいで・・・。」夫人は、淡々と語ってくださった。

あまりにも、あまりにも個人的な稚拙な文で、この『論文集』にはそぐわない内容であり恥ずかしいのですが、今の私には、その人—上野英信氏—のことを書かなければ、一步も前へ進めません。亡くなってもう一年以上経つというのに、私の心は、まだ喪があげていません。

その人が、息子の朱さんに遺した最後の言葉で私の駄文をしめくりたいと思います。

「自分はもういつ死んでもよいのだ。今まで精一杯の仕事をやってきた。手を抜いたりいい加減にやつつけ仕事をしたつもりはない。『眉屋私記』にしろ、その前の『出ニッポン記』にしろ、すべて全力を尽くしてやってきた。だから、ここで、もし死んでも何も恐ろしくはない。このあと『眉屋私記』の続編、これは非常にやりたいけれども、今までのことを思う限りにおいては何も怖くない。そうこの場で、言いきれぬ自分をほめてやってもいい。」

☆著作目録

『親と子の夜』(1959・11 未来社)

『追われゆく坑夫たち』(1960・8 岩波書店)

『日本陥没期—地底に奪われた死者たち』(1961・10 初版 未来社)

『地の底の笑い話』(1967・5 岩波書店)

『どきゅめんと筑豊—この国の火床に生きて』(1969・7 社会新報)

『天皇陛下萬歳—爆弾三勇士序説』(1971・11 筑摩書房)

『骨を噛む』(1973・4 大和書房)

『日本陥没期—地底に奪われた死者たち』(1973・5 新装版 未来社)

『麿鉞譜』(1978・6 筑摩書房)

『ひとくわぼり』(1979 北京人民文学出版社)

『火を掘る日々』(1979・3 大和書房)

『親と子の夜』(1982・10 復刊 未来社)

『眉屋私記』(1983・10 潮出版社)

『出ニッポン記』(1984・3 潮出版社)

『ひとくわぼり』(1982・11 限定手彩色 裏山書房)

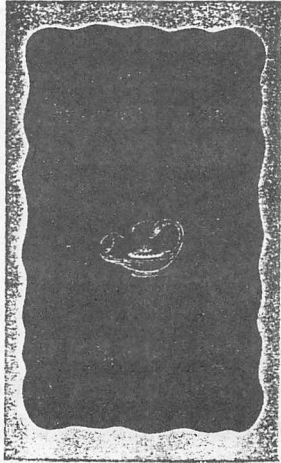
『上野英信集 全5巻』(1985・2-1986・5 径書房)

1:話の坑口 2:奈落の星雲 3:燃やしつくす日々 4:闇を砦として 5:長恨の賦

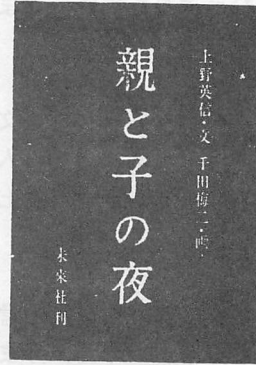
『写真万葉録 全10巻』(1984・4-1986・12 葦書房)

- 1:人間の山 2:大いなる火(上) 3:大いなる火(下) 4:カンテラ坂
 5:約束の楽土 6:約束の楽土(続) 7:六月一日 8:地ぞこの子
 9:アリラン峠 10:黒十字

● 著作目録



1960・8 岩波書店



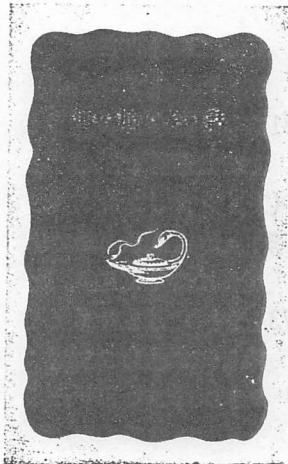
1959・11 未来社



(1961・10初版)
 1973・5 新装版 未来社



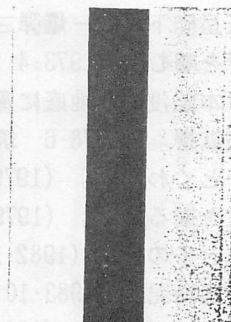
1969・7 社会新報



1967・5 岩波書店



「骨を噛む」
 1973・4 大和書房



「天皇陛下萬歳」
 1971・11 筑摩書房



1978・6



筑摩書房



〈ひとくわぼり〉

1979・北京 人民文学出版社



1984・3 潮出版社

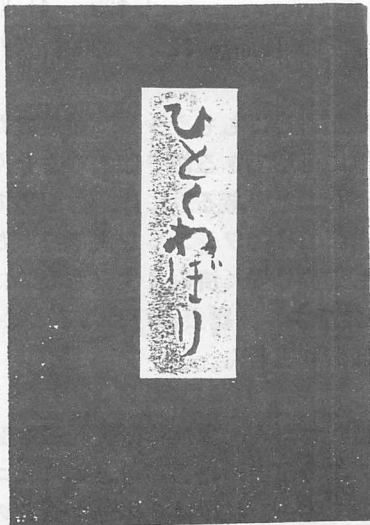


1982・10復刊 未来社



「火を握る日々」

1979・3 大和書房



1982・11
裏山書房



1983・10 潮出版社

米国医学図書館協会
(Medical Library Association)
年次総会参加ガイド

牛沢 典子

機会があつて、私は1987年5月の 米国医学図書館協会(Medical Library Association, 以下 M L A)の年次総会に参加することができました。

今になってみれば、よく何も知らずに参加できたものだと思います。帰ってきてみれば、御一緒させていただいた山崎さん(慈恵)、山口さん(浜松)、岩本さん(当時阪大)、井出さん(兵庫)が次々と報告をまとめられました。明確な目的も持たずに行ってしまった自分が恥しく思われます。

でも、アメリカでの体験は、そんな恥しさも吹き飛ばくらい楽しかったので、ぜひ皆様にも参加してみていただきたく、‘医学図書館員初級者用の’ガイドをまとめたいと思います。

用意するものは、度胸と笑顔と少々のお金

経費(私の場合)

総会出席料 (MLA会員)(全日参加)	(\$185) ¥ 27,000
航空運賃	¥ 210,000
(ユナイテッド航空で日米往復とポートランド-ワシントン-シアトル間)	
宿泊	(\$55 x 4) ¥ 32,000
食事	(range \$2 ~ \$20 !?) ¥ 10,000

私が行ったときは、\$ 1 = ¥ 145 位でした。他にももう少し、渡航のための手数料やこまごました交通費が必要になります。簡単に用意できる額ではありませんが、海外旅行に行ってみたいけど、どこにしようかと思つたことのある人には、お薦めです。

私の場合、西海岸のポートランドでの総会の後にワシントンまで行つたので上記の航空運賃ですが、西海岸までの往復だけならもう少し安く済みます(ちなみに、1991年の総会は5月31日-6月6日サンフランシスコの予定です)。総会が行われるのは、毎年、連休の終つた5月後半なので、運賃の高い時期ではありません。

あえて英会話の能力は要りません。本当だったら、講演や研究発表を聞き取る力が望まれるのですが、初級者としては、その場で出会つた出席者とコミュニケーションできればよいのではないのでしょうか。自慢じゃないですが、私には全体的な会議の内容はちんぷんかんぷんでした。

何をしていたかという、生意気にも御一緒した日本からの参加者とはほとんど別行動

で、会場で出会った人となるべく話すようにしました。あんまり相手にしてくれない人も中にはやっぱりいましたが、概ね好意的でした。

なんとなくそばにいた Ms.Winward はピンクのスーツが素敵で、褒めたら「主人が好きな色なの」という返事。一緒に御昼を食べたり、展示を私にも解るように説明してもらったりしました。

会場移動のバスの中で会って、「英語ができなくて・・・」と言い訳しながら話す私に「とにかく試してごらんよ」と言って、一生懸命に聞いてくれて、別れ際には名刺を渡してくれた女性。(後でその名刺をよくみると、肩書が図書館の director だった。)

図書館の活動を紹介する展示のブースの前で、展示物が一体何なのか理解しようと苦しんでいる私に、素敵なコサージュをつけているのね、と話しかけてくれた案内役の図書館員。

米国医学図書館協会は、基本的に個人会員で成っていますから、会場で出会う人たちとは一対一で、話したいことを話します。

MLA 総会参加報告のリスト

私のような不心得者はさておき、先輩がたの参加報告を紹介します。

網羅的ではありません。他にあると思います。見つけたら教えて下さい。

井出唯敬ほか *Confluence:Source of New Energy* ---第87回 MLA 総会に参加して。
医学図書館 1987;34(4):327-32.

野口迪子ほか MLA 第78回 Annual Meetingに参加して。
医学図書館 1978;25(3):130-6.

井上英新. MLA (米国医学図書館協会) 年次大会に出席して。
医学図書館 1976;23(2):102-7.

河島裕子 *The Medical Library Association(U.S.) の組織と活動*。
医学図書館 1975;22(2):87-93.

MLA 総会の概要

年次総会の公式な報告は、開催翌年の *Bulletin of the Medical Library Association* の第1号に掲載されます。また、日本からの参加者の報告は前述のリストの通りですが、以下に私の出席したときのメモから、総会の内容を簡単に紹介します。

総会は一週間を通して行われましたが、参加者全体を対象とした内容は4日間でした。MLA 個人会員約 4,000人のうち、1,300人程が参加したようです。

初日、全体会議に先立ち、海外からの参加者や初めての参加者のためのオリエンテーション（コーヒーとケーキつき）がありました。この年から Buddy(仲間) Program と称して、総会に慣れていない参加者には案内役の人をつけてくれています。

オープニング・セッションでは、開会の挨拶や、記念講演がありました。まず、TVでも売れっ子という Fred Friendly 氏 (broadcast journalist) を呼んで、医の倫理に関して、医師や看護婦、ソーシャルワーカー等の本音を引き出す真剣な討論。彼の結びは、

『医学図書館員は傍観者であってはいけない。ただの情報の倉庫にとどまらず、我々が奇跡を起こすのを手伝わなければならない』。

また、Ms.Erika Love の講演では、将来図書館が不必要になることはないけれども、研究と教育(research & education)が必要だ、という内容。これも全く聞き取れなくて、後で山口さんから内容を教えてもらったのですが、その内容にいたく感動している山口さんが印象的でした。(Love, E The science of medical librarianship: investing in the future. Bull Med Libr Assoc 1987;75(4):302-9.)

ウェルカム・レセプションでは、クラッカー、チーズ、フルーツに飲物といった簡単なものですが、出席者は久しぶりに逢う仲間と会話を楽しんでいました。

夜は、やはりこの年はじめてという“Confluence of Dinner(夕食ご一緒に)”にトライ。地元の人が世話役になって、小グループで一緒に話をしようというもの。私の参加したグループは、中華料理を食べに行きました。でも、私の他の5人は年配のベテランばかりで、ただでさえ英語の聞き取れない私には少々切ないものがありました。

2日目、展示を見て回りました。1986年の IFLA 東京大会の展示を見た方にはわかると思いますが、書店やデータベースのベンダー、OCLC、NLM などがブースを出しています。傍らの喫茶コーナーでは、食べきれないほど大きなサンドイッチでランチが楽しめます。

研究発表は5つの部屋に別れて行われましたが、どの部屋も満員御礼、熱気にあふれています。演題数は、ざっと70でした。

3日目にぶらついた、Expo'87: “Technology in Health Sciences Libraries”は、展示に似たブースを使って、それぞれの図書館でやっていることをシステムを含めて紹介しているもの。例えば、学生のための利用教育プログラムだとか、毒物情報の学内ネットワークだとか、心疾患患者モデル・ハーベイ君といったものです。

4日目。最後の講演の後のお別れパーティは、市内を流れるウイラメット河を遊覧船で往復し、河岸で名物の鮭料理を楽しむ趣向。水面を見つめながら、もっと英語を身につけて、また来ることを誓った瞬間です。

これらは、総会のほんの一部で、会期中には、それぞれの委員会や、継続教育コースなどもあります。また、求人・求職の情報も事前に集められ、総会がコンタクトをとる場になるようです。

それから、まるでお祭りのように、記念のTシャツやマグカップも売られていて、その収益は奨学金になるのです。

毎日お知らせを載せた新聞は出るし、会員相互のための連絡板はあるし、MLAの出版物も手に入る、講演などを記録したカセットテープも買える、図書館見学ツアー（ただの観光ツアーも）の幹旋、・・・まあよくアイデアが出たものだと思います。

総会出席のための具体的な準備

総会の案内は「Preliminary Program」が3月頃MLA会員に配布されます。会議の詳しい日程、交通や宿泊、継続教育コース、提供されるサービスなどが紹介されます。これに申し込み用紙がついていますので、記入して事務局に送ります。折り返し受取が送られてきますから、それを持って出かけます。

また、MLAについて知りたいときは、毎年出されている「MLA Directory」を見て下さい。MLAの組織や活動全般に渡って掴むことができます。

もしも、いくつかの図書館を見学したい場合は、その図書館の蔵書の規模などを知る資料として「American library Directory(N.Y. Bowker. Annual.)」があります。

ところで、じゃあ今度の総会に参加してみようかと思ったとき、旅慣れて一人でも行ける人なら問題がないのですが、海外に行くのも初めて、という人はどうしたらいいのでしょうか。

私の場合、日本からの参加者でツアーが組めるだろうという見込みの時点で参加を決心したのですが、結果的に人数が足りなくてツアーが成立しませんでした。つまり、他の方と一緒に行動をとるとしても、原則的に一人旅ということになったのです。あきらめようかと一度は思いました。そのときに読んだ本のおかげで、実際出かけることができましたし、最後の4日間は一人で行動することさえできました。

その本に出会わなかったら考えられなかったことですが、ワシントンのダレス空港で山口さんたちと別れて一人になった後、その日のシアトルの宿をシカゴから長距離電話で予約したり、シアトルにあるワシントン大学の医学図書館に見学に行ったりしました。

もしも、あの時、ツアーが成立していたら、単なる観光旅行に終わっていたかもしれませぬ。同行した先輩方にガイドよろしく頼りきって、おんぶにだっこしていたかもしれませぬ。遊びが目的の観光旅行ではなく、同じ目的で働く者としての会議参加が目的ですから、観光旅行のつもりでは、同行した方にも、多分自分に対しても、とても失礼なことをするところでした。

と言うわけで、私が非常に感謝している旅行書を紹介します。

「地球に夢中!旅ガイド」 おそどまさこ著

「アメリカに夢中!旅ガイド」 おそどまさこ著

2冊とも 地球は狭いわよ トラベルブックシリーズ 山と溪谷社

「地球の歩き方 アメリカ・カナダ'85~'86」

ダイヤモンド・スチューデント友の会編 ダイヤモンド社

これらは旅行社が出版している本と違って、旅行先の観光所や食べ歩きガイドではあ

りません。日本とは習慣の違う外国で、一人で、安全にしかも楽しく生きるための手引です。読んでいただければわかりますが、一人だってなんとかなるよ、平気だい!!という元気が出ます。

最後に

私は、総会参加を機に、MLAの会員になりました。それ以来、私のところにはMLAから、いろんな手紙がきます。たとえば、MLAにはたくさんの委員会がありますから、そのお誘い。年次総会の参加者が少ないことについてのアンケートでは、「あなたは出席したか、出席しなかった理由は参加費が高すぎるからか、遠いからか」。生涯教育についての案に対する、意見の要請。

MLAの会員だというだけで、極東の私にも、機械的にこれらの手紙が送られて来るわけです。

MLAは原則として個人会員ですから、年齢や経験に関わらず、対等な意見を述べることができます。アメリカの人たちは、その様にして若いときから自分の意見を求められながら、一人前の専門家になるのだなど、手紙の山を見て実感しています。

それに対して、日本医学図書館協会は、加盟館単位で会員になります。年次総会に出席するのは各館の代表者だけです。年齢も経験も足りない私ごときの意見が求められることはありません。

実力主義のアメリカと、終身雇用制の日本では、違うのが当たり前、と一言で片付けることはできます。

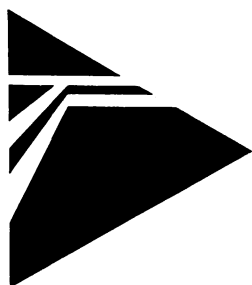
でも、本当にそれでいいのでしょうか。

アメリカでも、日本でも、情報の専門家として利用者にサービスするという真の目的は同じはずです。アメリカのやり方が100%よいわけではなくとも、今の日本のままではいけないと思います。

なぜって、MLAの総会はとにかく楽しいのです。

だから、あなたも、一度行ってみませんか。

'87年ポートランド総会のマーク



Confluence:
Source of New Energy

Special Thanks :

Shigeaki Yamazaki

Naohiko Yamaguchi

Michiko Noguchi

Tadayoshi Ide

Hiroshi Iwamoto

Mizue Takeuchi

学ぶことの自由と持続

山崎 茂明

学術雑誌塾も5年目に入った。教育は息の長い仕事であり、また目に見える成果がすぐに出るものではない。若い人を対象にした勉強会を組織したいと思っていた頃、日本医学図書館協会の研究集会の実行委員をやる機会があり、そこで知り合った受講生とはじめてみることにした。自分なりの漠然とした考え方もあったが、実際には若い人々と会を行ない、そこでの交流を通して方向性を検討してきた。その意味からも、塾生諸君とともに会をつくってきたと信じている。

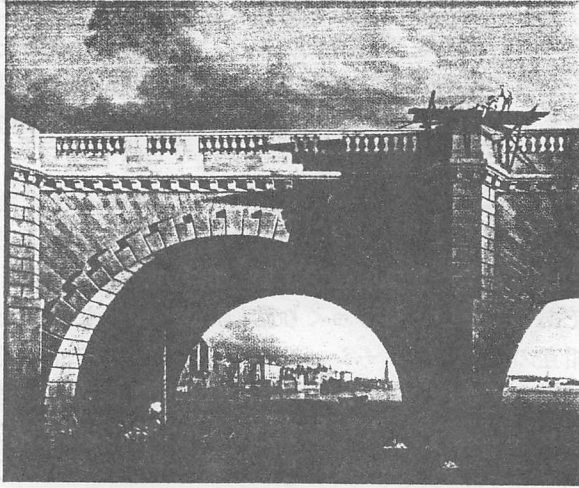
教育は、大切なことであり、それだけに言葉だけで理念を唱え、批判したりすることで済ませてはならず、実行を通して表現したものがすべてであり、あるべき方向性も実践を踏まえて検討されなければならないものである。塾生も20名を数え、一人一人実に様々な個性をもった人々であり、個人的にじっくり話したり、相談にのったりしている訳ではない。むしろ、塾生相互のコミュニケーションを中心としたスタイルで運営されれば良いと思い、幹事会による合議で塾の運営を相談し、年1回刊行している塾報は編集委員会で行なっている。私自身は、適度な距離をおき、まかせるものはまかせていけば良いと腹を決めている。指導することで良くなることもあるが、自分自身で気づくというチャンスをつぶしてしまうこともある。見映えのするペーパーをまとめたりすることは、指導者がいれば簡単なことである。しかし、その人がその後一人で歩いていける保証にはならない。まあ若いうちに苦勞するしかないであろう。塾の合宿は、勉強もするがスポーツやゲームをして楽しんでいる。勉強では静かな人が活発にバスケットボールをしたり、その他各人の隠された個性を知る機会でもある。

塾長という立場にいるけれども、何か塾生に教えなければと考えている訳ではない。むしろ、自分も一人の仲間として、考えていることや、キャリアや年齢も異なるけれども、ともに歩いていければよいと思っている。もし若い人々に示せるものがあるとしたら、それはひとりの歩行者としての姿を曝すことによってであろう。その意味からも、自分自身がしっかり歩いていくことであると考えている。言葉でなく行為で示すことであろう。学術雑誌を中心とした論文評価システムのテーマはもちろんだが、医学教育史に関するテーマでもオリジナルな仕事を日本というワクにとどまらず、できるだけ広い視点で発表していきたい。限られた時間と体力の中で、なんとか自分の意志を燃やしていきたいものである。

これまで読んだ学問についての言葉の中で、一番自然に心に入ってくるものは、デュボース、R. J. が「生命科学への道」（岩波現代選書）で、アインシュタインの言葉として引用したつぎの文章である。

《人々を芸術や科学の道へ導く最も強い動機の一つは、厳しく苦しい、そして惨めでわびしい現実生活からの逃避であろう。あるいはまた、自由な欲望の束縛からの解放であろう。こうした消極的動機に加えて、より積極的な動機もある。人は誰でも自分自身のため、どんな形であれ、明るくシンプルな世界を心に描き、それを追求する。そして現実の世界を

そのイメージで置き換えようと望む。画家、詩人、思索的哲学者、自然科学者たちは、みなそれぞれ方法は異なるが、この置き換えを試みている。自分のまわりを取り囲む渦巻のような小さな現実の社会から離れて、心の安静と平和を得、明るくシンプルなイメージの世界を形づくるために、自分の精神の生活にかけるのである。》



Samuel Scott, An Arch of Westminster Bridge c.1750

17世紀、画家は偉人や聖なる世界から、生活する人々や身近な風景の世界に目を向けるようになった。こうして、17世紀前半の静物画や、18世紀前半の風景画が生まれてきた。

当り前のことだが、本を読んだり、調査をし論文を書いたり、海外で発表したりすることは、自らの所属する組織のためでも、他人様のためにやっている訳ではない。もちろん結果として、そのようになれば、それは幸福なことであろうが、また、いかにも世のため人のためといった建前を語る必要はない。自然な心で率直になれる世界が勉強の世界であろう。

先日、日本語版JAMA（10巻2号,1989）に掲載されていた、中川米造氏の言葉が印象的であった。

《西洋の場合は、医療はとくに倫理が重要視されてきた。医療は法律や神学とならんで人間にとって重要な職業でありながら、顧客のほうからは、その質を判定できないという特徴がある。そこで同業者が組織をつくり、組織の名において質を保障することを、神かけて社会に向けて「公言」する方法がとられるようになった。この「公言」という言葉がプロフェスであるので、そのようにして保障された職能者という意味でプロフェッションというのだというのが、一般的な解釈である》

ここでいわれている同業組合が College であり、より普遍的な言葉でいえば、ギルドで

ある。Royal College of Physicians of Londonをはじめ、エジンバラ、グラスゴーなどイギリス各地に存在している組織である。そして、アメリカの古都フィラデルフィアに1787年、College of Physicians of Philadelphiaがつくられている。欧米につくられたCollege of Physiciansこそ、医師が自らの医療の質をコントロールし質の悪い医師を排除しようとしたものであった。さらに重要なことが言及されている。「組織の名において質を保障することを、神かけて社会に向けて公言する」、ここにプロフェッショナルリズムのエスキスが表現されている。レフェリーシステムに引きつけられ、専門集団と名のるからには、共有すべき情報の生産と流通に責任をもっているものでなければならず、情報の評価システムを所有していない専門集団はありえない。レフェリーシステムの存在は、専門家集団のアイデンティティにかかわるものである。しかし、このことが、まだ充分理解されていない。各専門集団が、いかなる情報の生産と流通のシステムをつくりえるかは、その集団の成熟度に依存している。



1787年にCollege of Physicians of Philadelphiaが設立された。フィラデルフィアには、アメリカで最初の病院と医科大学がつくられている。さて、私のエッセイの最後は、ずっと読みつづけてきた文章家である小林秀雄氏の言葉で締めくくことにしよう。

《昨日のことを後悔したければ、後悔するがよい。いずれ今日のことを後悔しなければならぬ明日がやってくるだろう。その日その日が自己批判に暮れるような道をどこまでも歩いて、批判する主体の姿に出会うことはない。別な道がきつとあるのだ。自分という本体に出会う道があるのだ。後悔などというおめでたい手段で自分をごまかさぬと決心してみろ。…。それは、今日まで生きてきたことについて、そのかけがえのない命の持続感を持って、ということになるでしょう》「私の人生観」より

Structured Abstracts は抄録界の新星となるか！

山口 直比古

最近、Br Med JやAnn Intern Medなどで、一風変わった抄録を見かける事があると思います。これは、Structured Abstracts (以下SA)と呼ばれるもので、やたら段落が多いために、妙にたて長の表のように見えると思います。

ひとくちに抄録といっても、その区分の仕方によって様々な呼び方があります。内容の精粗の度合によって、指示的抄録・報知的抄録、誰が書いたのかによって、著者抄録・第三者抄録などです。どんな目的で書かれるのかによっても、雑誌論文の先頭に来る論文内容の要旨である抄録と、学会で発表するために提出され、審査されるあるいは、印刷配布されるための抄録とがあります。SAは、これらのうちで、著者自身で書かれる報知的抄録であり、主として雑誌論文の要旨として書かれるものです。もちろん、学会発表のための抄録としても有効でありましょう。

これまでの抄録に対する批判は、その内容が不完全、不十分であるという点に集中しています。なぜなら、限られたスペースの中に(150-200語程度)多くの事を書かなければならないため、また、論文を書く際のIMRADのような方法も確立していないため、書く人によりバラつきが生じ易いためです。なかには、“何々について述べる”といった、テーマだけを書いている抄録すらあります。これにたいしてこれまでは、抄録を長くする事、また抄録作成のガイドを作成し、適切な抄録が書けるよう指導する事などが提案されてきました。

論文の本文を必ず読むのであれば、その先頭についている抄録など、どうでもいいようなものですが、不親切な抄録が批判されるのは、本文まで読まない事の方が圧倒的に多いからなのです。少なくとも、抄録は本文を読む必要があるかないかの判断をする情報は提供できなければならない訳です。ですから、質の高い抄録が要求されているのです。さらには、オンライン情報検索では、抄録それも多くの場合著者抄録が提供されている、という背景があります。雑誌が手元に無くとも、著者抄録までは入手できる環境に、多くの医師や研究者はいる訳です。こうした点から、抄録が見直されてきているのです。

もうひとつ背景があります。1970年代の始め頃から、主要な生物医学関係の雑誌編集者達が一同に会し、雑誌編集上の様々な問題点を検討し、スタンダードなルール作りをしてきました。まず、引用文献リストの書き方という事でバンクーバースタイルを提唱し、Index Medicusを始めとする多くの雑誌に採用されてきました。次に、共通の投稿規定をという事で、Uniform Requirements... が発表されました。これは1988年には第3版が作成されています。SAは、こうした編集者達による、よりよい学術雑誌を作ろうという、一連の動きの延長上にあるのです。Ann Intern MedのEdward J Huthや、Br Med JのStephen Lock、N Engl J MedのArnold Relemanたちは、常にこのグループの先頭に立ってやってきた人たちです。

さて、ではSAとはいったいどんな抄録なのでしょう。これは、Ann Intern Medの編集者EJ Huthと、Clinical Epidemiologyの著者でもあるカナダのMcMaster大学のRB Hynesと

の雑談中に思い付かれたもので（これ以前にも、このアイデアは提唱されていたのですが）、その後2年程かけて、Ad Hoc Working Group for Clinical Appraisal of Medical Literatureによって作成されたものです¹⁾。特徴としては、先ず、臨床論文を対象としている事です。つまり、とりあえずは、症例報告の方が定型化しやすい、という事でしょうか。次に、抄録のスタイルを見出し付の7項目にまとめ、項目によっては、使用する用語まで統一しようとしている点です。こうする事によって、臨床研究者が、より早く研究上応用可能な論文を選ぶ事ができる、コンピュータ検索がより正確になる、出版前のpeer reviewを容易にする、などの利点があるとWorking Groupは述べています。反対に欠点としては、抄録がどうしても長くなってしまう、という点があげられています。

具体的にSAの中身のみてみましょう。例をあげておきましたので、そちらを参考にしてください。全体は7項目からなっています。

- 1.Objective : 論文で述べられる問題点
- 2.Design : double blind testなどの研究の形式（統一用語を用いる）
- 3.Setting : 臨床の行われた環境や状態
- 4.Patients or Participants : 患者や参加者の人数及び選定方法
- 5.Interventions : 治療法など
- 6.Measurement & Results : 方法と主な結果
- 7.Conclusions : 直接臨床に応用できる主な結論

これに8番目としてoutcome measures or endpoint を入れた方がよいとする意見もあります²⁾。

SAは、提唱されてから日が浅い事もあり、これを採用しているのはいまの所Ann Intern MedとBr Med Jのみのようです。しかしながら、1988年には同じ様な6項目からなるSAをReview論文にも採用しようという提案がなされています³⁾。抄録界の期待をになつて登場したSAですが、はたして期待どりの活躍をしてくれるのでしょうか。抄録を書く立場に立てば、SAはむしろかしいと思います。広く受け入れられるためには、多くの課題があると思います。編集者の側でSAを作成するといった事も必要かもしれません。しかし、抄録がなんらかの見直しをせまられている事も、また事実です。抄録が変化しようとしているのです。SAの今後に注目したいと思います。

引用文献

- 1)Ad Hoc Working Group for Critical Appraisal of the Medical Literature :
A proposal for more informative abstracts of clinical articles. Ann Intern Med,106(4):598-604,1987.
- 2)Altman DG, Gardner MJ : More informative abstracts. Ann Intern Med,107(5):790-791,1987.
- 3)Mulrow CD et al : A proposal for more informative abstracts of review articles. Ann Intern Med, 108(4):613-615,1988.

図: Structured Abstracts の例 (Ann Intern Med 106(4):600,1987より)

Abstract as Published

Twelve patients with refractory rheumatoid arthritis were treated with weekly pulse methotrexate in a double-blind, placebo-controlled, crossover study. After 13 weeks of therapy, patients receiving methotrexate showed greater improvement, judged by degree of joint swelling and tenderness, duration of morning stiffness, and subjective assessments of clinical condition, compared with those receiving placebo ($p \leq 0.002$). This improvement was associated with a decrease in sedimentation rate and decreases in levels of IgG, IgM, and IgA; no changes were seen in serum rheumatoid factor titer or complement protein levels. Proportions of mononuclear cell subsets that were abnormal before treatment (decreased percentage of total T cells, increased percentage of monocytes) improved toward normal after therapy with methotrexate. However, no changes were seen in elevated pretreatment Leu-3/Leu-2 ratios, in in-vitro proliferative responses of lymphocytes to mitogens, or in immunoglobulin secretory responses to pokeweed mitogen. Weekly pulse methotrexate is effective in the short-term treatment of refractory rheumatoid arthritis. Little evidence for cellular immune suppression was associated with this clinical benefit.

Structured Abstract

Study Objective: To determine the efficacy of weekly pulse methotrexate in refractory rheumatoid arthritis.

Design: Randomized, double-blind, placebo-controlled, crossover trial with 13-week treatment periods.

Setting: Referral-based rheumatology clinics at two army medical centers.

Patients: Sequential sample of 15 patients with active definite or classical rheumatoid arthritis and previous treatment failure. Twelve patients (80%) completed the study; 1 patient removed because of drug toxicity (pancytopenia).

Interventions: Nonsteroidal anti-inflammatory drugs and prednisone were continued. Methotrexate 5 mg intramuscular test dose was given at week 1, increased in 5-mg steps to a maximum of 25 mg/wk if clinically needed. Intramuscular saline placebo given in control periods.

Measurements and Main Results: The following results (statistically significant findings, $p < 0.05$) were in favor of methotrexate compared with placebo: number of swollen joints 6.9 (5.2, SD) with methotrexate and 19.4 (12.1) with placebo; number of tender joints 12.6 (14.2) and 26.2 (17.0); minutes of morning stiffness 78 (117.8) and 242 (131.6); joint pain (scale 0-10) 1.1 (2.1) and 4.8 (3.1); 50-foot walk (seconds) 16.1 (10.0) and 23.1 (16.3). Laboratory tests showing differences ($p < 0.05$) favoring methotrexate included erythrocyte sedimentation rate and IgG. Other tests of physical and laboratory function, including immunologic tests, did not show important differences.

Conclusions: Weekly pulse methotrexate results in improvement of multiple measures of disease activity in refractory rheumatoid arthritis. The mechanism of methotrexate action is uncertain with little evidence of short-term cellular immune suppression. Larger and longer trials are needed to assess the safety of methotrexate for refractory rheumatoid arthritis.

自己における【書くこと】の意味

青木 仕

〈図書館との出会い〉

部下中曾根前首相の別荘で知られるようになった日の出町で、農家の次男坊として生まれた私は、自然環境と家庭の雰囲気のためか、のほほんと将来の進む方向など大学生活が終っても自分自身決めかねている状態でした。

就職もままならず学校を終え1年間というものは、畑仕事、山仕事、植木仕事などをしながら毎日を通していました。そんなとき、兄の知人がある私立大学の図書館の副館長をしておられ、その人はだいのテニス好きな方で、学生時代テニスばかりしていた私は、名目は図書館のゼロックス複写係として、真相はその副館長のテニスのパートナーとして大学図書館でアルバイトをするようになりました。アルバイト生活の3カ月間は、テニス三昧で、肉体的にも精神的にも充実した日々でした。

遠くから見る図書館の仕事は、肉体労働と違い休日もたくさんあり、福永武彦・立原正秋などの作家が好きだった自分にとって読書もできる絶好の仕事場になりそうだと軽率に考えてしまいました。

その後、副館長の紹介で縁あって順天堂大学の図書館に正式に就職がきまることになりました。そして、毎日の勤務がはじまり業務内容が少しずつ見えてくるに従い、図書館業務の奥深さと医学用語の修得や日進月歩と変化、進歩していく図書館界にただただ戸惑う毎日でした。

〈書くことの必要性〉

図書館学のハンドブックのなかで書くことは、経験主義をこえ問題解決にとって重要であると述べられています。私がはじめて研究らしき論文をまとめたのは、今から10年前、慈恵会医科大学で開催された第14回医学図書館員研究集会の論文集への発表でした。その当時は、多くの医学図書館にJOISが導入されてまもない頃でした。そこで、Key Wordの選定が難しいのではないかと考えられる症候群に対して、どのようなKey Wordが付与されているかについての調査を思い立ちました。この調査結果は検索式をたてる際に役立つのではないかと考えた訳です。テーマは「Syndrome（症候群）のIndex Medicus・医学中央雑誌・及び・MEDLARS文献検索による分析」というものでした。当時は勤務してまもなく雑誌の受入係を担当しており、機械検索には興味を持っていたのですが、MeSHに関する知識は乏しく、深く理解はしていませんでした。内容は、1977年に発行された、雑誌「日本臨床」の症候群辞典に記載してあるそれぞれの症候群がIndex Medicusや医学中央雑誌にどのような件名のもとに収載されているかというものでした。

書きはじめは、科学論文の文章構成である（はじめに・方法・結果・考察・まとめ）といった基本的な型式も修得していませんでした。データは抽出できたのですが、その結果

をまとめ文章にするという苦勞をその時はじめて知りました。しかし、どうにか先輩方の指導のもと論文としてまがりなりにも、書き上げることができました。

調査は医学分野の代表的な二次資料を用いて、431件の症候群をひくことでした。その結果、司書としてそれぞれの二次資料の詳細な記載内容を理解することと、より早い探索方法を学ぶ機会となりました。症候群は、何々症候群と同名の Descriptor が MeSH に登録されていたものは57件のみであり、数種の Descriptor に分散されていたものは182件にも及ぶ事が判明しました。索引者は文献の付与にあたり、徹底性 (Exhaustivity) “索引作成の主題分析の段階で認識された概念がシステムの索引語へ変換された程度”を深め、より特殊性 (Specificity) “主題に関する特定の用語が索引作成で使用を認められている階層上のレベル”を備えた、具体的に文献の内容を表現する Key Word の選択と付与が要求されると感じました。

また、文献が索引誌に収載されるまでのタイム・ラグについても知ることができました。ワープロがまだまだ普及していなかった当時、自分の文章が活字に印刷され論文集の一編となりその論文を目にしたときは、喜びと同時に気はずかしさを覚えました。生れてはじめて論文を書く事を経験し、自分の考えを自己の言葉で表現することの難しさと、司書としての知識の不足を身にしみて痛感したものでした。

それからは、発行される論文集は全国の医学図書館の仲間達が一生懸命データを取り苦勞して書き上げた賜物と思い、論文集は全て一読しなければ申し訳ないのではないかと感じるようになりました。

データを取り書く辛さは、書き慣れてくるにつれて自分のパターンが形成され楽になると言われていますが、そのような域に達せられることは自分には永遠にあり得ないことだと思います。しかし、研究論文を何編か作成する段階で最近感じる事は、読みやすい文章は簡単なことのようにですが、まず一つのセンテンスをできるだけ短く、同時にセンテンスの中に主語・述語があり平易な文章でだれにでも理解できる文章であることだと思います。

その後免疫学・神経学における引用文献分析や科学コミュニケーションに興味を持ち調査をしました。免疫学の調査では毎日何げなく配架していた雑誌である、ページ色で地味な Journal of Experimental Medicine と Journal of Immunology がこんなにも免疫学において重要な雑誌であったのかときずきました。あわせて、科学論文の短い寿命や、研究者の調査では、ゲートキーパーと研究者間のネットワークの存在を確認することができました。

Price は、現代科学のビッグ・サイエンス化と専門分化にともない、個人研究は今日不可能になってきていると述べています。調査では、近年に従い単独著者論文から共著論文へと変化し、そのうえ共著論文は年々共著者数を増加している様子をデータから明確に実証できました。また、日本人研究者の場合は海外留学者が活発な研究活動と質の高い独創的な論文を生産していることに驚きました。

神経科学分野の雑誌は、2-Step Model を用いて分析すると Brain Research が核となり、Neurology と Archives of Neurology、Journal of Comparative Neurology が Core な雑誌として抽出されました。日本人雑誌文献の国内機関別生産状況は、免疫学と同様に旧七帝大の高い生産性が今日も続いている状況が確認されました。

するとこれらの調査結果は、意外にも図書館の関係者よりもその学問分野の専門家に反響があり、日本神経科学協会ニュースにも紹介していただきました。このような嬉しい反響は、苦しみながらも書いた結果を評価していただけたことで、自分の研究活動に対してのエネルギー源のひとつにもなりました。図書館員の手法で医学界をデータとして提示していくことで、このような方法でも利用者である研究者（医師）の世界の分析ができたとその時感じました。

また、AIDS、ホスピス、バイオエシックスと今日の医学界で話題となっているテーマについて情報学の立場から関心を持ち、ビブリオメトリックスの手法でアプローチしていくように関心が移っていきました。

AIDSの調査では、発原因子であるレトロウイルスの発見と共に5年の間で (Homo-sexuality) (Sarcoma, Kaposi) (Immunologic Deficiency Syndromes) から (Acquired Immunodeficiency Syndrome) へと、その後 (Human T-Cell Leukemia Virus) に MeSHの Descriptor が目まぐるしく変遷していく様子が伺えました。AIDSウイルスの発見を巡っては、NIHのGallo博士とパスツール研究所のMontagnie博士の間で生々しく争われた先取権に関する問題。それは、研究者間の先陣争いからアメリカとフランスの国家間の科学研究の威信をかけた競争でもあったと思われました。AIDSを最初に報告した雑誌はMMWR (Morbidity and Mortality Weekly Report) であり、Lancet、N Engl J Med、Ann Intern Med、JAMA といった総合医学誌からウイルスの解明と共に免疫学、ウイルス学、血液学などを始め広範囲にそれぞれの専門誌へと掲載誌が変容すると推察されました。

我が国は、今日経済的には豊かな国へと発展し成長をとげましたが、医療に対しての国民の意識は、質や価値観が重要な関心事になってきています。その結果、Cure (治療) から死を前にした末期患者のCare (看護) が注目され始めてきたと言えます。患者、家族の身になっての医療行為が求められる時代が到来し、これらのニーズに答える援助 (看護) が、今後一層重要視されるだろうという知見をホスピスの調査研究から得ることができました。

バイオエシックスの研究対象の領域は、1. 出生に関する生物・医学的研究 2. 人間の死に関する問題 3. 人間生命の質の向上に関する領域と大きく3つに分類されます。これらの領域にわたる生命倫理に関する問題は、我が国の高度医療化の現実と共に我々ひとりひとりに対して一層身近に答えを問われる問題だと思いました。

以上僅かの研究調査ですが時間を費やして収集したデータは、全てが貴重で捨てがたく、それらのなかから取捨選択し価値ある数値のみを抽出してスマートに書き上げることは今後の課題と考えています。また、調査結果を数理統計学的立場からデータの処理を行ない、より自然科学的な研究調査を試みたいともおもっております。

調査研究によって、論文を書き始めた頃感じた司書としての知識の乏しさを補う上で書くことは、文献にあたる機会をいやがうえにも増加させ自分自身の向上に役立っていると思えます。司書としての医学情報に対する内容の深まりと医学の動向に注目し、その動向を把握する力が少し増したように思います。

書いたものによって思いもかけない新たな人との出会いやコミュニケーションが生まれ、それは私にとっての大きな財産にもなっています。

書くことは、私にとって日常業務のマンネリ化を防ぎ、自己の知的欲望の充足、つまり自己実現の手段だと考えます。専門職としてのアイデンティティを確立していくうえで書くことは、不可欠な条件といえるような気がします。従って、書くと言う行為は、自己の生涯教育の継続を計るひとつの有効な方法であるとも信じています。

現代は情報の世の中だといいますが、ホットな情報を扱う図書館、なかでも活動が最も活発で変化の激しい医学図書館に勤務していることの喜びを最近感じ始めたところです。

<カードの利用>

引用文献分析においては、いままで原始的な方法ですがカードに書誌事項を貼り基本データを作成してきました。カードによるデータ作成の長所は、書誌事項がまとめて記載されてある場合は、それを切り張りすることで意外に簡単に作成できることです。そして、初期に設定した調査対象事項より調査を進めていく段階で新たに発生してきた調査項目についても思うように書込追加ができることです。短所は並べ換えや集計に時間を要すること、データが1万件以上にもなると保管にかなりのスペースが必要になってくる事です。カードによるデータ作成は長所短所がありますが今後工夫していきたいと考えております。また、私の場合は、情報の収集にもカードファイルを利用して管理しています。しかし、研究をまとめる段階になると、文献内容を詳細に記入しておいても、結局は常に原著文献に当たる事になってしまいます。しかし、いずれかの方法を各自が工夫し、集めた情報を整理し、いつでも利用できるよう準備しておくことが必要だと思えます。最後に私が利用している縦13cm・横18cmのアナリストカードという市販カードの1例をここに紹介しておきます。

件名	分類コード
標 題 日本における図書館・情報学研究の特徴 一 論文の研究手法、研究内容分析をもとにして	
著 者 者 山 中 忠	
資 料 名 Library and Information Science 巻 24号 pp 31-44	1986年 月 日
場 所	発行機関
取材データ 年 月 日	図版 表 写真 統計 データ スクラップ
(抄 録)	
1 調査研究法の年次変化 計量的手法、事例報告が多くなってきている。論述は減少。	
2 研究テーマ 多様化している。情報ヒュー・情報流通との間の記事の移動がみられる。	
3 館 種 大学図書館に関するものが最も多い。学校図書館件数が減少傾向	
4 著者の所属 大学図書館員が最も多数 (しかし教員も増加傾向を示している)	
5 共著者数 複数の著者による論文数の増加とその人数の増加が明らかに	
6 みられる。	
7 全体の傾向として論文自体が次第に研究論文指向になっている。	
(参考文献)	

アナリストカード 403

青春彷徨 芝居入門

板橋 瑞夫

「劇場」 昭和21年 東京生まれ。「劇評」 昭和25年 東京生まれ。「幕間」 昭和21年 京都生まれ。「演劇グラフ」 昭和27年 東京生まれ。いずれも戦後の誕生で、そして今は、もう散ってしまった演劇雑誌である。職業柄、医学関連雑誌については、いくつかの総合目録の編集に携わっていたので、その氏素性、生まれも育ちも縁組も、現物なり、コピーなりを、それこそ矯めつ眇めつ舐めるように調査、解明をしてきた。即ち医学雑誌総合目録 外国雑誌編 第7版の収録誌数は、16,215誌、同 和文編 第6版は5,003誌、併せて20,000余誌には、何らかの接触・付き合いがあったわけである。今回は、商売を離れ、細やかながらわが書架のうちから、演劇雑誌や筋書等々を取り上げてみる。

「劇場」創刊は、昭和21年1月、表紙(図1)に「桜の園」廻り舞台図、表紙のうらに発足の言葉がある。「終戦と共に百代和平の大道拓かれ、わが国運の恢興一に赫耀たる文化建設に俟つのみとなり、演劇部門が有力なる支柱として負荷する使命は、寔に重且大を加へるに到りました。而してこの再発足に際会して、わが劇壇はその宿弊たる独善固陋を排し、よく採長除短の態度に学び、以て当来の大成を期すべきだと信じます。・・・略・・・」 発起人 連名。

目次 夢の設計 土方與志 アメリカ演劇の性格 菅原卓 京洛芝居ばなし (1) 三宅周太郎 「劇場」座談録 第1回 特輯 歌舞伎の新課題 歌舞伎劇の決意 守隨憲治 最後の歌舞伎危機 楠山正雄 歌舞伎の継承者養成河竹繁俊ほか 発行 演劇文化社 定価 1円50銭 32頁

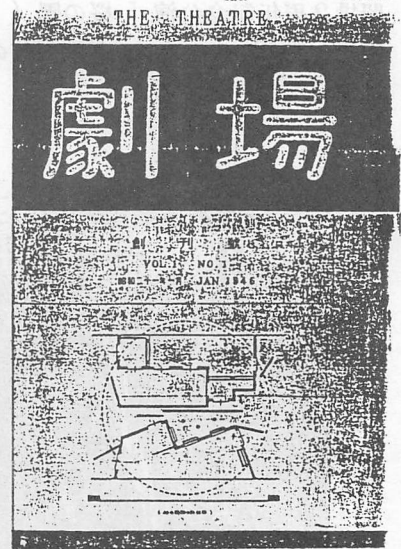


図1

「劇評」第2号 昭和25年5月10日発行 歌舞伎堂 第一書店 定価 10円 8頁 表紙は、實川延若舞台写真 内容 東京劇場評 戸板康二 新橋演舞場評 大江良太郎 海老蔵聞書 連載第1回 仁村美津夫ほか。東劇幕見時間表というのがあって、狂言名と上演時間が掲載されている。一幕各30円とある。現在幕見は歌舞伎座でしか出来ないが、上演時間表が「ぴあ」とかに掲載されているのかどうか。

「幕間」 京都の和敬書店発行 手元にあるのは、3巻6号(昭和23年6月)である。当月の舞台写真が8頁 鶴沢清八対談 播磨屋を語る(座談会) 三都五座の劇評新連載と

して、自伝中村吉右衛門ほかで32頁。興行月報として、各劇場の演目、配役、上演、時間、入場料が掲載されている。

「演劇グラフ」創刊は、昭和27年11月1日、創刊の辞に代えて、編集室からの欄「新しい演劇雑誌が生まれました。・・・演劇グラフとはいっても、従来の演劇という文字や観念にこだわらず、オール・ステージで行く方針です。従って能もあれば歌舞伎、新派、新劇、軽演劇、レビュー、音楽、バレエ、オペラ、寄席、民族芸能等、芸の要素あるもの一切を扱うつもりです。そのため、芸のスタイルブックの観をまぬがれぬ点があると思いますが、徐々に是正しながら、新しい演劇ジャーナリズムを作り上げて行きたいと思いません。」発行 アルス 定価 170円 96頁

平成元年4月9日、歌舞伎座へ、4月14日、銀座セゾン劇場へ、歌舞伎と新劇を観た。歌舞伎座の筋書は、表紙(図2) 四月大歌舞伎 十七世中村勘三郎一周忌追善。裏表紙(図3) 歌舞伎座 89-4。銀座セゾン劇場のプログラムは、表紙(図5) 銀座セゾン劇場開場2周年記念公演「桜の園(The Cherrey Orchard)」 原作 アントン・チェーホフ 演出 ピーター・ブルック 歌舞伎の方は、劇場名を誌名、上演年月を巻号と見立てる。新劇は演目を標目とする。



図2

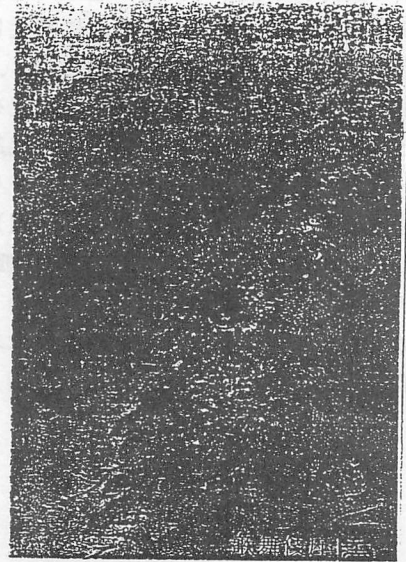


図3

四月大歌舞伎の筋書に戻る。内容は、口絵写真、演目、連名、各演目の解説と見どころ、あらすじ、配役、そして関連する随筆など。昼の部を観たが、第一 菅原傳授手習鑑 寺子屋 一幕 第二 義経千本桜 吉野山 第三 一本刀土俵入 二幕五場である。歌舞伎は、狂言を繰り返し、繰り返し上演する。同じ演目でも役者は変わるし、芸の系統、家系によ

っても変わる。演出と言うより、役者本位と言える。この筋書のなかに、戸板康二の随筆があるが、「九代目團十郎の松王丸は、七代目の型で、首実検の所で刀をぬいた。昔の雑誌に、その刀ぬきの型が出ている。七代目幸四郎が一度した。」と。例えばこのようなことなのである。学生時代に外題別の索引を作った。それは、菅原傳授手習鑑 四段目 寺子屋の項をみると、東劇 昭22-5 (図4) とある。

次に劇場別に分類した筋書の東劇 昭 22-5 をみる。東劇 五月團菊祭興行とある。第2部、第三、寺子屋が見つかる。この興行は、通し狂言で、菅原傳授第1、第2部に分けて、上演されている。この筋書は、表紙ぐるみで8頁、総配役と全5段を場割りにして、ものがたりと称してのせている。この時の松王丸は、菊五郎、武部源蔵は、吉右衛門とある。4月の歌舞伎座は、片岡孝夫と中村吉右衛門であるが、この吉右衛門は二代目、古い方は初代で、事實は、孫と祖父の関係になる。また、岡鬼太郎著「歌舞伎と音楽」は昭和18年、三田文学出版部発行であるが、これは昭和4年から6年に到る歌舞伎芝居見物記即ち都下各座のその年間の劇評集である。これらもまた筋書同様に索引を作って楽しんだものである。

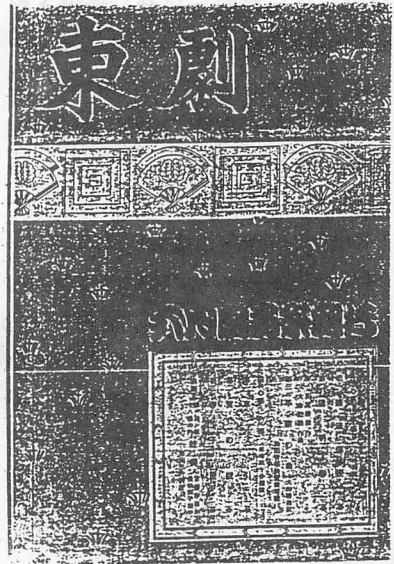


図4

新劇の場合は、前述したプログラムでもわかるように演出が重視される。いくつかの「桜の園」のプログラムを探ってみる。

- ・俳優座 日曜劇場 7 1960年2月-4月の各日曜に上演 湯浅芳子訳 演出 千田是也 梗概のほか、「桜の園」随想 千田是也
- ・劇団四季創立25周年記念公演 日本ゼネラルアーツ 劇団四季提携 「桜の園」 アンTON・チェーホフ作 The Cherry Orchard 四幕のコメディ 訳 倉橋健 演出 アンドレイ・シェルバン 1978年7月8日~31日 日生劇場 スタッフ、キャスト、ものがたりのほか、彼 アンドレイ・シェルバンの目指すもの、鼎談「桜の園」をめぐる アンドレイ・シェルバン 藤野節子 日下武史ほか
- ・劇団俳優座公演 No.150 東山千栄子追悼公演 チェーホフ作 湯浅芳子訳 千田是也演出 1981年5月8日~31日 俳優座劇場 スタッフ、キャスト、あらすじのほか、「桜の園」をめぐる 対談 千田是也 佐藤恭子
- ・銀座セゾン劇場のプログラムは、物語、スタッフ、キャストと各々のプロフィール、Special Interview としてピーター・ブルックに聞くほかが掲載されている。

これらのプログラムの紹介でわかるように、歌舞伎で言う、解説あるいはみどころではなく、必ず演出家が語っている頁がある。演出家によって全く芝居が変わってしまうのである。これまでの「桜の園」は、即ち俳優座での場合には東山千栄子追悼と言われたよう

に、ラネーフスカヤを昭和2年以來演じてきた彼女の雰囲気そのままこの芝居を表現してきた。そういう意味では、非常に歌舞伎的であったと思う。今回のピーター・ブルックは、舞台装置は何もない空間からすべてを始めるという方針。従ってこの「桜の園」は、カーペットと家具などが最小限置かれているに過ぎない舞台で、四幕が休憩時間なしに上演された。「演劇の普遍的な伝統とは、俳優がいて観客がいることだけです。一番必要なのは俳優と観客との強い接触であり、出会いの空間である」と。

新劇の場合は、劇場別分類でなく、演目別分類が役に立つ。

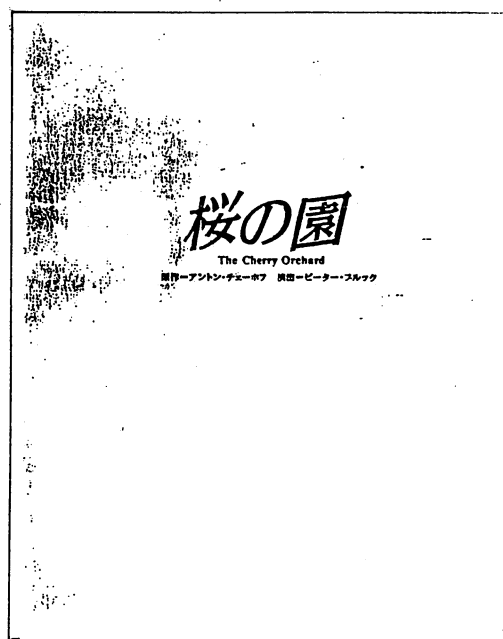


図5

コラム

塾とのかかわり方について

山崎塾への思い入れ

阿部 信一

「学術雑誌塾」なるものの存在を知らされたのは、いつのことだったかはつきり覚えていません。ただ、初めてミーティングに参加したときのことは、今でもはつきり覚えています。☆会場は確か東邦大学で、山崎さんと遅れてしまい（その頃から遅れて行っていたんですね）、終了後の懇親会に参加したように思います。東邦のラウンジで食べたのはあれが一回こっきりですね。そのあと、蒲田のコーヒー屋さんに行き、おもむろに抄訳などの検討会に突入しまして、さすがだなあ、すごいなあといきなり感動した記憶が残っています。☆その時参加していた方は、今思えば本当に草創期の方で、たまたまカメラを持っていて、写真を撮ったのですが、大切な思い出となっています。今ではとても親しくしていただいて、気軽に話していますが（礼儀知らずのきらいもありますが）、その頃はなんだか怒られそうで、変なことはいえないなど、いい意味で緊張感に満ちていました。☆塾が、他の研究会などとは一線を画している点というのは、いうまでもなく「塾」という名称にあるでしょう。これについては、賛否両論あるでしょうが、小生が個人的に好きな人物に、高杉晋作がいます。彼は、松下村塾で吉田松陰に学び、幕末維新において異彩を放った人物ですが、学習塾というものについての小生には、塾というのは松下村塾のように、研究の姿勢というか、生き方を学ぶところというイメージがあるのです。☆そんなこんなで、塾にはもうかれこれ2年近く参加させていただいていますが、その間、山崎塾長をはじめその他の塾生の方々に多大な影響を受けてきたなというのが実感です。参加する毎に受ける刺激や新しい知識の積み重ね（こぼれ落ちていく知識をさえ凌駕して）の上に、今の自分があることをしみじみ思い、感謝しています。☆最近の塾は人数も30人近くになり、雰囲気も少しずつ変わってきたかなとも思いますが、それはそれで、そのときどきにあった運営をしていけばいいのですから、特別文句があるわけではありません。ただ、はじめて仲間に入れてもらったときに感じた、あのときめきと緊張感ががたいまぜになったようなものを自分の中で失わずにいきたいなと思っています。

塾と私 — フットワークよりネットワーク！ —

雨宮 正恵

利用者が図書館に求める姿は千差万別であるから、図書館もまたフレキシブルなほうがよい。ある人には資料のデパートであったり、スーパーマーケットのように気楽なものかも知れない。とすれば、対応する司書も専門知識は必須として、千差万別、多種多様、百花繚乱でよいのでは？と思う今日この頃、学術雑誌塾で多くの多才な同業者にあつて、ますますその思いを強くしている。

私個人がカウンターというサービス部門にいて提供したいのは、図書館の起動力である。なかなか見つからない文献や、絶版の図書を図書館のネットワークで探し出して提供する。塾で広がったネットワークは強力で頼もしい。まさに、“フットワークよりネットワーク、コレクションよりコネクション” だなあとしみじみ思う。

そもそも山崎塾長の人柄に魅かれて参加したものの、なかなか自力で勉強する癖がつかないのは、半ば諦めの境地である。その分、人生経験を積めば仕事にも反映してよい仕事ができるだろうと塾の皆と遊びに出かけることにする。

(それにしても“よい仕事”とは漠然とした言葉だ！ 相対的なものをいうのか、それとも総合的な結果を指すのだろうか？)

皆の足を引っ張りつつも、それでも塾に行こうと思わせるのは、やはり塾長の魅力と、経歴・趣味・性格のいずれも多才な皆に会って、刺激を受けたいからなのだ。塾を通じて塾生以外の多くの方と知り合い、また、仕事上の目標とする方ができたのは大きな収穫である。そうして今日も学生に“雨宮さんは一生ここに座ってるの？”と言われつつ、一生の仕事としてそれも悪くはないなと思うのだ。

塾と私

安藤 越代

毎日、定時に起床、家を出て、同じ時間に同じ場所から、同じ電車、それも前から2両目1番前よりのドアに乗り、タイムカードを押す。図書室を訪れるメンツも、ほとんど同じで、交わす言葉も大した違いはなくて。就業時間が終わると、何かにせきたてられるように着換えをすませ、駅のホームに立つ。さて今日は何をしよう、どこへ行こう。。。

という平凡な生活は、嫌いです。

プライベートな時間は、自分だけでも、他人(ひと)とでも楽しむことができます。けれど、自分が主体となって仕事を有意義なものにする、ということは、ほとんど不可能なことです。そこで、仕事に関わる部分にもうすこし色づけをしたいから、塾に行って、いろいろ新しい世界を教えてください。

正直な話をしますと、受動態ですごしていったなら、と思うこともあります。でも、そんなわがままを言うてはいけません。今のうちに頭を使っておかないと、年をとってからの“痴呆”が心配になってきますから。。。

雑誌塾と私

江口 敏一

私が初めて塾の人たちと会ったのは1年前の冬合宿のことでした。同じような年代の人たちの集まっている勉強会があるよと誘われ、浜松くんだりからノコノコと合宿の行われる自治医科大学までやってきました。塾の皆さんがとても熱心に参加しておられ、半ば遊び気分で参加していた私にはショックでした。毎日ただ仕事をしているだけでなく、勉強も必要であることをあらためて再認識しました。幸いにもこの雑誌塾に仲間入りをさせてもらったのが半年前の去年の夏合宿のときでした。そのときから現在までの雑誌塾における活動にはグループ研究を通して参加しています。月例の塾の集会には2カ月に1回の割合で出席しております。私の性格としては、みんなで勉強するというよりは一人で気ままにす

るほうが性にあってるようです。しかし、一人ですることには限界があります。他の多くの人たちと接することにより、新たな知見や新しい情報を知ることができますし、なによりも刺激を受けることができます。また、人と人のつながり（和、輪）ができることもとても大事なことだと思います。そういう意義を感じ雑誌塾に参加しています。内気で無口で無愛想な私ですが、よろしく...

横浜と稲毛の浜の波間にて、わたしのきもち いったりきたり (Brief Report) 浜田 秀夫

私は書くのは苦手だ。「塾と私」といった散文とも告白記ともつかないことを書くのは特に駄目だ。よって今回は、私がいつも塾で考えていることを2時間という時間を費やして、やっとの思いでBrief Reportというかたちにまとめあげてみた。以下の通りである。

その一 月一回の塾の会合にはほとんど出てきていない。何かいつも他の都合と重なってしまう。参加すること自体がOverworkなのではないか？

その二 本業「メシのタネ」にさしつかえたり、そのことで同僚に迷惑をかけたくない。しかしあくまでも趣味の範囲でやるには並大抵の努力ではダメだ！

その三 たしかにここで友達はできた。だが“のみにけえしょん”だけの塾でいいのか。もっと図書館サービスの根幹にかかわる会話ができればいいのに...

その四 「雑誌とは何か」解明してみたい気持ちはある。そいつを使ってサービスできればとも思う。思うだけでしかし方法と行動がともなっていない。

その五 雑誌の勉強に懂れるだけでちつとも捗っていない。はたして単なる時間の無駄づかいに終わっているだけではないのか？

その六 ことほど左様に、塾や研究グループの仲間に迷惑ばかりかけている。特に幹事さんやグループ・リーダーの人には申し訳ないと痛感している。

恥ずかしくも、僕の塾にたいする考え方や実態が露呈されたことになるが、これを機に反省するため敢えて書かせていただいた。こんな私の気持ちはいつも、いったりきたり。

塾と私とのかかわり方

平石 充

学術雑誌塾ができて4年近くになるが、私が塾の毎月土曜日の集まりに参加していたのは最初の2年ぐらいである。その後は医療情報システム開発センターという、医学図書館とはあまり関係のない財団へ出向中ということもあって、ほとんど集まりには顔を出さず、毎月送ってもらう塾のお知らせに目を通すだけの状態であった。ところが昨年の夏の合宿に久しぶりに塾に顔を出してからは、グループ別の研究にだけではあるが、あらためて塾に参加させてもらうことになった。ただし、実際に雑誌に触れる仕事からしばらく遠ざかっているため、グループ研究の調査をしてもどうもピント外れで、他のメンバーの方々

には迷惑をかけているのではないかと思う。こんな風に細々と塾とのかかわりを続けている私であるが、雑誌をあつかう仕事をもつ同年代の人達と話し合うことのできる場を与え続けてくれる学術雑誌塾に感謝している。

巻き込まれて

平輪 麻里子

入塾のきっかけは大きく3種類に分けられます。まず「勉強したくて」型ですが、これは口をはさむ余地のない入塾の動機です。次に「人恋しくて」型は人と楽しく集いたいという欲求が実を結んだものと思われます。そして「巻き込まれて」型は、別名「誘われて」型とも言え、読んで字の如しです。

塾といえばそろばん塾くらいの経験しかなかった私が、何故“学術雑誌塾”と言ういかにも堅そうなところへ紛れ込んでしまったのでしょうか？上記の型で言えば「巻き込まれて」型になるのでしょうか。ヒッチコック映画においてJ.スチュアートが首相暗殺計画に巻き込まれ、K.グラントが国際スパイ団の陰謀に巻き込まれたように、次元が違いますが、私もいつの間にか塾の中へ潜行してしまったのです。

しかし「いつの間にか」などと、いつまでも受身の状態では話が面白くなりません。映画の中で彼らは思いがけない事件との遭遇に焦燥し、危険に追いかけていたものの最後には決然と陰謀に立ち向かい勝利するのです。塾の中で私は他の塾生と比較して自分の生半可な仕事ぶりを発見して狼狽はするものの、反撃に打ってでるわけでもなく相も変わらずで年月が過ぎただけのようです。

よく言えば現在の私は映画の導入部に位置していると言えるでしょう。2時間でカタをつける映画より私の塾生としての時間はもう少し長いので、これからが反撃の時期ということです（遅ればせながら）。

私は自分の関係する領域以外のものには興味が向かないという人間の習性をより強く持つ傾向があります。ともすれば自分の係の業務のみ機械的にこなす図書館員になってしまいそうです。塾でのグループ研究や、様々な集会への参加、それに伴う人とのコミュニケーションはそんな私にとって貴重な刺激となっています。

学術雑誌塾というのは、とかく甘い生活に向かいがちな私に時々待ったをかける、ありがたい存在なのです。

延べ22人のゲスト

廣田 住友

現在までに月1回の塾で、延べ22人のゲストがあった。延べでは22人であるが、17名の方に参加してもらっている。そして、その時、その方々からいろいろなお話を伺った。その中でも私が興味を持った話は、過去の医学図書館に関連した話であった。

後藤氏の「MeSH」

野添氏の「MEDLINE」

板橋氏の「1960年代の日本の医学図書館」

山口氏の「IMの歴史」

青木氏の「自分の発表史」

が、印象に残っている。

なぜ、印象に残っているのかと考えると、上記5氏の方の話は、過去のどんな文献を読むよりも、その当時の雰囲気を感じとることができた。

日常業務には、常に過去というものがある。しかし、それを、遡るのは大変である。過去を体験談によって知ることができたのが、上記5氏の方の話であった。

よって、私は月1回の塾では、塾生同士のコミュニケーションも大切であると思っているが、塾に出席される諸先人方、並びに塾長より、過去の医学図書館をとりまいていた状況を知る体験ができることはすばらしいことであると思っている。学術雑誌塾をそのような場ともしていきたい。

「日本の総合医学雑誌の分析」のこと

井上 三郎

一昨年、我が国の学術雑誌の調査をおこない、川崎医科大での第4回図書館情報サービス研究大会で発表した。内容は、アメリカの代表的総合医学雑誌を基準として、我が国の医学雑誌を総合性という観点から分析したものである。この調査の出発点は、我が国には何故New England Journal of Medicineのような優れた総合医学雑誌がないのかという疑問であった。発表は調査の出発点を明らかにできた程度に過ぎなかったが、それでも、この共同研究が私にもたらしたものは大きかったように思う。

当時、私の問題意識は稀薄で、学術雑誌についての知識もほとんどなかった。だから、山崎塾長には、問題の所在から対象と方法にいたるまで実に多くの助言をいただいた。我が国の医学雑誌の総合性を検討する上で、何故「広島医学」や「日本内科学会雑誌」を採り上げるのかということさえ私にはよく理解できなかったのである。与えられた課題をどれだけ自分の課題とすることができるかということが、つまり勉強であった。

JAMAの編集方針を知ることは、学術雑誌についての知識を得るにとどまらなかった。それは、アメリカ医師会の活動に触れることであり、私が勤務する日本医師会の活動を客観的に捉えることの端緒ともなった。何をなすべきかが明瞭でなかった私にとっては、調査から副次的にもたらされたものが大きかったように思う。図書室の将来を具体的に思い描こうとする時、アメリカ医師会の活動や歴史は尽きぬ興味の対象となって持続しているからである。学術雑誌塾の活動を自分にとって発見の多いものにするか、そうでないものにするかは、本人の主体性によるのであろう。

生産と消費

神場 清治

『言葉を紡ぐ蚕』になるのが塾生。なりたいけれどなかなかできないのが私。蚕になるために与えられた一つの間が塾であり、言葉と自分との関わりを見直す一つの間が塾であると言えると思う。

印象に残っている塾長の言葉の中に、『生産と消費』というなかなかこたえる言葉がある。「文章や口頭で発表することが『生産』であり、読んだり聞いたりすることは『消費』である。私たちは、消費したら必ず生産しなければならない。」というものである。そう

言われれば、いままで自分の好きなことという条件付きではあるが、(日本語の)消費はそこそこしてきたように思う。一方、生産の方となるとまったくしていない。言葉の生産者すなわち『言葉を紡ぐ蚕』のことを考えるようになったことは、私にとって大きな収穫である(まだ糸を紡いではいないけれど)。

とは言っても生産者になることは、なかなかシンドイことではあるわけで、もう一つ言葉が私を励ましてくれる。「勉強することは決して構えることではない。日常の、言ってみれば食事をしたりテレビを見たりすることと同じである。」これで肩に力を入れずに蚕になれるというものである。

『塾長の言葉』と『塾生との交流』これを励みに言葉を紡ぐ蚕になるための努力をしようと思うのだけれど、困ったことに、狸狐庵先生の紹介していたトルコの諺をついつい思いだしてしまうのである。『明日できることを今日するな。』

図書館への未練

門屋 由美

私にとっては、塾=図書館との関わりである。子供の頃から本を読むのが好きだった。小学生になって、本の宝庫である図書館を知った。友達が校庭で遊んでいる時も、私は図書館で過した。だから、校舎を追い出されて運動を強いられるのにはとても反発を感じていた。高学年になると、図書委員になりたいと思った。目立たなかった私は、委員に立候補もせず、選ばれる筈もなかった。

中学校の図書館は、二つの校舎の間にぼてんと建っていた。つまり、校舎とは別棟で、古めかしい平屋だった。歩く度に窓ガラスまでが震えた。高校の図書館も、敷地のスミに同じような風情で建っていた。天井が高くて、冬になると寒くて仕様がなかったけれども、その空間はとても居心地がよかった。いまにして思えば、私にとっては現実から逃避できる場所だったのかもしれない。

高校2年になって進学希望の大学を決定する段になって、図書館情報大学を見つけた。司書という専門職になれば、図書館で働き続けられると思い込み、親を説得して受験した。本当に運が良かっただけで合格し、入学できたがなぜか真剣に勉強する気にはなれなかった。担当教授には、「これ程案をして卒業した人はいない。」と言われた程だった。

今の会社に就職したのは、図書館の司書になる気は失せていたものの、やはり本に関係のあるところに身をおきたいという未練があったからだ。私が塾に入った理由は、図書館と少しでも運がっていたいからだと思う。

私と塾のかかわり合い

川村 順子

私と塾との出会いは、某研究会発表大会中であつた。まだ、初夏というのにまるで夏の盛りを思わせる暑い暑い日であつた。当時の私は、念願の図書館業務に就きながら、講義で学んだ理想の図書館像と現実のギャップに幻滅を感じていた。規模、予算、利用者などなど一図書館員の力ではなんともしがたいものの中で、じたばたともがいていたのだった。自分一人で何ができるだろうと思ひながら、世の中の小さい小さい存在でしかない自分が惨めであり、それでも自分の力というものを信じたいと思つていた。私というものがこの

職場にいる存在価値が欲しかった。毎日が鉛のように重い日々であった。

塾への参加は、私には大変思いきった行動のように思われた。しかし、塾員の人々は新参者にも優しく、また皆精気に溢れていた。その和気あいあいとしたムードこそは私の求めて止まなかったものであり、年齢が近いことも私をくつろがせてくれた。

とかく、図書館員というのは暗いイメージ、大人しいと見られがちである。しかし、この塾においては、そうしたイメージとは無縁のはつらつとした明るさがあり、私はそうしたものにひどく魅かれてこの塾にやって来る。そして特に重要なのは、同世代の人間とがやがやとやることなのである。

集うことは大切である。それは年齢、仕事などに関係はない。しかし時には共感できる人々と自分の感じたことを話し合うことが必要だと思う。そしてまた、まったく異なる人の意見も聞いていくことである。初めから、異なる人の意見だけを聞いてはいただけないと思う。そして、遊ぶことも大切である。集中した後は、やはり気楽に息抜きが出来る、そんな楽しい場なのである。

塾と私との関わり

木下 真由美

三鷹の杏林大学医学部図書館でカウンター及び文献調査を担当して4年になります。私が塾に入ったのは2年前の9月、その前の月に開催された医学図書館員研究集会に実行委員として参加した私を、参加者であった塾のメンバーが一度塾にきてみませんか、と声を掛けてくれたのがきっかけです。

塾に参加してよかったと思う点がいくつかあります。最大の利点は「同じ仕事の世界で同世代の友人ができる」ということ。学生時代の友人や学園内の友人とはまた別の意味で通じあえるし、塾内で同じ目標に向かって勉強することで共通の充実感が生まれます。自己の向上という点では、なかば強制的に勉強させられること。論文、発表、グループ研究など、それぞれの勉強に細かい期限が定められているので、その期限を一つ一つクリアしていくといつものまにか何かしら作りだしていますし、英文抄訳など自分一人では決してやらない類の勉強も、塾に出席すれば提出しないと肩身が狭いのでやらざるを得ません。日常業務の質の向上という点では、他の図書館と横のつながりができてレファレンスや相互貸借業務が円滑に行えるようになったこと、専門的な知識が豊富になり視野が広がったことなどがあげられます。

最近の塾で思うのは、かなり大所帯になってきているということ。発足当時とは塾の主旨が変化し、メンバー1人1人の塾に対する考えも異なっているようです。またグループ単位の責任もあり、自分がやらないとグループに迷惑がかかることになります。かくいう私も昨年結婚して生活が変わり、塾への参加が難しくなってグループ研究に支障をきたしています。私としては家、職場、塾、どれも大切なのでなんとか3本柱でやっていきたいのですが・・・。もともと一度に2つ以上のことを考えられない性質なので頭の痛い今日この頃です。

明日は、塾のレポート提出日だ。みんな今ごろやっているんだろうな。いや、誰誰さんはふだんからこつこつ勉強しているから今ごろ必死になってやっているなんてことないだろうな。みんなのこといろいろ考えながら机に向かっている。こういう交わりがなかったら定期的に文献を読みレポートを作成することもないだろう。

最初5人で始まった塾も今は20人以上。月1回そろそろ集まる。パッと見ただけでは何の集まりかわからない。映画の好きな人、芝居の好きな人、テニスの好きな人、お酒の好きな人・・・独特な人がたくさんいる。でも時間がくると担当者が発表する。同じテーマについてみんなで話し合い考えあう。いろいろな考え方や知識が習得できる。各図書館の業務について雑談が始まる。「あの図書館ではそのような方法でやっているのか。」などと参考になることがたくさんある。このような交わり、これからも続けていきたいと思えます。よろしくお願ひします。

塾と生涯教育・人のネットワーク

熊谷 智恵子

社会のあちこちの分野で生涯教育について語られるようになってから久しいが、まだ医学図書館協会として生涯教育をどうするかが決まったとは聞いていない。当図書室（連合会中央図書室）のように小さな職場（司書2人）では職場として独自に内部研修－職場教育に取り組むことは時間内にはむずかしい。それでも臨床医や基礎医・研修医がひと通りそろった（ベット数約900・常勤医師約200人・非常勤医師100人）病院として医療の最先端を担う当病院や、全国にある連合会の35病院の情報センターの役割を求められていることから職員の教育・研修は必要なものとする。

職場教育・生涯教育はそれぞれの専門性を維持するために必要であり、とりわけ生涯教育は専門家の専門家として存在たらしめるものでもあり、職場教育が難しいなら非公式研修である時間外の研修として必要であろう。

私の場合は、3年前の4月に有資格者ということで職場内の移動で図書室勤務となり、初めは夢中で言われた通りのことをしていたが半年もたつと自分のやっている仕事に間違いは無いだろうか、同じ仕事をしている他の人はどうしているのだろうかと思ひ、それがきっかけとなり塾に入ったところ、まさにそこは自己研磨の場所で共同研究や個人研究の発表、研修としての情報関係施設の見学など、職場教育・自己教育を補い代行出来る場所であった。そうした共同研究・研修・あるいは発表の場としての合宿などを通して図書館の仕事を中心とした人のネットワークが作られており、私もどれだけこのネットワークに助けられたか知れない。図書館活動に図書館のネットワークが不可欠なように、私たちが仕事をする上でもこのネットワークは重要であろう。

私と塾

黒川 玲子

最初「塾」という言葉から一方的なお教を乞うような意味合いを連想し、塾長から「自分で学んで行かなければならない」と言われ、ハッとさせられました。

図書館員の継続教育の必要性は皆が感じていることながら、未だ系統立ったものはありません。まして「医学」という狭い分野に位置する私たちは、覚えなくてはならないことはたくさんありすぎて、視野が狭くなってしまわないかということも懸念されました。そんな時この塾の存在を知り、男性4人で厳しく(?)学んでいるところに入れさせていただいてもう4年になります。

恥ずかしながら、(やはり政治家のようにこの言葉を使うのはもっと恥ずかしいのですが)、4年もいた成果というのはお話しできるようなものではありません。けれど科学者がインフォーマルなコミュニケーションからより鮮度の高い情報を得て、それを研究の糸口としているように、私たちも塾長や他の仲間との雑談などから、現在の暗中模索を抜けられるのではないかと考えています。そのためには日頃の勉強が大切です、フレキシブルな脳ミソでいたいと思います。

実際塾は私の清涼剤ですし、得るものもたくさんあります。今のところ図書館のサービスの中心である「学術雑誌」について、その内容や評価、成立ち方などもっと知らなければならぬことは沢山あると感じています。

忘年会から

真下 美津子

1986年12月20日、これが塾と私との出会いの日です。

同じ職場の人に誘われるままに、なんの予備知識もなく、ぽつと入り込んだ東邦大学の会議室。熱のこもった勉強会の後は、季節柄、忘年会。

勉強会のたいへんさは、すっかり忘れ、飲んで食べておしゃべりした事だけしか憶えていなくて、「来月もこよっと！」安易に思ってしまった私です。(そういえば、その部屋のちゃんこを食べたという理由から、自分の入る相撲部屋を決めたという横綱がいましたっけ……)

そんなふうが始まった私と塾のつきあいも早いもので、2年になります。ただ月日だけは、連綿と続いています。そのつながりの中で、一体自分は何をしてきたかと思うと、惜げなくなります。確かに、日常業務だけをこなして、毎日毎日、可もなく不可もなく過ごしていければ、それはそれでいいのかもしれませんが。

ある日、山崎塾長がこんな事をおっしゃいました。(多少、曲解しているかもしれませんが。)

「僕たちは、いつか終わる者だけど、仕事を遺したい。」

いい音楽や絵や文学作品は、時代を超えて残っていきます。学習も自己表現と考えるなら、なるほど、いいえて妙だと思い、その真摯さには心うたれます。そういいながらも、決して出来のいい塾生ではなく、他の塾生のエネルギーを刺激として、グループ研究等に参加しています。

“遊びは楽しいけど、勉強もしなくっちゃね”

医学情報と私

宮下 美香

大学で3年間図書館情報学なるものを、学んだにもかかわらず、まったくどういうものか

わからなかった私は、なんとか少しでも理解したいと思い、塾に入った。図書館情報学の中でも比較的研究が盛んなのは、医学情報だと思う。私は、自分が少しでも医学に関わるとは夢にも思わなかった。何故なら、私は、血を見るのが恐くて仕方がない人間だからである。だから、看護婦という職業の人など尊敬のまなざしで見てしまう。医者はもちろんだが、医者はその分、地位と金を得ているのでそれほど偉いとは思わない。医学情報が、重要視される理由の一つに研究者が医者であるので、その情報を得るのに、人を使えるだけの地位と金があるということが言える。また医者は忙しいので自分で情報を求めている時間がない。だからこそ、医学情報を媒介する私たちの仕事が成り立つ。私は、大学時代に医学情報の授業をほとんど受けなかった。医学情報センターに入って、どうせ働くなら、少しでも医学情報の勉強をしたいと思った。が、相変わらずの頭の悪さと勉強不足が重なって、一年半たっても、わからない事ばかりである。塾の他の人達の医学情報に関する知識に感心し、足手まといにだけはならないようにしようとはしているのだが、この分では、医学情報を理解するころには、70歳くらいになっているのではないかと思っている。

まさか就職してからこんなに勉強するとは思わなかった！！

宮内洋一

私がこの健康医学に関わる図書室に就職して感じることは、学生時代よりも現在の方が勉強しているな——と思えることです。入社して1年目なんて、医学の用語、薬学の用語、雑誌の名前や内容等を覚えるだけで精一杯でした。つくづく、大学時代に学んで来たことは、社会に出てから学んでいくための基礎程度のレベルだったのだと感じました。

仕事を進めていくと、どういった雑誌がよい雑誌なのか？どの単行本を研究員に勧めればよいのか？といった疑問が湧いてくると共に、その疑問を解決するための意欲も湧いてきます。

私が学術雑誌塾の皆に出会ったのもそんな時だったと思います。山崎塾長はじめ塾の皆からは、学ぶことがいっぱいありました。学術資料についての研究法とその具体的な進め方、医学図書館の今後の展開（洋の東西を問わず）等、一人やっついては、とても学びきれなかったと思います。実際に資料を収集し、著者分析、内容分析、論文の作成、発表という一連の研究発表の経験は、今後自ら研究発表していく上での大きな礎となりました。また、同じ立場で働く同年代の人たちと交友（交遊？）を深め、一緒に学べたことは、これから図書室の仕事を進めていく上で、そして将来の医学図書館を考えていく上で役立つと期待しています。

生涯教育が巷で叫ばれている今日この頃、学術雑誌塾は私にとって生涯教育の勉学の場所として、少なくない問題意識を投げかけ続けてくれています。

勉強嫌いの塾への参加

大村 伸栄

私が片道1時間以上もかけて（会場によっては2時間近くかかることもあります）塾に参加するようになったのは、思えば、第20回の研究集会（自治医科大学）がきっかけです。この時知り合った人が何人か塾に参加していて、おもしろそうだな、懇親会だけでも参加

させてもらおうと顔を出したのが始まりで（このときは確か1987年12月の忘年会でした。）その後、塾が終わったあとの食事会を楽しみに、ほぼ毎回参加しています。

なにが私をひきつけるのか？ 勿論、食事会やボーリング大会、合宿も楽しいのですが、やはり一番の楽しみは他の塾生との交流です。同じ仕事の担当の人と日常業務の小さな疑問点を話し、また新しい知識を身につける。年齢の近い人が多いこともあって、気がねなく質問が出来、また質問を受けることによって自分の仕事の手順に疑問を持つ。そんなやりとりが楽しくて、毎月欠かさず出席するようにしています。

実際、勉強は学生時代から苦手でしたし、英語なんて本当に教科書しか読んだことがなかったもので、グループ研究や訳読は正直荷が重いこともあります。ただ、一生に一度くらい一生懸命勉強するのもいいかなあ、と今日も辞書をひきながら呻吟しています。

3年目の決意

多胡 英樹

複写機の前に立つと、なぜコピーを取らなければならないのかと、疑問が湧いてきたのがちょうど3年ぐらい前の事である。ただ複写を取るのではなくなぜそれが必要とされ、どのように利用され要求されて複写されているのか？ 要求された複写物（医学論文）が年々増えてくるためこれほど多量の医学論文が本当に利用されているのか？ と言う疑問が湧いてきて、もっと医学情報の流れを調べてみたいと言う欲求が目覚めてきた。

ちょうどそのころ慶應の図書館情報学科の聴講の話があり、医学図書館員コース（土曜日）を受講することになった。前期は、東京医科大の菅先生の医学図書館の歴史と概要、後期の前半は慈恵の裏田先生のアメリカの医学図書館の動向、後半は情報大の野添先生のIAIMSの講義を受けた。後期が始まるとすぐに裏田先生から若手中心に雑誌塾という勉強会をやっているから顔を出してみたらと紹介され塾に顔を出すきっかけとなった。この塾は慈恵の山崎さんを中心に男女4人づつで結成され、1年ぐらい経った時期であった。

はじめて顔を出した時の印象は分からないことが余りにも多くついて行くことができるのか不安であった。アットホームな雰囲気のためか、他の要素のためか、今まで続けることができた。私の場合特殊な環境にあり、平日は時間がないため土曜日に勉強会がもたれていたため辛うじて参加することができた。一次資料の複写作業が私のおもだった仕事で他の仕事の知識は殆どない状態であった。私が仕事に少しでも役立つことが学べればいいなどおもっている。

図書館員というのは、自分の働いている世界の動向（医学図書館、医学情報サービスが世の中でどう動いているのか）、どの様に動きつつあるのか、それから利用者の動向、つまり医学・医療の社会がどのような形で動いているのかを知るために勉強すべきである。自分の趣味とか興味のある分野の勉強でなく、自分達の図書館サービスをよくするためにすべきだと思う。

今は東京ではなく、大阪で仕事をしているが大阪でも雑誌塾のような勉強があればと考えている。

世界中に友達できるかな！？

牛沢 典子

“友達はもうできない” “英語の文章を読むことはもうない” 東邦に就職を控えて大学を卒業するとき、私は漠然とこう思っていた。仕事上の知人はできたとしても、学生時代のような友人はもうできないだろう。外国語の資料を扱うことがあっても、自分が読んだり話したりすることはないだろう。

塾に入らなかつたら、この予測は当たっていたかも知れない。

ところが、塾に入って3年、いつの間にか20人余りの仲間がいる。月一回の例会ごとにお酒を飲んで語り合い、ボーリングに繰り出す。年二回の合宿では、夜更けまでのトランプと談笑。おまけに、毎週のように会っている研究グループもあるので、グループに参加していない私など、さみしい思いをしているくらいだ。

また、山崎塾長が、事あるごとに研究熱心な先輩方を紹介して下さる。仕事がらみでお会いするのと違って、何かと親しく教えていただけるので、とてもありがたい。

塾に入って、最初に塾長が私に課したことは、英語の論文を訳すことだった。辞書をひきひき、2時間かかって10行も訳せなかつた。1987年、塾長が行くと言うので、まねをして米国 Medical Library Association の年次大会に参加した。会議内容の聞き取りの点では無謀な参加だったが、この時から、嫌いだったアメリカは、私にとって《元気のでるアメリカ》になった。今でも、英文を読むときは四苦八苦するけれども、我慢すれば、世界中の仲間の活動を知ることのできるようになった。

塾を思うとき、小学校入学前にわくわくして聞いていた歌、“一年生になったら、友達100人できるかな”をつい口ずさみ、“塾は、世界に向かって開く窓”と言ってみる私である。

尊敬するM先輩殿

渡辺 貴夫

いつも隣の席に座り、共に医学雑誌の受け入れ作業にいそしんでいらっしゃるM先輩。もうすぐ私は人事異動で行ってしまいますが、約8カ月半の間本当にお世話になりました。もう毎日あなた様の屈託のない笑い顔を見られないし、あまりにくだらないjokeを飛ばし合うことができないのかと思うと余りにもお名残惜しいございます。

さて私が塾にご縁を頂いたのは、何を隠そうあなた様を通してでございます。「発表だ！グループ研究だ！」と忙しそうにしておられるあなた様の焦る顔の中に、何かはつらつとしたものを感じ、又私は大学時代side businessで司書の資格をとったというコンプレックスからは是非私も仲間に入らせて頂きたいと思い、自らあなた様にせがんで塾の一人として加入させて頂いた訳でございます。

ところが、いざ月一度の塾の会合の日となりますと、愚かな私はついぐーたらな癖を発揮してしまい、用事がないのに遅刻をする始末でございます。又去年の12月などは、発表にも関わらず例によって遅刻した上に昭和大学の会議室のある階まで行きながら、どの部屋かわからず簡単に諦めて帰ってしまうという有様ございました。このように懺悔の告白を始めるとまったくきりがございません。そろそろ字数も足りて来たようですので本日はここまで致しとうございます。

平成元年三月吉日

英文抄訳リスト

1-4期 (1985年11月~1989年6月)

このリストは、約3年半の4期間の間に学術雑誌塾において発表、提出された英文訳読の文献リストです。著者名順で記列し、次にキーワードインデクスがあります。もし、読みたい文献、また参考文献・引用文献欄に取り上げられていて、ちょっと調べてみたいものがありましたら、カッコ内の訳読者に連絡してみてください。

1. Ashin, E.R.: Library service to dental practitioners.
Bull Med Libr Assoc, 71(4):400-402, 1983. (大村)
2. Austin, C.J.: Data processing aspects of MEDLARS.
Bull Med Libr Assoc, 52, 159-163, 1964. (黒川)
3. Backus, J.E.B. et al.: Searching for patterns in the MeSH vocabulary.
Bull Med Libr Assoc, 75(3):221-227, 1987. (牛沢)
4. Bailar, J.C., Patterson, K.: Journal peer review; the need for a research agenda.
N Engl J Med, 312(10):654-657, 1985. (黒川)
5. Barr, K.P.: Estimates of the number of currently available scientific and technical periodicals.
J Docum, 23:110-116, 1967. (平石)
6. Berry, E.M.: The evolution of scientific and medical journals.
N Engl J Med, 305(7):400-402, 1981. (廣田)
7. Brandon, A.N., Hill, D.R.: Selected list of books and journals for small medical library.
Bull Med Libr Assoc, 75(2):133-165, 1987. (宮内)
8. Brandon, E.: The Infancy of Medical Bibliography. In The development of medical biography. MLA Publication No.1, Baltimore, Waverly Press. Chapter 1, 1954. (牛沢)
9. Champese, M.A.: Adopt a journal?
Bull Med Libr Assoc, 67(2):262-263, 1979. (大村)
10. Clayton, B.C., Boyle, K.: The refereed journal; prestige in professional publication.
Nurs Outlook, 29:531-534, 1981. (木下)
11. Davis, J.Y.: Innovation decision making and the genesis of OCLC; the effects of individual information and structure.
Library and Information Science Research, 6(1):43-74, 1984. (宮下)
12. Davis, R.M.: Where will technology put the library of 21st century?
Bull Med Libr Assoc, 75(1):1-6, 1987. (北川)
13. Dixon, G.F. et al.: The peer review and editorial process; a limited evaluation.
Am J Med, 74:494-495, 1983. (木下)

14. Durack, D.T., Phil, M.B.D.: The weight of medical knowledge.
N Engl J Med, 298:773-775, 1978. (浜田)
15. Fenske, R.E., Fortnery, L.M.: The Use of Jargon in medical School Libraries.
Bull Med Libr Assoc, 74(1):12-15, 1986. (平輪)
16. Garfield, E.: Citation indexing for studying science.
Nature, 227,669-671, 1970. (北川)
17. Garfield, E.: Is Japanese Science a Juggernaut?
Current Contents: Life Science, 30(46):3-9, 1987. (雨宮)
18. Goldman, L. et al.: Fate of cardiology research originally published in abstract form.
N Engl J Med, 303:255-259, 1980. (廣田)
19. Gross, P.L.K., and Gross, E.M.: College libraries and chemical education.
Science, 66:385-389, 1927. (雨宮)
20. Halliday, S.: A journals binding system at sunderland polytechnic using d-Base II. Program, 20(4):394-408, 1986. (川村)
21. Houghton, B.: Present forms of the scientific and technical journal. In Scientific Periodicals., London, Clive Bingley, 1974. Chapter 3. pp. 32-41. (渡辺)
22. Jenkins, R.L.: Periodicals for medical libraries.
J Am Med Assoc, 97:608-610, 1931. (牛沢)
23. Karel, L.: Selection of journals for Index Medicus; a historical review.
Bull Med Libr Assoc, 55(3):259-278, 1967. (平石、浜田、廣田、北川)
24. Lundberg, G.D.: Getting the information out faster and some good news about MMWR. J Am Med Assoc, 249(11):1483, 1983. (井上)
25. Lundberg, G.D.: The JAMA style.
Med Commun, 12(4):105-110, 1984. (宮内)
26. Marshall, B.K.: Legal discussion in medical literature; is there adequate peer review?
Medicine and law, 7:317-321, 1988. (阿部)
27. Mathesons, N.W., et al.: Symposium IAIMS model development.
Bull Med Libr Assoc, 76(3):222-230, 1988. (北川)
28. Meranze, J. et al.: Publications resulting from anesthesia meeting abstracts.
Anesth Analg, 61(5):445-448, 1982. (廣田)
29. Morgan, P.: Peer review in the medical journals.
Br Med J, 292(8):646, 1986. (黒川)
29. Morton, L.T., How to use a medical library. 5th ed. London, William Heinemann Medical Books Ltd, 1971. (神場)
30. Raisig, L.M.: Mathematical evaluation of the scientific serial.
Science, 131:1417-1419, 1960. (神岡)
31. Schwartz, D.G., Eakin, D.: Reference service standard, performance criteria, and evaluation.

- J Acad Librarianship, 12(1):4-8, 1986. (木下)
32. Sengupta, I.N. and Wyatt, H.V.: Growth of specialist journals in Seven Biological disciplines.
Libr Inform Sci Res, 9:239-243, 1987. (廣田)
33. Sewell, W.: Medical subject headings in MEDLARS.
Bull Med Libr Assoc, 52:164-170, 1964. (牛沢)
34. Stossel, T.P.: Reviewer status and review quality; experience of the Journal of Clinical Investigation.
N Engl J Med, 312(10):658-659, 1985. (木下、黒川)
35. Taine, S.I.: Bibliographic aspects of MEDLARS.
Bull Med Libr Assoc, 52:152-158, 1964. (吉田)
36. Thompson, R.H., Croft, W.B.: An expert system for document retrieval.
Expert Systems in Government Symposium. 1st. Oct. 24-25, McLean, VA. IEEE: 448-456, 1985. (牛沢)
37. Truelson, S.D.: What the Index Medicus indexes, and why.
Bull Med Libr Assoc, 54:329-336, 1966. (黒川)
38. Usdin, B.T.: Core lists of medical journals; A comparison.
Bull Med Libr Assoc, 67(2):212-217, 1979. (大村)
39. Vickery, B.C.: Indicators of the use of periodicals.
J Librarianship, 1:170-182, 1969. (廣田)
40. Weintraub, W.H.: Are published manuscripts representative of the surgical meeting abstract? ; an Objective appraisal.
J Pediatr Surg, 22(1):11-13, 1987. (大村)
41. Williams, E.: The process of peer Review of Scientific manuscripts.
J Am Med Assoc, 260(12):1761, 1988. (安藤)
42. Williamson, M.L.: Seven years of cancellations at Georgia Tech.
Serials Librarian, 9(3):103-114, 1988. (北川)
43. Wilson, G.: Symposium on three types of medical libraries III; a combined university-medical and medical society library.
Bull Med Libr Assoc, 41:230-237, 1953. (神岡)
44. Young, R.K.: It's over, Debbie.
J Am Med Assoc, 259(2):272, 1988. (神場)

キーワードインデクス

- Bibliography—————8, 29
- Bookbinding —————20
- Citation Analysis —————16, 17, 19, 22, 30, 32
- Index Medicus,Medical Subject Headings—————3, 23, 37
- Information Retrieval System—————36
- Information System—————11, 27
- JAMA(Journal of the American Medical Association)—————24, 25
- Libraries,Dental—————1
- Libraries,Medical —————12, 15, 43
- MEDLARS-MEDLINE Information System—————2, 33, 35
- Meeting Abstracts —————18, 28, 40
- Peer Review —————4, 13, 26, 29, 34, 41
- Periodicals —————5, 6, 7, 9, 10, 14, 21, 23, 29, 38, 39
42
- Reference Service —————31
- その他—————44

研究発表記録 (1988年4月-1989年3月)

健康誌の出版動向とその主要誌の分析

宮内洋一、他

第5回図書館情報サービス研究大会(1988年6月)

学会発表における審査の実態；日本医学会分科会での調査

大村伸栄、他

第5回図書館情報サービス研究大会(1988年6月)

Medical Library Associationの継続教育コース

牛沢典子

第5回図書館情報サービス研究大会(1988年6月)

総合研究「私たちの60年代」

廣田住友、他

第5回図書館情報サービス研究大会(1988年6月)

学会発表における審査の実態-日本医学会分科会における調査

雨宮正恵、他

三田図書館・情報学会1988年度研究大会 (1988年11月)

学会発表に対する意識-研究者・臨床医に対するアンケート調査より-

阿部信一、他

三田図書館・情報学会1988年度研究大会 (1988年11月)

学術雑誌塾の4期間を振り返って

廣田住友

第17回生物医学図書館員研究大会 (1989年2月)

あとがき

塾長 山崎茂明

道を歩いている途中で、それまでわからなかった事柄が、突然明瞭になることが時々あるものです。とくに、日々歩いている通勤途上ではなく、違った街の環境で異なった道を歩いているときにおきるようです。

1年前の5月でしたが、イギリス北部スコットランドのグラスゴーで、大ミンスターへの坂道を上り、丘の上に屹立する教会と、隣接して建てられていたグラスゴー王立病院 (Royal Infirmary) の古めかしい建物に出会った時、精神の救いの場としての教会と、身体の救いの場としての病院が、同じルーツであることを、明確に納得することができました。幕末から明治維新にかけて活躍した人々の多くに、医学を学んだ人々があり、彼らは身体から社会への救いを求めて行動したのであろう。雑然としていた情報が一挙にシステムティックに体系化され、はっきりと見えてくる瞬間があるものだ。これらは旅の歩行を通して得られる喜びのひとつであろう。

ここにまとめられた学術雑誌塾報告2も、私たちの旅の記録といえる。調査データの収集や現地調査、そして様々な文献を読むことを通して、新しい出会いを体験し、発見をしたのではないだろうか。より大きな喜びを得るためには、異なった空間に自らを投げ出す勇気と力をつけてもらいたいものである。シェークスピアの作品に、つぎのような言葉があった。「おまえはペローナから追放される。しかし、世界は広い」。読むこと、書くことを基礎にし、より広い世界へ歩いていきたいと思っている。

なお、この塾報を刊行するにあたり、板橋瑞夫顧問をはじめ、山口直比古・青木仕の両氏より貴重な原稿をいただくことができました。編集作業は、黒川玲子委員長を中心にして、平輪、廣田、井上、神場、北川の各委員により行なわれました。原稿の集稿、閲読、修正など本当に御苦勞様でした。また、廣田幹事長をはじめとした、塾の幹事諸君にも感謝の意を表します。そして、今回も印刷の労をとられた伸樹社の豊浦清氏に謝意を表します。ご意見、ご感想などございましたら、お気軽にお手紙などお寄せ下さい。

執筆者一覧

- 山崎 茂明 東京慈恵会医科大学医学情報センター 〒105 港区西新橋3-25-8
(学術雑誌塾塾長)
- 板橋 瑞夫 昭和大学図書館 〒142 品川区旗の台1-5-8
(学術雑誌塾顧問)
- 山口 直比古 浜松医科大学附属図書館 〒431-31 浜松市半田町
(学術雑誌塾顧問) 3600番地
- 青木 仕 順天堂大学図書館 〒113 文京区本郷2-2-26
(学術雑誌塾顧問)
- 阿部 信一 東京慈恵会医科大学医学情報センター 〒105 港区西新橋3-25-8
- 雨宮 正恵 東邦大学医学部図書館 〒143 大田区大森西5-21-16
- 安藤 越代 帝京大学溝口病院図書館 〒214 川崎市高津区溝口74
- 江口 敏一 浜松医科大学附属図書館 〒431-31 浜松市半田町
3600番地
- 浜田 秀生 東京歯科大学図書館 〒260 千葉市真砂1-2-2
- 平石 充 国際医学情報センター 〒162 新宿区住吉町2-14
四谷曙橋ビル5F

平輪 麻里子	東邦大学医学部図書館	〒143 大田区大森西5-21-16
廣田 住友	昭和大学図書館	〒142 品川区旗の台1-5-8
井上 三郎	日本医師会図書室	〒101 千代田区神田駿河台2-5
神場 清治	関東通信病院図書館	〒141 品川区東五反田5-9-22
門屋 由美	懶凸版印刷	〒110 台東区台東1-5-1 懶凸版印刷 情報出版事業本部 電子映像出版本部
川村 順子	麻布大学図書館	〒229 相模原市淵野辺1-17-71
木下 真由美	杏林大学医学部図書館	〒181 三鷹市新川6-20-2
北川 正路	東京慈恵会医科大学医学情報センター	〒105 港区西新橋3-25-8
小島 久美子	帝京大学図書館	〒173 板橋区加賀2-11-1
熊谷 智恵子	国家公務員等共済組合連合会 中央図書室	〒105 港区虎ノ門2-2-2 虎の門病院内

黒川 玲子	東邦大学医学部図書館	〒143 大田区大森西5-21-16
真下 美津子	国家公務員等共済組合連合会 中央図書室	〒105 港区虎ノ門2-2-2 虎の門病院内
宮下 美香	国際医学情報センター	〒151 渋谷区千駄谷4-22-8 松栄ビル南館
宮内 洋一	山之内製薬新薬研究所図書室	〒305 つくば市御幸が丘21
大村 伸栄	神奈川歯科大学図書館	〒238 横須賀市稲岡町82
多胡 英樹	国際医学情報センター	〒550 大阪市西区江堀1-23-26
牛沢 典子	東邦大学医学部図書館	〒143 大田区大森西5-21-16
渡辺 貴夫	国際医学情報センター	〒162 新宿区住吉町2-14 四谷曙橋ビル5F

「Working with each other」

— 学術雑誌塾報告 2 —

1989年6月3日 発行

編集 学術雑誌塾報告編集委員会

(委員長：黒川 玲子)

発行 学術雑誌塾

(塾長：山崎 茂明)

印刷所 傑 伸樹社

〒101 東京都千代田区三崎町1-1-13 菅谷ビル3F

TEL : 03(291)4408 (代)

「1990年代に向けて—」

— 學術雜誌塾報告 3 —

1990

學 術 雜 誌 塾

「1990年代に向けて—」

—學術雜誌塾報告**3**—

1990

學 術 雜 誌 塾

学术雑誌塾報告編集委員会

委員長	井上	三郎
	阿部	信一
	安藤	越代
	平輪	麻里子
	北川	正路
	大村	伸栄

まえがき

「総合研究：私たちの60年代」の出版以後、学術雑誌塾は「日本の学術雑誌」をテーマとしたグループ研究を中心に活動してきました。こうしたグループ研究の成果は、前号「Working with each other」でまとめられ、これにもとづき第6回図書館情報サービス研究大会では3つのグループが発表を行なっています。「1990年代に向けてー」と題した本号は、これ以後現在にいたる約半年間の活動内容を中心に編集したものです。

活動期間としては異例の短期間となりましたが、巻頭には3つのグループの論文5編を収録することができました。1990年にあたる来期の学術雑誌塾では「総合医学雑誌」をテーマとした個人研究を行なっていくことがすでに決定されています。したがって、この5つの論文が一昨年以来のグループ研級究活動のしめくくりという意味を担うことになりました。

わたしたちのグループ研究活動は豊富なデータを提出し、塾生間のコミュニケーションをはかるという意味では成功をおさめてきました。しかし、持続していくものを育てたり、また自己を発見したりといった個々の塾生の内面的な営みにおいて豊かなものを残し得たかどうかは疑問の生じるどころです。学術雑誌塾も新たな転機を迎え、個々の塾生が自立していくことが必要になってきています。すぐれた結果を創りあげていくことはもちろん大切なことですが、今後は個々の塾生が内発的なものを生かし、自立していくことを心掛けなければ、塾生間のコミュニケーションは進展していきませんし、集団としての成熟もまたありえないように思います。「1990年代に向けてー」という本号のタイトルには、現在までの活動に区切りをつけ、学術雑誌塾の1990年代の未来に向けて新たなスタートを切りたいという編集委員の願いがこめられています。

今回も山崎塾長をはじめ板橋瑞夫、山口直比古、青木仕顧問より充実したエッセイをいただきました。また特別寄稿として、野口迪子氏より貴重な資料にもとづいた原稿をいただき、併せて収録することができました。いずれのエッセイからも豊かな人間性がまず感じられ、校正を行ないながら、自分との距離を自覚することも勉強のひとつだと痛感した次第です。なお健康雑誌をテーマとした塾生の論文は、一昨年の学術雑誌塾の業績ですが、板橋氏の原稿をいただくにあたりこの期にまとめてみたものです。ささやかな問題提起ともなれば幸いです。

最後になりましたが、山崎塾長をはじめ学術雑誌塾顧問の方々の御指導に感謝の意を表するとともに、御自身の大切な論文の執筆をかかえながら、わたしどもの身勝手な原稿依頼に快く応じて下さった野口氏にこの場をかりて感謝の意を表する次第です。

学術雑誌塾報告編集委員長
井上 三郎

目 次

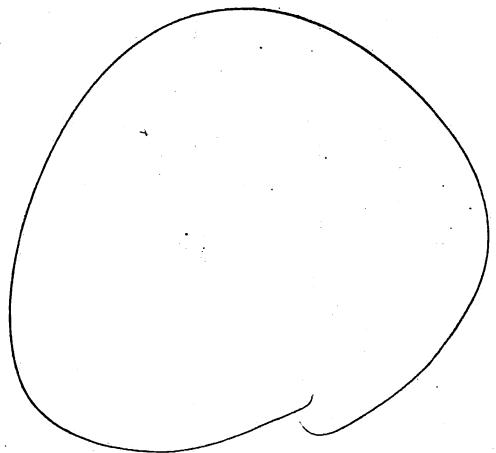
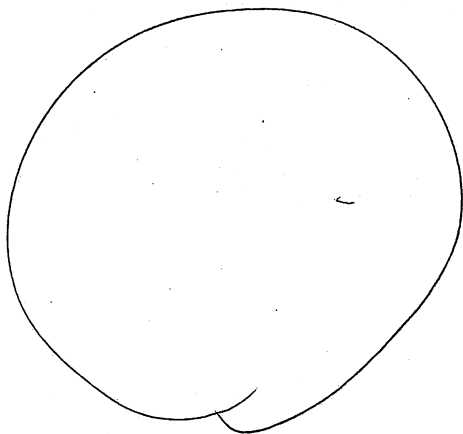
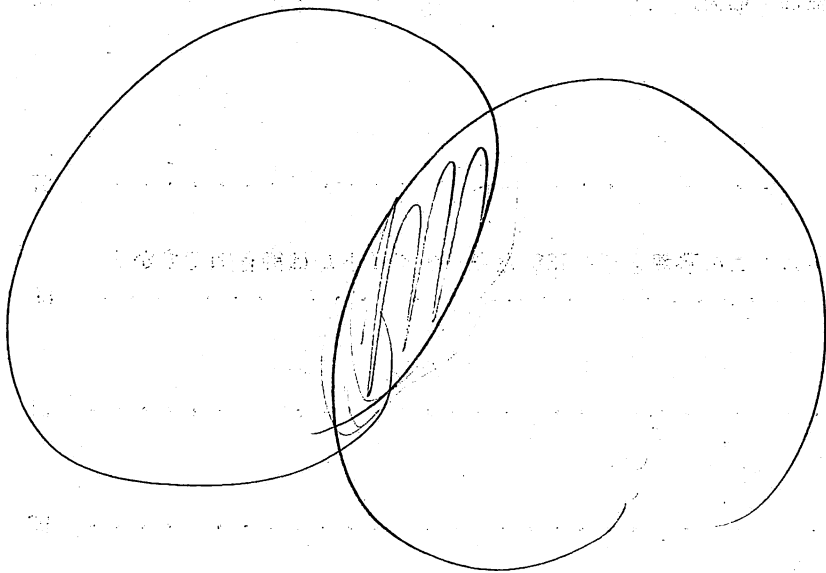
まえがき	1
目次	2
＜グループ研究＞	
川崎病を事例とした国内外文献の比較検討 (神場 清治 ほか)	5
それぞれのピアレビュー (雨宮 正恵 ほか)	10
雑誌の引用からみた免疫学分野のコアジャーナル (大村 伸栄 川村 順子)	18
生化学分野の国内発行コアジャーナル (江口 敏一)	25
帝京大学医学図書館の貸出統計から見た国内発行の医学分野のコアジャーナル (小島 久美子)	28
＜個人エッセイ＞	
情報は現地調達 (廣田 住友)	33
大阪と東京 (多胡 秀樹)	39
夏目漱石の解剖所見 (堤 容子)	41
＜寄稿論文・エッセイ＞	
アメリカ医学教育の父ジョン・モーガンとアンジェリカの自画像 (山崎 茂明)	43
MLA Exchange とともに -私の1960年代- (野口 迪子)	48
科学コミュニケーションと論文のRetraction (山口 直比古)	63
レビュー文献の重要性 (青木 仕)	70

<小特集：健康雑誌をめぐって>

健康雑誌の特性と評価 (井上 三郎 ほか)	75
健康雑誌補遺 (板橋 瑞夫)	82

<記録>

研究発表記録	87
ISSNとキー・タイトル：この塾報告集のISSNとキー・タイトルは御存知ですか？ (廣田 住友)	89
あとがき	91
執筆者一覧	92



川崎病を事例とした国内外文献の比較検討

神場 清治 門屋 由美 熊谷智恵子
真下美津子 多胡 英樹

I. はじめに

医学の進歩に国境は無い。もし進歩に違いがあるとしたら、それは経済や社会環境の違いであろう。そういう意味において外国も日本もそのめざすところは同じはずである。しかし医学に対する姿勢、あるいは患者に対する姿勢は、違うものであろう。癌の告知や、臓器移植の問題にしても日本と諸外国では、その対しかたが異なる。その異なり方の違いのようなものが知りたい、ということが大本のところにあった。国内外の文献の流れ方を比較することによってその違いの要素のひとつを知ることが、今回の調査の目的である。川崎病を例にとりて Index Medicus と医学中央雑誌の文献の流れ方を比較検討してみることにした。

医学者を対象とする
日本と外国の異なり方
↓
文献の流れ
↓
川崎病

II. 川崎病について

日本に多く発生し、日本人の医師、川崎富作氏によって初めて発表された川崎病は、¹⁾正式には「急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群 (MCLS) という。1歳前後をピークに4歳以下の乳幼児が患者の80%を占めている。日本での発生が圧倒的に多いが、アメリカ、カナダ、韓国、西ドイツをはじめ各国で増加傾向にある。しかし、発病の原因が分かっていない。」文献としては、²⁾1967年3月『アレルギー』誌に「指趾の特異的落屑を伴う小児の急性熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群—自検例50の臨床的観察」と題して初めて発表された。また、海外には1974年9月に『Pediatrics』54巻3号に“A new infantile acute febrile mucocutaneous lymph node syndrome(MCLS) prevailing in Japan”と題して、重松、柳川氏と共同で発表された。

III. 調査と考察

最初に川崎富作氏の発表した論文数を年ごとに調べた。

表1 川崎富作氏文献発表推移

発表年	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87
文献数	1	3	1	5	3	2	2	4	9	7	13	7	10	14	7	22	13	11	9	5	6

1977年'80年'82年にそれぞれピークがあることが解った。

次にIM と医中誌を使って、5年ごとの川崎病の文献数の推移を調べた。ただし各年の文献数は、収載年度であって文献発表年度ではない。従って川崎氏の文献発表推移とは多少ズレがある。

表2 雑誌数・文献数15年間の推移

年	1970	1975	1980	1985
医学中央雑誌雑誌数	6	39	68	43
文献数	8	88	190	348
Index Medicu雑誌数	86	63	122	143
文献数	113	70	179	95

医中誌上の文献数は、'70年から'85年の間に、5年ごとに倍増している。IM では、Mucocutaneous lymph node syndrome というキーワードが登場するのが'84年以降なので

'70年から'85年の間のデータを比較することができなかった。そこで、'85年から'87年の3年間のデータを比較することにした。

表3 雑誌数・文献数最近3年間の推移

年	1985	1986	1987
医学中央雑誌雑誌数	43	111	80
文献数	348	489	353
Index Medicu雑誌数	143	60	67
文献数	95	81	101

医中誌は、'85年に比べて雑誌数は増加し、文献数はの増減はほとんど無かった。IM の方は、'85年の雑誌数が多く'86、'87年は減少した。雑誌数は医中誌とIM で、ほぼ同数だが、文献数は日本のものが

約4倍ある。表1から表3の文献数を1つのグラフにまとめてみた。

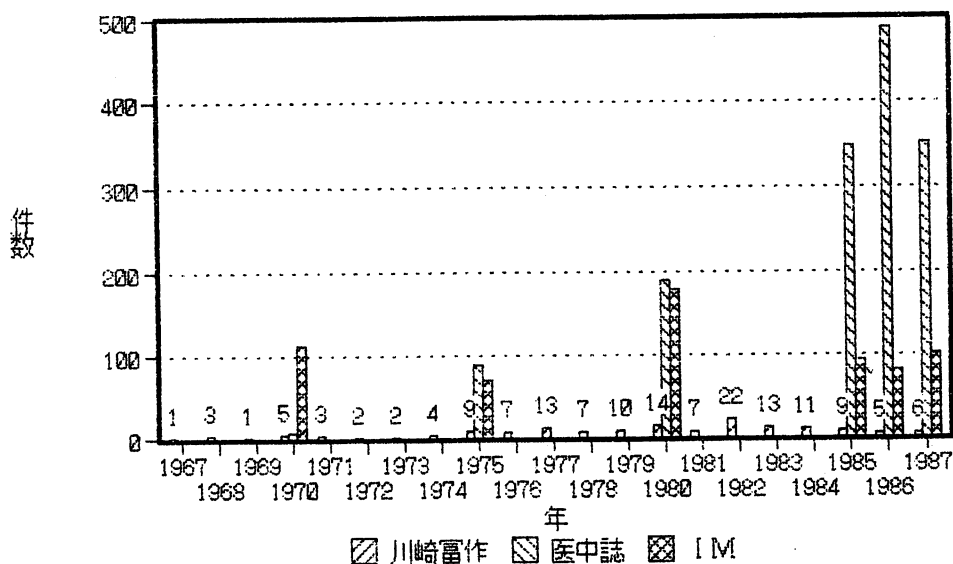


図 1 文献数比較

? 足りていないか (文献数の少ない雑誌より多い?)

↑
IMと医中誌
重複し収載
されている
雑誌があった

この分析資料の目的？

川崎富作氏、医中誌、IM の文献数を比較すると、最近の医中誌上の文献数が非常に多いことが分かる。

次に IM の3年分のデータを分野別にみでみることにした。

行を100%に(はるのか?)

表 4 Pediatrics と Medicine が占める割合：国別比較

雑誌数比較

これ(比率)が良い

雑誌の絶対数から割合%にあたり意味があるの？

	国名	J.S.A		JAPAN		GER,W		ENGLA		FRANC		ITALY		合計	平均
		雑誌数	比率	雑誌数	比率	雑誌数	比率	雑誌数	比率	雑誌数	比率	雑誌数	比率		
1985		29		8		7		6		5		5		60	
	Pediatrics	5	17.2%	0	0.0%	4	57.1%	0	0.0%	1	20.0%	2	40.0%	12	20.0%
	Medicine	6	20.7%	1	12.5%	0	0.0%	3	50.0%	1	20.0%	1	20.0%	12	20.0%
1986		21		10		5		4		2		1		43	
	Pediatrics	4	19.0%	0	0.0%	1	20.0%	1	25.0%	1	50.0%	1	100.0%	8	18.6%
	Medicine	4	19.0%	4	40.0%	0	0.0%	1	25.0%	1	50.0%	0	0.0%	10	23.3%
1987		30		8		3		7		3		2		53	
	Pediatrics	11	36.7%	0	0.0%	2	66.7%	1	14.3%	3	100.0%	2	100.0%	19	35.8%
	Medicine	8	26.7%	3	37.5%	0	0.0%	2	28.6%	0	0.0%	0	0.0%	13	24.5%

文献数比較

	国名	J.S.A		JAPAN		GER,W		ENGLA		FRANC		ITALY		合計	平均
		文献数	比率	文献数	比率	文献数	比率	文献数	比率	文献数	比率	文献数	比率		
1985		44		11		7		9		5		9		85	
	Pediatrics	15	34.1%	0	0.0%	4	57.1%	0	0.0%	1	20.0%	6	66.7%	26	30.6%
	Medicine	9	20.5%	1	9.1%	0	0.0%	4	44.4%	1	20.0%	1	11.1%	16	18.8%
1986		75		19		17		10		5		2		128	
	Pediatrics	14	18.7%	0	0.0%	6	35.3%	2	20.0%	3	60.0%	2	100.0%	27	21.1%
	Medicine	12	16.0%	5	26.3%	0	0.0%	2	20.0%	2	40.0%	0	0.0%	21	16.4%
1987		93		19		16		16		7		6		157	
	Pediatrics	31	33.3%	0	0.0%	8	50.0%	2	12.5%	7	100.0%	6	100.0%	54	34.4%
	Medicine	15	16.1%	8	42.1%	0	0.0%	7	43.8%	0	0.0%	0	0.0%	30	19.1%

1985年には28分野、'86年は、22分野、'87年は16分野と川崎病の文献が掲載された雑誌数が横ばい状態なのにもかかわらず、その分野が減っていることが解った。

分野の順位は、Medicine と Pediatrics の分野に掲載された雑誌数がそれぞれ'85年から'87年まで1位と2位を占めた。そこで研究の方向として、川崎病関係の文献は、Medicine や Pediatrics に分類される雑誌に多く掲載される傾向があると推測される。

この意味をデータからより傾向強価値がある

表 5 Index Medicus 文件数順位 1985-1987

順位	雑誌名	分類	文献数
1	J Pediatr	Pediatrics	15
2	Pediatr Infect Dis	Pediatrics	10
2	Pediatr Med Chir	Pediatrics	10
4	Am J Dis Child	Pediatrics	9
4	Lancet	Medicine	9
6	Pediatr Cardiol	Pediatrics	8
6	Am J Cardiol	Cardiology	8
8	Minerva Pediatr	Pediatrics	6
8	Arch Fr Pediatr	Pediatrics	6
10	JAMA	Medicine	4
10	N Engl J Med	Medicine	4
10	Nippon Kyobu Geka Gakkai Zasshi	Thoracic Surgery	4
10	J Cardiogr	Cardiology	4
10	Erreugi	Allergy & Immunology	4
13	Eur J Pediatr	Pediatrics	4
10	Pediatr Radiol	Pediatrics	4
10	Heart Vessels	Cardiology	4
10	An Esp Pediatr	Pediatrics	4
10	Can Med Assoc J	Medicine	4

医学中央雑誌 文件数順位 1985-1987

順位	雑誌名	分類	文献数
1	日小児科学会雑誌	Pediatrics	283
2	治療	Medicine	204
3	日小児循環器会誌	Pediatrics	62
4	Japanese Circulation Journal	Blood Circulation	60
5	Progress in Medicine	Medicine	56
6	小児臨	Pediatrics	51
7	小児科	Pediatrics	27
8	医のあゆみ	Medicine	22
8	日病理学会誌	Pathology	22
10	小児科診療	Pediatrics	21
11	小児内科	Pediatrics	19
12	Acta Paediatr Jpn Overseas Ed	Pediatrics	16
13	小児看護	Pediatrics	15
13	医療	Hospitals	15
15	日公衆衛生誌	Public Health	14
16	アレルギー	Allergy & Immunology	13
17	若年者心疾患対策学会誌	Cardiology	12
17	神奈川医学会誌	Medicine	12
19	埼玉医学会誌	Medicine	10

れとは、逆に西ドイツの場合は、Medicine に一誌も登場していない。西ドイツの Medicine の雑誌が、Index Medicus に収載されていないわけではないから、研究の方向が小児科の分野に集中していると考えられる。

医中誌と IM の1985-1987の3年間分の文献数上位約20誌を抜きだしてみると、どちらも Pediatrics の文献が多いことから分かるように日本の文献も、外国の文献も Pediatrics が重要視されているのが分かる。

IV. おわりに

当初、日本の雑誌は広い分野から狭い分野へと雑誌数が減り、外国の雑誌はしほりこまれた状態で最初から雑誌数が少ないと予想した。しかし、雑誌数は増加傾向にあり研究が混迷状態にあるという感想を持った。

また Index Medicus に日本の小児科の雑誌が収載されていないことが印象に残った。

全体の1-10位に3冊しか収載されていない(？)

次に発行国別に掲載されたものをみると3年間を通して1位アメリカ合衆国、2位日本、3位以下は西ドイツ、イギリス、フランス、イタリアが各年によって違っていた。

次に、Pediatrics と Medicine の分野にしほりて見ると、日本は下位に落ち込んでしまう。これは Pediatrics と Medicine 以外の分野に掲載される文献が、多いことを示している。これは、原因がいまだに分からないということから、研究の分野がしほり込めていないということを表しているし、また日本の研究が多様であることを示しているのかもしれない。

また、Pediatrics に日本の雑誌が登場しないのは、Index Medicus に日本の小児科の雑誌が収載されていないためである。こ

世界に知らせることはいいが、
ポーランド日本国内に伝えたこと、病因を解明し
治療の方向を見出すことにある

Pediatrics の分野に一誌も登場しないのは、世界で一番川崎病の研究が進んでいるであろ
う日本の文献が、他の国に紹介される機会が少なく、世界的な損失ではないだろうか。日
本の文献が外国に紹介されるのは、日本の小児科以外の IM 掲載誌か外国の小児科雑誌に
載せるしかないのであろう。

本誌に載せるべきか?

引用文献

- 1) 幼児襲う川崎病. 朝日新聞. 1989.11.3.
- 2) 川崎 富作 [等] 編 : 川崎病. 東京, 南江堂, 1988.

→ もろく々々データを説明できるか

→ アメリカの小児科誌に日本人が投稿しているか

川崎自身 1974年の Pediatrics 誌に出版している

IM — 海外を代表

医中 — 日本を代表

日本人の IM 4 誌及び 1 の投稿
はどうしているのか?

雑誌発行国 = 国籍 (各国の言語)
とみなすことはできない

それぞれのピアレビュー

阿部 信一 雨宮 正恵 安藤 越代
木下真由美 黒川 玲子 生出 直子

I. はじめに

先頃のサイエンス誌に、「Natureにはこうすれば載る」という企画があった¹⁷⁾。英語論文の書き方から Natureの編集方針にあった論文の内容まで、経験者の声を集めながら、Natureに載るにはこうすればいいんだ、という論がまとめられていたが、結論としては、Natureで最も重視されるのは研究のオリジナリティということになるようである。その上で、論理展開の精巧さ、おもしろさ、他分野の研究者にとってのわかりやすさなどがポイントとなる。

また、その中では、Natureの編集長のMaddoxのコメントも載っていたが、そこで彼は、日本人は国際誌に掲載されにくい傾向があると言う人が多いが、その種の不満は、日本人に限ったことではなく、フランスの科学者でもイギリスの科学者でも、同様に感じていることであると述べている。

1週間当たり150もの論文が投稿されてくるNatureでは、レフェリーとして登録されている7000人の中から最低でも2人のレフェリーが選ばれ、審査が行われるという。そしてそのうち一人はイギリス以外にすむ人物があたり、このようにして先のような不満に対して対処しているともいえる。

たしかに、日本人の論文はその発表数に比べて国際的な流通量は必ずしも多いとはいえない。Garfieldが、SCIを使って調べた結果によると、そこに収録されている日本人の論文の90%以上が英語で書かれているにもかかわらず、それらを引用している論文の半分が日本人だということである⁷⁾。その理由として、日本人の英語表現力の稚拙を指摘する意見も多いものの、そればかりでもないようである。日本の英語学術雑誌のレフェリーシステムについての山崎の調査でも、論文の審査はしっかり行われていた¹⁴⁾。しかしながら、この研究に対するカレントコンテンツのコメントの中で、日本の科学者の研究論文が国際的に流通するためには、日本の学術雑誌の編集委員会に外国の研究者をもっと入れていくことが必要であるとの意見が述べられている。ある意味で、内容以前の問題として、その媒体やコミュニケーション手段に対する信頼性が問われているともいえる。

前回、われわれは医学におけるレフェリーシステムについて、80年代以降の研究をレビューした。今回は、医学以外にも範囲を広げて、レフェリーシステムについて多角的な視点から概観してみる。

II. 医学のレフェリーシステムと最近の動向

科学コミュニケーションにおいて科学の正当性の発行許可の裏付けであるピアレビューが、最近注目を集めるようになってきた。1989年5月10日から12日にかけて、シカゴで生物医学雑誌におけるピアレビューについて最初の国際会議が開催され、20ヶ国から270名余り

が参加した。この会議は生物医学雑誌の編集者、研究者が出席したのみならず、New York Times、Washington Post、Los Angeles Timesらのレポーターにとっても興味を示す対象であった。以前には科学コミュニケーションにかかわる人々の間でしかその存在を知られていなかったのが、ユタ大学における低温核融合騒動を機会に一般の人々の間にもその意義が広がっていった。特にアメリカでは、人々はピアレビューに対して多大な機能を期待している。なおピアレビューという用語は査読制度を表現するにはあまり適さないと私たちは考えているが、この章では、先の国際会議を中心に述べていくため、会議での呼称を尊重し、あえてピアレビューと称することにする。

New England Journal of Medicine (以下、NEJM) の編集者であるMarcia Angellは、“ピアレビューは間違いをみつけるためのものではなく、質のコントロールのためのものである”と述べており、同様に、NEJMの編集長であるArnold Relmanは、“完璧の達成、つまり、論文の質を改善し論証ができるように間違っている論文を排除する、という意味での正確さを確保するのではない。正確さを改善しようとするのである”と述べて、ピアレビューされた論文の正確さに、レビューアーが、全面的に責任を持つのではなく、あくまでも論文の内容については著者やひいては科学コミュニティが責任を持つものである、と主張している。

また、Scienceの編集長であるDaniel E Kochlandは、“ピアレビューは、良い論文と悪い論文とを鑑定するにはよいが、どちらでもないものを鑑定することは難しい”ことから、ピアレビューだけでは不十分な点を編集者の存在で補うものである、と主張している。

ピアレビューにおいて永年の課題である“偏見”についても、論点の一つとしてとりあげられたようである。有名な著者への偏見、無名な研究者に対する偏見については、これまでもPetersとCeciらにより研究が行われているが¹⁰⁾、今回の会議においても、Angellや、Journal of General Medicineの編集者であるRobert McNuttの意見が出されている。Angellによれば、偏見は必ずしも悪いことではなく、時々その研究の弱点を突き止めるために、厳しいレビューを行うレビューアーに原稿を送ることがある、という。また、McNuttは、彼の雑誌に投稿された原稿を1人には著者名を知らせ、もう1人には著者名を伏せて、それぞれレビューアーに送付し、そのレビューの質を雑誌のスタッフにより評価する、という実験を行った。その結果、“レビューアーは、匿名の論文を評価するのに、更に時間を費やすかもしれない”と、彼は述べている。しかし、彼に対して、AngellやRelmanは、“NEJMにおいては、著者の氏名を伏せてレビューアーに原稿を送付することは、非現実的である。氏名を伏せることが意味を持つのか、否か、については、今後できるだけ多くの研究が行われるだろう、それにより、その是非が問われるだろう”と意見を述べた。このようなレビューアーによる著者への偏見の他に、製薬会社等からの助成金を受けているか、否か、により偏見を受けることがある、との報告も出された。

また、新しく出された意見に対しての偏見についても、いくつかの意見が出された。編集者の間では、潜在的な偏見として、“否定的な”結果よりは、“既に確定した”結果を好む傾向がある。このことは、Coleらにより既に報告されている³⁾。このような、“論文の選択時に否定的な結果を削除することは、無駄なそして危険な論文の採用を導くかもしれない”、とRadcliffe InfirmaryのIan Chalmersは、新生児医学における否定的研究の追跡調査をもとに主張した。

また、Archives of Otolaryngology - Head and Neck Surgery の編集者である Byron Baileyにより、同じ研究結果が複数の雑誌に投稿されている、という報告がされた。RelmanやAngellによれば、このような一つの結果からいくつかの論文を生み出し出版する、というような“余分な”出版は、お金と同様に時間・労力・専門的知識を含むピアレビューシステムの源を浪費していることである。このような、不当な名声を得るために出版が重複してしまうことを防ぐために、“著者は、重なる全ての出版、未出版の論文を付けて、原稿を編集委員会に投稿すべきである”と主張した。

ピアレビュープロセスの確立のために、著者、レビューアー、編集者は、その行動に対して責任を持つべきである、との考えに基づき、British Medical Journal の編集者であるStephan Lock とHarverd School of Public Health のThomas Chalmerは、“レビューアーは、自分が評価したのものには、自分のサインをすべきである”と主張したが、これについてAngellは、“レビューアーのサインは、自由である。サインをすると、御機嫌とりをしたり、口論を避けたりして、意味のないレビューになることが多い”と反論した。他にも、Journal of American Medical Association の編集者であるDrummond Renieは、“論文のみならず、研究の生のデータに対しても、ランダムに審査すべきである”、“審査は、編集者自身でなく、いくつか研究経験のある人々により行われるべきである”、“著者の責任のため、雑誌では論文の各著者がその研究に責任を持つ、という申告書に署名することを強要すべきである”、と主張した。

Lockは、“ピアレビューは我々が今までに得た中で最も優れたものであるが、ひどく代役をさせられてきた”と、また、Lancetの編集者であるDavid Sharpは、“ピアレビューは世界的規模の出版により一定の標準に達している。ピアの精密な審査は出版の目的である”と述べている。そして、Cornell UniversityのSheila Jasanoffによる“ピアレビューは、今後、衰え消え去ることはないが、ピアレビューについての謙遜は持ち去るべきである”、という言葉が今回の最初の国際会議での人々の意見のいくつかを象徴しているようである。この会議に引き続き、第2回目の国際会議は、3年以内に計画されている。その時迄に、今回の会議の結果があらためて、今後の研究結果の中で明らかになっていくことであろう^{6,13)}。

Ⅲ. 人文・社会科学のレフェリーシステム

「レフェリーシステム」とは（前回の報告集では Peer review の定義としてまとめたが）学術雑誌の編集過程における、同一分野内の審査員による論文の審査制度のことを指す。前回は医学分野を中心としたレフェリーシステムについて書かれた論文のレビューをしたが、ここでは人文・社会科学系のレフェリーシステムについて概観する。その前に立てた仮説について述べる。

医学は応用科学であり、そこにおける科学コミュニケーション手段としての論文の流通には速報性が望まれる。それに対し、人文・社会科学はどちらかと言えば、純粋科学の論文の流通過程に近いのではないかという仮説を立てた。

- ① 論文の受付から発行までの期間は医学・自然科学系（6.4ヶ月）よりも長いのではない

か。

- ② レフェリーの人数は医学・自然科学系（1.8人）よりも多いのではないか。
- ③ 論文の審査期間は、医学・自然科学系（24.6日）よりも長いのではないか。
- ④ レフェリーの位置づけは、医学・自然科学系が編集者（論文採否の最終決定者）の助言者という感じがするのに対して、人文・社会科学系では、レフェリー自身の採否の決定権が強いのではないか。
- ⑤ 審査の匿名性においては、医学・自然科学系と同様にブラインド制が多いのではないか。
- ⑥ 論文の却下（リジェクト）は、医学・自然科学系よりも高い率で行われているのではないか。

以上のような観点から、まず、心理学系の雑誌のレフェリーシステムについてまとめる。

- ① 受付から発行までの期間は、1～5ヶ月（平均12週間）で医学・自然科学より短い。
- ② レフェリー数は、AACD Journal ではすべての雑誌が少なくとも2人のレフェリーによって査読されている。8誌では編集者を含めて平均3.4人で行っており、医学・自然科学系よりやや多い。
- ③ 審査期間は、各雑誌が原稿の評価のためのレビュー委員会のメンバーに割り当てている時間は平均3～4週間であり、医学・自然科学系と同じ期間である。
- ④ レフェリーの位置づけと編集者の役割は、レフェリーがある論文について反論がある場合、2～3の雑誌では新たなレビュアーに原稿を送ることもあるが、一般的には編集者が最終決定をする。これは医学・自然科学系と同じ傾向で、私たちの仮説とは反対であるが、調査の対象が心理学のためであるかもしれない。
- ⑤ 審査の匿名性は、全ての AACD Journal ではブラインド制を採用している。これは雑誌の本来の目的（つまり新しい考えや研究方法、発見の情報を伝達すること）を反映した論文を出版するように導いている。
- ⑥ 論文の却下率は、25%～80%とかなりのばらつきがある。平均すると、受け付けた原稿の59.39%は却下している。

次に、図書館学分野では、J Am Soci Infor Sci誌で学術雑誌のレフェリーについての調査を行っている。レフェリーの活動や心構え、編集過程におけるその役割についての認識、それらの背景となるレフェリーとしての経験や質についての適当な情報を明らかにする情報を収集するという目的のものである。それによると、レフェリーの約半数は評価の基準となる何らかの正式なガイドラインに基づいての審査を行ってはならず、主張性、独自性という価値を重要視する傾向がある。そして、レフェリーの75%が論文の採否の最終決定は編集者が行うということで一致している。図書館学分野の学術雑誌のレフェリーの大多数は、学術図書館や、図書館情報学の学校に籍があり、専門組織において責任ある地位を占め、図書館分野で論文を多く発表している¹⁸⁾。

社会学では、Snizek らが、すでに雑誌で発表された論文がレビュー誌で批評を受けた結果、どのような影響を受けるかについて報告している。これは、質のフィルターとしての

レフェリーシステムを通過し、すでに出版された論文についてのものであるが、著者の名声や地位によって批評を受ける確率にはあまり差がない。また、批評を受ける確率の低いカテゴリーに属する論文ほど、引用される回数が多いが、同じカテゴリーでも、批評を受けなかった論文というのは、引用される回数が少なくなっている¹²⁾。

Bakanic らは、American Sociological Review 誌のピアレビューと編集上の決定の仕方について、1977-81年の5年間の2337文献について調べている。それによると、採否の決定に、著者の専門性や論文の専門性は少ししか影響しない。レフェリーが推薦し、書き直した論文と、編集者の最終決定には58%の相違が見られた。つまり雑誌の編集者の方が論文採否の決定権は強いようである¹⁾。

そして、経営学では、Lawrenceらが Academy of Management Review(AMR)とAcademy of Management Journal(AMJ) の2誌を対象にして、レフェリーの調査を行っている。それによるとほとんどのレフェリーは原稿を受け取ってから1週間以内で全体に目を通す。“完全性”指数の高いレフェリーは原稿に目を通してから他の資料に目を通したりするのに2~3日おき、原稿を最低2回は読み、引用をチェックするという過程に力点をおく。“内容”指数の高いレフェリーは、技術的内容に力点をおき、詳細に力点をおく。

また、AMR と AMJ のレフェリーを比較すると、AMR は AMJ よりも意見を概説し、原稿を繰り返し読む傾向がある。AMR は AMJ よりも論文について同僚と議論しながらない。AMR は AMJ よりもレビューに費やす時間が多いという結果が出ている⁹⁾。

学術雑誌のリジェクト率は分野によって異なる。その変化を観察することにより、論文審査過程の特徴は明らかになると Hargans⁸⁾ は述べている。Hargansの調査では、各分野のジャーナルのリジェクト率は(表1)の通りであった。これを見ると、概ね60年代よりも80年代の方がアクセプト率が低い(=リジェクト率が高い)か、横這いである。

Zuckerman と Mertonの1971年の調査¹⁶⁾では、人文社会科学分野のリジェクト率は70~90%であった。これは、自然科学分野における20~40%という数字の倍近い。その理由としては、60年代終わりころ、社会学者数の急増が自然科学のそれを超えたため、雑誌掲載論文のスペースが不足したからと説明されている。

Journal	Average Acceptance Rates		Annual Submissions	
	Late 1960s	Early 1980s	Late 1960s	Early 1980s
Amer. Anthrop.	.31	.15	153	137
Amer. Econ. Rev.	.17	.16	643	748
Amer. J. Phys. Anth.	.75	.78	115	178
Amer. Pol. Sci. Rev.	.17	.11	294	415
Amer. Soc. Rev.	.12	.11	386	475
Analytical Chem.	.59	.67	910	1063
Biochemistry	.73	.65	937	1590
Genetics	.53	.65	280	232
I & E Chem Found.	.55	.56	241	176
I & E Chem Process	.62	.64	165	213
I & E Chem Product	.73	.83	128	163
Inorg. Chem.	.69	.82	948	1122
J. Abnormal Psychol.	.40	.18	298	358
J. Ag. & Food Chem.	.86	.76	310	454
J. Amer. Chem. Soc.	.61	.59	3269	3101
J. Appl. Psychol.	.34	.17	266	567
J. Couns. Clin. Psy.	.25	.15	612	953
J. Edu. Psychol.	.22	.21	351	409
J. Exper. Psychol.	.59	.30	645	646
J. Health & Soc. Beh.	.22	.16	141	189
J. Org. Chem.	.81	.78	1434	1741
J. Pers. & Soc. Psy.	.21	.21	774	1085
J. Phys. Chem.	.65	.76	1425	1291
Macromolecules	.84	.81	190	513
Phys. Rev.	.83	.79	3610	3916
Phys. Rev. Lett.	.48	.44	2141	2414
Psychol. Bull.	.27	.15	265	505
Psychol. Rev.	.26	.14	175	198
Soc. of Edu.	.21	.13	134	139
Soc. Psychol. Quart.	.20	.18	166	154

表1. 1960年代後半から1980年代はじめにおける30誌のアクセプト率の年間平均

しかし、必ずしもスペースの不足がリジェクト率のちがいを全て説明している訳ではないと Hargens は反論しており、コンセンサスの多様性に着目している。しかし、Hargens へのコメントとして、Cole らは、ジャーナルのリジェクト率が分野間のコンセンサスのちがいを測る指標になる、という Hargens の論文に異議を唱えており、リジェクト率の変化の意味するところはより厳しいレビューの結果なのか、又はスペース不足によるものなのか、それとも単に論文生産量の増加によるものか、等々の研究が為されており興味深い。

ジャーナルのスペース不足については、直接的な指標がないという点に論議があり、その他の指標は、プライオリティをめぐる争いや、政治力（レフェリーと投稿者間で）などの変わりやすいレベルの影響を受けやすいという問題が残る。

日本でこの種の研究（分野間のコンセンサスのちがいに関する）は見出せなかったが、以下に述べる、“オープンな国”であるアメリカとの差異の比較は、日本における社会科学分野のコンセンサスを知る上で有効と思われる。

IV. 国による科学活動の相違

国際的なレフェリーシステムによって生じる科学活動の国際的格差を研究した論文には次のようなものがある。

Zsidely¹⁵⁾らはレフェリーのみならず、雑誌を編集するにあたって論文審査に関わって、フィルターの役割を果たす編集委員のメンバーを、「ゲートキーパー」と称し、各国における国際的な科学活動への参加程度を比較している（尚、「ゲートキーパー」という用語は、Crane⁵⁾によって先に使われている）。それによると、5ヶ国以上の科学者で編集委員会が構成されている「国際的な」雑誌に関して、そのゲートキーパーの数、論文数、雑誌数の相関関係を調べたところ次のようになった。

- ① 各分野におけるゲートキーパーの数と論文数、雑誌数には強い相関関係がある。
- ② アメリカ、カナダ、イスラエル、スウェーデン、東ドイツ、西ドイツ、イギリス、フランスは、国際的な科学雑誌の割には、そのゲートキーパーの数は多く、日本やソ連は逆に少ない。
- ③ 東ドイツ、スウェーデン、イタリア、東ヨーロッパ、西ヨーロッパ、西ドイツは論文数の割にはゲートキーパーの数が多く、ソ連、カナダ、日本は逆に少ない。

以上のことから、それぞれの国における科学者がどの程度国際的な科学活動に参加しているかによって、科学活動が“オープンな”国と“閉鎖的な”国に分けた。イスラエル、スウェーデン、カナダ、イギリス、アメリカなどはオープンな国のカテゴリーに入り、これは他の研究による結果とも同様であった。閉鎖的な国は、日本、インド、ソ連などであった。科学活動がオープンな国の科学者はより“Visibleな”科学者となり、国際的な活躍をする機会も相対的に多くなるということである。

また、化学の分野において、Braun²⁾らが類似の研究を行っており、そこではさらにゲートキーパーの数と被引用率の関係やImpact factorと、各雑誌のゲートキーパーの数および引用の関係について調査している。その調査の結果は次のようである。

- ① 国別のゲートキーパーの数と、論文数引用率および生産性には相関関係がある。
- ② 分析化学雑誌のゲートキーパー608人中、237人が年間平均20回以上引用されており、113人は50回以上、58人は100回以上引用されていた。

ゲートキーパーは、雑誌編集において論文を審査し、科学的水準を維持するという役割を果たすだけでなく、その分野の科学活動においても活躍しており、影響力の大きい存在であるということである。

一方、科学的組織の小さな国（研究者数の少ない国）では、その状況に適したレフェリーシステムを探求することなく、伝統的システムを使っているが、それはむしろ危険なことであると、Pouris¹¹⁾は述べている。

そのような国では、少数の研究者が同じ分野で仕事をしており、研究者同士がお互いを個人的に知っている。このような人間関係の中での評価は、科学的な質や価値よりも、個人的興味に影響を受けやすく、また、政治的支配の問題からも、客観的で公平な評価が不可能となっている。

このような状況を打破するための改良点は、①システムを監視し、②レフェリーの数を増やし、③価値判断のための道具として量的な技術を打ち立てる、ということにある。

V. おわりに

以上、ピアレビューの最近の動向および医学以外のレフェリーシステム、国際的な科学活動におけるレフェリーシステムの位置について論じてきた。レフェリーシステムは医学・自然科学分野においてのみならず人文・社会科学系の雑誌においても存在しており、論文不採用率等に関して医学・自然科学分野の雑誌と多少の違いがみられるものの、やはり専門分野における質のコントロール、信頼性のある情報の流布という役割を担っている。

また、国際的な科学雑誌のレフェリーシステム及び論文の投稿に対する世界の国々の参加状況について、国によってかなり参加の程度が異なることが明らかになった。さらに、世界の国々を国際的な科学活動がオープンな国と閉鎖的な国とに分けられることがわかった。国際的な科学活動がオープンな国では国際的な科学雑誌のレフェリーの数も多く、他国の研究者との国際的共著論文も多いため、科学者たちはより国際的に活動するチャンスが多くなる。逆に閉鎖的な国は国際的に活動するチャンスは少ないままである。

わが国やソ連はこの“閉鎖的な”国に属するわけだが、英語圏ではないという言語上のハンディだけでなく自国の雑誌の編集委員に外国の研究者が少ないことも大きな要因の一つと考えられる。それは、雑誌論文の“情報の質”が国際的レベルで認められたものとはいえないからである。このような問題は国際的な科学活動をめざすわが国にとって早急に解決していかなければならないものである。

山崎も指摘しているように、わが国でのレフェリー・システムに関する調査研究は多くない。今回レビューを行なったような、多角的な調査を日本においても行なっていくことは、今後のわが国の国際的レベルでの科学活動の振興をはかる上でも、重要な手がかりとなっていくであろう。

Reference

1. Bakanic VS. et al. The manuscript review and decision-making process. *Am Sociol Rev*, 52 : 631-642, 1987.
2. Braun T, Bujdosó E. Gatekeeping patterns in the publication of Analytical Chemistry Research. *Talanta* 30(3):161-167, 1983.
3. Cole S, et al. Chance and consensus in peer review. *Science*, 214 : 881-886, 1981.
4. Cole S. et al. Do journal rejection rates index consensus? (Comment on Hargens, ASR, this issue). *Am Sociol Rev*, 53 : 152-156, 1988.
5. Crane D. *American Sociologist*. 2:195- ,1967.
6. Dawson J. Peer review comes of age in Chicago. *Br J Med*, 298(6686):1473-1474, 1989.
7. Garfield E. Is Japanese Science a Juggernaut? *Current Contents*, 30(46) : 3-9, 1987.
8. Hargens LL. Scholarly consensus and journal rejection rates. *Am Sociol Rev*, 53 : 139-151, 1988.
9. Jauch LW, Jerry L. What they do when they get your manuscript : A survey of academy of management reviewer practices. *Academy of Management Journal*, 32(1) : 157-173, 1989.
10. Peters DP, Ceci SI. Peer review practices of psychological journals : the fate of published articles, submitted again. *Behav Brain Sci*, 5 : 187-195, 1982.
11. Pouris A. Peer review in scientifically small countries. *R & D Management* 18(4): 333-340, 1988.
12. Snizek WE. et al. The second process of peer review : some correlates of comments published in the ASR(1947-1979). *Scientometrics*, 4(6):417-430, 1982.
13. Sun M. Peer review comes under peer review. *Science*, 244(4907) :910-912, 1989.
14. Yamazaki S. Referee systems of english-language scientific journals in Japan. *Scientometrics*, 15 : 297-303, 1989.
15. Zsindely S. et al. Editorial gatekeeping patterns in international science journals. A new science indicator. *Scientometrics* 4(1): 57-68, 1982.
16. Zuckerman HA. et al. Patterns of evaluation in science: Institutionalization, Structure and functions of the referee system. *Minerva*, 9 : 66-100, 1971.
17. Nature にはこうすれば載る!. *サイエンス*, 1989年10月号 : 40-45, 1989.
18. Reviewing the Gatekeepers : A survey of referees of library journals. *J Am Soci Infor Sci*, 39(6) : 400-7, 1988.

雑誌の引用からみた免疫学分野のコアジャーナル

大村 伸栄
川村 順子

1. はじめに

前回私達は国内発行の医学分野のコアジャーナルを選出しようと「現行医学雑誌所在目録1988年」(以下、「現行」とする)を使用して、所蔵からみたコアジャーナルを選出した¹⁾。今回その追加調査として、ある特定分野の雑誌の傾向を把握しようと試みた。これにより、雑誌のランク評価や、投稿に際しての基礎資料の一助となればと思ったわけだが、結果を得たので以下に報告する。

2. 免疫学とは

今回私達の選んだ分野は免疫学である。免疫とは、[自己]なるものと[非自己]なるものを識別し、[非自己]に対して発動されるところの生体の生理的かつ特異的な反応様式をさす。19世紀までは免疫とは「病気に対する漠然とした抵抗性、耐性」とされていたが、最近では「感染症に対する特異的な抵抗性、耐性」「病原微生物およびその成分に対する抗体の合成、および抗体以外の細胞成分によって担われる微生物に対する反応性」「病原微生物のみならず、生体にとって<非自己>と認識される物質に対する特異的な体液性および細胞性の反応」というふうに概念が要約されつつある²⁾。

このように、基礎医学と臨床医学を結ぶうえで、重要な位置にある免疫学について、その学問的な広がり把握し、かつ免疫学において重要な雑誌の選定を試みる事が出来ればと思い、調査を行った。

3. 方法

まず、前回「現行」を分析して抽出した、所蔵から見た上位346誌から、免疫学に該当すると思われる4誌(「アレルギー」、「臨床免疫」、「感染・炎症・免疫」、「Microbiology and Immunology」)を選び出し、1988年に発行されたこれらのすべての雑誌の引用分析を行った。該当する論文は総説・原著論文・短報、などであり、レター等は含まない。ここでは可能な限りSCIと同じ条件で引用を拾った。すべての引用を、カード型データベース機能をもつワープロOASYS 100を用いてデータ入力し、その結果をタイトル順、発行年順に並べ替え、リストを作成した。なお「Microbiology and Immunology」は使用言語が英語であるため、引用誌の特定が困難であるという理由から今回は分析を見送った。

また、分類の都合上、厚生省特定疾患報告書や統計書など、純粋に雑誌といえないものも多数みられたが、今回は雑誌として数えることにした。

4. 結果

各雑誌の論文数、引用文献数等は表1の通りである。どの雑誌も、国内発行誌(以下、国内誌とする)よりも国外発行誌(以下、国外誌とする)を引用する傾向がある。

表1 1988年発行雑誌の引用分析

	論文数	引用文献数	国内誌	国外誌	単行書	不明
アレルギー	94件	2004	545	1349	110	0
臨床免疫	161件	3095	377	2553	160	5
感染・炎症・免疫	23件	681	113	506	59	3

引用される順に上位10誌を国内・国外誌別にリストアップしたのが表2である。この結果、国内誌の引用文献は引用頻度が10件以下でも上位10誌以内に表れるのに対し、国外誌は最低2桁あらわれないと、上位には入らないということになった。このため、国内誌と国外誌を併せて考えると、とうてい上位には表れない国内誌が上位10誌にはいることになる。ただし、今回は日本の医学雑誌の分布を考えるという意味からも、あえて統合したランクリストは出さなかった。

「アレルギー」、「臨床免疫」、「感染・炎症・免疫」の3誌ともに上位に引用される国内誌は「医学のあゆみ」1誌のみであり、2誌に引用される国内誌は「日臨床免疫誌」「臨床血液」の2誌だけである。

また、「アレルギー」、「臨床免疫」は自誌の引用が1位にくるのに対し、「感染・炎症・免疫」は上位10誌のなかに自誌はあらわれない。さらに、厚生省特定疾患報告書を引用している雑誌は、「臨床免疫」だけである。

国外誌では、「J Immunology」、「Nature」、「Lancet」が、3誌に引用されていて、「J Clinical Invest」、「Pro NAS」、「Science」が2誌に引用されている。但し、ここでは引用頻度が上位10位以内の雑誌だけに注目したため集中の度が少ないが、範囲を広げるとかなりの雑誌が複数誌の引用頻度の上位にはいると思われる。国外誌では、研究者が目を通すべき雑誌がかなりあるといえそうである。

表2 引用頻度上位10誌

(国内誌)		(国外誌)	
			[アレルギー]
1. アレルギー	226	1. J Allergy	128
2. 小児科臨床	16	2. J Immunol	116
3. 日胸部疾患誌	15	3. Am Rev Respir Dis	78
4. アレルギーの臨床	14	4. Lancet	42
4. 医学のあゆみ	14	5. Ann Allergy	39

6. 日臨床免疫誌	10	6. Int Arch Allergy Appl	37
6. Jpn J Allergol	10	6. J Exp Med	37
7. 診療と新薬	8	8. Nature	36
8. 日児誌	7	9. Clin Allergy	31
8. 臨床薬理	7	10. J Clin Invest	30

[臨床免疫]

1. 臨床免疫	67又	55	1. J Immunol	353
2. 医学のあゆみ		35	2. J Exp Med	197
3. 厚生省特定疾患		30	3. Nature	172
4. アレルギー		14	4. Pro NAS	122
5. 臨床血液		13	5. N Engl J Med	88
6. 日本臨床		12	6. Lancet	75
7. 最新医学		10	7. Science	62
8. 日臨床免疫誌		9	8. Blood	59
9. 内科		8	9. J Clin Invest	50
9. 日内誌		8	10. Arthritis Rheum	47

[感染・炎症・免疫]

1. 感染症学雑誌	17	1. J Immunol	48
2. 臨床とウイルス	8	2. Pro NAS	36
3. 医学のあゆみ	7	3. J Exp Med	35
4. 臨床免疫	6	4. Nature	28
5. 外科	4	5. Lancet	27
5. Jpn J Med Sci Biol	4	6. J Clin Microbiol	18
6. フリーラジカルの臨床	3	7. Infect Immunol	16
6. 真菌誌	3	8. Science	15
6. 蛋白・核酸・酵素	3	9. J Clin Pathol	12
6. 臨床血液	3	10. J Infect Dis	12
6. Jpn J Cancer Res	3		

引用された文献の年度ごとのランクリストが表3である。「臨床免疫」「感染・炎症・免疫」の2誌はブラッドフォードの法則³⁾に従い、近年での引用が多く過去に遡るにつれ引用が減っているが、「アレルギー」は引用頻度がばらばらであり、法則には従わない。

?

表3 発行年から見た引用頻度

	アレルギー	臨床免疫	感染・炎症・免疫
1988年	33件	203件	74件
1987	205	542	154
1986	225	461	128
1985	223	371	84
1984	149	253	42
1983	177	207	34
1982	147	168	23
1981	117	138	14

5. 考察

この結果から以下の推測が導き出される。

1. 引用文献数からみると、国外誌からの引用が多いことから、日本の免疫学は外国からの情報に頼る割合が高い。
2. 免疫学は、複合的な学問領域をもつため、引用は臨床・基礎の多方面にまたがる。
3. 3誌ともに引用される雑誌は「医学のあゆみ」、「J Immunology」、「Nature」、「Lancet」だけであり、これはこの雑誌が研究者にとってのコアジャーナルであることがいえる。

3誌の、創刊年や発行形態に注意を向けると、「アレルギー」は日本アレルギー学会の機関誌であり、会員のみ投稿可、創刊年は3誌中1952年と一番古い。「臨床免疫」は1967年創刊の商業誌であり、誰でも自由に投稿することができる。「感染・炎症・免疫」は1971年創刊の比較的新しい雑誌で、感染や免疫学におけるの総説誌をめざしており、投稿は認めず、依頼原稿により雑誌は構成されている。

これらの条件を加味して雑誌を比較すると、「アレルギー」は会員のみに関わられた比較的狭い専門家集団のための雑誌であり、そのため免疫学に対する専門誌的な引用文献を多く持つ。

「臨床免疫」は、論文数も多い所から、免疫学におけるの速報誌的な役割を担う雑誌で、引用文献も医学総説誌からの引用が比較的多い。

「感染・炎症・免疫」は総説誌を目指しているため、免疫学に関する知識を広く掲載しているはずであるが、引用からみると、あまり注目はされていない(自誌の引用がほとんど無いところから)ようにみられる。

? ちかうではあいか

図1、図2は、引用分析により抽出した免疫学関係の雑誌の分布図である。当然、その年の学問的な流行や、特集記事の扱い等によりこの雑誌群は変化をするだろうが、この分布図を元に免疫学の学問的な広がりを探求することが次の課題である。

6.まとめ

前回は医・歯・薬学図書館の所蔵状況からみたコアジャーナルの抽出を試みた。今回はその調査をもとに、引用の分析を行い、研究者が比較的良く使う雑誌を抽出してみた。その結果、「医学のあゆみ」、「J Immunology」、「Nature」、「Lancet」が「アレルギー」、「臨床免疫」、「感染・炎症・免疫」において比較的多く引用されていることがわかったが、免疫学の専門誌は「J Immunology」だけで、後の雑誌は総説誌ばかりである。国内誌が「医学のあゆみ」誌しかでてこなかったのは、引用を分析した雑誌が免疫学の中でも臨床系の雑誌ばかりの、3誌と少ないこと、また1988年1年のみを分析したせいもあると思われる。対象誌を増やし、そのうえで雑誌間の2-STEP MAP が作成できれば、免疫学の学問的な広がり把握するうえでの重要な資料になると思うが、これは今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 1) 大村伸栄ほか:国内発行の医学分野のコアジャーナル。学術雑誌要報告,2:50-75, 1989.
- 2) 医科学大事典46. 東京, 講談社.1983.
- 3) 仲本秀四郎:ブラッドフォードの法則. ドクメンテーション研究,33(5): 217-227, 1983.
- 4) Garfield E:変わらない主要医学雑誌のインパクト(窪田輝蔵訳). 医学図書館,34(2): 140-148,1987.
- 5) 水津正義:引用文献分析による国内発行歯学雑誌の評価. 医学図書館員セミナー論文集, 13:17-24,1986.
- 6) 田中久文:国内の総合的臨床医学雑誌における引用文献調査. 医学図書館,11(5):221-233,1964.
- 7) 山崎茂明:引用関係マップによる学術雑誌コレクションの分析. 医学図書館,34(1):25-32,1987.
- 8) 高山正也, 磯部修子:専門・実用雑誌のコアジャーナル選定方法. Library and Information Science,24:93-112,1986.
- 9) 土井六郎:引用文献の計測による園芸学分野のKey Journal. 大学図書館研究,6:43-50, 1975.

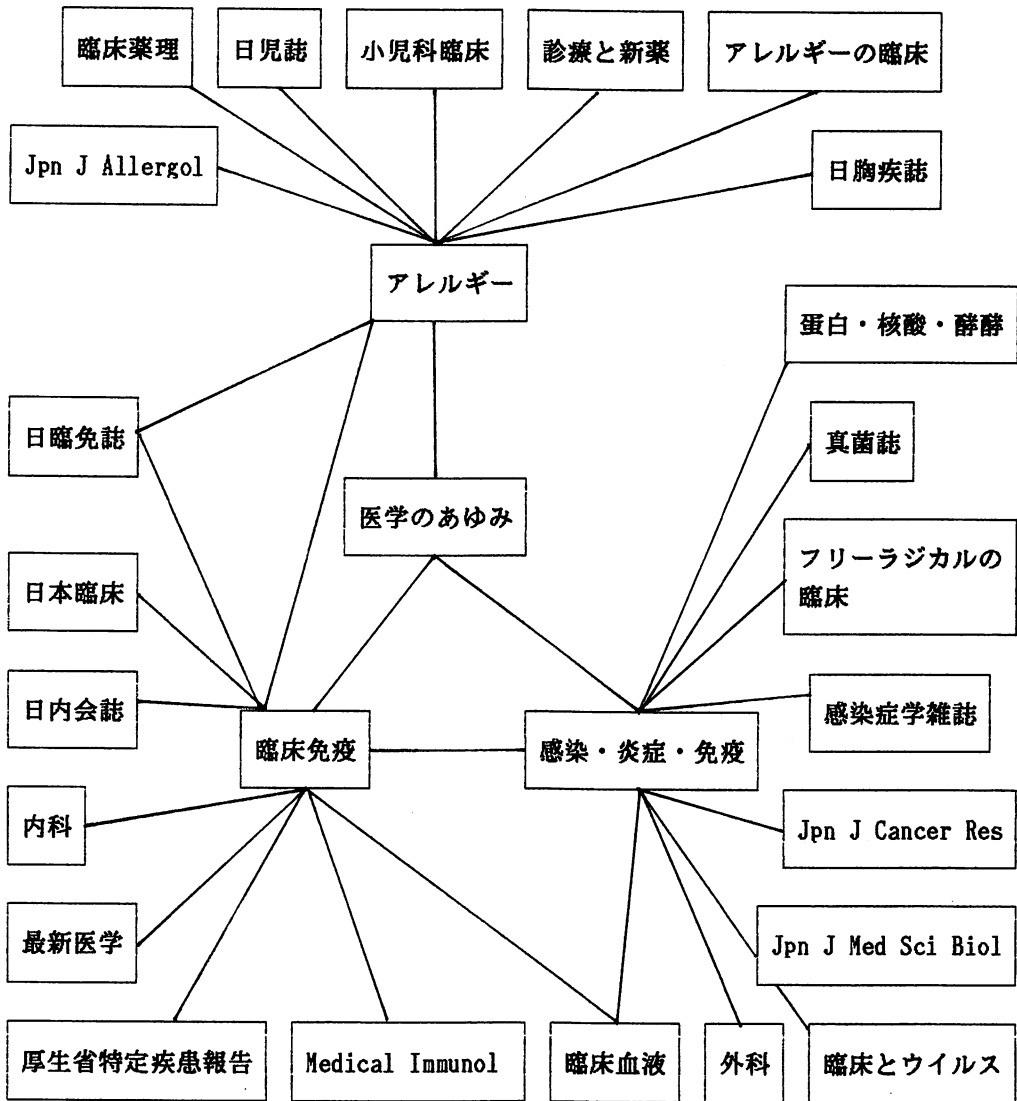


図1 免疫学の学問的な広がり(国内誌)

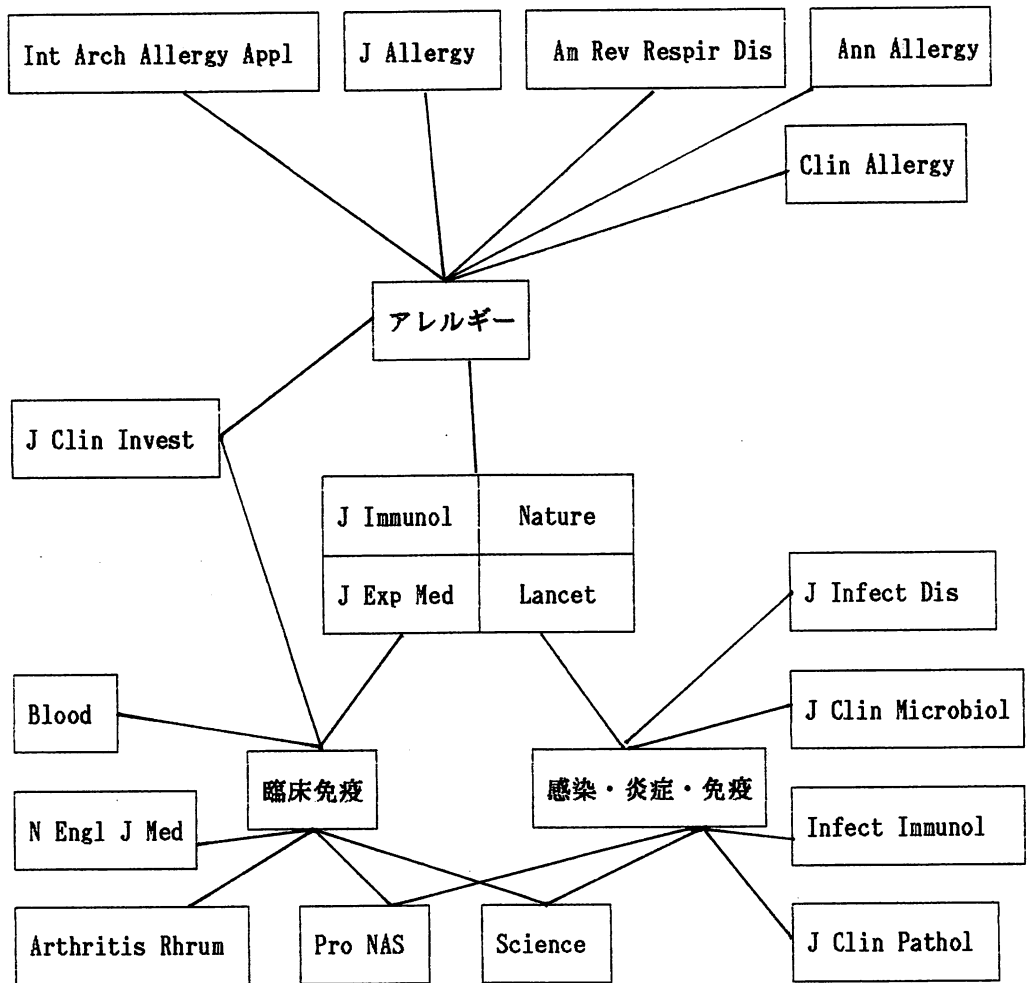


図2 免疫学の学問的な広がり(国外誌)

生化学分野の国内発行コアジャーナル

江口 敏一

1. はじめに

医学とその関連分野における国内の重要雑誌を導き出すために、以前、現行医学雑誌所在目録による所蔵館数調査¹⁾を行い、所蔵コアジャーナルを選出した。しかしその調査結果導き出されたコアジャーナルはある一面からみたものであり総合的なものではなかった。そこでより総合的なコアジャーナルを選出するために引用分析による調査を行った。しかしながら医学とその関連分野の全分野を調査するには膨大な時間がかかってしまうので、ここでは生化学分野に対象を絞り調査を行った。

2. 調査対象と方法

以前に行った所蔵館数調査¹⁾において、生化学分野で上位の雑誌であった蛋白質・核酸・酵素、生化学、Journal of Biochemistry の3誌を対象として引用文献の分析を行った。この3誌に掲載されている論文に引用されている文献を分析したわけであるが、各誌とも1988年の1年間に発行されたもののうち臨時増刊号や別冊を除く通常の号を調査対象とした。そして、引用分析を行う対象の論文は原著論文と総説論文とした。

調査方法としては、各誌に掲載されている論文の引用文献のなかで国内発行の雑誌に掲載された論文のみを抜き出し、その論文の掲載されている雑誌の数を集計した。ただし、雑誌に投稿中の論文はほんとうにその雑誌に掲載されるかどうかはわからないので除外し、すでに掲載されたものあるいは現在印刷中のものを対象とした。また、雑誌によって論文数や引用文献数は違うために単純にその数を合計することには問題がある。そこで雑誌の違いによる格差を少なくするために、対象雑誌ごとに割合をだしその割合を合計してその数の大きいものを引用頻度の高い雑誌として評価した。

その明記する
べき

何の割合か

3. 結果と考察

a) 引用頻度からみた分析

引用文献を雑誌ごとに集計した結果が表1である。対象の各3誌とその3誌の引用件数の割合を足したものである合計に分け、雑誌を合計での多い順で配列している。1位は圧倒的な大差でJournal of Biochemistryである。合計でトップであるだけでなく各3誌においても引用頻度が最も高くなっている。そして1ランク下がって2位に生化学、3位に蛋白質・核酸・酵素がはいっている。4位がAgricultural Biological Chemistryで、それ以下は特に目だつた違いはない。そこで、この引用頻度調査から引用コアジャーナルはJournal of Biochemistry、生化学、蛋白質・核酸・酵素、Agricultural Biological Chemistryであると言える。

大1位に
表1

自誌引用数が多いのか

表1.

雑誌名	蛋白質・核酸・酵素 引用件数 (%)	生化学 引用件数 (%)	J.Biochem. 引用件数 (%)	合計
J.Biochem.	74(20.7)	35(61.4)	913(81.7)	163.8
生化学	18(5.0)	10(17.5)	28(2.5)	25.0
蛋白質・核酸・酵素	56(15.6)	4(7.0)	2(0.2)	22.8
Agr.Biol.Chem.	12(3.3)	3(5.2)	52(4.6)	13.1
細胞工学	17(4.7)	1(1.7)	0	6.4
実験医学	7(1.9)	2(3.5)	0	5.4
蛋白質・核酸・酵素別冊	5(1.4)	2(3.5)	0	4.9
代謝	11(3.0)	1(1.7)	0	4.7
Jpn.J.Exp.Med.	2(0.6)	2(3.5)	7(0.6)	4.7
Proc.Jpn.Acad.	2(0.6)	2(3.5)	7(0.6)	4.7
生体の科学	3(0.8)	2(3.5)	0	4.3
化学と生物	2(0.6)	2(3.5)	1(0.1)	4.2
癌と化学療法	8(2.2)	1(1.7)	1(0.1)	4.0
Chem.Pharm.Bull.	4(1.1)	0	31(2.7)	3.8
現代化学	7(1.9)	1(1.7)	0	3.6
Jpn.J.Cancer Res.	8(2.2)	0	10(0.9)	3.1
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
合計	357	57	1117	

b) 引用頻度と所蔵館数による分析

この引用頻度調査の結果に以前の所蔵館数調査¹⁾の結果をかけあわせたものが表2である。ここでは、引用頻度調査で上位であった雑誌を引用頻度(表1の合計の数)と所蔵館数からみている。上位3誌は所蔵館数調査でも上位であり、この3誌は生化学分野における国内発行のコアジャーナルであると言える。しかし、4位のAgr.Biol.Chem.は所蔵館数は多くなく、このことは所蔵館数の多い雑誌は重要であるという所蔵館数調査と引用される文献は重要であるという引用分析調査との食い違いの一端を示している。

また、この上位3誌の相互の引用関係をみると、各誌ともJournal of Biochemistryを一番多く引用している。しかし、各誌とも自誌を一番多く引用しており、掲載誌の論文を多く引用する傾向があることがわかる。

表 2.

雑誌名	引用頻度	所蔵館数
J.Biochem.	163.8	118
生化学	25.0	114
蛋白質・核酸・酵素	22.8	121
Agr.Biol.Chem.	13.1	52

4. おわりに

このように、引用分析調査によって生化学分野における国内発行のコアジャーナルが所蔵館数調査からみてもJournal of Biochemistry と生化学と蛋白質・核酸・酵素であることがわかった。しかし、この3誌は国内における雑誌で重要なものであつて生化学分野において全世界的に重要な雑誌ではないということに気を付けなくてはならない。この調査で対象となつた全引用文献数15,116 (蛋白質・核酸・酵素 4,108、生化学 1,033、Journal of Biochemistry 9,975) のうち1,531 (10%) が今回分析の対象となつた国内発行の雑誌の論文であり、残りの13,585 (90%) は主に外国雑誌で、その他に図書や、学会報告集、学位論文、私信、国内雑誌に投稿中のものなどであつた。このように国内雑誌に掲載されている引用文献であるにもかかわらず全引用文献中に国内雑誌の占める割合はあまりにも少なく、残念ながら生化学分野においては国内雑誌は国外雑誌に比べて重要な位置にいないようである。

本誌か

引用文献

1)大村伸栄ほか：国内発行の医学分野のコアジャーナル。学術雑誌塾報告，2：50-75，1989.

参考文献

- 2)緑川信之：引用分析の方法とその応用。医学図書館，28(2)：83-91，1981.
- 3)浅井勇夫：引用分析。オペレーションズ・リサーチ，3月号：152-157，1986.
- 4)田中久夫：国内の総合的臨床医学雑誌における引用文献調査。医学図書館，11(5)：221-233，1964.

帝京大学医学図書館の貸出統計から見た国内発行の医学分野のコアジャーナル

小島 久美子

I. はじめに

前回私達は、コアジャーナルの選出方法として、図書館における所蔵調査による方法を取り、「現行医学雑誌所在目録 1988」(以下、現行とする)の「国内雑誌篇」を用いて、「所蔵コアジャーナル」として、現行の収録館136館の50%にあたる68館が所蔵している上位346誌(以下上位346誌とする)を抽出した¹⁾。この方法はコアジャーナルの選出方法の一部であるため、今回は図書館の利用調査による方法として帝京大学医学図書館(以下、当館とする)の貸出統計について、上位346誌との関係のみをみた。

利用調査の方法としては、引用文献の分析による方法、利用者に対する個別のアンケート等による方法、図書館における利用の記録による方法があるが、今回は図書館における利用の記録による方法を用いた。しかし、当館では閲覧、複写の利用は記録していないので、貸出の記録を用いた。そのため、正確な「利用」の調査ではない。閲覧、複写の利用を把握するには莫大な労力が必要であり、現状ではほぼ不可能であろう。そして図書館における利用を正確に把握することが雑誌の利用の実態をつかむことにはつながらない。雑誌の利用の実態をつかむには、個人や教室で購読している雑誌の利用も考慮しなければならないと思われる。このような利用を数としてとらえることもまた非常に難しい。また、ある館の利用の統計は、調査の対象となる利用者の数や、傾向、そして教室で購入している雑誌のタイトルによって偏りが生じることが予想される。しかし、コアジャーナルの選出にあたって、図書館における利用という視点からも考察を加えることは必要と思われるため、今回はごく狭い範囲の記録であるが当館の貸出記録を用いることとした。

II. 方法

前回リストアップした上位346誌と、当館の1985年より1988年まで4年間の貸出統計より上位102誌(以下、上位102誌とする)と重複する部分をリストアップした。このとき、上位346誌に含まれているが、利用統計で上位102誌に及ばなかった雑誌のうち、貸出が多くない理由として教室の費用で購入していることが考えられるものについては別にリストアップし、コアジャーナルである可能性を否定しないこととした。

III. 結果

346誌中当館で所蔵しているものは314誌である。このうち上位102誌と重複するのは66誌、重ならないものは36誌であった。重複する66誌を先に作成した分類(私案)に従って項目別に表したのが表1である。このタイトルはすべて購入によって入手している。また80%以上が商業誌である。

一方、上位346誌に含まれているが上位102誌と重複しない雑誌のうち、貸出が多くない理由の1つとして、教室で所蔵していることが考えられる22誌を表2に表した。

IV. まとめ

国内発行の雑誌のある集合について、明らかにコアジャーナルであると断言することは難しい。明らかにコアであるといえる雑誌群が存在するかどうか、またそれを特定することに意味がある雑誌群なのかどうかはつきりとは解らない。

しかし、「所蔵コアジャーナル」であり、当館で貸出の多いこの66誌は、ある程度の偏りが考えられるとはいえコアジャーナルの一部であるといえるのではないか。今回は所蔵が多く貸出の多い雑誌を、研究者が使いやすい環境にあり、多く借り出して利用しているといった意味でコアジャーナルとしたが、コアというよりはむしろ一般的なジャーナルであり、多く利用されているジャーナルといった表現の方がふさわしいかもしれない。また、上位346誌と上位102誌を対象とし、当初から数を絞っているので、リストからもれている雑誌もかなりあると思われる。

国内発行のみ

当館で貸出

今回、所蔵及び利用という角度から、コアジャーナルに近い集合を浮かび上がらせることは出来ないかと調査してみたが、コアジャーナルについて考えるには、いろいろな角度からの総合的判断が必要と思われる。

参考文献

- 1) 大村伸栄ほか: 国内発行の医学分野のコアジャーナル. 学術雑誌塾報告, 2:50-75, 1989.

この4年間の貸出統計の数字を再検討する

TKCで「利用」をとりこむことの困難な理由
に教育所蔵

他にどうか、もろろ TKCの現状を書て必要あり

102誌のランク リストを提出する
化考あり

貸出関連のものについて詳細に書いてほしい

<医学一般>

医学のあゆみ
日本医事新報
最新医学
日本臨床
総合臨床
臨床病理
治療
診断と治療
内科
Medicina
日本内科学会雑誌
臨床と研究
からだの科学
臨床栄養
精神神経学雑誌

<免疫学>

臨床免疫

<麻酔>

麻酔

<癌>

癌の臨床
癌と化学療法

<内分泌疾患>

代謝
ホルモンと臨床

<内科学>

臨床科学
日本消化器病学会雑誌
胃と腸
肝臓

<血液学>

日本血液学会雑誌
臨床血液

<看護学>

看護学雑誌
看護技術

<産婦人科学>

産婦人科治療
周産期医学

<整形外科>

整形外科

<耳鼻咽喉科>

日本耳鼻咽喉科学会会報
耳鼻咽喉科臨床

<小児科学>

小児科臨床
小児科診療
小児外科
小児内科

<精神科学>

神経研究の進歩
Brain and Nerve
精神医学
臨床神経学

<放射線医学>

臨床放射線

<呼吸・循環>

呼吸と循環

<外科学>

手術
外科
臨床外科
外科治療
外科診療

<泌尿器科>

日本泌尿器科学会雑誌

<社会医学>

国民福祉の動向
厚生指標別冊
保険と年金の動向
厚生指標別冊
厚生指標

<病理学>

臨床検査

<薬理・薬学>

薬局
日本化学療法学会雑誌

<衛生学>

国民衛生の動向
厚生指標別冊
感染症学雑誌

<生化学>

生体の科学
蛋白質・核酸・酵素
Journal of
Biochemistry
生化学
蛋白質・核酸・酵素 別冊

<細胞・組織>

細胞

<化学>

化学
現代化学

表1 上位 346誌と

上位 102誌との重複

医学教育
Modern Medicine
日経メディカル
日本癌治療学会誌
心臓
日本歯科麻酔学会誌
日本整形外科学会雑誌
臨床整形外科
整形・災害外科
耳鼻咽喉科・頭頸部外科
日本小児科学会雑誌
小児科
肺と心
日本胸部臨床
形成外科
胸部外科
臨床泌尿器科
病院
公衆衛生
Microbiology and Immunology
Archives of Histology and Cytology
化学と生物

表2 上位 346誌と教室の所蔵の重複
(表1に含まれるものは除く)

情報は現地調達

廣田 住友

1. はじめに

私は先頃、アメリカ合衆国に約1ヶ月間滞在する機会を得ました。動機は、アメリカ大リーグがどんなに楽しいものかを自分で確かめるためでした。「大リーグは楽しい」とよく言われていますが、何が楽しいのか。そして、スポーツを通して、アメリカの生活風土をも自分自身で感じたかったからでした。

幸い、山崎茂明氏が7月から9月までの3ヶ月間、アメリカ医学教育に関する調査のためフィラデルフィア(Philadelphia)の College of Physicians of Philadelphia Library に訪問研究員として短期留学する事を聞いていました。そして、司馬遼太郎著『アメリカ素描』(新潮文庫,1989)の「フィラデルフィア・資本の論理」の章を目にしました。ここでは、Philadelphiaは独立宣言の地で、19世紀末には重工業が栄えた町であったが現在はその跡だけが廃墟化し、河畔の盛衰が感じ取られると記されていました。Philadelphiaは、大リーグナショナルリーグのPhilliesの本拠地で、これはおもしろそうだと思います。そこで、山崎氏に出国前の忙しい中「9月にPhiladelphiaに行きます」と伝えたところ、快い返事を頂きました。後日、山崎氏よりアメリカ生活2週間の奮闘ぶりのお便りが届きました。

2. 現地情報の利用

アメリカに着いて、まず私を感じたことは、日本では手に入れない情報が、現地で自分自身が行動することにより、得られることがわかりました。以下にこのアメリカ滞在中に、現地で調達した有益な情報を列挙します。

- ・山崎氏の手紙に同封されて来た『Philadelphia Calender of Events May-October 1989』と Philadelphia の Downtown Map
- ・9月11日付のThe Philadelphia Inquirer の全米オープンテニスの記事
- ・The Dallas Morning News で読んだVirginia Slims of Dallasテニス大会の記事
次章で、これらがどのように役立ったのかを説明します。

3. 現地情報について

a. 現地のパンフレット、マップの情報

山崎氏に送って頂いた『Philadelphia Calender of Events May-October 1989』と Philadelphiaの Downtown Map は、おそらく山崎氏が観光局で入手されたもので、前者の表紙は楽しいデザインになっています(図1)。この28ページからなる小冊子は、期間中に開催されるイベントの情報誌です。最後のSports欄に、地元のPhiladelphia Philliesのスケジュールが図3のように掲載されていました。



図1 表紙



図2 裏表紙

Sports
 Baseball (Professional)
 The Phillies, Veterans Stadium,
 Broad St. & Pattison Ave. Home
 schedule :

Sept. 11-13, New York, 7:35pm;
 Sept. 15, St. Louis, 7:35pm;
 Sept. 16, St. Louis, 7:05pm;
 Sept. 17, St. Louis, 1:35pm;
 Sept. 29, Montreal, 7:35pm;
 Sept. 30, Montreal, 7:05pm.

図3 Sports欄

この図3のスケジュール表がどれだけ私のこの旅行計画をより具体化させ、現実のものにしたことでしょうか。この表を中心に計画を立て、さらに、テニスの試合も観戦したくて、日程を調べてみると、

9/18~24 Virginia Slims of Dallas

が開催されるのがわかり、これも予定に入れ、Tシャツ、スニーカー、リュックサックという出で立ちで9月10日夕方、日本を発ちました。

マップは自分が移動する距離が長い時には、縮尺比の大きなものが役立ちますから、交通機関での移動中は日本で用意したもので間に合いました。しかし、自分の足だけが頼りの時には、詳しくて正確なマップが要求され、現地で入手した観光局発行のマップが、利用に便利でした。その白地図のような地図に、自分で行動したことを肉づけしていくのは楽しいものでした。それで、私は訪れた街では最初に観光局に行き、パンフレット、マップ等を手に入れれば何とか成ると感じ、実際、それで上手くいきました。

しかし、パンフレット、マップ等は、自分が行動する前に読んだり、見たりし参考となるだけで、いざ行動するとなると不安で緊張するものです。その状況を打ち破る方法は、とにかくやってみることしかありません。不安であれば、人に尋ねてみるのが一番だと思います。その時、パンフレット、マップを持っていると説明に便利で役に立ちました。また、人に声を掛けることによって、会話が始まり楽しくなりました。

b. 新聞から得た情報

毎日欠かさず、新聞を街角やハンバーガーショップで朝食を取りながら読み、必要なページはいつもバックに入れていました。なぜかという、新聞には私にも何となく理解できる記事があったからです。その一つが図4の記事です。私はPhiladelphiaに、9月10日の夜に着き、11日(月曜)が最初に迎えた朝でした。街角で35セントの地元新聞 The Philadelphia Inquirer を買いました。アメリカの新聞は、Metro, Business, Sports, Artなどのセクション別になっていて、それぞれの束が一部の新聞となっていました。Sports

セクションを見ると、一面のトップ記事は、図4の"Becker Bags First U.S. Open"で、私は全米オープンテニスの優勝者が誰であるのかを知りました。

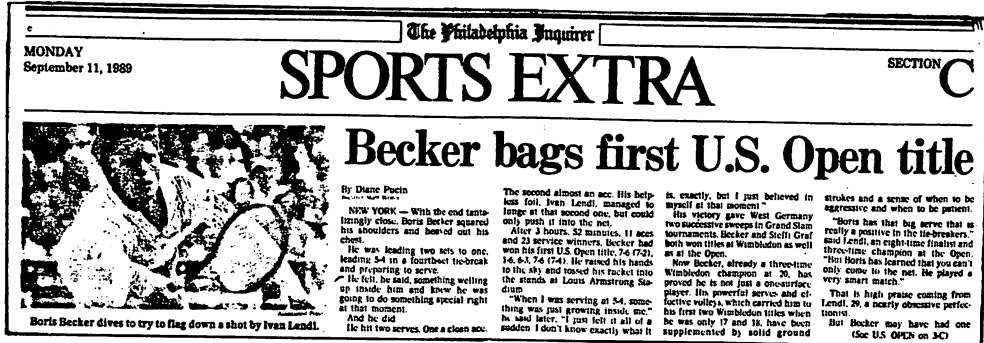


図4 The Philadelphia Inquirer

この日の一面は、全米オープンテニスの下には、Philadelphiaのプロフットボールチーム Philadelphia Eaglesの勝利の記事がありました。昨日からNFL(National Football League)のレギュラーシーズンが始まったようでした。その下には、今年ナショナルリーグ東地区での最下位が決定している Philadelphia Philliesの見出し記事がありました。図4の一面から三面に続いている記事を詳しく読んでみると、記事内容が理解でき、自分が興味あることには自然と引かれ、楽しくなれると感じました。

アメリカの新聞を見て、Sportsセクションには知っていることや理解できるものが多くあることに、私は安らぎを憶えました。というのは、アメリカの土を踏んでから、もろもろのアメリカ社会のシステムを知らない自分は、それらを理解していくのが困難でした。私はアメリカに独り、はじかれている気がしていました。やっと、自分にもわかることを見つめることができ、それまでの不安が徐々に解かれていきました。

もう一つの役立った新聞記事は、テニス大会の会場 Moody Coliseum を発見できた記事でした。テニス大会のVirginia Slims of Dallas (以下、VS Dallas)の会場は、

Moody Coliseum
1620 Airline Drive, Dallas, TEXAS
Tel. 214-7508 ex. 362

と、日本で調べてわかっていましたが、その会場がDallasのどこに位置するのかわかりませんでした。それで、Free Library of Philadelphia(図6参照)に足を運び、その中のMap CollectionのLibrarianに尋ねてみました。すると、彼は様々な地図を出し調べてくれました。Dallas市の市街地図、Dallas市の道路地図、TEXAS州の施設案内地図等。しかし、Moody Coliseumは、どの地図にも記載がなく、位置が確認できませんでした。彼は最後には、Yellow Pageで電話番号を確認し、自分で電話を掛けて聞いて下さいと申し訳なさそうに言ってくれました。それで、私はとにかく現地に行けば何とかかなると思い、Dallasに着いたら先ず新聞を手に入れようと考え、長距離バスで一日半かけ、東海岸のPhiladelphiaから中南部のDallasに向いました。

9月19日早朝、Dallasに着きバスディーポで朝食を取りながら地元紙The Dallas Morning Newsを広げました。そして、VS Dallasの記事(図5)を見つけて、その中から、University ParkにあるSMU(Southern Methodist University)'Moody Coliseumの情報が得られました。Moody Coliseumは、SMU構内にある大学施設で、そのために、地図には記載がないことが理解できました。そして、市観光局で詳しいことを聞き、バスタイムテーブルも手に入れて、その日の午前中にMoody Coliseumに到着出来ました。Dallasで4日間楽しくテニス観戦ができ、一週間ぶりに、無事Philadelphiaに戻りました。

24日にはPhiladelphiaに戻り、Philadelphia Eagles VS San Francisco 49ersのアメリカンフットボールの試合を観戦しました。このために、24日のVS Dallas決勝戦は、観戦できませんでした。25日付けのThe Philadelphia Inquirerで結果を知ろうと思いましたが、そこには、次の6行の記事があっただけでした。

Top-seeded Martina Navratilova saved two set points in the first set and went on to beat Yugoslavia teenager Monica Seles, 7-6(7-2) 6-3, to win an unprecedented ninth Dallas women's championship title.

なお、The New York Timesでは、この事に関する記事を読むことができませんでした。私は、アメリカの広さをまたここで知らされました。おそらく、The Dallas Morning NewsのSportsセクションの一面には、Martina Navratilovaの顔写真があったことでしょう。

4. アメリカの新聞と Free Library of Philadelphia の利用について

アメリカ合衆国は、国土が広く、四つの時間帯があり、新聞は地方紙が中心です。有名なThe New York TimesやThe Washington Postもそれぞれの都市の地方紙です。例外として、最近USA Todayが全国紙として成功していると聞きました。よって、一般的に記事は地元優先で、地元のことほど詳しい記事が多いようです。私は、今回訪れたそれぞれの都市で6紙の新聞を読む機会が得られました。以下に、この6紙のSportsセクションの私の感想を記しておきます。

- The Philadelphia Inquirer

土地柄特に地元びいきのため、地元チームの記事は詳しく豊富

- The New York Times

日本の全国紙のスポーツ面のように記事内容はコンパクト

Smith ends jinx at Slims

Victory over amateur snaps Dallas losing skid

By Marjorie Herrera Lewis

UNIVERSITY PARK — With shiny hair, rosin ruff repaired and mind at ease, Dallas' Anne Smith is having fun again. And with the wisdom of a 30-year-old tour veteran, Smith taught a lesson to amateur Amy Prazier on the eve of Prazier's 17th birthday.

Age counts. And Smith drew on the experience that comes with age Monday night to overcome nerves, a shaky serve and a slow start to defeat Prazier, 64, 63, in the first round of the Virginia Slims of Dallas at SMU's Moody Coliseum. Fourth-seeded Monica Seles survived a first-round scare, overcoming a spirited effort by Bettina Rupee to advance to the second round with a 67 (67), 64, 60 victory.

Seles led the first set, 51, but her game came unraveled as Bunge forced the tiebreaker. The sport was so deflating to Seles that she said she didn't realize she had lost the set.

"At 51, I didn't know what was happening to me," Seles said. "When she won the tiebreaker, I didn't know what the score was. I was lucky, I guess, to win the second set."

Seles, who couldn't put her finger on why she lost her concentration, won the second set by breaking Bunge in game nine to take a 5-4 lead. She then served out the set.

"If I lost that 5-4 game, I probably would have lost the match," Seles

Seles said. SMITH on Page 2B.

図5 The Dallas Morning News

- ・The Knoxville Journal
地元のプロ組織がないため、カレッジ記事中心
- ・The Dallas Morning News
野球、フットボールの記事は詳しく、フットボールでは記者の勝敗予想あり
- ・The Boston Globe (ただし、Bostonに行かずに、この新聞はAmtrak内で拾ったもの)
論説記事が多い
- ・Seattle Post-Intelligencer
スポーツ記事はあまり力を入れていないようで、経済や政治の記事が印象的

それぞれ特徴的な記事を掲載していますが、それぞれの構成内容はだいたい同じで、大リーグ、NFL、College Football、Horse Racing等が主な話題でした。記事は全て署名記事で、論説記事にはそのライターの写真があり親しみが持てました。参考に、9月25日月曜日付け The New York Times とThe Philadelphia Inquirer のSportsセクションの記事構成を挙げておきます。

紙名	The New York Times	The Philadelphia Inquirer
セクション名	Sports Monday	Sports Extra
1p	一面	一面
2p	Sports World Specials	American League/National League
3p	"	Phillies Note
4p	American League/National League	Eagles Note
5p	NFL	"
6p	NFL N.Y.Giants,N.Y.Jets 特集	NFL Summary & Scores
7p	NFL Summary	"
8p	College Football	College Football,Horse Racing
9p	Horse Racing,etc.	Horse Racing
10p	Golf,etc.	High School Football, 広告
11p	NFL Standing	etc.広告
12p	Baseball Standing,Box Scores	Sports in Brief

私は、9月11日付けのThe New York Timesを見たいために、Free Library of Philadelphia (図6)を訪れました。Newspaper Collectionに行き、The New York TimesとThe Philadelphia Inquirerを閲覧し、必要な箇所をコピーしました。The Dallas Morning Newsも所蔵していることを知り、9月25日付けのをリクエストしてみました。すると、各地の主要都市の新聞は一週間遅れで、しかも日曜版しか所蔵してなく、閲覧不可能でした。Martina Navratilova のVS Dallas

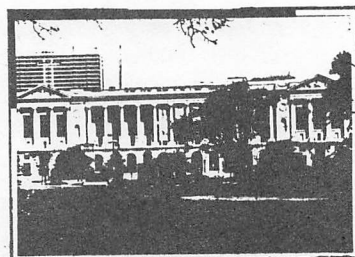


図6 Free Library of Phila

優勝コメントを読めると思ったのに残念でした。

このFree Library of Philadelphiaを延べ5日利用した経験から、私はアメリカの新聞の種類やその比較、また、アメリカの各種図書館の新聞の所蔵について調べてみるのはおもしろいと思いました。

5. おわりに

私は、アメリカのスポーツを通しアメリカの社会システムの様々なことを自分のものにすることが出来ました。例えば、チケットの入手方法、新聞の読み方、バスの乗り方、地下鉄の乗り方、図書館利用等々、を理解できました。これらは、すべて一回経験してしまうとそれまでの不安が嘘のように楽しいものとなります。

1ヶ月のアメリカ滞在により、アメリカのことは日本よりもアメリカ、それもアメリカのそれぞれの都市や街で手に入る情報が有益である事がわかり、情報は現地（もしくは、源地）から手に入れてこそ楽しいと知り得ました。それには、時間もかかり、余分なお金を支払いました。このような様々な遊びがあつてこそ、自分が求めているものを捜し当てることができると感じました。

10月1日の午後、僕はPhilliesの最終戦を観戦しにVeterans Stadiumに7回目の足を運びました。そこで、子供達の歓喜とともに、人々が今日で野球のシーズンが終了してしまうんだなあ、という気持ちを持っていることを感じ、僕は本当にアメリカで野球を楽しんだことに満足感を覚えました。翌日のThe Philadelphia Inquirer のMetro セクションには、"Die-hard Phils fans catch the bitter end"の記事が淋しそうに掲載されました。

大阪に住みついて九ヶ月になる。大阪は文化も習慣も平均化してしまった感のある日本の他の地方とは余りにもかけ離れた都市である。人々は大阪弁と呼ばれる奇妙なアクセントの言葉を話し、異様とも思えるスピードで歩き回っている。夏は思いきり暑苦しいし、秋はあつというまにすぎ、すぐ冬に入ってしまう。気温の変化も朝と日中、夜とでは、相当な開きがある。

キタ（梅田付近）とミナミ（心斎橋、難波）の地下街はまるで迷路のようだ。ビルの地下商店街をそのまま移し替えただけの八重洲や新宿の地下街に比べれば確かに”街”となっている。古い道と新しい道が生き物のように有機的につながり絶えず変化と増殖を続けている。キタの地下街には美容院、銭湯、パチンコ屋、赤ちようちんのさがった立ち呑み屋（東京には見られなくなっている）などがあり、三番街には人工の川までが流れている。ないのは空と海と車と飛行機ぐらいだ。阪神百貨店の北側には各県名店街があり、なんでもかんでも日本のお土産が集まってしまう街である。だからこそ梅田地下街は大阪の顔といってよい。

大阪の良さは大都市のわりには”街”の大きさが適当である。キタからミナミまでの約10kmには梅田から始まって中之島、御堂筋のビジネス街、心斎橋、難波、千日前、日本橋、新世界、阿倍野一一と続く。歩くのが好きな者にとっては、半日くらいで歩いて見られるので大変便利な街である。

キタとミナミは複数のターミナルのある”街”だ。キタでは阪急は北と西に、阪神は西に、近くの京阪は北である。キタの向こうには京都と神戸というしゃれた文化がある街に続いている。ミナミには近鉄が東に、南海が南に伸びている。その延長上には奈良や歌山の古い歴史と潮の匂いがしている。数年後には、世界への窓口が開かれようとしている。

関西人は”勤勉努力・着実忍耐の気風”と、”冒険的・先駆的精神”など、他人のやらないことや人の嫌がることをやる、一見矛盾する要素を持っている。東京人は”お高くとまっている””エエカッコシイ（見栄っ張り）”ということになる。関西人は、ほしいものと必要なものを、区別している。必要なものには、お金を出す、ほしいものにはお金を出さない。ところが、東京人は、必要と思つたものも、欲しいと思つたものも同様に買ってしまう。しかも、ローンを組んでムリしても買ってしまう。

関西人はタテマエよりホンネを重視し、東京人は見栄、プライド、対面を重視している。関西人は独創性を大切に、へこたれないが、東京人はすぐにへこたれてしまう。関西人は決断が早いし、言うことはハッキリしていて、へこたれずに、やるきがあればどうにでもなると考えている。東京はタテ社会であり、関西はヨコ社会である。

関西は、対面を重んじ分限をわきまえて、始末、算用、才覚を意識している。また思い切りがよく、場合によっては見切りを早くつけ、自助の精神が強く、権力にたよらない。このため実力本位の行動主義が生まれ、理屈を離れて、決着の早さを喜ぶ実践をともなつた、能率主義から、あつと驚くような突飛なことを、無限の希望と自覚とを持ってやって

のけてしまう。このため、がさつで水くさい、向こうみずの性格を関西人は持っている。これは他に、物事にこだわらない屈託のない自らの意識を強めている。

東京人は気がいい、そして義理人情に厚いのにに対して、関西人はしつこく、ねばっこい、そして安ければいい、と言う違いがある。お金の使い方も違って、東京人は小出しに細かく使い、関西人は回数は少なくハデに思い切った使う。

関西人がよく使う言葉をあげてみると、「死に金つかわず生き金つかえ」、「損して得取れ」、「小利を積んで大となす」、「始末して使う時気張れ」、「もったいない」、「世間様のおかげをうける」、「高機をのがすな」、「やらいでか」、「やってみなはれ」、「己の才覚でのしあがれ」、「ほんまもんで勝負しろ」、「人知れず社会につくせ」といったものがある。これらは、自己のチャレンジ精神によって、不可能であったことを、可能へと導く発想である。

以上のように、関西の良いところを取入れて、東京に集積しすぎる情報を迅速正確に判断し、いくぶんのカッコよさと感性といった東京の得意とする領域を併せ持てば、面白くなると思う。今まで住み慣れた場所から、新しい場所に移ることがあれば、早く新しい場所を理解し、自分なりに今までのものに、新しいものをプラスにしていくチャンスだと思う。こういうチャンスは、滅多にないから有効に使い、新たなチャレンジを、行うことである。地方から、東京をながめるのも一考で、結構面白いと思う。

(楽園に愚人と過ごすより、地獄で賢人と過ごす方が良い)

夏目漱石の解剖所見

堤 容子

『日本消化機病学会雑誌』の第16巻第2号(大正6年)のpp.105-117に「夏目漱石氏剖検(標本供覧)」と題した長与又郎医学博士の講演が収録されていることを御存知の方はいらっしゃるだろうか。勤め始めるようになってから夏目漱石を読み始め、大変思い入れを抱くようになった私は、この事を知ったときすぐに原報を自館で見ることができて感激した。医学図書館に勤めているときに好きになった人の記事が医学雑誌に出ているなんてちよつと縁があるじゃないなどと思ってしまった。これからその記事について少し雑感をふまえて書いてみたいと思う。

漱石は、大正5年12月9日午後6時50分、50歳で死亡した。翌10日、漱石の妻・鏡子の申し出により、東京帝国医科大学病理学教室において長与又郎博士の執刀により解剖されることとなった。この解剖についての講演をおさめたのが上記の記事である。なお、解剖は脳と消化器系統のみに限られた。

講演では、まず、脳について述べられている。漱石の脳の重量は男子の平均よりやや重い1450gであったそうである。平均値は1350gであると述べられているので確かに重たいようである。講演中、脳が重いからといって優れているとは必ずしもいえないが、生存中に優れた業績を残した人の脳は、普通の人より重いことが多いと添えられている。ちなみに漱石の脳の重さについては、渡辺淳一の『書かれざる脳』という短編小説の中にも内村鑑三と並んでちよつと登場する。脳の重量にちなんだちよつとブラックな話なので興味のある人はどうぞ。

私たちは時々、頭の良さは脳の大きさじゃなくて皺の数だよなどというが、その点はどうなっているだろう。何の裏付けも調査も行っていないので、これが皺のことだから違うのか判らないが、脳の重量に続いて問題とされているのは、「脳の回転」である。文中に「解剖上重量以外ニ脳ノ能力ヲ判断スルモウツ主ナ標徴ハ脳ノ回転デアリマス、」とある。この回転が複雑なほど脳が良いそうである。漱石の場合はこの回転が良く発達しているようだ。ところで、東大医学部を卒業後、東大神経科講師を経て、東女医大精神神経科講師、同大学名誉教授を勤めた千谷七郎氏は、著書『漱石の病跡』の冒頭で東大精神病学教室で見た漱石の脳にとっても引き寄せられ、素晴らしい脳だなどと思った、と書いている。漱石の脳は、物理的にも非凡な物であったようだ。

次に消化器系の解剖結果について述べられている。漱石は初め塩酸過多症であった。その後、胃潰瘍の疑いも持たれ、これは持病になる。消化器系の解剖の結果、漱石の死因は、大方の予想通り、胃からの出血によるものであるということが解った。胃には、長さ5cm、幅1.2~1.5cmもの大きさの楕円形の潰瘍があったそうである。その中の血管を観察して、これは第1回目の出血、これは第2回目の出血などということをコメントしている。漱石はこの死を招いた胃からの大出血を起こす以前にも、伊豆の修善寺で大出血して死にかけている。本人の書いた『思い出すことなど』の中には、30分間死んでいたとある。それを、カンフル15本と食塩水で生き返ったそうである。この修善寺の大患時と、死に至った出血時の記録を読むと大変ものすごいものがある。カンフルはばんばん打つは、ジェラチンは

ばんばん打つは、注射針を代用した話や、水を頭からじゃあじゃあかけた話やらなんともダイナミックである。修善寺のほうは、回復後の食生活なども書いてあり、思うように食事を摂らせてもらえないときの病床で、あれこれと食べたいお膳を浮かべている話など思わず吹き出してしまう。死亡時の話は、夏目鏡子氏の『漱石の思い出』に詳しく書かれている。

さて、漱石はまた、神経衰弱であったとか、鬱病であったとか、精神分裂病であったとか、言われている。本人も神経衰弱や精神病に興味があったようで、小説の中にも精神を病んだ娘さんのエピソードなどが出てくる。また、登場人物中の神経衰弱気味のうちへうちへととぐろを巻き込むような性格の人物は、漱石自身であるとよく言われている。私がおもしろいと思うのは、話がこの漱石のような男を通して進行するのではなく、これもまた、よく登場するタイプである、がっしりとした体付きで楽天家で行動的な男を通して進行しているところである。こういった漱石の作品や、先に述べた妻・鏡子の著作、弟子たちの著作などを参考にして、症状、病識の有無などに注意を払いながら、漱石の病気が一体なんだったのかが研究されている。先に述べた千谷氏は、『行人』という作品を中心に考察しながら、漱石が内因性鬱病であると論じている。順序は逆ではあるが、長与博士は講演の中で、神経衰弱の一つの原因として漱石のもう一つの持病である糖尿病をあげている。

しかしそれにしても、胃潰瘍、神経衰弱、糖尿病といった現代を代表するような病気を明治時代の夏目漱石がもっていたとは、ちょっと興味深い。もちろん私は、時代考証をしたわけではないのでそれほど珍しいことでもなかったのかもしれない。漱石の小説に登場する女性にちょっと今風の性格をもっているところを感じていた私としては、古くて新しい漱石を今と重ねながらまた読んでみたいと感じている。

最後に、この剖検を読んで現代の医学はどう判断するのか聞いてみたい気がする。

アメリカ医学教育の父ジョン・モーガンと アンジェリカの自画像

山崎 茂明

1. ハリケーンHugo

ハリケーンHugoは、近年にない大型のもので被害のニュースも放送されていた。Hugoは男性名でフランスの文学者ビクトル・ユーゴーの Hugoです。9月21日の夜、アメリカ南部のサウス・キャロライナに上陸しました。21日の東海岸の都市ボルチモアは真夏のような日差しでしたが、22日の金曜日は朝から小雨まじりの強風が吹き荒れていました。私はホテルのCommfort Innでオムレツのウエスタン・スタイルの朝食をとり、国立水族館に出かけました。今夕ボルチモアにHugoが上陸することによって、ワシントンより南部の鉄道アムトラックは大幅に乱れており、空模様も普段と違うので、水族館は1時間くらいで終わりにしました。ボルチモア美術館など、訪れてみたいところがありましたが、フィラデルフィアに帰ることにしました。

1989年7月から3ヶ月の予定で、フィラデルフィアにある College of Physicians of Philadelphia Library へ短期留学し、アメリカ初期医学教育史に関する調査を行なってきました。そして、"Academic origin of the first professors in American medical schools before the Civil War" というペーパーをまとめ、アメリカ医学史学会の機関誌である Bulletin of the History of Medicine に投稿したのが9月20日でした。30th streetの郵便局で、論文を入れた大型封筒を出したとき、短かった夏の留学も終わり、やっとオフが来たという気分になりました。帰国までの残りの1週間ほどは、のんびりしたいと思い、アメリカ独立革命時の画家であるC.W.Peale の美術館を見にボルチモアに行くことにしました。フィラデルフィア美術館やペンシルベニア・アカデミー美術館をはじめ、フィラデルフィアの様々な場所で、Peale の描いた肖像画を見ることができます。彼はポートレート画家として有名になるとともに、自然史へ関心をむけアメリカで最初の博物館を造り上げた人です。1776年の独立を期に、アメリカの独自性を様々な分野で示していこうという気風に満ちた時代であり、Peale の博物学への関心もそのような時代を反映したものです。

2. ボルチモアで

このようなハリケーンHugoを前にしたボルチモアの街で、アメリカ医学教育の父と後世になり呼ばれるようになった John Morgan(1735-1789) を巡る発見をしたのです。それは3ヶ月のフィラデルフィア滞在の最後にふさわしいものといえるものでした。

ボルチモア駅からタクシーに乗り Medical and Chirurgical Faculty of the State of Maryland図書館を訪れたのは、College of Physiciansの Tomeの助言があったからです。メリーランド州で最古の医学図書館であり、ボルチモアへ行くのなら訪問してみる

ことを勧めてくれたからです。私は、Peale美術館やメリーランド歴史協会にあるPealeの絵を見て、アメリカ最大の国立水族館を訪れれば良いと思っていました。アメリカ医学教育史についての話題は、もうお腹一杯というのが率直なところでした。しかし、Tomeの助言もあり、事前の約束もないものでしたが訪問してみました。受付で来意を告げると歴史コレクションの担当者であるBill Sleemanが来てくれました。そして、これから目録情報をコンピュータに入力していくという計画をききながら、書庫を見せてもらいました。そして、ためしに、アメリカ最初の医学校を設立するための提言書にあたるJohn Morganの "Discourse upon the Institution of Medical Schools in America" (1765)があつたら見せて欲しいとたのんでみました。この本のオリジナルは、世界で20冊ほど存在しており、またリプリント版も出版されていて、私もそれを購入していた。内容は多くの研究書で言及されており、本文を読みたいというものではありませんでした。しかし、このオリジナル版には、おもて表紙に2種類の蔵書票とサイン、そしてうら表紙には書き込みがあつたのです。Billと私はこの発見と謎解きに熱中してしまいました。日本人の私には読みにくい筆記体の文字を、BillがIBMのパソコンで清書してくれました。またサインされた文字の変色の状態から、この本の所有者の変遷を推定してくれたのです。うら表紙の書き込みは、"My great great uncle" で始まるMorganの伝記であり、学問的に注目されるものではありません。しかしJohn Morganの孫にあたるMorris H. Morganの率直な心が表現されていて、とても感慨深いものでした。私はBillとボルチモア名物のクラブケーキ・サンドイッチを食べに行き、ホテルを紹介してもらい、握手をして別れました。ボルチモアへの1泊旅行を終え、フィラデルフィアへ帰る汽車の中で、私はBillからもらった文章をもう一度読み返してみました。そして、私はJohn Morganがフィラデルフィアの聖ピーターズ教会に埋められているという記述に目が止まりました。ハリケーンHugoに追われるようにしてフィラデルフィアへ向かう汽車のなかで、ホテルに帰ったらMorganのお墓を見に行くことにしようと思っていました。

My great - great - uncle,

John Morgan, was born in Philadelphia in 1735 - After study and travel in Europe and after receiving the degree of MD in Edinburgh, he returned to Philadelphia and began the practice of medicine - He was the first Professor of the theory and Practice of Medicine in the Medical School there, the founding of which was due largely to his efforts, in the Revolution he was the first Director General of American Hospitals (the officer = the Present Surgeon General) and was in Cambridge with Washington in 1775 - He died, and was buried in St. Peter's Church, Philadel. in 1789. He married Mary Hopkins and they had no children.

He was one of the original founders of the College of Physicians and Surgeons there - and his portrait by Angelca Kauffmann hangs in the meeting room of that College.

He was also the first person in Philadelphia to carry an umbrella.

背表紙の書き込み(by Morris H. Morgan)

3. Morganの墓

3rd street and Pine Street に聖ピーターズ教会があり、Chestnut Streetを21番のバスでまっすぐ東へ行き、3rd streetで降り歩きました。この辺りは何度か歩いたこともあり、立ちどまって教会の中をのぞいたこともありましたので、すぐ見つかりました。教会の庭に多くの墓があり、Morganのものを探するのは困難なので、教会のドアをたたきました。誰もいません。途方に暮れていたら、Pine Street の向こう側で、こちらを見ている黒人の人がいました。何となく教会の関係者のような気がして彼に呼びかけ、用件を伝えました。彼のいた建物は教会の事務所でした。二階にあがり、そこで埋葬者リストを調べてくれ、John Morganと彼の妻 Mary が埋められていることは確認できました。そこには埋葬されている場所も記号で記載されていました。墓守りか教会のカードをしていると思われるその黒人の人と墓をさがしに行きました。でも、彼は古い墓なので、もう判読できないし、なくなってしまったかもしれないということでした。しかし、私はアメリカ医学教育史上最大の人であり、その後、誰かが修復したかもしれないと期待して、薦のはっている墓地を見ていきました。しかし、見つけることはできませんでした。C.W.Peale の墓がありました。真ちゆうのプレートが埋められ、その墓が特別の人のものであることが識別できました。18世紀のアメリカ独立革命の頃に死んだ軍人の、いやに目立つ墓もありました。しかし、Morganの墓は見つけれられません。私は一人で、教会の墓地をはじから見てまわりました。西洋世界の墓は、地中に石板を埋め込んだものが多く、古いものは石を平たくしないで、縦に埋め込んだものもありました。私は墓石の上ののり、ピョンピョンとびこえながら Morganの墓をさがしました。John という名を見つけ落ち葉やドロをどけてみましたが、別人でした。そして、どうして、Morganの墓が朽ちさってしまったのか、私にとってそれはありえない気持ちでいっぱいでした。石の板と石柱の間を歩きまわりながら、急に涙が出てきました。フィラデルフィアの滞りも終わり、二年前のエジンバラから始まった John Morganをめぐる旅の終わりです。私のペーパーは、もちろん科学的な調査データに基づいた研究論文ですが、注意深く読む人がいたとすると、私が John Morganという人へのこだわりを持って書いていることを判読できるはずで、これは、あまりすすめられることではないのですが、書き終わったペーパーには、その想いが入っています。

彼が埋められていたと思われるあたりを、教会も入れて写真にとりました。そして、墓は消えさってしまったけれど、John Morgan という人は、ボルチモアの Morgan の孫の書き込みからわかるように、"My great great uncle" として呼びかえされ、その人の心に生きかえっていました。そして、現代において一人の日本人の心の中にも、Morgan は great man として生きかえったのだから、それで良いのだと自分を納得させました。歴史の世界を題材にして調査をしたのは、今回がはじめてでしたが、歴史とは何か客観的な世界が存在するものではなく、歴史を考える人の心の中に、過ぎさった人々や事柄が、とても個性化された形で再現することだと思いました。その意味で、過去は現在の中に常に生きかえりながら、未来へやりとげられなかった夢を投げ返していくものようです。感傷的になることは好きではありませんが、言葉でも、表情でも、歩き方でも表現できず、涙としてしか表現できない世界が存在しても不思議はないと思っています。John Morgan の墓を見つけ、写真にでもとって、自分の旅の記録を終わらせれば良いという軽い気持ちで

聖ピーターズ教会に行ったはずですが、墓を見つけられなかったことで、自分自身のMorganへのこだわりを発見しました。

4. Angelicaの自画像

さて、この翌日、私はペンシルベニア・アカデミー美術館に行き、アカデミーが所蔵していると史書に書かれていたスイス生まれの女流画家である Angelica Kauffmann (1741-1807) の自画像を見たいと思い、このことを確認しようと思いました。展示はされていませんが、収蔵されているはずですから、特別に見させてもらおうと思ったのです。しかし、土曜日で責任者が不在で Angelica の絵の所在を確認できませんでした。月曜に電話で問い合わせることにし、帰りました。昼食はリーディング・マーケットでサンドイッチにアップルタイザーを飲みました。Angelica の自画像は、John Morganが公職から身を引き、貧しい生活をおくりながら、45歳で風邪で死んでしまうまで、彼の居間に長くかけられていたものなのです。Morganは Angelica とローマで彼のグランドツアーの途上に会い、有名な Morganの肖像画を彼女にかいてもらっています。この時、Angelica が病気になり、Morganは彼女の治療をしました。治療を受けた後、Angelicaは治療費を払おうとしましたが、Morganは彼女からの支払をことわりました。そこで Angelica は Morgan に欲しい絵をあげたいと申し出ました。Morgan は、Angelica の自画像を望んだのでした。エジンバラ・スタイルの医学校をつくることに失敗し、Shippen との私闘に破れ、33歳ですべての公職から引退してしまい、彼の愛した妻 Mary も若くして死に、子どものない不遇の晩年を過ごしていた時、彼を慰めてくれた絵を、私も見てみたいと考えていたのです。そのことで、Morganに一步でも近づけるかもしれません。

昼食後には、Powel House に行ってみることにしました。前日、Morganのお墓を見るために聖ピーターズ教会への道を急いで歩いていた時、歴史的名跡としての Powel Houseの展示板を見つけていました。昨日は、4時を過ぎていたため見るができなかったので、再訪しました。Powelは商人で フィラデルフィアの実力者でもあり、市長にまでなった人です。そして、彼は Morganの親友であり、Angelica と会うことになったグランド・ツアーに同行していたはずなのです。銀の食器や陶磁器、当時の家具などが並べられた金持ちの家でしかないかもしれないけれど、とにかく見てみたいと思いました。そして、2時からのツアーにもう一人の訪問者とともに、ガイドの Miss Burns の説明をうけながら、小さなジョージアン・スタイルの家を見てまわりました。ダイニング・ルームに入り、私は自分が長いこと求めていた絵が暖炉の上に、つまり最も大切な場所にかかっていたのを発見したのです。Miss Burnsにこの絵は、Angelica Kauffmann の自画像で ペンシルベニア・アカデミー美術館に、Powel 家から寄贈され、そちらにあるはずではないのかと質問しました。彼女の答えは、これはオリジナルで、アカデミーには貸し出しただけで、今は Powel Houseに戻されているということでした。このポートレイトは、大きなものではなく、縦50cm、横30cmぐらいのものです。とても精神性に富み、優しさにあふれた静かな絵でした。私は、この出会いにとっても驚きました。ツアーが終わったあとに、Miss Burns と二人でこの絵や John Morgan のお墓のこと、ボルチモアで見た Morganの孫の書



Pennsylvania Academy of the Fine Arts

Angelica Kauffmann
Self-portrait

き込みなどについて話しました。残念ながら、写真は禁じられているとのことと取りませんでした。でも、自分の目で、Morganが毎日眺めていた Angelica の絵を見ることができ満足しました。Morgan が埋められている聖ピーターズ教会と、Angelica の自画像のある Powel House は、わずか1ブロックの近さです。

ハリケーンがアメリカ中西部に流れ去り、午後から急激に温度が下がり、冷たい冬の木枯しのような風が吹いている通りに出て、もう一度、聖ピーターズ教会に行ってみました。そして、Morganの墓のあたりを立ち止まって眺め、寒さに首をすくめながらホテルに帰りました。ボルチモアの Medical & Chirurgical Faculty of the State of Maryland図書館で Morganの本に残されていた書き込みを見つけてからの3日間は、とてもドラマチックな日々でした。これも、今まで断片的に散らばっていたモザイクのかげらのような事実がまとめられた結果だと思いました。とにかく私はもう思い残すことなく、とてもすっきりした気持ちでフィラデルフィアを去ることができました。

MLA Exchange とともに —私の1960年代—

野口 迪子

たまに上京するとき、いつでも出会うのが山崎茂明さんの学術雑誌塾の集りである。先日も久しぶりに昭和大学へ足を運ぶことになった。ちょうど「学術雑誌塾報告 2」、1989「Working with each other」が出版された時である。これまでに2冊の出版物をいただいている。初号は「総合研究 私たちの60年代」、1988、と題して、“1960年代は、われわれにとって一つの歴史としての時代である”として、その時代の雑誌についていろいろ探求している。若い人達のレトロスペクティブ・サーチである。今回、このレトロの時代に私のやっていた仕事について、雑誌に投稿しなかった資料（資料 I）をとり出してみた。

それは1962年（昭37年）のことである。はじめて出張したのが昭和大学図書館であった。この前年、日本医学図書館協会（以下 JMLA）の総会に事務長の木田橋さんが出席し、Keys の講演があったことと、昭和大学の下川さんから米国医学図書館協会（以下MLA）の団体会員となって、重複資料を交換入手しているということを聞かされた。

「日本医学図書館協会60年略史、1989」によるとこの総会は第32回（昭36年）東大で行われ、T.E.Keys を招いてセミナーが開催されたとある。ちなみに重複資料に関する議題としては、第30回（昭34年）1959年、九州で、「重複資料の活用について」と福島医大から協議事項がでている。そして第37回（昭41年）1966年、札幌で開かれた時、札幌医大から「本協会において各館所蔵の重複雑誌・図書の交換業務を行ってはいかん」と提案している。また、翌年第38回（昭42年）1967年でも、国立がんセンターから「重複図書の交換について—その中央化の必要性について」と協議題が出されている。この様にして当時も学術雑誌の構築と完全入手のため、広く重複資料の交換による活用がのぞまれていた。当時、私は総務係で受入を担当していてMLAの活動の一つである重複資料交換の新らしい仕事をはじめるとき、下川さんにお会いして教をいただいているようにとのことであった。

MLAの団体会員になって毎月の交換リストをうけとり必要な資料をチェックする。その作業の手順は第4表に示してある。当時、小包として一括送られてくるものは、Smithsonian Institution を経て、国立国会図書館（東京）から送られてくるルートもあり、このことについては相手館にそのように連絡をとっておく。下川さんはリターン・ポストエージ（返信用切手）は送料代として、U.S.スタンプで相手館に返すので、その切手は外国に留学・出張する先生にお願いして買ってもらうとのことであった。今の時代のように海外に遊びにいけるような時代でない。私の方も、こちらから送った資料に対して相手館からU.S.スタンプをいただき、それを当てていたが、郵便局から International Postage Couponを買入して用いたりした。

この仕事はMLA入会后1962年から1972年、仕事の担当が変わるまでつづけた。アメリカ合衆国が中心であったが、その範囲は広く南米にも及んでいた。学術雑誌はこうして、新製の医科大学での不足しているバックナンバーを充実させてきた。

1972年、このことについて資料Ⅰのように口頭発表した。この集会は当時、発表をまとめて出版するという事はなかったし、私もその機会をのがしていた。この時の発表に際して、日常の実務だけでなく、MLAのExchangeのあゆみ(第1表)を作表したり、当時の日本におけるMLA団体会員をMLAのDirectoryから調べて、アンケートにお答えいただいたりした(第3表)。したがって、ここにあらためて昭和大学の下川さんはじめ、東大医学図書館や山之内製薬の方々にお礼を申し上げなければならないところである。

JMLAは1975年(昭50年)第46回総会で重複雑誌交換検討委員会が生まれた。現在、この業務は働いている。国内のみと、国外を含む活動とは異なる点が当然であろうが、重複資料の交換業務は相互貸借業務と合わせて、車の両輪のようなものである。欠号の補充と完全巻志向、資料の構築は図書館員の基本的な大事な仕事であると考え、そして、そのタイムリーな構築と入手が生命である。

1960年代のMLAのExchangeはもう古い歴史の中につつまれている。スタートの1899年からちょうど今年1989年で90年となる。あらためてそのあゆみを垣間見ると図書館員の努力と継続をみのがすことはできない。交換業務であるから、貰う一方ではだめで、こちらからもリストを提出しなければならない。そして、そうすることによって、こちらに残る重複誌をさばくことができる。どうしても必要な資料は二、三ヶ所に申し込むので、同じ号数が集まることがある。それらを雑誌タイトル別受入リストに記録する。その方法も下川さんに習った。それは同じ巻の同じ号数が2冊以上あれば、その数の分だけ記録する。即ち5号が2冊あれば、5、5とする。1号から6号までを1-6とハイフンでつなぐのではなく、1、2、3、4、5、6とそれぞれ1冊ずつ記録する。もし4号が2冊あれば、途中の4は4、4と記して、2冊あることを示す。4号は2ヶ所からの要望に答えることができるように、また一覧できるように記録する、作業上の仕組みである。

自分の宛先きを印刷した送付用ラベルは、Self-addressed shipping labelといい、外国の例にならって黄色い用紙に印刷し、裏には糊がついているものを申し込みと一緒に同封する。申し込みをした時の記録のファイルカードはフォルダー式とし、おもてにいろいろな記録をすることができるように工夫し、フォルダーの中には手紙とか関係資料をつつみ、パーティカル・キャビネットに、相手館の番号(キーリストによる)順にファイルした。これはカルテのように取り扱った。

さて、こうしたMLAの重複交換は重複資料が捌けなくなって重なってくると置場所に困った。タイトルのABC順ファイルで現物を移動させなければならない問題点がある。情報記録はもはやコンピュータによって処理は可能だが、こと現物を扱う仕事は人手によるものだけにこの問題がのこる。当時はさらに、小包の送付は郵便局本局で封を開けて学術雑誌であることをチェックし、荷造りをそこでするなど、外国を駆けめぐる資料の交換はまだまだ問題がある。

このような仕事はその図書館の資料構築にかけた方法の一つに過ぎないが、医学図書館に働いてMLAのメンバー館の人達と同じような仕事をさせてもらったことは今更のように有りがたく思っている。昭和大学は「日本医学図書館協会60年略史、1989」の中の「加盟館の現状 p.182」で「Medical Library Associationの加盟(昭32、春)とその中心的活動である重複雑誌の交換には相応の実を得ている」と明記し、館の歴史の中に位置づけている。札幌医大は昭和27年頃から北大医と相互貸借の規約を結び、もっぱら古い雑誌を借

用していたが、資料の構築をこのMLA Exchange によってその貸借は逆転するまでに至った。

私はこの仕事をとおしてMLAの会員図書館の人々と或時は重複資料以外のことなどたずねたり、日常は古本屋さんのような仕事でも、世界につながっているという意欲に充ちていた。一冊の学術雑誌の欠号をうめる時のよろこびは、この仕事をする人達の共通の無言のよろこびである。提出したリストに赤マル印がつけられ urgent! と書いて送ってこられると、私もそのようにして急ぎの術を学んだ。木田橋事務長がよくいわれた「仕事が仕事を教えてくれる」と実感している。沢山のお手紙をいただいた。代金を支払いたいから請求書に記入して欲しいとお願いしたら、「いくらかかったかの記録はないから送料についてはいい」という返事だった。そして、「こちらでは送られてきた時に、ラベルと切手をはがし、その分の代金を送り返すという習慣だから、あなたもそのようにしたらよいでしょう」と(サンプル13C)。交換業務はその仲間が多く範囲が広いほど効率が大きい。そしていろいろと助けられた。

このたび、学術雑誌塾のアカデミックなリポートの編集局から依頼をうけたが、古い資料にどろくさい見解を加えたものになったことをいつもながら心苦しく思っている。しかし、このやうな機会をあたえていただいたことを心から感謝する次第である。

資料 I

米 国 医 学 図 書 館 協 会 (Medical Library Association) 団 体 会 員 の 交 換 業 務

— その 業 務 と 問 題 点 —

野 口 迪 子
札幌医科大学附属図書館

(第 15 回 (昭和 47 年度) 北海道地区大学図書館職員
研究会 於北星学園大学 昭和 47 年 7 月 28 日)

(2) 取 寄 資 料 を 受 け つ た 時 に 必 要 な も の

- a 受 入 リ ス ト ま た は カ ー ド
 - 1) 雜誌タイトル別
 - 2) Lot # 別一覧
- b 受 領 通 知
- c U. S. Postage Stamp
- d 国 際 返 信 切 手 券 (International Postage Coupon)
- e 代 金 請 求 書 (Statement)
- f 重 複 受 入 カ ー ド

(3) 重 複 資 料 を 提 出 す る 時 に 必 要 な も の

- a 重 複 受 入 カ ー ド ま た は リ ス ト
- b 美 白 な タ イ プ 用 紙 (8.5 インチ x 11 インチ)
- (4) 申 込 を 受 け た 時 に 必 要 な も の

- a 受 付 フ ァ イ ル
- b 重 複 受 入 カ ー ド
- c 一 冊 も 要 求 に 応 じ れ な か っ た 時 の 通 知
- d 郵 便 局 の 手 続 き 用 紙
- e M L A か ら の 統 計 用 紙

(5) 問 題 点

- a 欠 号 リ ス ト の 作 成
- b Exchange List へ の ア ヂ ャ ッ ト と 発 送
- c 重 複 資 料 の 発 生 と 保 管
- d 郵 送 料 の 返 送
- e 重 複 リ ス ト の 作 成
- f 出 荷 ・ 発 送 業 務
- g 専 任 業 務 と し て の 管 理

- 4 総 括
- 5 参 考 文 献
- 6 参 考 資 料 (狭 ・ サ ン プ ル)

- 第 1 表 M L A Exchange の も ち み
- 第 2 表 M L A 団 体 会 員 は 何 を す る か
- 第 3 表 日 本 に お け る 団 体 会 員 に つ い て の ア ン ケ ー ト
- 第 4 表 M L A 重 複 資 料 か ら 受 け る 場 合 (札 医 大 の 例)
- 第 5 表 重 複 資 料 を 提 出 す る 場 合 (札 医 大 の 例)

参 考 文 献

- 1) Ballard, J. F.: The past history of the Medical Library Association, Inc. Bull. Med. Lib. Assn. 36(4): 227-241 (1948).
- 2) Perkins, H. T.: Exchange and gift. Bull. Med. Lib. Assn. 50: 407-417 (1962).
- 3) 下 川 周 子 : M. L. A. Exchange -- 重 複 資 料 の 交 換 あ つ せ ん -- 医 学 図 書 館 11(4): 159-163 (1964).
- 4) Orfanos, M.: The M L A Exchange: a report. Bull. Med. Lib. Assn. 55 (1): 18-21 (1967).
- 5) The M L A Exchange: Comments. (65 Annual Meeting) Bull. Med. Lib. Assn. 55 (1): 22-26 (1967).
- 6) The M L A Exchange: Discussion. (65 Annual Meeting) Bull. Med. Lib. Assn. 55 (1): 27-30 (1967).
- 7) Manual for the use of the Medical Library Association Exchange. June 1968. M L A, Chicago
- 8) Directory of the Medical Library Association compiled to July 1, 1970. M L A, Chicago
- 9) Annan, G. L. & Felter, J. W. eds: Handbook of Medical Library Practice. 3rd ed. 1970. Chapter 13: Leantz, R. T.: Professional Associations, p. 368-369.
- 10) Medical Library Association, 1971-72 leaflet. Rev. June 19, 1971.

第1表 MLA Exchange のおゆみ

1898 May	創立	4名の医者(Sir William Osler)と小数の Librarians	1953	By-Laws	改正
1899 Dec	Exchange 開始 Philadelphia	1947年までの47年間有志の専任によつて続けられる		Key list の問題起る	Key list の supplementary card file の必要性
1900 Oct	Baltimore へ移る	Medical and Chirurgical Faculty of Maryland が設備、場所、専門的な援助	1954	単行本発行	Brodman, E.: Development of Medical Bibliography
1904	Brooklyn	Mr. Huntington and the Kings Country Medical Society Library	1957	Japan 加盟	昭和医科大学図書館 (Key list #92 T 1) (現在昭和大学図書館)
1909	Baltimore へもどる	Miss Noyes の監督のもとに19年間繁栄した	1959	By-Laws 改正	(Bull. Med. Lib. Assn. 47(4) Oct.) Mr. Clausman Exchange Manager となる
1911	機関紙発行 (季刊)	Bulletin of the Medical Library Association (Proceeding of the Annual Meeting を含む)	1960	MLA News 刊行される	
1914 Nov	Wants and Offering List No. 1 発行	全会員に送られ、すべて項目が要求された資料は2週間隔に分配された	1961	中央事務局設立	協会本部 Executive Secretary 919 North Michigan Ave. Chicago, Ill. すべての情報、会員、出版物、奨学金、その他サービス、働く場所の問い合わせを司さる N. Y. Univ. Medical Center, Photo Offset Printing
1922	By-Laws	Act. IV: Exchange		New Key List 出版	にによる
1928	St. Louis	Miss Lawrence, the Washington Univ. Medical Library により以後15年成功した		Quick clearance 提案	
1929	By-Laws	全面的改正 図書館は6つのグループに分けられた	1962	Sapporo 加盟 Quick clearance 方法によつて行なわれる	札幌医大図書館
1930	専門分野の研究 会発足	医学・薬学・歯学・病院・研究所	1964	マニュアル発行	Manual for the Use of the MLA Exchange
1934	法人組織となる			MLA Exchange List	Air mail のすなめ
1943	初版発行	Handbook of Medical Library Practice.	1965		Billing, John Shaw: The selected papers of John Shaw-Billings, compiled with a life of Billings. by Frank B. Rogers.
1945	New Orleans	Miss Rogers, Tulane Univ. School of Medicine が2年間つづく	1966	Tokyo 加盟 By-Laws	東大医学図書館 改正 (Bull. Med. Lib. Assn. 54(4))
1946 Oct	New Jersey	Miss Naylor, Academy of Northern New Jersey 以後次の15年間つづく	1968	マニユアル	改正
1947	Exchange Committee の設立	1947年総会で決定、有給専任者なる (Exchange Rules and Policies)	1970	ハンドブック 3版発行	Handbook of Medical Library Practice
1948		1年経過後ルールについて再検討された		Quick clearance 調査	MLA Exchange List につき <u>Quick Clearance</u>
1949	By-Laws	医学図書館司書の資格基準が定められ認可規定が出来た		外国図書館からの 申込の遅れの解決	
1950	一般地区グループ 設立			コンピューター 研究	Exchange List
1952	医学雑誌のレファ レンス資料発行	Vital Notes on Medical Periodicals			

第2表 MLA団体会員は何をするのか

- 入会するために少なくとも 1,000 volumes 25種以上の journals をもっていること
- 1) 資料を出荷する 2) 受領通知する 3) 郵送料を支払うという事が絶対必要であること
- List of Offering (自館のもっている重複資料の提出) は少なくとも2年に1回送る義務をもつ
- 上記リストには図書館名, 住所, 代表者名をタイプし本部へ送る
- 本部からリストに Lot # が入ってくる
- 100頁〜200頁ゼロックス list で月1回加盟館に配布される
- これらはCanada, U. S は月の10日付, 中央アメリカ, ヨーロッパは3日付, 南アメリカ, 極東会員は10日付の2週間前に発送される

資料を申込する図書館は

- Exchange list をチェックする。必要なものは赤で
- どんなものでも印したシートや, 図書館名入りのレターにリストしても self-addressed ラベルをいつしよに入れて送る→寄贈してくれる図書館宛 (要求側図書館は自館の大きさを示す)
- 項目には自分で使いか second copy として使いか印をする

寄贈する側の図書館は

- 6週間待つ (先着順制度 [first-come, first-served basis] を中止した)
- 1ヶ所の図書館だけでなく多くの申込のある資料に対してはマニュアルにしたがつて処理する
- 6週間すぎたらマニュアルにしたがつて要求のある図書館へ送る

受ける側の図書館は

- 資料を受けとつたら直ちに受領の通知と送料を或は郵便切手を送ること

最後に重要な事は

- 本部に会員に出荷した項目についての統計用紙を送ること

第3表 日本におけるMLA 団体会員についてアンケート集録 (1972.5.31現在)

Q	A	昭和大学	札幌医大	慶応大学北里	東大医学	山内製薬
1 入会年		1957	1962	回答なし? 1963?	1966	1969
2 理由			重複雑誌の交換		雑誌欠号補充	欠号・パンクナンバー補充
3 Exchangeを行っている	Yes	Yes	Yes		2・3年前まで・現在中断	Yes
4 独立したセクションをもつ	No	No	No		No	No
5 他の係と併用	雑誌	雑誌	義務係		受入掛	雑誌受入業務
6 誰が行うか			受入担当者		寄贈交換業務担当者	
7 人数	2	2	2		1	1
8 特別なマニュアルをもつ	No	No	MLA manual		No	No
9 Exchange list (Air Mail)	Yes	Yes	No		Yes	No
10 毎月定期的にチエックする	Yes	Yes	不定期		毎月発送していた	Yes
11 重複リストを提供した	Yes	Yes	過去2回現在中断		Yes	No
12 申込手つづき様式	手紙	手紙	カード		手紙	リスト
13 欠号リストの様式	リスト	リスト	カード		カード	カード
14 リタランサベル(住所)	Yes	Yes	Yes		Yes	No
15 現物受領後受入様式	チエックカード以外、その他	独自受入用紙			チエックカード	チエックカード(丸書)
16 リターンポスターシは	1. U.S. stamp order 2. Postal money	1. 切手 2. Internat. postage coupon			1. U.S. stamp	1. U.S. stamp
17 送料費用は	Yes, 一般郵便料を含む	No	No		東京医学会からYes, の郵明費	Yes, 通信費
18 欠号補充になつた現物処理		雑誌の角に Lot # をつり通常と同じ			所販分と合せて風本	通常の雑誌と同じ
19 重複して来たもの	Yes Exchange にかまわ	Yes, 重複リストにつけ標にかまわ exchange			Yes 重複とし exchange list	No
20 業務上の難点		重複が増しズベースいる Exch. リスト出づ時かかる			重複誌増える結果の取扱い 努力のわりに効果うすい	リスト見にくい 風本・未製本の不区別
21 利点		欠号補充 セカンダリコピーのキント			カリフォルニアの欠号(特にア リカ)の比較的確めりうる	

第4表 M L A 重複資料から受ける場合 (札幌大図書館の例)

- 1 中央事務局から Monthly Exchange list をつける
 - 2 リストにチェックする (欠号・未着・絶版・バツクナンバ等)
リストから)
 - 3 リストをみて申込カードを書く (控)
 - 4 裏面に相手方のアドレスを書く
 - 5 封筒をタイプする
 - 6 申込カードをもり一枚タイプする
 - 7 封筒の中に申込カード (タイプしたもの) と self-addressed ラベルを
入れる
 - 8 Air mail で発送する
 - 9 申込カード (控) を Lot # 順にファイルする
-
- 1 先方から total postage を知らせてくる。先きに送るため小切手を作る
 - 2 直接小包が送付される (アドレスラベルで見わかる)
 - 3 アドレスラベルの Lot # で申込カードをとり出す
 - 4 小包の stamp postage を申込カードに記入する
 - 5 小包をあける
 - 6 受入リストに記入する
Journal title 名ファイル
号数記入
重複して来たもの Lot # を付して区別する
 - 7 重複して来たものそのまま重複の欄にファイル
 - 8 雑誌の表紙のコナーに Lot # を付し受入れる
 - 9 雑誌えつらんのシエルフリストに欠号になつているところを消す
-
- 10 キャンセルの知らせが来た時も Lot # によつて申込カードに記入する
 - 11 申込カードに postage が記入され現物が処理されたらリストに記入する
 - 12 Address, 受入された Jls タイトルと巻・号・年, 受入・着日時
Postage \$ _____
 - 13 International postage coupon を郵便局より購入
 - 14 Postage に合せて枚数分入れる
リストに記入する
 - 15 Thanks memo と coupon の枚数 \$ _____ 記入して封筒で送る
 - 16 受入れた Jls タイトル数等の統計をとる
 - 17 Postage の total sum を計算する
-
- 1 Smithsonian Institution を経由して来るものばかりまとめて国立国会図書館か
ら小包として一括送られてくる
 - 2 寄贈先の館から Smithsonian Institution までの送料のみを返送する
-
- * Smithsonian Institution, International Exchange Service,
Washington 25, D. C., U. S. A.
- * United States Book Exchange, Inc.
3335 V Street, N. W., Washington 18, D. C., U. S. A.

第5章 重複資料を提出する場合 (札幌大の例)

- 1 重複雑誌所蔵リストを作成する
- 2 記入の方法
- 3 Exchange マニュアルにしたがつてタイプする
- 4 中央事務局に発送する
- 5 Monthly list を注意して自分の館の Lot # を知つたら、国内の会員に注意をうながす
- 6 申込順に受付紙を付す
- 7 申込手紙、リスト、その他シートは順に綴じておく
- 8 受付ファイルに self-addressed ラベルを保存する
- 9 6週間まつ
- 10 来た順から自分の館のリストに要求のあつた JIs の巻号に赤まるををつけていく
- 11 1ヶ所しかなかつた JI の紙は申込のあつた所に送る
- 12 2ヶ所、3ヶ所以上申込の重複しているところは、その分の申込館の状況によつて決定する
- 13 各申込館のリストに密附出来るものはチェックする
- 14 国内 MLA 会員を優先する
申出によつて着払とか小包にする
- 15 すべての要求に答えられなかつた時 sorry の通知をする
- 16 チェックした申込館リストをもつて重複雑誌の棚からとり出しひとまとめにする
- 17 郵便の一番安い方法によつて送付する
- 18 郵送料が大きくなる時はあらかじめ相手方に通知してから送る
- 19 Postage をひかえておく
- 20 Postage を送つてこないものには、ドルに換算して invoice を送る
- 21 U.S. stamp で来るもの
小切手で来るもの
International postage coupon でくるもの
- 22 Self-addressed label を付して送付する
- 23 小包にする場合は本局までとはご検査を受けてひもをしぼる
郵便局の手続きを受ける
- 24 MLA から統計を報告する用紙が送つてくるので、それに数を記入して送る
- 25 発送にかかつた cost を集計する
- 26 受入れた U.S. postage stamps は次回の返送用切手として用いる

サ ン プ ル

- 1 Key list
- 2 マニュアル
- 3 Exchange monthly list
- 4 要求を受けた時のチェック
- 5 Self-addressed shipping label
- 6
 - a 申込カード
 - b 受領通知
 - c 国際返信切手券
- 7
 - a 申込を受けた時のファイルカード
 - b 寄贈した先きからの受領通知
- 8 申込をした時のファイルカード
- 9 申込と受入併用チェックカード (東大医)
- 10 MLA 統計用紙
- 11 雑誌タイトル別受入リスト
- 12 受入 Lot # 別一覧リスト
- 13
 - a 郵送料送付のための依頼
 - b 代金請求書用紙
 - c 郵送料に対する返事

MEDICAL LIBRARY
 KEY LIST OF INSTITUTIONS

April, 1961

Mr. Gilbert J. Clausman
 Medical Library Assoc.
 New York University
 550 First Avenue
 New York 16, New York

THE EXCHANGE

One of the purposes for which the Medical Library Association was founded was the exchange of medical literature among its members.

Libraries which are Institutional Members of the Association may participate in the Exchange. In order to be eligible to receive material they are expected to offer duplicates at least once every two years.

The Exchange Manager publishes and distributes Exchange lists made up of the lists of duplicates sent to him by member libraries.

He assigns the duplicates to requesting libraries, except for those items listed for "Quick Clearance". Requesting libraries should write direct to the library for Quick Clearance material which is served basis.

- INSTRUCTIONS FOR OFFERS OF**
1. When the Exchange List volumes and numbers have been received, please write to the Exchange or 8 1/2" x 11" size paper, your library, your name, your collection.
 2. Use a separate sheet from which you request material and list the sequence and in the Exchange List.
 3. Instead of typing pages may be made sure that your number of volumes appear on each sheet.

- LN - Mail all parcels Library Materials Rate
 - R - May Send by railway express
 - RP - Boxes sent by railway express
 - WR - Write to requesting library for Quick Clearance
 - CC - Follow procedure for Canadian customs
 - SI - Send by way of Smithsonian Institution
- For United States libraries, the least expensive way of shipping is by mailing parcels under the **LIMITED MAILABLE PARCEL (LM)**. This allows a library to ship to any point in the United States at the rate of four cents for the first pound and one cent for each additional pound or fraction thereof. Maximum weight for this rate is 70 pounds per package.
- Railway express (RE) is more expensive than sending parcels by mail. However, some libraries have no way of getting parcels to the post office and, therefore, must send all packages by express. Certain libraries have indicated that they cannot accept express collect shipments as the costs are prohibitive (RM).
- U. S. Government libraries do not have cash or stamps with which to refund postage. When filling a request from a Veterans Administration, Naval, Army, Air force or other government library, please write that library and ask for self-addressed government stamps. These are then affixed to the parcel instead of cash or stamps.
- When mailing exchange parcels to Canadian libraries, please mark packages "Used Medical Books" or "Used Medical Magazines" and state a minimum value. Then fill out four copies of Canadian customs AA invoice and send them to the receiving library under separate cover (CC). Canadian libraries are eligible to receive material via the Smithsonian Institution.
- Donor libraries in the United States are reminded that the International Exchange Service of the Smithsonian Institution is equipped to handle shipments going to libraries outside of the United States (SI). For details please write to:
- Mr. J. A. Collins, Chief
 International Exchange Service
 Smithsonian Institution
 Washington 25, D. C.

- 91 LU 1 King George's Medical Library
 Lucknow, U. P., India
 Librarian: Professor V. S. ...
- 92 T 1 Showa Medical School Library
 1016 Hiragawa-6, Shinagawa-ku
 Tokyo, Japan
 Librarian: Dr. Kanuya Kamiyo
- 93 J 1 Jewish National University Library
 Dr. Julius Jarcho Medical Libraries
 P. O. Box 503
 Jerusalem, Israel
 Librarian: Mr. E. Lorch, Acquisitions
 Address correspondence to:
 Jewish National and University Library
 C/o American Friends of the Hebrew University
 Library Committee
 11 East 69th Street
 New York 21, New York
 In charge of exchange: Mrs. Barbara Cohen

(cc) (RM)

Medicine

(cc)

Library
 Canada
 L. Craig

(cc) (RM)

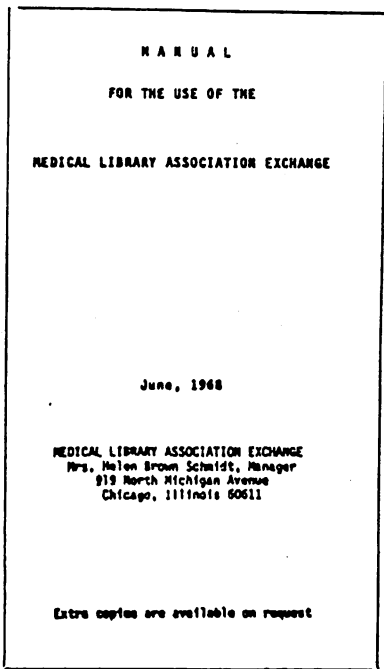
Smithsonian Institution Library Service
 9 Avenue
 British Columbia, Canada
 Ms Isabel McDonald

(cc)

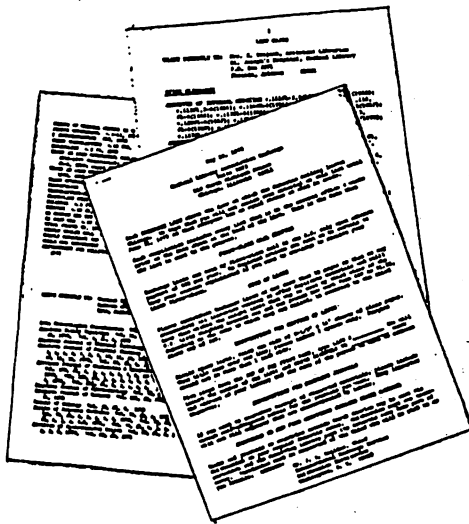
British Columbia
 British Columbia, Canada
 Ms. Doreen E. Fraser

(cc)

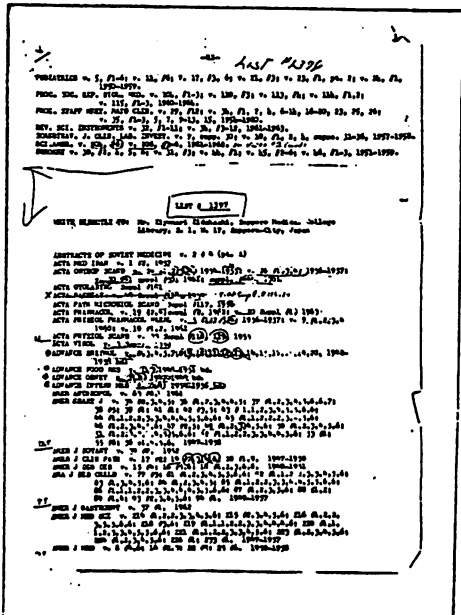
1 Key list



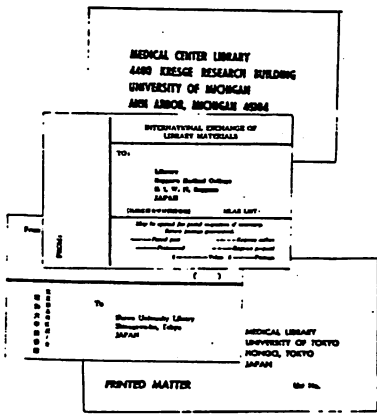
2 マニュアル



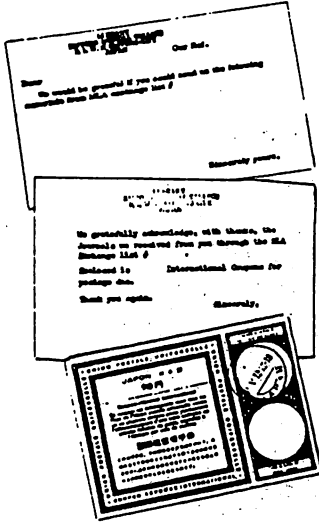
3 Exchange monthly list



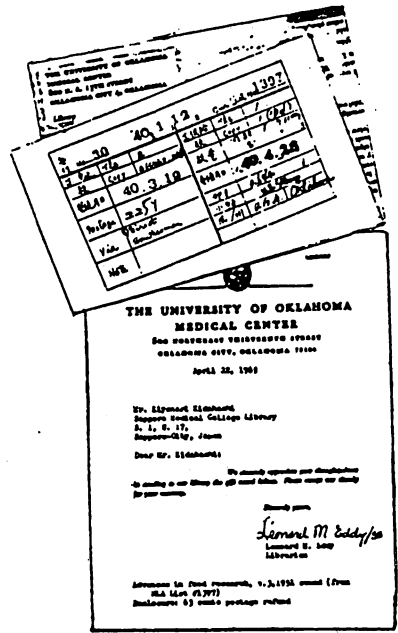
4 要求を受けた時のチェック



5 Self-addressed shipping label



- 6 a 申込カード
- b 受領通知
- c 国際返信切手



- 7 a 申込を受けた時のファイルカード
- b 寄贈した先きからの受領通知

9M4 (Key Number)	Mercy Hospital Staff Medical Library (Name of Institution)	Florida (State)												
9M4 Mercy Hospital Staff Medical Library 3653 South Miami Avenue Miami 43, Florida Librarian: Miss Jessie Morris	<table border="1"> <thead> <tr> <th>請求</th> <th>品名</th> <th>数量</th> <th>請求金額</th> <th>支払</th> <th>残</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>38.9</td> <td>...</td> <td>38.9 12</td> <td>38.9</td> <td>38.9 12</td> <td>...</td> </tr> </tbody> </table>	請求	品名	数量	請求金額	支払	残	38.9	...	38.9 12	38.9	38.9 12	...	
請求	品名	数量	請求金額	支払	残									
38.9	...	38.9 12	38.9	38.9 12	...									
<p>備考: 先生 H. C. ...</p>														

8 申込をした時のファイルカード

a .

MILES LABORATORIES
SAPPORO MEDICAL COLLEGE
S. I. # 17, SAPPORO-CITY
JAPAN

September 7, 1963

Mrs Charlotte S. Mitchell
Miles Laboratories, Inc., Library
Myrtle and McNaughton Sts.
Elkhart, Indiana

Dear Mrs Mitchell:

We have received 4 packages of the Medical Exchange materials which you sent us according to our request on the 28 of December, 1962.

Here we enclose the paper which we want you to fill the blank in the necessary item. We will send you the check for the postage according to your statement.

Thanking you very much for your co-operation,

Sincerely yours,

Kiyonari Kidahashi
Librarian

KK:man
Encl.

b

No. Kiyonari Kidahashi Date: _____
Library
Sapporo Medical College
S. I. # 17
Sapporo, Japan

RECEIPT

DATE	DESCRIPTION	AMOUNT
	Medical Exchange Books	_____
	Postage and	_____
	Pay this amount →	_____
	Sign _____	
	Address _____	

- 13 a 郵送料送付のための依頼
b 代金請求書用紙
c 郵送料に対する返事

C

MILES LABORATORIES, INC.
1157 MYRTLE STREET
ELKHART, INDIANA

September 23, 1963

Mr. Kiyonari Kidahashi
Librarian
Sapporo Medical College
S. I. # 17
Sapporo-City, Japan

Dear Mr. Kidahashi:

We have received your request to fill out the amount of postage to be reimbursed for the four packages of journals you received from the MIA Exchange. Since we do not keep records of the postage used on each mailing we make, it is not possible for us to tell you what was required to mail the materials to you. Therefore, we will consider that you do not owe us for this shipment.

It is our custom here just to tear off the stamps and labels from any packages we receive from the exchange which is a simple way to keep track of what is owed and should be reimbursed. Perhaps it would be possible for you to do this also.

Very truly yours,
Charlotte S. Mitchell
(Mrs.) Charlotte S. Mitchell
Librarian

CSM/ejk

はじめに

論文の撤回をあらわすMeSH、Retraction of Publication が初めて登場してきたのは、1984年の事でした。この時以来、1989年 9月までに52件のRetraction記事で、計73件の論文が撤回されています。本論では、こうしたMeSHの登場してきた背景と、科学コミュニケーションの抱えている問題について、考えてみたいと思います。

Publish or Perish といわれる科学の競争社会においては、新たな知見の先取権を得る事がみずからの科学的業績となり、研究費の獲得や、研究者としての地位の向上に大きな影響を与えている事はよく知られています。その反面、激しい競争は研究者達に様々なプレッシャーとなって覆い被さってきています。結論を急ぐあまりの、データの読み違いや、未確認のデータの提出から、データの捏造や剽窃などの不正行為までもひき起こしています。そうした中で、科学者共同体は、自らの内部において自己管理能力を問われています。科学における不正行為は、科学者自身の手によって正す事ができるのでしょうか。

科学コミュニケーションの世界では、以前から追試と審査というチェックシステムを持っていました。正しからざるデータは他の研究者による追試によって検証され、駆逐されてきたし、学術雑誌における論文審査は、正しからざるデータを門前でチェックするフィルターの役割を果たしてきました。さらに、「レフェリー・システム、追試、その他の科学の自己規制機構は、それがあらゆる研究論文に対して正常に機能すれば、不正を速やかに排除できるし、それ以前に、そもそも不正をしようという気持ちを抑制する効果を持つだろう。」といわれています¹⁾。

しかし、1970年代の後半以降、不正行為、それも有名な大学や研究機関での不正行為が次々と明るみに出され、科学における不正行為が、必ずしも一部の不心得者による非日常的な行為ではないことが、多くの科学者達に衝撃を与えました。この間、大きなものだけでもClinical Scienceでは 6件、Basic Science では13件にのぼる不正行為が明らかになったとLockは述べています²⁾。アメリカ議会では公聴会が開かれ、データの捏造を告白する科学者もあらわれました。

NLM の館長Lindbergが「科学論文の読者は、自分の読んだ論文がその後撤回されたという事を知る事ができなければならない。NLM はMEDLINE を通してこの事を可能にしている」と述べているように³⁾、Retraction of Publication というMeSHが1984年に登場してきた背景には、一連の不正行為の摘発という事実があったのです⁴⁾。Index Medicus への撤回や訂正の記事の収録について、またその内容については、Kotzinが紹介しています⁵⁾。

不正行為による論文だけが撤回されている訳ではありませんが、論文の撤回という行為が、科学コミュニケーションの中で果たしている役割について、あらためて考えてみなければなりません。

MEDLINE にみる Retractionの現状とその分析

1984年から1989年 9月までに撤回された73論文のうち、入手できなかった 3件を除く70論文について、まずその撤回の理由について調査を行いました。その結果、データの誤りや、実験が再現できなかった、内容に重大な疑問が生じたなどによるものが32件、不正行為が発覚したために撤回された論文が33件とほぼ同数を占めました。

(表1) 残りの 5件のうちの 3件はスペイン語で書かれたもので内容が理解出来なかったものと、2件は論文撤回の記事のみでは、不正行為があったためによるものであるのか判断できなかったものです。誤りに気づき自ら撤回するケースの意外に多い事がわかります。中でも、研究を継続する上で、すでに発表している実験を再現しようとして再現できなかった事が撤回の理由となっている場合が多く、発表を急ぐ研究者達のおかれた立場を推測する事が出来ます。

掲載雑誌では、J Clin Invest が最も多く 7件、次いでProc Natl Acad Sci U S A と Science の 6件、New England J Med やRadiology の 4件などとなっており、これら、一流雑誌のこうした問題への関心の高さが伺えます。

論文が発表されてから撤回されるまでのタイムラグでは、図1に示したとおり、全体のおよそ45%が2年以内となっています。また、比較的早い時期に撤回されるのは、誤りによる場合が多い事もわかります。誤りによる撤回の平均タイムラグと、不正行為によるそれとは4か月しか差はありませんが、誤りによる撤回の53%が2年以内になされているのに対して、不正行為によるものでは33%にすぎず、明らかに両者には違いがみられます。

こうした事の原因としては、不正行為による論文の撤回は、不正行為の摘発から調査委員会の調査を経て最終的に結論が出されてから行われるためであるとかんがえられます。こうした調査には2年程度を要するのは普通の事です。

表1 Retractionの理由

誤りによるもの	32件
実験が再現できない	
内容に疑問が生じた	
データに誤りがあった	
不正行為によるもの	33件
Slutsky Case	12
Darsee Case	11
Stalcup Case	5
その他	5
不明のもの	5件
うちスペイン語のもの	3

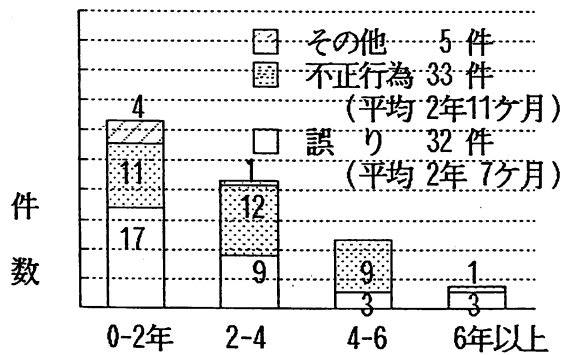


図1 RetractionまでのTime lag

引用調査から見たRetractionの有効性

論文の撤回という行為そのものは、一旦提出したデータや事実を否定するものであり、その研究の延長線上に、何か科学上の進歩や発展をうながすようなものは本来存在しないはずで、そうした点で、撤回された論文が、撤回後どのように引用されているかを見る事によって、論文の撤回という行為が有効に機能しているかどうかを見えます。

不正行為が発覚して、その論文の多くが撤回されたJR Darsee の場合を例にとってその引用のされかたを示したのが表 2です。Darseeは、Emory 大学で医学士となり、数年間臨床と研究を行った後、Harvard 大学のBraunwald のもとへゆきます。そこでは、心拍出に関する研究を行いました。

彼は1977年以降1981年までに50件以上の論文と 100件以上の抄録を発表していますが、これらのうちDarsee自身が第一著者となっている論文22件について、著者自身の引用を除く 428回の引用を、引用された年度ごとに示しています。集中的に論文の撤回の行われた年、すなわちDarsee事件^{4), 6)} の全貌が明らかにされた1983年を網掛けで示し、1984年以降の被引用回数を右端に示しています。Index Medicus に撤回の記事が掲載されているのは、このうち 9件ですが、Lockは1978-1981 年に発表された18の論文とおよそ 100の抄録の全てが公式に撤回されたと述べています²⁾。従って、これらの論文のほとんどは撤回されたものとみなす事ができます。

表2 Darseeが第一著者となった論文の引用

					79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	計	Index Medicus
1	South Med J	70(10):1249	1977						1						1	
2	Arch Intern Med	137(11):1639	1977												0	
3	New Eng J Med	298(4):221	1978			1	1		1			1			4	1
4	Am J Med	64(6):1089	1978												0	
5	Ann Intern Med	89(6):867	1978	Retracted 83.8	3	13	13	16	6	4	2	1	2	1	61	10
6	South Med J	72(2):174	1979				1	2	3	3	3	2		6	20	14
7	Circulation	59(3):492	1979	Retracted 84.1				3	2		1				6	1
8	Circulation	59(4):619	1979		1	9	21	10	12	8	6	2	2	3	74	21
9	New Eng J Med	300(16):877	1979	Retracted 83.6	3	12	11	13	7	2	2		1		51	5
10	New Eng J Med	301(8):442	1979												0	
11	Ann Intern Med	92(6):735	1980	Retracted 83.8		1		4	4	1			2	1	13	4
12	Am J Cardiol	46(4):607	1980	Retracted 83.7				4	8	3	1	1	2	1	20	8
13	Am J Cardiol	46(4):613	1980	Retracted 83.7			2	10	9	9	5	5	6	3	49	28
14	Am J Cardiol	46(5):800	1980				6	11	5	2	2	2	1	1	30	8
15	Ann Surg	194(2):189	1981					3			3	1		1	8	5
16	Circulation	63(1):29	1981				9	17	6	1	4	2	3	2	44	12
17	New Eng J Med	304(3):129	1981	Retracted 83.6	1	10		5	3				1		20	4
18	Am Heart J	101(1):124	1981		1	1					1				3	1
19	Am J Physiol	240(3):H399	1981				5	4	2	2		1			14	3
20	J Clin Invest	68(1):225	1981	Retracted 82.10											0	
21	Circulat Res	49(4):1017	1981	Retracted 83.12			2				1				3	1
22	Am J Cardiol	48(4):702	1981				4	1		2					7	1
合計															428	128
Retract された論文のみでは															223	61
																(29.9%)
																(27.4%)

表 2で示したとおり、1984年以降に引用されたものが 128件と全体の30%を占めていますが、1982年をピークとして、その後減少する傾向を示しています。しかし、中には引用の半数以上が1984年以降になされているものもあります。引用した著者達は、この論文が撤回された事は当然知らないと思えばなりません。GarfieldはBreaningの事件について同様な調査をおこなっています。その結果、彼の23件の論文は、1980-88年にかけて218回引用されているが、1981-85年にかけて上昇し1986年以降減少していると報告しています。この減少の理由としては、NIHの調査委員会の報告が1986年12月に出され、Breaningの不正行為が結論付けられた事と、同年、J Ment Deficienc Resに彼の実験を批判した論文が発表された事よるとしています。これにつづけてGarfieldは、科学者の不正を正すのは同僚の科学者であると述べています⁷⁾。その際、Science Citation Indexが重要な役割を果たすのだとも述べているのですが、それはともかく、ある論文の引用されるパターンは、通常でも論文の発表から数年後にピークを迎え、その後減少する傾向にあるものであるし、必ずしも撤回された、あるいは不正行為が明らかになったから引用回数が減少するという事はいえないと思います。

Darseeの1987-88年に引用された論文のうち、16件についてその引用のされかたについて調査した所、彼の論文を批判的にまたは否定的に引用している論文は一つもなく、全てが通常の引用、すなわち自分の論文を強化する材料として用いているものでした。また、1984年以降最も数多く引用されている論文、Am J Cardiol 46(4):613, 1980 (心拍出の非侵襲的ドップラー法による測定、II)の引用のされかたについても同様に調査を行いました。この論文はエコー／ドップラー法を用いて経皮的に動脈血流を測定するという方法に関する論文ですが、この実験の行われたEmory大学の調査委員会は、この実験が実際に行われた事実は無いと結論し、1983年7月に撤回された論文です。調査した15件の引用は、やはり通常の引用であり、とくにほとんどのものが他のエコー／ドップラー法を利用した診断方法を報告した論文といっしょに、しかもIntroductionの部分で引用しているものでした。また、Review論文にも取り上げられていました。

これらの事から、科学コミュニケーションの世界においては、論文の撤回という行為は、未だ成熟したfeed back機能を有しているとはいえません。その有効性という点でも、十分であるとはいえません。撤回された論文は、その事実が広く知られ、科学コミュニケーションの世界から消え去るべきですが、引用という形で一人歩きをしているのが現実なのです。MeSHにRetraction of publicationが登場してから、わずか5年では、MEDLINEにのみ多くを期待する事はできません。

医学雑誌編集者達の合意

論文撤回のfeed backシステムを確立してゆく上で重要な役割を果たす事が期待されているのは、MEDLINEばかりではありません。それ以上に重要なのが、科学雑誌の編集者達の果たさなければならない責任です。1987年9月、International Committee of Medical Journal Editorsはヘルシンキにおいてひとつの声明を発表しました。この時の会議にはAnn Intern Medを始め、BMJ, JAMA, New England J Med, Lancet, IMなどの編集者達が参加しており、彼らの声明が、論文撤回のfeed backシステムに対する一つの回答であるという

事ができます。

"Retraction of research findings" と名付けられた声明ではまず、「編集者は、著者が正直な観察に基づいて報告していると考えるべきである。」としながらも、後に誤りが発見され、それを公表しなければならぬ状況は必ず起こりうるものとしてしています。こうした場合には、編集者と著者のそれぞれの立場で対処しなければならない、すなわち訂正記事の掲載という事でありましょう。しかし、「不正行為が行われた事が明らかになった場合、その調査は、その研究のおこなわれた機関もしくは、資金提供を行った機関、その多くは NIH でしょうが、が行うべきであり、その結果は編集者達に伝えられるべきである。また、その論文がすでに出版されている場合には、撤回の記事を掲載すべきである。」としています。その際、「Retraction と名付けられた記事は、雑誌の目立つ所に掲載され、目次にも記載されるべきである。さらに、その記事には原論文の論題を含んだタイトルが付けられるべきである。レター欄への掲載といった事で済ませてはならない。理想的には、同一の第一著者とすべきであるが、他の責任ある著者の名によって行われてもかまわない。記事中には、撤回の理由及び書誌情報を含まなければならない。」と具体的なガイドラインを示しています⁸⁾。NLM の Lindberg も「Index Medicus へ掲載する上での、現行のシステムの唯一の欠点は、印刷された論文撤回の記事がなければならない事である」と述べています³⁾。

こうした点からも、科学雑誌の編集者達の役割の重要性が理解できます。

科学コミュニケーションと論文のRetraction

撤回される論文は、科学コミュニケーションの中ではネガティブなデータとして登場してきたものであり、その誤りは追試等により自然に淘汰されてゆくものであるのかもしれませんが。データの捏造や剽窃は論外としても、大胆な推論や仮説は、仮に誤りである事が判明し、後に撤回されなければならなくなったとしても、科学コミュニケーションの世界から追放されるべきものではないでしょう。そうした意味で、『論文の撤回』という行為は、科学コミュニケーションにおける、ある種のバランスを保つための反作用を果たしていると言う事ができます。『論文の撤回』というシステムが確立すれば、さらに大胆な推論や仮説が出てこないともかぎりません。最近の例では、Nature 誌上を賑わした、免疫能を記憶する水の話しや、常温核融合などもこうしたケースであるかもしれません。

大切なのは、『論文の撤回』というシステムを科学コミュニケーションの中に確立する事です。そのためには、科学者をはじめ、情報の流通に携わる我々がまず、“偶然であれ故意であれ誤りは存在する事”、そして、“その誤りは、訂正されたり、撤回されたりする事ができる事”を知る事です。もちろん、いずれ撤回できるのだから、十分なデータではないが、とりあえず発表してしまおうといった、新しい形の不正行為が起こり得るし、Publish or Perish といった世界ではすでに日常的に行われているのかもしれませんが。しかし、そのバランスを保つのは科学者自身であり、それが、科学者共同体を形成しているのです。

論文の撤回は、著者にとって勇気のいる行為ですが、科学コミュニケーションネットワークのなかに速やかに伝達されるような努力が必要であると思います。

不正行為をめぐる新しい展開

レフェリーシステムを持つ科学コミュニケーションネットワークは、その誤りや不正行為に対して、チェック機構を持っていると考えられているし、実際多くの科学者達はその事を信じて疑ってはいないように見受けられます。しかし、NIHを始め研究助成金を出している米国政府は、必ずしもそうは考えてはいません。不正行為が明るみに出て唯一人有罪判決を受けたピッツバーグ大のStephen Breaning の罪は、補助金の流用というものでした。米国議会はもはや、不正の発覚した大学・研究機関や NIHによる調査、すなわち科学者共同体内部による真相究明だけでは満足していないのです。この事を示す顕著な例が、昨年来科学ジャーナリズム誌上を賑わしているCellをめぐる疑惑の論争です。

この論文は、1986年 4月25日号のCellに発表された「ネズミへの遺伝子の人工移植」に関する論文ですが、専門の科学者ですら理解するのがむずかしい免疫学や血清学の入り組んだ分野に関するものであったといえます。翌 5月、この論文の執筆者の一人である MIT のTereza Imanishi-Kariの研究室のポストドックであった、Margot O'Tool が二人の同僚に、この実験データに疑わしい点のある事を告げたところからこの事件が始まります。この事件が米国議会をも巻き込んだ大規模な事件へと発展していった理由の一つには、若干34才でノーベル賞を受賞したDavid Baltimore が共著者の一人であった事があげられます。ノーベル賞受賞者ですら不正行為に関わっているのか、という事がスキャンダルを大きくした理由であったといえます。

MIT からTufts 大へ移っていた Imanishi-Kariらに対して、Tufts 大はただちに調査を開始します。その結論は、実験データの解釈については科学上での見解の相違であり、不正行為にあたるものではない、というものでした。MIT でも同様な調査が行われ、6月に出された結論では、O'Toolの主張に幾つか正しい点はあるものの、全体としては不正にはあたらないとする、いずれもBaltimore 側に有利な結論でした。O'Toolはこの告発と引き替えに、仕事の場を失うと同時に、研究への情熱や告発への情熱をも失い、一臨床医としての生活に入らざるを得ませんでした。しかし、やはり Imanishi-Kariの研究室の一員であったCharles Maplethorpe は NIHのWalter StewartとNed Feder にさらなる調査を依頼しました。この二人は、NIH 中での不正行為専門の調査官であり、他の多くの不正行為の調査を行ってきており、このCellの事件でFraud Busters と呼ばれるようになります。Stewart らはBaltimore らに、生のデータを提出するよう求めましたが、Baltimore らはこれを拒否し、疑惑を深める事になります。

科学における不正行為が米国議会の公聴会で取り上げられたのは、初めてではないのですが、1988年 4月12日にこの事件では初めて下院議員Ted Weiss による公聴会が開かれます。翌 4月13日にはJohn Dingellによる、下院エネルギー・通商委員会監視調査小委員会の公聴会が開かれ、Baltimore も召喚されます。Dingell らが議会でこうした問題を取り上げた背景には、多額の国家の予算を使って不正行為が行われたのなら許しがたく、何等かの監視機構をつくるべきではないのか、とする議会側の動きがあった事は間違いありません。その詳しい内容は明らかではありませんが、Office of Scientific Integrity (科学保全局) の設立を認める連邦法の制定がうわさされているのです⁹⁾。

この二度にわたる公聴会の後も、Baltimore らは自分達の不正を認めようとはしません

でした。1988年 6月、NIHはあらためて 3人からなる調査委員会を設置し、再調査にのりだしました。ここでは、Cellの論文に重要な誤りのある事を指摘し、Baltimore らも1988年11月18日号のCell誌上で、3点について誤りのあった事を認め訂正しました。しかし、論文そのものの中心的な内容には、あいかわらず誤りはないものとしています。事件はこれで終息するかにもみえたのですが、Dingell はこの 3人の委員会はBaltimore に近い人員で構成されており、公正を欠くものであるとし、1989年 5月に公聴会を再開しました。Dingell の主張は、事件の調査に 2年もかかるのは、調査機能に重大な欠陥があるからなのではないか、今必要なのは「信頼できる科学研究を保証し、科学的不正行為を防止して、このような問題が起こった時には、それに対処する自己規制システムの妥当性と有効性について検討する事」である、というものです¹⁰⁾。もはや、Baltimore らに不正があったかどうかではなく、科学における不正行為は、科学者自身の手によって科学者共同体の内部での問題解決システムによってなされるべきであるのかどうか、という点に問題の中心は移っていると考えてよいでしょう。NIHも1989年 5月に調査の再開を決めています¹¹⁾。

おわりに

科学研究に誤りは在り得るし、不正行為もまた存在しています。こうした誤りを、どのようにして正してゆくのか、それが今問われているのです。そうして意味では、ここしばらくはまだ、不正行為に対する調査の方法などについての議論が続くものと思われま。論文の撤回というMeSHはこうした時代の流れの中で登場し、市民権を得ようとしています。科学コミュニケーションの中で、情報の媒介者として存在する我々図書館員が、Retraction の意味と役割を知らなければならない所以です。

引用文献

- 1) 下坂英：科学者の「不正行為」について In: 社会から読む科学史 伊東俊太郎ほか編(講座 科学史2) 東京 培風館 1989 pp.294-315.
- 2) Lock, S.: Fraud in medicine. Br. Med. J. 296(6619):376-7, 1988.
- 3) Lindberg, DAB.: Retraction of research findings. Science. 235(4794):1308, 1987.
- 4) Broad, W. and Wade, N. : 背信の科学者たち(牧野賢治訳) 東京 化学同人 1988.
- 5) Kotzin, S. and Schuyler, P.L.: NLM's practices for handling errata and retraction. Bull. Med. Libr. Assoc. 77(4):337-342, 1989.
- 6) Kohn, A.: The brilliant John Darsee. In: False prophets. By Kohn, A. Oxford. Blackwell, 1986. pp. 84-88.
- 7) Garfield, E.: Citation indexes can help halt the spread of fraudulent research. The Scientist. 3(16):12, 1989.
- 8) International Committee of Medical Journal Editors: Retraction of research findings. Ann. Intern. Med. 108(2):304, 1988.
- 9) Lewin, R.: アメリカ科学における不正行為 科学 59(10):693-697, 1989.
- 10) Culliton, B.J.: Dingell vs Baltimore. Science. 244(4903):412-414, 1989.
- 11) Culliton, B.J.: NIH reopens Baltimore inquiry. Science. 244(4904):520, 1989.

レビュー文献の重要性

青木 仕

1.はじめに

2年前から私は、Online検索を担当している。最近では、オンライン検索によって、大量の一次文献を短時間に網羅的に検索できるようになった。そのため、研究領域がまだ定まっていない若手の研究者が、Online検索によって短絡的に文献の入手を行なう傾向は常々遺憾であると感じている。なぜなら、Index Medicusや医学中央雑誌を1ページずつ捲ることによって、研究テーマに関連する文献のほかに新たな予想外の文献の発見もあると思うからである。そのため、二次資料による文献探索も若手研究者にとっては、重要であると考えている。

Online検索で出力された大量の文献をすべて入手したとしても、それぞれの文献を読み内容を理解し、必要な箇所を抽出しなければ入手した文献は本当に役立ったとはいえない。研究者が文献を通読する時間は有限であり、そのために多くに時間を費やすことはできない。そのような状況の中で、今日レビュー文献の重要性とその意義が見出せると考える。

レビュー文献からは、あるテーマについての断片的な情報を得るのではなく総合した知識が得られ、原著論文のエッセンスが集約されていると考えられる。そこで、レビュー文献の重要性、つまり、抽出された有用な原著論文に含まれている情報を濃縮・分析・解釈・合成・評価するという機能を持つレビュー文献が、科学文献の増加と専門分野の細分化を要因にしてもっと認識されてもよいと考える。

2.レビュー文献の形態

歴史的にみるとレビューの概念は古くから存在し、17～18世紀の科学雑誌の多くは、レビュー文献を掲載していたと言われる。世界最初のレビュー専門の定期刊行物は1726年に創刊された「Critical Review of Annals of Literature」といわれている。レビュー文献とは、特定の出版物を紹介し評価する書評のほかに、Omnibus Review（網羅的レビュー）とCritical Review（批評的レビュー）に大きく類別できる。網羅的レビューは、ある期間における一主題研究の展望であり、そのテーマに関連した一次情報をできるだけ広範囲に収集・整理したもので執筆者が論評することは必ずしも要求されないものである。批評的レビューは執筆者がある主題について過去発表してきた数多くの本人の原著論文をも含み総合し、まとめ広く論じたもので、引用文献が網羅的であることは必ずしも必要とされない。まとめると、レビュー文献は特定のテーマについて関連した知識を集積し展望した文献といえる。しかし、主題テーマ、読者層、内容の程度、データ収集が中心のもの、技術的解説、一次文献の関連などによって数種の形態がみられる。

それらの内訳は、1.レビュー専門誌 2.原著雑誌 3.学会発表論文集 4.図書 5.研究報告書 6.二次資料などである。そのなかで 1.レビュー専門誌は、(a. Annual review タイプ：特定主題の研究結果を現状展望State of the artとしてレビュー文献を掲載し年

刊で発行される。) (b. Advancesタイプ：批評的レビューと現状展望的レビューを両方掲載し不定期に発行される。) (c. Chemical Reviewsのような雑誌タイプ：批評的レビューを含み学会や協会から季刊や月刊等で発行される。) (d. Scientific Americanタイプ：広範囲な分野を対象に、感心が持たれている特定主題について一般読者向けに書かれたレビュー記事を掲載する。) (e. Yearbookタイプ：1年前の個々の論文を対象にし、現状展望的に記載してあり医学分野に多くみられる。) (f. Monographシリーズのタイプ：特定分野における長論文形式に記載され不定期に発行される。) (g. Essayタイプ：教科書的なレビューで各主題の専門家というよりも一般的に広い読者層を対象に記載してある。) (h. Commentsタイプ：一つの主題について、その分野の最新文献を中心に短く書かれたレビュー文献。) といったように細分されている。

次に、優れたレビュー文献の条件としては、1.各主題分野で著者が優れた権威ある専門家であること。2.批評的な姿勢で書かれてあること。3.網羅的に記述してあること。4.明確な表現でバランスのとれた記述であること。5.優れた引用文献が収載されていること。6.図・表が必要に応じて的確に示されていること。などがあげられる。

レビュー文献に対する研究者の利用目的としては、1.最近の重要な文献を見逃さないで、常にある主題のUp-to-dateな知識を得る。2.ある主題分野の概況を知るため。3.特定題目に関する原著論文を探すため。4.知識を整理し、理解を深めるため。などであり、さらに研究者はレビュー文献で見つけた一次文献を探して、さらに新しい情報を得ようとする行動が働くといわれている。

従来のように深い専門知識を持った執筆者が一人で調査・展望し、レビューをまとめあげることは、科学研究の進歩に伴い、近年次第に困難になってきている。そこで、最近のレビューは多くの専門家による分担執筆の形態がとられる傾向になってきている。

2.日本におけるレビュー文献の先行研究

我が国のレビュー文献に関する先行研究を見ると、笹川はChemical Abstracts, Index Medicus, Biological Abstracts, Bioresearch Index等の二次資料に採録されたレビュー文献を調査している。そのなかで、総文献数に対してレビュー文献の占める比率が年々漸増傾向にあると述べている。

また、牛島は、Chemical Abstractsに収録されているレビュー文献の実態調査を行ない、総文献数に対するレビュー文献数の割合が1970年前後から増加しており、レビュー文献のみが掲載されている雑誌も増加していること。特に生化学分野など進歩の著しい分野でのレビュー文献の増加が顕著であり、そのうち英語による文献が70%を占め、1論文に対する平均引用文献数は67件であること。一次雑誌とレビュー専門雑誌に発表されたレビュー文献は、調査対象の総レビュー文献22,000件中69%を占めていたと報告している。

木原は、蛋白質の構造研究分野について言語別分布を調査し、レビュー文献は原著論文に比べ、著者の母国語でかかれている割合が高いと報告している。

このように興味深い研究が見出せるが、まだまだわが国においてはレビュー文献についての研究が数少ないと感じる。

3. AIDS関連のレビュー文献

例えば、1989年11月現在、AIDSをMEDLINEで検索すると17,892文献中、1,759件のAIDS関連のレビュー文献が抽出される。それらのAIDS関連のレビュー文献の中には、以下に示すレビュー専門誌や原著雑誌の特集が検索された。(Ann NY Acad Sci No.437.1984.)は600ページにわたって1983年11月14-17日に開催されたNew York Academy of SciencesのConferenceの内容を掲載している。(Ann Intern Med 103(5)1985.)には特集として25論文が収載されていた。また、(Prog Allerg No.37.1986.)はAIDSウイルス発見者の二人、Gallo-RC.Montagnier-L.の論文から始まり15文献が収載されている。(Ann Neurol 23. Suppl.1988.)にはRetroviruses in the Nervous SystemというタイトルでNIHが1987年5月4-6日に亘って開催したSymposiumのProceedingsを46文献掲載している。

このように代表的な研究者による年間の研究報告や特集のレビュー文献は、AIDS研究の進歩と概略を知るのに適していると考えられる。

4. おわりに

このように重要であると考えられるレビュー文献ではあるが、当館を例にとると必ずしも研究者に多く利用されているとは言い難い現状である。今後我々図書館員がもっと利用者にレビュー文献の必要性をアピールしなければならない。そのためには、レビュー専門誌は別置き配架する。Annalsタイプといった特定主題が掲載されている専門誌はその主題をピックアップし広報活動に努める等が考えられる。また、Index Medicusの存在は知っているがCumulated版の毎年2号に掲載されているBibliography of Medical Reviewsの存在を知っている研究者は数少ない。Index Medicus1988年版のBibliography of Medical Reviewsには、871ページにわたり約65,000件のレビュー文献が収録されており常に利用を待っているが利用はされていない。これらの重要な文献の紹介も折りにふれて行なっていかなければならない。

当館では国内文献においては、現在12分野に亘って発行されている(MOOK)が頻繁に利用されている。わが国においては、今後本格的な分野別のレビュー専門誌の刊行が待たれるところである。

最後に学術雑誌の流過程における情報メディアを中心とした“情報メディアの関連図”からレビュー文献の位置を(図1)に示す。

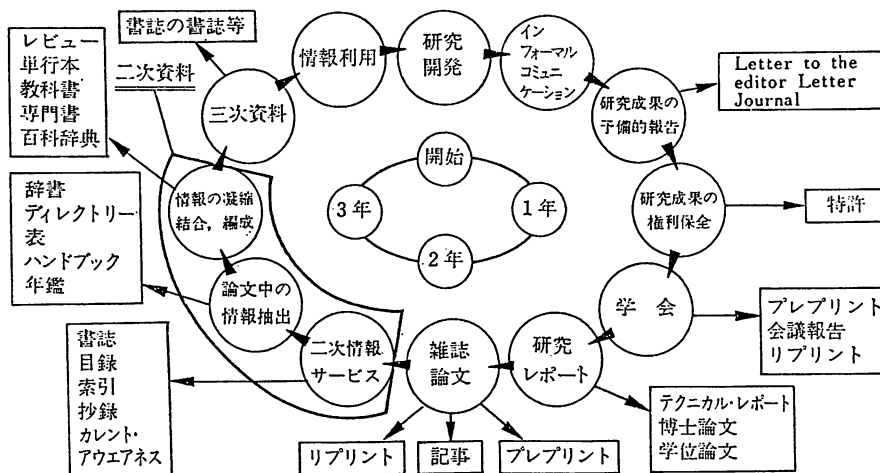


図2.2 情報メディアの関連図

出典: Subramanyan, K. "Scientific literature." In: Kent, A., Lancour, H., Daily JE ed. Encyclopedia of Library and Information Science. Vol.26. New York, Marcel Dekker, 1979, p.376-548

図1. (津田良成編、図書館・情報学概論、勁草書房、1983.より転載)

引用文献

- 1) 津田良成: Bibliography of Medical Reviewsに載った日本のレビュー文献. Library and Information Science, No.14, 1977.
- 2) 図書館情報学ハンドブック編集委員会編: 図書館情報学ハンドブック. 東京, 373-76.587-91, 1988.
- 3) 関口昌樹: Review Journalの意義と重要性. 薬学図書館, 15(2):52-59, 1970.
- 4) 三井幸子: 図書館・情報学分野におけるレビュー誌の比較. Library and Information Science, No.25, 11-23.1988.
- 5) 笹川 統: Reviewの探し方. 薬学図書館, 18(3):108-19, 1973.
- 6) 牛島悦子: レビュー文献と情報検索. 第14回情報科学技術研究会論文集, 53-60, 1978.
- 7) 木原 裕他: レビュー文献に付けられたキーワードの特徴. 情報管理, 23(11): 696-704, 1980.
- 8) 木原 裕: レビュー文献とレビューでない文献の言語別、著者数別比較. 自治医科大学紀要, 5:153-55.1982.
- 9) 青木公男他: 医学総説論文の書誌類. 医学図書館, 21(3.4):219-33.1974.
- 10) 花田岳美: 基礎化学におけるレビュー雑誌の展望. 情報管理, 14(8):481-84.1971.

健康雑誌の特性と評価

井上 三郎 平輪麻里子 神場 清治
北川 正路 熊谷智恵子 黒川 玲子
宮内 洋一

I. はじめに

近年、一般の人々からの健康情報に対する関心が増加しており、健康を主題とした新聞記事や雑誌、そして、テレビ番組などが目につくようになった。それだけに、健康情報を生産し伝達する立場にいる人々は、情報を正しく評価し、わかりやすく再編成していくことが必要になる。主に医学専門家を対象に学術的な情報を取り扱う医学図書館も、こうした健康情報への一般の人々からの要求増に、何らかの対応を検討する必要があるのではないだろうか。

よく知られているように、米国医学図書館(National Library of Medicine)¹⁾は、医学専門家ではない一般の人々のための健康情報のアクセスの必要性を認識し、医学情報を大きな視点で捉えようとしている。野添²⁾は、米国での健康情報サービスの現状を実例としてあげ、健康情報を再編成していくための組織の必要性を説いている。しかし、健康情報の所在や評価に言及した論文は、わが国においてはあまり見られない。わずかに、テレビ健康番組の出演者の分析を行なった岡と徳山³⁾の論文があげられるだけである。

そこで、一般の人々が求めている健康情報とは何かを明らかにするために、本稿では健康雑誌を探りあげることとし、記事の内容、執筆者の類別などにより健康雑誌の性格を分析することにした。

II. 対象と方法

「出版年鑑」(出版ニュース社)の雑誌目録の「医学・衛生・薬学」項目は、現在流通している健康雑誌を網羅的に収載しており、「出版年鑑」1987年版から健康雑誌と推定できるものを抽出すると26誌におよぶ。そこで、これらの26誌から発行部数と公共図書館の所蔵状況などを考慮し、まず以下の4つの雑誌を対象誌として選定した。

「毎日ライフ」	毎日新聞社
「暮しと健康」	保健同人社
「わたしの健康」	主婦の友社
「壮快」	講談社・マイヘルス社

つぎに以上の4つの雑誌を対象誌とし、執筆者の属性と特集記事の主題についての調査を行なうことにした。執筆者の属性については、1987年の1年間に各誌の特集記事欄と質疑応答欄に出現した全執筆者を対象とした。執筆者を抽出するにあたっては、共著2名については2名、3名以上は筆頭1名とし、同一執筆者の重複は調整しないことにした。特集

記事の主題については、過去3年から5年間に出現した各誌の全特集記事欄を対象とした。

現在流通している健康雑誌の創刊は、主に戦後であり、1970年代以降に顕著である。発行者の性格は、「医学・衛生・薬学」系が主流とはいえない。近年においては、大手の総合出版社や新聞社などの参入も目立って見られるようである。「暮しと健康」は、戦後いちはやく1951年に創刊され、すでに42年の歴史をえている。その他3つの雑誌はいずれも1970年代に創刊されているが、近年の健康雑誌の出版動向を反映する代表的なものといえる。したがって、これらの4つの雑誌を分析することにより、健康雑誌を個性において捉え、また一般化して捉えることが可能であろう。なお、発行部数は、「壮快」350,000部、「わたしの健康」200,000部、「暮しと健康」120,000部、「毎日ライフ」85,000部と記録されている。

Ⅲ. 結果と考察

1. 執筆者の所属機関

まず、執筆者の属性に注目してみることにする。図1は、対象とした4つの健康雑誌の執筆者の所属機関による構成割合を示したものである。“大学”“病院”“研究所”に分割し、この中のいずれにも所属していない執筆者を“その他”とした。機関の種別は示さなかったが、“大学”においては、総合大学の医学部と医科大学が中心である。

総体的に見ると、3つの雑誌において“大学”に占める割合が高くなっており、健康雑誌の記事は医学研究者によって執筆される場合が多いことがわかる。しかし、ふたつの雑誌においては“その他”が高い比率を占めており、健康雑誌の執筆者は、医学専門誌と比較してみると多岐にわたっているようである。

4つの雑誌を詳しく見ていくと、「毎日ライフ」と「暮しと健康」は、いずれも大学が過半数を占めている。ちなみに、これに病院を含めると、「毎日ライフ」は77.2%であり、「暮しと健康」は89.4%である。すなわち、このふたつの雑誌の記事は、医学研究者と医学臨床家によって執筆される場合が多く、いずれも現代医学の研究成果に依存する傾向の強い雑誌であることがわかる。「暮しと健康」は、「毎日ライフ」と比較すると、病院に占める割合が39.1%と高く、より臨床の場を包括しようとする傾向が強いといえる。

しかし、「わたしの健康」と「壮快」は、多岐にわたっている。「わたしの健康」は、“大学”が42.2%と高い割合を占めているが、ついで“その他”の割合が33.2%と高くなっている。「壮快」も同様に、“その他”の割合が49%と高く、これは大学に病院を含めた割合を超えている。

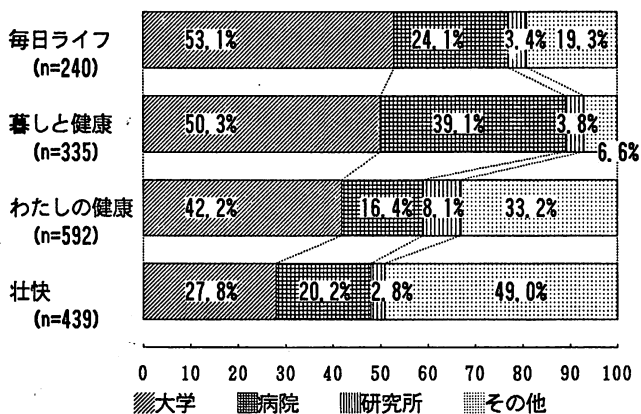


図1 執筆者の所属機関

「わたしの健康」と「壮快」の“その他”の部分を中心に整理してみると、つぎのような特徴が見られる。すなわち、「わたしの健康」は、所属が明確でない執筆者が43.4%を占めており、主婦や会社員などの一般の人々によって執筆される場合が多い。「壮快」は、日本東洋医学会をはじめとする東洋医学系の機関に所属する執筆者が57.9%を占め、この雑誌の主流となっているなどである。「わたしの健康」には、現代医学の研究成果に依存する一方で、民間において継承されてきた知識や健康法を汲み上げようとする傾向が見られる。「壮快」は、現代医学よりも、むしろ東洋の経験医学に依存する傾向の強い雑誌であるといえる。

このように、健康雑誌の執筆者は、医学研究者である場合が多いといえるが、読者である一般の人々である場合を含めて多岐にわたっている。一般の人々の必要としている健康情報は、必ずしも現代医学の研究成果に依存したもののばかりではないようである。

2. 執筆者の肩書き

それでは、健康雑誌の執筆者はどのような地位にあるのだろうか。ここでは、大学と病院に所属する執筆者を対象として、その肩書きについて見ていくことにする。図2は、大学に所属する執筆者の肩書きによる構成割合を示したものである。これによると、対象とした4つの雑誌のいずれも共通して“教授”が70%近くを占めており、地位においては高いクラスに集中していることがわかる。「毎日ライフ」は、“教授”以下、“講師”“助教授”と続くが、その他3つの雑誌は“助教授”“講師”という順位となっている。助手はふたつの雑誌に見られるが、いずれも割合は低いものとなっている。

同じく図3は、病院に所属する執筆者の肩書きによる構成割合を示したものである。これによると、「暮しと健康」は、“院長”と“部長・医長”とが同比率であるが、その他3つの雑誌はいずれも“院長”に占め

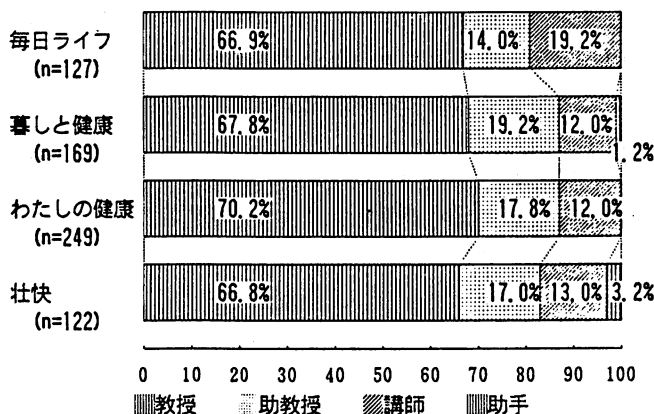


図2 執筆者の肩書（大学）

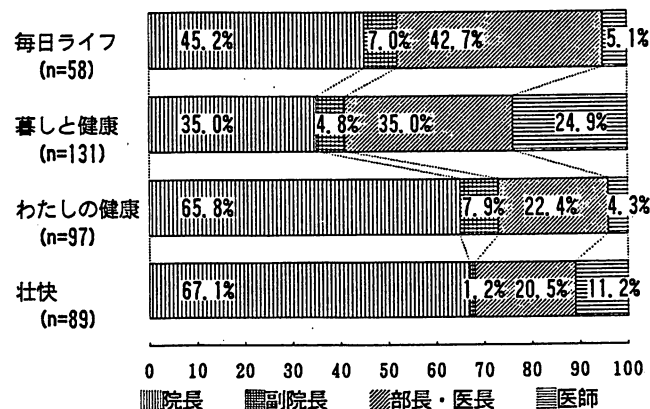


図3 執筆者の肩書（病院）

る割合が高くなっている。ことに「わたしの健康」は65.8%、「壮快」は67.1%といずれも高値を占めており、病院においても地位の高いクラスに集中する傾向は強いようである。「医師」はいずれの雑誌にも見られるが、やはり割合は低いものとなっている。

このように、健康雑誌の執筆者は、大学においては教授であり、病院においては院長である場合が多く、絶対数においては最も多いはずの助手や医師である場合は少ない。したがって、健康雑誌の執筆者は、およそ社会的地位の高さに比例したピラミッドを構成していることがわかる。これは、たとえば講師や助手が記事を量産する傾向の強い医学専門誌とは大きな違いであるといえる。このことは、健康雑誌を編集する側においては共通の認識なのであろうが、一般の人々が健康情報を求める場合、執筆者の社会的地位はその情報の信頼性を得るためのかなり重要な指標となっていることを示している。

3. 特集記事の主題

健康雑誌の記事区分において、特集記事欄は中核を成すものである。それでは、健康雑誌の特集記事欄においてはどのような主題が採りあげられているのであろうか。図4は、「毎日ライフ」の過去5年間(1983年-1987年)に出現した62件の特集記事の主題について、米国国立医学図書館分類法を用いて分類してみたものである。

主題を表現する言葉に注目してみると、つぎのような特徴が見られる。すなわち、疾病名、臓器名、診療科目などの他、一般名詞が混在して用いられている。また、医学および関連領域を対象とした分類表が対応できない主題が15件あり、医学情報と一般の人々を対象とした健康情報との間にずれが生じているなどである。

さて、「毎日ライフ」が過去5年間で最も採りあげることの多かった主題は、米国国立医学図書館分類法によれば、心臓血管系(WG)、胃腸系(WI)、そして、精神医学(WM)の各6件である。これら3つの項目の各6件が占める割合は、全体の約30%である。さらに、次に頻度の高い神経系(WL)の5件、病理学(QZ)の4件をこれに加えると、全体の過半数におよぶ。心臓血管系、胃腸系、精神医学の3つの項目が出現する年代を調査すると、心臓血管系と胃腸系は過去4年間、精神医学は過去5年間を通じて出現しており、これらが一般の人々においてはとりわけ関心の高い分野となっていることがわかる。

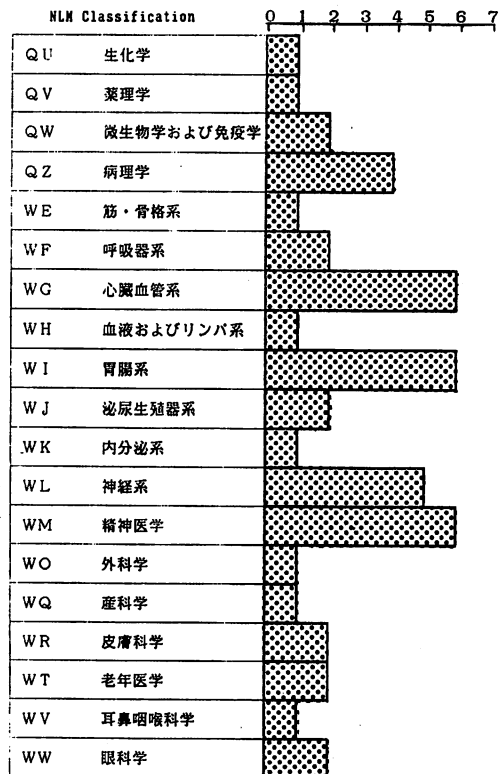


図4 特集記事の主題(毎日ライフ)

ところで、これらの項目に分類された主題を表現する言葉に注目すると、がん、高血圧、

心臓病、動脈硬化、脳卒中などの疾病名が散見され、わが国のいわゆる成人病を中心とした現在の疾病構造の反映が見られる。成人病の特徴は、きわめて長い期間をかけて宿主である人間を死においやること、さらに長い間の日常生活と深い関係を示すことである。

「毎日ライフ」の特集記事欄に採りあげられている主題は、一般の人々の疾病一次予防に主眼をおいた健康の自己管理への要求を反映しており、また健康雑誌の中心的読者層が中高年層であることを明らかにしている。

4. 特集記事に見る情報のタイプ

健康雑誌の特集記事欄に採り上げられている情報は、どのような性格のものであろうか。そして、一般の人々の必要としている情報とは何であろうか。たとえば野添は、一般の人々が必要としている健康情報を3つのカテゴリーに的確に分類している。そこで、ここでは野添の設けたカテゴリーを参考とすることにし、若干の修正を加えながら健康雑誌の特集記事を整理すると表1ようになる。

表1 特集記事に見る情報のタイプ

-
- | |
|---|
| a. 特定の疾患についての情報：がん、老人病、エイズなどの病気そのものについて、そして、情報の所在について |
| b. 医学知識の啓蒙を目的とした情報：たとえば、遺伝と医学の進歩について、また身体における微量元素の必要性などについて解説したもの |
| c. ウェルネス・タイプの情報：身体を健康に保つためのknow-how的なもので、運動、食生活、漢方など主題は多岐にわたり、症状、あるいは症候の緩和や軽減を目的としたものが主流である |
| d. 医療サービスについての情報：医療機関、医師へのアクセス方法や、医療費、医薬品などについてのもの |
-

それでは、健康雑誌の特集記事を計量的に捉えるとどのような特徴が見られるであろうか。図5は、対象とした4つの雑誌の過去3年間(1985-1987)に出現した特集記事を表1の4つのカテゴリーのもとに分類してみたものである。

総体的にみると、“特定の疾患についての情報”と“ウェルネス・タイプの情報”が抜きんでており、健康雑誌においてはこのふたつのタイプのもものが主流となっていることがわかる。一般の人々は、特定の疾患についての医学専門家による信頼のおける知識を求め一方で、健康を維持するための具体的方途を期待しているといえる。“医療サービスについての情報”がいずれの雑誌においてもあまり採り上げられていないのは、健康雑誌の情報が新聞やラジオなどのその他のメディアと比較して記憶度が高いため、自立性も高いこと示すものであろうか。いずれにせよ、特集記事欄に限定するならば、一般の人々は完結した情報を健康雑誌に求めているといえる。

4つの雑誌を詳しく見ていくと、「毎日ライフ」と「暮しと健康」は、“特定の疾患についての情報”が54.1%と過半数を占めており、いずれも病気の機構の科学的解明にもとづいたものが中心となっている。このふたつの雑誌の情報の多くは、現代医学の研究成果

に対する依存度の高いものであることがわかる。「暮らしと健康」は“ウェルネス・タイプの情報”が29.8%を占めており、「毎日ライフ」と比較すると、より実的な要素が強いといえる。

しかし、「わたしの健康」と「壮快」は、“ウェルネス・タイプの情報”が大半を占め

ており、特定の疾患を扱った情報は、「わたしの健康」7.2%、「壮快」3.5%と少ない。このふたつの雑誌の情報の多くは、病気の機構の科学的解明であるよりも、むしろ症状の緩和や軽減を目的としたものであることがわかる。

このふたつの雑誌の“ウェルネス・タイプの情報”を整理してみると、つぎのような特徴が見られる。すなわち、いずれも体験的記事を多く採りあげており、「わたしの健康」は全体の22.3%がこれに該当している。また、主題は運動、食生活、漢方、性の問題など多岐にわたっている点で共通しているが、「わたしの健康」は食生活に関するものが全体の36.8%を占め、「壮快」は運動に関するものが全体の33.5%を占め中心となっているなどである。「わたしの健康」は、食生活に関するもの、美容についてのものを多く採りあげていることから、「壮快」と比較して、より主婦層を対象とする傾向が強いようである。健康雑誌の特集記事に一般の人々の要求の反映を見るならば、一般の人々は健康を維持するために実に多くの試みを行っており、その要求は切実なものであるといえる。

IV. まとめ

以上、4つの健康雑誌を対象とした執筆者と特集記事欄の分析の結果について述べた。対象とした4つの健康雑誌の性格については、つぎのようにまとめておくことができるであろう。

すなわち、「毎日ライフ」と「暮らしと健康」からは、病気の機構の科学的解明を基礎とした健康情報を提供しようとする意図がうかがわれる。「毎日ライフ」は、いわば病気の機構を医師に代わってわかりやすく説明することを主眼とした雑誌であり、「暮らしと健康」は、42年間の長きにわたって健康ジャーナリズムを支えてきた雑誌であろう。一方、「わたしの健康」と「壮快」からは、病気の機構の解明であるよりも、むしろ症状、あるいは症候の緩和や軽減を目的とした情報を提供しようとする意図がうかがわれる。「わたしの健康」は、主に民間に語りつがれてきた治療法や健康法を読者が体験的に提供し合う要素を持つ雑誌であり、「壮快」は、東洋の経験医学の伝統に根ざした治療法や健康法を提供している雑誌であろう。

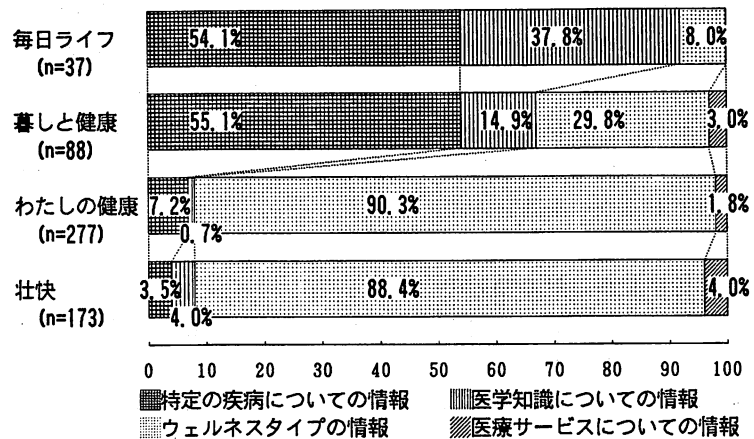


図5 特集記事に見る情報のタイプ

一般の人々が求めている健康情報とは何かを明らかにするために、健康雑誌に記載されている記事の概要、執筆者の類別などにより健康雑誌の性格を分析した。分析の結果、対象とした4つの雑誌が異なった性格をもち、読者からの異なった要求を汲みあげていることが明らかになった。健康雑誌の性格は多様であり、一般の人々の求めている健康情報も広範囲にわたるものであることが推定される。

本調査は、学術雑誌塾第3期の活動の一環として行なったものである。本稿の概要は、東京都養育院での第14回生物医学図書館員研究会、第5回図書館情報サービス研究大会において発表した。本稿をまとめるにあたり、御指導、御助言をいただいた昭和大学図書館の板橋瑞夫氏、東京慈恵会医科大学医学情報センターの山崎茂明氏に感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 21世紀へ向けての医学・医療情報(1)。(野添篤毅, 岡千穂美訳) あいみっく, 9(3): 24-29, 1988
- 2) 野添篤毅: 医学情報サービスの現状と将来(2)消費者への健康情報サービス。あいみっく, 8(4): 13-17, 1987
- 3) 岡千穂美, 徳山五郎: 医学情報の普及過程における専門家の役割—テレビ健康番組の場合—。図書館情報大学研究報告, 7(2): 29-44, 1988
- 4) 雑誌新聞総かたろぐ1987年版。東京, メディア・リサーチセンター, 1987.

いまさらどうして健康雑誌がという思いを口にしたのが、シソーラス研究会のもう数年前になる忘年会での席上であった。それが学術雑誌塾へ、そして雪の東京都老人総合研究所での井上氏の発表となった。その井上氏から、標記の原稿の要請を受けた。この1ヶ月間やたらに立て込んで、万事必ずしも十分ではないのであるが、合切袋の紐を緩めて、その依頼にお応えする事にした。冒頭、いまさらと表現したのは、つつい健康雑誌というか家庭医学雑誌或は療養雑誌などは、もう既に過去のものだとの意識しなかつたからである。昭和10年代前半に、親の愛読誌であった婦人雑誌の付録、多分恐らく「婦人衛生宝典」等と言うのもあったかと思うが、そんなのを手にした記憶がある。やがて昭和10年代後半は、旧制中学時代で 大東亜戦争中であるが 「お母さん、姉さんが読んでいる婦人雑誌や恋愛小説は決して読んではいけません。陸、海軍や上級学校への勉強を下さい」そして、戦い済んで日が暮れて、昭和20年代前半は、堰を切った様に通俗医学雑誌が性医学雑誌となって、氾濫した。昭和20年代後半は、不幸にも療養雑誌に親しまざるを得ない仕儀となった。そんな因縁が健康雑誌にはある。

夏になると庭と言うには、厚かましい雑草地帯であるが、休日の日課は、草むしりとなる。ドクダミ別名を十薬が其処此処に群生する。ただ抜いてしまうには、不敏だと思いつながら居ると、新聞広告が目に入った。新聞1ページの1/6を占めるスペース「壮快」6月号である。働きざかりの心と体の総合雑誌。毎月8日発売。「多くの病気にすごくよく効くと人気沸騰のドクダミ」「酢ダイズの味と薬効を極限まで高めるコツ大研究」。早速購入。目次を繰れば、他の特集に「水は生命を活気づけ、成人病も老化も撃退する百薬の味だ。水を安全においしく飲む法もあわせて紹介」「いつでもどこでもすぐできる、すぐ効く腕のみ療法 全公開。腕をもむだけで、全身の病気が軽快」「自分の病気を漢方薬で治した医師の手記」「グラフ 腰痛 五十肩 ひざ痛に実によく効く ゴロ寝体操」等 極めて多彩である。ところでドクダミの肝心な効果、効用は、以下の15項目 ほぼ見開き2ページづつに書かれている。

- 1) ドクダミは、日本で最もよく使われ 多くの病気に多彩な効果を現わす薬草の王
- 2) 高血圧の人は、ドクダミの煎じ汁を毎日飲むと血圧が下がり動脈硬化も防げる
- 3) 疲労快復や精力増強に大変有効で非常に美味と大人気のドクダミ酒の作り方
- 4) ドクダミには、血液の凝固を防ぐ成分があり、煎じて飲めば心臓病もボケも防止
- 5) ドクダミの生汁を綿棒につけ、鼻の中に塗ると効果が早くて確かな蓄膿症改善法
- 6) 肛門に塗ると痔の改善に大変有効なドクダミの葉から作る自家製軟こう
- 7) ドクダミの煎じ汁を飲むと尿の出がぐんとよくなり、手足や顔のむくみも解消
- 8) ドクダミの煎じ汁は、優れた便秘薬で、1週間に1度程度の重症の便秘を解消
- 9) 肌荒れや吹き出物を治し、肌まで白くするドクダミの煎じ汁のすごい美肌効果
- 10) シミやソバカスの軽減に素早い効果が現れるドクダミ化粧水の作り方、使い方
- 11) アトピー性皮膚炎のざらざらした肌がすべすべになってくるドクダミのふろ

- 12) ドクダミの生汁を塗ると水虫、おでき、ニキビの治りがぐんと早くなる
- 13) ドクダミの煎じ汁の常飲は、胆石ばかりか腎臓結石、尿路結石もみごとに改善
- 14) ドクダミのお茶を飲んだら、2ヶ月続いた耳鳴りが、うそのように改善
- 15) 雑草ドクダミを名薬草に変更させる採草法、乾燥法、利用法

と言う事である。

「それでは ドクダミの摂取法と利用法について 説明しましょう。……主に薬を集めますが、毛細血管を丈夫にする効果を強めるには、イソクエルシトリンなどの豊富な穂の部分も採取しておきましょう。……集めたドクダミは、水洗いしてきれいにしたあと、2〜3週間ほど陰干しし、かりかりに乾いたものをはさみで刻み 密封容器に入れて保存しておきます。そして、乾燥したドクダミ15グラムを600ミリリットルの水で煎じ、300ミリリットルまで煎じつめたものを1日 2〜3回に分けて服用します。……」 爾来、ドクダミ茶を朝夕2回宛、食前に服用している。もとより効く 効かぬは論外で、ひたすらドクダミをただ棄ててしまうには忍びないという心情から発しているのだから 何をの期待はない。

新聞広告のスペースに就いて「壮快」は、1/6ページと述べたが、同種の健康雑誌「わたしの健康」及び「安心」も同様のスペースで、発売日は8日、従って8日朝刊に共に掲載される。しかし「暮しと健康」及び「毎日ライフ」は、発売日は3日、広告掲載日も当然前記3誌とは違う。広告のスペースも小さい。言うならば 大衆小説と純文学の差と言えば適切かも知れない。内容、質、対象、等の編集方針によつての差異もあるが、現在での総合的健康雑誌は、5誌が主流であると考えるのが妥当であろう。「壮快」は、マイヘルス社編集、発行は 講談社。「わたしの健康」は 主婦の友社。「安心」は マキノ出版。「暮しと健康」は 保健同人社。「毎日ライフ」は 毎日新聞社。がそれぞれ発行所である。「壮快」の講談社は、昨年3月廃刊になったが、「婦人クラブ」の発行所、「わたしの健康」の主婦の友社は 言うまでもなく「主婦の友」の発行所、即ち、2誌は 婦人雑誌由来の健康雑誌と言うことが出来る。「暮しと健康」は、療養雑誌「保健同人」の後身誌である。従つて結核療養雑誌の流れと考えられる。婦人雑誌由来の亜流として通俗医学雑誌があり、これも健康雑誌への要因となっている。正統的と言うか医学或は日本の医学雑誌の起源からは、衛生思想普及誌が、と言う事になろう。

日本の医学雑誌のおこりは、「日講紀聞」が講義録風、「治験録」が臨床雑誌風、「文園雑誌」が所謂 医学雑誌風 であると言われているが、いずれも実証したわけではないので、何とも言えない。日本での医学は、病気を対象にしたそれであつて、病気以前の予防への意識は必ずしも高くはなかつたと思う。

明治16年6月30日、大日本私立衛生会が発会式を挙行、「大日本私立衛生会雑誌」を創刊する。明治25年刊行のものをみると、本会記事、支会記事、論説：虎列刺病毒空気より伝染の実験。肺労の発生、伝染及予防。九州地方赤痢病実験報告ほか。談話：種痘の注意。天然痘の予防。種痘の勧誘ほか。中外彙報：痘瘡の流行。栃木県の天然痘。種痘の効は胎児に及ばざるか。健麻質斯治療薬の新發明。印刷業者には肺患多しほかがその内容となつている。この衛生会の支会の設立が東京では、芝区が最も早く 明治17年9月の設立、機関誌「芝私立衛生会雑誌」を発行した。この会は、医師と民間とが協力一致して衛生普及に当たる主意であるので、会長には区長、副会長には 区内最有力の医師が推されたようである。極めて、日本的と言うか官僚的と言うべきか 明治の思想そのものである。雑誌の

内容は、医師たちの衛生に関する演説会の模様をつたえるものであった。日本各地に支部、支会が順次設立され、その思想がもたらされていったのである。明治20年11月には、私立大日本婦人衛生会が創立、翌21年2月「婦人衛生会雑誌」が創刊され、のち「婦人衛生雑誌」と改題しながら、大正15年382号まで続いた。第161号、明治36年4月22日 をみる。本会講演：歯の衛生、ドクトル久保田 誠麿、衛生雑話：久保猪之吉、口紅、貴ふべき色、皮膚の色、日光と皮膚の色、エスキモー人種の色、皮膚の色素の効用、色素は何から来るか、色素の増す場合、皮膚の色を美にする法、質疑応答：子宮癌、台湾会員へ、子宮内膜炎、中将湯、麦めし、脳力を強健にする事、色の黒きを白くする事、鳩むね、妊婦長途の旅行夫婦及び出産後長途の旅行同室、子宮に関する事、脊柱弯曲症、皮脂症、皮膚の色を美にするホーレル水の事、腋臭の事、歯ぎしりの事、タカヂアスターゼ分量、肝臓に就いて肺病輕快者の注意、便秘、小児の便秘、下腹のできもの、その他雑件、大日本婦人衛生会記事が内容である。

婦人雑誌よりも女性の目覚めと社会的地位の向上を望む女性雑誌が明治17年6月「女学新誌」として創刊された。のちに所謂 婦人雑誌と称せられる 育児、料理、医学、編物、私交を根幹とした実用雑誌が、明治34年創刊の博文館の「女学世界」、明治35年創刊の金港堂「婦人界」、昭和39年創刊の実業之日本社「婦人世界」などによってこの形態に定着していった。前述の「主婦の友」は、大正6年「主婦の友」として創刊されたものである。この主婦の友社は、「わたしの健康」のほかに、ママとパパの育児誌「わたしの赤ちゃん」、妊娠、出産を安心して楽しめる生活情報誌「Baloon：もうすぐお母さん」など準健康雑誌も出版している。昭和63年3月68巻で廃刊となった「婦人クラブ」は、大正9年「婦人倶楽部」として創刊されたものであった。この版元講談社も、2冊でひとつ赤ちゃんとママのペア雑誌「えくぼ」という育児誌。昭和61年8月に休刊となった「婦人生活」の版元婦人生活社は、もうすぐママのお友だち雑誌「マタニティ」、赤ちゃんの心と体を大切にする「ベビーエイジ」、入園までの子どもとお母さんの雑誌「プチタンファン：Petit en fant」、それに思いやり大切におとしよりの家庭介護誌「やさしい手」などを出している。これらが婦人雑誌の出版社と健康雑誌の係りになるわけであるが、明治40年「婦人世界」の実業之日本社は、「実業之日本」創刊10周年記念として、臨時増刊「健康大観」を刊行した。この発刊の辞によると「健全なる身軀と健全なる精神の必要なること今日の如きはあらず、生存競争の益々激烈に赴くに従ひ、強健なる身軀を有せざる者は、到底活動に堪え、競争に勝つこと能はず、如何なる英才も必ず中道に昏倒し、終天の恨を呑んで社会の劣敗者とならざるべからず。奮闘の勝利は、唯身体の強健なる者之を得べし、勝敗の問題は、結局健康の問題なるを知らざるべからず」と言う事であり、その内容は次のとおりであるし、筆者には、入沢達吉、大沢謙二など、当時大家と言われた人達の名がある。

長寿は、如何にして得べきか

強肺術及肺病予防法

如何なる食物が健康を増進するか

胃腸は如何にして健全ならしむべきか

眼の衛生法と眼病予防法

脚気は、如何にして予防すべきか

歯の衛生法及歯病予防法

鼻の病気は、如何に他の諸病の原因となるか

牛乳は、如何に飲むべきか

脳は、如何にして健全ならしむべきか

恐るべき酒の害毒

精神の健康に及ぼす生理的作用

健康に必要な最良の運動法 以上が、明治40年刊行の「健康大観」の内容である。平成元年刊行の健康雑誌と併せて、思いを巡らすとき、感慨無量と言わざるを得ない。

私立衛生会、大日本婦人衛生会、とあって、大正2年 大日本学校衛生協会が発足、「日本学校衛生」の発刊となる。第1巻 第1号は、大正2年4月で、論説：教員の肺結核に対する予防及撲滅に就て 北里柴三郎 小学校の温室法 横手千代之助 学童虎眼病の予防及治療に就て 安西茂太郎ほか 抄録：結核予防と学校教育 ほかに雑報が内容となっている。「通俗衛生」は、大正11年 大阪府衛生会と大阪結核予防協会とが発行所となっている雑誌であるが、毎月1日が家庭版 10日が社会版 20日が学校版と称して刊行された旬刊の時代もあった。因に 昭和10年12月1日 発行の分は 幼稚園 家庭版であって、「通俗衛生」に併せて ツウゾクエイセイ オテテヲ アラッテ カラ ゴハン ヲ イタダキ マシヨウ と表紙に書かれている。また、「子ども衛生」は子供衛生社の発刊で、昭和10年創刊、昭和14年廃刊の雑誌であるが 岡田道一 トラホームの予防の歌 衛生唱歌

虎は こわいが 清正公は

ただ 一やりで たいじした

どんなやりにも ビクともせぬは

虎よりがんこな トラホーム 以下 略

当時は、教員の肺結核と学童の虎眼病が、最重要な課題であったのである。

結核療養雑誌の流れは、明治23年 神戸須磨に 日本最初のサナトリウムが設立され、明治37年4月1日から肺結核予防規則、第1条 学校、病院、製造所、船舶発着待合所、劇場、寄席、旅店、その他地方長官の指示せる場所には、適当個数の唾壺を配置すべし。……前項の唾壺には唾、痰の乾燥飛散を防ぐため、少量の消毒薬液または水をいれ置き、唾壺内の唾、痰は第6条の方法により消毒するにあらざれば、投棄すべからず。……第9条までが施行された。明治42年には のちに「療養知識」と改題した「白十字」が発刊された。大正2年に日本結核予防協会が設立され、大正6年 大阪市立刀根山病院が日本初の公立結核療養所として設立された。余談であるが 大阪大学前学長 山村雄一は、日本経済新聞の連載もの、「私の履歴書」のなかで、「……本当の意味での臨床医学を教えてくれたのは刀根山病院である。……刀根山病院は大阪市立で 公立では日本で最初の結核療養所であった。当時、結核はいまのガンに似て、非常に怖い病気だった。特に、将来のある若い人が多くかかり、死んでゆく悲惨な病気だった。医者として戦うなら大きな相手を、と結核を選んだのである。」と記している。大正7年、日本結核予防協会が「人生の幸福」そして、大正12年 自然療養社が「療養生活」を創刊、昭和13年 結核予防会が設立された。昭和19年 ストレプトマイシンと称する抗結核薬が発見され、昭和21年にPASの合成、昭和27年にINA 昭和41年 リファンピシが開発され、従って 明治以来の大気安静栄養を主とした結核療養の時代 そしてその拠り所となったであろう結核療養雑誌も 昭和39年の「保健同人」から「暮しと健康」への改題によって終わった。それは 結核と言う特定疾

患の療養雑誌から 不特定のそれと言うよりも健康雑誌への変身の転機であったと言うべきであろう。

「通俗医学」は、大正12年日本通俗医学社から刊行され、昭和19年「健康文化」の名で廃刊となったが、昭和15年6月号をみると、諺から見た血統、灸の実際的知識のほかに 結核治療の過去と将来、結核の予防と最新治験、結核治療人工気腹法の新しき道等々である。昭和6年創刊の「家庭医学知識」は、医事衛生普及会の発行、保健の常道：平素の健康診断、疾病の早期診断、疾病の早期治療を標榜していた雑誌である。独特な西式健康法の普及に努めた 昭和12年創刊の「西式」、のちに「健康科学」「西会会報」「西医学」となって昭和35年廃刊となった雑誌もある。敗戦後の性医学雑誌と巷間伝えられるところのカストリ雑誌との関連も興味があるが、もっかその所見を発表できる段階ではない。或いはこれらの通俗医学雑誌が 健康雑誌と言えるそのものであったかも知れない。

明治 大正 昭和、そして平成へと健康雑誌の流れについて概観してみたが、日本の消長、疾患のありようなど いろいろ興味深いものがあった。医学図書館としての対応を「医学雑誌総合目録」からみるとまことに寒々としたものである。これもまたまことに日本的な現象で困ったものである。やはり何か欠けているのである。健康雑誌行脚が医学図書館員としての医学図書館への報恩であると考えている。

引用文献

- 1) 立川昭二：明治医事往来。東京，新潮社，1986。

研究発表記録 (1989年4月-12月)

<口頭発表>

国内発行の医学分野のコア・ジャーナル-「現行医学雑誌所在目録1988」の分析による-

大村 伸栄 ほか

第6回図書館情報サービス研究大会 (1989年 6月)

明治期の眼科医学雑誌

廣田 住友 ほか

第6回図書館情報サービス研究大会 (1989年 6月)

論文表題集から見たわが国の生理学研究者の研究活動

平輪 麻里子 ほか

第6回図書館情報サービス研究大会 (1989年 6月)

<原著論文>

生理学論文表題集から見たわが国の生理学研究者の研究活動

平輪 麻里子 ほか

日本生理学, 51(7) : 224-229, 1989.

ISSNとキー・タイトル：
この塾報告集のISSNとキー・タイトルは
御存じですか？

廣田 住友

1989年2月の塾会は、18日に国立国会図書館の見学を兼ねて行われました。これは、同館収集部の島村隆夫氏の御好意によるものでした。島村氏に約2時間、新館国立国会図書館を案内していただいた後、説明がありました。その時、私たちのこの塾報告集を、国立国会図書館の所蔵タイトルにしてもらえるのか伺いましたところ、所蔵できるとの事でした。後日、『学術雑誌塾報告 1 総合研究「私たちの60年代」』をお送りしました。その時、この塾報告集は年一回の発行の定期刊行物ですから、ISSNを付けていただきたいと思いました。国立国会図書館収集部国内資料課国際登録係に問い合わせましたところ、学術的な定期刊行物であればISSNが付与されるとのことでした。後に、左下の通知と右下の書状が届きました。

国図収 9-2 号
 平成 元 年 3 月 5 日

学術雑誌塾 様
 国立国会図書館収集部
 (ISDS日本センター)

ISSNの割り当てについて (通知)

貴塾 貴刊行の 学術雑誌塾報告

について、そのISSN (国際標準逐次刊行物番号) を下記のとおり割り当てました
 のでお知らせいたします。

記

1. 国際標準逐次刊行物番号 ISSN 0915-3675
2. キー・タイトル GakuJutsu ZaashiJuku hōkoku

ISSNは別添案内書のとおり逐次刊行物に付与される国際的なコード番号です。
 これはISDS (国際逐次刊行物データ・システム) という組織のもとで逐次刊行物
 の識別や検索に利用されますので、なるべく表紙の右上に印刷をお願いいたします。
 上記のとおりISSNは大文字で、最初の数字との間に1字空け、8桁の数字は
 4桁目と5桁目の間にハイフン (-) を入れて下さい。
 なお、将来タイトルを変更される場合は、あらかじめ次の担当係にお知らせ下さ
 さい。

連絡先 〒100 東京都千代田区永田町1丁目10番1号
 国立国会図書館収集部国内資料課国際登録係
 電話 03(581) 2331・2341 (代表) 内線 3156

添付物 ISSNについて

お 礼 状

このたびは、表記刊行物をご寄贈いただき厚く
 御礼申し上げます。

ご寄贈いただきました刊行物は、広く公共の利
 用に供して、貴意にそいたいと存じておりますの
 で、今後ともよろしくお願いいたします。

なお、新聞・雑誌については、勝手ながら初回
 のみこの葉書を差し上げ、次回以降は省略させて
 いただいております。

あしからずご了承の上、引続きご送付下さるよ
 うあわせてお願いいたします。

平成 1年 3月20 日

〒100 東京都千代田区永田町1丁目10番1号
 国立国会図書館
 電話 東京 (03) 581-2331

次号からは国立国会図書館収集部宛に
 お送り下さい

このことにより、私たちの塾報告集が学術定期刊行物と認められ、国立国会図書館に永久に所蔵されることになりました。そして、萌黄色の表紙の『学術雑誌塾報告 ②「Working with each other」』の右肩に

ISSN 0915-3675

を記すことができました。なお、『学術雑誌塾報告 ① 総合研究「私たちの60年代」』にもこの番号をお書き下されれば幸いです（国立国会図書館のお話では、創刊号からISSNを付与できるそうです。詳しいことは、お尋ね下さい）。

また、四ヶ月後に『日本全国書誌』を送って頂きました。この冊子の9ページに私たちの塾報告集の記載があり、その1ページと9ページを抜粋したものが、次の左下のものです。右下は、その時同封されてきました「謹呈」です。

平成 1. 7. 28 発行 附録(B)		ISSN 0389-4002	
日本全国書誌 JAPANESE NATIONAL BIBLIOGRAPHY -New Serial Titles- 国立国会図書館 National Diet Library, Tokyo			
一 逐次刊行物の部 一		1989-29 No. 1706	
凡 例			
<収録の範囲> 新たに逐次刊行物として受入れたものを収録してある。なお、当館請求記号の末尾に「B」を付したものは、種別番号より前のものが「B」として扱われることとなる。		ト、五十音の順にそれぞれ字順で排列してある。また、本文が外国語のものには、著者の名前のアルファベット順に記される。	
夏季講座新しい造船学/日本造船学会編。-()~東京:日本造船学会。(19-?)。- 冊:26cm。- 年刊 1.カ729 ア729イ ア729ロ ア729ニ ア729ハ ア729ヘ ア729コ (Q2N24) 所蔵 12回(1986)~ Z16-1901 (ID:73111)	36 (ID:73111)	ガスタービン講演会講演論文集/日本ガスタービン学会・日本機械学会(編)。-()~。- 東京:日本ガスタービン学会(ほか)。(19-?)。- 冊:26cm 基本標題:表紙等の表示 ガスタービンロ地区講演会講演論文集 共同出版者:日本機械学会 1.カ729 ア729イ ア729ロ ア729ニ ア729ハ ア729ヘ ア729コ ア729ケ ア729ケ ア729ケ ア729ケ ア729ケ (Q2N14) 所蔵 昭和61年11月27日~ Z16-1902 (ID:73160)	Z41-5836 (ID:73160)
学術雑誌塾報告/学術雑誌塾報告編集委員会編。- 1 (1988)。-。(東京:学術雑誌塾。1988-)。- 冊:26cm 年刊 ISSN 0915-3675 1.カ729 ア729イ ア729ロ ア729ニ ア729ハ ア729ヘ ア729コ (Q2U7) 所蔵 12(1988)~ Z21-1818 (ID:73144)	37 (ID:73144)	学校安全・災害共済給付要覧/日本体育・学校保健センター・学校安全部編。-()~。- 東京:日本体育・学校保健センター・学校安全部。(19-?)。- 冊:21cm 年刊 1.カ729 ア729イ ア729ロ ア729ニ ア729ハ ア729ヘ ア729コ ア729ケ ア729ケ ア729ケ (Q2F21) 所蔵 昭和62年度~ Z7-2452 (ID:73289)	Z41-5836 (ID:73289)
覚せい剤犯罪の概況/愛媛県警察本部防犯部生活保安課(編)。-()~。- (松山):愛媛県警察本部防犯部。(19-?)。- 冊:26cm。- 年刊 1.カ729 イ729イ ア729ロ ア729ニ ア729ハ ア729ヘ ア729コ (Q2A15) 所蔵 昭和62年中~ Z41-5769-B (ID:73046)	38 (ID:73046)	学校基本調査報告書/熊本県企画開発部統計調査課編()~。- 熊本:熊本県企画開発部。(19-?)。- 冊:26cm。- 年刊 1.カ729 イ729イ ア729ロ ア729ニ ア729ハ ア729ヘ ア729コ ア729ケ ア729ケ ア729ケ (Q2F1) 所蔵 昭和61年度~ Z7-2454 (ID:73321)	Z7-2454 (ID:73321)
角田市要覧/角田市企画財政課編=Kakuda ()~。- 角田:角田市。(19-?)。- 冊:30cm 1.カ729 イ729イ ア729ロ ア729ニ ア729ハ ア729ヘ ア729コ (Q2A18) 所蔵 1989~ Z41-5815-B (ID:73128)	39 (ID:73128)	学校保健統計調査結果報告書/福島県統計調査課(編) 昭和60年度~。- (福島)。(1986)。- 冊:26cm 年刊 「学校保健統計調査結果」の改題 1.カ729 イ729イ ア729ロ ア729ニ ア729ハ ア729ヘ ア729コ ア729ケ ア729ケ ア729ケ (Q2F1)	Z41-5815-B (ID:73128)

謹 呈

このたびは、貴社(殿)が発行された貴重な出版物をご提供いただき誠に有難うございました。厚く御礼申し上げます。

ご寄贈いただきました出版物は、文化財として永久に保存するとともに広く公共の利用に供して、貴重に感じたいと存じます。

当該出版物は、当館が編集する「日本全国書誌」に掲載し、全国に広報させていただきます。

ここに、その掲載番号を一部同封いたしましたので、ご覧下されば幸甚に存じます。

今後とも出版物を発行された場合には、当館にご寄贈願いますようよろしくお願い申し上げます。

国立国会図書館
収集部 収集課

このようにして、思いもよらないところから、この塾報告集が国立国会図書館の蔵書タイトルとなり、ISSNとキー・タイトルが与えられました。私たちは塾をよりよい勉強会とし、この塾報告集を充実し継続刊行していかなければならないと、一層感じました。

最後に、今回のこれらの事項についてお世話になりました島村隆夫氏と同部国内資料課国際登録係の有田陽一氏に謝意を表します。

あとがき

塾長 山崎茂明

働きながら勉強を続けていくことは、実際には困難なことも多くあります。学ぶことは、誰れでも大切なことだと納得しますが、自分自身がそれを持続していくことは、容易ではありません。塾の活動の実質は、一人一人の塾生が地道に学ぶことであり、これが欠けてくれれば学ぶことのポーズでしかありません。塾活動のけじめのひとつとして、この学術雑誌塾報告3があると思います。しっかりしたペーパーをまとめられるようになるためには、どんなことが必要でしょうか。私は、できるだけ様々な読書をし、日記や手紙といった日常的な文章を書く習慣を作ることだと思っています。日常的に書く努力に欠けている人が、急に研究論文など書けるわけがありません。リサーチなどといっても、それはあくまで私たちの日常の延長に存在するものであり、別世界ではありません。

遠くまで歩いて行くためには、肩の力を抜かなければなりませんし、成果をすぐに求めてはいけなかと考えています。塾が今後どのような方向に進んで行くのかと思悩む前に、できるだけ明確な歩行を日々積み重ねることだと思っています。月に一度の塾ですが、仲間と会い楽しみながら、自分自身の行き先を確認してほしいものです。

私個人にとっては、1989年の夏にフィラデルフィアで3ヶ月の短い留学生生活を過ごせたことが、よい思い出になりました。アメリカ医学教育史のテーマで調査を行ない論文にまとめることができましたし、また何人かの友人や知人を得ることができました。これらは、たしかに大きな収穫でした。しかし、それとともに毎夜宿舎の14階の部屋からフィラデルフィアの夜景を眺め、ラジオから流れる音楽を聴きながら脈絡もなく様々なことを考えていたことが、大切であったように思えます。

この塾報を刊行するにあたり、今回も板橋瑞夫顧問をはじめ、山口直比古・青木仕の両氏より貴重な原稿をいただくことができました。また、北海学園大学の野口迪子氏からいただいた研究論文も掲載することができました。若い塾生諸君にとり、良い励みになるものと思います。編集は、井上三郎委員長を中心にして、阿部、安藤、平輪、北川、大村の各委員により行なわれました。原稿の集稿、閲読、修正など御苦勞様でした。この報告集を読み、みなさんと1990年代を楽しく歩いて行きたいものです。なお、今回も印刷の労をとられた伸樹社の豊浦清氏にたいしても謝意を表します。ご意見、ご感想などございましたら、お気軽にお手紙などお寄せいただければ幸いです。

執筆者一覧

- 山崎 茂明 東京慈恵会医科大学医学情報センター 〒105 港区西新橋3-25-8
(学術雑誌塾塾長)
- 野口 迪子 北海学園大学 〒062 札幌市豊平区旭町4-1-40
(学術雑誌塾顧問)
- 板橋 瑞夫 昭和大学図書館 〒142 品川区旗の台1-5-8
(学術雑誌塾顧問)
- 山口 直比古 浜松医科大学附属図書館 〒431-31 浜松市半田町3600番地
(学術雑誌塾顧問)
- 青木 仕 順天堂大学図書館 〒113 文京区本郷2-2-26
(学術雑誌塾顧問)
- 阿部 信一 東京慈恵会医科大学医学情報センター 〒105 港区西新橋3-25-8
- 雨宮 正恵 東邦大学医学部図書館 〒143 大田区大森西5-21-16
- 安藤 越代 帝京大学溝口病院図書室 〒214 川崎市高津区溝口74
- 江口 敏一 浜松医科大学附属図書館 〒431-31 浜松市半田町3600番地
- 平輪 麻里子 東邦大学医学部図書館 〒143 大田区大森西5-21-16

廣田 住友		〒300-12 稲敷郡基崎町若葉1-8 若葉テラスハウスB-C
井上 三郎	日本医師会図書室	〒101 千代田区神田駿河台2-5
神場 清治	懶蒼流社	〒171 豊島区高田3-20-11-602
門屋 由美	懶凸版印刷	〒110 台東区台東1-5-1 懶凸版 印刷情報出版事業本部電子映像出版本部
川村 順子	麻布大学図書館	〒229 相模原市淵野辺1-17-71
木下 真由美	杏林大学医学図書館	〒181 三鷹市新川6-20-2
北川 正路	東京慈恵会医科大学医学情報センター	〒105 港区西新橋3-25-8
小島 久美子	帝京大学医学図書館	〒173 板橋区加賀2-11-1
熊谷 智恵子	国家公務員等共済組合連合会 中央図書室	〒105 港区虎ノ門2-2-2 虎の門病院内

黒川 玲子	東邦大学医学部図書館	〒143 大田区大森西5-21-16
真下 美津子	国家公務員等共済組合連合会 中央図書室	〒105 港区虎ノ門2-2-2 虎の門病院内
宮内 洋一	山之内製薬新薬研究所図書室	〒305 つくば市御幸が丘21
大村 伸栄	神奈川歯科大学図書館	〒238 横須賀市稲岡町82
生出 直子	杏林大学医学部図書館	〒181 三鷹市新川6-20-2
多胡 英樹	国際医学情報センター	〒550 大阪市西区江堀1-23-26
堤 容子	京都府立医科大学付属図書館	〒602 京都市上京区河原町 広小路上ル槇井町465

「1990年代に向けて」
— 学術雑誌塾報告 3 —
1990年1月20日 発行

編集 学術雑誌塾報告編集委員会
(委員長：井上 三郎)

発行 学術雑誌塾
(塾長：山崎 茂明)

印刷所 榊 伸樹社
〒101 東京都千代田区三崎町1-1-13 菅谷ビル3F
☎：03(291)4408 (代)

「遠くまであるいていこう」

—— 学術雑誌塾報告 4 ——

1990

学 術 雑 誌 塾

「遠くまであるいていこう」

——學術雜誌塾報告 4——

1990

学術雑誌塾

学术雑誌塾報告編集委員会

委員長	安藤	越代
	雨宮	正恵
	井上	三郎
	北川	正路
	生出	直子
編集協力	阿部	信一

まえがき

今世紀末を迎えようとしている。

1990年も世界中で様々な事件が起こった。ベルリンの壁の崩壊や、イラクによる不法なクエート侵攻が世界中を騒がせた。国内では初めての生体肝移植が行われた。図書館界においてもCD-ROMの台頭が著しく、特に医学図書館ではMEDLINEの検索で威力を発揮している。また、先日は日本十進分類法の創案者のもりきよし（森清）氏の逝去が報じられた。時代の流れをひしひしとを感じる。学術雑誌塾の中でも、数名がその職を変った。

前回の報告書2、3では、あるテーマのもとに3-4名でグループを構成し研究に取り組んできたが、今年は一人一人が各自でテーマを掲げて格闘してきた。仲間と一緒に研究に取り組むことは、自分以外の人間との共同作業であるため、思考がとおり一遍にかたよることを避けることができる。お互いに叱咤激励しあうこともできる。しかし、それだけ何がしかの足枷が付いてまわる。

一人になり自分で設定した研究課題と向き合うと、色々なことが見えてくるようだ。何故自分はこの研究をしているのか、仕事以外の時間を研究に費やすのは何故か、学術雑誌塾に何を求めているのか、今自分が本当にやりたいこととはいったい何なのか、、、。研究課題と向き合っていたはずが、いつのまにか自分と向き合っていた。

この世紀末10年を私たちはどのように過ごすのだろうか。もう既に1年が経過してしまった。今までの20数年間あるいは30数年間のうちの10年とは異なり、これからの、30数年間あるいは40数年間のうちの10年は、さぞかしあゆみが早いことだろう。とはいえ、一步一步確実に、少しでも皆で一緒に遠くまであるいていきたい。

学術雑誌塾報告編集委員長

安藤越代

目 次

まえがき	1
目次	2
<個人研究>	
雑誌“自然”創刊の背景（雨宮 正恵）	5
総合科学雑誌「科学」の誕生（北川 正路）	9
JAMAの表紙絵をめぐって -その変遷と顔としての役割について- （木下 真由美）	18
日本医事新報創刊時の背景（黒川 玲子）	24
日本医事新報 -発刊の精神と孤軍奮闘の歴史-（生出 直子）	29
医学文献の寿命調査（江口 敏一）	33
情報としての死亡記事（安藤 越代）	37

<寄稿論文・エッセイ>

Brandonリストの収載図書の問題別変遷 (青木 仕)	41
学術雑誌出版の量から質、質から倫理へ (山崎 茂明)	49
旧海外領土の医育機関及びその機関誌 第一報 (板橋 瑞夫)	52
M**へ -草稿- (山口 直比古)	58
ゴールは? (真下 美津子)	62
ワープロパソコン通信で情報人 (多胡 英樹)	67
ヤンソンの誘惑 (神場 清治)	71
アントワープでの国際医学史学会に参加して (山崎 茂明)	75
総合医学雑誌を考えるための155文献	77
執筆者一覧	87
編集後記	89

雑誌“自然”創刊の背景

雨宮正恵

1. はじめに

中央公論社から刊行された科学雑誌“自然”は、1984年に休刊となったが、岩波書店の“科学”と共に日本を代表する自然科学雑誌であったといえよう。一般書店でも入手できる科学誌として馴染み深かったために休刊を残念に思う読者も多かったことであろう。代わって書店では科学を特集したグラビヤ誌が店頭を賑わしている。このような科学大衆誌は、日本ではそもそものような過程で誕生したのであろうか。ここでは「民衆のための科学」雑誌を標榜した“自然”の創刊号を読みながら考えてみたい。

2. 創刊の言葉と編集後記

創刊の言葉¹⁾を見ると、創刊時の歴史背景を伺い知ることが出来る。以下に引用する。

創刊の言葉

太平洋戦争は原子爆弾の出現を重大なる契機として、日本の敗北をもって終結した。．．．（略）．．．敗戦日本は平和国家として誕生すべく、民主主義革命の陣痛期にある。

平和を愛する民族、道義と文化の栄える國、美しい日本の再建は、科学の振興をまずしては到底期待し得ない。科学の振興は第一線にある研究者技術者の眞しな努力によるべき事は勿論であるが、これを強力に援護すると共に、得られた成果を急速に身につけ高度に実用化する一般水準の向上なくしては、旧態を脱することは不可能である。

科学の大衆化— この崇高にして至難なる事業は、知識層全体が一丸となって献身することによつてのみ初めて達成せられるであらう。．．．（略）．．．大衆が眞に科学を愛し向上努力の意欲に燃えるに至るとき、知識は自ら求められ、科学的批判の眼は尖鋭となり、．．．民主主義の確立も成就するであらう。

現代の文化人のみならず、科学者自身に於てさへ、眞の科学的精神は理解されてゐない

のかも知れない。．．．（略）．．．我々は速やかにこの弊風を打破し、民衆のための科学を樹立せねばならぬ。文化人・研究者の覚醒と、その力による大衆の啓蒙こそ現下最大の緊急事である。本誌創刊の意義と使命もまたここにある。

これでわかるように、“自然”が創刊された当時は終戦直後であり、中央公論社は戦時下の体験から“婦人公論”、“中央公論”、そしてこの“自然”を創刊するに至ったのである。

創刊号に貫かれているのは、「科学の民主化」の重要性であり、特に編集後記には創刊の精神ともいうべきものが、創刊の言葉以上に強い調子で述べられている。

初代編集者は、小倉眞美、堀江弘、阿部わか子の3名であった。

編集後記

◇東條軍閥と便乗官僚閥の陰謀的迫害と圧制下に解散を余儀なくされた本社は「中央公論」「婦人公論」の2誌を再建、ここに知識大衆を対象とする新科学雑誌「自然」を創刊する。

◇我が科学の貧困を叫ばれて既に久しい。アメリカの記録映画「サイバンの悲劇」の終幕には「科学なき國の末路を見よ」との痛烈なる文字が挿入されてゐると仄聞する。無謀なる侵略戦争を敢行した我國を平和國家として甦生せしめる方法は眞に民主的な科学振興以外にはない。

．．．（略）．．．

冒頭に「東條軍閥と便乗官僚閥の陰謀的迫害と圧制下に解散を余儀なくされた．．．」とあるが、陰謀的迫害とは一体どのような弾圧が行われたのであろうか。

3. 横浜事件

第二次大戦時に行われた言論弾圧は、編集者・ジャーナリストを共産主義者に仕立てることで確実に行われていった。特に神奈川県特高警察がでっち上げたと言われる横浜事件においては、中央公論社のみならず、改造社、日本評論社、岩波書店、朝日新聞社等の編集者を検挙した。それは雑誌「改造」に発表された細川嘉六の論文をもとに共産主義者としてまず逮捕し、押収品の中にあったスナップ写真（富山県泊に旅行した際の物）を唯一の証拠とし、写っていた人々を共産党再建準備会議の名目で検挙した。これが“泊事件”である。これを皮切りに中央公論社等の編集者49名が逮捕され、うち中央公論社の2名が拷問の末、獄死している。

そして1944年7月、自発的廃刊の形式をとって「中央公論」と「改造」は消滅し、解散することとなった。このような背景をもとに終戦後活動を再開した中央公論社の意欲は並々ならぬものがあり、それがあの編集後記に「無謀なる侵略戦争を敢行した我國を平和国家として甦生せしめる方法は眞に民主的な科學振興以外にはない」という言葉となってあらわれている。その後の記事にも、原発などに触れて「科学者の良心」という言葉がたびたび使われるのも、このような背景があればこそと言えよう。

4. 終わりに

軍部による言論弾圧をバネとして生まれた“自然”であったが、「科学知識の普及、科学的思考力のかん養を通じて、わが国社会の発展と国民的生活の向上にいささかなりとも資することができました」²⁾として、1984年4月に休刊した。復刊のめどは立っていないとの事である。

「創刊時の状況を想うとき、まさに隔世の感があります。科学雑誌に対する社会の要請も変化してまいりました。」²⁾とあるように、“Newton”などのグラビヤ雑誌が主流となっている現在では、「自然」はその任を終えたと見るべきなのであろう。

引用文献

- 1) 創刊の言葉：自然, 1(1), 1946.
- 2) ごあいさつ：自然, 39(5), 1984.

参考文献

朝日ジャーナル編：昭和史の瞬間（下），東京，朝日新聞社，1966. p. 52-61.

創刊の言葉

太平洋戦争は原子爆弾の出現を重大なる契機として、日本の敗北をもつて終結した。専制者達の貪婪なる野望により惹起され、無辜の民衆を権力と銃剣の威嚇の下に驅り立てた侵略戦争がこの歸結を見たことは當然の成行といへよう。

敗戦日本は平和國家として誕生すべく、民主主義革命の陣痛期にある。平和を愛する民族、道義と文化の榮える國、莫はしい日本の再建は、科學の振興を俟たずしては到底期待し得ない。科學の振興は第一線にある研究者技術者の眞摯な努力によるべきことは勿論であるが、これを強力に援護するとともに、得られた成果を急速に身につけ高度に實用化する一般水準の向上なくしては、閉塞を脱することは不可能である。

科學の大衆化——この崇高にして至難なる事業は、知識層全體が一丸となつて献身することによつてのみ初めて達成せられるであらう。科學普及に際しての恐るべき謬見は、單なる知識の断片を誇示することによつて民衆を毒して来た。最大の要請は一切の偏見を棄てて眞實を徹底的に追求する心の獲得にある。大衆が眞に科學を愛し向上努力の意欲に燃えるに至る時、知識は自から求められ、科學的批判の眼は失鏡となり、叱咤を待たずして民主主義の確立も成就するであらう。

現生の文化人のみならず、科學者自身に於てさへ、眞の科學的精神は理解されてゐないのかも知れない。社會は我意私慾に滿ち、政治經濟には眞の洞察もなく、何等の積極的な計畫性も見られぬ。累積する制約の下に於て、科學探究の最高能力を發揮するために必要な研究者技術者間の眞摯なる協力も、裕かなる相互啓發もない悲しむべき状態である。

我々は速かにこの弊風を打破し、民衆のための科學を樹立せねばならぬ。文化人・研究者の覺醒と、その力による大衆の啓蒙こそ現下最大の緊要事である。本誌創刊の意義と使命もまたここにある。

「自然」・5月號・目次

ベニシリン	梅澤濱夫 1	日本再建と科學	仁科芳雄 17
レーダー(1)	根上四郎 10	速度	伏見康治 22
科學文化史年表(1)	湯淺光朝 27	風呂	緒方富雄 24
菜菔量の増産	非田兼雄 21	表紙・原弘	挿繪デザイン・村井外興二

編輯後記

◆東條軍閥と東条官僚閥の陰謀的迫害と威調下に解散を餘儀なくされた本誌は「中央公論」「婦人公論」の2誌を再建、ここに知識大衆を対象とする新科學雜誌「自然」を創刊する。

◆我が科學の貧困を叫ばれて既に久しい。アメリカの記録映畫「サイパンの悲劇」の終幕には「科學なき日本の末路を見よ」との痛烈なる文字が挿入されてゐると仄聞する。無難なる侵略戦争を敢行した我國を平和國家として誕生せしめる方法は眞に民主的な科學振興以外にはない。

◆科學の民主化は當面の重要課題である。仁科芳雄博士が本號で日本再建の道を説かれ、科學者の生活問題から自主的な組合組織を提唱されたことは、特に注目し得る。

◆梅澤濱夫博士は傳染病研究所で我國獨特のベニシリン創製に献身された首

腦研究者である。新化學療法劑ベニシリンの全貌に關し今回懇切な研究が本誌誌上に發表されたのは初めてである。

◆伏見康治博士はアメリカ物理學界が遂にメソンを實驗室内で發生し得たことに觸れてゐる。これは「Time」誌上にも發表されたことだが、この驚異的な事實につき我が新聞紙が1行の報道もしない科學への無關心ぶりには呆れざるを得ない。

◆湯淺光朝氏の科學文化史年表は社會

文化思想との緊密なる連繫に於て新史觀のもとに執筆される。心血を注がれる氏の良心的態度に敬意を表する。

◆「圖解科學」を復刊せよとの聲を聞く。本誌は圖解の方法を更に發展せしめ、科學的精神による啓蒙面をより廣汎に抱擁する新企畫のもとに、編輯部は全熱情を傾注して興望に應へんことを期してゐる。

「自然」小倉眞美 堀江 弘
編輯部 阿部わか子

自然・5月號	昭和21年1月20日印刷	編輯人	小倉眞美
(第1號第1號)	昭和21年5月1日發行	發行人	栗木和夫
發轉載	特價4圓	印刷人	小坂 孟
	半年分概算25圓	(東京1)	東京部生區區市谷加賀町1の12
	東京部生區區丸の内2丁目2	印刷所	大日本印刷株式會社
發行所	中央公論社		東京部生區區淡路町2丁目9
	電話丸の内(2)355-538	配給元	日本出版配給株式會社
	振替口座東京34		

表紙印刷・共同印刷株式會社

総合科学雑誌「科学」の誕生

北川正路

I. はじめに

「雑誌新聞かたろぐ1990年版(メディア・リサーチ・センター)」には、「科学」について次のように書かれている。

[...小林茂樹、寺田寅彦、石原純氏らの提唱によって創刊され、以来半世紀以上にわたって日本の最も権威ある総合科学雑誌として日本の科学と共に歩んできた。この伝統を生かし、その時代の科学と技術の最新の動向と科学者の意見を質の高い論説・評論・報道によって伝えている。執筆者は現場の一流研究者に限られ、大学の教官・学生や科学の研究と技術の開発に携わる人向き。]

今回は「科学」の1巻(1931年)から5巻(1935年)までの「科学」の誕生期をとりあげ、「科学」がどのような目的で創刊され、どのような編集方針でどのような記事を載せていたかをみてみた。現在の「科学」とは内容構成にはかなり違いがあるが、その時代の科学と技術の最新の動向と科学者の意見を伝えていたということを強く感じた。

II. 「科学」の創刊

1. 時代背景

「科学」の1巻から5巻が出版された1931(昭和6)年から1935(昭和10)年とはどういう時代だったかをつかむため日本のできごとをまとめた。

1931(昭和6)	満州事変おこる
1932(昭和7)	上海事変おこる 満州国建国宣言 五・一五事件 唯物論研究会創立 仁科芳雄ら原子物理研究会結成
1933(昭和8)	国際連盟脱退 滝川事件おこる 本多光太郎、新KS磁石網発明
1934(昭和9)	室戸台風 東北地方大冷害 ワシントン海軍軍縮条約破棄
1935(昭和10)	天皇機関説事件 コミンテルン第7回大会

上の年表からわかるようにこの期間は軍国主義がのびていった時である。1931年には満州事変、32年には犬養毅首相殺害の五・一五事件がおり、以後軍人や官僚を首相とする内閣が続いた。33年には国際連盟を脱退し、34年ワシントン海軍軍縮条約破棄後はいよいよ軍備の充実に力をいれていった。また、思想面でも33年文部省は京都帝国大学教授滝川幸辰を休職処分に、35年には美濃部達吉が天皇機関説で攻撃され貴族院議員辞職におこまれるなどの弾圧があった。これら軍国主義に抵抗して、32年、哲学者戸坂潤が多くの自然科学者も含め唯物論研究会をつくり科学擁護のためにたたかたり、35年のコミンテルン大会では共産党員が社会党員や自由主義者、宗教者などと手を結びファシズムに反対するという人民戦線の方針を示すという動きもあった。

科学関係では上には書かなかったが、33年に東海道丹那トンネル貫通、35年に東京・ベルリン間、東京・ロンドン間に無線電話開通というできごとがあった。

2. 「科学」の創刊

17巻4号(1947年)の巻頭で編集者の一人である岡田武松が「科学」創刊のいきさつについて次のように述べている。

「…昭和5年の末だと存じますが、寺田寅彦さんと雑談している間に、日本の科学界に“ナツールヴィッシェンシヤフテン”誌や“ネーチア”誌のような速報または総合報告を載せるものがぜひほしいという談になり、寺田さんは石原さん(石原純)に話してみようということになり、石原さんのご賛成を得たので岩波さんへ持ち込んだ。用意万端整ったので、いよいよ第1巻第1号を刊行したのは、昭和6年の4月だと記憶しています…」

このように、岡田武松と寺田寅彦の雑談がきっかけとなって「科学」が誕生したようである。

創刊の目的として、創刊号の巻頭「創刊の辞」に以下のように書かれている。

「…各学会にはそれぞれ相当の雑誌を備えているけれども、いずれも専門的の狭い範囲に限られている。従ってこれらを総合して、一方においてはひとつの専門的研究に従事する学者のために他の分科における重要な最近の進歩をしらしめて学者としての常識を補い、他方においては現に活躍しつつある学会と、これをとりまく一般社会並びに特に将来の学徒たらんとするものとの間によき連絡を保たしめんがためには、ぜひともこれに適応した一般科学雑誌が必要である。この種類の代表的なるものとしては、イギリスのNature、ドイツのDie Naturwissenschaften、フランスのLa Nature、アメリカのScience、イタリーのScientia等があつて、いずれも我々にとってうらやましく思われる。…一般読者の教養や理解の程度を顧慮して幾分それらよりもやさしいものをもってはじめねばならない…これ我々がここに我々の“科学”を創刊しようとするゆえんである。」

このように科学全般の動きを専門研究者ばかりでなく科学に関係している人すべてに伝えるような一般科学雑誌を日本にもぜひ誕生させようとして「科学」は創刊された。それにしても昭和5年の末に創刊の話が持ち出され、昭和6年の4月に創刊号出版とはかなりの早さだと思う。

Ⅲ. 編集者

創刊時の編集者は岡田武松、柴田桂太、寺田寅彦、小泉丹、柴田雄次、坪井誠太郎、石原純（主任）の7人であった。

前章でもみたように、17巻4号（1947年）巻頭で、岡田武松が寺田寅彦とともに石原純に雑誌をつくる話を持ち込んだことがかかれていた。その他の編集者も理科の分野を専攻している著名な研究者である。なお、応用分野も包括するために1巻2号からは工学博士末廣恭二、3号からは農学博士安藤廣太郎、医学博士橋田邦彦も編集に加わった。

また5巻からは大河内正敏も加わった。

2巻5号から末廣恭二が抜けた（1932年4月9日死去）ほかは、5巻までに編集から抜けた人はいない。2巻5号には寺田寅彦の文章をはじめ、その他巻頭など末廣恭二の死を悼む記事が掲載されている。

掲載論文、記事の著者を見ていると編集者の名前が数多くあり、以上の編集者が、積極的に「科学」という雑誌づくりに参加していたことがうかがえる。

Ⅳ. 「科学」の内容構成

次に内容構成をみる。「科学」は月刊誌で1巻は4月が創刊のため全部で10号、2巻から5巻は12号出版された。内容構成は以下のようになっている。

巻頭
寄書
抜萃
論述
新刊書
研究抄録
学会展望
実験記事（1巻8号よりはじまる。年数回掲載。）
科学雑纂
研究室概観
学会往来（3巻10号よりはじまる。年数回掲載。）
科学時事
学会消息、個人消息
附録（1巻7号よりはじまる。年4回程度掲載。）
編集雑記

巻頭

毎号あるテーマのもと、1ページ書かれている。この巻頭については後で少し詳しくみてもみる。

寄書

寄書欄は「科学」の一特色であり、編集者に寄せられた研究報告等を簡潔にまとめたものが掲載されてある。寄書欄については後の「V. 編集雑記にみる“科学”の編集方針」の章で細かくみている。

抜萃

世界的に著名な科学者の研究や講演会についてNature誌やDie Naturwissenschaften誌、Science誌、Scientia誌等に掲載されている記事を2-4ページにまとめてあるものが中心で、各号1、2編掲載されている。

論述

原著がほしい1、2編掲載されている。

新刊書

新刊書が4、5点ほど解説つきで紹介されている。日本語のものばかりでなく、英語やドイツ語のものもとりあげている。

研究抄録

この欄には日本における科学各方面の重要な研究についての論文の抄録が掲載されている。各抄録は4分の1ページから3分の1程度の長さにとめられている。掲載抄録数は各号ほしい7-10件程度である。

学会展望

この欄には、「天文学上の近事の研究」（1巻1号）とか、「1931年ノーベル化学賞受領者の業績」（2巻3号）といったぐあいにテーマを設け、それについて現在日本を含め世界中の学会、研究者がどのような研究を行っているのかを数ページにわたって解説したものが毎号1、2編掲載されている。

実験記事

1巻の8号からはじまった。各種実験の方法、工夫、注意点であるとか、新しい装置の考案などを実験の経験者が、1、2ページで紹介している。

科学雑纂

3-6ページの読み物である。調査旅行や外遊の際のできごとを読み物的にまとめたもの、追悼文、自分の研究家人生としての思い出を書いた物など科学の知識がなくても楽しめる読み物である。

研究室概観

東京天文台とか水産試験場などの研究室をとりあげ、その研究室の概観、施設、研究内容などをほしい2、3ページで紹介している。

学会往来

3巻10号よりはじまった。学会の報告が1ページ位でまとめてある。例えば3巻10号では1933（昭和8）年7月10-12日に行われた第12回日本生理学会において報告された演題200の中から20題ほどピックアップして紹介している。

科学時事

科学関係のニュースを3、4ページに15-20個とりあげ、簡単に紹介している。

例えば1巻1号では「Einstein教授の渡米」、「地震観測所の完成」、「ロンドンのPhysical Society及びOptical Societyの展覧会」、「学士院授賞」...といったかんじで科学の知識がなくても普通の新聞を読むような感覚で興味深く読むことができる記事である。

学会及び個人消息

学会消息では開催された学会の開催日、場所、個人消息では学位受賞者、就任者、転任者、海外留学、海外出張者、退職者、死去を報告している。

附録

年4回ほど10-15ページ程度の附録がついている。

「量子論の新発展」「最近における航空学術の進歩」など注目すべきテーマをとりあげ、その分野の専門家数人がテーマについて解説している。数式などがでてくるので科学に全くの素人には難しいが、その分野の専門家でなくとも科学に関係ある人には理解してもらえるよう解説している。

編集雑記

各号裏表紙に編集者が編集上の感想、苦労話、読者へのお願いを書いている編集雑記の欄がある。

V. 編集雑記にみる編集方針

毎号裏表紙に編集雑記の欄がある。

編集雑記には、編集者が「科学」をどのような雑誌にしていきたいと考えているかがあらわれている。編集雑記をみて、「科学」の主な編集方針として次の3つがあげられると思った。

1. 専門家向けでなく科学に興味を持つ人すべてを読者の対象としている。
2. 読者の協力で「科学」をつくる。
3. 寄書欄は「科学」の特色である。

1. 専門家向けでなく科学に興味を持つ人すべてを読者の対象としている

1巻1号の編集雑記に「本誌は学者のみに読んでいただくつもりではない。一般の自然科学に対する思想を向上せしめるためにも十分に力を尽くしたいと思う。」とある。そして

内容的には「個々の項目をできるだけ短くする。手軽に読み切られることを主眼とする。」(1巻5号)よう配慮している。また、「専門化を避け、いつでも他の分野の人々が読んでも理解できるよう平易化」(1巻8号)をはかっている。

附録作りに関しても、「附録は各分野のきわめて専門的な研究を通信に墮せず、しかもできるだけ平易に解説し紹介する至難の業」(2巻6号)、であると悲鳴をあげている。

「読み物式のを多く採り、原著を専門外の人にも読んでもらう苦心」(4巻8号)もしている。

2. 読者の協力で「科学」をつくる

1巻1号に、「編集のために、研究論文、書籍等の出版物を著者その他の好意により各方面から寄贈してほしい。」と、編集のために各方面からの協力を要請している。

依頼原稿も多くあるが、「寄書覧を設け、その他の欄もできるだけ読者に開放して本誌を真に読者のものにすることに努めている。あらゆる読者からのご投稿を待つ。」(3巻11号)とあり、専門家以外からの投稿などの協力も希望していることがうかがえる。

また、地方の科学関係のニュース、学会消息等の収集が困難らしく、「科学時事向けの材料や諸消息等も未だまんべんなく集まっているわけではないからお気づきのものを提供願いたい。特に地方の読者をお願いします。」(2巻8号)、「地方の学会、大学研究所について編集部にお知らせ下さい。」(3巻6号)等と地方のニュースについては特に読者からの情報提供を希望している。

また、「寄書以外の投稿が増加した。なるべく2、3ページ以内の分量で他の方面の人々にも読ませるつもりで書かれない。」(4巻6号)と、投稿に関しての注意もある。

3. 寄書欄は「科学」の特色である

1巻1号には「寄書欄は本誌を飾る一特色としたいと思う。各自の研究・予報などことに結構である。誰からの寄書でも歓迎するが、この場合における取捨はいっさい編集者に任せられたい。」また、1巻2号には「種々の研究を正式に発表する以前にこの機関を通じて一般に知らしめることは相互に関連して他の研究を刺激発達せしめる上において大いに効果ある。」などであり、寄書欄を速報予報のために大いに利用するよう呼びかけている。そのため、投稿記事の最後に「...以上は簡単な予報で本研究の詳細は近々別紙に発表する予定である。」のようなコメントがついているものをよく目にした。

また寄書の投稿数が増え掲載できないものが多くなったり、翌月号回しになるものが出るなど、寄書の投稿増加に伴う編集者の苦しみがたびたび書かれていた。

また紙面の制限があるため、寄書は図書を除き400字詰原稿用紙で4枚をこえないようにというお願いもひんぱんに書かれている。原稿用紙4枚1600字は、だいたい4分の3ページの分量である。表1に寄書掲載件数とページ数をまとめてみた。また表2に掲載寄書の著者の所属上位5位をまとめた。

4. その他

また、1巻1号に「広告面にも注意を払っていき、特に表紙第1面の広告は十分推奨に値するものに限る...」と述べられており、広告面にも気を配っていることがうかがえる。

表.1 寄書掲載件数とページ数

	掲載件数	寄書欄 総ページ数	1記事当りの 平均ページ数
1巻	69	55.5	0.8
2巻	67	71.5	1.1
3巻	100	92.5	0.9
4巻	145	123.5	0.9
5巻	112	104.5	0.9
計	493	447.5	0.9

(注:1巻は9号、2-5巻は12号出版)

表.2 掲載寄書の著者の
所属上位5位

所属	件数
1. 東京帝大	60
2. 理化学研究所	50
3. 京都帝大	27
4. 北海道帝大	25
5. 中央气象台	24

表.3 1巻の掲載広告数と内訳

内訳	広告数
書籍	68
精密理化学機械	9
地震計	7
天体望遠鏡	4
実験用スタンド	3
遠心力試験機	3
計器類	2
計	96

ちなみに1巻では表紙第1面の広告は理化学研究所の精密理化学機械の広告が載せられている。1巻の掲載広告の内訳は表3のようにになっている。書籍の広告が多い。なお、68件のうち48件は岩波書店の出版物の広告である。

VI. 巻頭をみて

各号第1ページには巻頭があることは先にみた。

巻頭は著者の名前やイニシャルが書かれているものもあるが、ほとんど無記名である。無記名のものはたいがい編集主任の石原純が書いていると17巻4号の巻頭で岡田武松が述べている。

巻頭は科学、科学者のあり方、社会情勢と科学、科学者の関係、国家の科学政策等について述べている。どのようなことが書かれているかをテーマ分けしていくつか例をあげてみた。

① 科学、科学者のあり方について述べたもの

- ・ 科学諸分科の接触、連関の必要性 (1巻2号)
- ・ わが国の窮境を真に救うものは科学である、科学的精神を盛んに (2巻6号)
- ・ 新聞雑誌の通俗記事のひどさについて (1巻4号、1巻5号、5巻5号)
- ・ 日本語としての科学上の述語決定の必要性 (3巻12号)
- ・ 科学者も政治的経済的諸関係に目を向ける必要がある (4巻5号)
- ・ 西洋科学移入の時代からわが国の独創的科学発達の時代に (5巻1号)

② 社会情勢を反映しているもの

満州事変、経済封鎖、それにとまなう洋書入手の困難についてふれたもの (2巻1号)、五・一五事件についてふれたもの (3巻1号)、国際連盟脱退についてふれたもの (3巻3号) 等当時の日本の動きを反映しているものの他に次のようなものがある。

- ・ 科学的戦争の恐ろしさについて (2巻5号)
- ・ メートル法実施について (3巻9号)
- ・ 思想束縛の時代と思想の自由について (5巻6号)
- ・ ナチス治下における科学者の弾圧、迫害について (5巻11号)
- ・ ローマ字を採用すべきか否か等の国字問題 (5巻12号)

③ 国家の科学政策について述べているもの

- ・ 科学者の配分、補助金の配分について (2巻1号)
- ・ 国家よりの科学奨励の必要性 (3巻6号)

④ その他

- ・ 学術博物館の必要性 (3巻10号)
- ・ 専門学術図書館の必要性 (4巻10号)
- ・ 科学論文の書き方について (5巻3号)
- ・ 学術雑誌の中の重要な業績をまとめたモノグラフ出版の必要性 (5巻9号)

上記の他に「科学」の内容について述べているものもいくつかあった（1巻4号、2巻2号、3巻11号、4巻11号、4巻12号）。4巻12号の「“科学”の使命」の中の文章は、それらすべてを総合して「科学」出版の目的を簡潔に言いあらわしている。

「…一方では専門的な学会の機関雑誌とは異なって、できる限り専門以外の人々に専門的な新知識を広めることを目的とするとともに、他方では異なる通俗的な解説を主とする雑誌と異なって、どこまでも科学の主体たる研究を明らかにすることに努力したい....」

Ⅶ.おわりに

以上「科学」の誕生をみてきた。“Ⅴ.編集雑記にみる編集方針”、“Ⅵ.巻頭をみて”の章の繰り返しになってしまうが、「科学」は科学関係の知識、できごとを専門研究者ばかりでなく科学に興味を持つ人すべてを対象に通俗的な内容に陥らずに知らせることを目的としている。“Ⅳ.「科学」の内容構成”の章で「科学」の内容について少し細かくみたが、「科学」の内容は「科学」出版の目的に十分かなっていることを改めて感じた。

JAMAの表紙絵をめぐって —その変遷と顔としての役割について—

木下真由美

I. はじめに

我々が書店や図書館で雑誌を手にとろうとする時、まず目に入るのが表紙である。表紙が魅力的な雑誌だと、思わず手に取ってページをめくってしまうが、表紙が何の変哲もない雑誌あるいは醜悪な雑誌だと表紙をみただけでその雑誌に対する関心が失せてしまう。このように雑誌の表紙はその雑誌を代表する“顔”としての役割を担っている。これは娯楽誌、大衆誌に限らず学術雑誌においても言えることであろう。医学雑誌の場合、雑誌の内容を表わす写真や絵を扱っているものや表紙自体がコンテンツになっているものが多い。その中で、Journal of the American Medical Association (以下、JAMAと略す)は毎号美しい絵で“顔”を飾っている。私もJAMAが図書館に到着する度に表紙の絵を眺めている一人であった。しかし毎号見ているうちに、表紙絵の選択にも編集委員会の思想やAmerican Medical Association (以下、AMAと略す)の使命が反映されていることがわかってきた。また年代を遡ってみると、現在のように表紙全面で絵画を扱うようになったのも20年ほど前からである。私はJAMAの表紙絵をより深く知るために、JAMAが表紙に絵を扱い出した頃から現在に至るまでの経緯を調べてみることにした。

II. JAMA表紙の変遷 —1960年から現在まで—

1960年から1964年の190巻まではA4一枚の目次だけから成る表紙であった(図1)。190巻の中には3号の Clinical Convention Number や7号の Education Number のような特別号には表紙に絵が使われているが、毎号絵または写真が使われるようになったのは1965年の191巻からである(図2)。絵・写真はその号に掲載されている一論文またはその号全体のテーマに関するものになっている。表紙の解説(Cover Story)は表紙の次のページのごく一部分で10行ほどしかなく、解説文の執筆者の記載もない。表紙の大きさは194巻(1965年)からは見開きA3、さらに201巻(1967年)からはA4にフラップ(折り返し)が付いたものとなる。表紙の拡大にともなって表紙の解説文も絵・写真の脇や下方に入れられる。

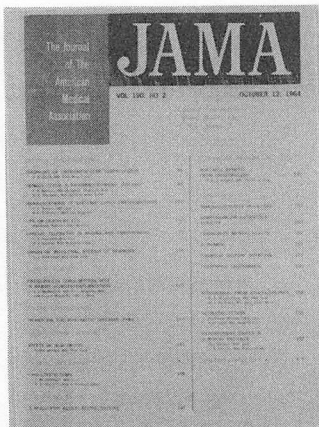


図1 JAMA 190(2),1964

211巻(1970年)から、表紙の解説は表紙の一部に加えて、“AMA Grams”というコラム記事を集めたコーナーにもあらわれる。215巻7号(1971年)からは表紙中の解説がなく、AMA Gramsのページ1~2ページを使った写真入りの詳細なものになる。さらに218巻13号(1971年)からは、AMA Gramsの記載に作者の顔写真と解説者のイニシャルが

見られる(図3-(1)、図3-(2))。その後、表紙の解説は Cover Story としてAMA Gramsから独立したり目次中に枠に囲まれて存在したりし、227巻(1974年)には再びAMA Gramsの中に組み込まれる。表紙の大きさは227巻(1974年)からA4一枚になり、それにとまってフラップに一部記載されていた目次は独立ページになる。

1975年になると号を重ねるごとに表紙の解説の枠が広がり、220巻(1972年)からなくなっていた解説者のイニシャルが231巻から再び見られるようになる。イニシャルを頼りに publication staff を搜すと、JK - Jaan Kangilaski ; Medical News Editor、MTS - M. Therese Southgate ; Senior Editor。233巻5号(1975年8月4日号)からは Deputy Editor (副編集長)、BM-Bererly Montgomery; Associate Editor などの人々が解説をしていることがわかる。解説文は、それまでコラム記事の一部であったが、解説者のイニシャルが見られるところから論文中に枠で囲まれて存在するようになる(図4-(1)、図4-(2))。表紙の絵や写真は、本文に関連している時もあれば全く本文とは関係のない時もある。

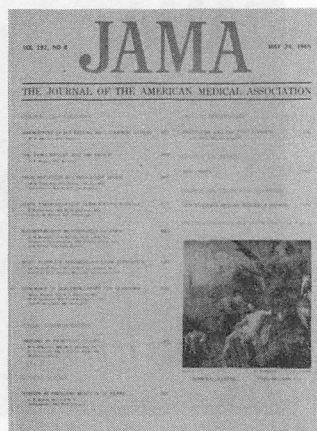


図2 JAMA 192(8),1965

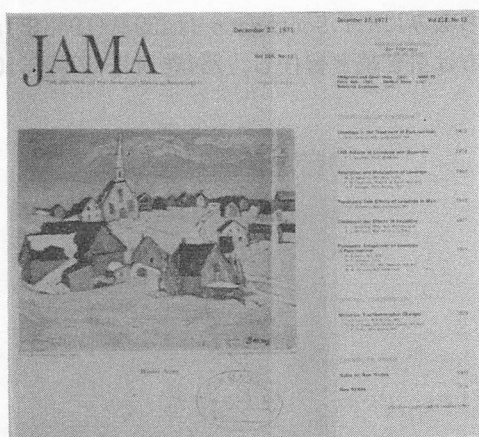


図3-(1) JAMA 218(13),1971 表紙

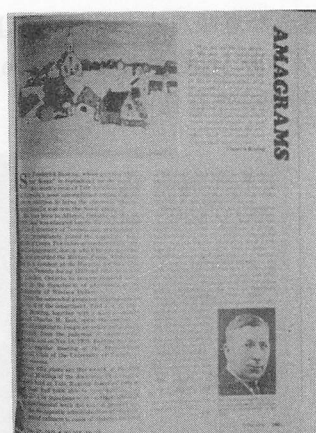


図3-(2) JAMA 218(13),1971
AMA Grams

235巻からは、年間4Volume、1Volume13号から年間2Volumeとなる。つまりは1Volume26号である。そして、この発行形態で現在に至っている。

241巻23号(1979年)からは表紙の解説が1ページで独立する(図5-(1)、図5-(2))。この号から解説者はほとんどM.T.Southgate になっている。採用される絵は19世紀後半から20世紀前半に描かれたものが多い。また各号の季節にふさわしいテーマ、色調のものが多く選ばれるようになった。たとえば春の号では花・若葉、夏の号では海・太陽、秋の号では紅葉・落葉、冬の号では雪、クリスマスにはマリア像、といった具合である。242巻19号



図4-(1) JAMA 233(3),1975

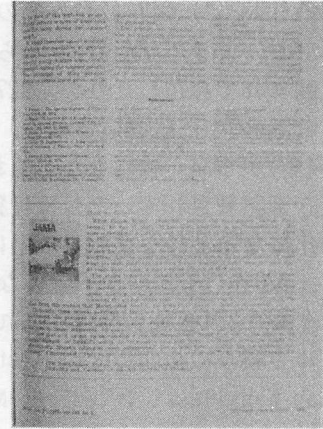


図4-(2) JAMA 233(3),1975
About the Cover

(1979年)からはM.T.Southgate が Deputy Editor (副編集長) の他に Cover Editor として Editorial Board に名を連ねている。これ以降、Southgate 以外の方が解説している号や解説が全くない号(目次中に絵の題名と作者のみが掲載されている号)でも、表紙のスタイルは一貫しているので、Southgate が Cover Editor として独立した地位を確立したのは重要な意味を持つと考えてよいだろう。ちなみにM.T.Southgate は259巻(1988年)から Deputy Editor を降りたが Cover Editor の方は引き続き留任し、264巻14号(1990年10月10日号)現在も在任中である。



図5-(1) JAMA 241(23),1979

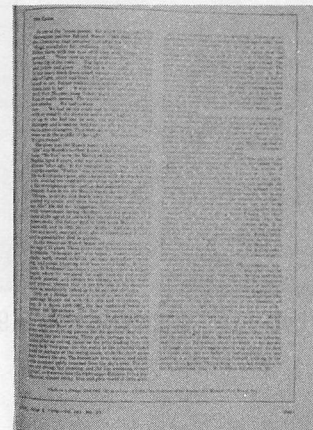


図5-(2) JAMA 241(23),1979
The Cover

Ⅲ. M.T.Southgate について

M.T.Southgate (図6) は、JAMAの表紙に使われた絵画の解説を今まで200以上手がけてきた女性である。彼女がJAMAの表紙に多大な貢献をしてきたことは前章でも明らかであるが、



図6 M.T.Southgate

ここでは彼女の素顔及びJAMAの表紙を飾る絵画との関わりについて紹介したい¹⁾。

M.T.Southgate は1928年シカゴ南部に生まれた。読書好きの子供で、シカゴ公共図書館の本をかたっぱしから読んでいた。「世界中の本を読んでしまったら、自分で自分の読む本を書こう」とまで思っていたらしい。St Francis Collegeで化学を専攻後、ワシントンで化学雑誌の編集を担当。5年後、Marquette School of Medicine (現在のウィスコンシン医科大学)へ入学。医学を志した彼女は「まるで生涯の友に出会えたように幸せ」だった。1962年、St Mary Hospitalでインターンを終えた後、JAMAの編集委員として仕事をするために再びシカゴに戻る。初めて扱った記事は「サリドマイドの危険について」だった。

1964年当時の編集長 John Talbott に表紙を Art Cover にすることを提案。Talbott はこれを受け入れ、他の編集委員を説得した。以降1974年までは Southgate 以外の編集者が解説を担当。1975年から1988年までは副編集長を務め、表紙絵の選定にも関わりながら年12~15回解説文も書いた。1988年に副編集長を降りた後も前述の通り、Cover Editor として解説にたずさわっている。現在は編集のかたわら、ノースウェスタン大学のメディカルセンターで医学生のために医学とアートの討論会を開いている。また自己啓発にも熱心で、古代ギリシャ語を学んだり、シカゴ大学の授業に出席したりしている。「人生は成長であり、成長こそ人生である (Life is growth and growth is life)」と彼女は言う。

表紙に選ぶ作品のポイントは「(掲載される時期の) 季節感を感じさせるものであること」だそうだ。自分の解説が忙しい医師たちに少しでも安らぎと休息を与えるのに役立てたら、と願っているという。ここ2~3ヶ月のJAMAの表紙をご覧になった方は深くうなづけるに違いない。

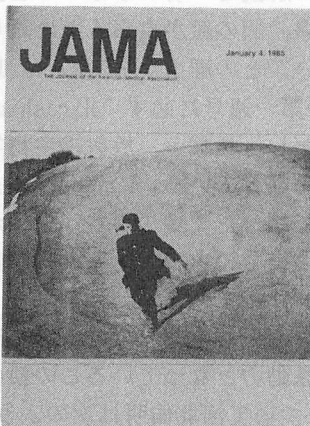


図7 JAMA 253(1),1985

また解説を書くにあたって常に留意しているのは「アートに偶然は存在しない (There are no accidents in art)」という点だという。何故この画家はこの時期にこの手法でこの絵を描いたのか - Southgate の解説は常に作品を作成した時の画家の生活、心情を背景に語られている。253巻1号 (1985年1月4日号) の表紙 (図7) は Andrew Wyeth の Winter 1946 という作品だが、Southgate は父の死による Wyeth の深い悲しみとその衝撃から立ち直ろうとする強い精神力との

バランス、および父の死をターニングポイントとして水彩画から油絵に転向した Wyeth の手法の変化について語っている²⁾。

IV. Iri and Toshi Maruki, Hiroshima Murals (Detail) について

250巻5号(1983年8月5日号)を始まりとしてJAMAが毎年8月の第一週号に必ず同じ絵を表紙に掲げているのをご存知の方も多いただろう。この絵は丸木位里、丸木俊夫妻³⁾(図8-(1)、図8-(2))の共同制作による屏風絵「原爆の図 (THE HIROSHIMA PANELS)」15連作のうちの第12部、とうろう流し (FLOATING LANTERNS) の一部分である(図9)。「原爆の図」は1950年に第一部「幽霊 (GHOST)」が完成して以来、世界各国を巡り、平和と核戦争反対を訴

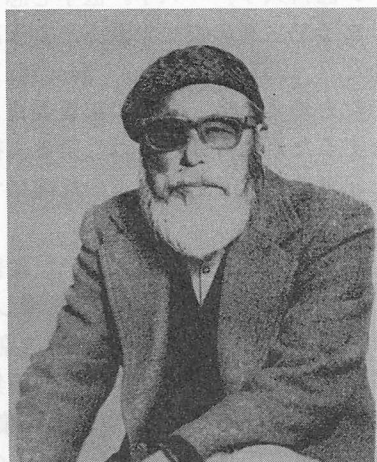


図8-(1) 丸木位里



図8-(2) 丸木 俊

え続けてきた。一方、1982年からJAMA編集長を務め現在も在任中である G.D.Lundberg も、核戦争反対の思想を持つ人であった。1983年、丸木位里、丸木俊夫妻はJAMAの表紙に「原

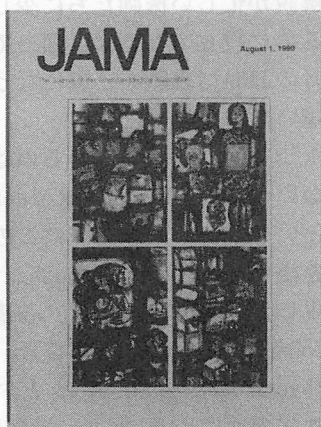


図9 JAMA 264(5),1990

爆の図」を使うことを「解説を一切つけないこと」を条件に承諾した⁴⁾。原爆の図の絵が自ら人々に語りかけるから解説は必要ない、との理由からである。1983年以降、JAMA は8月の第一週号に必ず Hiroshima Murals (Detail) を表紙とし、核戦争、放射線生物学などを扱った論文を多く掲載している。Lundberg も、JAMAのスタイルについて語った文章の中で、自分が編集長でいるかぎり核についてのすぐれた原著や解説を取り上げていきたい、と述べている⁵⁾。

「原爆の図」は今もなお世界中の人々に衝撃と感動を与えているが、その原動力となっているこの絵の持つ2つの決定的な意義について河北倫明は次のように提示している³⁾。第一に、この絵の主題と内容の決定的

な貴重さ。原爆が投下されて3日目に広島に入り惨状をまざまざと見聞した夫妻の描く絵には真実の重みがある。第二に日本古来の伝統的手法による表現様式。写実的な人間の描写に墨で彩色するという独特な手法は、まさに水墨画・風景画に長けた位里氏と油絵・人物画に長けた俊氏の協力の結晶であるといつてよいだろう。なお、この「原爆の図」が描かれた背景については258巻5号(1987年8月7日号)のJAMA⁶⁾および『原爆の図物語⁷⁾』を参考にされたい。

V. おわりに

以上、1960年初めから現在にいたるまでのJAMAの表紙を Cover editor M.T. Southgate や Hiroshima Murals(Detail)に焦点を当てながら見てきた。JAMAの表紙には語り切れないほど沢山の魅力やエピソードがあふれている。この論文を読んで一人でも多くの人がJAMAの表紙に関心を持っていただければ幸いである。

最後ではあるが、本稿を執筆するにあたりJAMAの資料を提供して下さった日本医師会の井上三郎氏、帝京大学溝口病院図書室の安藤越代氏、丸木位里・俊氏の資料に便宜を計って下さった連合会中央図書室の真下美津子氏、大田区立蒲田駅前図書館の汐崎順子氏に感謝の意を表したい。また、表紙撮影に際して器材提供して下さった杏林大学の稲垣文雄氏、高井恵之氏、および撮影、現像をおこなってくれた木下一雄に心より感謝したい。

引用文献

- 1) Breo, D.L.: M. Therese Southgate, MD - the woman behind 'The Cover'. JAMA, 263(15): 2107-2112, 1990.
- 2) Southgate, M.T.: The Cover ; Winter 1946, by A Wyeth. JAMA, 253(1): 37, 1985.
- 3) 丸木位里、丸木俊 (絵・著) : 新版原爆の図. 東松山市 (埼玉), (財) 原爆の図丸木美術館, 1988.
- 4) Lundberg, G.D.: Hiroshima(editorial). JAMA, 250(5): 617, 1983.
- 5) Lundberg, G.D.: The JAMA Style. Medical Communications, 12(4): 105-110, 1984.
- 6) Junkerman, J.: Hiroshima and the Art of Iri Maruki and Toshi Maruki. JAMA, 258(5) : 644-648, 1987.
- 7) 宇佐美承 (著)、丸木位里、丸木俊 (画) : 原爆の図物語. 東京, 小峰書店, 1985.

日本医事新報創刊時の背景

黒川玲子

現在、日本の医師の間に週刊の情報を提供している「日本医事新報」について、その創刊当時をふり返る。現在の「日本医事新報」には、感染症サーベイランスやAIDS情報ファイルなどの欄があり、おもに開業医向けに即戦力となる情報を流している感じがする。また、MEDICAL ESSAYSや時論などの欄があり、ウィークリージャーナルとして読み易さを全面にだしている。

約60年前の創刊当時からその姿勢は変わっていないのかどうかに興味があり、4年前に行なった日本の総合医学雑誌の調査¹⁾でも取り上げたことから、もう少し詳しく調べてみることにした。

1. 創刊

創刊は、1921年(大正10年)2月で、梅沢彦太郎氏(1893-1969)²⁾の編集に成り、第1号の発行部数は、11,300部であった³⁾。当時の発行頻度は月3回(5日、15日、25日)で、1926年から週刊となった。梅沢彦太郎氏については、明治26年5月23日東京生まれで、東京慈恵会医学専門学校を中退している。国宝重要文化財をはじめ中国、朝鮮の名品の収集家であり、その保存に貢献した。著書に「茶道名器鑑」がある。日本陶磁協会理事長、文化財審議会専門委員、東京都医師信用組合長などを務めている。1921年に日本医事新報社を設立し、同年に「日本医事新報」を創刊した。

2. 時代背景

1914	第一次世界大戦勃発
1916	吉野作造 民本主義提唱
1918	米騒動
1920	国際連盟に加入 * 国際的発言力増大
1921	「日本医事新報」創刊 志賀直哉(白樺派)「暗夜行路」発表 ワシントン軍縮会議
1923	関東大震災
1924	第二次護憲運動

この時代の特徴としては、大戦景気があり、社会主義者の運動、中間層の政治運動の高

揚などが挙げられる。独占資本の確立と平行し、それに依存しつつも矛盾した存在である中小産業資本家層が形成され、それにもなって医師、教授、技術者、ジャーナリスト、芸術家、弁護士など中等以上の教育を受けた知識分子が一つの社会層として形成され始めた時代であった。また、大正デモクラシーの自由な雰囲気の中、自由主義、社会主義の思想の高揚があり、憲政護憲運動、普通選挙獲得運動などもおこった⁴⁾。

医学界に関しては「医事及雑誌索引」への収録点数が1923（大正12）年で115冊となっている。これは1892-4（明治25-27）年の「日本医事雑誌索引」への収録点数38冊の約3倍であり⁵⁾、学会の機能がわずかながらに発展充実してきている時代であると言えよう。

3. 発行目的

この雑誌の発行目的としては、第一号の「宣言文」に「新時代の要求に順応し、正義に従って天下に革命を来たさんが為也。医界沈滞腐敗の要素を破壊して清新の新天地を開拓する。」とある。「直に独立自由なる言論思想の存在を意味する」雑誌であることを目的としている。そして「言論の自由を有」し、「多数の後援を有す」ものであった。

内容については 1)時事問題を論議、 2)最近の学説の紹介、 3)実地医家の利益を擁護、拡充、増進する、 4)権威ある治験報告、 5)趣味の記事、文芸、随筆、漫録、風刺画の記載、というように実地医家のための雑誌であることを明記している。

また、「今方、吾国の医学大に開け、杏林の論著、汗牛充棟もならずといえども厳正公平なる立場に於いて評論と報道との責務を尽くし真に医界の木鐸たるべき者は甚だまれなり。」という言葉からも、当時の医学出版界に憤慨を感じて「日本医事新報」の出版に到ったことがわかる。

19号(1921年8月)の巻頭文では、言論機関の使命として「八方美人主義よりむしろ八方不美人主義」であることを提唱している。「私等はさう云う虚偽と矛盾と、誤魔化しと出鱈目を痛撃してやり度い。さうして醜悪卑劣なる正体を立派に社会の眼前に暴し出し度い。」と息が荒い。

4. 1-30号の記事構成

コンテンツに出てくる表題から記事の構成を比較してみる。1-30号のうち14、

The image shows a page from the 'Nihon Iji Shinbun' (日本医事新報) newspaper. The page is filled with vertical columns of text, likely a table of contents or a list of articles. The title '日本医事新報' is written vertically on the right side. The text is dense and appears to be a detailed listing of medical news, reports, and articles from the period.

表1 日本医事新報1～30号の記載構成

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
巻頭	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★		★
指針	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★		★
重要問題	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★		★
漫演	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★		★
講演	★		★	★	★			★		★	★	★	★		★
談論	★	★	★	★	★		★	★		★	★	★	★		★
隨筆	★	★	★	★	★		★	★		★	★	★	★		★
フースヒー	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★		★
調査欄	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★		★
海外事情 (海外新潮)	★	★	★	★					★						
新報	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★		★
実験報告		★	★	★						★					
薬価表		★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★		★
学海評壇		★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★		★
説苑				★		★		★				★			
臨床講義 (臨床壇)						★									
文芸									★						
処方例										★	★	★	★		★
綜説															★
通信															★
談話															
示説															
(臨床示説)															
新潮															
論壇															
纂録															
紀行															
寄書															
海外だより															
学説															
器界思潮									★						
抄録															
雑纂															

	1 6	1 7	1 8	1 9	2 0	2 1	2 2	2 3	2 4	2 5	2 6	2 7	2 8	2 9	3 0
巻頭	★	★	★	★	★	★			★		★	★	★	★	★
指針	★		★	★	★				★		★	★	★		
重要問題	★	★	★		★	★			★		★	★	★	★	★
漫面	★	★	★	★	★	★			★		★	★	★	★	★
講演															
談論		★	★	★	★							★			
隨筆	★	★	★	★	★	★			★		★	★		★	★
フースヒー	★	★	★	★	★	★			★			★	★	★	★
調査欄	★	★	★	★	★	★			★		★	★	★	★	★
海外事情 (海外新潮)		★													
新報告	★	★	★	★	★	★			★		★	★	★	★	★
実験報告			★			★									
薬価表	★	★	★	★	★	★			★		★	★	★	★	★
学海評壇	★	★	★	★	★	★			★					★	★
説苑						★			★						
臨床講義 (臨床講壇)					★	★			★		★			★	★
文芸															
処方例	★	★	★	★	★	★			★			★			
綜説															
通信	★	★	★	★											
談話			★												
示説 (臨床示説)			★	★							★		★		★
新潮					★				★			★			
論壇						★					★				
纂録						★									
紀行									★				★	★	★
寄書											★			★	★
海外だより											★				
学説											★				
器界思潮															
抄録													★		
雑纂														★	

22, 23, 25号が入手できなかったので26誌のコンテンツについて、毎号どのような記事が出ているのか調べてみた。表1に示したように、第1号に表れる表題は11件であるが次第に表題の数が多くなり、分散化していくのが分かる。26誌中すべてに出てくるのは「巻頭」、「漫画」、「調査欄」、「新報」の4表題である。これは編集方針として 1.編集者の意志、2.風刺画、3.実地医家のための記事が中核となっていたことを表している。

「フースヒー」という人物紹介欄や、「重要問題」「談論」「随筆」などの欄は現在の「日本医事新報」と共通するものがある。「学海評壇」の欄には、「結核」「ビタミン」「脚気」といった当時の医学を思わせるようなタームが出てくる。

また、「漫画」は的場朝二、「通信」「紀行」は長谷川静一という人物が30号を通して書いている。「処方例」は12件すべて京都大学の処方例が出ている。「薬価表」には「最近十日間に変動せる薬品時価表」などという記事が載っている。

5. おわりに

以上「日本医事新報」の創刊当時の時代背景とコンテンツに表れる表題をみてきた。「医界の木鐸」たるべき雑誌を目指す言葉が随所にみられる「巻頭」のような文は現在の「日本医事新報」には捜し出せなくなっている。しかし幅広い内容を網羅し、趣味の記事を記載し、実地医家のための情報を流すということにおいては創刊当時の意志が貫かれているように思われる。

私たちが4年前に行なった日本の医学雑誌の調査では、「日本医事新報」はNEW ENGLAND JOURNAL OF MEDICINE よりもむしろ LEAD FROM THE MMWRを持つようなJAMA に近い内容をもっているという結果がでた。つまり原著論文中心で研究を主体とするソースというよりも、前線の医師への速報性に重点をおく情報のメディア的な雑誌だということである。

今回「日本医事新報」の創刊当時をふり返ることにより、現在の「日本医事新報」には第一号の宣言文に表れる実地医家のための雑誌であるという編集方針は変わっていないことが分かった。

引用・参考文献

- 1). 井上三郎ほか：日本の総合医学雑誌の分析，図書館情報サービス研究大会報告集 4 :9-12,1987
- 2). 日本人名大事典：現代，平凡社，1979
- 3). 小野寺俊治：日本医学雑誌の発達について(1)，日本医事新報 1728:47-50,1957
- 4). 小野寺俊治：日本医学雑誌の発達について(2)，日本医事新報 1736:88-95,1957
- 5). 大正デモクラシー 中央公論社，1975

日本医事新報

— 発刊の精神と孤軍奮闘の歴史 —

生出 直子

I. はじめに

日本医事新報は、大正10年2月に創刊されて以来ほとんど休むことなく発行され続けているわが国の代表的な総合医学雑誌である。

創刊号からの編集責任者であった梅沢彦太郎氏は、「日本之医界」編集長を経て、大正10年2月、日本医事新報社を創立し、昭和44年に病気で逝去するまで48年もの間、関東大震災や太平洋戦争の戦禍にも屈せずに日本医事新報を発行し続けた¹⁾。現在は、2代目の梅沢信二氏が社長として編集に携わっている。

創刊号の発行部数は11,300部だったが、熱烈な支持を得てその年の終わりには15,000部に増えていた。現在の発行部数は45,000部で²⁾、創刊時と比較すれば約4倍の伸びとなっている。昨今の医師数の増加を考えると爆発的な伸びとはいえないが、安定した支持があるといえる。

その内容は、医学界の動向や研究報告はもちろんのこと、読者からの質問や気軽に読めるエッセイなど、医学の専門知識がほとんどない筆者でもおもしろく、かつ興味深く読める記事を含めた構成となっている。

本研究では、日本医事新報の草創期に遡り、発刊の精神と編集方針を明らかにして、その人気の秘密を探ると共に、興味深い記事などを紹介していきたいと思う。

II. 勇ましく高潔な精神

まず、創刊号の社告からその方針をまとめてみると、次のようになる。

- 1) 売るのを目的としない。主義主張の共鳴者、実益及び趣味を認める人に限り実費にて配布。(創刊当時年間5円)
- 2) 共鳴者以外に一部たりとも配布することは、本誌の快しとせざるところである。
- 3) 従来への押し売り雑誌と同一視せらるるを最も不快とする。
- 4) 雑誌は天下の公器であるから、編集者、共鳴者もまた公人でなければならない。公人の正義に基づける論説、評伝、感想、通信、動静をもれなく掲載する。
- 5) 印刷工場を公開したり、郵便発送領収書を毎号提示することにより、実際の発行部数を立証する。

購読料の年間5円というのは、「これは全く用紙代および印刷代だけの最低限度の実費にすぎませぬ」ということである。それが当時どれだけの価値があったかであるが、筆者の記憶では、ある文献の中で明治の終わりから大正初期にかけての1円を現在の5千円で

換算していた。それをもとに計算してみると、5円は現在の約2万5千円ということになる。ちなみに現在の価格は1冊566円(含消費税16円)、年間で52冊27,810円(含消費税810円)となっており、当時の価格をスライドしてみるとほぼ同じ価格になることがわかる。

後に大成功をおさめ、発行部数が増えた時も、購読料や広告料を植上げするようなことはないのであらかじめ御了承願いたい、と読者にことわりをしている点からも³⁾ 営利を目的としないという特色が表れている。

また、あえて印刷工場を公開したり郵便発送領収書を提示したのは、当時雑誌の発行部数には虚偽誇張が多く、何万何千部印刷すると吹聴しながら実際はそれほど出していないということが往々にしてあったからだそうである。そこで、2号からの紙面には前号の発行部数を証明した領収書を掲載することにしたのであった。

創刊号の表紙の「宣言」によると、発刊の目的は「正義に従って天下に革命を来さんのため」であり、「実地医家の利益を擁護し、拡充し、増進するのはその一大眼目とするところ也」である。また、そのために言論の自由を有し、議論と報道とに関して決して何らの干渉、制肘を受けない、とも宣言している。

このように、何者にも媚びることなく正義を重んじる精神は、しばしば虚偽不正に対する鋭い攻撃となって表れた。それは巻頭言における以下のようなタイトルが示す通りである。「烈々たる公憤をもって迷信療法を排す」「『学士』何の尊ぞ、虚名に憧るるなかれ」「その愚を笑へ、愚劣驚くべし」など、現在では考えられないほど攻撃的精神を露にした論調であった。

またその一方で、「開業医諸君、報酬徴収難の嘆」や「『医師』の名を誇れ」などと、医師たちを激励し、時には叱咤するといった態度で臨んでいた。

創刊された年の5月には、共鳴者として購読を申し込む人は1日に200人を下らなかつた⁴⁾。事務処理にパソコンを使うようになった今日でも1日200人分の処理というのはけっこうなものであるが、それが手作業のみで進められていた大正の世に連日200人以上の申し込みが殺到したというのであるから、社員が嬉しい悲鳴をあげながらも、書類を積み上げた事務室でてんでこまいていた様子が容易に想像できる。

この成功は、以上に述べたように、あくまでも開業医家の味方に徹した立場を取ることで達成されたことは明らかである。

しかし、出る杭は打たれるとは言ったもので、その成功を妬んで中傷する者が現れた。仕立て上げるには余りにも潔白で取り付く島もなかったのであろうか、事実を捏造してまでも、いいがかりをつける者がいたということである。もっとも、そのような卑劣なやり方に対しては、かえって刺激剤になってよろしい、とさえ言っているのけ、あまり相手にはしていなかったようではある。その一例は次章に述べるが、日本医事新報はこのような障害をも屈することなく正義を貫いて、今日に至っているのである。

III. 読者の便宜を図った構成

日本医事新報は、実地医家の利益を擁護することを一大目的としている。本誌の構成にはそのための様々な工夫がなされており、創刊当時から変わることなく続いている欄もあ

れば、時代のニーズに応じて現れては消えた欄もある。本章では、そのいくつかを紹介する。

1) 薬価表

これは、主要な薬品を廉価に提供するシステムで、開業医の中でも特に不便な地方の医師の便宜を図るものであった。卸や小売などの流通ルートを省いているので、定価の2割引から5割引で読者に提供された。この薬価表は、本誌の特色とするところで、発表後、直ちに好評を博した。そのため、薬業者からは余りにも安すぎると非難されたり、偽造品であると言われたりもした⁵⁾。そのようないいがかりを物ともせず、優良品を提供し続けたが、薬価表は昭和2年の262号に掲載されたのが最後だった。

2) 質疑応答

創刊時は調査欄として始まったが、昭和18年1104号からは質疑応答と名称を変え、現在に至る。読者から寄せられる様々な質問に対し無料で回答を与えているが、その質問分野が多岐にわたっていておもしろい。医学雑誌という性格上、その専門分野が多いのは当然であるが、その他にもごく日常的なことや、知っていて損はないなと思わされる難問奇問が収載されている。

例を挙げると、「奇術(手品、腹話術)等の習得機関について」、「英国の紋章について、その参考文献など」、「蛇の退治方法」等々。

これらのうち、昭和48年以降の日本医事新報に収載されたものは、図書の形態で同社から出版されているので、暇のあるとき雑学を学ぶつもりでご覧になるのもいいかもしれない。

また、この欄の利用は医師に限っておらず、郵便による直接回答もしてくれるので(こちらは有料で1回千円)、試しに何か質問をしてみようかと思ったりする。図書館員のメンツにかけて、そう頻繁にはできないが。

3) 近況告知板

戦後の混乱期に、消息不明となった親戚知人に近況を伝えるためにできた欄で、昭和21年1月から設置された。例えば「疎開地長野より帰京右記に開院致居候。」といった具合であった。開設当初は、掲載料1回13円で、利用者も多かったが、2〜3年後には物価上昇のため料金が上がり、混乱も一段落したのか、利用者はまばらになっていった。

4) 人事紹介

いわゆる、求人求職その他の広告欄で、これも創刊号から現在に至るまで続いているもののひとつである。本誌4号のあとがきにはこれについて、「同人等の職業柄各方面に知己が多い為、その依頼によって好意的に紹介の労をとっているのであるから、謝礼云々を云はるる向もあるがこれは困る。―後略―」とコメントしている。

5) フースヒー

本章の主旨からは少しはずれるが、興味深い記事があったので紹介する。

一瞬、「？」と思われるかもしれないが、内容を見てみるとこれは、“Who’s he?”を日本語読みにしたものらしい。医学界のあらゆる人を新人、名士、偉人、凡人の別なく取り上げ、忌憚なき批評を加えることを旨としている。

それにしても、時代を如実に物語るそのネーミングは、いかにも男性中心社会であったことを浮き彫りにしている。逆にいえばそれだけ医学界で活躍する女性がすくなかったの

であろう。

そんなことを考えていると、大正10年の4号には早速、東京女子医大を創立した吉岡弥生女史が取り上げられていたので、名称はともあれ、やはり日本医事新報は進歩的な雑誌であったことがわかった。

ところが、その記事には次のようなくだりがあった。「記者は女が嫌い、殊に「新しい女」が大嫌い、「女」篇に「新」と書いて、「怪け物」と読ませたい、くらいに思っている。所が、「新しい女」か「古い女」か知らないが、吉岡女史にはいささか敬服した。—後略—」

明らかに吉岡女史を褒め讃えていることは、続く文章を読んでもわかるのだが、初めの数行には、現代の女性にとっては堪え難いほどの男尊女卑思想が含まれている。今なら、さしずめ謝罪要求、陳謝といった騒動になることであろうが、言論の自由を有するといえ、このような発言がまかり通ったのはやはり、「時代」のせいなのだろうか。

IV. おわりに

日本医事新報は、彗星の如く現れ、それまでの医学界に戦いを挑んできた革新的な雑誌であった。草創期には、随所にその使命と現状への批判がちりばめられており、ときには名指して人を批判することもあった。正義を貫き、悪弊を打破するためにあえて憎まれ役を買って出たのだが、それゆえの圧力も相当のものだったようである。

しかし、戦災や天災による被害を受けた他は、外部の力による大きな挫折はなかった。それは自己の利益を求めない確固たる信念のもとに、地道に診療を続ける日本全国の開業医師を味方につけた成果といえる。

地味で簡素な装丁は今も昔と変わらず、創刊からの精神が連綿と続いていることがわかる。だが、現在の誌面にはかつての巻頭言、社告、あとがきといった編集者の声を伝える欄がなくなっているのが残念である。

引用文献

- 1) 社告. 日本医事新報, 2366 : 71, 1969.
- 2) 雑誌新聞総かたろぐ1990年版
- 3) 同人語. 日本医事新報, 16 : 24, 1921.
- 4) 同人語. 日本医事新報, 11 : 24, 1921.
- 5) 同人語. 日本医事新報, 3 : 24, 1921.

参考文献

- 1) 小野寺俊治. 1891～1956年の日本医学雑誌. 日本医事新報, 1736 : 88-95, 1957.

医学文献の寿命調査

江口 敏一

I. はじめに

医学文献の特色を知るためのひとつの方法として寿命調査を行った。図書館における文献の寿命は、文献の利用数によって決めることができる。そこで文献の寿命を調べるために文献の利用調査として、雑誌の引用文献による調査と図書館の利用統計による調査を行った。

II. 対象と方法

引用文献調査は、日本の総合医学雑誌である医学のあゆみの1989年発行分の148巻から151巻に掲載されているすべての文献を調査対象とし、その引用文献の出版年を調査した。調査対象に医学のあゆみのような総合医学雑誌を選んだのは医学の特定専門分野ではなく医学全般の文献の寿命を調査するためである。また文献の形態には雑誌論文、図書、会議録、レポートなどさまざまなものがあるが、この調査では特に形態別には分けずにまとめて文献として扱った。1989年の医学のあゆみに掲載されている総文献数は1809件で、その引用文献の総数が10751件である。

利用統計調査には、貸出、閲覧、複写があるが、貸出、閲覧、学内複写は調査が困難なので、ここでは学外文献複写を調査した。浜松医科大学附属図書館における1989年度の学外文献複写（受付）の申込書に記載されている文献の出版年を調査した。文献の総数は1211件である。

III. 結果と考察

III-1. 文献利用の経年変化

文献が利用されることを文献の寿命とすると、年が経つにしたがって文献の利用が減少してくる現象が老化であり、全く利用されなくなったときつまり利用の数が0になったときが文献の寿命が尽きたときである。

ある出版年の文献がどれだけ利用されたかをグラフにしたのが図1と2である。横軸が出版年で、縦軸が文献数である。図1が引用文献調査によるもので、1988年がもっとも多く、あとはだんだん減少している。1989年が1988年より少なくなっているが、これは雑誌に載っている個々の論文は、研究が終ってから論文に掲載されるまでに時間的な遅れつまりタイムラグ (time lag) が生じるからである。Carson, J.とWyatt, H.V.による医学微生物学の雑誌の調査によるとタイムラグは平均35週間である¹⁾。ちなみに医学のあゆみで論文が受理されてから雑誌に掲載されるまでのタイムラグは、1989年に掲載の原著論文（短報）で約2カ月である。ただし、医学のあゆみの受理日は最終稿の採用決定日である。グラフにはでていないが、出版年で集計することのできない文献もいくつかあった。その数は、印刷中136、投稿中47、未発表14、私信11、出版年不明33の計241で全体の2.2%にあたる。図書館の利用統計ではわからないインフォーマルな情報の利用が引用文献調査では知ること

ができることが特徴的である。

次に図2は文献複写調査によるものであるが、1989年が圧倒的に多くなっている、それ以降はだんだん減少している。1990年の文献がわずかにあるのは、対象が1989年度であるために1990年の1月から3月の文献が含まれるからである。1989年当年に文献の利用が集中しているのが特徴的である。また、それ以前の年の文献も引用文献調査と比較するとより多く利用されている。古い文献も利用されているのは、研究をするにあたってはカレントな情報だけでなく、過去に遡って古い文献をも探索するが、収集した文献を引用文献欄に載せるときは同じ事実の書かれている文献ならばより新しいほうを採用するからである。

図1)

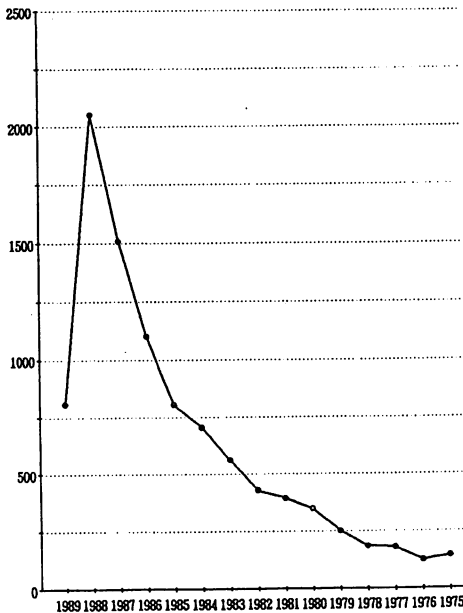
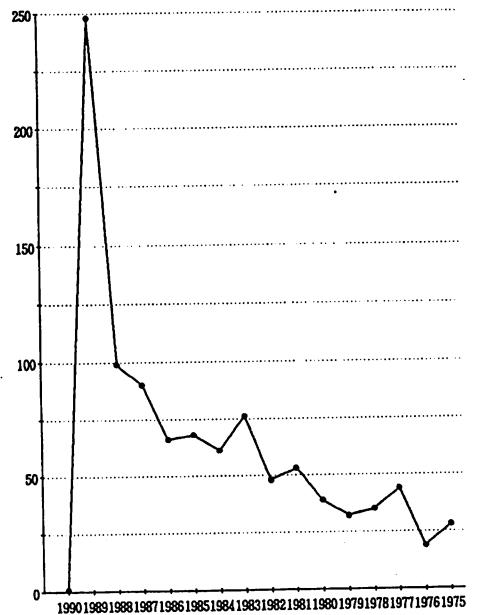


図2)



III-2. 文献の寿命

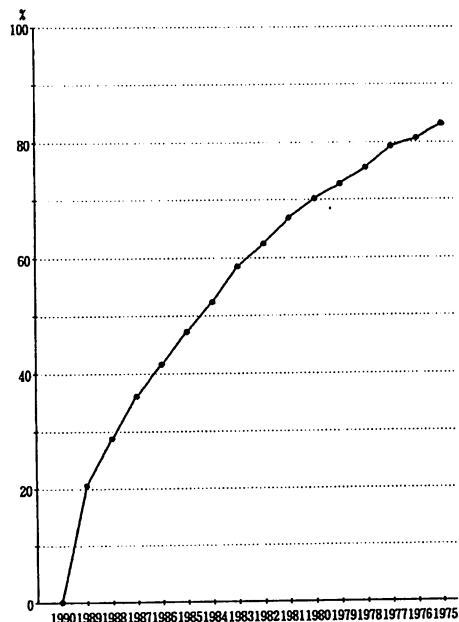
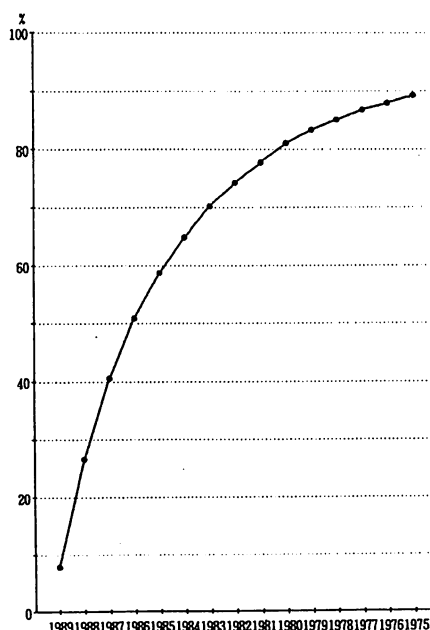
文献が出版されてから、その文献の利用が0になるときまでの期間が文献の寿命である。しかし寿命の長さはたとえ1件でも古い文献が利用されていれば延びてしまうので、ここでは文献の老化の速さつまり利用の減少の速さを調査した。

Burton, R.E. と Kebler, R.W. ²⁾ が1960年に提唱して以来、文献の半減期 (half-life) ということがよく言われるが、半減期のもとの意味は、原子核が放射線を出して崩壊するときに、もとの原子数が半分に減るまでの時間を言う。これを文献に当てはめたのが文献の半減期である。つまり、文献の半減期は、文献の累積利用数が利用総数の半分になる期間を言う。

その半減期を求めたのが図3と4である。縦軸は文献の利用数の累積百分率で、その年までの累積利用数が利用総数と比べてどれくらいの割合かを表している。横軸が文献の年齢で、1989年を1年目としている。図3の引用文献調査の場合では、半減期は3.9年である。また、引用百分率は5.2年で60%、6.5年で70%、9.6年で80%、15.7年で90%となっている。図4の文献複写調査の場合では、半減期は5.5年であり、引用百分率は7.4年で60%、10.0年で70%、13.5年で80%、19.9年で90%となっている。

図3)

図4)



次に他の分野と比較したのが表1である。Burtonも三輪の調査も共に引用文献調査によるものなので、引用文献調査による結果と比較した。また三輪の調査は1972年と1977年を調査しものだが、1977年の調査結果と比較した。半減期では冶金工学と同じく3.9ともっとも短くなっている。また累積百分率でも、10年で81.1%と冶金工学の82%について高く、20年で93.2%ともっとも高くなっている。

IV. おわりに

以上のように医学文献は他の分野と比べても文献の老化速度が速く、新しい文献に利用が集中していることがわかった。

最後に、今回の調査ではできなかったが、年代や文献の形態や国による違いなどについても機会があれば今後調査してみたいと思う。

表5. 他の分野との比較

論文の著者	主題分野	半減期 (年)	累積百分率 (%)				
			10年	20年	30年	40年	50年
江口	医学	3.9	81.1	93.2	96.1	97.1	97.4
Burton ²⁾	化学工学	4.8	75	88	96	-	-
	機械工学	5.2	72	87	94	-	-
	冶金工学	3.9	82	93	97	-	-
	数学	10.5	48	77	89	94	98
	物理学	4.6	76	92	98	99	100
	化学	8.1	58	77	87	91	95
	地質学	11.8	42	68	84	90	94
	生理学	7.2	62	84	94	97	99
	植物学	10.0	50	79	90	94	97
三輪 ³⁾	経済学	7	68.1	86.9	92.6	94.3	94.7
	教育学	7	69.8	88.5	93.3	94.9	96.3
	法律学	7	63.1	79.6	86.4	90.5	93.3
	政治学	6	69.2	86.2	91.4	93.7	95.6
	心理学	8	65.1	88.5	95.1	97.1	98.4
	社会学	8	63.9	86.4	93.1	97.0	97.0

引用文献

- 1) Carson, J., Wyatt, H.V. :Delays in the literature of medical microbiology; before and after publication. Journal of Documentation, 39(3):155-65, 1983.
- 2) Burton, R.E., Kebler, R.W. :The "half-life" of some scientific and technical literatures.American documentation, XI:18-22, 1960.
- 3) 三輪真木子, 上田修一, 中山和彦 :社会科学雑誌引用文献の特色 ;SSCI1972年と1977年の比較. Library and Information Science, 18:141-155, 1980.

情報としての死亡記事

安藤越代

I. はじめに

代表的な初期の学術雑誌のひとつであり1665年からパリで刊行されたJournal des Sçavansは、その目的として、書評、新発見の記事、知識社会（法廷、大学を含む）の現況、主要行事の案内に加えて、“有名人の死亡記事と業績の要約”を挙げている。いわゆる今日の知識人向け総合雑誌の原型であるこの雑誌では、新発見に代表されるような学問伝達に加えてその科学コミュニティの構成員である研究者たちの動向がひとつの独立した記事として扱われていた。

II. 死亡記事の種類

学術雑誌に掲載される死亡記事には、大別して以下の2種類がある。

A. 新聞記事タイプ

一般大衆新聞の社会欄最下段にみられるような、死亡に関する各種データ（日時、所、死因、葬儀について、等）に加えて、故人の経歴を簡略に記したものの。故人に関しての具体的な史実のみが羅列され、著者の故人に対する感情（悲嘆など）が含まれることはない。また、著者を限定することは非常に困難である。このタイプの死亡記事の主な例として、日本医事新報（以下、日医新報）の“訃音”と、Journal of American Medical Association（以下、JAMA）の“Obituary Listing”が挙げられる。

B. 追悼文タイプ

生前故人と親交のあった人が追悼の意を表して記述したものの。死亡に関する各種データ（前出）は新聞記事タイプに任せているためか、詳細に記述されることはまれである。故人の具体的な業績に、親しかった者が抱いて当然であるような様々な感情をまじえ、より故人に密着した、人柄を忍ばせる事柄を記したものが多く、主観的に記述されやすい。また、著者名を示したものが多く、このタイプの死亡記事の主な例として、British Medical Journal（以下、BMJ）の“obituary”、Lancetの“Obituary”などが挙げられる。特定分野で功績のあった研究者が死亡した場合、その分野の専門誌にこのタイプの死亡記事が掲載されることが多い。

III. 主要総合医学雑誌、医師会雑誌の死亡記事

以下、国内外の主要総合医学雑誌、医師会雑誌の死亡記事を概説する。

1. BMJ

British Medical Associationの機関誌でイギリスの総合医学雑誌のひとつであるBMJでは、毎号1から4ページものスペースをさき“Obituary”というタイトルのもと、追悼文タイ

プの死亡記事を掲載している。1989年1年間に462件（重複を含む）もの記事を扱っている。他誌が1年間に扱う件数は100件にも満たないことと比較しても、BMJがこの死亡記事に対して何らかの重要性を見いだしていることが推察できる。

1989年1年間（VOL.298とVol.299）に基本的な追悼文スタイルは変わっていないが、わずかに変化が生じた。VOL.298までは、故人の略歴を述べる前に故人の生年月日、死亡記事に関する事実やその主な職務、等の項目が記述者それぞれに委ねられたかのように統一のないスタイルで記述されていた。しかしVOL.299からは、記入項目が定められたのか、各々統一のとれた情報を含むように変化した。

2.Lancet

イギリスの総合医学雑誌であるLancetでは、追悼文タイプの死亡記事を扱っている。“Obituary”というタイトルのもと、時折写真を加え、故人の略歴が紹介されている。各文末には、イニシアルあるいは氏名を付して著者名を限定している。1989年1年間に扱った記事はわずか38件（VOL.1、Vol.2共に19件ずつ）である。

3.JAMA

American Medical Associationの機関誌であるJAMAには2種類の死亡記事が掲載されている。

毎号2ページ程度のスペースに100名程度の故人についての記録を収載している新聞記事タイプの“Obituary Listing”と、不定期に1から2ページ程度に数名の追悼文を収載している“Obituary（あるいはObituaries）”とがある。前者では、氏名、年齢、American Medical Associationの会員であるか、死亡日等の情報が、各人すべて同じスタイルでリスト化されている。後者では、故人のありし日々を略歴等のデータや写真を加え、他誌と同様の追悼文が物語っている。1989年1年間に、前述のLancetとほぼ同じ36件の記事を扱っている。

4.New England Journal of Medicine

アメリカの総合医学雑誌であるNew England Journal of Medicineの1989年1年間の目次の中には、死亡記事に該当するものは見いだせなかった。

5.日本医師会雑誌

日本医師会雑誌（以下、日医師会誌）は、大正10年10月10日に大日本医師会より創刊された『醫政』という雑誌がその始まりであるが、この当時は、その誌名からも明らかなように医政の研究を目的としていた。その後数々の変遷を経て、戦後昭和22年11月に復刊した同誌では、創刊時の目的であった医政のみでなく、医師会の理事会記録の掲載、学術的記事の特集等が紙面を賑わし、近年では、“生涯教育シリーズ”のスタートが示すように、医師の生涯教育をその刊行目的とするにいたった。このように、医師会会員の教育や医事についての速報性をもった雑誌であるはずの同誌であるが、1989年1年間の目次によれば、医師・会員の死亡記事は掲載されていない。わずかながら、昭和6年、当時『（復活）醫政』の6巻11号で、同年死亡した北里柴三郎について「北里男爵追悼号」が特集されたことがある。

6.日本医事新報

大正10年創刊された日医新報は、医学のあゆみと同様に我が国の代表的総合医学雑誌のひとつである。同誌の中の死亡記事はJAMAと同様、新聞記事タイプと追悼文タイプの2通りがある。前者は、毎号4分の1ページほどのスペースで“訃音”という見出し語の、もとに

掲載されている。表紙の目次中には、“訃音という項目はないが、ページ数表示から“ニュース”項目の一部に含められていると推察できる。後者は不定期に掲載され、そこで扱われる故人は“訃音”と重複する場合もある。この記事には特別な項目名はないが、“訃音”と同様に“ニュース”項目中に含まれ、追悼文自体のタイトル（例：永沢滋先生の御冥福を祈って）と著者名とが目次に含められている。

1989年1年間にこれら2種の死亡記事にとり挙げられたのは111件（重複を含む）であった。蛇足であるが、3382号（1989年2月18日号）には漫画家であり医師の資格をもつ手塚治虫氏の死亡記事が新聞記事タイプで掲載されている。

7. 医学のあゆみ

医学のあゆみは、昭和21年に文献レビューを中心に創刊された。1989年1年間の目次中死亡記事に該当するものは、創刊者の一員である緒方富雄の追悼特集が組まれた149巻4号のみで、その他定期・不定期に掲載される死亡記事は見いだせなかった。

IV. 傾向

今回とり挙げた総合医学雑誌7誌では、死亡記事の扱いにそれぞれの雑誌の特徴が如実に現れている。

New England Journal of Medicineや医学のあゆみは、共に会員を有する医師会・学会の機関誌ではないため、死亡記事を掲載する必要性が低い。まれに緒方富雄のように、その雑誌にとり重要な位置を占めていた人物については、特集号という形式で死亡記事を扱う程度である。これに反して、JAMA、BMJ、日医新報は各々医師会会員・一般開業医を対象とした雑誌であるため、死亡記事を会員消息の延長線上に扱い、有効な情報とみなしている。

V. 死亡記事のかかえる問題点

新聞記事タイプの死亡記事は、事実を羅列するのみであるため、著者の私的感情が入り込む余地は小さい。しかし追悼文タイプの死亡記事は、故人に対する感情が文章の内容に大きな影響を与え、誇張表現や誤った記述を招く場合がある。

1982年にこのことを指摘したBMJでは“Do it yourself obituaries”と題して、人々に自分の死亡記事—追悼文と呼ぶのは適当ではないと考える—を書くことを推奨している¹⁾。しかし、この提案に対する反響は大きく、たとえ本人自らが死亡記事を書いた場合でも、誇張表現を避けることはできないし、当人に不利な事柄を記述する可能性は少ない²⁾。更に、死亡記事の存在の是非にまで意見が及んでいる³⁾。

初期の学術雑誌が目的としていたような“有名人の業績の要約”を知らせることを死亡記事の目的と考えるならば、読み物的文章を含む追悼文スタイルの死亡記事は学術情報の中では不必要ではないだろうか。このような文章に誇張表現やうそが含まれることは当然であり、それを防止すること自体不可能なことである。事実を羅列した情報以外の情報（私生活、人格、等について）を、生前の故人を語る上で必要なものがあるとするならば、それは単なる読み物にすぎない。

VI.おわりに

自然科学分野で扱われる情報といえば、実験結果・臨床試験等の統計的数値といった客観的なデータに基づいた学術論文が主体である。にもかかわらず、その創生期から今日に至るまである種の学術雑誌では、研究者の死亡記事という主観的な情報を扱っている。このような情報が科学コミュニティ内でどれほど有効なものであるかについての疑問が残った。その中でも群をぬいてBMJは死亡記事に大きく重点をおいているようだが、それはどうしてなのか、今後の課題として更に調査を進めていきたい。

引用文献

- 1) (Editorial):Do it yourself obituaries. Br Med J, 285:1763-4,1982.
- 2) Raghavendra,K:Do it yourself obituaries(letter). Br Med J, 286:224,1983.
- 3) Hedgcock,W:Do it yourself obituaries(letter). Br Med J, 286:224,1983.

参考文献

- 1) 中山茂：歴史としての学問。東京，中央公論社，1974。
- 2) (Editorial):Do it yourself obituaries. Br Med J, 286:311,1983.
- 3) (Editorial):Do it yourself obituaries. Br Med J, 286:652,1983.
- 4) Morris,CE:Do it yourself obituaries(letter). Br Med J, 286:647,1983.
- 5) Radford,AP:Do it yourself obituaries(letter). Br Med J, 286:223,1983.
- 6) Bedford,R:Do it yourself obituaries(letter). Br Med J, 286:223-4,1983.
- 7) Slater,E:Do it yourself obituaries(letter). Br Med J, 286:224,1983.
- 8) Boulton,TB:Do it yourself obituaries(letter). Br Med J, 286:224,1983.
- 9) 青柳精一：「日本医師会雑誌」のあゆみ（上）－創刊から昭和20年代後半まで。日本医師会雑誌,100(1):27-31,1988.
- 10) 青柳精一：「日本医師会雑誌」のあゆみ（下）－昭和20年代後半から現在まで。日本医師会雑誌,100(3):423-7,1988.

Brandonリストの収載図書の主題別変遷

青木 仕

I. はじめに

今回は、医学図書館員であれば、一度は耳にしたことがあると思われるBrandonリストについて調査を試みた。Brandonリストは図書館員であるAlfred N. BrandonがMedical Library Associationの機関誌Bulletin of the Medical Library Association53巻1965年から隔年に亘り小規模医学図書館を対象に図書・雑誌リストを選定・推薦し掲載しているものである。リストには購入する場合を考慮して価格とその上昇率や取次店にいたるまで毎編詳解している。現在の最新号まで25年に亘り13回改編されている。そこで、このリストの変遷を調査していくことによって主要図書リストの変遷やアメリカの主要医学文献の歴史的動向が把握できるのではないかと考えた。

(表1)にBrandonリスト収載の図書・雑誌数の変動を示す。(表1)からも判るように雑誌数は、1965年の123誌から1989年の141誌と掲載誌数の増加を制限しているようである。しかし、図書については、1965年の358誌から1989年の607誌へと約倍増している。雑誌の選定については、Moll, W.がBrandonリストの中からさらに100-300床の小規模病院図書室を対象に48誌を提示している。また、我が国においては、近藤が世界の主要生物医学関係二次資料6誌からコア・リストを作成している。井出等は日本の医学図書館の外国雑誌コレクションの現状を調査している。このように雑誌に関しては、SCI Journal Citation ReportsのImpact Factor等を用い現在ある程度の客観的評価が行なえる。

図書については、Allyn, R.A.がAmerican College of Physiciansが推薦した図書166誌と雑誌49誌をAnn Intern Medに報告している。Lewis, C.S., Jr.は同誌に図書と雑誌を51主題に分類し、図書187誌・雑誌56誌を推薦している。また、BrandonとHillはAllied Health Education委員会とAmerican Medical Associationが推薦した26分野を対象にした健康教育プログラムと歯科関係のなかから、医療技術者のために既に3回に亘り推薦図書・雑誌リストをBull Med Libr Assocに掲載している。この最新編には図書435誌と雑誌76誌を報告している。

その他に、Videoや看護学や歯科関連のリストも報告されている。このように多くの分野で推薦リストが提示されてはいるが、日々おびただしく刊行される図書の評価は難しいものがある。そこで、今回はBrandonリスト上の推薦図書リストに着目しその変遷をみていくことにした。

II. 図書の主題別内訳

(表2)にBrandonリスト初版(1965年版)の図書主題別掲載誌数を示してある。初版は49主題に分類されている。この分類の特徴的点は、必携の辞書類のための(Dictionaries, Directories, and Encyclopedias)や医学試験のための問題集などからなる(Licensure)や論文の書き方のための(Medical Writing)、そして我々医学図書館員のための(Lib

rary Administration)などの項目も設けてあることである。普通我々が用いている分類に比べこのように増設され、趣を異にしており必要最小限度な範囲の項目も設定してある点である。次に、主題別図書数をみると、驚くべき点は、看護学関連の図書を38誌と数多く掲載していることである。そこからアメリカにおける看護学教育のレベルの高さと、小規模病院やクリニックでの看護業務が占める地位やその役割の重要性を垣間見る思いがする。

Ⅲ. 図書の主題別変遷

次に主題別の変遷をみていくと、改編されていく毎に時代に即した改定が試みられている。(表3)は、主題変更や掲載誌数の顕著な増減がみられた主題について時系列的に表示してある。

1.1969年には、(Genetics)の項目が新設された。また、リスト上から更に必要最小限度の重要誌に*印を付け提示し始めた。

2.1977年には、(Dentistry)関連図書が前編の19誌から6誌へと縮小されている。我々に関係する(Library Administration)の項目が削除された。増加した主題は、(Pediatrics)が13誌から18誌へと増加している。また、(Tumors)が(Oncology)へと主題変更がなされていた。

3.1979年には、(Gynecology and Obstetrics)が前編から7誌、1981年には8誌と充実が計られてきた。

4.1981年には、(Family Practice)と(Emergency Medicine)が新設される。しかし、(History of Medicine)5誌と(Medical Electronics)5誌の項目は削除された。また、(Nursing)は初版の38誌から年々充実が計られ1969年の69誌まで漸増し続けたが、1981年には49誌と20誌削除された。しかし、その後再び増加傾向を示している。

5.1983年は最も多く変革がなされた年度であった。新設主題は、(Ambulatory Medicine)(Ethics)(Patient Education)(Sports Medicine)と4主題の増加を数えた。しかし、(Ambulatory Medicine)は以後3編に掲載されたが1989年には削除された。主題変更も(Cardiology)から(Cardiovascular System)へ、(Endocrinology)から(Endocrinology and Metabolism)へ、(Radiology and Nuclear Medicine)から(Radiology and Imaging)へと3主題が概念領域を拡大した主題へと変更されている。目立った増加を示した主題は、前編新設された(Emergency Medicine)が5誌から12誌へ(Neurology)が9誌から13誌へなどがあげられた。

6.1985年には、(Arthritis and Rheumatism)が(Rheumatology)に主題変更されている。1987年には、エイズ関連図書を含む(Sexually Transmitted Diseases)が新設され、(Photography)が削除された。そして、(Hospitals)から(Hospitals and Administration)へと主題変更がなされ、誌数の増加も計られている。

7.1989年には、(Critical Care Medicine)が新設された。初版から2誌が掲載され続けていた(Licensure)が削除された。(Psychiatry)は前編の9誌から15誌へと増加し、(Surgery)は初版の14誌から37誌へと漸増傾向を示している。また、(Sexually Transmitted Diseases)から分離し、(Acquired Immunodeficiency syndrome AIDS)が独立され7

誌が掲載されていた。このように、年度により大きく変更がなされていることが判る。

IV. おわりに

今後は、改編ごとの図書の個別チェックを行ない改版ごと時代を越えて生き続ける主要図書を抽出したいと考えている。また、日本医学図書館協会から近日中に発行予定の過去5年分の累積医学洋書総合目録とBrandonリストとの照合を行ない我が国の主要図書の収集状況を把握したいと考えている。

最後に、Brandonリストを調査してきて感じることは、紙面が限られているにもかかわらずアメリカの医学図書館界が図書館員の手で、時には30ページを越すリストを20数年の長きに亘り刊行し続けているという実績と偉大さである。アメリカの医学図書館協会は個人会員制度から成立っており、会員の病院図書室に勤務する人達にとって図書室の蔵書構成を構築する際このリストは貴重な資料であるにちがいない。

アメリカの場合と我が国とは一概に比較はできないが、我が国の場合近年病院図書室との連合が提唱されている。また、近年の図書価格の高騰は著しく必然的に購入図書も制限され、選書が図書館員にとって重要な問題になってきている。このような状況のもと我が国においても、Brandonリストのような資料を雑誌「医学図書館」の紙面を借りて提示できたらと考えている。

参考文献

- 1) Brandon,AN.:Selected List of Books and Journals for the Small Medical Library. Bull Med Libr Assoc. 53(3):329-64,1965. 55(2):141-59,1967. 57(2):130-50,1969. 59(2):266-85,1971. 61(2):179-200,1973. 63(2):149-72,1975. 65(2):191-215,1977. 67(2):185-211,1979. 69(2):185-215,1981. 71(2):147-75,1983. 73(2):176-205,1985.75(2):133-65,1987. 77(2):139-69,1989.
- 2) Moll,W.:Basic Journal List for Small Hospital Libraries. Bull Med Libr Assoc. 57(3):267-271,1969.
- 3) 近藤禧す男 :学術雑誌の評価・選択・運用. 東京大学図書館情報学セミナー研究集録. 9:51-140,1978.
- 4) 井出唯敬 山崎茂明 裏田和夫 :日本医学図書館協会加盟館の外国雑誌コレクションの現状(1977-1982). 医学図書館. 31(2):132-144,1984.
- 5) Allyn,RA.:A Library for Internists IV. Ann Intern Med. 96(3):385-401,1982.
- 6) Lewis,CS,Jr.:A Library for Internists V. Ann Intern Med. 102(3):423-437,1985.
- 7) Huth,EJ.:A Library for Internists VI. Ann Intern Med. 108(3):497-511.1988.
- 8) Brandon,AN. Hill,DR.:Selected List of Books and Journals in Allied Health Science. Bull Med Libr Assoc. 72(4):373-391.1986. 74(4):353-373.1986. 76(4):346-367.1988.
- 9) Owemann,MH.:Analyzing and Selecting Audiovisual Materials. Nurs Educ. 9(4):24-27.1984.
- 10) Bischoff F.:Audiovisual Services.In:Bradley,J. Holst,R. Messerle,J.eds. Hospital Library Management. Chicago:Medical Library Association,163-191.1983.
- 11) Brandon,AN. Hill,DR.:Selected List of Nursing Books and Journals. Nurs Outlook. 36(2):92-102.1988.
- 12) Raskin,RB. Hathorn,IV.:Selected List of Books and Journals for Small Dental Library. Bull Med Libr Assoc. 68(3):263-270.1980.

表1 Brandonリスト収載の図書・雑誌数変化

Year	Book	Journal
1965	358	123
67	388	140
69	398(*67)	141(*51)
71	389(*83)	135(*52)
73	410(*88)	136(*52)
75	446(*103)	137(*52)
77	472(*105)	138(*54)
79	492(*118)	138(*55)
81	539(*137)	136(*55)
83	559(*155)	135(*54)
85	583(*173)	139(*55)
87	600(*203)	139(*56)
89	607(*209)	141(*56)

()中の数字は最初に購入すべき最重要誌数

表2 Brandonリスト初版(1965年版)の図書主題別掲載誌数

主題	誌数	主題	誌数
1.Allergy	4	26.Medical Electronics	2
2.Anatomy	10	27.Medical Writing	4
3.Anesthesiology	10	28.Microbiology	8
4.Arthritis and Rheumatism	3	29.Neurology	7
5.Biochemistry	5	30.Nursing	38
6.Cardiology	9	31.Ophthalmology	5
7.Dentistry	13	32.Orthopedics	8
8.Dermatology	6	33.Otorhinolaryngology	3
9.Diagnosis	8	34.Pathology	9
10.Dictionaries, Directories, and Encyclopedias	11	35.Pediatrics	12
11.Dietetics and Nutrition	5	36.Pharmacology and Therapeutics	9
12.Endocrinology	7	37.Photography	3
13.Gastroenterology	8	38.Physical Medicine and Rehabilitation	8
14.Geriatrics	6	39.Physiology	7
15.Gynecology and Obstetrics	10	40.Preventive Medicine and Public Health	5
16.Hematology	5	41.Psychiatry	8
17.History of Medicine	6	42.Radiology and Nuclear Medicine	16
18.Hospitals	3	43.Respiratory System	10
19.Immunology	4	44.Statistics	3
20.Infectious Diseases	4	45.Surgery	14
21.Internal Medicine	4	46.Toxicology	3
22.Laboratory Methods	5	47.Tropical Medicine	4
23.Legal Medicine	6	48.Tumors	8
24.Library Administration	4	49.Urology	6
25.Licensure	2		

表3 主題変更や掲載誌数の顕著な増減がみられた主題の変遷

主題/発行年	65	67	69	71	73	75	77	79	81	83	85	87	89
1969	<hr/>												
Genetic			3	3	3	3	3	3	3	4	5	5	5
1977	<hr/>												
Dentistry	13	14	14	15	17	19	6	6	6	11	10	10	11
Library Administration	4	4	4	3	3	3							
Pediatrics	12	13	15	14	13	13	18	20	26	21	22	23	22
Tumors	8	11	10	8	7	7							
Oncology							11	12	14	14	14	17	16
1979	<hr/>												
Gynecology and Obstetrics	10	11	11	11	10	12	13	20	28	19	24	22	21
1981	<hr/>												
Family Practice									3	6	9	9	9
Emergency Medicine									5	12	14	13	12
History of Medicine	6	6	6	6	6	6	6	5					
Medical Electronics	2	2	6	4	3	4	5	5					
Nursing	38	52	53	54	65	70	66	69	49	52	64	64	55
1983	<hr/>												
Ambulatory Medicine										3	5	3	
Ethics										5	9	9	8
Patient Education										4	5	6	6
Sports Medicine										5	5	6	6
Ambulatory Medicine										3	5	3	
Cardiology	9	10	9	9	12	16	20	23	28				
Cardiovascular System										23	23	21	16
Endocrinology	7	6	6	6	6	6	6	6	9				
Endocrinology and Metabolism										10	11	12	12
Radiology and Nuclear Medicine	16	15	13	12	10	9	10	11	18				
Radiology and Imaging										19	22	25	35
Neurology	7	7	8	7	6	7	8	8	9	13	13	15	13
1985	<hr/>												
Arthritis and Rheumatism	3	3	3	3	4	5	6	6	7	5			
Rheumatology											7	8	6
1987	<hr/>												
Sexually Transmitted Diseases												6	3
Photography	3	3	4	4	4	4	4	4	4	4	3		
Hospitals	3	7	6	6	10	14	12	14	17	13	13		
Hospitals and Administration												19	15

1989

Critical Care Medicine														10
Licensure	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	
Psychiatry	8	7	10	8	9	9	9	9	9	8	7	9		15
Surgery	14	17	21	23	27	27	28	26	35	28	23	31		37
Sexually Transmitted Diseases													6	3
Acquired Immunodeficiency Syndrome AIDS														7

学術雑誌出版の量から質、質から倫理へ

山崎茂明

I. 研究情報の伝達

科学界において、研究情報は学術論文を通して広く正確に伝達されてきました。私信や電話によるインフォーマルなコミュニケーションや、会議を通しての口頭による伝達もあります。また、近年のコミュニケーション技術の発達は、コンピュータ通信による研究情報の交換も可能となりました。しかし、今日でも学術雑誌に掲載された論文を中心に、研究者間の情報伝達がなされているといえます。1960年代のビッグ・サイエンスの時代には、研究活動が盛んになるにつれ論文の生産量が問題になりました。科学界において論文の量的増大と、それへの対応が話題になっていました。そこから生み出された情報洪水の反省として、70年代後半から質 (quality) を問題にするように変化していきました。1980年代には、医療の場をはじめ、社会の様々なところで、質への関心が強調されるようになってきました。さらに、学術雑誌の論文審査制度についても少しずつですが関心が持たれるようになりました。そして、今日、医学文献情報に関して、さらに質から倫理へと問題意識が深められているように思われます。

II. 誤りを含んでいた情報へのIndex Medicusの対応

世界の医学研究者や臨床家が利用しているIndex Medicusを引くための索引語であるMeSHタームの「出版 (publishing)」の項目に、つぎのような言葉が加えられました。1984年に”Retraction of Publication (論文の撤回)”、1989年に”Retracted publication (撤回された論文)”、1990年には”Plagiarism (盗用)”、そして「倫理」の項目に”Scientific misconduct (学術的誤処理)”が新たに加えられました¹⁾。研究世界における不正行為そのものは、古くから存在しています。新聞記事でスキャンダラスに語られたり、最近では翻訳本も刊行され話題となりました。また、多くの学術雑誌ではレフェリーシステム²⁾による質の管理を行なっていますが、誤りを含んだ論文を見逃すこともあります。読者からの手紙欄で指摘されたり、正誤表として明示されたりしています。他人の業績を盗用したり、自分のデータを捏造したりする不正行為と、研究過程や論文製作の過程で誤りに気づかずに発表してしまうことは、区別して考えなければなりません。いずれにせよ誤りを含んでいた情報の存在を科学界に速やかにフィードバックすることが必要になります。世界で生み出される文献情報をオンライン検索やCD-ROMなどにより迅速に検索し読むことができるようになり、最新の知見を臨床へ速やかに取り入れたり、研究に役立てることが可能です。それだけに、誤りを含んでいた不正行為により撤回された論文は、科学界に伝達し、人々が知ることのできる経路を確立していくことが大切です。Index Medicusを製作しているアメリカ国立医学図書館は、この回路をMEDLINEファイルに形成することを意図して”Retraction (撤回)”に関する2つのMeSHタームを設

定し、印刷体の Index Medicusはもちろん、オンラインやCD-ROMによる検索でこれらの情報へアクセスすることができるようにしたわけです³⁾。

III.バンクーバーグループの勧告

このように研究世界の倫理にまで踏み込んで情報の生産や伝達を考えようという動きが出現し、生物医学分野の学術出版活動を対象に様々な発言を提起してきた人々がいました。その代表的なグループとして、1978年にカナダのバンクーバーで最初の会合を持ち、翌年の1979年に”Uniform Requirements for Manuscripts Submitted to Biomedical Journals (生物医学雑誌に投稿するさいの統一規定)”を制定した人々がいました⁴⁾。後にバンクーバー・スタイルと呼ばれたこの勧告は、当初は参考文献リストの書き方の統一を主な目的にして、抄録やキーワードの付け方、本文や謝辞のまとめかた、図表の作成など、論文投稿にあたっての注意事項を記載したものでした。これまでに1982年⁵⁾と1988年⁶⁾に2回の改訂をへており、このルールを採用する雑誌は欧米を中心に着実に増えています。アメリカ医師会誌やイギリス医師会誌をはじめ、New England Journal of MedicineやLancet、そしてAnnals of Internal Medicineなどの主要な医学雑誌もこの統一規定に参加しています。また、Index Medicusも1980年からこのスタイルを採用しています。日本語の表記とかならずしもピッタリしない点があり、国内ではまだあまり普及していませんが、関心が持たれるべきでしょう。日本では日本小児神経学会の機関誌である「脳と発達」誌や、日本神経病理学会の発行する「神経病理学」誌などがこの統一規定を採用しています。また、この統一規定の第一回改訂分の翻訳が、1985年の日本公衆衛生雑誌に掲載されています⁷⁾。

この勧告案をまとめた人々は、その後”International Committee of Medical Journal Editors (国際医学雑誌編集者委員会)”を組織し、学術雑誌出版の抱える様々な問題を討議し、いくつかの重要な勧告を発表しています。彼らは学術雑誌出版の質と倫理に焦点を当ててきたのです。1984年に、多重出版について⁸⁾、Annals of Internal Medicineの編集委員長であったHuthが、委員会の討議をもとに述べていました。同じ内容の原著を2度以上掲載することは、もちろん発表言語が異なっても許されません。しかし、例えば国内の臨床家を対象とした雑誌と、海外の専門研究誌に異なる読者層を対象として同様なデータを用いて発表することは平行出版 (parallel publication) と定義され、許されています。重複出版や印刷前に論文内容を公表することに対して、厳しい方針を1982年の改訂版で明確にするとともに、一方でどこまで許されるのかまで述べています。1985年には、著者性 (authorship) についての勧告を発表し⁹⁾、所属部局の長というだけで、実際的な寄与のない人を著者にあげることが禁じました。また、データの収集だけに関与した人にも著者性はありません。1988年には、医学雑誌論文に発表する際の統計処理のガイドラインをまとめました¹⁰⁾。そして、1989年には、誤りや不正による研究知見の撤回に関する勧告を発表する¹¹⁾までになりました。PUBLISH OR PERISHという言葉に示されるように、研究世界の環境も淀みが生まれているようです。学術情報の生産や伝達に係わる人

々が自らの力により、共有すべき情報の質を管理し、研究世界の倫理を高める努力がなされていく必要があります^{12, 13)}。1989年には、国立科学アカデミー評議会が、若手研究者や学生へ向けて「研究者であるために：On being a scientist」というレポート¹⁴⁾をまとめています。科学界において、信頼できる情報を正確に伝え、誤りは速やかに正していく流通回路を確立していかなければなりません。編集者やデータベース製作機関だけでなく、最終的には研究者自身の自覚が求められています。

参考文献

- 1) 山口直比古：科学コミュニケーションと論文のRetraction. 医学図書館, 37(2):93-99, 1990.
- 2) 山崎茂明：学術雑誌のレフェリーシステム. 科学, 59(11):746-752, 1989.
- 3) Kotzin, S., Schuyler, P. L.: NLM's practices for handling errata and retractions. Bull Med Libr Assoc, 77(4):337-342, 1989.
- 4) International Steering Committee: Uniform requirements for manuscripts submitted to biomedical journals. Ann Intern Med, 90:95-99, 1979.
- 5) International Committee of Medical Journal Editors: Uniform requirements for manuscripts submitted to biomedical journals. Ann Intern Med, 96:766-771, 1982.
- 6) International Committee of Medical Journal Editors: Uniform requirements for manuscripts submitted to biomedical journals. Ann Intern Med, 108:258-265, 1988.
- 7) 山岡和枝、大井玄（訳）：生物・医学雑誌における論文の共通投稿規定について. 日本公衆衛生雑誌, 32(6):315-321, 1985.
- 8) International Committee of Medical Journal Editors: Multiple publication. Br Med J, 288:52, 1984.
- 9) International Committee of Medical Journal Editors: Guideline on authorship. Br Med J, 291:722, 1985.
- 10) Bailar, J., Mosteller, F.: Guidelines for statistical reporting in articles for medical journals. Ann Intern Med, 108:266-273, 1988.
- 11) International Committee of Medical Journal Editors: Retraction of research findings. Ann Intern Med, 108:304, 1988.
- 12) Yankauer, A.: Editor's report; scientific misconduct and the responsibility of journal editors. Am J Public Health, 80(4):399-400, 1990.
- 13) Huth, E. J.: Irresponsible authorship and wasteful publication. Ann Intern Med, 104:257-259, 1986.
- 14) Committee on the Conduct of Science, National Academy of Sciences: On being a scientist. Proc Natl Acad Sci USA, 86:9053-9073, 1989.

旧海外領土の医育機関及びその機関誌 第一報

板橋瑞夫

I. はじめに

「日本医学図書館協会六十年略史」のうち、「60年略譜」をみると、第11回総会 1937年4月新潟 新規加盟館 京城、第14回総会 1940年5月千葉 新規加盟館 満州、第16回総会 1946年6月京府 新規加盟館 [京城・満州消失] の記録がある。「写真で見る総会のあゆみ」では、第11回医科大学附属図書館協議会 昭和12年4月 新潟医科大学附属図書館 報告事項 1. 京城帝国大学医学部図書室加盟に関する件、第13回医科大学附属図書館協議会 昭和14年5月 慶應義塾大学医学部図書館 報告事項 2. 満州医科大学図書館加盟の件 協議事項 1. 満州医科大学図書館加盟の件と記録されている。「略譜」と「あゆみ」では、満州の加盟が一年ずれているが、これは「略譜」のあやまりであろう。第16回医科大学附属図書館協議会 昭和21年6月 京都府立医科大学中央図書館 報告事項なし、従って、京城・満州消失の報告は何もない。

II. 朝鮮、台湾、満州……そして同仁会。

朝鮮は、日清戦争(1894/95)、日露戦争(1904/1905)を経過して、1910年8月22日 日韓併合条約、8月29日の日韓併合に関する宣言によって、大韓帝国から日本の領土に編入、1945年8月15日、日本から離れていった。台湾は、日清戦争の結果、日本に割譲されたが、太平洋戦争での日本の敗北によって、中国に復帰した。関東州は、日露戦争での日本の勝利によって、租借権をロシアから継承、中国への二十一カ条要求によって、この期間を99年延長したが、1950年2月、中ソ友好同盟相互援助によって、中国へ返還された。満州は、同じく日露戦争の結果、関東州の租借地と共に、南満州を勢力範囲として、日本の植民地と化した。傀儡国家満州国は、1932年3月独立、1945年8月、日本の帝国主義の敗北と共に解体した。樺太もまた日露戦争の結果、北緯50度以南を割譲されたが、1945年8月、ソ連領に編入された。南洋群島は、1919年、ベルサイユ条約によって、グアム島を除き、日本の専任統治領となったが、太平洋戦争でアメリカが占領、1947年、グアム島を含めてアメリカの信託統治領となった。

III-1. 朝鮮

1. 京城帝国大学医学部

1924年5月 京城帝国大学に法・文学部と医学部を設置する件、そして帝国大学令に依る旨、何れも勅命を以って公布された。まず修業年限2年、やがて1934年からは3年になるが、京城帝国大学予科を開校した。当時の中学卒業程度を入学資格を定めた。そして1926年、この予科卒業生を迎えて医学部が開校された。1945年廃止。

Keijo Journal of Medicine が、1930年に創刊されたが、1938年 第10巻から、誌名を変えて、Keizyo Journal of Medicine となり、第13巻 1943年で終る。このことに関して次のような告知がある。

「Henceforth, the Editorial Committee follows the new transcription system for the Japanese Language, recently adopted by the Japanese Government: this is not widely different from the old Hepburn system, but to assist those who are not yet accustomed to the new orthographic spelling, the following examples are given: cha replaced by tya, che replaced by tye, chi replaced by ti, cho replaced by tyo. Tyosen Chosen-Korea, …… jo replaced by zyo, Keizyo (Keijo-Seoul)」感無量である。なお発行者は、The Medical Faculty, the Keizyo Imperial University, Keizyo, Tyosen, Japan ということになっている。

Keijo Journal of Medicine 1(1930)-9(1938)

Keizyo Journal of Medicine 10(1939)-13(1943)

朝鮮医学会雑誌 1(1911)-95(1928):19(1929)-30(1940) 研究編 31(1941)-33(1943) 臨床編 1(1941)-3(1943)

2. 京城医学専門学校

1899年3月 官立京城医学校創立 1907年大韓医院医教育部 1909年 大韓医院医学校
1910年 朝鮮総督府医院附属医学講習所 1916年4月 朝鮮総督府は、専門教育実施のための学校規定を發布、医学講習所を4年制の京城医学専門学校として昇格させた。1922年4月朝鮮総督府の新教育令によって、日本内地の専門学校と同等の専門学校令による朝鮮総督府京城医学専門学校が設立された。1945年廃校となった。

Mitteilungen ausder Medizinischen Fachschule zu Keijo 1(1917)

Mitteilungen ausder Medizinischen Hochschule zu Keijo 2(1918)-5(1922)

Mitteilungen ausder Medizinischen Akademie zu Keijo 6(1923)-10(1927)

Acta Medicinalia in Keijo 11(1928)-12(1929)

京城医学専門学校紀要 1(1931)-13(1943/44)

3. 旭医学専門学校

朝鮮キリスト教宣教師 L.H.セブランマなどが、1899年 京城に病院を設立、医療とともに医学講習を行っていた。1909年 私立世富蘭徳病院医学校設立 1912年 私立セブランマ連合医学校 1917年 セブランマ連合医学専門学校 1943年4月 旭医学専門学校と改称、1945年廃校。

Journal of Severance Union Medical College 1(1933)-3(1937)

世富蘭徳校友会報 1(1927)-44(1939)

朝鮮医報 1(1930/31)-7(1937) 編集は朝鮮医師協会であるが、同校内で行われていた。

4. 平壤医学専門学校

1929年6月 平壤医学講習所

1933年3月 平安南道立 平壤医学専門学校

5. 大邱医学専門学校

1929年 道立大邱医学講習所

1933年 慶尚北道立 大邱医学専門学校

大邱医学専門学校雑誌 1(1939)-4(1943)

6. 京城女子医学専門学校

1938年4月8日、財団法人友石学院によって設立され、5月1日、開校。所謂内鮮共学で、やがて日本人学生が漸増したようである。「生徒は一般的に非常に真面目に勉強する。即ち几帳面で繊細で、その日その日の課業を規則正しく勉強するといったような型が多いように見受けられる」といった紹介記事も残されている。

7. 光州医学専門学校

1944年3月 開校

8. 咸興医学専門学校

1944年3月 開校

III - 2. 台湾

1. 台北帝国大学医学部附属医学専門部

1899年3月、勅令第95条により台湾総督府医学校は、台湾人子弟の教育を開始した。1918年、医学校に日本の専門学校令による医学専門部を併設、日本人の教育を始めた。1919年、台湾教育令が發布されて、台湾総督府医学専門学校と改称、1927年、台北医学専門学校と改称、1936年、台北帝国大学の設立によって、医学部附属医学専門部として、吸収された。1941年、入学志願者の激増によって、附属医学専門部から、専門学校への独立の動きがあったが、結果は果たせなかった。

2. 台北帝国大学医学部

1936年1月、帝国大学令により台北帝国大学に医学部を新設、前項の台北医学専門学校を附属医学専門部として吸収した。1941年4月、予科を設置した。1945年11月15日、中華民国に接収された。

台湾医学会雑誌 1(1902)-29(1930):30(1931)-44(1945) 中華民国に接収後も誌名及び巻数は継承して刊行されている。ただし、日本語ではない。

台大小児科雑誌 1(1940)

III - 3. 関東州

1. 旅順医学専門学校

1939年4月 関東州立旅順医学校 1943年4月 官立旅順医学専門学校 1945年8月 廃止。

Ⅲ-4. 満州

1. 満州医科大学

1911年5月、南満州鉄道株式会社が南満医学堂を設立、日本の専門学校令による認可を得て、日本人及び中国人、満州人の教育を開始した。1922年3月、勅令第162号により大学令が公布され、満州医科大学が設立され、南満医学堂は吸収された。満州医科大学は、日本人学生を収容したが、中国人は、併設された専門部に入学が許可された。1924年、中国人に限り女子の入学が許可された。1945年8月 閉学。1946年4月 中国の国立瀋陽医学校となり、同年8月中国医科大学となった。

南満医学会雑誌	1(1913)-12(1923/24)
東洋医学雑誌	1(1923)-2(1924)
満州医学雑誌	3(1925)-42(1945)
民国医学雑誌	1(1923)-10(1932)
東方医学雑誌	11(1933)-18(1940)
南満医学堂論鈔	1(1916)-5(1924)
満州医科大学論鈔	6(1926/27)
満州医科大学業績集	1(1934/35)-2(1939/41)
満州医科大学 東蒙巡廻診療報告	1(1923)-3(1925)
蒙古巡廻診療報告	4(1926)-5(1927)
巡廻診療団報告	6(1923)
満州医科大学 開拓医学研究所所報	1(1941)-2(1942)

医学原著索引 学内に「医学原著索引」編纂会があつて、刊行されたものである。この索引の内容と特色を同誌から引用すれば、

1) 本索引には満州医科大学に着せる最新刊の邦文医学雑誌全部と独英仏米墺伊その他欧文医学雑誌及び支那医学雑誌等合計約四百種の雑誌中の原著索引を収載す。1) 原著論文は解剖、生理、その他二十項に類別し、著者名をABC順序に発行年次論文標題、雑誌名、巻号頁を記載す。1) 本索引はすべて用紙の半面のみ印刷せるを以て、任意必要の文献題目を切り取り、「スクラップブック」に貼付し得るの便あり。「医学原著索引」は、1(1924)4-12、2-16(1939)1-7 で、1(1924)1-3 は、「原著索引」と言った。

2. 新京医科大学

吉林国立医院附属医学校が、1938年、新京医科大学と改称、のちに長春軍医大学となった。

3. 佳木斯医科大学

1940年設立。1945年 廃校。

4. 哈爾濱医科大学

1926年 私立濱江医学専門学校 1928年 哈爾濱医学専門学校 1940年 哈爾濱医科大学となり、1945年 廃校。

5. 盛京医科大学

1932年、奉天医科専門学校として認可。1940年、盛京医科大学と改称。1945年 廃校。

6. 開拓医学院

満州の開拓団保健指導員対策として、1940年に開講されたもので、年令40才以下の男子で、相当の学力を有し医学的経験を有するものが対象とされた。龍井開拓医学院、哈爾濱開拓医学院、齊々哈爾開拓医学院で、修業年限は2年であった。哈爾濱は、1943年から北安に移り、北安開拓医学院と改称した。全て1945年に廃止された。

III-5. 樺太

1. 樺太医学専門学校

1941年4月、樺太医学講習所が開設、3ヶ年の講習の後、2~3年の臨床研究を実施する計画であったが、1943年5月 樺太医学専門学校となった。1945年8月 樺太がソ連領となり、学生は、北海道大学医学部附属医学専門部に編入され、1949年3月 廃校。

III-6. 南洋諸島

医育機関は存在しなかったが、パラオ熱帯生物学研究所報告 1(1937)-2(1941) がある。

III-7. 同仁会その他

同仁会とは、「中華民国其他亜細亞諸国に医学・薬学及び其技術を普及せしめ、以て一般衛生状態の改善を計るにあり」という趣旨で、「この目的を達する為現に経営実行中に係る事業左の如し」として、同仁会北京医院附施療所ほか、漢口、済南などに医療施設を持っていた。

1. 青島病院附属青島医学校

1924年9月11日、青島居留民団の経営により設立。のち同仁会の経営となったが、1927年 廃校。

2. 青島医学専門学校

1939年 私立東亜医科大学が、入学者の決定をみながら、設立不認可に終わった。同年12月、東亜医科学院が設立された。1941年7月、同仁会東亜医科学院となった。そして1943年12月、第一回の卒業生を出す状況となり、同年4月27日、文部省の専門学校令による認可となった。そして、1944年7月31日、勅令第329号をもって、青島医学専門学校と改称した。1945年12月15日 閉校。

3. 上海同仁大学医学部

1944年9月 開校。 1945年8月 廃校。

4. 同仁大学医学院

1943年2月 開校。

5. 山西省立太原桐旭医学専科学校

1942年9月 開校。 1945年8月 廃校。

6. 山東省立済南医学専門学校

1943年9月 開校。 1947年9月 廃校。

7. 河南省立開封医学専科学校

1943年 開校。 1945年8月 廃校。

同仁 1(1927)-13(5)(1939)

同仁会医学雑誌 1(1928)-3(3)(1930)

同仁医学 3(4)(1930)-12(5)(1939)

同仁会医学雑誌 13(6)(1939)-19(1)(1945)

8. 厦門博愛医学校

1924年3月 台湾総督府の補助により設立、1930年 廃校。

9. ジャカルタ医科大学

1943年5月 創立。

IV. おわりに

記録を残すという率直な動機から、従事したが、情報の収集、意の如くならず、不消化のまま脱稿とせざるを得なくなった。第一報ということで爾後努力を続けたいと思う。資料として、日本耳鼻咽喉科史、日本医事新報、満州医科大学四十年史、各機関誌などを用いた。

M * * へ

—草稿—

山口 直比古

M * *、きみをおもうとぼくの胸はつぶれそうだ。

「あの頃」といっただけで、ぼくたちにはそれが「いつ」のことかすぐにわかる。「あの頃」ぼくたちは、一体何をしようとしていたのだろうか。

1969年春、ぼくたちは北国のS市にある大学へ入学した。東京大学の安田講堂でのたたかいはあったのは、その前の年の11月だったけれど、このS市の大学ではぼくたちの入学した時にも、まだそのたたかいは続けられており、むしろ本当のたたかいはこれからなのだ、という雰囲気があった。入学式の日、ぼくは白いヘルメットをかぶり、大学の構内をデモしていたグループの後ろについていた。きみは、赤いヘルメットだったね。それぞれ参加した党派はちがっていたけれど、ぼくたちは最初に会った時から—そう、ぼくたちが最初に会ったのは、入学式の日デモの後に開かれた集会の時だった。その頃はまだ全共闘は結成されてはいなかったけれど、各党派がなんとなくいっしょに総括集会を開いていたんだ。地べたに腰をおろしたぼくのとなりにきみはいた—なんとなく気があって、集会の後で二人で喫茶店で話をしたのを覚えているかい。

きみは東京からきていて、高校生の頃からマルクスを読んでいたのに、ぼくはおどろいた。ぼくはS市の高校でどちらかというのんびりとした生活を送っていた。もっとも、テレビのニュースなどでベトナム戦争や大学闘争のようすを見聞きし、自分も何かをしななければ、というあせりのような気持ちは抱いていたとおもう。一年浪人したのだけれど、その頃からぼくはベ平連の集会やデモに参加するようになった。しかし、ぼくはだんだんとベ平連の、穏健だけれど自己満足的な活動にあきたらなくなってきていた。ベトナム戦争をひきおこしている世界のしくみを変えなければ、たとえベトナム戦争が終わったとしても、真にベトナム戦争の問題を解決したことにはならないのではないか。つきつめてものを考えてゆくと、人類を自由な世界へと解放するには、どうしても世界のしくみを変えなければならない、という具合にエスカレートしてゆくのは、19才の少年にはありがたいな思考過程だったとおもう。ぼくは、大学へ入る前から<かくめい>のための党に参加することを心に決めていた。

そんなぼくに比べて、きみはもっと冷静だった。入学式の日、きみはマルクスや<かくめい>の話をぼくに聞かせてくれたけれども、どこかさびしげに話しているようにぼくにはおもえた。その後もきみと話している時に、きみは、あの時のどこかなげやりな眼をしばしばみせた。あの頃からきみは、<かくめい>に絶望していたのかもしれない。<かくめい>に絶望するとは、<かんけいが見える>ことだと、いまのぼくには理解できるけれども、このことばも、きみのことばだ。<かんけいが見える>ことの不幸を、すでにきみは背負っていたのだろうか。

入学してからしばらくのあいだは、党派の学習会やら理論合宿やらで、党の理論をたたきこまれた。きみとあう機会もそう多くはなかったとおもう。6月には全共闘が結成され、いくつかの要求を大学側につきつけるといふかたちで、バリケード封鎖による闘争が始まった。そして、ぼくたちにはバリケードの中でのせいかつが始まった。ぼくはタバコを喫うことを覚え、タテカンの字もそれらしくなってきた。ロッカーをくみあわせてつくる迷路のようなバリケードの入り口や、教室の机や椅子を針金でむすびあわせてつくる、こわれにくいバリケードも、なじみぶかいせいかつの一部となっていた。

M**、その頃ぼくたちは後退戦の話をしたのを覚えているかい。きみは、はっきりといったのだ、たたかいはつねに後退戦なのだと。ぼくは、この後退戦ということばに、きみがふたつの意味をこめていたことに後で気が付いた。始まったばかりのようにみえるバリケード闘争も、たたかいとしてはすでに後退戦に入っているのだという現状認識と、生きていることじたいが、何かあるものからの後退戦なのだというおもい。きみは、たぶんそういいたかったのだろうとおもう。そして、きみは、後退戦においてこそ、たたかひの質が重要なのだと熱っぽく話してくれた。後退戦においては、攻撃しながら退くことが必要であり、この攻撃の質を問題にしなければならない。後退戦においてこそ、攻撃の質が問われているのだ。

その頃、ぼくは全共闘のたたかひが後退戦であったなどとは、かんがえてもみなかったし、党の指示のもとに活動していたので、たたかひの質についてかんがえることもなかった。うぶでまじめな活動家だったわけだ。でも、いまははっきりとわかる。ぼくは、1969年以降、後退戦を強いられている。一体何からの。

M**、後退戦というのは、確実にそして次々と何かを失ってゆく過程だ。ちょうど敵の攻撃により、味方の兵士が一人ずつ斃れてゆくように。ぼくは、今年40才になった。妻と、そしてふたりの子供がいる。一見、平凡で平和な家庭生活を送っているとおもう。仕事にも不満はない。むしろ、もと学生運動の活動家らしいアクティブさが評価されているとおもう。しかし、心の中にある喪失感はぬぐえない。指の間から砂がサラサラとこぼれ落ちるように、次々と何かがぼくの中から失われてゆく。それが一体何なのか、ぼくにはわからなかった。とらえどころのない悲しさにおそわれることが、しばしばだった。しかし、それがだんだんとぼくの眼にみえてきたような気がする。おぼろげなものを、はっきりとことばにしてしまうことは、不分明なものを現実に変えてしまう恐ろしさをもっているのだけれど、ぼくは<少年>からの後退ではないかとおもう。<少年>ということばによって表現される様々なもの、朝の光、光を反射する水面、初々しくてあざやかで、まぶしい存在。純粹とか希望とか理想とか情熱とか、そんなことばのふさわしい存在。エーゲ海に浮かぶちいさな島の羊飼いの少年ダフニス。そうしたものからズルズルと後退してゆく。ぼくは、いつまで、この失ってゆく悲しさにたえなければならないのだろう。

ぼくたちのバリケードは、11月に機動隊によって撤去された。全共闘は解体し、多くの学生は、正常化と称して再開された授業に出ていった。しかし、その後もたたかひはつづけられた。むしろ、その頃ぼくは運動のリーダーとなっていた。党も事実上活動出来ない

状態だったので、ぼくは数少ない活動家を集めてちいさな組織を作った。ぼくは、アジテーションがうまくなった。こうしたぼくの活動に対して、きみは冷ややかな眼でみていた。アパートにひきこもることが多くなり、読書の量がいつそう増えていったのではないかとおもう。きみとはなしをすることも、しだいになくなっていった。

旧全共闘は連日のように総括のための話し合いをおこなっていた。ほとんど唯一の活動家グループであったぼくたちの組織も、その話し合いに参加していたが、もともと総括なんてできるはずもなかったのだ。たたかいがあり、とりあえず敗れた、それだけだ。〈かくめい〉の党の課題は、最後に勝利するまでたたかいつづけることだ。消耗で具体性のない旧全共闘の総括集会はいつ終わるともなくつづけられていったが、ぼくは、もうとつくに彼らを見限っていた。たたかいつづけるものだけが、いつか勝利するのだ。ああ、しかし、ぼくは、ほんとうにこのことを心の底から信じていたのだろうか。

北国の長い冬が終わろうとしていた。ぼくは、ぼく自身のたたかいを理論化できず、苦しんでいた。全共闘運動は全国的に衰退期に入っていたし、党は地下活動に重点をおき始めていた。いくつかの党の間では、路線をめぐるはげしい内ゲバがくりかえされていた。ぼく自身も、大学の構内に入れない日がつづいた。これが、ぼくたちのたたかいだったのだろうか。それまでのたたかいの中で、二度逮捕され、おおきなケガもしたけれど、自分が間違っているなどとは考えてもみなかった。自分のやってきたことはいつも正しいと信じてきたし、それを悔いる気持ちもない。しかし、心の中に生じたすきまをうめることはできなかった。ぼくは、自分自身のことばで考え、自分自身のことばで話さなければならなかった。おもえば、それまで自分自身のことばで何かを考えるということを、ぼくはしてこなかった。全て、何かで読んだことの受け売りだった。ぼくは、口を閉ざすよりほかはなかった。春には、ぼく自身の手でつくったちいさな組織も、音をたてて解体していった。もう、つなぎとめるものは、何もなかった。

1970年夏、ぼくはS市を離れようとしていた。行くあても、目的もなかった。ただ、やみくもに出発したかった。そんな時に、M**、きみの最後の手紙を受け取った。その手紙をアパートの郵便受けに見つけた時、ぼくは、直感的に、きみはもうこの世に存在していないのではないかと感じたことを、今でもはっきりと覚えている。きみは、6月頃にぼくたちの前から姿を消した。赤軍派に参加したといううわさもあったけれど、ぼくはそのうわさを信じようとはおもはなかった。きみは、もっとべつの何かとたたかうために出発したのだ。後で知っただけけれど、交通事故ということだった。高速でバイクをとばし、カーブをまがりきれずに壁に激突したのだそうだ。

ぼくはS市を離れた。あちこちの大学の寮を泊まりあるいて、二か月ほどして東京にたどりついた。あとは、ブルジョワ社会に包摂されてゆく過程だけが、ぼくに残されていた道だった。

M**、ぼくはまたきみの手紙を読みかえしているよ。

「・・・さようなら、ぼくはゆかなくてはならない。もし、この世に理想というものが

あるのなら、それを実現するために、ぼくはゆかなくてはならない。だれのためでもなく、自分自身のために。どうか、ぼくのたたかいぶりを見てほしい。きみはきみで、きみ自身のたたかいをつづけることだろう。その中で、いつかまた出会う時がくるかもしれない。さようなら、北国はすこしもぼくを感動させない、ただ寒いだけの街だ・・・」

これが、きみの後退戦における攻撃だったのか。高速でバイクをはしらせながら、きみは一体何を考えていたのだろうか。きみの理想とは一体何だったのだ。「あの頃」ぼくたちはずいぶんと話し合ったものだ。バリケードの中で、ぼくやきみのせまいアパートで、そして大学の前の小さな喫茶店で。とらえどころもなく、ぼくぜんとした人民大衆の解放のためのたたかいについて。きみは、自分自身を解放するほかはないのだ、と話していた。自分自身を解放するには、死しかないのだろうか。M**、どうかこたえてほしい。

ぼくは、あいかわらず後退戦の中にいて、孤独なたたかいを強いられている。なんとか攻撃したいとおもいながら、有効な攻撃手段を見つけれないでいる。ただのいちども武器を持つこともなく、このまま敗退してゆくほかないのだろうか。ああ、もう、たたかうことすら忘れてしまいそうだ。

S市の大学でのたたかいは、1970年におわった。何かが変わっただろうか。何も変わりはない。春にはさわやかな風が吹き、夏にも木陰は涼しい。早い秋の訪れで、冬じたくをいそぎ、雪にとざされた長い冬がやってくる。多くの友人たちは、多少のうしろめたさを感じながら、しかし、うらざりというほどには深刻ではなく、市民社会的な日常の中に戻っていった。ぼくには徒労感だけがのこされていた。S市を離れるまでの間、毎晩のように、ぼくは薄暗い路地の酒場で、さしてつよくない酒を飲んでた。ほかに、何をしようのか、ぼくにはわからなかったのだ。あのたたかいで、ぼくたちは、一体何をしようとしていたのだろうか。そんなおもいが、ぼくの頭をはなれなかった。「あの頃」一体ぼくたちは何をしようとしていたのだろうか。今でも、それはわからない。たぶん、これからもわからないままに、心のすみで考えつづけてゆくのだろう。

M**、今こうして、きみに手紙を書きながら、なんだか妙になつかしい気持ちだ。きみが、すぐそばにいるような気がする。きみがいなくなってからの20年間、ずっときみのことを考えてきたせいかもしれない。きみは、ああいうかたちでたたかいにピリオドを打ったけれども、ぼくはいまでも、「あの頃」をひきずって生きているよ。どうやら、それがぼくの生きざまのようだ。

ごきげんよう、M**、いつかまた、気持の弱った時に、きみに手紙を書くかもしれない。その時にはどうか、また、ぼくに力をかしてほしい。

ゴールは？

真下 美津子

「あなた、『トロイアの女』の台本もってる？」

あの幻の公演から17年目にして、やっと実現したROLLING STONESの日本公演の最終日。アンコールの“JUNPIN' JACK FLASH”が、ぐるぐるまわっている頭のまま約束通り劇団へ電話を入れ、稽古用のテキストの打ち合せ。

「はい、持ってます。」

「それじゃあ、その中のカサンドラの台詞で、松明をもって出てきてからのひとり台詞があるでしょう。そこのところを来週の火曜日までに憶えてらっしゃいね。一週間あるから大丈夫でしょう。」

「はい。」

いよいよ、はじまりか。

中学一年生の時、大好きだった国語の先生に連れられて、生まれてはじめて観た舞台が山本安英さんの『夕鶴』だった。青いホリゾンと夕焼けの空が印象的な、シンプルな舞台で、世の中にこんなにも美しいものがあるのかと、胸がしめつけられた。その後演劇部に入り、いわゆるアングラから、女優といわれる人のすでに評価の定まった舞台まで、いろいろな種類を観てきた。学生の頃は乏しいおこずかいの中から、お昼ご飯を抜いたり、乗り物を使わずに歩いたり、子供ながらにやりくりしていた。

しかし、その頃は舞台は好きだが『かもめ』のニーナのように「女優になれるのなら、女優になるためなら、周囲の人間に憎まれても、どんなに貧乏しても、黒パンばかりかじっても、屋根裏部屋にすんだってかまわない・・・。」という思いにまではいたらなかった。

臆病なのかあるいは強欲なのか、普通の生活もしたかった。

そこで、仕事をしながら仲間と劇団を作り公演活動が続けてきた。ところが、折からのブームに乗りミュージカル志向になったため、それが原因で団員の意見がわれ、空中分解してしまった。確かに、歌い踊り、きらきらの照明をあびながらの舞台は楽しかったが・・・しかし、私がやめた一番の理由は、自分が何も変わらず、もう伸びていけないのではないかと考えたからだった。自分の演技を批判する人がなく、いつも甘い容認してくれる目があるだけで、とても居心地がよかった。どっぷりと、その中にひたりきっていた。それこそ、そこを出ていけば、風邪どころか肺炎になってしまうかもしれない。しかし、同じ輪の中をぐるぐる回っているだけの稽古には、我慢できなくなった。幕がおりて、耳に拍手は聞こえても、心はそれを素直に受け取れなくなった。公演が終わるたびに、「ちがう、そうじゃない。」という、焦燥感と寂寥感にさいなまれるようになった。

そこをとび出した。

ひとりになってからは、友達の劇団の公演に出たり、ひとり芝居をしたりと、お芝居への炎はくすぶり続けていた。

結婚して新しい生活を始める時、「芝居は続けなさい。」という、彼の言葉にささえら

れ、生活のリズムをつかむまでは、やめるのではなく、休むのだと自分に言い聞かせてきた。人から聞かれた時も「ううん、休んでるの。」といい続け、あっという間に三年ぐらいたった頃、身体がさびついてしまう、動けなくなってしまうという恐怖感や、友達の舞台を観るたびのいらいらと、自分の中の小さな虫が騒ぎはじめた。

「そろそろ、始めたいんじゃないの。」一さすが、一緒に暮らしている人はするどい。一といっても、どこでどう始めていいのか、途方にくれてしまった。

休んでいる間にも、ずっと観続けていたお芝居。

はやりの笑いがあり軽いノリのお芝居は楽しそうだけど・・・ちがう。

あの演出家はおもしろそうだけど、そこに自分の身をおいて芝居作りがしたいかといったら・・・ちがう。

どこにも心が動かなかった。

よおし、こうなったらプロデュースするしかない。脚本を選び、相手役も決まったが、次のもう一歩が踏み出せなくなってしまった。それは今度もまた“甘い目”しかなくて、元の木阿弥になるのではないかという危惧がわいてきたから。

暗礁に乗り上げた 1988年5月のある日、下高井戸にある『旧真空鑑』の公演、別役実作『うしろの正面だあれ』に出かけた。

1966年、鈴木忠志を中心に『早稲田小劇場』が結成され、別役実、唐十朗などの実験的な作品を、かつて早稲田にあった『モンシェリー』という喫茶店の二階の小さな空間で、次々に上演していた。1975年に富山県の利賀村に本拠地を移し、現在は『SCOT』と名前を変えている。『旧真空鑑』は1978年に『早稲田小劇場』から分かれたメンバーで結成された。私は『早稲田小劇場』はもちろんの事、『旧真空鑑』にも興味を持って観てきた。代田橋での旗揚げから観ていたが、公演数が少なく久しぶりの舞台だった。

軽いノリの笑いがある舞台が大受けの昨今、自分達のスタジオを維持しながら、地味な、およそ流行らない舞台を作り続けている姿勢に感嘆してしまった。また、タイムリーに、演劇雑誌に主宰者のインタビュー記事が出ていたことも、選択の一助となった。

一ここだ。ここで、この人達と一緒に、芝居作りがしたい。多分五年、いや十年ぐらいは役がもらえないかもしれない。でもいい、ここしかない。一

「私、『旧真空鑑』に入りたいんだけど。」

「うん、あそこならいいかもしれないね。でも、きついと思うよ。それでもいいのなら決めなさい。」

彼に相談したり、何日か思いあぐね、意を決して劇団へ電話をした。

「うちは養成所じゃないので、何か教えたり、研究生をとったりはしていません。」

せっかく見つけたお菓子屋さんのシャッターが、目の前でがらりとしめられてしまったような、何ともいいようのない気持ちだった。

しかし、その夜、ラッキーな電話のベル。

「劇団で話合いましたが、一応、履歴書とうちの劇団を選んだ理由を書いて出して下さい。」

書類を出し、はやる気持ちをおさえながら面接にでかけた日。

「一緒にやっていってもらう事にしますが、ここであうのか、自分でもう一度見極めるために、稽古を見て下さい。それから決めて下さい。」

そして、二つの公演の稽古を見せてもらい、受付を手伝い、やはり自分の選択は間違っていなかったと確信した。

『旧真空鑑』は稽古をして、それがおもしろい仕上がりになりそうだという時点で、公演の日程を決め、チラシを刷るといふ、気長でゼイタクな作業をしていた。公演の脚本すら決っていない状態で、一ひどい時には、二年先ぐらいのスケジュールで一劇場を予約する現実がある、今の演劇シーンにおいて。

劇団と私とのお互いの様子見の期間が、一年半ほどすぎた1989年10月。お互いに合意に達し、スタジオの鍵を渡された。

そして、『トロイアの女』のカサンドラ。

1975年1月に岩波ホール・演劇シリーズ第一回公演として、鈴木忠志の演出で『旧真空鑑』のメンバーも『早稲田小劇場』在籍中に出演した作品。

私は、稽古を見せてもらえるだけで満足だったが、ふっつわいたようなひとり稽古のはじまり。

稽古は毎週水曜日と金曜日の7時から。その前に6時頃スタジオへ行き、身体をほぐし声をだして準備しておく。

「若い頃は、何があっても、何をいわれても気力ではねかえせるけど、あなたの歳で芝居を始めるのは、気力だけじゃどうにもならない事があるから、よっぼど覚悟しないとだめよ。」

稽古を見てくれるTさんのそんな言葉からはじまった、3月7日の稽古初日。

柔和なTさんの顔が、だんだん夜叉のお面に変わって行って、何度も何度もやりなおし。10時までの稽古で、喉はつぶれる、体はくたくた、心はずたずた。

「今までそうやってきて、何もいわれなかったの。」

「ふりなんかしても、ちっともおもしろくないでしょう。」

私の気持ちを動かそうと、罵声を浴びせ仕掛けてくるTさん。要求されている事は頭では充分すぎるくらいわかっているのに、心がつかめないで体が動かない。その情けなさど悔しさで胸ははりさけんばかりで、消え入りそうになる。

「泣きたくなったら泣きなさい。そうよ、その気持ちを利用してこの台詞言ってごらんなさい。そう、それでいいのよ。」

Tさんは、それこそ情け容赦なく罵倒し怒るけれども、ほんの少しでもいいところがあると、必ず拾いあげて褒めてくれる。

最初の頃、稽古の日は不快な疲労感だけで、毎日暗い顔で帰り、やめたいと弱音をはいた事もある。しかし、つらくなる事はわかっているけど選んだのは自分だし、ここから元の場所へは戻りたくなかった。

一よし、むこうがさじをなげるか、こっちが音をあげるかの勝負だ。一

また、根が楽天的なのか、一『ガラスの仮面』の北島マヤと月影先生みたいーと思えるようになってきた。稽古をくりかえすうちに、体の中が動いてきて感情がほとばしり、快い疲労感が得られるようになったきた。

5月の連休明け、1月から旅公演のため、一度も稽古をみてもらってなかった、男優のTさんが帰ってきた。その日は三人が見ている前で、緊張しながらの稽古。

「どうしたの連休ボケ。」

「前回の稽古でせっかくいところまでいったのに、その下からはじめてどうするの。せめて前の段階と同じか、それより上のところからはじめないとだめでしょう。時間の無駄でしょう。」

返す言葉はなかった。

次の稽古の日、お昼に鰻、夕飯は小倉白玉とメロンジュース、よし、これで完璧と気合いを入れて稽古場へむかった。

カサンドラが、クリテムネストラの奸計にかかり、アガメムノンとともに殺される場面を予知し、たおれこむシーンで終わる。床にたおれた私の耳に、ボンとうたれた手の音と一緒に、三人の息をほどく音が聞こえた。

「いいじゃないの。卒業よ。よく頑張ったわね。ほとんど経験のないあなたが、ここまでこれたのはたいしたものよ。自信をもちなさい。」

その言葉を、嬉しいとか、やっと終わったとか、何の感慨もなくぼんやり聞いていた。家へ帰ってからが大騒ぎ。眠れなくて元気にしゃべり続けていた。

毎年3月と11月に、新宿から青梅までの43キロを歩く、かち歩き大会がある。朝の8時30分に出発して、だいたい7時間半から8時間かかるのだが、その間飲まず食わずで歩き続ける。ふと目にした新聞記事で、自分を試そうと初めて参加したのが、1987年 3月だった。

ピンクのトレーナー、ピンクのパンツ、ピンクのソックス、ピンクのシューズ、ピンクの手袋と、まさにピンクおばけのいでたちで、赤いリュックを背に出発した。

最初は人に抜きさられるのがいやで、我慢ができなかったが、そのうち気にならなくなった。背中のリュックは、だんだん重くなったきた。飢えや渴きは、それほど苦にならなかった。

沿道にある黄色いのぼりに、“38キロ地点”と赤くそめぬかれた文字を見た途端、なぜだか、疲れがいきなり襲ってきた。階段を一段踏み外したように、がくんと、音をたてるものがあつた。

一あと5キロ・・・ああ、どうして歩きはじめたんだろう。なんで、こんな事はじめたんだろう。一

後悔の念と、背中のリュックをほおり出して、どさっと寝そべってしまいたい欲求とがうずまいた。

まわりを見ると幾人かが、沿道に長々と体を横たえていた。

一ああ、気持ちよさそう。一

でも、私はまだ歩いていた。

一あと5キロじゃない。38キロより少ないんだよ。もう少しじゃない。一

歩くというよりも、機械的に左右の足を前へ前へと、出しているにすぎなかった。目をとじると、そこへ倒れ込む自分の姿があつた。

左足の裏に、しみるような痛みが出てきた。

一靴をぬいで、風を送ると、どんなに気持ちいいだろうな。一

しかし、腰をおろすことに、強いためらいがあつた。もう二度と、立ち上がれなくなるかもしれないと思うと、休めなかった。

だが、もうどうにも痛みをたえきれず、近くの植え込みに腰をおろし靴を脱いだら、血

がにじんでいた。バンドエイドで応急処置をし、“よっこいしょ”と地面を押しながら立ち上がり、深呼吸をして、また歩きはじめた。

休む前よりも足の痛みはひどく、体をひきずりながら、一体、何の力で歩いているのかわからなかった。

ゴールをめざすというよりも、ただ体を運んでいた。

ゴールの太鼓の音が聞こえた。“がんばって”という沿道の人の声が聞こえた。嬉しいでもなく、もちろん悲しいでもなく、涙があふれてしかたなかった。ゴールで渡された牛乳とアンパンは、この世のなかに、こんなにおいしいものがあったのかと、たてようもなくおいしかった。あふれるしょっぱさと、あんの甘さがミックスされ、不思議な忘れられない味になった。

7月から、新しいテキスト『舞え舞えかたつむり』を始めた。

もう四ヶ月が過ぎようというのに、いまひとつ、これというものがつかめなくて、うろろう。

「台詞で説明しようとするから、嘘になるんだよ。気持ちがついていってないと、どうしようもないよ。」

「ちまちままとまりすぎて、ちっとも面白くない。」

「うまくならなくていいから、その感性をだいじに、ふくらませていきなさい。」

すっかり、途方にくれてしまった。

—38キロかもしれない。—

あと残りの5キロが、今まで歩いてきた38キロよりも、想像がつかないくらい長く、つらいものに思える。逃げだしたくなる。—どうして、こんな事しているんだろう。—という、疑問符ばかり。

かち歩きは、43キロ歩けば終わりになる。ゴールにたどりつける。

しかし、私の稽古はゴールについたとおもったら、それは、とんでもない思い違いで、実はふりだしに戻っていたりする。ひとつの地点によやく着いてほっとしても、そこはゴールにはならない。

—ううん、そんなはずはない。トロイアだって、何もできなかったところから、あそこまでいったんじゃない。できるよ。—

ワープロ・パソコン通信で情報人

多胡 英樹

ブック型パソコンからスーパー・コンピュータにいたる多様なコンピュータの数が増え、お互いに接続してデータ通信を行うコンピュータ・ネットワークの重要性が高くなっている。以前は紙の形でやりとりされていた情報をオンラインで伝送したり、分散処理の利点を生かして遠距離にあるコンピュータを手元のパソコンから情報をコンピュータ経由でやりとりする電子メールがある。

こうした要求にこたえるように、1985年4月に電気通信事業法が改正され、データ通信が大幅に自由化された。電話回線をネットワーク回線として使うのが容易になり、ワープロ・パソコン通信も、この恩恵をうけてコンピュータ・ネットワーク・ユーザーの裾野が一挙に広がった。

さらに87年9月には、日米間のデータ伝送の自由化が認められ、国際通信サービスがあいついで誕生している。このため世界の多様なワープロ・パソコン通信やデータベースにアクセスが、簡単にできるようになった。

歴史的にみると広域にまたがる大型コンピュータのネットワークとしてまず発達したコンピュータのハードウェア、ソフトウェア、データベースなどの資料の多くはユーザーが共有利用する資源共用重視型のネットワークである。そこでは高い信頼性が要求されるため専用線かパケット交換回線が用いられる。

ワープロ・パソコン通信のネットワークは、資源共有型ではなく、情報交換型であり、ユーザー参加型に特徴がある。こうしたネットワークの利用法があることを教えてくれたのが、アメリカのパソコン通信のDELPHI（アスキーネットに接続可能）、GENIE（PC-VAN）、コンピュサーブ（NIFTY）などで、約10年の歴史がある。こうしたアメリカの先進的なネットワークに自宅のワープロ・パソコンから簡単にアクセスできるようになったのは、ネットワーク技術の進歩のおかげである。

日本の本格的なワープロ・パソコン通信サービスが開始されたのが85年のアスキーネット、87年までにNIFTY、PC-VAN等を含めた大手ネットワーク・サービスが出そろった。これと平行して、1～数回線の小規模のローカルBBC、専門ネットなどが着実にその数を増やして、数千となっている。

ワープロ・パソコン通信の構成要素はハードウェア（端末やホスト、モデム、回線など）、ソフトウェア（通信ソフト、ホストのシステム）、ユーズウェア（サービス、利用技術）の3つからなる。端末となるワープロ・パソコン、電話回線に接続するモデム、それに通信ソフトを準備して、ワープロ・パソコン通信を運用している会社に申請してパスワードをとればあとはホスト・コンピュータにアクセスするだけですむ。

スタート直後は、コミュニケーション・サービスが主体で、会員同志が連絡を取り合う「電子メール」、不特性多数のメンバーが自由にメッセージを書き込むことができる「電子掲示板」、一つのテーマについてさまざまな意見を出し合いオンラインで会議を運営している「電子会議」、お互いにネットワークに接続したままの状態リアルタイムのおしゃべりを楽しむ「チャット」などであった。

だが現在は実に多様なサービスが行われている。新しい本やOA製品、さらに地方商品を端末から注文できる「オンライン・ショッピング」や個人投資家向けに株価照会、株式の売買注文のほか、中期国債ファンドの残高照会、解約などのサービスを提供する「ホームトレード・サービス」がある。

フタを開けてみなければ、何が入っているのかわからないというワープロ・パソコン通信ではあるが、その中に「ゲートウェイ」に代表されるデータベース・サービスがある。ゲートウェイは、もともと二つのネットワーク網を結ぶ場所に必要となる制御装置の事である。情報の出入口の意味から、こうした機能を有する装置を総称するようになった。データベースで使うときは、あるホスト・コンピュータを経由して他のディストリビュータのホスト・コンピュータにつなぎ、データベースを検索する機能である。表1のように多様なワープロ・パソコン通信のネットワークがゲートウェイ・サービスをおこなっている。

これらを利用するためにわざわざ個別のパスワードを取得する必要はなく、パスワード一つで全部を利用することが出来る。しかも、使用料金の支払いも楽である。しかし、本来のデータベースサービスと比べると、使えないコマンドがあつたり、サーチ・エイドが万全でなかったりすることがある。また、アフターケアが万全とはいいいにくく、マニュアルはメニューの中の一つであつて、それぞれがメインでないことが多いので、そこまでのケアがなかなか充実しにくいのはしかたがない。データベースは操作が難しいものが多いだけに、ユーザーが安心して使える体制を望みたい。また、ゲートウェイでデータベースに接続する際、時間がかかりすぎる。これは、ホスト・コンピュータのシステム的な問題になるが、いつでもスムーズにアクセスできるように希望する。

このほかにも、ニュース速報や株価・金融情報、天気予報、コンピュータ・チケット・サービス等があげられる。これらはディストリビュータのデータを一定の更新頻度でパソコン通信のホスト・コンピュータへ送りユーザーに提供するものである。FAX送信、ボケベル呼び出し、英語の機械翻訳サービスなど多様な新しいサービスが生まれている。

ワープロ・パソコン通信は時間と空間を越え、多くの見知らなかったことを教えてもらつたり、逆に自分から情報を発信することができる。いわゆる双方向の新しい通信手段として利用者が急増している。日本は縦割社会の性格が強いが、ここでは身分や職業を越えたネットワークづくりができるので、横方向のもう一つの社会構造をつくる交流方法として注目される。「ネットワークは人なり」と考えて、コンピュータはただの道具にすぎず、そのコンピュータを使っているのは人間である。

コンピュータ化によつてもたらされた新しい仕事のひとつにサーチャと称される職業がある。データベースから情報を検索することが仕事であり、国内・海外にある多様なデータベースにアクセスしながら、目的に沿った情報を捜し出す。今日のデータベースは、誰もが求める情報を掘当てるシステムになっていない。このため専門職としてのサーチャが活躍できる。豊富な情報の世界に入り込み、素早く確実にそのありかを発見できるサーチャ感覚が、これからの時代を生きるモノが身につけなければならない。

サービスのバリエーションが増え、その利用環境まで枠を広げたサービスの質的な向上が期待されている。それは「アクセスのしやすさ」のひとつでいえる。回線数の増強、許容情報の拡大、営業時間の延長、アクセスポイントの増設、伝送速度の高速化、そのほかに電話料金の高さの問題などがある。また、ローカルタイムでは接続できるが、ゴール

デジタイムは接続が難しく、簡単には接続できない。

もう一つには、操作環境（ホストのコマンド体系と通信ソフトのユーザー・インターフェイス）の問題がある。オートログインやダウンロード、さらにこうした自動化によるオンラインの作業を最低限に抑え、通信費の削減をする。通信ソフトで、ホストのコマンド体系を吸収して、すべてのネットワークを同一の操作体系で使用できるようにするのも可能であると思われる。

ワープロ・パソコン通信は、会員を集める時期を終わり、どのような「情報環境」に育てていくべきかの時期にきている。ワープロ・パソコン通信がめざす情報環境は利用者のニーズや興味によって、サービスや技術開発される仕組みを可能にすべきである。

ネットワークというメディアは、まだまだ新しく、そして可能性に満ちている。その可能性を自分のものにしていくのは自分自身である。決して人に言われて、人に教えられて自分の物にして行くわけではない。どうゆうわけか、なんでもすぐに人に聞けばすむ、と思っている人達が多くなってきている。ネットワークの世界でも、このおかしな事が多くみられる。ネットワークを生かした新しい世界にチャレンジして、自分にあったライフワークを見つけていかなければならない。

電話は「1対1」のコミュニケーション手段で在るのに対して、ネットワークは「複数対複数」の通信手段である。ひとつのネットに書かれたメッセージは仲間達の手によって他のネットワークにどんどん転送されてひろがっていく。電話をかけて伝えていくよりもはるかに早く、より多くの人達に情報が伝わっていく。

もうひとつの要素はネットワークが「時間差を埋める」メディアである。電話をかけても相手がある場にいなければどうすることもできないし、ほかにもでられないケースが、いろいろある。ネットのメッセージは自分ができるときに読みに行くことができるので、昼夜が逆になっているような場所でも有効なコミュニケーションである。

ところで「情報とは何か」ということをもう一度考えてみたい。「情報」とは「事実」であるという認識を持っているが、現代社会のように「情報」という言語が氾濫してしまうと、どれが本物（というか、自分に必要な）情報で、そうでないのかを見分けることが難しくなっている。

オンライン・ネットワークは「パーソナル」な世界である。大きな通信社からのニュースも、一個人からが発する言語も、その価値は全く対等である。自分が何を知らうとし、何を欲しがっているのかをまず明確にすれば、ほしい情報は手にはいるのがこの世界である。逆に「何かないか」では何も手に入らないのも、ネットワークである。

ワープロ・パソコン通信は独特な「情報メディア」として存在を確立しつつあり、そのメディアの持つパワーを生かすも殺すも「使用するモノ」しだいである。使いこなせば強力な見方となり、自分の役にたつメディアは今までになかった。一人でも多くが、ネットを自分のパワーとして利用できるようになってほしい。

表1 主なパソコン通信で利用できるデータベース、ニュースサービス

ネットワーク名 運用会社	利用できるデータベース ・ニュースサービス	内 容
EYE-NET ㈱フジミック	産経ニュース 産経・新製品ニュース	産経新聞提供のニュース 様々なジャンルにわたる新製品ニュース
アスキーネットACS ㈱アスキー	時事通信ニュース DATAMAN INSIDER	時事通信提供の各種ニュース 週刊誌、旬刊誌、月刊誌29誌の記事提供 政治経済関連のニュースレター
MDB テレネット ダイヤモンド社・MDB サービスセンター	DIAMOND ASSIST 朝日新聞記事データベース 読売新聞記事データベース 日経新聞記事データベース DELPHI	人物、新製品、経営、マスコミ、図書情報 朝日新聞の記事検索 読売新聞の記事検索 日経、日経産業など4紙と日経BP社発行の雑誌検索 アメリカのネットワーク、DIALOGの検索もできる
THE SPACE CLUB スペースコミュニケーションズ㈱	日経ニューステレコン 読売新聞ニュース 毎日新聞ニュース CompuServe Dow Jones NEWSNET	新聞速報、信用情報、会社・人事情報など幅広くカバー 読売新聞提供のニュース 毎日新聞提供のニュース 比較的個人向けの米パソコン・ネットワーク 株価情報、ウォールストリートジャーナルなど 世界の経済情報や金融・科学・レジャーなど
Tele Star ㈱テレスター	JIJI MAINICHI COMPUTER	時事通信提供の各種ニュース 毎日新聞提供のニュース コンピュータ・パソコン関連ニュース
NIFTY-Serve エヌ・アイ・ニフ㈱	朝日新聞記事情報 読売新聞記事情報 毎日新聞記事情報 日本経済新聞記事情報 共同通信運動データベース 朝日新聞ニュース速報 毎日新聞オンラインニュース Mainichi Daily News 企業情報(COSMOS2) NICHIGAI ASSIST INFOCUE	朝日新聞の記事検索 読売新聞の記事検索 毎日新聞の記事検索 日経、日経産業など4紙と日経BP社発行の雑誌検索 共同通信、静岡新聞、熊本日日新聞の記事検索 朝日新聞提供のリアルタイム・ニュース 毎日新聞提供のニュース Mainichi Daily News (英字紙)の記事検索 帝国データバンクの企業概要 人物、新製品、経営、マスコミ、図書情報 約800種類のデータベースが利用可能(EasyNet)
PC-VAN 日本電気㈱	朝日ニュース 時事通信ニュース 毎日オンラインニュース プレスリリース	朝日新聞提供のニュース 時事通信提供のニュース 毎日新聞提供のニュース 新製品ニュースなど
マスターネット マスターネット㈱	ニュース朝日新聞 ニュース時事通信	朝日新聞提供のニュース 時事通信提供のニュース

金融証券・天気予報・娯楽関連ニュースは省略

ヤンソンの誘惑

神場 清治

I はじめに

最近、丸元淑生をという人の本を何冊か読んで、感じるどころがあったので今回は、その内容の紹介をしながら感想を書くことにしました。

「死をゼロとし、発病点を1とし、健康のレベルが1から100までであるとしよう。われわれは医学をゼロから100までの科学と信じているのだが、実態はゼロから1までの特殊技術なのである。健康のレベルが次第に低下して1にまで落ちこみ、そこではじめて医師のところによって来た患者を、いかに延命させるかの技術なのだ。現代の医学は、そのコンマ以下の領域を無限に追求している」

健康という身近な問題を案外私達は、真剣に考えていないような気がします。知人に、「健康に留意して長生きしたいのか？」と聞かれましたが、長生きしたいというよりも、「死ぬまで健康でいたい。」というのが私の希望です。

丸元氏のいわんとしていることは、健康を維持、あるいは向上させるためにはライフスタイルを考えなければならない。特に食事に注意する必要がある。食事は、野菜、魚介類を中心に、色々なものを食べた方が良く、しかもビタミンや、ミネラルの損失を防ぐために、生で食べられるものはなるべく火を通さずに、火を通さなければならないものは必要最小限の加熱にする。それではどのように料理したらよいか。そこで料理法の紹介をしています。

II 健康を維持向上するための6つの要素

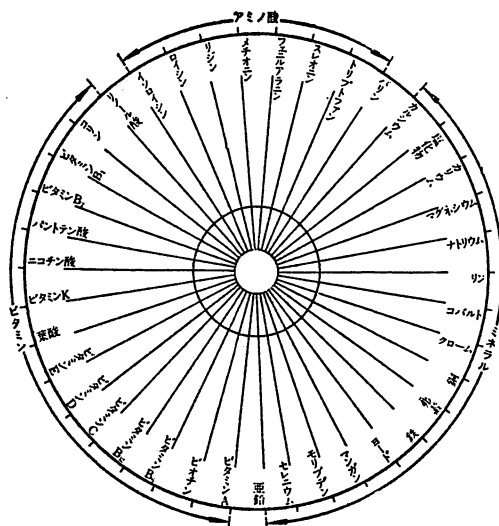
²⁾ 「多数の研究から健康問題の研究家たちは、健康を左右する最大のファクターとは、ライフ・スタイルであると結論している。米国衛生局が発表した、健康に関してライフ・スタイルを決定するファクターは、①食生活 ②運動とフィットネス ③ストレス対応 ④安全 ⑤喫煙 ⑥アルコールと薬の6つであり、それぞれ独立しているので、①のマイナスを②で補うことは、できないとしている。」要するに、酒は適度に飲み、タバコは吸わず、くよくよしないで、適度に運動して、バランスのとれた食事をすればいいわけです。②～⑥は、理解できます。①も要するにバランスのとれた食事をすればいいわけです。が、ここで果してバランスのとれた食事とは、いったい何か?ということになります。

III 命の鎖

³⁾ 「現代の栄養学が明らかにしているのは、われわれが成長し健康を維持していくためには、ほぼ40の栄養素(その数は、研究がすすむにつれて増えていくかもしれない)が必要で、体内で合成できないために、食事で毎日とらなくてはならないということである。

それは必須アミノ酸と必須ミネラルとビタミンで、そのどれか1つが不足しても、全体の働きに支障を生じる。つまり約40の栄養素の重要性に順位はなく、1つのチームワークをなしている。鎖が1つ切れても用をなさなくなる首飾りのようなもので、ウィリアムスはそれを生命の鎖と呼んだ。」つまりバランスのとれた食事とは、約40の栄養素をきちんととるとのことなのです。40の栄養素として、8種類のアミノ酸、16種類のミネラル、15種類のビタミン⁸があげられています。(右図参照)

「バランスのいい食事とは、一口でいえば、高複合炭水化物・低タンパク・低脂肪食である。」



IV ステンレス多重構造鍋

4) 「脂肪には、大きく分けると、飽和脂肪、単不飽和脂肪、多不飽和脂肪の3つの種類がある。現代人を病気にさせている原因の1つは、この飽和脂肪のとりすぎだといわれている。」 「砂糖、精製された澱粉、アルコール、動物性脂肪等は、カロリーだけはあつて必須栄養素はまったくふくまれていないために、“空のカロリー”食品といわれている。運動量や体重でわれわれの摂取すべきカロリーの適量はきまっているから、こういう食品でカロリーの何割かをとった場合には、残りのカロリーの枠のなかで必須栄養素のすべてを摂取しなくてはならなくなるが、それは難しい。つまり、生命の鎖が細くなってくるわけだ。それが砂糖に害があるといわれる第1の理由である。」

脂肪、砂糖、それから塩の取りすぎは、良くない。というわけで、食品はできるだけ生の状態で、そのつぎに最小限の加熱にとどめたものが、良いということになる。例えば魚を例にとると、刺身ならば少しの醤油で、焼魚は塩で、煮物の場合は、塩とさらに砂糖も加えなければならなくなるわけです。焼けば焼くほど、煮れば煮るほど塩や砂糖の量を増やさなければ食べられなくなるわけです。

「続新家庭料理」という本は、4年前に見たことがあったのですが、どうも中身がステンレス多重構造鍋の宣伝のような感じがありました。実際デパートのビタクラフトの売り場に行くとこの本がとなりに置いてあります。その後「いま、家庭料理をとりもどすには」や「悪い食事とよい食事」を読むことによってこの鍋の便利さが分かるようになりました。この鍋の宣伝文句を借りれば、「抜群の熱伝導・保温力を発揮する。火にかけると、底の熱が即座に側面に伝わり、鍋全体で料理の素材をムラなくやさしく加熱する、そしてその熱をしっかりと保つのです。水なしで、野菜が茹でられ、油を1滴も使わずに、ステーキが焼き上がります。」ということだそうです。はやい話が、少量の加熱で調理できるということのようです。丸元氏によれば、理想の鍋なのだそうです。

V クッキングコーナー

そこでステンレス多重構造鍋を使った料理の紹介を1つ

6)

魚介類のシチューナザレ風

材料 4人分

タラの切身2〜4切れ、ヤリイカ4杯、タマネギ1〜2個、トマト3〜4個、ピーマン3個、ニンニク1片、月桂樹の葉1枚、サフラン5〜10本、酒（あれば白ワイン）1/2カップ

調味量 塩

①ヤリイカの胴から殻を抜き、肝臓以外の内臓を除き、そのままばらばら塩をふる。②タラは皮と骨をとり、食べやすい大きさに切って、さっと湯にくぐらせておく。③トマトは湯むきして粗く切る。④タマネギは薄くスライス⑤ピーマンはへたと種をとり、たてに細く切る。⑥ニンニクは細かく刻む。⑦ニンニクをオリーブ油で炒める。⑧ニンニクに焦げ色がつきかけたらタマネギを加える。⑨タマネギがしんなりしてかさが減ったら、ピーマンを加える。⑩数分間炒めてピーマンがしななっとなったところでトマトを入れてふたをし、火を弱める。⑪トマトが煮くずれたら、月桂樹の葉、サフラン、酒を入れ、かき混ぜながら5分間煮て塩と黒コショウで調味する。⑫魚の身をくずさないよう野菜の上にそつとのせ、イカものせ、ふたをして弱火で10〜15分間煮て出来上り。

次にオーブンを使った料理を1つ

7)

ヤンソンの誘惑

材料 4〜6人分

じゃがいも1キロ、タマネギ2個、アンチョビ1缶、生クリーム150〜200cc

調味料 塩、黒コショウ

①ジャガイモの皮をむいて5ミリ角の棒状に切る。②タマネギは薄くスライス。③タマネギを炒め、しんなりしてかさが減ったらジャガイモを加えて、ばらばら塩をふる。④ジャガイモの表面に火が通る程度に炒め、塩と黒コショウで調味して火をとめる。⑤プラにオリーブ油をしき、タマネギ、ジャガイモの半分の量を敷きつめる。⑥その上にアンチョビを並べる。⑦その上に残りのタマネギ、ジャガイモのをせ、（タマネギとジャガイモは一緒に炒めているので両者は混じり合っているわけだが、1番上の層はジャガイモだけを並べるようにする）クリームをかける。クリームは材料が8分目までかくれるくらいの量にしておく。⑧オーブンに入れ、220度Cで約1時間加熱する。⑨プラに出たジュースの味をみて、塩と黒コショウで調整する。

この料理の名前の由来は、菜食主義者で厳格なクリスチャンのヤンソンさんも、誘惑に負けてがまんできずに食べてしまったからとか。

VI おわりに

以前、健康医学雑誌の調査をした時「壮快」にみられた「何々をするだけで驚くほど健康になれる」といった表現がありそれを私たちは、「あまり科学的でない」と考えたけれどもその記事の中にもたぶん健康に役立つ情報が含まれているのでしょう。なぜなら丸本氏の本の内容と重複する部分があるような気がするからです。しかし、根本的な違いは、丸本氏は、健康を維持向上するためには「何々だけ」ではなくそれ相応の努力をしなければならないとしている点でしょう。丸元氏の本の紹介といっても、栄養学の知識がないのでうまくできなかつたように思います。ただ、“健康→ライフスタイル→料理”という図式が説明できていればよいのですが、...

最後に、アメリカの、アンドルー・ワイルという博士は、こんなことをいっています。「なにを食べるべきか、唯一の正しい方法は、ない。ある時期のあなたには正しい食事というものはあるだろうが、同じものがわたしにも正しいかどうか、1年後のあなたにも正しいかどうかはわからない。」ただ、各人がもつと食事に留意して、どうせなら美味しいものを食べて健康の維持向上をはかる、こんな素敵なことはないと思います。もつとも、誘惑に負けて食べ過ぎるのは禁物ですが。

引用文献

- 1,3,5) 丸元淑生：いま、家庭料理をとりもどすには，東京，中央公論社，1985.
- 2) 丸元淑生：丸元淑生のスーパーヘルス，東京，新潮社，1988.
- 4) 丸元淑生：悪い食事とよい食事，東京，新潮社，1989.
- 6,7) 丸元淑生：男と女の基本料理100，東京，読売新聞社，1990.
- 8) Weil, Andrew (上野圭一訳)：ナチュラルメディスン，東京，春秋社，1990.

参考文献

- 丸元淑生：新家庭料理。暮しの設計，170号，東京，中央公論社，1986。
丸元淑生：続新家庭料理。暮しの設計，192号，東京，中央公論社，1989。
丸元淑生：システム自炊法，東京，中央公論社，1987。

アントワープでの国際医学史学会に参加して

山崎 茂明

1990年 8月31日、曇天のブリュセル空港へ到着しました。成田を昼に出発しましたが、時差があるため同日の夜 8時半にはベルギーの首都に降り立つことができました。空港で宿の手配をしてもらい、北駅前にあるウイークエンド・プライス1900BFR のホテルに泊まることにしました。電車で行くことも勧められましたが、疲れていたのでタクシーを利用しました。

ベルギーのアントワープで開催される第32回国際医学史学会へ参加し、発表しようと考えたのは、1年前の夏のフィラデルフィアでの短期留学を終え、調査結果を論文にまとめることができた頃でした。論文の投稿とともに、自分の調査内容にふさわしい会議で発表することにより、専門家による科学的な批判を得たいと思っていました。医学教育史を実証的に行なっている人々は、それほど多くいるわけではありませんが、医学分野だけでなく科学史や社会学などの方面から、興味ある成果が蓄積されていました。また、情報や知識の普及過程に着目して、科学のコミュニケーションや大学・学術機関の形成、そして医学教育システムの発展などを調査している人々もいます。今回の発表は、南北戦争以前に設立されたアメリカ医学校の創立時の教授の履歴を調査することで、アメリカの医学教育形成史を実証的に検討することを目指したもので、アメリカと諸外国との影響関係を中心とした内容であり、小規模でも国際会議のほうが良いと考えました。どのような会議なのか、情報がとぼしかったのですが、ベルギーへまず手紙を書いてみることから始めました。

会議の1日目のプレナリー・セッションはアントワープ市立劇場で行なわれました。会議参加者は約300名で、発表演題数は200ぐらいでした。日本からの参加者は4名で、2つの演題が出されていました。私の発表は、プレナリー・セッションに続く、午後のA会場の終わりから2番目でした。会議の初日であり、聴衆も多く緊張しました。セッション終了後に、3名の研究者から質問や助言をもらいました。ドイツとの影響関係が調査データに反映されているかを確認する質問、オハイオ州のシンシナティー大学医学校を創設したダニエル・ドレイクに見られるように、19世紀の前半にはアメリカ各地を多くの医学教育者が移動した事実を助言してくれた人もありました。そして、話合いが終わろうとした頃、「なぜ日本人のあなたが、アメリカの南北戦争前の教授の調査をやろうとしたのか」という質問がありました。私は2年前にスコットランドを訪問したさい、エディンバラ王立内科医カレッジ図書館でペンシルベニア大学医学校を設立したジョン・モーガンの肖像画をみてから、アメリカの医学教育システムの形成に果たしたエディンバラ医学の影響関係に興味を覚えた発端や、昨年アメリカに滞在しフィラデルフィア内科医カレッジ図書館の豊富な資料を利用し、ジェファーソン医科大学のウエグナー博士や、仲間の多くの医学図書館員の援助を受けてこの発表ができたことを伝えました。そして、今はとても満ち足りた気持ちであることをつけ加えました。彼らはうなずいてくれ、私たちは握手を交わすすっかり暗くなった会場を去りました。最後の質問者への説明を終えた時、こうしてアントワープまで来て良かったという想いが湧いてきました。



参加者リストからは、英語を第二外国語とする国々からの参加者が多く、様々なお国訛りの入った英語を聴くことができました。また、会議のもうひとつの公用語であるフランス語で発表が行なわれると、同時通訳のレシーバーに耳を傾ける人も目立ちました。演題は、「19世紀研究I-IV」、「20世紀研究」、「医学と宗教I-II」、「精神医学I-II」、「医学と美術」、「医学書I-II」、「アラビア医学」など多岐に渡っていました。演者のなかには様々な理由からでしょうが、発表時間に間に合わなかった人もいました。さらに、口演原稿の入った鞆を盗まれてしまい、メモだけで発表を行なった人や、自分の発表をテープで流していた発表者もいました。質疑応答は、時として熱気をはらむものになることもあり、スリリングでした。

これらの多彩な発表の場において感じたのは、18世紀や19世紀の出来事やその当時問題になっていた事柄は、現在でも共通するものであり、少なくともこの二・三百年は同時代なのだという感慨を得ました。私たちは、1日や1ヶ月のスピード争いに明け暮れたり、最新の情報を得ることにあくせくしたりしながら、現在の仕事に生きています。しかし、少々視点を変えてみるだけで、冷静さを取り戻すことができるようです。歴史という言葉を、現在とは異なった世界に封じ込めることは誤りだと思いました。また、コミュニケーション手段や電子的な通信技術が発達した現在でも、学術コミュニケーションの方法として最も大切なものは、人と人が出会い、率直な意見の交換を行なうことのできる口頭発表の場（会議）にあるという想いを強く持ちました。

アントワープでは、ベルギー名物のムール貝の白ワイン蒸しの大鍋に挑戦したり、“フリッテル（フライドポテト）”や、肉、ソーセイジ、タラなどを串揚げにした“サテ”を食べながら街を散歩しました。会議の昼食時間は2時間と長いので、歩いて10分ほどのアントワープ王立美術館へは何度か足を運びました。ブリューゲルの部屋で自然光の変化を感じながら椅子に座って絵を見てみると、とても心がやすらぎました。これからは、アメリカ医学教育形成史に果たした総合医学雑誌の役割に焦点をあて、ポストンやフィラデルフィアという街を思い浮かべながら、焦らずにまとめていこうと考えています。そして、機会があれば、海外の研究者が楽しんでくれるような調査データを提出してみたいと思っています。

総合医学雑誌を考えるための155文献

学術雑誌塾の1990年の研究テーマは、“総合医学雑誌”でした。そこで塾生が研究を進めていく上で参考にできるよう、文献を集めることになりました。

1980年から1989年までの Index Medicus の“Periodicals”と“Writing”、雑誌医学図書館の“ピックアップ”、SCIに収録された文献の中からピックアップし、著者名のアルファベット順に配列しました。

- (anonym) : New journals June 1983 to May 1984.(new journals). Nature.
317(6035):293. 1985.
- (anonym) : A cover history.(editorial). RI Med J. 63(1-2):17-20. 1980.
- (anonym) : How accurate are quotations and references in medical journals?
(letter).Br Med J, 291(6506):1420-1. 1985.
- (anonym) : Franz Ingelfinger, MD: a redoubtable character. JAMA.
243(5):409-11, 414. 1980.
- (anonym) : The journal club--let's audit(editorial). Lancet, 1(8638):594.
1989
- Abelson,PH : Scientific communication. Science. 209(4452):60-2. 1980.
- Adams Smith,DE : Style in medical journals. Br Med J. 287(6399):1122-4. 1983.
- Altman,DG : Statistical guidelines for contributors to medical journals.
Br Med J. 286(6376):1489-93. 1983.
- Alvarez-Dardet,C : 10-year trends in the Journal's publications.(letter).
N Engl J Med. 312(23):1521-2, 1985.
- Anderson,PG : Appraisal of the papers of biomedical scientists and physicians
for a medical archives. Bull Med Libr Assoc, 73(4):338-44, 1985.
- Antenucci,AJ : The 'Green Journal' -- progress and continuity. Am J Med.
69(4):483-4, 1980.
- Asher,P : Papers that have changed my practice. More than one source of
enlightenment. Br Med J. 287(6403):1437-8. 1983.
- Bahrani,J : Does writing in the 'BMJ' bring about change? Br Med J,
292(6522):736, 1986.
- Baue,AE : The Archives of Surgery, New England Surgical Society, and JAMA.
JAMA. 255(16):2210-1. 1986.
- Bell,C : A hundred years of Lancet language. Lancet, 2(8417-8):1453. 1984.
- Bernstein,RE : The Transvaal Medical Journal, 1905-1913. S Afr Med J.
71(5):319-20. 1987.
- Berry,EM : Sounding Board. The evolution of scientific and medical journals.
N Engl J Med. 305(7):400-2, 1981.
- Bjork,RE : Writing courses in American medical schools. J Med Educ.
58(2):112-6, 1983.

- Bobick,JE : Citation data for selected journals in reproductive biology.
Fertil Steril. 35(2):126-30, 1981.
- Bolster,A : How CMAJ controls the quality of its scientific articles.
Can Med Assoc J. 134(4):301-3, 1986.
- Booth,CC : Medical communication: the old and new. The development of medical
journals in Britain. Br Med J. 285(6335):105-8, 1982.
- Bowen,DHL : Primary journals today and tomorrow. J Chem Inf Comput Sci,
26(2):45-7, 1986.
- Boyer,WF : Statistical analysis in the New England Journal of Medicine
(letter). N Engl J Med, 310(10):659, 1984.
- Carey,WD : Science: its place in AAAS. Science. 209(4452):24-5, 1980.
- Carter,KC : Nineteenth-century treatments for rabies as reported in the Lancet
Med Hist. 26(1):67-78, 1982.
- Cassedy,JH : The flourishing and character of early American medical
journalism, 1797-1860. J Hist Med Allied Sci, 38(2):135-50, 1983.
- Centennial Issue : The Journal of the American Medical Association. JAMA,
250(2): . 1983.
- Chapman,CB : An aspect of medical publication: 1846 and 1982(letter).
N Engl J Med, 307(24):1531, 1982.
- Chen,BX : A centennial review of the history of the Chinese Medical Journal.
Chin Med J, 100(6):434-42, 1987.
- Chew,FS : AJR : the 50 most frequently cited papers in the past 50 years.
AJR. 150(2):227-33, 1988.
- Choudhuri,PK : Problems of medical journalism. J Indian Med Assoc,
86(12):333, 1988.
- Clarfield,AM : The case of the questionable reference. Can Med Assoc J,
140(7):844-5, 1989.
- Colditz,GA : The statistical content of published medical research: some
implications for biomedical education. Med Educ, 19(3):248-55, 1985.
- DeBakey,L : Journal editors and the press: cooperation not conflict(letter).
JAMA. 245(22):2296-7, 1981.
- Delaney,RA : Journals, journals everywhere.(reflections). Am J Hosp Pharm,
42(12):2735-6, 1985.

- Dixson,GF : The peer review and editorial process: a limited evaluation.
Am JMed, 74(3):494-5, 1983.
- Emerson,JD : Use of statistical analysis in the New England Journal of
Medicine. N Engl J Med, 309(12):709-13, 1983.
- Farber,SJ : Conferring of Honorary Fellowship upon Arnold S. Relman. M.D.
Bull N Y Acad Med, 64(8):887-90, 1988.
- Farr,AD : Book reviews in scientific journals. Med Lab Sci, 38(2):75-6, 1981.
- Farr,AD : A science journal, seventy-five years on. Med Lab Sci,
45(1):1-4, 1988.
- Flaherty,JA : Clinical reading and writing skills of junior medical students.
J Med Educ, 57(11):848-53, 1982.
- Gannon,MI : The JAMA Journal Club (editorial). JAMA, 261(5):750, 1989.
- Gardner,MJ : Is the statistical assessment of papers submitted to the 'British
Medical Journal' effective? Br Med J, 286(6376):1485-8, 1983.
- Garfield,E : 100 citation classics from the Journal of the American Medical
Association. JAMA,257(1):52-9, 1987.
- Garfield,E : Which medical journals have the greatest impact? Ann Intern Med,
105(2):313-20, 1986.
- Garfield,E : The 170 surviving journals that CC would have covered 100 years
ago. Current Contents,(26):3-12, 1987.
- Gray,C : CMAJ: 75 years as the voice of the profession. Can Med Assoc J,
135(12):1405-8, 1986.
- Griffith,OW : An elective course for first-year students based on the New
England Journal of Medicine. J Med Educ, 63(7):559-61, 1988.
- Grouse,LD : The Ingelfinger rule(editorial). JAMA, 245(4):375-6, 1981.
- Haworth,J : How accurate are quotations and references in medical journals?
(letter). Br Med J, 291(6504):1282, 1985.
- Hayden,GF : Clinical research in the Southern Medical Journal: current trends.
South Med J, 76(12):1473-6, 1983.
- Haynes,RB : How to keep up with the medical literature: I. Why try to keep up
and how to get started. Ann Intern Med, 105(1):149-53, 1986.
- Haynes,RB : How to keep up with the medical literature: II. Deciding which
journals to read regularly. Ann Intern Med, 105(2):309-12, 1986.

- Haynes, RB : How to keep up with the medical literature: III. Expanding the number of journals you read regularly. *Ann Intern Med*, 105(3):474-8, 1986
- Haynes, RB : How to keep up with the medical literature: VI. How to store and retrieve articles worth keeping. *Ann Intern Med*, 105(6):978-84, 1986.
- Hecht, F : The quality and influence of JAMA.(letter). *JAMA*, 259(13):1946-7, 1988.
- Hendricks, WM : Legal disclaimers in medical journals and textbooks.(letter). *N Engl J Med*, 319(2):120-1, 1988.
- Hitchcock, MA : Writing and publishing research articles. *Fam Pract Res J*, 8(1):3-16, 1988.
- Howie, J : Papers from the past. *Br Med J*, 288(6416):533-4, 1984.
- Huth, E : Manuscript requirements: the advance from Vancouver. *Br Med J*, 282(6257):55-6, 1981.
- Huth, EJ : Uniform requirements for manuscripts: the new, third edition (editorial). *Ann Intern Med*, 108(2):298-9, 1988.
- Huth, E : 'Uniform Requirements' agreement updated(editorial). *Ann Intern Med*, 92(1):122-3, 1980.
- Imperato, PJ : Readership survey of the New York State Journal of Medicine. *NY State J Med*, 87(11):606-12, 1987.
- Imperato, PJ : A history of the New York Medical Journal. *N Y State J Med*, 89(7):403-14, 1989.
- Jacobs, P : National scientific meetings and journals(letter). *S Afr Med J*, 56(17):664-5, 1979.
- Jones, BE : A new look journals. (editorial). *J Phys E Sci Instrum*, 19(1):1-2, 1986.
- King, LS : The founding of JAMA, 1883. *JAMA*, 250(2):177-80, 1983.
- King, LS : Medicine 100 years ago. I. JAMA and the competition: 1887. *JAMA*, 257(12):1642-3, 1987.
- King, LS : XIV. Medical journalism, 1847-1883. *JAMA*, 250(6):744-8, 1983.
- Knoll, E : JAMA in Netherlands.(editorial). *JAMA*, 257(1):70, 1987.
- Knoll, E : The revised Uniform Requirements of the Vancouver Group(Editorial) *JAMA*, 259(7):1068, 1988.
- Koshland, DE, Jr. : The process of publication. *Science*, 245(4918):573, 1989.

- Koshland,DE Jr.: A new look. *Scienc.* 231(4733):9, 1986.
- Kraemer,HC :Sample size - when is English enough. *Am J Med Sci*, 296(5):360-3, 1988.
- Kroenke,K : Book reviews in medical journals. *Bull Med Libr Assoc*, 74(1):1-5, 1986.
- de Lacey,G : How accurate are quotations and references in medical journals? *Br Med J*, 291(6499):884-6, 1985.
- Linzer,M : Impact of a medical journal club on house-staff reading habits, knowledge, and critical appraisal skills. A randomized control trial. *JAMA*, 260(17):2537-41, 1988.
- Lister,MJ : Looking for a creditable journal?(editors note). *Phys Ther*, 66(8):1207-8, 1986.
- Lock,S : Artists and critics: the national medical journals. *Ir Med J*, 80(1):23,26, 1987.
- Lock,S : Has the medical journal a future? *Trans Med Soc Lond*, 102:48-52, 1985-6.
- Lock,S : Referee's ruderies: LPG and the BMJ. *Br Med J*, 2(6205):1644-6, 1979.
- Lock,S : Authors of the world, unite...(editorial). *Br Med J*, 284(6331):1726-7, 1982.
- Lock,S : Information overload: solution by quality?(editorial). *Br Med J*, 284(6325):1289-90, 1982.
- Lock,S : Future journals: paper or computers? *Br Med J*, 285(6335):114-5, 1982
- Lock,S : Structured abstracts(editorial). *Br Med J*, 297(6642):156, 1988.
- Lungberg,GD : Providing reliable medical information to the public--caveat lector(editorial). *JAMA*, 262(7):945-6, 1989.
- Lundberg,GD : Goals for the Journal(editorial). *JAMA*, 248(5):553, 1982.
- Lundberg,GD : Getting the information out faster and some good news about MMWR (editorial). *JAMA*, 249(11):1483, 1983.
- Lundburg,GD : The JAMA style. *Med Communications*, 12(4):105-10, 1984.
- Madox,J : Scientific American: unwanted fly in merger funtment.(news). *Nature*, 322(6075):99, 1986.
- Maddox,J : Can journals influence science?(news and views). *Nature*, 339(6227):657, 1989.

- Mainland,D : Statistical ritual in clinical journals: is there a cure? -- I.
Br Med J, 288(6420):841-3, 1984.
- Mckusick,VA : Medicine(1922-). Biography of a medical journal.
Medicine(Baltimore), 64(4):217-8, 1985.
- Medvei,VC : Wind of change. II. Medical journals in Britain in 1988(editorial)
. J R Soc Med, 81(12):686-8, 1988.
- Meyer,HS : Medical publishing. JAMA, 243(21):2223-4, 1980.
- Miller,MD : Citation patterns of articles published in the Journal of Medical
Education, 1970-1980. J Med Educ, 57(10 pt 1):797-9, 1982.
- Morgan,PP : Scientific journals and the news media: partners or competitors?
(editorial). Can Med Assoc J, 130(3):252, 1984.
- Morgan,PP : Improving the quality of research published in CMAJ.(editorial).
Can Med Assoc J, 131(9):1027-8, 1984.
- Morgan,PP : Scientific editorials -- a precious and scarce element in medical
journals.(editorial). Can Med Assoc J, 132(4):315, 1985.
- Morgan,PP : CMAJ's citation patterns.(letter). Can Med Assoc J,
129(6):524, 1983.
- Morgan,PP : General medical Journals: becoming learned with little effort.
(from the editors). Can Med Assoc J, 134(6):570-1, 1986.
- Morgan,P : Peer review in medical journals(editorial). Br Med J,
292(6521):646, 1986.
- Morris,RW : A statistical study of papers in the Journal of Bone and Joint
Surgery [Br] 1984. J Bone Joint Surg[Br], 70(2):242-6, 1988.
- Mosteller,F : The next 100 years of Science. Science, 209(4452):21-3, 1980.
- Mulcahy,R : Writing for a medical journal: tips for tiros. Ir Med J,
80(1):27-9, 1987.
- Mundy,DJ : Time needed for publication of journal articles. Ann Intern Med,
101(1):61-2, 1984.
- Newcombe,RG : Towards a reduction in publication bias. Br Med J,
295(6599):656-9, 1987.
- Olivier,C : Future of French-language journals(letter). Lancet, 2(8656):222,
1989.

- O'Malley,K : From protocol to publication: preparation of a scientific paper.
Ir Med J, 80(1):30-2, 1987.
- Payne,HA : Advertisement for dipyridamole.(letter). N Engl J Med,317(27):1736.
1987.
- Politsner,PE : Medical education for a changing future: new concepts for
revising texts. Med Educ, 21(4):320-33, 1987.
- Rabinowitz,HK : Comparing the number of journals available for publication of
papers by faculty members in the clinical specialities. J Med Educ, 62(1)
:58-60, 1987.
- Radulesce,G : The journals of the AMA: form cooperations to consortium. Arch
Surg, 122(3):269-70, 1987.
- Radulescu,G : The journals of the AMA. From cooperation to consortium.
(editorial). JAMA, 256(10):1342-3, 1986.
- Raven,RW : The postgraduate medical journal - a retrospective view. Postgrad
Med J, 61:857-9, 1985.
- Reece,RL : Thoughts about medical writing, editing, and publishing(editorial).
Minn Med, 72(3):127, 138, 1989.
- Rees,AM : Characteristics, content, and significance of the popular health
periodicals literature. Bull Med Libr Assoc, 75(4):317-22, 1987.
- Reiman,AS : Editing a general medical journal. Ned Tijdschr Geneeskd,
126(1):5-8, 1982.
- Reiman,AS : Anniversary discourse the purposes and prospects of The General
Medical Journal. Bull N Y Acad Med, 64(8):875-80, 1988.
- Reiman,AS : The Ingelfinger Rule(editorial). N Engl J Med, 305(14):824-6,
1981.
- Reiman,AS : More on the Ingelfinger rule(editorial). N Engl J Med, 318(17):
1125-6, 1988.
- Reiman,AS : The Journal as an open forum(editorial). N Engl J Med, 312(21):
1384-5, 1985.
- Reiman,AS : How reliable are letters?(editorial). N Engl J Med, 308(20):1219,
1983.
- Reiman,AS : Better service for our overseas subscribers(editorial).
N Engl J Med, 306(1):40-1, 1982.

- Relman,AS : 175 years old: some anniversary thoughts and a new look(editorial)
 . N Engl J Med, 316(1):43-4, 1987.
- Relman,AS : Reporting the aspirin study: the Journal and the media(editorial).
 N Engl J Med, 318(14):918-20, 1988.
- Rhoads,JE : Academic pitfalls in America -- 1907-1982. J Surg Oncol,
 21(2):74-80, 1982.
- Riesenberg,DE : Case reports in the medical literature.(editorial). JAMA,
 255(15):2067, 1986.
- Rilcy,RW : A century of editors. JAMA, 250(2):230-5, 1983.
- Robertson,RP: State of the journal: the first 1000 manuscripts.(editorial).
 Diabetes. 38(6):671-2, 1989.
- Robinson,RG : The New Zealand Medical Journal 1887-1987. N Z Med J, 100(833)
 : 620-1, 1987.
- Sammons,JH : The Journal and publication in other languages and countries.
 JAMA, 250(2):236-41, 1983.
- Seal,SC : The role of health journal in the delivery of health care.
 Indian JPublic Health, 31(1):12-26, 1987.
- Seibel,J : Minorities in the Journal's advertisements.(letter). N Engl J Med.
 319(1):57-8, 1988.
- Sherrington,A : Seventy years of editorial excellence. Can Med Assoc J, 125(1)
 :85, 88, 91-3, 1981.
- Shultz,SM : Medical Journals of Pennsylvania before the Civil War. Trans Stud
 Coll Physicians Phila, 5(3):244-70, 1983.
- Soffer,A : The unique role of peer review journals(letter). Chest,
 78(4):547-8, 1980.
- Soffer,A : Free medical publications or scientific medical journals(editorial)
 Chest, 81(4):397-8, 1982.
- Soffer,A : Free medical publications or scientific medical journals?
 (editorial). Arch Intern Med, 146(2):251-2, 1986.
- Spodick,DH : The editor's correspondence: analysis of patterns appearing in
 selected specialty and general journals. Am J Cardiol,
 52(10):1290-2, 1983.
- Spodick,DH : Journal referee's reports. Lancet, (8477):386-7, 1986.

- Squires,BP : Biomedical manuscripts: what editors want from authors and peer reviewers.(editorial). Can Med Assoc J, 141(1):17-9, 1989.
- Velez,R : Citation of foreign literature in U.S. and U.K. journals.(letter). N Engl J Med. 307(18):1155. 1982.
- Weller,AC : Editorial policy and the assessment of quality among medical journals. Bull Med Libr Assoc. 75(4):310-6. 1987.
- Wiggin,NJ : Choosing medical journals.(editorial). Can Med Assoc J, 121(6):698-700. 1979.
- Wilgis,EF : Medical communication - its uses and abuses. J Hand Surg [Am], 14(3):425-8, 1989.
- Wilson,LG : Measure in everything: a decade of the Journal.(editorial). J Hist Med Allied Sci, 37(4):393-8, 1982.
- Wood,D : How publishing policies affect physicians.(publisher's page). Can Med Assoc J, 134(2):95, 1986.
- Woods,D : Medicine and journalism.(letter). Can Med Assoc J, 133(7):629, 1985.
- Woods,JR : Journal club format emphasizing techniques of critical reading. J Med Educ, 57(10 pt 1):799-801, 1982.
- Wright-St Clair,RE : The early years of the New Zealand Medical Journal, 1887-1896. N Z Med J, 100(833):622-4, 1987.
- Wu,CP : Salute the centenary of the Chinese Medical Journal. Chin Med J, 100(6):433, 1987.
- Xie,SW : A brief survey of the Chinese Medical Journal. Chin Med J, 100(6):443-4, 1987.
- Yanoff,KL : Types of medical writing and teaching of writing in U.S. medical schools. J Med Educ, 63(1):30-7, 1988.
- Zlotogorski,A : The use of textbooks in evaluating the impact of medical journals.(editorial). Can Med Assoc J, 138(8):685-6, 1988.

執筆者一覧

- | | | | |
|--------|--------------------------------|---------|----------------------------|
| 山崎 茂明 | 東京慈恵会医科大学医学情報センター
(学術雑誌塾塾長) | 〒105 | 港区西新橋3-25-8 |
| 板橋 瑞夫 | 昭和大学図書館
(学術雑誌塾顧問) | 〒142 | 品川区旗の台1-5-8 |
| 山口 直比古 | 浜松医科大学図書館
(学術雑誌塾顧問) | 〒431-31 | 浜松市半田町3600 |
| 青木 仕 | 順天堂大学図書館
(学術雑誌塾顧問) | 〒113 | 文京区本郷2-2-26 |
| 雨宮 正恵 | 榊ブレインテック | 〒150 | 渋谷区恵比寿4-6-10
恵比寿ホークビル5階 |
| 安藤 越代 | 帝京大学溝口病院図書室 | 〒214 | 川崎市高津区溝口74 |
| 江口 敏一 | 浜松医科大学図書館 | 〒431-31 | 浜松市半田町3600 |
| 廣田 住友 | 半導体基盤技術研究会 | 〒113 | 文京区湯島2-16-13
斉藤ビル2階 |
| 井上 三郎 | 日本医師会 | 〒113 | 文京区本駒込2-28-16 |
| 神場 清治 | 榊蒼流社 | 〒171 | 豊島区高田3-20-11-602 |
| 木下 真由美 | 杏林大学図書館 | 〒181 | 三鷹市新川6-20-2 |

北川 正路	東京慈恵会医科大学医学情報センター	〒105	港区西新橋3-25-8
黒川 玲子	東邦大学図書館	〒143	大田区大森西5-21-16
真下 美津子	国家公務員等共済組合連合会 中央図書室	〒105	港区虎ノ門2-2-2 虎ノ門病院内
生出 直子	杏林大学図書館	〒181	三鷹市新川6-20-2
多胡 英樹	国際医学情報センター	〒550	大阪市西区江堀1-23-26

<編集後記>

塾も5年の活動を経て、塾生の多くは転職や異動で次第に人が入れかわってきました。年齢を重ねることが成熟につながればよいのですが、私自身はわからないことが次第に多くなっていくようです。でも次代を担ってゆくであろう塾生のますますの成長を願ってやみません。

大阪の若手の研究会も活発に活動していると聞いています。各地でこういう動きがおきてきたらいいなと思います。(ま)

新しい環境に移り、テレビ健康番組のアドバイザー会議に出席したり、地方テレビ局での健康講座の収録に立ち会ったりする機会が増えました。前号では医学図書館員の立場で健康情報について考えてみましたが、今度は生産する側から健康情報を考えてみなくてはならなくなった訳です。また、学術雑誌に接する機会は残念なことになくなりましたが、データを収集し記事を書くといった機会はかなり多くなったようです。環境は変わりましたが、いまある環境の中のなかで今後も学術雑誌塾との接点を見出していきたいと思っています。(井上)

私が雑誌塾に入ってから2年が過ぎようとしています。月1回の塾ですが、仕事や私用で、出席できるのは1年に数えるほどもなく、合宿にも参加したことはありません。そんな幽霊塾生の私が編集委員などをやらせていただいたのは、やはり何らかの形で塾につながりたいという思いがあったからだと思います。

1年目は、わけもわからず、先輩のグループ研究に加わり、言われたままにノルマをこなしていたら、いつの間にか1つの論文ができあがっていました。今年はずっと自主的に何かをしなくては、というのも委員を引き受けた動機の一つでした。

ところがフタを開けてみると、そこにはやはり去年と同じ金魚の〇〇のような私がいまいました。名ばかりの委員で、たいしたこともしていませんが、これを機会に少しでも成長できていれば幸いです。(生出)

この報告集の印刷ができあがる頃、まわりはクリスマス一色の時期です。ちょっと重いクリスマスプレゼントになります。

今年うれしいことがありました。去年まで塾で活躍していた大村さんが兵庫医大図書館の田中さんと結婚しました。去年の図書館サービス研究大会での出会いがきっかけで。

報告の出版も4回目。今までは文章のレイアウトとか、英数字の大きさとか…いろいろ細かく統一していましたが、今回は今までと比べると各人各人でかなりの違いがあります。統一することの利点もいろいろありますが、あまり細かいところまで統一すると、書く方も編集する方もたいへんですから、今後どの程度統一する必要があるか考える必要があるでしょう。

最後になりますが、今回慈恵の阿部さんに入力などの編集作業をずいぶん手伝っていただきました。どうもありがとうございます。(MK)

「遠くまであるいていこう」

— 学術雑誌塾報告 4 —

1990年12月20日発行

編集 学術雑誌塾報告編集委員会

(委員長：安藤 越代)

発行 学術雑誌塾

(塾長：山崎 茂明)

印刷所 榊伸樹社

〒160 新宿区信濃町21 大門ビル2F

☎ 03(5379)8241

學術雜誌塾通信

1 (1985) - 59 (1990)

学術雑誌塾通信 No.1

1985年11月20日発行

1. 第1期生スケジュール (テーマと担当者) と調査対象テーマ

回	日付	テーマ	担当者
1)	11/9	オリエンテーション	山崎
2)	12/14	歴史的アブド-キ ① 外国	北川
3)	1/	" ② 日本	山崎
4)	2/	生態学的アブド-キ ①	平石
5)	3/	" ②	広田
6)	4/	" ③	渡田
7)	5/	調査	
8)	6/	"	
9)	7/	"	
10)	8/	論文	
11)	9/	"	
12)	10/	まとめ	

塾名簿

渡田秀生 (職)
平石充 (IMIC)
広田佳友 (昭和)
北川正昭 (後東)
山崎茂明 (後東)

調査対象テーマ

1) Index Medicus 収載誌の国別分布変化 (1879-1977)

- 歴史的アブド-キの基本的文献として、中山茂「歴史としての学問」中央公論社を読んでおいて下さい。
- 生態学的アブド-キとIM調査に関するものとしていくつか文献を見つけたのでお知らせします。

176 KAREL, L. Selection of journals for Index Medicus. A historical review. *Bulletin of the Medical Library Association*, 55 (3). 1967. pp. 259-278.

160 BRODMAN, E. and SEYMOUR, I. T. Current medical literature: a quantitative survey of articles and journals. In: *Proceedings of the International Conference on Scientific Information, Washington, DC, November 1958*. Vol. 1. Washington, DC, National Academy of Sciences, National Research Council. 1959. pp. 435-447.

156 BEAVER, D. de B. A statistical study of scientific and technical journals. New Haven, Yale University. 1964.

172 GOTTSCHALK, C. M. and DESMOND, W. F. (23) Worldwide census of scientific and technical serials. *American Documentation*, 14 (3). 1963. pp. 188-194.

← 電車の中で眺めました。とても良い70-110-だと思えます。IMの歴史、学雑誌活評価の面でもすぐれたジャーナルになっている(各自コピーして下さい)。

← 医学図書館界では有名なBrodman先生の70-110-です。山崎が所有しています。

← 日本にあるかどうか? 佐伯のUCで平石君調査して見て下さい。

← 平石君がコピーしてあります。Barr, K.P.の論文とともに、60年代の70-110-です。Barrの70-110-は山崎からみなさんにコピーをわたします。

「学術雑誌塾通信」を発行し、会の記録としてコミュニケーションに使用したいと思っております。SY

学術雑誌塾通信 No.2

1985年12月20日発行

1. 第2回報告. 1985年12月14日(土) (慈大図書館3:00-5:00pm)

発表 北川正路 「歴史的アプローチの外国」
「学術雑誌の誕生」

欠席なし
終了後板橋で
忘年会

参考文献

中山茂: 歴史としての学問. 東京, 中央公論, 1974.

Porter, JR: The scientific journal, *Bacteriological Reviews*, 28(3):211-30, 1964.

Manten, AA: The growth of european scientific journal publishing before 1985.

In. Meadows, AJ, (ed): *Development Scientific Publishing in Europe*. Amsterdam, Elsevier, 1980. 1-22.

1665年1月10日に *Journal des Sçavants* が, 同3月にはロンドンで *Physiological Transactions* が刊行. これは学術雑誌の起りとしてされている. 12月14日は, 学術雑誌の誕生を導いた背景を時代をたかのぼって考察した.

また, 当時の知識の伝達として, 出版社や本の市が発行した書籍目録も見落としてはならない. より深い理解のため, 書物の歴史についても目を通しておきたい.

関連文献

de Grolier, E 「書物の歴史」 (大塚幸男訳, 白水社, 1955年)

Presser, H. 「書物の本」 (齋田収訳, 法政大学出版局, 1973年)

香内三郎 「活字文化の誕生」 (晶文社, 1982年)

Thompson, J.W. 「出版産業の起源と発展; 777-1777年の印刷の歴史」 (笑輪成男訳, 出版局人, 1974年)

星知定雄 「郵便の文化史」 (みすず書房, 1982年)

大輪盛登 「メディア伝説; 活字を生きた人々」 (時事通信社, 1982年)

Ashby, E. 「科学革命と大学」 (島田雄次郎訳, 中央公論社, 1977年)

阿部謹也 「中世の窓から」 (朝日新聞社, 1981年)

平田寛 「科学の考古学」 (中央公論社, 1979年) マンデルの論文についての記述あり

2. 次回は, 1986年1月18日 歴史的アプローチの日本. なお, 昭和大学附属図書館の板橋さんが御出席してください予定です

3. お正月 食べすぎておなかをこわさないように気をつけて下さい M.K

1. 第3回報告. 1986年1月18日(土) (蕙大田, 3:00~5:00PM)
欠席者なし. 当日は, 昭和の板橋氏, 慈恵の
裏田氏が御出席され, 貴重な御意見を伺った.

『歴史的アプローチ②日本』

1.1. 富エ川游: 醫學雑誌の歴史, 中外医事新報, 624: 25-26 他.
担当: 広田.

- ・「Le Journal des Scavans」, 「Philosophical Transactions」の詳しい記述あり.
- ・ドイツで最初に刊行された「Acta und Ephemerides der Academia Caesarea Leopoldina Naturae Curiosorum」は当時ドイツでは重要であつたらしい.
- ・ただし, 大医史学者の富川氏の論文としては, 不正確な記述が多い.

1.2. 小野寺俊治: 初期の日本医学雑誌, 日本医事新報, 1728: 47-50, 1957
" : 1891~1956年の日本医学雑誌, 日本医事新報, 1736: 88-95, 1957
担当: 浜田

この論文は, よく引用される文献である. ^{しかし,} 記されている日本医学雑誌発行表(表1)や日本医学雑誌の発行総数に誤り, 又不明確なところが多く見受けられ, 洗い直す必要ありとの意見があつた.

1.3. 近藤禧禎男: 「東京医事新誌」—明治初期の医学雑誌についての考察,
医学図書館 20: 141-152, 1973

日本の総合医学雑誌の歴史についての論議があつた.
例えば「東京医事新誌」
「中外医事新報」
「日本医事新報」
「日本医師会雑誌」
担当: 平石

2. 次回は, 2月22日(土)で「生態学的アプローチ①」として, Barrの「Estimates of the number of currently available scientific and technical Periodicals」を中心に平石さんが発表を行います. 他の人も Barrの論文は目を通しておいてください.

3. 板橋さんの一言.

「医学雑誌の歴史と題して, 生みの苦しみと死の苦しみがある.」
何かと云われると, 過去の回答は出さず, 将来的な「雑誌の歴史」
危機を回避するには何かおかしなことを, 雑誌は生みの苦しみの

学術雑誌塾通信 No. 4

1986年3月10日発行

1. 第4回報告 1986年2月22日(土) (慈大図書館 3:00~5:00 pm)

欠席者なし。当日は女医大の堀江氏も出席された。

(1) 『生態学的アプローチ①』 担当者: 平石

Barr, K.P. : Estimates of number of currently available scientific and technical periodicals. *Journal of Documentation*, 23: 110-116, 1967.

○ この調査の特徴として

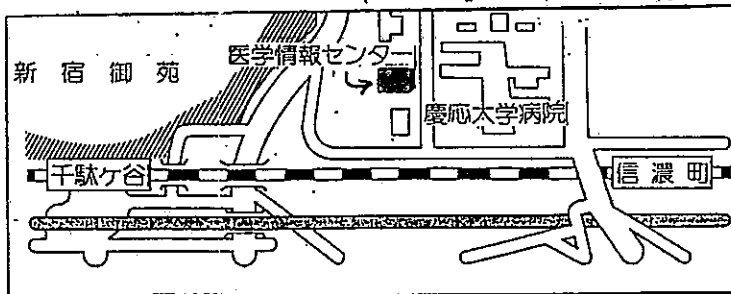
- ・ Science and technical periodicals の定義。
- ・ 死んだ雑誌の除外。
- ・ 利用者からの請求にもとづく情報の利用。 といった点があげらる。

Gottschalk と Desmond の調査(1961)と比較し、定義については大きな違いはないが、死んだ雑誌を除くために国別リスト等よりも利用者からの請求といった情報源を重視している。

○ また山崎氏より Goffmann, W の表、*医学中央雑誌*, *Index Medicus* の収録誌数の推移の表のコピーについて説明があった。

(2) 今後の方針として、秋に学会等にて発表を行なうが、6月に札幌で開催される図書館情報サービス研究大会においても可能であれば途中経過的な発表をしたいという意見があり、3月中の申込み、4月の抄録提出ということから発表の可否を検討するためにも次回より実際の調査の作業にとりかかるとなった。

○ 次回は3月15日(土) 9:00 am ~ 5:00 pm 慶大医学情報センター地下の編集室にて調査を行ないます。



詳しくは平石まで 357-9181 or 自宅。

慶大医学情報センターの電話番号は 353-1211

『生態学的アプローチ②』は第6回以降となりますが、Karel, L. "Selection of journals for *Index Medicus* については p259~261 (北川), p262~268 (山田), p269~272 (浜田), p273~276 (平石) の分担で各自お願い致します。

3. 通信が大変遅くたまりまして申し訳ありませんでした。MH

1. 第5回報告 1986年3月15日(土) [慶応大学 医学情報センター 9:00~17:00]
欠席者なし 当日は慶応大の後藤敬治氏も出席された。

(1) Index Medicus 収載誌への国籍づけの調査を行った。

・地理区分略語は次の通りである。

A.	アメリカ	J	日本
Au	オーストラリア	R	ソ連
Ca	カナダ	Sd	スウェーデン
E	イギリス	Sw	スイス
F	フランス		
G	ドイツ		Rest of Europe
H	オランダ		アジア
I	インド		アフリカ
It	イタリア		南アメリカ

(2) 札幌で開催される図書館情報サービス研究大会での発表を予定して、4月中の抄録提出を目前にしている。今回の各自の調査は、次回の「塾」までにまとめあげ、同時に、調査中に持ちあがった問題点を、持ち寄ることにする。その時点で、抄録作成・発表準備に取りかかることが予想される。

2. 次回予定 1986年4月19日(土) 東京慈恵会医科大学図書館, 15:00~

＊内容・翻訳会『生態学的アプローチ②』Karel, L. "Selection of journals for Index Medicus" (p259~61. 北川 / p262~68. 広田 / p269~72. 渡田 / p273~76. 平石の分担)。

・IM調査の結果報告・問題点提起。

3. 通信が遅れて、大変申し訳ありませんでした。HH

1. 第6回 (1986年⁴3月19日, 慈恵 3:00→5:00)

- Karel, L. / Selection of Journals for Index Medicus.
の中で Historical background の所を発表した。担当者: 北川
次回は Journal Selection の章 (担当: 広田, 山崎)

- 新入塾者名

神岡 桂子 (聖マリアンナ医) 0427-44-1930

黒川 玲子 (東邦大医) 726-0669

牛込 典子 (") 814-7396

これで総勢7名です。

- 新入塾生への宿題 (カンパテください!)

Karel, L (BMLA 55 (3) 259-278, 1967) の1-11ページの
引用文献の中で、興味をもったものを各自が1編ずつ読
読する (抄録か全文をA4版レポート用紙に書き次会提出)。

なお、山口直比呂: Index Medicus の誕生. 医学図書館 28(1)1-10, 1981. を
読んでおいて下さい。参考になります。

- コンパ

次回 5月24日(土) に新・旧塾生コンパを行う予定です。
場所は新橋田リでやろと思っております。

札幌大会の抄録作製準備 (4月26日(土) 3:00~^{場所}慈恵医大医学情報中心)
札幌大会の抄録締め切りが4月いっぱいまでです。個々のデータ
の検討等も、4月26日3時(土) 行うので、それまでに、集計を終え
ておいてください。

次回は 5月24日(土) 3:00 - 場所 慈恵医大医学情報センター図書館

第7回 : 1986年5月24日(土)、慈恵情也 3:00~

1. 新入塾者名

雨宮 正恵 TEL 045-502-0110

これで、男性 4名、女性 4名の計8名となりました。

2. Karel, L. / Selection of Journal for Index Medicus.

Journal Selection の章 (p262 ~ p268)

a. 前半 : 担当、広田

IMの収録雑誌の網羅性について。

b. 後半 : 担当、山崎

ICに索引されるべき雑誌の内容について。

3. IM 収載誌の国別分布変化表。

担当 : 北川

各人のデータをもとに北川君に^よ2種の表が示された。

ヨーロッパ諸国 → アメリカ
中心 大戦 中心

4. 新入塾生の宿題

・牛沢 : ④ Jenkins, R.L. Periodicals for medical libraries.
JAMA 97: 608-610, 1931

・神岡 : ⑥ Raisig, L. Miles. Mathematical evaluation of search.
Science 132: 1229-1234, 1960

・黒川 : ⑦ Truelson, Stanley D., Jr. What the Index Medicus indexes, and why.
Bulletin MLA 54: 329-336, 1966

時間がなくなりましたので、次回発表となりました。

次回は、6月14日(土) 3:00より慈恵情也で「おこないます。

発表は、牛沢さん、神岡さん、黒川さんです。3人の方は、いい論文を讀まれたらうですので、他の人もコピーを取り、目を通しておいてください。

1. 第8回 (1986年6月14日 Sat. 慈恵 3:00 → 5:00 p.m.)

宿題の発表: "Selection of Journals for Index Medicus" の
引用文献の詠読

- ・ 牛沢 — ④⑥ Jenkins, R.L. Periodicals for medical libraries. JAMA 97: 608-610, Aug. 29, 1931
- ・ 神岡 — ④④ Raisig, L.M. Mathematical evaluation of the scientific serial. Science 131: 1417-1419, May 13, 1960
- ・ Gross & Gross により開発された、雑誌の数学的評価を発展させた種々の問題点(調査材料とする雑誌の選択や、評価対象とする雑誌の刊行頻度・発表論文数の違い等により結果に偏りがある)を克服し、より適切な評価方法を考えよう 2論文でした。

2. 次回は 7月19日 Sat. 3:00 p.m. より 慈恵にて

予定 ☆ 宿題のつづき

- ・ 黒川 — ④④
- ・ 雨宮 — ④⑤ Gross, P.L.K., and Gross, E.M. College libraries and chemical education. Science 66: 385-389, 1927

☆ Karel, L. "Selection of Journals for Index Medicus" のつづき p. 269 - p. 272 (担当: Mr. 浜田)

Rain rain,
Go away



学術雑誌塾通信 No. 9

1986年7月30日発行

1. 第9回 (1986年7月19日 土 慈恵 3:00-5:00 P.M.)

宿題の発表

黒川 Truelson, S. D. What the Index Medicus Index, and Why. BMLA 54: 329-336, Oct. 1966.

I.M. 収載雑誌選定のポリシーについて。
並べられている論文でし。

2. 次回 9月6日(土) 慈恵 3:00-5:00 P.M.

発表 雨宮 Gross, P. L. K., and Gross, E. M. College Libraries and Chemical Education. Science 66: 385-389, 1927

浜田 Karel, L. Selection of Journals for Index Medicus. 269-272

夏休みの宿題の提出

3. 夏休みの宿題が次の様に決まりました。 [How to use a medical libraryのref.の中から論文選ぶ訳読]

(黒川) Austin, C. J. (1964) Data processing aspects of MEDLARS. BMLA 52, 159-63

(浜田) Durak, D. T. (1978) The weight of medical knowledge. New Eng. J. Med., 298, 773-75

(北川) Garfield, E. (1970) Citation indexing for studying science. Nature, Lond., 227, 669-71

(牛沢) Sewell, W. (1964) Medical subject heading in MEDLARS. BMLA 52, 164-70

(広田) Vickery, B. C. (1969) Indicators of the use of periodicals. J. Librarianship, 1, 170-82

(神岡) Wilson, G. (1953) A combined university-medical and medical society library. BMLA, 41, 230-7

※文献が手もとにないようでしたら、平石さんにお問い合わせ下さい。

8月はお休みです。
では、楽しい夏休みを。

K.K.

第10回 1986年9月6日(土) 於慈恵情セ 15:00-17:00

● 新入塾者 2名

井上 三郎 (日本医師会田)

吉田 宏子 (") *急病のため欠席

▽ 発表

夏休みの宿題 : 各自 5分間ずつ発表

浜田 : KAREL, L. SELECTION OF JOURNALS FOR INDEX MEDICUS.
p.268-272

『雑誌の質の客観的評価の研究』

GROSS & GROSS 以後の、上記の研究の流れを概観した文章とした。

🏠 次回予告

平石 : SELECTION OF JOURNALS FOR INDEX MEDICUS. p.273-

夏休みの宿題報告 : 1人 10分ずつ。

🕒 次回は 10月4日(土) 15:00- 慈恵情セにて行います。
吉田さん、ご急病に。次回お目にかかりましょう。

山崎塾長御推薦の "情報学参考文献リスト" を同封しますのこ
御活用下さい!

1. 第11回報告 1986年10月4日(土) (慈大図書館 3:00-5:00pm)

出席者12名

・夏休み宿題の発表

井上・黒川・牛沢・雨宮 — 1964年のペーパー MEDLARSについて

神岡 — 1953年のペーパー 英国の大学の背景について

浜田 — 1978 " 医学知識の量について

広田 — 1969 " 雑誌利用の指標について

北川 — 1970 " citation indexingについて

※ 詳しい論題名・著者名は通信 No.9にあります

・ Selection of Journals for Index Medicus の発表: 平石さん

p.275 Conclusionのと=3 (7-700のシラ×1枚)

ニヒジニのペーパーの訳読は終了です。

・ 山崎さん: Priceの学術雑誌の指數的成長のグラフについての批判。 (情報管理に投稿したそうです)

国内でも簡単に引用されたりしているが、充分に検討をおこなわずに
安易な引用をしてはいないか、という指摘がありました。気を付けましょう。

2. recurring bibliographies は

松村多美子: Xドラースの索引法: 医学図書館 16(1): 31-37, 1969

にあります「主題書誌類」となっていました。ちなみに demand
bibliographies は「要求書誌類」です。

3. 今回から 医師会・吉田宏さん

IMIC・多胡英樹さん がお見えです。よろしく。

4. 次回は 11月15日(土) 3:00 ~

・ 吉田さんの英訳発表

・ Index Medicus の国別統計 '67. '72. '77. '82 についての
調査集計結果の報告

の予定です。

深秋を満喫して、勉強いたしましょう! by RK

○ 第12回報告

1986年11月15日(土) 慈大情セ 3:00 ~

出席者 12名

今回は、図書館情報大助教授
野添篤毅氏も同席されました

1. Taine の Bibliographic aspect of MEDLARS — 1964年の ペーパーの前半の訳読 (担当者: 吉田)

前半は、例えばモノグラフシリーズもIMに掲載しようとするという、当時のMEDLARS開発グループの摸索と試行を伝えていました。野添先生は、「当時と現在では、カバーするところが違うが」と前置きされ、現在の視点から、吉田さんの報告を補足されました。野添先生興味深い話がありごうございました。なお、このペーパーの後半の報告は、次々回に行ないます。

2. IMの国別統計 '67 '72 '77 '82 についての調査集計結果の報告

牛沢さんより 2枚の図表が示されました。

3. 『IM収載誌の国別分布変化(1879-1956年)』による若干の修正がほど こされました。

○ 新入塾生の紹介

今回から 関東通信病院図書館 03-448-6688 の 神場清治さんが出席しています。よろしくお願いたします。

○ 次回予告

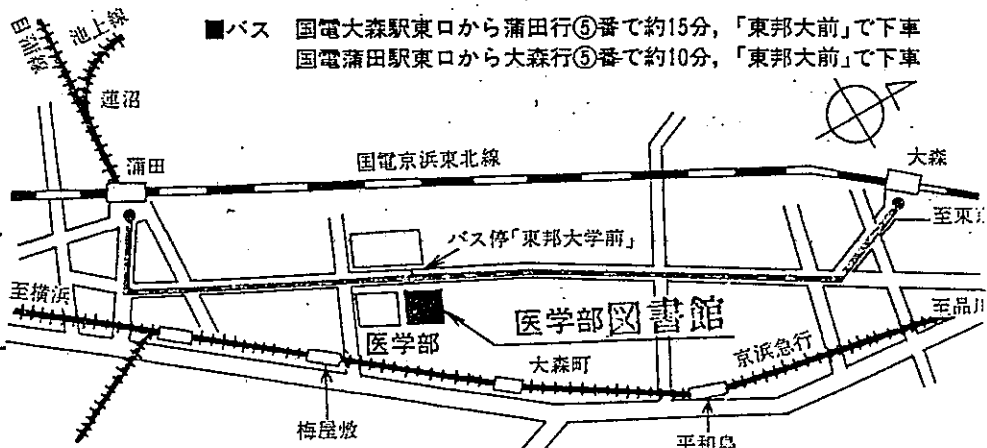
12月20日(土) 東邦大学医学部図書館で、3:30より行ないます。山崎塾長が、4大医学総合雑誌(B.M.J. Lancet J.A.M.A. N.E.J.M.) について報告される予定です。なお、当日は勉強会終了後、同図書館で忘年会を予定しておりますので皆様

御期待下さい。(雨宮さん、黒川さん、牛沢さん よろしく)
会費は3,000円程度の予定です。
これでは、忙しい時期を迎えますが、皆さんお元気で頑張ってください。

大森キャンパス

● 医学部

■ バス 国電大森駅東口から蒲田行⑤番で約15分、「東邦大前」で下車
国電蒲田駅東口から大森行⑤番で約10分、「東邦大前」で下車



○ 第13回報告

1986年12月20日(土) 東邦大学図書館

15:30 - 17:00

出席者 14名

1. 山崎塾長が 4大医学総合雑誌 (BMJ, Lancet, JAMA, NEJM) についての報告があった。

○ 新入塾生紹介

1. 石山 正か子 (東京大学 海軍病院図書館)
 2. 熊谷 智恵子 (国家公務員等共済組合連合会 中央図書館)
 3. 真下 美津子 ()
 4. 大村 伸栄 (神奈川歯科大学図書館)
- が出席しました。よろしくお願ひします。

○ 忘年会

順天堂大学 兼岩氏 (科斗学) にて ショウの会 代表) と
図書館情報大学 緑川先生が、参加されました。
準備にあたり、東邦大の3名、ありがとうございます。

○ 次回予告

1月17日(土) 慈恵大学で 15:00より行なわれます。

吉田さん (Taine の Bibliographic aspect to Medlans) の後半と
多胡 (White B の Interlending in the UK 1985: Interlending
and Document Supply 14(1) p-329) の報告を予定しています。

1月から 関東通信病院図書館の 藤本貞子さんが
出席することになります。よろしくお願ひします。

新しい名簿をお送りします。まちがひか、ありませんら
多胡さんに連絡して下さい。

忘年会をおかえて下さい。来年もよろしく。 by HT.

学術雑誌塾通信 NO. 14

1987年1月27日発行

第14回報告 1986年1月17日(土) (慈大図書館 15:00~17:00)

出席者 10名

1. 学術雑誌塾 第2期のテーマについて

(1) 日本の医学雑誌を対象としたグループ調査

4つのテーマ別に下記のグループになりました。

- ① 日本医師会雑誌の分析 藤本、浜田、黒川、吉田
- ② 学会誌(日本医学会分科会)の機能の変化 雨宮、古川、広田、多胡、大村
- ③ 「日本医事新報」と「医学のあゆみ」の比較 井上、神場、神岡、熊谷
- ④ Journal of Biochemistryの史的検討 平石、北川、真下、牛沢

なお、 の方が責任者になりました。

(2) 基本的文献の訳読、紹介

(3) グループ調査結果の発表

2. Taine Bibliographic aspect of MEDLARSの後半の訳読(担当者:吉田さん)

註 訳読発表の際、次回からは、全訳ではなく、A-42枚程度の抄訳を配布するようになりました。

3. 第12回生物医学図書館員研究会での発表 "Index Medicus 収載誌の国別分布変化(1967-1982)" についての中間報告(担当者:井上さん)

4. 塾の運営

(1) 庶務・会計—雨宮さん 連絡—^多田胡さん 若頭—平石さん

になりました。よろしくお願ひします。

(2) 今年から原則として第3土曜日に塾を行なうようになりました。

(3) 年会費 ¥1,000.- を徴収することが、出席者全員一致、拍子中? で決まりました。

会計の雨宮さんまでお願ひします。

5. 訂正 学術雑誌塾名等

6 予告 次回は2月21日(土) 15:00~ 慈大図書館で。

◎ 多胡さんの訳読発表

◎ それぞれのグループの文献リスト発表 の予定です。

学術雑誌塾通信 NO. 15

1987年2月25日発行

第15回報告 1987年2月21日(土) 慈恵 15:00~ 出席者: 17名

1. 新入塾生

宮内洋一さん (山之内製薬 中央研究所図書室 Tel: 960-5111)
サブ研究グループは①の「日本医師会誌の分析」になります。
がんばって下さい!!

2. 医療環境の動向について、山崎塾長より発表(約20分)。

生涯教育のための学術雑誌メディアも考察して頂くうえで、
基本的に知っておくべき事項をまとめた。

Med Sci → Health Sci, 医師 → チーム医療, 医師数の過剰,
在宅ケアと看護, DRG と PRO, パラメディカル → コメディカル,
医療従事者としての図書館員 (日経メディカル, JAMA日本語版... 必読誌)

3. 才四回図書館情報サービス大会への発表

下記の3テーマで倉敷の川崎医大大会にエントリーすることになった

1. 日本の総合医学雑誌 責任者 吉田, 井上
2. 学会誌の機能 " 多田 鞠
3. J Biochem の引用文献分析 " 牛沢

* エントリーの Deadline は 3月3日です。

4. サブグループの進展状況

各グループリーダーから、各グループの文献収集、調査テーマの
検討状況など報告があり、板橋顧問より意見が出された。

文献調査 → 問題点の整理 (何かなされ、何がなされていなか) → 調査計画
↳ 調査データの収集 → データの整理 → 結果のまとめ → 考察

各プロセスも大切に、グループで協力して調査をして下さい。
なお、不明な点など出ましたら、いつでも山崎まで Tel して下さい。

5. 次回は

4月18日(土) 15:00 → 慈恵。3月は休みですが、各グループ
はよく連絡をとりあってグループ調査をやって下さい。

6. 生医研研12日の発表

2月7日の生物医学図書館員研究会で南宮さんが発表を行いました。
共同発表の方までご苦労様でした。なお、スライド撮影時に、私(山崎)が
いながらミスがあり、申し訳ありませんでした。Gomen!

7. Portland (MLA meeting) 1週間不足代、ホテル代合計約 22万ぐらゐで近畿7リスト かに企画もお預かりしております。

第16回報告 1987年4月18日(土) 東邦15:00~ 出席者: 12名

1. 新入塾生

阿部信一さん (東京慈恵医科大学医学情報センター)

TEL 03-433-1111 内2125

レアリノスを担当。おんぼろ、下之い。

2. 第4回図書館情報サービス大会発表の進捗状況

各グループから4の調査テーマの状況報告があり
山崎塾長より質問が出された。

3. 「記事と説明」について、山崎塾長より発表。

記事(事実を書く)と説明(とまぬかす)を
事例をあげて説明した。一番重要なのは
なぜ Data をとったかか下切にある。(方法の
下之い)。

4. 塾卒業生

神岡桂三さんが塾を卒業します。(4月28日(土))
東邦で卒業式を行いますので参加して
下之い。(6月28日は定例会)

5. MLA Meeting 参加

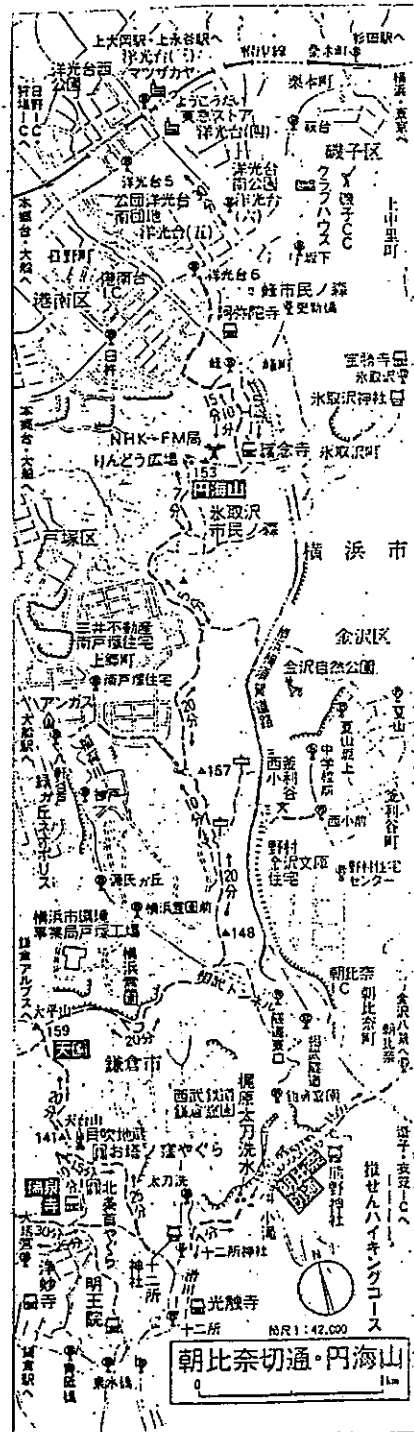
山崎塾長と東邦の牛沢さんが参加します。
6月の定例会にみよげ語をしてくいります。
(出発日が5/16)
壮行会には、順天堂の兼岩氏も参加しました。

6. ニス回す

5月23日(土) 15:00~ 東邦。
第4回図書館情報サービス大会の発表の
練習を行います。

7. セブニマ7 (洋行台→鎌倉 3時間強)

5月3日(日) 根岸線洋行台 10:00 集合
健康のため、山歩きをしよう。
参加者は多胡に連絡して下之い。



。第17回報告

1987年5月23日(土)

東邦大学図書館 15:00~18:00

出席者 10名

1. 第4回情報サービス研究大会発表者より、中間報告がありました。

- ① 日本の総合医学雑誌の分析 (発表者 井上氏)
- ② 日本医学会分科会の専門雑誌の機能の変化 (発表者 大村氏 (代理))

順天堂大の兼岩氏がアドバイザーとして出席され、それぞれの発表にコメントをいただきました。

。次回予告

次回は、6月3日(水) 6:30から、東邦大学図書館で発表の練習会をおこないます。

皆さん、あと少しです。がんばりましょう!

なお、その次には、6月27日(土) 4:00から、東邦大学図書館を予定しています。山崎塾長のアメリカ印象記

並びにスライドの予定。お楽しみに!

。鎌倉イキングが5月3日(日)、雨天決行で、山崎さん御一家、塾生7名が参加。雨の中、御苦勞様でした……

1987.6.8.

Ⅰ '87.6月6日(土) ~ 7日(日)の両日、川崎医大へ行かれた
初回因情報サテライト研究会

無事閉会、塾から8名が参加しました。
開会直後の発表などにこともあり、緊張した
ムードでした。懇親会の頃には
和気藹々、先輩諸氏・諸嬢と討議の
姿も見られました。
連日36°Cを越す猛暑の岡山でした。最後迄
皆様、おつかれさまです。
Proceedingsも頑張りますよ！

これと合わせて
寝られず。

Ⅱ. 反省会と打ち上げ

来たる6/13(土)に 独断で 行いたいと思えます。

反省会 15:00 ~ IMIC ライフライバー (千駄谷 or 行徳木駅下車、
国立能楽堂裏) (03-423-9281、
渋谷区千駄谷 4-22-8)

打ち上げ 18:00 ~ 原宿駅前 アージュビル B1F
747.FL (03-408-1011)

会員は ¥3,000位。

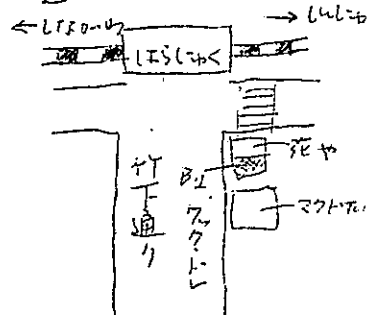
行った人も行かなかった人も、
発表した人もしなかった人も、
みんな参加して下さい。

参加OKの人は (どちらか一方でいい所)

東邦の両館まで。(03-762-4157、内線2443)



Ame.



遅くてすみません。

学術雑誌塾通信 ^{たぶん} No. 18 1987年 7月 7日発行

1. 新入塾生紹介

・川村 順子^{トシコ}さん (麻布大学図書館勤務)

0427-54-7111 内389

＊倉敷での発表を聞いて入塾。大学時代は、バスケットボールとワンダーフォーゲルをたしなむ。

・平輪 麻里子^{マリコ}さん (東邦大学医学部図書館勤務、閲覧、相貸係)

＊大学時代は弓道部に在籍。

2. 住所変更

浜田秀生氏

3. 第18回報告

1987年 6月 27日 (土)

東邦大学図書館 16:00~18:30

出席者 14名

＊ 山崎塾長より、スライド上映による“アメリカの医学図書館訪問記” --- アメリカ医学図書館の現状と今後の展望についてお話がわった。

・IAIMSとは?

・学術的情報(医療、教育、研究など)を統合的に管理していく事である。

しかし、単にそのようなシステムの事を示すのではなく、情報管理における新しい概念の変革運動 (Concept movement) の事を表わす。

・今後日本において IAIMS を考える場合 大切な事。

・日本は、外国のものをプロセスも知らずにただ導入したがるので、後で運営に困る。まず IAIMS を入れらるような土壌を養う事が大切であろう。

以上

文責 宮内

次回も東邦大学図書館にて16:00より
・平輪、宮内く弓道部コンビによる英論文の和訳発表があります。

第19回報告: 1987年7月18日(土) 東邦大学図書館 16:00~
出席者 17名

1. 発表会

- ・平輪 - Fenske, R. E. The Use of Jargon in Medical School Libraries. Bull Med Libr Assoc 74(1):12-15, 1986
医学図書館で使われる専門用語について。新人は学べ!! という論文でした。
- ・宮内 - Lundberg, G. The JAMA Style. Medical Communications. 12(4):105-110, 1984
JAMAの特色を簡潔・明確に書いた論文でLT。

次回は
宮内洋 - 今の
メンバーレポート
についての発表。
ほか、
みなさんも発表し
ましょう。

2. 学術雑誌塾 今後のテーマ決定

中 総合研究: 歴史とこれからの60年代
1960年代のアメリカ医学図書館活動と社会環境

- 9.10月 - 社会・経済・文化状況
- 11.12月 - 医療状況
- 1.2.3月 - 米国医学図書館の状況

・今回は個人調査です。2回に1回は発表しましょう。

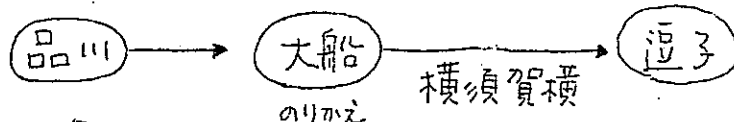
3. 次回は9月12日(土)、13日(日) 合宿です。

場所: 三浦郡葉山町下山口 2040-1
葉山保養所 相洋閣

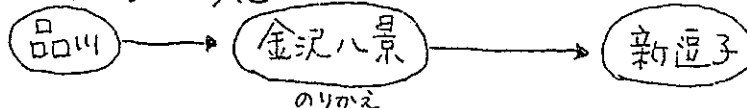
☎: 0468(75)7300

費用: ¥8,100 (2食+税等) + 宴会料 (¥5,400 + 2) ÷ 頭数

行き方: ① 東海道本線 or 京浜東北線



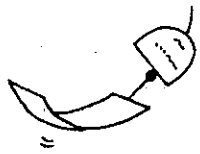
② 京浜急行 特急



中 ①.②とも駅から長井行きバスで長者ヶ崎下車徒歩3分

当日は 16:00 現地集合です。

参加者は (762) 4151 東邦
内線 2443



行く夏を惜しんで 夏季合宿開催



去る9月12・13日、淀子の葉山で合宿を行いました。今回は、山崎塾長をはじめ、今回の幹事役の雨宮さん、黒川さん、平輪さん、その他井上さん、神場さん、熊谷さん、真下さん、応田さん、北川さん、大村さん、宮内さん、更に新メンバーの会田さん、水谷さん、古矢さん、小島さん、あ、それから阿部さんと、総勢17名が参加しました。

〈一日目〉 P.M 5:30~

山崎氏による各種レポートを通じた
アトキチ屋大田の変遷とこれ理念の解説。

1950年代 ... 研究の支援 → 1960年代 ... 教員活動の支援。

P.M 6:00~

夕食 & 宴会。

P.M 9:00~

研究発表会。(司会: 応田さん)

・大村さん ... Lib Inf Sci No.9 「1960年代に於ける米国の学術図」

宮内 このことをサマツウ

・平輪さん ... 黒人問題 の取り組みをサマツウ

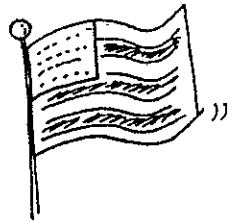
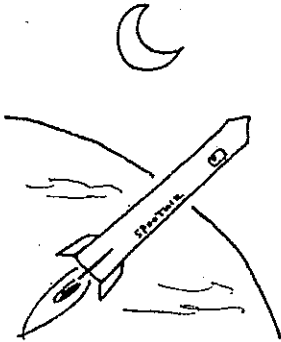
・北川さん ... 1960年代の日米関係について。

・真下さん ... 1960年代アメリカ文化として、映画を視観

・神場さん ...

・井上さん ... ジェズが考察してみました。

★この後、トランプと懇談会が夜を徹して行われました。



〈二日目〉

・A.M 8:00~

朝食

・A.M 9:30まで

宿を出て、浜辺へ。

散策と砂野球、ホテルで食事、青空懇談会など

★夕方には、みなさん帰路につきました。

次回のお知らせ

次回は10月17日(土)です。

P.M 4:00 栗那木田 2000で
今回発表になる人は、
ぜひ何れ1960年代を研究して
きて下さい。

新メンバーの紹介

今回の合宿に4人、新メンバーがいらっしゃいました。

・会田真由美さん
杏林大学で文献探査など
を行なっています。研究集会
の実行委員として。
・古矢エカ子さん
帝京大学で洋楽行本全般を
やっています。

・水谷江美子さん
慈恵医大に今年入りました。
単行本の全般をやっています。
・小島久美子さん
帝京大学で和歌雑誌全般を
やっています。

★水谷、小島、古矢さん、田村清大が今春入りました。

60年代のアフリカについて 第2回目の集刊が 10月17日に
東邦大田でもられました。

参加者は 阿部さん 両宮さん 古矢さん 平輪さん 広田さん
神場さん 北川さん 小島さん 熊谷さん 黒川さん 宮内さん
大村さん 多田さん 牛沢さん 木谷さん 今 初めての
安藤さん 上岡さん 合わせて 17名でした。 山崎塾長は
仕事の都合で 発表会後の夕食会への参加でした。

発表会は 北川さんの司会のもとで行われました。 内容は

- 熊谷さん ... NLMの歴史
- 大村さん ... 60年代の学術田
- 黒川さん ... 60年代 アフリカの主要展覧会と流れ
- 平輪さん ... 黒人問題
- 木谷 ... 医療制度

でした。

夕食会の席で 山崎さんの方から 医学教育 医科大学 文学について
とれたかやうにいろいろ 要望が 出していました。

お知らせ

忘年会について

一部で 泊で勉強とスポーツを
やりという話が出ています。
場所は 山崎さんの方から 自治医大
がよいのでは という案が出ています。
宿泊3000円、交通費:上野~自治
医大まで往復3000円、朝食250円
その他、スポーツ施設は無料との
ことで、合計10000円以下で可とのこと!
他にも案があると思っております。一応
こんな話も出ています。というので、
お知らせしておきます。

追

自治医大の奈良岡さんと相談し、一泊
12月12日(土)~13日(日) 1泊で
仮予約もしてあります。11かかではどうか
楽しくやりた!!と思っております。 山崎お!!

新メンバー

凸版印刷の上岡さん。
帝京大 灌之口病院図書館の
安藤さんのお二人です。
宜しく...

次回

第3土(11月21日)は 山崎さん
の都合が悪いというので
です。第4土の 11月28日
に変更になりました。
時間と場所は、いつもの通り。
4時から 東邦大田です。

(山崎より、11月21日は大阪のライオンズ
図書館研究会で発表おこなうことになり、
変更の件よろしくお願ひします)

総合研究『私たちの60年代』の出版

学術雑誌「整」昭和62年度後期

1. 今後の予定

各自の関心テーマ（学術情報政策、医療、政治、異人問題、映画、絵画、音楽、医学図書館、医学教育...）をさらに深めて下さい。特に、今後は日本やアメリカの医学図書館の動向、雑誌「医学図書館」やBMLAの読後感想、医学図書館員教育、MEDLARSなど、医学図書館活動に関連するテーマについて、取りあげてもらいたいと思っております。まだ発表していない人は、これらのテーマにチャレンジしてみてください。

2. 助成金の申請

日本医学図書館協会からの助成金をもらうよう申請をすることにしてあります。総額が10万円ですので、他に申込があると分けあうこととなります。昭和の板橋さんに協力してもらい、広田君から申請を出していく予定です。この資金で、総合研究「私たちの60年代」といったような報告書をまとめたいと思っております。印刷費用は、7-700原稿で提出し100頁を200部印刷して10万で出来ます。

3. 出版予定

63年4月 原稿まとめる

63年5月 出稿 - 印刷 - 発行（出稿から印刷まで約20日間ぐさ）

63年6月末 配布（お5回図書館情報サービス研究大会でも配布）

4. 編集担当と原稿の提出方法

編集担当：広田、上岡、宮内、黒川、吉矢、神場、山崎

原稿提出：各自のテーマをA4版に7-700で4枚にまとめる

原稿締切：昭和63年3月末

編集構成：テーマの調整、原稿の査読

60年代をめぐりAnnotated Bibliographyを作成する

整の歩み、整生名簿

11月28日、4:00～東邦大学で60年代のアメリカについての発表。
 参加者は、山崎塾長はじめ、板橋さん、阿部さん、雨宮さん、平石さん、
 広田さん、神場さん、上岡さん、北川さん、宮内さん、水谷さん、大村さん
 多胡さん、牛沢さん、真下さん、前、IMECの宮下美香さんが新メンバー
 増えました。

・当日の発表は、

神場さん……60年代の異人問題

板橋さん……60年代の日本医学図書館協会

・お5回図書館情報サービス研究会大会について

88年6月25(土)26日(日)東京都養育院で開催されます
 このうち、CEコースのプログラムを雨宮さん、牛沢さんが担当します

プログラム内容について希望がありそうです。ふたりに連絡して下さい。

※開催記念のTシャツがあります。ロゴマーク募集中。

採用された方は、豪華賞品あり？

・日本医学図書館協会奨学金申請について

60年代のアメリカについて、それぞれ発表したのを、その形にまとめる

ため、広田さんの名前で、日本医学図書館協会に奨学金の申請をします。

・出版印刷見学会。

12月26日、4:00～現地集合。

地図が同封されていますから、迷わずに行ってください……。

・次回、1月23日(土)4:00～TJです。

第23回報告

1987年 12月 12日 ~ 13日

自治医科大学地域医療研修情報セミナーにて。

Special hosts : 奈良岡さん, 法師さん (自治医科大学図書館)

Special guests : 山口さん, 江口さん (浜松医科大学図書館)

他. 出席者 11名。

発表 12月13日 AM9:00 ~ 12:00 (雪)

① 山口さん

思い出の Index Medicus

② 山崎さん

1世紀前のアメリカ医学教育史

③ 阿部さん

60年代のアメリカでの医学教育

④ 井上さん

60年代のAMAの活動

⑤ 雨宮さん

60年代のアメリカ - ベトナム戦争より

午後より、自治医科大学図書館の見学。

又、体育館にて、スポーツをして、心ゆくまで楽しむ。

(ちなみに、バドミントンと卓球、バスケットボールをしました)

・奈良岡さんと法師さんには、大変お世話になり、本当に
いろいろと楽しませていただき、ありがとうございました。

12月26日 Toppan にて見学会です。

その後

忘年会

とのことです。

年明けは、1月23日(土)

PM4:00 ~

いつもの東邦大学にて

1. 凸版印刷(株)にての電子出版事業見学説明会

上岡さんのコーディネーションで、電子出版について岩田氏、CTS事業について平田氏、CD-ROMのデモ説明について斎山氏より行ってもらいました。

1970年頃からおきた印刷のCTS(Computer Type Setting)システムによる製作の普及を技術的背景として、1980年代中頃からMT(磁気テープ)をCD化し、メディアをかえて提供できるようになった。多様な検索も可能とし、また蓄積した情報の加工・利用にすぐれており、今後有望なメディアなるとのことであった。ただし、ニーズも含めたCD-ROM製作をおこなっていくことが基本的に重要であり、CD-ROMにかかわる情報源はどのようなものか企業としては明らかたしな意向であった。この意味において、マーケティングこそ重要であるということである。上岡さんご苦労様でした感謝多。

その後、Nihonbashi-tei という LTD 調剤店で忘年会も行いました。
この店とてもgoodです。



2. 1988年の勉強計画書の提出について；塾長より塾生へ

塾生も25名前後となり、個々に調査や読書などについて助言をすることが、難しくなっています。私(山崎)としては、みなさん方のコミュニケーションをはかり、楽しくやることが基本ですが、塾としてしっかり勉強していく場になるよう努力したいと思っています。毎年1編ぐらゐのテーマ(レポート)を書き、毎年10~15編の英語論文を読み、共同でも良いし単独でも良いから調査を行いデータを整理するといったことを、みなさんが映画を観たり、音楽を聴いたりするのと同じように、気軽に取組んで欲しいと願っており、塾をそのための場として活用してもらいたいと思っています。

そこで、塾生1人1人の1988年の勉強計画を、あまりカタ〜ク考えなくてよいですから、無理のない範囲で私に出して下さい。A4版レポート用紙に書いて、1月23日(土)までに提出して下さい。もし、似たような問題意識のある人がいたら、小グループを組んでも良いし、私としても具体的なカレッジセッションができると思います。そして、なんとといっても塾生一人一人の自己管理につながると思っています。(エライコッチャ!)

3. 塾の運営について：楽しくワイヤラうとおもいます、良いアイデア募集します!

電話連絡ネットワーク、運営会費報告、1988年の課題、円滑な運営も行うための工夫、合宿や見学会の案など(1月23日の塾で検討しましょう)。

4. 1/23日、'60年代の発表者の人、何人がやってネ!

第24回報告 1988年1月23日(土) 16:00~東邦大学図書館1=2
 出席者は18名
 (特別参加:大阪民博の中島さん)

◎ JMLA 奨学基金申請について

通信NO.22の通り、"60年代のアメリカについて"と1つにまとめます。編集委員は
 広田さんを代表とし、神場さん、宮内さん、黒川さん、上岡さん、古矢の計6人です。
 詳しい内容は同封の別紙を参照して下さい。

◎ 健康医学雑誌調査について

3月に行われる生物医学研究学会の発表に向けて、健康医学雑誌の出版状況、
 記事分析、所蔵状況の3つのポイントから調査します。メンバーは井上さんを中心に
 神場さん、宮内さん、熊谷さん、吉田さん、黒川さん、宮下さん、北川さん、平輪さん、古矢の
 10名で、各自1タイトル、計10タイトルの予定です。



◎ 発表 ... 牛沢さん "CEJ-2" について

JMLAのCONTINUING EDUCATION COURSEで実際に行われた内容を参考にし、
 6月に行われる図書館情報サビ2研究大会で行うプログラムの案を出し合いました。

お知らせ、2/17(水) ポリッジします。
 17:00 品川駅西口の702集合。
 参加費は 2,000円です。
 詳しいは広田さんへ。

— 山崎塾長より —

今年の勉強計画をまとめて出した人は、今書いすくに塾長に送りましょう。(A41枚です)
 縮小コピーをして皆さんに配布する予定です。今後の活動に役立てましょう。

次回は2月27日(土) 16:00~東邦です。
 60年代の発表まとめての人は、ししょう。

会計報告 1987.1~12



<収入> 年会費 1,000円 × 19人 = 19,000
 (宝鑑残り) その他 3,950
収入計 22,950

<支出>
 塾費代 10,439
 電話代(倉敷へ) 700
支出計 11,139 残 11,811円

'88の年会費は1ヶ月100円×12ヶ月=1,200円としたいと思ひます。(雨宮さんへ)

通信費1,000円は7ヶ月ほどです。尚、残金は'88年に繰越し可なりと承下さい。

学術雑誌塾通信 NO.26

1988年3月1日発行

日時: 1988年2月27日(土) 16:30-19:00

場所: 東邦医科大学図書館

出席者: 山崎塾長, 板橋さん, 山口(直)さん, 多胡さん, 大村さん,
広田さん, 阿部さん, 川村さん, 黒川さん, 井上さん, 神場さん,
上岡さん, 古矢さん, 真下さん, 雨宮さん, 牛沢さん, 会田

1. 1988年勉強計画 [山崎塾長より]

2月27日現在, 山崎塾長のもとに集まった12編を縮小コピーして配布。
実行委員会を作りたいので, 次回(3月)の塾で選挙を行ない。男女計6人選出する。

2. 「私たちの60年代」編集委員会報告 [広田編集委員長より]

「総合研究「私たちの60年代」の出版」のプリントが配布され, それに従って
報告が行われた。詳細はプリントを参照のこと。

① 本日の出席者による。各自のテーマについての若干の解説

② 「60年代の書誌」について [広田]

自分が今まで読んだ60年代に関係した書物(単行書)の書誌解題
を, 1件につき400字詰め原稿用紙1枚以内にとめる。3/5(土)まで。

③ 執筆上の注意 [山崎塾長]

評論的・教科書的にならないように, 写真・絵・切り抜きなどを入れて
ビジュアルに, などの注意があった。

3. 健康医学雑誌調査 [井上さんより]

対象誌 — 毎日ライフ, 暮らしと健康, 私の健康, 壮快

現在完了している調査... 健康医学雑誌の出版状況, 創刊年の分布。

内容の分析 (執筆者の所属機関・役職,

特集記事の主題の分析)

これから行っていく調査... 各誌の記事区分, 「ニュース」の分析, 広告の分析。

4. 「私たちの60年代」発表 [古矢さん]

LC MARC プロジェクト について。

5. 「60年代」テーマの話し合い & 山口インクループの打ち合わせ。

次回は3月19日(土) 16:00~東邦にて

M.Aida.

日時：1988年3月19日(土) 16:00-19:00

場所：東邦大学医学部図書館

不出席者：阿部、会田、安藤、浜田、平石、上岡、川村、熊谷、真下、水谷、牛沢、吉田の12名(出席は、14名でした。)

1. 「私たちの60年代」編集委員報告

・報告③を中心に、「60年代の書誌」と「私たちの60年代」の本論の書式について説明

- ・用紙サイズはA4.
- ・各マージンは、そろえる。
- ・用字で、英数は原則的に半角。
- ・表・図・写真は原稿中に入れて、原稿提出(各自レアウトをお願いします。)
- ・「60年代の書誌」は19日提出ということで、約45題が集まり、神場さん、黒川さんに編集を担当してもらいます。

2. 「健康医学雑誌調査」(26日(土)の生医回研で発表)

・前回報告に加え、各誌の記事区分などについて報告がありました。

3. 「私たちの60年代」発表

- ・広田「貧困との戦い」と「偉大な社会」の意味について。
 - ・1964年8月 経済機会法
 - ・1965年7月 高齢者健康保険制度(Medicare)
- ・山崎「Research (Handbook of Medical Library Practice, 3rd ed., 1970, 第8章)をめぐって」
 - ・Research Paperを書く。
 - ・データを取る。(觀念の世界はなし。)

4. 「ジャーナルクラブの案内」

同封の別紙参照。

5. 学術雑誌塾実行委員会委員選出

・選挙の結果、雨宮、広田、井上、神場、黒川、大村の6人が選ばれました。皆さん、御協力ください。

6. 次回。4月16日(土)、東邦で16:00です。次回は、必ず出席しましょう。

学術雑誌塾通信 No.28 1988年5月1日発行

1988年4月16日(土) 16:00~18:00 於東邦大学医学部図書館 セミナ一室

「私たちの60年代」(仮題) 原稿/切日/LT= 16名提出

編集委員は16名提出の皆不様、ご苦労さまでした。

1. 研究発表 (井上、広田、多胡) 「60年代」の各々のテーマを発表
Bull Med Libr Assoc 71(4):400-402, 1983
2. 訳読 (大村) 'Library service to dental practitioners'
3. 年間スケジュール: 塾長より、下記の通り年間スケジュールへ発表されたLT=
Let's learn from each other!

学術雑誌塾 スケジュール

1988年4月16日

1. 「60年代」の出版

掲載費 4000円(1A) 8部支給, 巻生引取り 2000円(1A) 4部支給

* 巻生の巻用頁数は、論文を出した人4000円で、訳読は11人分 2000円です。
図書館情報サービス研究会と1部3000円程度で70部を販売する

2. ケル-7研究

6ケル-7にわかれて行う。7月の合宿時にテーマを決め、89年1月の合宿で発表
(広田、神場、井上、雨宮、大村、黒川は6ケル-7のセブ役とする)

3. 訳読宿題 (対象テーマ: 学術雑誌刊行の経緯、ケル-7研究、60年代の学術のキーワードなど)

巻生は1人4本の外国語論文の訳読を行う。A4レポート用紙(2枚程度に
抄訳先行)提出する。17.年1-2回は、読んだ内容を発表する。発表時間1人15分
人数はコレとする。

4. 個人研究発表

88年度勉強計画に基いて各自で行った内容を発表する。発表時間1人20分。

	発表	訳読	抄訳提出期限
4/16	60年代発表: 井上、広田、多胡	大村	
5/14	" : 会田、北条、平輪	雨宮、神場	
6/18	3-0、11、科学振興委員会と 伴112の医学図書館		第1ケル訳読提出
7/16-17	合宿 (16-17, 富士吉田)		
8/20	個人研究: 平輪、管内、水谷	多胡	
9/17	" : 菅下、阿部、熊谷、中嶋	川村	第2ケル
10/15	" : 雨宮、古矢、真下	上田	
11/19	" : 黒川、渡田、大村、山崎	水谷	
12/17	" : 神場、平石、北川	菅下、会田	第3ケル
1	合宿: 研究委員会(ケル-7)		
2/	個人研究: 上田、川村、多胡	大村	
3/	" : 牛込、吉田、井上	小島	第4ケル

皆さま、G.W.は女内可でLT=か。飛石石にいた人も10大連休で、に人も、

次回は5/4(土) 16:00~ 東邦セミナ一室にて。

文責: 雨宮

1988年5月14日(土) 16:00~ 東邦大学自修館 出席者 14名

1. 1988年の勉強計画について

①88年の総合テーマを「日本の学術雑誌」とし、6つの小グループにわけて、検討・調査します。グループわけは、7月の合宿でおこないます。

②個人研究の発表は、学術雑誌を対象とした調査や勉強の発表だけでなく、各自の関心のあるテーマに基づいたものでも可とします。

③訳読は、グループ研究に関する文献、個人研究に関するペーパーでもかまいません。ただし、発表の前月までに、論文の書誌事項を知らせるようにして下さい。

④「60年代」を「学術雑誌塾報告 1」とし、毎年 1冊を業績集として発行していきます。

2. 編集委員会より、論文の校正・諸注意がありました。予算の関係から論文集はB5版になります。なお、代金は 6月の塾の時に、現品とひきかえにお支払い下さい。

サービス大会で70部は売らないと赤字になるそうです。皆さん、根性で売りつけましょう！

3. 訳読・雨宮 Garfield, E: Is Japanese Science a Juggernaut? Current Contents : life science, 30 (46) : 3-9, 1987.

神場 Morton, L.T. : How to use a medical library. 5th ed., p.13-16, 1971.

4. 発表 平輪 黒人問題について

★次回予告★

次回は 6月18日(土) 16:00~ 東邦大学 自修館 (図書館より奥の突き当たりです) で予定しています。山崎さんの海外レポート、会田さんの発表を予定しています。

★探しています★

皆さんの大学・図書館で、15~25人収容の会議室はありますか？ 見学を兼ねて、東邦さん以外の図書館で、塾を開こう！という話も出ています。土曜の午後の使用許可がおりそうな図書館の方、是非、山崎さん若しくは幹事へご一報下さい。

★★号外★★

◆次回(6月18日)の塾の場所が変更になりました!

今回は昭和大学で行います。時間は4時からです。

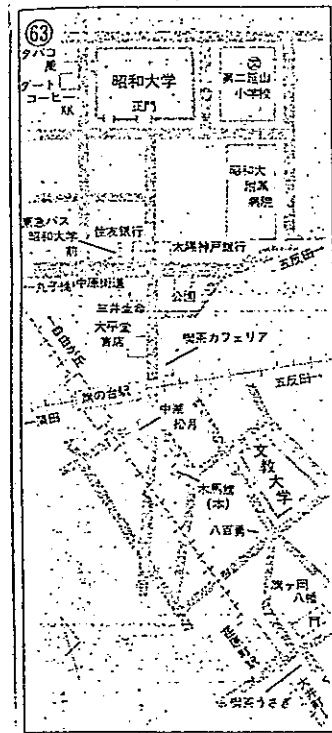
〔場所〕昭和大学病院入院棟17F 会議室5

(池上線 または大井町線 旗の台駅下車 東口から徒歩7分)

なお、6時30分から60年代出版記念パーティーを企画中。場所はタワーレストラン昭和(だと思ふ)で、会費2千円程度です。塾に遅れた方も、こちらには是非駆けつけましょう。

(詳細は編集委員より改めて、通知が行くと思います。)

・昭和大学図書館を見学ご希望の方は3時までに図書館に集合して下さい。広田さんが引率して下さい。(病院と図書館は少々離れています。右の地図を参照して下さい。大学校舎の時計のある真中の建物の2階です。)



◎品川区旗の台1-5の8
⑤(附)1151
◎池上線・大井町線旗の台駅東口下車、徒歩7分。

♡皆様、毎度おなじみの訳読です。もう準備はお済でしょうか?
通信の27号(本当は28号にあたるんですが)5月発行の「学術雑誌塾スケジュール」のタイムスケジュールによりますと、6月18日が「第一クール訳読提出」となっています。つまり、次回に訳読提出が宿題となっています。出席の方、欠席の方も原文とA4レポート用紙2枚の訳読を、塾長に提出するよう心掛けましょう。(出来上がらなかった方も途中まででも結構です。とにかく提出しましょう。挑戦することに意義がある!)

この件に関するお問い合わせは、広田・大村までお願いします。

学術雑誌塾通信 一 号外 — 29 Pt. 3

6月18日の塾について

・場所 昭和大学病院入院棟 17F 会議室5

(東急旗の台駅 東口出口、左おれ、旗の台東口商店街を通り、目の前の17階立ての建物の17F です。B1よりエレベータでお越しください)

・時間予定

P.M. 3 ……サービス大会発表予行練習

3・15— 牛沢「Medical Library Association の継続教育コース」

3・30— 廣田「総合研究：私たちの60年代」

3・45— 宮内「健康誌の出版動向とその主要誌の分析」

4・00— 大村「学会発表における審査の実態」

4・15— 北川「購入外国雑誌の再評価と活性化」

P.M. 4・30………会田さん発表

P.M. 5・00………山崎塾長報告

「ヨーロッパ科学編集者会議とイギリスの医学図書館」

P.M. 6・00………出版記念食事会 (会費 2000円)

※ 発表ではスライド、OHPが使えます。

18日は大金がいりますが、くれぐれもなくさないようにしてください。

※ 3時からはじまりますので都合がつかない人はできるだけ早く来てください。
なお、昭和大学図書館の見学は中止にさせていただきます。

廣田

1. 6月18日(土)の塾

- オ5回図書館情報サービス研究大会の発表予行演習を行いました。
発表者は、牛沢、広田、宮内、大村
- 60年代研究発表：会田「1960年代における米国の医学教育改革」
- EASE (Basel)と伴った医学図書館の旅：山崎
EASEはEuropean Association of Science Editorです。
- なんとっても出版記念110パーティ
昭和大学病院17階レストランも利用し、東京の夜景を見ながらエンジョイしました。
広田委員長をはじめ委員のみなさんありがとうございました。
- 今後の雑誌塾報告について
編集委員会は楽しいのでぜひ希望も出して下さい。オ2号の総合研究テーマは「日本の学術雑誌」です。

2. 第1クール抄録の提出状況

下記の人々から、訳読抄録が提出されていきます。まだの人も、がんばって下さい。

1. 北川 Ruth MS: Where will technology put the library of 21st century.
BMLA 75(1) 1-6.
2. 牛沢 Thompson RH: An expert system for document retrieval.
IEEE 1985 p.448-456.
3. 会田 Schwartz, DG: Reference service standard, performance criteria, and evaluation.
J Acad Librarianship 12(1):4-8, 1986.
4. 広田 Berry, EM: The evolution of scientific and medical journals.
NEJM: 305(7):400-402, 1981
5. 黒川 Bailar, JC III: Journal peer review; the need for a research agenda.
NEJM: 312(10) 654-657, 1985
6. 神場 Morton, LT: How to use a medical library. 5th ed, 1971. (Periodicals p.13-16)
7. 大村 Weintraub, WH: Are published manuscripts representative of the surgical meeting abstract?
J Periatric Surgery 22(1):11-13, 1987.
8. 井上 Lundberg, GD: Getting the information out faster and some good news about MMWR.
JAMA 249(11):1483, 1983
9. 川村 Halliday, S: A journals binding system at sunderland polytechnic using d-Base II.
Program 20(4):394-408, 1986
10. 宮下 Davis, JY: [革新への決意とOCLCの飛進] Library and Information Science Research
6(1):43-, 1984
11. 宮内 Brandon, AN: Selected list of books and journals for small medical library
BMLA 75(2):133-165, 1987

各自のテーマをしっかりと、ゆくりで良いですから、訳読して下さい。提出は抄録でかまいませんが、良いテーマは、とにかく全訳してみたいとお思います。

3. 合宿状況

合宿を7月16日~17日、自治医大で行います。集合時間は、(土)の7:00(夕方)です。

委員は、広田、大村、平輪、阿部 の4名です。7:00から4は委員で検討します。

7:00から	概要	7/16(土)	7:00-8:00	夕食
			8:30-10:30	Scientific Meeting
		7/17(日)	9:00-12:00	Scientific Meeting
			1:30-	? Sport time

(記録 Yamazaki)

グループ研究テーマのコメント

山崎 茂明

前日の合宿で、グループ形成と取り組み方の概略が話し合われました。しかしまだテーマの具体化に当たって十分なグループや、メンバーの意見がまとまっていないところなど様々だと思います。一度、各グループと集まり、もう一度スケジュールを相談してみてください。そして、なんとしても文献を読んで下さいね。あまり器用なやらずに、できるだけ正統的にとりくんで下さい。各メンバーの意見がまとまらないグループは、各自が文献を読んだうえで調査計画をまとめ、それをもとにメンバー全員で検討して下さい。グループ別のコメントを下記にメモしました。

1. 学会誌の機能

まず、学会の機能(役割)や学会の形成史といったところを理解するところから始めて下さい。身近には医学教育のB/Mに特集がありました。また、調査対象は、日本医学会内科会のものになるのか、特定学会にしようとするのかなど検討して下さい。文献調査には、IMのPeriodicalsを望んでね。

2. 日本生理学会の業績分析

生データをとかくくくり、日本の生理学研究の現状とさらなる評価を行えるような分析視点を、見つけたいと思います。表裏の名誉Prof Dr. 酒井からの依頼テーマもあり、基本的な集計結果が出たら、先生にも参加してもらおう予定です。

3. 記事の扱い方の比較

具体的なテーマを明らかにするまで、傾向がわかりやすいです。また、メンバー各自の考えにもゆがみがあるようです。やれどけ、メンバーで良く話し合ってください。神場くんはよくね。

4. Peer Reviewの制度

まず、文献調査をして下さい。そして、じっくり文献を読み、基本的な知識をつけて下さい。調査をするに焦らず、文献検討も介担してやっていくのが良いと思います。

5. 日本のCore Journal

このテーマを明らかにするためには、どのような調査対象をえらぶかが重要なポイントです。メンバー数も多いため、体力もつかして行える強味があります。Coreの意味は、実は多義的で、不明瞭なものです。私には、^{文献を集める、}現行医学を料理してみたいと思います。

6. 明治期の雑誌

書庫にとじこもり、ホコリを吸うことで、良い発見を得られると思います。黄ばく変色したページから、どんな歴史を見つけることができるか、楽しみたいと思います。

8月20日(土)の翌日、計画表や基本文献リストなどをもとづいて、みんなに説明できるようにして下さい。

I. 夏の会宿 7月16日-17日 於自治医科大学地域医療情報研修センター

1. 参加者

奈良岡(自治) 青木(順天) 法師人(自治)
石沢(東京厚生年金病院)

山崎 阿部 雨宮 江口 神場 浜田 平石 平輪 廣田 井上
門屋 川村 北川 熊谷 黒川 真下 宮内 大村 多胡 中沢

2. 内容

17日	19:00-21:00	食事
	21:00-22:15	山崎さん講演 (司会: 廣田)
	22:15-	グループ研究のテーマについての説明 (司会: 井上)
		懇親会
18日	9:30-11:00	青木さん講演 (司会: 宮内)
	11:00-12:30	グループ分け. 各グループで打ち合わせ
	14:30-	バドミントン大会

3. グループ研究. テーマとグループ分け.

今回の会宿の目的のひとつにグループ研究のグループ分けがありました.
以下のように決まりました.

- | | |
|-----------------------------------|------------------------------|
| ① 学会誌の機能
雨宮 阿部 会田 | ② 日本生理学会の業績分析
山崎 平輪 井上 北川 |
| ③ 記事の扱い方の比較
神場 門屋 熊谷 真下 多胡 | ④ ピアレビューの制度
黒川 安藤 宮内 |
| ⑤ 日本のコアジャーナル
大村 江口 浜田 川村 小島 宮下 | ⑥ 明治期の雑誌
廣田 平石 渡辺 |

II. 新会員

江口敏一 勤務先 浜松医科大学附属図書館 (浜松市半田町3600 7431-31)
TEL 0534(55)2171
FAX " " 1626

渡辺 貴夫 勤務先 (見方) 国際医学小情報センター

III. 次回 次回は 8月20日 16:00より 東邦大学 図書館です

IV. 最後に.

今回の会宿 奈良岡さんと法師人さんには、会場確保等お世話になりました。また自治の図書館からおかし、飲み物をいただきました。
板橋さん、奈良岡さん、青木さん、山崎さん、さしれどもありがとうございます。
「わたしはあなたの水着姿が見たかった」とだれかが言っていました。

(北川正路)

1. 8月20日(土)の塾 所:東邦

・参加者 (敬称略)

山崎, 広田, 黒川, 北川, 神場, 井上, 平輪, 宮内
雨宮, 渡辺, 門屋, 阿部, 安藤

・研究発表

平輪: 映画にふける図書館
× ベルリン天使の詩

宮内: 所蔵雑誌のタイトル数と雑誌担当者数について

・研究補助金について

今度、5万円の研究補助金かいたたけることになりました。

そこで、2万円を塾の封筒を作ることに、残りとはいごとを

各グループの活動資金に割り当てます。

ちなみに各々6,000円です。

②、各グループの進行状況

神場: 9月までに調べた疾病を決め、10,11月に言調査。

広田: 明治期に刊行された雑誌の言調査、カード化しています。

雨宮: 文献を読んでいます。

井上: 基礎データを8/27から作ります。

黒川: 文献を探しています。

次回は9月17日(土) 東邦で16:00～です。

通信遅くなってすみませんでした。今度には休みホリしています。

(安藤)

I. 9月17日<土> 塾の報告

場所: 東邦大学医学部図書館

時間: 16:30 ~ 18:00

出席: 山崎, 阿部, 木下(旧姓:会田), 雨宮, 江口, 沢田, 平輪,
廣田, 井上, 神場, 川村, 北川, 黒川, 真下, 宮内, 大村,
多胡, 牛沢, 渡辺, 堀江(オザバ) <以上20名, 敬称略>

各グループの作業進行状況~中間報告~

◎記事の扱い方の比較 Gr. (発表: 神場)

「現在、対象とする“疾病”を決めている」

◎明治期の雑誌 Gr. (発表: 廣田)

「対象雑誌名を所蔵目録レベルで確認した。
今後は理物に当たってゆく」

◎日本のCore Journal Gr. (発表: 大村, 沢田)

「現行医学88年版収載の雑誌所蔵館数を算出中。
次回、文献リストのReviewを提出する予定」

◎Peer Reviewの制度 Gr. (発表: 黒川)

「学会誌の機能(雨宮) Gr.との合併を試行中」

◎日本生理学会の業績分析 Gr. (発表: 井上)

「日本生理学会業績集のカード目録化を達成
各カテゴリ-別ソート, 誤読は10月中旬を目止にしている」

II. 次回. 予定

10月15日<土> 16:00 ~ 東邦にて

日本生理学会から頂いたカンパ(8Gr. 6000円)大事に違おう!

by Hideo Hamada

I: 付記

明治期の雑誌 Gr. (廣田・渡辺) 発表

目的：現物確認による書誌事項の Visual な徹底把握をねらう。

調査対象：明治期刊の雑誌 247冊を目録レベルで確認した。
これを元にカード目録化し、発行年順等にソートする。
これを用いて今後作業を進める。

方法：重要と思われる雑誌を比較検討し、子-マゾ・カテゴリ-別
重要誌を断定する。下史的変遷を加味。

今後：現物確認に入っている。表紙などを写真に収め、歴史的事実を捉む。
Review としてペーパー化。またカタログ化もねらう。

結果：M. 8~9 年刊行誌多し。M. 20頃、学会誌出現。M. 70頃、臨床商業誌。

参考文献：「明治期の雑誌-文献リスト」A4判-2枚 11 papers 確認。

日本生理学会の業績分析 Gr. (山崎) 発表

生理学会 / 研究世界の理解より始めている。

提出しジュエ：「生理学研究の状況 (1988. 9/15 山崎啓明)」A4判 2枚 4p. あり

I: 付記② 抄訳提出

牛沢：Backus, J. E. Davidson, S. and Rada, R. : Searching for
Patterns in the MeSH Vocabulary. Bull. Med. Libr. Assoc.
1987: 75(3) : 221~227.

北川：Williamson, M. L. : Seven Years of Cancellations at Georgia
Tech.: Serials Librarian 1988: 9(3) : 103~114.

廣田：Sengupta, I. N. Wyatt, H. V. : Growth of Specialist Journals in
Seven Biological Disciplines. (Research Note): LISR : 1987 :
239~243.

~~神場：It's Over, Debbie : A Piece of My Mind : JAMA 259(2): 272, 1988~~

学術雑誌塾通信 No.34 1988年10月19日発行

10月15日(土) 報告 東邦大学医学部図書館 16:00~18:00

出席者 山崎 牛沢 大村 宮内 宮下 真下 黒川 北川 神場
井上 広田 平輪 浜田 雨宮 阿部

(1) 日本の雑誌のレジャーシステム 山崎塾長
5月にBaselで行なわれたEASE(European Association of Science Editor)
での発表のJapanese versionでした。
日本の欧文誌は外国よりも国内で流通しているものが多い。
Impact factorが高くRejectionの多い雑誌に良い雑誌が多く集まっている
ということができたということでした。

(2) 学会発表に対する意識：研究者・臨床医に対するアンケート調査より 阿部
研究者の立場からみた学会発表の事前審査。研究者の職制、キャリア等
の違いによる意識の差を明らかにしたものでした。

(3) 学会発表における審査の実態：日本医学会分科会における調査 雨宮
学会の立場からみた学会発表の採否決定における審査の実態を
アンケート調査で明らかにしたものでした。

阿部さんと雨宮さんの調査は11月5日に三田田・情報学会で発表の予定
です。それぞれの研究に関連性があり、両方一緒に聞くことができましたので
より興味深く感じることができました。

(4) この日印象に残った山崎塾長のコトバ抄録(但、ジミバ誤記のオソレあり)
◎ 発表の時の配布物は、“お土産”と考えて、発表はおくまで顔と声(と
スライド)で勝負スベシ!
◎ 発表は自分のいいことをいかに解り易く相手に伝えるかということである。
(その為には、グラフの種類、並べ方、等工夫が必要なのデアル。))

次回は11月19日(土) 東邦大学医学部図書館 16:00~の予定です。

不許複製 正確的報告努力結果的欠陥的報告反省者 = 神場

11月(9日) 報告

場所: 東邦大学医学部図書館自修館

時間: 16.20 ~ 19.00

出席者: 山崎 阿部 井上 牛沢 江口
安藤 木下 黒川 小島 多胡
大村 平輪 広田 真下 宮下
岡山 (大阪から15ヵ月しました)

I. グループ研究進行状況報告

(1) 日本のコアジャーナル (大村, 宮下)

現行医学'88年版による所蔵館数調査結果報告
文献リストの説明
今後は主題別に見ていく。

(2) 記事の扱ひ方の比較 (多胡)

"川崎病" により日米の違いを比較するため、JIMと医中誌を
調査し、毎年ごとにカードを作成
文献リスト作成、その中の1論文を翻訳

(3) Peer Review (黒川, 安藤, 木下, 阿部)

文献リスト作成、その中の論文を翻訳

(4) 明治期の雑誌 (広田)

300誌をリストアップ、100誌コピー

今後は眼科に絞ってみる

(5) 日本生理学会業務分析 (井上)

原著論文と抄録とを分け、雑誌ごとにまとめる

II. 米風の医学教育 (山崎)

毎回発表する予定です!!

次回は、12月17日(土) 日知大学 会議室5で 16時からです。

18:30からは忘年会があります!!

12月の塾で年間費(¥1200)、忘年会費(¥2000)、合宿費(¥4000)を
集めます。欠席の方は、誰かにたのんで下さい。

報告者: 江口

学術雑誌塾通信 No.36

1988年12月23日発行

Ⅱ. 12月17日(土) 昭和大で行われた塾の報告 出席者 16名
16:00-18:00

- 各グループ中間報告
- 冬合宿の連絡事項(詳しくは裏面を見て下さい。)
- 山崎さん発表 — アメリカの初期医学教育について — 資料2枚西配布
- 新人の抄訳発表はありませんでした。当たっている方次回がんばって下さい。
- 忘年会—勉強会の後、昭和大のラウンジで南が来ました。幹事の石田さん、どうもご苦労様でした。

④. <お37-ルの読読提出リストです>

Champese, MA: Adopt a journal?

Bull Med Libr Assoc 67(2):262-263, 1979 (大村)

Stossel, TP: Reviewer status and review quality.

N Engl J Med 312(10):658-659, 1985 (黒川)

Morgan, P: Peer review in the medical journals.

Br Med J 292(8):646, 1986 (黒川)

Williams, E: The process of peer review of scientific manuscripts

JAMA 260(12):1761, 1988 (安藤)

Morton, L: How to use a medical library

pp 66-70: Compilation of bibliographies (神場)

Stossel, TP: Reviewer status and review quality.

N Engl J Med 312(10):658-659, 1985 (木下)

Brandon, E: The development of medical biography

Chapter 1, MLA, 1954 (牛沢)

Goldman, L et al: Fate of cardiology research originality published in abstract form.

N Engl J Med 303:255-259, 1980 (石田)

「電子時代の学術雑誌」(JLA刊行)が12月末に出版されます!

Lambert, J "Scientific & technical journals"の翻訳です。山崎が英訳しており定価の25% disc 2,100円で入手できます。20部ほど確保しておきたいので、ぜひ買ってください。

3. 次回は 1989年1月14日~16日

箱根強羅で合宿です。

とれどお皆さんよい X'mas and New Year を!



学術雑誌塾冬合宿(第4回)のおしらせ

1222SS

場所:箱根強羅ビラ

神奈川県足柄下郡箱根町強羅1300-131 TEL 0460-2-1416

日程:1月14日(土) 18:30 現地集合

19:00 夕食会(ホテルのレストラン)

20:00 Scientific Meeting

各グループごとの話し合い

15日(日) 8:00 朝食

9:00 Scientific Meeting

各グループ中間発表(20分ぐらいずつ)

11:00 特別セッション

・青木さん

・宮内さん =J Pharmaceut Sci の分析=

・山崎さん =referee system について=

12:30 昼食

引き続きMeetingを行いたいグループは続けて下さい。

19:00 夕食

16日(月) 8:00 朝食

9:00 自由行動、解散

14日小田急線で行く人は:

16:00 新宿小田急線南口改札前集合(JR南口改札となり)

16:30 新宿発 17:25 箱根湯本着 17:32 同発(箱根登山鉄道)

18:10 強羅着 タクシー 18:30 強羅ビラ着

諸経費: ・交通費 約2000円X2 ・宿泊費 4000円X2

・夕食代 2000円 ・朝食代 1500円

* 集合時間に遅れる人は幹事(宮内、黒川)に事前にご連絡下さい。

夕食の自炊は北川さんの強力な反対によりボツです。

1月14, 15, 16日 報告 (合宿)

場所: 紀州鉄道箱根強羅ビラ

参加者: 青木さん, 山崎, 阿部, 井上, 牛沢, 雨宮, 広田
神場, 北川, 黒川, 大村, 宮内

内容:

I 特別セッション

(1) MeSH ディスクリプタの解析 (青木さん)

MeSHの New Heading と Deleted Heading を調査し、その増減による文献数の違いをみた。その結果、情報科学及び伝達分野で大きな増加がある事が解った。

(2) 学術雑誌のレザリ-システム (山崎さん)

埼玉医学雑誌編集長の事を中心に、レザリ-との出会いと、その効果等を話した。

(3) 慶応大学院と聴講ガイド (牛沢さん)

慶大大学院の入学、学習、聴講制度を説明。

(4) J. Pharmaceutical Science の分析 (宮内)

薬学データベース RINGDOC と Science Citation Index を用いて、上記雑誌の著者、内容、2step-Map 等の分析を行い、薬学分野での位置を明らかにした。

II 各グループ発表

(1) Peer Review 班

Editorial, Letter を除いた 6 論文の分析、発表。

(2) 川崎病の記事あつめいの班

日米雑誌の文献量の年代による比較。

(3) 日本のコアジャーナル

各ジャーナルに分類を付与し、分類毎のコアを比較。

(4) 生理学業績調査班

生理学論文表題集に掲載されている業績を分類集計中。

(5) 明治期の雑誌

眼科の雑誌にしほて調査中。

(注)

⇒ 大切な事が裏に続く //

III 年間計画

- ・毎月オノ土曜日, 原則として東邦。
- ・通信は書いた人が全員に出す。

2/18 国会図書館見学

3/11 } 井上, 広田グループ発表 (訳) 第1クール

4/14 } 大村グループ

5/13 } 神場, 黒川グループ

6/3 発表練習, 出版記念パーティー (6/10, 11

ワビス大会)

5期開始

7/1 新幹線選出 (訳) オノ2クール

9/15-17 夏合宿 (訳) オノ3クール

10/4

11/11

12/9

IV 報告集について

2/18 までに各人 何を書くか決める。

4月中旬 原稿×切

5月中旬 出来上り

6/3 出版記念パーティー

集合に遅く人は
国会図書館内の
図書館学研究所
研修室まで
来て下さい。

国立国会図書館見学会のお知らせ

日時: 2月18日(土) 13:00 ~ 4:45

集合場所: 国立国会図書館
旧館南玄関受付前
に P.M. 2:50分まで

交通: 有楽町線 永田町下車
丸の内線 国会議事堂前

申込: 参加希望者は
廣田幹事長

(昭和47.784-802)

まで、
2月10日までに
申し込んで下さい。

V 学術雑誌 1988年会計報告

<収入>

前年度繰越金	7,796
会費	24,100
助成金	14,000
通信費(山崎塾長より)	10,000
夏合宿残金	20,801

合計

76,697

<支出>

送-入代	11,191
コピー代(60年代)	13,350
送料(〃)	5,590
慶予費(電報)	2,370
次年度繰越金	44,196

合計

76,697

VI 冬期合宿会計報告

<収入>

交通費	15,840
収金分	100,660
予約金分	52,000
TEL代	860

169,360

<支出>

交通費	15,840
朝食代	4,150
酒代等	7,800
夕食代	43,200
宿泊費	96,000
温泉代	3,600
TEL代	860
暖房費	9,000

180,450

11,090円の赤字でした。(スミマセン)

不足分おまびり泊者返金分は整会計より支出してもらうよう交渉中。

文責 宮内

1 2月18日の報告

(1) 国立国会図書館見学

15時-17時まで約2時間国会図書館収集部の島村さんに館内を案内していただいた後、説明していただきました。

受入図書数は、

Book	450万冊
Journal (和live)	38,000タイトル
Journal (和dead)	25,000タイトル
Journal (洋live)	18,000タイトル
Journal (洋dead)	18,000タイトル

ということでした。タイトル数が多いので、休刊や、廃刊の確認をするのが大変な作業になるとのことでした。

(2) 国会図書館見学の後、連合会中央図書室で続きを行ないました。

編集委員会から報告集についての説明がありました。

「報告集についてのお知らせ [1]」に詳細が、ありますので参照して下さい。

(3) 秋期合宿を鳥取に於いて11月3日-11月5日に行なう予定ですので、日程を調整しておいて下さい。

2 編集委員会より

次回の塾で、「塾と私とのかかわり方」の原稿を提出して下さい。

報告集についてのお知らせ [1] にもありますが、ワープロソフト一太郎か、MS-DOSのソフトで作った文書ファイル(5インチのフロッピーディスク)で提出して下さい。フロッピーで提出不可能な方は、ワープロ原稿をお願いします。

3月11日欠席の方は、なるべく速く編集委員まで送って下さい。

3 3月11日は、第4クールの抄訳提出期限ですので頑張りましょう。

4 次回の学術雑誌塾は、3月11日東邦大学図書館で行ないます。

3月11日報告 東邦大学医学部図書館 16:00-18:00

出席者 浜崎 浜田 雨宮 井上 宮下 木下 牛沢 多胡 神場 熊谷 広田 北川 大村 黒川
渡辺

- 1 訳読 " Scientific Periodicals 3. Present Forms of the Scientific and
Technical Journal "

渡辺

学会誌、商業誌、House Journalをそれぞれ機能別に分類していて、
とても丁寧に説明している文献でした。

- 2 18世紀のアメリカの医療と初期の医学校

山崎氏

当時のアメリカの医師はヨーロッパで教育を受けた人や、外国（特にScotland）から来た人が多かった。初期の医学校は吸収、対立など様々な歴史を経て、現在のColumbia Collegeの医学校やHarvard Medical Schoolに至る。

- 3 グループ研究経過報告

井上氏

参考資料："日本生理学会業績表題集"の基礎データ
とても便利な文献であることが印象に残りました。

第4クール英訳提出

大村 Core List of Medical Journals : A Comparison
Usdin B T
Bull Med Libr Assoc 67(2):212-217, 1979

北川 Symposium IAIMS model Development
Matheson N. W.
Bull Meedd Libr Assoc 76(3):222-230, 1988

広田 Publications Resulting from Anesthesia Meeting Abstracts
Meraze J. et al
Anesth Analg 61(5): 445-448, 1982

木下 The Reference Journal ; Paespige in Professional Pubication
Clayton B. C. Boyle K.
Nursing Outlook 29:531-534, 1981

阿部 Legal Discussion in Medical Literature : Is There Adequate Peer Review?
Marshall B. K.
Medicine and Law 7:317-321, 1988

秋合宿のお知らせ

日時： 11月3日（金）文化の日ー5日（日）

場所： 鳥取ー鳥取大の宍道さん（しんじ）がお世話して下さいます。
尚、一泊1000円位です。

交通費： 未定

行く意志のある方は3月末までに、神場さんか雨宮さんまで連絡を！

次回 4月8日（土） 東邦大学医学部図書館 16:00ー

* 報告集本文の提出日です。

* お楽しみーー塾終了後ボーリング大会を予定しています。

開催日：1989年4月8日(土)

○参加者 平輪，北川，広田，神場，黒川，雨宮，木下，阿部，大村，浜田，宮下，小島，井上

1. 「国内発行の医学分野のコア・ジャーナル」のグループからの報告（大村）

コア・ジャーナルの選出方法についての説明と、今回のテーマである医学図書館の所蔵からみたコア・ジャーナルについて、主に内科分野の雑誌と国内欧文誌を事例として報告していただきました。

2. アメリカの初期医学教育（山崎塾長）

アメリカの独立戦争以後、医者ギルドであったCollege of Physicians of Philadelphiaから、ペンシルベニア大学の医学校の設立まで。医師のライセンスなどMorganの提唱した医学教育の理念が独立後のアメリカでは受容されにくかったことなどをまじえお話ししていただきました。

3. 編集委員からの報告（黒川）

報告集の原稿の提出状況について報告していただきました。

<編集委員よりのお知らせ>

報告集の提出原稿の修正は、4月25日（火）をもって締め切りといたします。遅れないようにご提出ください。また、グループ研究の論文以外に個人的にも原稿を提出したいという方も、同じく締め切り日までにご提出願います。なお、編集委員会では現在報告集のタイトルを考案中です。ふさわしいと思うものがありませんでしたら、編集委員までお知らせ下さい。

4. 各グループの話し合い

○ボーリング大会

塾後、有志による第2会ボーリング大会をおこないました。

参加者 山崎塾長，神場，浜田，広田，北川，黒川，大村，小島，井上

1位の広田、4位の井上、6位の山崎塾長にささやかな記念品が贈呈。記念品を手にした人も、残念ながらもれてしまった人もとにかく楽しいひとときでした。それにしても、あの「つや玉」なる珍品の効果が知りたいものです。

次回は5月13日（土）、東邦大学図書館でおこないます。

余談ですが、最近Charlie Parkerの生涯を描いた「バード」という映画が封切られました。Parkerという人は、JAZZが若かった1940年代、JAZZの生命である即興演奏の限界に果敢に挑んだ人。バードのもとからは、後にMiles Davisをはじめ、多くの優れたミュージシャン達が巣立っていきました・・・。勉強の合間にParkerを中心とした草創期のModern Jazzに耳を傾けてみたいと思う方は、文責の井上までどうぞ。

それでは、皆さん楽しい連休をお過ごし下さい。

幹事会報告

05/10/89. JK 慈恵 1=2.

1. 名簿完成. 5/13 に配布

2. 通信 1=7=2.

- 発送担当者を一年単位でローテートしてはどうか。
(とりあえず、'89 は T.I. で担当)
- 通信執筆者を亦も、決めておく。担当者は責任して
発送担当者に一週間以内に原稿を送ること。

3. 入塾、退塾

- 入塾は年一回 (1月)とし、中途入塾希望者には
新年度まで待ってもらう。
- 案内パンフレット及び Application Form を作成する。
"What is The JUKU?"
- 一年間出席が7以下、場合は名簿から削除する。
- 退塾者は意志表示すること。

4. 年間スケジュール

- 1月~12月を一年単位とする。報告集は10月+11月, 12月出版
- 年一回、年次総会を開催する。全員出席。
- 89 下半期予定
 - 6月30日 SW 4:00 ~ 6:00. 大会発表 第27-1ル
 - 7月8日 (山崎塾長 渡米 ~ 9月) クル-70研究 継続, 新人談話
 - 8月 夏休み. (必読図書 ex) 歴史としての学問 by 中村茂.)
 - 9月9日 人口研究、クル-70研究 第7-1ル
 - 10月2日 報告集 III 出版
 - 11月30日 ~ 5日 島取. 全宿.
 - 12月23日. " 出版, 年次総会, 幹事交代 第47-1ル

5. その他

- 封筒 1=7=2. 会費残金で. A4 レポート用紙 (各入り) を作成、配布してはどうか。
- 6月10日~11日の田情報サーフェス研究大会
9日に出発の方は、18:40 東京発のひかりで 皆さしと 道連れに
なれり。5/24に、宿は 和学共済のカーテンハルスが安心
上は 朝食は10/10/7=2=2=2。

開催日：1989年5月13日(土) 東京にて

参加者：山崎、阿部、雨宮、安藤、井上、神場、川村、木下、北川、小島、黒川、宮下
宮内、大村、牛沢、渡辺、廣田

それに、杏林大学医学図書館の生出直子(おいでなほこ)さんが参加されました。よろしくお願ひします。

1. グループ研究発表

・記事の扱い方の比較グループ(神場)

IM、医中誌の3年間(1985-87)の川崎病に関する文献取載数についての報告があった。IMでは、総合医学雑誌での取録数が多く、日本の小児科雑誌の取載誌が少ないのが疑問であった。今後は、分野別に年代の推移を考察していく。

・Peer Review グループ(阿部)

個々のひとの文献抄読研究の報告があった。詳細は報告集2を読んでください。今後は対象を絞って分野別のレフェリーシステムについて調査をしていく。

2. 山崎塾長の発表

7月からの短期留学での「調査計画：どんな調査をやろうとしているのか」の報告があった。出来るだけ日本で下調べをしてアメリカで調査を行うとのこと。

3. 幹事会報告

名簿の配布。

1月-12月を一年単位で一期間とする。そのため現在のグループ研究は今年の12月まで継続する。

報告集3は、今年の10月締切で、12月の発行とする。

塾特製のレポート用紙を作ろう。

4. 報告集2の編集委員会より

出版費用は、一人4000円です。6月3日に集金します。

5. 次回は、6月3日、昭和大学の会議室でおこないます。サービス大会の発表予行練習です。その後、出版記念パーティです。楽しみですね。

今、速く走るものに凝っています。なぜなら、それらは自分の能力を知りつつ所要時間を縮めようとするからです。山際淳司の短篇「カウント・ダウン」の主人公は、日常生活で「時」と上手につきあっていて、勝手に流れていく「時」をつかまえることが出来ます。わたしは、今日は「時」を作ってしまった。 SW 廣田住友

6月3日、昭和大学会議室にて、サービス大会の発表練習が行われました。

発表者は、大村（国内発行誌における医学分野のコア・ジャーナル）

廣田（明治期の眼科医学雑誌）

平輪（論文表題集から見た我が国の生理学研究者の研究活動）

北川（コンパクトなMEDLINE-東京慈恵会医科大学医学情報センターにおけるCD-ROMの利用）

*6時より、ラウンジに席を移し、“WORKING WITH EACH OTHER -学術雑誌塾報告2-”の出版記念パーティが行われました。編集委員の皆様、ご苦労さまでした。

出席者：SPECIAL GUESTS：

野口迪子氏（元札幌医科大学図書館，北海学園大学助教授）

板橋氏（昭和大学），山口氏（浜松医科大学），兼岩、青木両氏（順天堂大学）

山崎，阿部，安藤，平輪，廣田，井上，神馬，門屋，川村，木下，北川，小島，黒川，真下，宮下，宮内，大村，多胡，牛沢，生出，雨宮，でした。

お知らせ

<おめでとうございます>

*IMIC大阪の多胡さんがJMLA奨励賞を受賞されました。

*IMIC宮下さんが、退職に伴い今月で退塾されます。

*連絡先変更

平石/6月1日付でIMICへ。(162 新宿区住吉町2-14 四谷曙橋ビル6F)

浜田/連絡は自宅をお願いします。

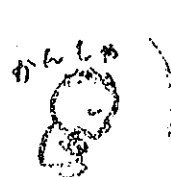
*A4レポート用紙の件は、1冊380円くらいで出来る見込み。

次回は、7月8日(土)、16:00より東邦セミナー室にて。抄読担当の方、よろしくお願ひします。

☆前回の発送が大幅に遅れましたことをお詫び致します、全て雨宮の責任であります。

☆交通行動学の調査では、東京、パリ、NYをおさえ、大阪人が秒速1.6mと最も早く歩くことが実証されたとか。(毎日新聞6/5) サービス大会に参加される皆様、その大阪のパワーを吸収して頑張ってきて下さい。

☆『社会主義は、...地上から天に達するためでなく天を地上へ引きおろすために、神なくして建てられたるバビロンの塔である』(ドストエフスキー、カラマーゾフの兄弟)
されば良心を無くした共産主義は自ら崩れ落ちる砂上の塔なのではないでしょうか。血の日曜日の犠牲者を悼みつつ。
(雨宮)



< T.I. ILL. H.N. 総出演 >

学術雑誌塾通信 42. p.2

<山崎塾長のアメリカへの住所>

'89.7.1 - 8.25 扨. (以後未定)

INTERNATIONAL HOUSE OF PHILADELPHIA.

3701 CHESTNUT STREET,

PHILADELPHIA, PA 19104,

USA.

<留学先>

COLLEGE OF PHYSICIANS OF PHILADELPHIA LIBRARY.

19 SOUTH 22nd STREET,

PHILADELPHIA, PA 19103,

USA.

(VISITING RESEARCHER)

※もし急用などありましたら、上記にお手紙下さいませ。

<夏休みの課題> 以下の本を読みおれよ! 全て日本語です。

中山茂「歴史としての学問」中央公論社

大輪盛彦「メディア伝説: 漢字をきた人びと」
時事通信社

香内三郎「漢字文化の誕生」晶文社

リンドバーク夫人「海からの贈物」新潮文庫

Journal

Page

7月9日：東邦医大にて

☆安藤 訳読発表

☆12月までの活動についての話しあい...今のグループ研究を続ける。

☆報告集No. 3の発行に向けて編集委員をつのっています。

(候補者 北川, 井上, 大村, 阿部)

☆レポート用紙作成：A4版・100冊作成・塾生ひとり二冊配布・残りは、希望者へ販売します。(予定価格=400円前後)

☆渡米中の山崎さんに塾の様子を報告するために写真撮影しました。

出席：雨宮, 阿部, 安藤, 井上, 江口, 生出, 大村, 北川, 木下, 黒川, 神場, 平輪, 浜口, 廣田, 松本(聖路加看護大・見学), 熊谷, でした。

連絡

☆11月の合宿の係が交代しました。 神場→→大村

☆浜田さんの勤務先が淑徳大学(千葉)に代わり、しばらくはそちらに専念するために退塾されます。勤務先、住所は追って名簿に載せます。

☆次回は訳読の第3クールメ切です。

夏休み課題図書

中山 茂「歴史としての学問」	中央公論社	1,200-
大輪盛登「メディア伝説：活字を生きた人びと」	時事通信社	1,500-
香内三郎「活字文化の誕生」	晶文社	3,500-
リンドバーグ夫人「海からの贈物」	新潮文庫	240-

◎ 次回は9月9日6:00 - 虎ノ門 です。

夏休みをぼちぼち取る人が増えているようで朝の電車の混雑が違います。いつもですと四つに縦折りして読む新聞も、二つ折りだったりそのまま読めたりします。(熊谷)

学術雑誌塾通信 No. 44

1. 報告集Ⅲ 発刊企画について [井上委員長より]

グループ研究、個人エッセイ等、投稿募集。

11月中旬 メ切り予定

2. 鳥取合宿 11/3~5 [大村より]

概要は別紙にて説明あり。参加希望等、お早目にご連絡ください。

※航空券、乗車券(夜行バス)を一括手配しますので、

希望者は 9/22(金) までに、雨宮または大村へ。

3. 「The Scientific Journal :

some problems and alternative」和訳発表 [江口]

専門分野におけるコミュニケーション、グループ設立、運営等に関する論文。

参考文献：科学技術文献サービス No. 42, 1975

竹内寿 「アロウの交換 - 女子読者の誕生と死 -

4. 10月14日

・各グループ中間発表
東邦大田

・個人論文訳発表
・レポート用紙配布済み。

5. 11月25日(土)

発表者がいる場合、リハーサルを兼ねての発表を塾で行うため、11/11 または 11/18 に塾を開く予定あり。

文責 明屋

学術雑誌塾通信 No. 45 1989. 10. 20発行

10月14日：東邦医大にて

*鳥取合宿（11/3～5）プランの説明（大村さん）

中国四国地区国立大学大山共同研修所（tel 085952-2903）にての合宿スケジュールの説明がありました。合宿参加者で塾を欠席した方にはプラン表を同封しましたので御覧下さい。11/4（土）の浜田氏の講演はアメリカ帰り広田氏のスピーチに変更になりました。

*山崎塾長スライド講演：観光編

PhiladelphiaのPennsylvania大学に短期留学されていた塾長のスライドによる報告がありました。素敵なガールフレンドを得た塾長は「アカデミックなものは勿論、それ以外のコミュニケーションの素晴らしさ」を語り、アメリカでの生活が充実したものであったことがうかがえました。合宿での講演をお楽しみに！

出席者：山崎塾長，阿部，雨宮，川村，北川，小島，大村，平輪（寂しかった．．．）

学術雑誌塾報告編集委員よりの通知を同封しました。研究集会やセミナーの論文をかかえている人は特に大変でしょうが、皆様！原稿提出，何卒宜しくお願いします。

次回は鳥取合宿です。長距離バスは若さでクリアだ！？

（平輪）

16人

Date . . .
No ()

89 塾合宿 7037

by 大村 兩寛

11月2日(木) 19:00 品川駅徒歩3分 長距離バス7-37集合
19:30 出発

11月3日(金) 7:00 米子駅到着
" 近辺で朝食

各自(OP) 出雲大社, 松江, 宍道湖, etc.

14:00 米子駅集合 (大阪組, 浜松組, 宍道氏と合流)
(買出し)

15:20 日丸自動車バスにて ^{15:45} 大山へ

16:19 大山・榑水高原到着, 徒歩10分 → 研究所到着

18:00 夕食, 入浴

20:00 講演 (山崎・山口氏)

22:00 消灯 (宴会終了)

11月4日(土) 8:00 朝食

10:20 榑水高原祭バス

11:19 米子駅到着 → 鳥取大医大へ (朝食? 昼食)
田見学 及び 講演 (宍道氏)

15:20 米子祭バス

16:10 大山着, 大山で見学

~~16:20~~ 夕食, 入浴

20:00 講演 (浜田氏), 7-11-7 研究発表
(浜田)

11月5日(日) 8:00 朝食 出発 7-71-

10:20 榑水高原祭バス

11:19 米子駅着

昼食後, 解散

* 宿泊先: 中国四国地区国立大学 大山共同研究所
085952-2903

鳥取県日野郡溝口町金谷字榑水高原 793-44.

7680
70000
(30分?)

学術雑誌塾報告第3集の出版予定については既報のとおりですが、提出期限がせまってまいりましたので、原稿の提出方法、執筆要領、提出期限等、再確認していただく点、留意していただく点についてお知らせいたします。

1. 提出原稿の範囲

第2集を踏襲し、各グループの活動の成果をまとめた原著および総説、そして、個人エッセイを提出してください。ただし、すぐれたものであれば、今回は翻訳の提出も認めたいと考えます。

各グループの論文は、分担執筆、連名での共著形式いずれでも結構です。個人エッセイは、生物医学分野の図書館に従事する自分、また情報活動に関わる自分を離れたものでなければ、テーマは特に問いません。

2. 執筆要領

- a. 原稿は、原則として「一太郎」を使用し、A4用紙で作成してください。「一太郎」の印刷書式設定は、第1,2集を踏襲し、1ページ40字×40行、上下マージン30mm、左右マージン25mmとします。「一太郎」以外のソフト、ワープロ専用機を使用する場合も、できるだけこれに近い体裁にしてください。
- b. 標題は横倍角とし、外国語やアラビア数字は半角とします。
- c. 標題および著者名の記載位置は、次ページの具体例を参照してください。
- d. 論文の長さは自由ですが、図表を文中に挿入する場合は各自レイアウトしてください。
- e. 引用文献・参考文献の書き方は、次ページの具体例「医学図書館」33(4), 1986以前の旧執筆要項にしたがってください。

3. 提出期限

平成1年11月16日(木)を締め切り日とします。原則として編集委員長(医師・井上)まで提出してください。当日は編集委員会を予定しておりますので、各編集委員を通じて提出していただいても結構です。日程がつかっておりますので、締め切り日は厳守してください。

4. 報告集の構成

第2集の構成を踏襲しますが、今回はコラムを設けておりませんので、以下の構成でおおよそ80ページ程度のものを想定しています。

- a. まえがき
- b. 目次
- c. 各グループ研究の論文
- d. 個人エッセイ
- e. 寄稿エッセイ
- f. 研究発表記録
- g. 執筆者一覧
- h. あとがき

寄稿エッセイは、今回は板橋、兼岩、山口、青木の各顧問、そして、現在札幌の北海学園大学で教鞭をとっておられます野口氏に寄稿していただく予定です。

編集作業は、井上（委員長）、阿部、安藤、平輪、北川、大村の編集委員6名でおこないます。ご意見、また不明な点などありましたら、各編集委員までお気軽にお尋ねください。厳しい日程かとも思いますが、以上の点お含みおきいただきご協力お願いいたします。

学ぶことの自由と持続

山崎 茂明

学術雑誌塾も5年目に入った。教育は息の長い仕事であり、また目に見える成果がすぐに出るものではない。若い人を対象にした勉強会を組織したいと思っていた頃、日本医学図書館協会の研究集会の実行委員をやる機会があり、そこで知り合った受講生とはじめてみることにした。自分なりの漠然とした考え方もあったが、実際には若い人々と会を行ない、そこでの交流を通して方向性を検討してきた。その意味からも、塾生諸君とともに会をつくってきたと信じている。

教育は、大切なことであり、それだけに言葉だけで理念を唱え、批判したりすることで済ませてはならず、実行を通して表現したものがすべてであり、あるべき方向性も実践を踏まえて検討されなければならないものである。塾生も20名を数え、一人一人実に様々な個性をもった人々であり、個人的にじっくり話したり、相談にのったりしている訳ではない。むしろ、塾生相互のコミュニケーションを中心に、グループで運営されれば良いと思います。幹事会も、相談し、行なっていく。

5) 引用文献・参考文献

文献は、主要なものに限定し、①必要不可欠、②印刷されたもの、③入手可能、が望ましい。

a. 文献は、引用順に一連番号を付けて配列し、引用箇所には肩付数字 1), 2), 3), ……を記入する。

b. 文献の記載要領

i. 雑誌論文の場合

著者の姓名*：論文標題，雑誌名**，巻（号）：ページ（はじめとおわり），出版年の順とし、以下の例により記載する。

* 欧文の場合は、姓を先に、名は頭文字のみ。3名以上の場合は第一著者のみとし、ほかまたは et al. を使用する。

** 欧文雑誌名を省略する場合は、Index Medicus の Abbreviations に準ずる。和文の場合は省略しない。

例 1) 西岡正行，佐藤淑子：文献検索指導，医学図書館，26(4)：134-141，1979。

例 2) Farmer, J. and Guilaumin, B. : Information needs of clinicians; Observations from a CML program, Bull. Med. Libr. Assoc., 67(1) : 53-54, 1979.

ii. 単行書の場合

著者または編集者名：書名，版次，（翻訳者名），発行地，発行所，出版年，引用ページ（はじめとおわり）の順とし、以下の例による。

例 3) Lancaster, F. W. : 情報検索の言語。（松村多美子訳）東京，日本ドクメンテーション協会，1976。

例 4) Bloomquist, H. : Readers services, Pt. 2 Circulation : Document reproduction. In Handbook of medical library practice, 3rd, ed. Ed. by G. L. Annan and J. W. Felter, Chicago, Medical Library Association, 1970. Chapter 5. p. 177-197.

☆鳥取，大山にて秋合宿

合宿参加者：宍道，尾崎（鳥取大），山口，山崎，阿部，広田，神場，北川，
雨宮，安藤，川村，黒川，大村，真下
佐藤，田中，多胡，堤（大阪） 以上18名

11月2日（木）：夜行バス組出発，米子到着後オブショナルツアー

4人娘→出雲大社 “あめみやさん，赤い糸何本買うんですかあ。”

“わたし，出雲そばさえ食べられるなら，どこでもいい。”

J・Kコンビ→松江散策+みかん狩り

3日（金）：宍道さんと感激の再会，宴会の買い出し “この甘酒饅頭買ったの誰
だあ”

バスにて大山研修所へ…大阪組と合流

夕食後，宴会前に山口氏（浜松医大）講演…「MeSHタームの
“Retraction”について」（詳しくは25日の生図研でも発表され
ます。）

山崎氏…スライドでアメリカでの研究生活を紹介。

“やっぱりさ，上の人同士の表敬訪問より，若い人のコミュニケ
ーションが大切だよな。”

4日（土）：山を降りて米子市西町の鳥取大へ，折りしも学祭真只中！

“フランクフルトたべたい！” “ねるとんのテーマだ”

鳥取大図書館見学…使い勝手のよい図書館という印象でした。

宍道氏講演…『生涯異端児』でありたいという，宍道さんのファッ
シオナブルなプライベートライブラリー，期待しています！

夜は，大阪代表・阪大，佐藤氏の発表「ライフサイエンス論文を読
もう」と，広田氏のアメリカ旅行+沖縄のスライド上映。各グルー
プの発表でした。… 又もや宴会。

5日（日）：米子で解散。再びオブショナルツアーへ。（因に安藤・雨宮両氏は
温泉のあと日本海でビール&昼寝だったそうです）

みんなちゃんと帰ったあ？！

文責 真下

会計報告

★収入	★支出
会費 1,500×16	宿泊費 12,800
7,130×13	食費 95,420
3,330×4	宴会費 28,000
宍道さんより	
10,000	おみやげ代
熊谷さん(A.L)より	(宍道さん, 熊谷さん他)
5,000	10,000
<hr/>	<hr/>
145,010	146,220

☆差額は塾より補助していただきました。

<お知らせ>

*NK・井上さんのお父様がお逝去されました。謹んでお弔い申し上げます。

尚、塾より弔電をお送りしました。

*11月25日(土) 東大医学部図書館にて生図研です。

*広田さんが引越しをされました。

今回は、12月16日(土) 16:00～ 東邦です。

学術雑誌塾報告集編集委員会からのお知らせ

来年1月の総会に合わせた出版予定で、掲載原稿を集めておりますが、12月から編集作業に進みたいと考えます。つきましては、原稿提出最終締め切りを11月30日(木)としますので、ご協力お願いいたします。なお、締め切り日に遅れそうな方は、編集委員長(井上: 医師291-2121内線261 自宅927-3546)までご連絡ください。

特別寄稿では現在、板橋、山口、青木各顧問、そして、京都府立医科大学の堀さんから原稿をいただいています。

学術雑誌塾通信 NO.47

1989年12月20日発行

12月16日に行なわれた塾の報告

出席者：山崎、広田、井上、北川、浜田、安藤、平輪、小島
真下、大村、牛沢、黒川

I. 来年度の塾の方針について（山崎氏より）

▲ 個人研究にしてはどうか。

テーマは『総合医学雑誌』

- | | | |
|--------------------------|---|-------------------------------------|
| 1. 事例研究 | → | Lancet, BMJ |
| 2. 歴史研究 | | JAMA, NEJM |
| 3. 定量分析 (Citation Study) | | Ann Intern Med |
| 4. 内容分析 | | 医のあゆみ, 日本医事新報 |
| 5. Topic的なもの | | J Sc, Philo Trans (Science, Nature) |



▲ 上の中から各人が1つ選び、2~9月中に1回発表する。
→ 1/20の塾までに決める。（出席できない人は伝言して下さい。）

▲ とりあえず 3月までは決めました。

2月： 広田 "NewsweekとTimeの医学記事の比較"

17 北川 "Journal des sçavansとPhilosophical Transactions"

3月： 井上 "JAMAを中心とした雑誌の編集方針"

24 黒川 "日本医事新報の歴史的意義"

II. 編集委員会から報告（井上氏）

1月20日の出版記念パーティーをめぐって奮闘中です。

III. 学術雑誌塾の運営規則について（広田氏）

※ 裏面にコピーをのせました。

【おまけ】 大村さんおめでとう。

1月をもって退塾です。大阪組で活躍を!

次回は 1990年1月20(土) 16:00~東邦セミナー室

年次総会です。全員の出席を!

それではみなさん
よいお年を。R.K.

学術雑誌塾の運営について

この「学術雑誌塾の運営」は、1989年5月10日の幹事会の席で決められ、5月16日の塾の時に承認されたものです。なお、これは年次総会時に改正されることがあります。

学術雑誌塾の運営

1. 年間スケジュール

- ・1月～12月の一年間を一期間とする（よって、1989年12月までは第4期で、1990年1月から一年間が第5期となる）
- ・報告集は10月締切、12月出版とする
- ・毎年12月に年次総会を開催する（この年次総会は塾生全員出席を前提とする）

2. 入塾・退塾・年会費

- ・入塾年一回（1月）とし、中途入塾希望者には新期まで待ってもらう
- ・一年間出席がない場合は名簿から削除する
- ・退塾者は意思表示をする
- ・12月に翌年の年会費として1200円を集める

3. 通信

- ・通信執筆者を前もって決め、担当者は責任を持って発送担当者に一週間以内に通信原稿を送る
- ・発送担当者を決め、一年単位でローテーションする（とりあえず第四期は東邦の雨宮さんに発送担当者をお願いする）

4. 幹事会

1990年1月20日(土) 16:00～ 東邦大学自修館 出席者 19名
(年次総会)

1. 総合医学雑誌(海外)について 山崎塾長

2. 総合医学雑誌(国内)について 板橋顧問

「医学のあゆみ」を中心に、レクチャーがありました。

日本の雑誌については、調査・研究は殆どなされていないそうです。

皆さん、頑張りましょう!

3. 年間スケジュールについて

同封の予定表を参照して下さい。

4. 新幹事の選出

広田氏が引続き幹事長を務めます。ほかに、3～4名の幹事を募集します。

立候補する方、広田氏まで連絡をとって下さい。

5. 報告集 3

井上編集長からの報告・2月の塾で配布します(1人8部 4000円) 350部
作成して¥154,000-かかりました。100頁の立派なものが出来上がりそうです。

・・・井上編集長、お疲れ様でした・・・

なお、次期の編集委員は阿部、安藤、井上氏が留任いたします。こちらもそのほかに
編集委員を募集していますので、立候補なさる方は、井上氏までどうぞ!

6. 出版記念パーティー

大森の串焼屋さんにて・・・黒川さん、平輪さん、幹事ご苦労さまでした

☆新入塾生の紹介☆

今回から、日本獣医畜産大の青山さんが参加されました。よろしく!

☆次回の予告☆

次回は、2月17日 東邦大学です。広田、北川氏の発表です。なお、3月31日の
塾までに、発表日程などを各自報告してください(早いもの勝ちです)。

・・・皆さん、いろいろとお世話になりました。今回で卒業させていただきます。どうも有難う
ございました。関西にお寄りの際は是非ご連絡下さい・・・ (大村)

學術雜誌塾 予定表 1990

11/20 年次総会 新幹事, 新編集委員長選出, 年会費徴集
山崎さん発表

出版記念パーティー

12/17 個人研究発表

(広田, 北川)

(井上, 黒川)

ワグストのお話し

3/31

4/14

5/19

6/9

(サービス大会 6/16, 17)

7/14

8月はお休み.

9/8

10/13

11/3 ~ 4 合宿

12/15

報告集(4)原稿×7切 (個人研究)

↓
出版

2
SMTWTFSS
1 2 3
4 5 6 7 8 9 10
11 12 13 14 15 16 17
18 19 20 21 22 23 24
25 26 27 28

3
SMTWTFSS
1 2 3
4 5 6 7 8 9 10
11 12 13 14 15 16 17
18 19 20 21 22 23 24
25 26 27 28 29 30 31

4
SMTWTFSS
1 2 3 4 5 6 7
8 9 10 11 12 13 14
15 16 17 18 19 20 21
22 23 24 25 26 27 28

5
SMTWTFSS
1 2 3 4 5
6 7 8 9 10 11 12
13 14 15 16 17 18 19
20 21 22 23 24 25 26
27 28 29 30 31

6
SMTWTFSS
1 2
3 4 5 6 7 8 9
10 11 12 13 14 15 16
17 18 19 20 21 22 23
24 25 26 27 28 29 30

7
SMTWTFSS
1 2 3 4 5 6 7
8 9 10 11 12 13 14
15 16 17 18 19 20 21
22 23 24 25 26 27 28
29 30 31

9
SMTWTFSS
1
2 3 4 5 6 7 8
9 10 11 12 13 14 15
16 17 18 19 20 21 22
23 24 25 26 27 28 29

10
SMTWTFSS
1 2 3 4 5 6
7 8 9 10 11 12 13
14 15 16 17 18 19 20
21 22 23 24 25 26 27
28 29 30 31

11
SMTWTFSS
1 2 3
4 5 6 7 8 9 10
11 12 13 14 15 16 17
18 19 20 21 22 23 24
25 26 27 28 29 30

12
SMTWTFSS
1
2 3 4 5 6 7 8
9 10 11 12 13 14 15
16 17 18 19 20 21 22
23 24 25 26 27 28 29

1990年2月17日(土) 16:00- 東邦にて 一々所々、敬称略です

出席者：山崎、北川、青山、江口、広田、井上、黒川、牛沢、平輪、

雨宮、木下、安藤 (12名)

1. 個人研究の発表

(a) 学術雑誌の誕生 (北川氏)

17世紀頃、それまでの学術情報伝達手段における種々の欠陥を克服すべく”雑誌”が誕生した

(b) Timeと朝日新聞の科学記事 (広田氏)

2誌が、おなじN ENGL J MEDの論文をとりあげていた

科学記事担当の記者は、数タイトルの雑誌に目を通さねばならない

2. ”報告集3”の講評

今回出席のあった執筆者には、山崎氏からいくつかの鋭い指摘がなされた。直接指摘を受けなかった人も、今後の執筆時に参考となるような話を聞くことができた。――今回欠席の方、次回は是非出席してほしいですね。。。

3. ”報告集4”の編集委員

前回からの留任、井上、北川、安藤の他に数名募集中！！

委員長は安藤となりましたので、よろしく。

4. 新幹事の選出

広田(幹事長)、平輪(会計)、木下(書記)、安藤(編集委員)が決まりました。他にも募集していますので、よろしく！！

5. 次回

井上、黒川両氏の発表 & 報告集3の講評 & 個人研究の計画書の提出を予定しています

6. その他

雨宮さんが4月1日付けで、東邦大学習志野図書館に移動されます。

塾は、”帰り道なので、引き続き出席します”とのことでした。 (安藤)

1990. 4. 6.

(敬称略)

1990年3月31日(土) 16:00~ 於 TI

出席者: 山崎 井上 安藤 雨宮 黒川 木下 平輪 渡辺
(8名)

個人研究の発表

・日本医事新報創刊時の背景 (黒川)

1921年2月、梅沢彦太郎編集により創刊した。日本医事新報は、当時の大正デモクラシーを反映し、過激な意見の記事を掲載しているところが特徴である。

・JAMAについて (井上)

JAMAは、編集記事のカテゴリ数・編集陣の構成員数・論文審査員数・投稿原稿数・発行部数等、どの面からみても大規模であり、道徳的かつ時代を反映した内容を取扱っている。またその使命は、臨床医学や医学研究の進歩、そして、医師にとって重要な他の領域の発展などを読者に知らせることである。

・「報告集4」の編集委員

安藤(委員長) 井上 雨宮 北川 生出

の5人に決定した。

・次回 ----- 4月14日(土) 16:00~ TI

既にテーマを持っている人は、どのように取組んでいくのか発表して貰う予定です。未だテーマが決まっていない人は、次回までに各自決めておいて下さい。

(渡辺)

P.S. 渡辺さんの勤務先が変わりました。EMIC → 立教大学図書館整理課 和書係です。(平)

I. 例会報告 5月19日(土) 東邦大学医学部図書館セミナールーム

出席者 : 山崎塾長, 阿部, 雨宮, 安藤, 平輪, 広田, 井上,
神場, 木下, 北川, 小島, 黒川, 生出, 牛沢
金子(ブレインテック), 佐藤(文部省), 田中(JK)

塾員消息

門屋 由美さん
は転職に伴い
退塾されました。

1. 塾長のおことば

日本医学図書館協会賞・奨励賞の選考にあたって
「医学図書館」編集長に就任して、など

2. 編集委員会報告(別紙)

原稿提出は10月13日です。がむばろう!



編集委員会で参考文献リストを作ってくださいました。まだテーマの決まってい
ない人はこれを参考にしましょう。

3. 幹事会報告

塾の活性化について

最近“何のために塾をやっているか”が見えなくなっているのではないか。

→ 例会の出席率の低下につながっていると考えられる。

解決案

☆ 合宿、ボーリング大会などの場を設ける

☆ 報告集に、各人の塾に対する考えを書いてもらうコラムや、論文の解題を
載せる。

☆ 塾通信をおもしろくする(コラムや、他の人にも知ってもらいたい論文の
案内などを自由に寄せてもらう)

☆ 毎月の例会を楽しくする

・ゲスト(図書館とは関係のない編集者など)を例会に呼んで話してもらう。

・発表者を数か月先まで決めておく

今後欠席する場合は、なるべく早めに黒川さんまで連絡してください。



4. 発表 雨宮さん「科学雑誌『自然』創刊の背景」

“創刊の辞”を集めて比較したらおもしろいかも、との感想がありました。

II. 次回のお知らせ とき：6月9日(土) 16:00 - 19:00

ところ：国家公務員等共済組合連合会中央図書室 8階第三会議室

図書室は17:00の閉館です。

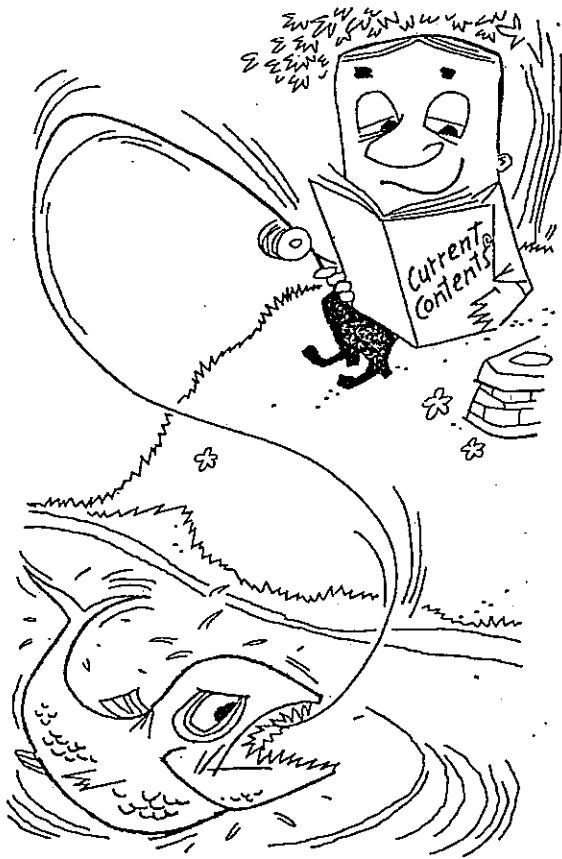
発表の予定は次のとおりです

安藤さん 「British Medical Journal誌の Obituary欄の分析」

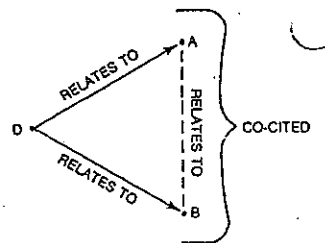
牛沢 「研究者の引用行動と投稿規定」

以上 文責 牛沢

さっそくですが 勝手にコラム by うしおゆ



私の今年テーマは「科学者の引用行動」です。左図(別に引用索引を絵にしてみました)のように「引用」のイメージはまさに「系」だと思います。「赤い糸の伝説」じゃないけれど、人と人をつなぐ見え隠れ系を探し出していく作業は面白くない。共引用(下図)についても三角関係ではありませんが、単に引用頻度から業績を量るのほかに批判があり当然です。エッセイおもしろい問題に引用は潜んでいいます。



みなさん とくに知ってもらいたいです

JAMA Is Now Published on Wednesday

From the first issue in 1883 until April 4, 1964, JAMA was published on Saturdays. The cover date was switched to Monday on April 6, 1964, changing not only the day of the week but the week itself. On April 3, 1978, the cover date was shifted again, from Monday to Friday.

Effective this issue, April 4, 1990, the cover date becomes Wednesday. Improvements in production and mailing consistency allow us to advance the cover date 2 days without altering any other scheduling or mailing dates. Readers will

continue to receive THE JOURNAL well in advance of the cover date. This should continue to preclude the dilemma of a patient confronting the physician with a news report of an article before the physician has had a chance to read the relevant article in the current issue of JAMA. As a result of this change, the embargo date for the news media moves to Tuesday afternoon at 4:30 PM Central time.

George D. Lundberg, MD

See You Next, はなはな

第 1 回編集委員会報告

1990.5.2. 7:00- at JK

1. 報告集4 制作カレンダー

- 6/7 テーマ、及び研究計画書の提出
- 10/13 原稿提出
- 11/ 出稿
- 12/15 出版記念パーティー

2. 原稿の書式

基本的には前回と同様。

(ワープロ原稿、書式・引用文献の書き方、などなど)

枚数制限なし。

3. 原稿の依頼

板橋、山口、青木、兼岩、山崎各氏(予定)

浜松でのサービス研の時に、口頭でお願いし後日文書を送付。

総合テーマを説明した上で、その後は自由に。

4. 報告集の内容...?

原則的に1人1テーマでの論文——何人何論文?

依頼原稿

塾生の業績

文献リスト(編集委員により制作中)

その他——大阪の人たちは?

5. 文献リスト

5/19の塾で配布予定

1980年以降の総合医学雑誌についての論文を下記分担によりピックアップ

IM (PERIODICALS , WRITING) : 安藤

BA (PERIODICALS) : 雨宮

医学中央雑誌(情報サービス、情報利用、出版) : 井上、北川

科学技術文献速報 : 生出

”医学図書館”の総目次、ピックアップ : 雨宮

5/12までに安藤に送付。

1. 特別公開セミナーと例会のお知らせ

学術雑誌塾は、若い医学系の図書館員を中心に活動をおこなっています。学術雑誌をテーマにして、毎月1度の例会のほか、年1回の合宿などにより、勉強を続けてきました。今回、渡部正孝氏（学会誌刊行センター）をお迎えして、学術雑誌について編集・製作の立場から、解きあかしていただくことになりました。塾生にはもちろんですが、多くの方々にも関心のある話題であり、特別公開セミナーとして企画いたしました。どうぞ、お氣がるにご参加ください。

とき：7月14日（土）16：00－18：00

ところ：国家公務員等共済組合連合会 虎ノ門病院本館8階第1会議室
港区虎ノ門2-2-2 Tel 585-7154（中央図書室）

参加費：300円

申込先：平輪麻里子（東邦大学医学図書館 Tel：762-4151内線2443）

1) 特別公開セミナー・・・

日本における学会誌協同編集センターの理念と現実、そして世界の編集者組織

講師：渡部正孝氏（学会誌刊行センター）

2) 塾生報告：JAMAの表紙をめぐる

木下真由美（杏林）

2. 例会報告 6月9日（土） 16：00－18：00

国家公務員等共済組合連合会中央図書室 8階会議室

出席者：黒川、牛沢、平輪、井上、北川、廣田、安藤、小島、川村、真下、
板橋、山崎

3. 発表

1) 研究者の引用行動と投稿規定：by Ms.牛沢

世界の主要な自然科学・医学分野の総合誌を対象に、投稿規定と参考文献リストの記載を調査し検討したものである。公刊資料と未公刊資料、私信などの扱い方、文献表の配列、呼称、位置など形態的かつ内容的に考察している。塾長より、かなりの質問がなされました。牛沢さんご苦労さまでした。私信や未公刊資料の扱いは、議論がまだなされていますが、Uniform Req.の線でまとまっていきたいと思います。Uniform Req.、CBE、SISTなど十分に検討してください。

2) British Medical Journal誌の死亡記事欄の分析：by Ms.安藤

BMJの死亡記事に出現した人々を調査対象として、彼らの履歴を分析しようとしている。どんな結果がでるかとても楽しみです。調査結果を読み抜くためにも、イギリスの医療制度や医学教育システムについて理解しておくことが大切です。読書してください。

参考資料：

・Holloway, LM: Medical obituaries; American physicians biographical notes in selected medical journals. NY, Garland Pub., 1981.

・Kaufmann, M: Dictionary of American medical biography. vol.1-2. Westport, Greenwood Pr., 1984

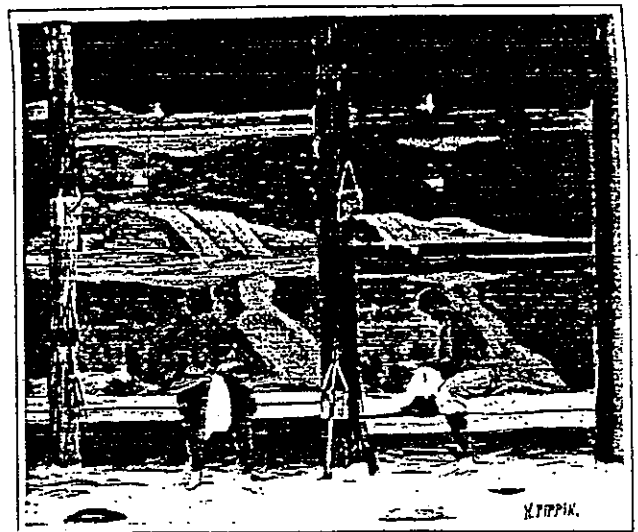
4、勝手にコラム：from 山崎

5月23・30日付のJAMAの表紙です。"Barracks"と題されたこの絵は、Pippinの晩年の作品です。Horace Pippinは、1888年PennsylvaniaのWest Chesterで生まれ、1946年7月4日に亡くなりました。昨年の夏、私はペンシルバニア・アカデミー美術館で、彼の"Interior"という作品と出会い、自分の心に沁みるものがありました。貧農の両親から生まれた黒人のPippinの絵が認められるまで、多くの時間が必要でした。フィラデルフィアの書店で購入した10ドルの彼の画集を大切にしています。興味のある方はどうぞ。

JAMA

The Journal of the American Medical Association

May 23/30, 1990



5、海外渡航ニュース

・阿部君は、7月から3ヶ月の予定で、イギリスに留学します。ロンドン大学で開催される"データ転送"に関するセミナー(8月)に参加し、7月はHome Stayで英会話、9月はイギリス放浪の旅を予定しています。Have a nice trip.

・安藤さんと黒川さん(?)は、9月末の国際医学図書館会議(インド、第6回)に参加します。日本からのツアー参加は、まだ10名に達していないようです。インドを楽しんでください。それにしても、Take care.

・山崎塾長は、ベルギーのアントワープで開催される第32回国際医学史学会(9月2日-8日)に参加し発表をしてきます。終了後、オランダのアムステルダムにあるRoyal Netherlands Academy of Arts and Sciences図書館などを訪問してきます。ここはEMのクリアリング・ハウスの役割をしています。そして、時間の許すかぎり美術館を見てくるつもりです。

特別公開セミナー 7月14日(土) 16:00-18:00
国家公務員等共済組合連合会中央図書室

日本における学会誌協同編集センターの理念と現実、そして世界の編集者組織

講師：渡部正孝氏（学会誌刊行センター）

学会誌刊行センターの設立趣旨にそって、学会雑誌を長年つくってこられた立場から、雑誌の編集、制作、編集事務といったそれぞれの仕事の内容、関連についての説明がありました。また、雑誌の編集に関する専従スタッフのいる大規模な学会や、あまり負担のかからない小規模な学会よりも中規模な学会の運営が大変だということをお話して下さいました。

“編集をする若い人達へ一言”という質問に対しては「あることを決める時に、今までの経験だけで決めずに柔軟な心構えを持つこと。」というアドバイスを頂きました。

最後に何か渡部さんのほうから質問をされるはずだったのですが、時間が無かったこともあり、うやむやになってしまいました。どのような質問だったのか今になってみると気になるところです。

例会報告

1 第2回編集委員会報告：安藤さん

学術雑誌塾報告4の投稿規定、主な内容について説明がありました。

2 JAMAの表紙絵をめぐって；その役割と影響力について：（レンブラントが好きな）木下さん

1964年に初めてJAMAの表紙に絵が登場してからの表紙の変遷、表紙に絵を使うことを提案し、絵の解説を続けてきた元JAMA副編集長 M.T.Southgate についての説明がありました。また、1983年から毎年8月6日頃使われる Iri and Toshiaki Maruki の Hiroshima Mutals (detail) という絵と、その号に戦争、核、原爆症の記事が載せられるという興味深い報告がありました。

次回例会は、9月8日(土) 東邦大学図書館です。山崎塾長は、第32回国際医学史学会（アントワープ）に出席されるため、塾の方は欠席されます。

出席者：渡部（学会誌刊行センター）、上原、篠原（病図研）、山口、兼岩、青木、山崎、澤木、真下、黒川、熊谷、小島、北川、木下、川村、井上、広田、安藤、雨宮、神場＝報告者、懇親会特別参加者＝Mr.チャイマンネン佐藤（文部省）（以上敬称省略）

例会報告

日時：1990年9月8日(土) 16:00-18:30

場所：東邦大学医学部図書館セミナールーム

出席者：平輪, 神場, 黒川, 北川, 牛沢, 真下, 井上, 川村, 佐藤, 木下(記録)

1. 発表 —— 医学のあゆみ 略歴：平輪さん

昭和21年3月1日の創刊から現在に至るまでの「医学のあゆみ」の流れを簡潔に説明されました。同年に創刊された「最新医学」、昭和23年創刊の「JAMA 日本版」および「日本医事新報」などとの比較をすることによって「医学のあゆみ」の日本医学界における位置を示しました。さらに、創刊時編集長であった緒方富雄氏に焦点をあて、氏と「医学のあゆみ」の関わりを通して同誌の使命・思想を浮きぼりにしました。

緒方氏の、ひらがなの多い誰にでもわかりやすい文章を読んでいると、緒方氏自身もまた「医学のあゆみ」と同じように「自由でとらわれない」人であったのではないかという思いがします。

2. 報告集について —— 井上さん

1) 各人の進行状況・今後の予定

平輪 「医学のあゆみ」今回歴史を発表したが今後は未定。

神場 今回は提出しません。

黒川 「日本医事新報」創刊時の記事分析を進めていく。同誌を扱う他人とは別に論文を書く。

北川 「科学」はじめに「を」読んで編集方針と歴史を調べていく。

牛沢 「研究者の引用行動」自分の論文が今回の論文集の意向とずれている気がするが...?

真下 エッセイを書くつもり。熊谷さんも今回はエッセイです。

木下 JAMA表紙。前回の発表のように①変遷②MT Southgate③Hiroshima Panelsの3本立てで書く。

安藤 (井上さんが替って答え) BMJの死亡記事。半年か1年分くらいに絞る。

井上 JAMA。1982年以降のラントバーグ編集長の編集方針について。「これいふデータを取ってまとめたい」

川村 獣医学雑誌の表紙のデザインを紹介する予定。

2) 構成

前書きは山崎塾長。後書きは編集委員が1人1人少しずつ書く。

3) 予定

10月13日(土) 次回の塾時に提出(あくまで予定)。11月初めに出版。出版までには必ず提出のこと。

4) 提出形式

フロッピーではなく用紙に印字したものを提出。一太郎以外で作成する者は文字の大きさ、行間隔などできる限り一太郎に近い形式にする。枚数制限なし。

3. 川村さんからのお願い

川村さんが9月1日付でライオグラデ大学日本校の図書室に転職されました。今秋から開校の新しい学校で、ライブラリアンも経験のない人ばかりなので、塾生の皆さんに色々教えてほしいそうです。業者さんの選び方からブックディテクションシステム、蔵書構築、分類表にまで質問は及びました。皆さんの図書館に突然お邪魔するかもしれませんがその時はどうぞよろしくとのことでした。

4. 勝手にコラム — 木下

「隅田川に架けられた長い橋を、市街電車がゆっくりとした速度で東へ渡り行く」
猛暑の続く某日、30年経った「原色の街」を訪ねました。

東武電車の玉ノ井は数年前に改められ東向島になっています。駅周辺は小騎震に整理され高架線の下は駐車場になっています。「抜けられます」の迷路も、今は人々が静かに普通の暮らしをしています。裏通りの町工場の輪転機が食音をせず音を立てていました。

明治通りをしばらく歩き、あまりの暑さに脇道の百花園へ逃げ込みますが、まだ藪には遠すぎました。花のない緑のアーチをくぐり、芒が生い繁る七草の花壇をよぎめて園をあとにします。日影のついで川沿いの道を下り、言問団子をはりに折いて、「花街」と矢印が出ている路地に入ってみても、料亭や新しいマンションがあるだけでした。2階に白い格子のある家が1軒残っていましたが、新築の建物に囲まれてもの悲しく、足早に通りました。

後日、両親に川沿いの街の話をしたら、とても懐かしがっていました。「学生の時ビル工場でアルバイトをしていて、おかあさんが訪ねてきたことがあったよ。耳がずかしかつたけど、別に悪いことをしているわけじゃないから、堂々としていたよ」「なんか、今でも行ってみたいような気がするねえ」、
金ぴかのソフトクリームとガラス張りのショットビルからは、淡い恋も生まれたいでしょうが... あの頃、確かにいつ青春があったんですね。



次回は10月13日(土) 16:00 — 東邦大学医学部図書館です。

P.S. 雨宮さん、川村さんの職場が変わりました。以後連絡はこちらへ。

雨宮 〒150 渋谷区恵比寿 4-6-10 恵比寿ホークビル5F(不祥)プリンター Tel. 449-7261 (直通)

川村 〒146 大田区千鳥 1-13-15 ライオグラデ大学日本校 図書館 Tel. 5700-0690

諸事情により発送が遅れられます 平輪

学術雑誌塾通信 No. 56 は欠番

1. 10月度例会報告 10月13日(土) 16:00~18:00

東邦大学図書館2階会議室

出席者: 山崎、板橋、牛沢、生出、宮内、真下、黒川、
北川、木下、川村、神場、平輪、雨宮、阿部

①黒川・安藤(迷)コンピのインド訪問記

第6回ICMLがインドのニューデリーで行われました。

タージマハルや国立医学図書館など楽しい写真の回覧もありました。

②山崎塾長から

ベルギーのアントワープで行われた国際医学史学会で発表してきました。約300名の参加者で200演題の発表がありました。公用語は英語と仏語。『学術雑誌での発表も大切だけど、直に顔を合わせて意見を交換するというのもやっぱり大事だなと感じました』

③阿部くんから

7月~9月の3ヶ月間留学してきました。7月中は英会話学習、8月はロンドン大学でのサマーコース(書誌情報の国際間での交換のための標準化について)、9月は各地の図書館20余りを見学してきました。詳しくは、報告集で。

2. 報告集4号について

青木、山口、山崎の3氏が提出済みです。みなさん頑張って下さい。

(今後の日程)

10月いっぱいまで各自提出。次回の塾(11/10)が最終締切。

11/20 最終出稿

12/15 塾時に配布

☆次回の塾は、11月10日(土)午後4時 東邦大学2階会議室

◆◆◆勝手にコラム◆◆◆

東京からロンドンまでシンガポール経由で行ってきた。南回りで丸一日ががりの旅だったが、ほとんど寝てばかりいたので距離感もたいして感じなかった。手紙のやりとりには、東京→ロンドンが5日、ロンドン→東京で6日もかかり、行き違いになることも多かったが、そんなことより日本との距離を実感させられたのは、はじめて日本へ国際電話をかけた時だった。8時間の時差（ロンドンの朝日が日本の夕日）と、テレビの特派員報告のようなワンテンポもツーテンポもずれる聞合いでは、まともな会話になるはずもなく、しまいには相手の話など聞かずに一方的に用件をまくしたてて相手の反応を待つという、パッチ検索のような話し方が身につけてしまっていた。

そんなこんなでロンドン滞在も1ヶ月を過ぎたある日、雑貨店で朝日新聞が売られているのをみつけた。しかもその日の日付のもの。1ポンド50セント（約400円）とかなり高かったが、日本語欠乏症の末期症状にさいなまれていたときでもあり、さっそく買い求めて読みまくった。1面からテレビ欄にいたるまで、くまなく読んだなんて後にも先にもきつとあのときだけだと思う。朝日新聞では日本とほぼ同様の紙面を世界各地に通信衛星で送って、現地印刷でその日のうちに発行しているのだそうで、朝日の他にも日経やスポ日もあった。

現地印刷での発行といえば、ScienceやNew England Journal of Medicineなどを思い出すが、こちらの方はあまりリアルタイムで提供されていないように感じる。そこでCCMLなどの全文データベースが依然としてその存在意義を有しているわけである。ところが、イギリスの医学図書館ではこれが意外と使われていない。というのも、ほとんどの図書館が、通常はDATA-STARを利用して、全文データベースをたくさん持っているBRSは使っていなかった。スイスのDATA-STARならオフラインの入手が速いといいながら、全文データベースについては『1週間やそこら来るのが遅くたって、どうってことないよ』といった感じだった。これはイギリスでの全般的な印象でもあった。

東京へ帰る途中、シンガポールの書店でみつけた朝日新聞は関西版でロンドンで最後に買ったものより2日も古かったのが妙に印象に残っている。（信）

1990年11月10日(土) 16:00 - 東邦にて

出席者：山崎、北川、黒川、雨宮、神場、安藤 (6名)

1. 報告集原稿提出

ワープロパソコン通信で情報人(多胡)

JAMAの表紙絵をめぐって(木下)

M**へ(山口)

旧海外領土の医育機関及びその機関誌(板橋)

アントワープでの国際医学史学会に参加して(山崎)

Brandon リストの収載図書の問題別変遷(青木)

日本医事新報-発刊の精神と孤軍奮闘の歴史(生出)

日本医事新報創刊時の背景(黒川)

情報としての死亡記事(安藤)

医学文献の寿命調査(江口)

...その他

2. 今後の予定

当初は12月15日に報告集出版記念パーティーを予定していましたが、諸般の都合により22日に延期します。したがって、15日の塾はありません。

22日に会いましょう。↑場所は、平輪さんがさがしています。(知らぬ間に... ㊦)
出版記念パーティーの

3. 報告集4について

表紙の色は”きぬ”というクリーム色をうすくしたような色にします。

(出席者で勝手に決めさせていただきました)

タイトルは相変わらず未定です。

もし、間に合うようでしたら御意見おしらせください。

4. 雑記

原稿提出の遅れている方、17日(土)に安藤は出勤しています(2時まで)ので、図書室まで持ってきていただいても結構です。詳しくはお電話で!

(文責：安藤)

1990年12月22日

出席者：安藤、平輪、井上、板橋、兼岩、北川、小島、黒川、牛沢、山崎

1、「学術雑誌塾報告4」の完成と配布

「学術雑誌塾報告4」ができあがりました。安藤委員長をはじめ、委員の方々に感謝します。どうもありがとうございました。宅急便の手配、塾生への分配、寄贈者分など整理し、2月の生物医学図書館員研究会と6月の図書館情報サービス研究大会で販売するものなどに分けました。請求金額は17万円でした。出版記念パーティーは、大森の”ビヤグラ”で行ない、パーティーのみの出席者もまじえプレゼント交換もしました。幹事の平輪さん、ご苦労様でした。

2、1991年の塾について

1985年の11月9日に、はじめての学術雑誌塾を行ないました。出席者は、浜田、平石、廣田、北川の5名でした。手書きの「学術雑誌塾通信 No.1」は、11月20日付けで発行されました。初期は塾生も少なく、学術雑誌に関する基本的な文献を訳読しながら、Index Medicusの収載誌の変化を「生態学的なアプローチ」で調査を行ないました。文献を読み、調査をし、論文にまとめるというような方針で、運営していこうとしたわけです。塾生が増えるにしたがい、小グループ単位で調査研究をせざるをえませんでした。新しく塾に入った人は、英語の論文の訳読を提出することを義務づけていました。年4論文を目標に翻訳を提出する宿題で、苦労した時期もありました。勉強だけでなく、合宿やボーリング大会なども実施し、塾生相互のコミュニケーションを良くしていこうとしてきました。私自身の付き合いの範囲ではありましたが、異なった世代の人や、異なった業種の専門家との出会いを企画し、塾の活性化をはかったりしました。

塾生も増え、一年ごとのけじめを付けようということで、雑誌塾報告を出版していくことを1987年から始め、グループ研究の成果を中心に自費出版を開始しました。どこまでやれるかわかりませんでした。継続刊行物として番号を付け、国立国会図書館にも送付しISBNナンバーも登録しました。塾の運営は、当初は平石君を中心にやってもらい、その後は廣田君に幹事長をお願いし、数人の幹事の人々との合議で塾をまとめてもらいました。しかし、1990年は塾に参加する人々も少なくなりました。4-5名だけの会も何回かあり、休む時に電話をいれるという申し合わせも忘れられたようです。夜の会だけの参加を否定する気はありませんし、たまに来られるのでも結構です。しかし、それは昼間の会の存在があつてのことだと思えます。少々メリハリが無くなってしまいました。計画した「言葉」と「実行」との落差が、今以上大きくなることはよくないと考えています。仕事の世界は、少々我慢したり、無理に笑ったりしながら生きていかざるをえないでしょ

うが、塾の世界も同じようになってしまったら終わりであると思っています。メンバーの異動もあり、必ずしも「学術雑誌」というテーマに関心のある人々だけではなくなくなったようです。私自身、この10年間は働く仲間たちと生物医学図書館員研究会をはじめ、図書館情報サービス研究大会を組織し活動をしてきました。同時に、自分たちの研修や情報交換の組織だけでなく、若い人々の教育の機会を作ろうと考え塾をはじたわけです。生涯教育や専門職として質の高い仕事をするためにも、塾のような場が形成されなければなりません。ただし、このような場の必要性は誰でもが語りますが、その実行となると少ないものです。そして、その実行には困難もあり、実践した者だけが知っていることかもしれません。また、持続していくには目に見えない努力も大切です。特にその意味から、廣田幹事長と東邦の4名の方々、そして編集委員長になられた人々のご尽力に感謝しています。10年が過ぎた今、自分の目の前に見えてきたテーマに対して限られた時間とエネルギーではあるけれど、集中したいという思いを強くしています。

しばらく、塾を休会してみたいと考えています。2月の生物医学図書館員研究会には、多くの塾生が参加し発表してもらいたいと希望しています。春になってから現在の幹事会の人々と1991年の塾について話してみるつもりです。「遠くまであるいていくために」の完成をみた時点で、現在の率直な気持ちを記したものです。

學術雜誌塾 1990年會計報告 Jan ~ Dec

<收入>

前年度繰越金	10,098 (円)
年会費	22,800
報告集売上	9,000
レポート用紙売上	400

42,298,-

<支出>

通信料、送料	15,442 (円)
ジュニア代	4,531
報告集補助	10,000,-
祝電、講師お礼	6,174,-

36,147,-

残金 6,151円は次年度に繰越し可。 (平輪)

「**学術雑誌塾**」のこと



レファレンス—さまざまな館種から

「学術雑誌塾」のこと

東邦大学医学メディアセンター
牛澤 典子

このたびこの原稿のお話をいただいて、不勉強な私は全く適役でないと思ったのですが、昔お世話になった「学術雑誌塾」のおかげでなんとか今もご飯が食べられていると思うので、これについて書くことにさせていただきました。「学術雑誌塾」という名称からするとレファレンスの枠からはずれられると思われるかもしれませんが、ここで学んだことで利用者の質問や要望にどんな意図があり、どのような答えを望んでいるか推測できるようになったと思うのです。

なお、この稿をまとめるにあたり、元塾生数人の方からコメントをもらい、文中(『 』内)に入れさせていただいたこととお断りします。

I. 「学術雑誌塾」のはじまり

「学術雑誌塾」は、1985年11月から1990年12月にかけて、現在愛知淑徳大学教授でいらっしゃる山崎茂明さん(当時慈恵)が、医学系図書館の若手育成のため開いたものです。開始当時は山崎塾長と、東京慈恵会医科大学や昭和大学などの4名が塾生として参加していました。今手元にある「学術雑誌塾通信 No. 1」を見ると、初回から塾生の共同研究「Index Medicus 収載誌の国別分布変化」が企画されており、文献調査、調査作業、論文作成の年間スケジュールが組まれています。本格的な始まり方でした。この調査は、1986年6月に札幌で開かれた第3回図書館情報サービス研

究大会(現医学情報サービス研究大会)で発表されています。

II. 文献を読む

塾は月1回のペースで土曜日の午後開催されました。塾生には英語文献の抄読が課せられ、毎回数人ずつ発表しました。学術雑誌の歴史、学術雑誌の数¹⁾、Index Medicusに収録される雑誌採択の基準について²⁾、などの1960年代の文献が主でした。英語の苦手な私などは、辞書を片手に抄読の準備をするものの、訳がすすまないのに時間ばかりがすすんでひひひ言っていたものです。それでもMeSHについて1964年に書かれた文献³⁾を読んで、そのポリシーに感激したのは忘れられません。これらの抄読は後のグループ・個人研究へとつながっていきますが、それをまとめた報告集(後述)の前書きで塾長はこう書かれています。

「なぜ1960年代なのかと正面から問われても、きちんとした答えを出すことは困難です。ただし、個人的には、'60年代を見直すことで、'80年代の現在の自分たちの状況をとらえることができるのではないかと考えています。…IAIMSを中心とした'80年代の状況が、'60年代の医学図書館援助法、MEDLARS、RML (Regional Medical Library) プログラムなどを生んだ医学図書館の黄金時代と似ているのではないかと…現在を正しく認識し、将来への展望を明らかにしていくために、'60年代の医学図書館活動をめぐる多様な状況を調査してみたいと思っています。」

USHIZAWA Noriko

東邦大学医学メディアセンター

〒143-8540 東京都大田区大森西5-21-16

e-mail: ushizawa@med.toho-u.ac.jp

(受理日: 2002. 10. 4)

III. 塾生増える、増える

さて、回を重ねるたびに口コミにより塾生が増えました。塾長は横のつながりが広い方ですから、上司から参加するようすすめられた人もあると思います。かと言って嫌々参加しているわけではなく、一度参加すると塾長の人柄に納得して続けていたはず。そしてその人がまた知り合いを誘う、という具合だったでしょう。医学系、歯学系、獣医学系の図書館、病院図書室、関連企業など最終的には20を越える機関からの参加がありました。塾生の数は30名プラスα。飲み会や合宿のみの参加者を入れると40名を越えたようです。年齢は20歳～30歳代でした。

『あの頃は、まだ入職2年目で、医薬情報に関する知識も経験もまだまだ足りなかった時期でした。そんな時に同じ方向を向いた同世代の仲間達と勉強ができたことは大変有意義であり、また励みになりました。』『一人でこつこつ学ぶということができませんが、雑誌塾に出て行くと頑張っている人のパワーが刺激になりました。また情報交換ができたことも大きかったですね。』というコメントが皆の当時の気持ちをよく表しています。

IV. アフターファイブは切り貼り

塾生が増えたのでグループ分けを行って、それぞれにテーマを設定し、調査研究をすすめました。“日本の医学雑誌の草創期”、“ピア・レビュー(レフェリー・システム)”、“コア・ジャーナル”、“健康雑誌”、“研究者の活動”などのテーマがあがっています。

調査研究をするだけではありません。発表や論文投稿を目標として課されていました。月1回の例会だけではとうてい間に合いませんから、皆アフターファイブや週末を犠牲にして作業をし、集まって集計したり、報告をまとめていきました。引用文献を使った調査が多かったので、引用文献欄をコピーして一つ一つ切り離し、業務で要らなくなった図書カードの裏に一枚ずつのりで貼り、abc順に並べて集計するという原始的な手作業をずいぶんやりました。これをやらなかった塾生は

いないのではないのでしょうか。

V. 「発表は顔と声で勝負スベシ！」

まとめた研究は図書館情報サービス研究大会や生物医学図書館員研究会、三田図書館情報学会研究大会などで発表しました。発表者だけでなく共同研究者その他の塾生も応援のため(?) 東に西にぞろぞろついていったものです。

「発表の時の配布物は“おみやげ”と考えて、発表はあくまで顔と声(とスライド)で勝負スベシ」「発表は自分の言いたいことをいかにわかりやすく相手に伝えるかということである。そのためには、グラフの種類、並べ方など工夫が必要なのである」という事前アドバイスがありました。

『山崎さん自身もジーンズ姿で発表を行っているのを見て、堅苦しくならずに気軽に発表することを教わった』という声もあります。

VI. 「学術雑誌塾報告」

1987年からは「学術雑誌塾報告」として共同研究、個人研究をまとめて発行しました。編集委員会を内部で組織しての作業でした。国立国会図書館で手続きし、ISSN 0915-3675を取得しています。4号まで発行しており、それぞれ下記のテーマが掲げられています。

学術雑誌塾報告

- 第1号 (1988) 「私たちの'60年代」
- 2 (1989) 「Working with each other」
- 3 (1990) 「1990年代に向けて—」
- 4 (1990) 「遠くまで歩いていこう」

残念ながらNACSIS Webcatでヒットしないようですが、興味がおありでしたらお近くの元塾生に声をかけていただければ読むことができます。また多少残部もありますのでお申し出ください。

ここで収録されたものの中には、さらにきっちり書き上げて「医学図書館」などに投稿したものもあります^{4)~8)}。生理学の先生の指導を得、「日本生理学雑誌」に掲載されるという快挙もありました⁹⁾。これは当然PubMedで検索してヒットします。

VII. 仕事は人脈だ

この間、医学図書館の諸先輩に会う機会を何度も作っていただきました。特に現在JMLAの名誉顧問でいらっしゃる板橋瑞夫氏（当時昭和大大主任司書）、東邦の山口直比古氏（当時浜松医大）、順天堂の青木仕氏の3氏は塾の顧問として、何度も例会に参加して下さったり、合宿に同行して下さって、なにかとご指導いただきました。他にも10名を越える方々のお話を聞いたり調査研究にアドバイスを頂戴しました。

勉強の場だけでなく飲み会にもずいぶん一緒にいただきました。『板橋さんから聞くお話は、酒の席ならではの貴重なお話が多かったように記憶しています。世代を越えていろんな人から学ぶ機会を得られた貴重な時期でした。』

当時の塾生はそのまま図書館で働いている人、異動のあった人、転職した人、家庭に入った人とそれぞれですが、『やはり共に勉強した皆さんと横のつながりができたこと。いろいろ相談やお願いができる繋がりがある、ライブラリアンとして財産になることを身を持って体験したように思います。』

VIII. 多彩なメニュー

塾は主に慈恵と東邦で開催されましたが、他の塾生の職場を使わせてもらうこともあって、お互い図書館・室をよく見せてもらいました。その他の医学図書館を見学に出かけたり、国立国会図書館ツアーの企画もありました。

5年の間には、塾生個々もインドのニューデリーで開かれた第6回ICML（1990）やMedical Library

Association 年次総会への参加、イギリスへの留学などを経験し、報告しあいました。

そして毎回塾の帰りには親睦を図るとの名目で新年会に忘年会、報告集出版記念パーティと様々なコミュニケーションをしました。時にはレクリエーションとしてハイキングやボウリングに繰り出したこともあります。

さらには葉山、自治医大、箱根、鳥取での合宿もしました（写真）。塾長やゲストの講演、グループ・個人の研究発表や打ち合わせがメインではありませんでしたが、もちろん、レクリエーション、親睦会つきでした。

IX. 塾長の休会宣言とその後

そして、1990年12月、塾長の休会宣言をもって塾は終止符を打ちました。塾生が増え、また時間が経過して各人の異動があったり生活が変わっていく中で、塾が当初の求心力を持続するのが難しいこと、塾長がご自身のテーマに集中したいというのがその理由でした。'88年から塾生の中でも幹事会を持ち、塾の運営、活性化が何度も話し合っていたのですが、出席率や意識の低下に歯止めがかからなかったのです。

休会とは言っても、なんやかやと集まる楽しさを忘れられない有志が集まって話し合いを持ちました。そして、反省しつつも一緒に勉強していこうということになりました。塾長から自立して、「学術雑誌倶楽部」と名称を改め、再出発しました。1991年から1994年にかけて抄読を中心に集まっていました。関西方面で発足した「大阪勉強



1987年9月 葉山合宿



1987年12月 自治医大合宿にて勉強中

会」と一緒に合同合宿を行ったこともあります。

…が、「倶楽部」は自然消滅してしまいました。その経緯もよく思い出せないほどです。一応代表ということになっていた私のせいかもしれません。

X. まとめ

学術雑誌塾で我々が教わったのは、医学雑誌についてではなかったように思います。という語弊がありますが、すでにできあがっているものについて論ずるのではなくて、科学コミュニケーションの中で医学雑誌がどのように作られており、またどのように流通し使われているかということ学んだのです。医学雑誌ではピア・レビューが重視されていること。出版や流通に様々なバイアスがありうること。JAMA、New England Journal of Medicine、Lancet、BMJが四大医学総合雑誌と呼ばれており、医学図書館で働くからには毎月目を通しておくべきこと。医学雑誌編集者国際委員会というのがあり、標準的な投稿規定「生物医学雑誌に関する統一規定」を定めている、それは通称バンクーバースタイルと呼ばれ、多くの雑誌で採用されていること。これらのことは仕事をする上で貴重な知識になっています。

また、その時々塾長自身が調査しようとしていること、資料を求めて外国まで出かけていったこと、そこで出会った人や見た風景のこと、いろんなことを話してくださいました。

「テーマや仮説はあとからでもよい、文献検索をまずはしっかり。その点では皆プロなのだから」
「学術雑誌での発表も大切だけど、直に顔を合わせて意見を交換するというのもやっぱり大事ななと感じました（ベルギー・アントワープでの国際医学史学会（1990）で発表時）」など、語録になりそうな発言も多々あり。ご自身の投稿、Priceの学術雑誌の指数的成長のグラフについての批判¹⁰⁾を示し、国内でも簡単に引用されたりしているが、十分に検討を行わないで安易な引用をしてはいないかという、文献を批判的に読むことの注意も受けました。

さらに話を聞くだけでなく、自分たちでテーマ

を設定して調査・研究をする、発表して、論文を投稿する、雑誌を刊行してISSNもとる、ということを実際にやったのは得難い経験だったと思います。『調査／論文作成から学会発表、雑誌制作まで、情報の川上（源流）から川下までを20代のうちに経験することができたことは、その後の職業人生に多大な影響を与えてくれました。塾については、その後の仕事に対する姿勢の骨格というか、背骨を作っていたいただいた…と感謝しています。（ライブラリアンとして）プロとして仕事をするということはこういうことなのか！と、とても新鮮でした。』

『集まってきた個々がそれぞれの視点から研究発表したことを聞いたり、グループで調査し発表したりすることで、単に一人で勉強する何倍も得るモノがあったように感じております。そういった意味では、単なる輪読会と違って、山崎さんには発表することの大切さを教わったように思います。』

今私は当時の塾長と同じ年齢に達してしまいました。「…毎年1編ぐらいのペーパー（レポート）を書き、毎年10～15編の英語論文を読み、共同でもよいし、単独でもよいから調査を行いデータを整理するといったことを、みなさんが映画を観たり、音楽を聴いたりするのと同じように、気軽に取組んで欲しいと願っており、…」（通信 No. 24）という言葉どおりに、当時の塾長は図書館の仕事の傍ら研究を実践していらしたことにあらためて尊敬の念を持つばかりです。『山崎さんの学ぶということに対しての“軽やかさ”が驚異でした。』

とてもまねできるものではないのですが『雑誌塾で出会った人達、そしてあの日々は財産だと思います。』という元塾生共通の思いを胸に働いています。

引用文献

- 1) Barr KP. Estimates of number of currently available scientific and technical periodical. Journal of Documentation. 1967 23 : 110-116.
- 2) Karel L. Selection of journals for Index Medicus : a

- historical review. Bull Med Libr Assoc. 1967; 55(3) : 259-278.
- 3) Sewell W. Medical subject headings in MEDLARS. Bull Med Libr Assoc. 1964; 52: 164-170.
 - 4) 井上三郎、平輪麻里子、神場清治 他. 健康雑誌の特性と評価. 医学図書館. 1990; 37(2) : 86-92.
 - 5) 山口直比古、阿部信一、兩宮正恵、大村伸栄、多胡英樹、廣田住友. 学会発表における審査 国内医学分野でのアンケート調査. 医学教育. 1990; 21(6) : 387-394.
 - 6) 木下真由美. JAMAの表紙絵をめぐって: その変遷と顔としての役割について. 医学図書館. 38(2) : 172-177. 1991. [平成3年度 JMLA 奨励賞]
 - 7) 阿部信一、兩宮正恵、広田住友、大村伸栄、多胡英樹、山口直比古. 学会発表抄録についての意識調査 研究者・臨床医に対するアンケート調査. 医学図書館. 1992; 39(2) : 175-178.
 - 8) 牛澤典子. 米国医学図書館協会の継続教育コースと教育システム. 医学図書館. 1995; 42(2) : 217-226.
 - 9) Hirawa M, Inoue S, Kitagawa M, Yamazaki S, Sakai T. [Research activities of Japanese physiologists as seen in their published literature] Nippon Seirigaku Zasshi. 1989; 51(7) : 224-229.
 - 10) 山崎茂明. 学術雑誌の成長をめぐる批判的検討. 情報管理. 1987; 29(10) : 863-870.

牛澤典子著：『「学術雑誌塾」のこと』の転載にあたっては、著者と日本病院ライブラリー協会から転載許諾を得ました。

日本病院ライブラリー協会発行「ほすぴたる らいぶらりあん」334-338ページ、27巻、4号、2002年より転載。

塾長講義

塾長講義

学術雑誌研究への手引

学術雑誌塾を始める際、どのような視点から学術誌研究を行うべきか提案する必要があった。そこで5つのアプローチを示した。

- ① 生態学的アプローチ：学術雑誌を対象にした国勢調査
- ② 歴史的アプローチ：1665年に創刊された2誌(フランスの *Journal des Sçavans* とイギリスの *Philosophical Transactions*)を生み出した社会状況とその発展史
- ③ 未来論的アプローチ：電子ジャーナルの形成と進展
- ④ 本質的アプローチ：学術雑誌のレフェリーシステム
- ⑤ 図書館的アプローチ：図書館資料としての学術雑誌

24のエッセンシャルな講読文献を、この5つのアプローチに分けて示した。さらに、学術雑誌研究のための主要な書誌、単行書、専門誌を紹介した。さまざまな視点から学術雑誌を解き明かしてもらいたい。

山崎茂明. 学術雑誌研究への手引. 医学図書館 1986; 33(2): 99-110.

Librarianship

1989年7月から9月まで3ヶ月の短い留学であったが、米国医学教育史に関する実証的な調査をおこなうことができた。この“Academic origin of the first professors in American medical schools before the Civil War” (Scientometrics, 1991)をまとめるために、フィラデルフィアの医学図書館員や医学史研究者が力になってくれた。この経験から、Librarianshipの基礎はホスピタリティ(親切な心)であり、学歴や経験に関係なく誰でもすぐに持ちうるものである。また図書館は経済的な価値観が優先する社会とは一線を画すべきである。提供されるサービスは、無料を原則としたボランティア精神で運営されている。Philadelphia Free Libraryの“free”は、自由ではなく無料を意味している。

山崎茂明. Librarianship: 遠くまで歩いていくために. 薬学図書館 1990; 35(1): 14-20.

図書館員の専門性をみかく

本論は1999年に発表され雑誌塾の活動時期と一致しないが、記載内容は塾での学びを反映している。専門性をみかくために基本的な知識として何が必要かというよりも「何がしたいのか」を問うことが大切である。現在の時間とエネルギーを不確実な将来に備えるより、自分が実行したいことやそうあって欲しいことのために使うべきである。例えば海外の会議に参加し同じ分野で働いている人と交流したい時、語学力を付けてから海外へ向かおうと計画するのではなく、まずは直接出かけることをすすめる。中世ヨーロッパでは、学者は旅をしていた。大学や修道院へ旅をすると、そこには同学の人と資料が存在し書物の余白に記述された手書きの注記から多くの学びを得るだろう。

山崎茂明. 医学図書館員の専門性をみかくために. 医学図書館 1999; 46(3): 254-260.

学術雑誌塾塾長

愛知淑徳大学名誉教授

山崎 茂明

学術雑誌研究への手引

A Guide to the Research Literature on Scientific Journals

山崎 茂明*

東京慈恵会医科大学医学情報センター

Yamazaki, S. : A Guide to the Research Literature on Scientific Journals. *Igaku Toshokan* 33(2) : 99-110, 1986.

Scientific journals are one of the most important sources of information for the scientific community. The purpose of this review was to provide beginners basic key papers for the studying of scientific journals worldwide, together with some brief comments on each. Each of five separate approaches to research on scientific journals, namely ecological studies, historical studies on scientific journals, their future prospects, their role in the scientific community, and their positions in libraries, are dealt with respectively. The author emphasizes that librarians and information specialists should take an interest in the characteristics and problems of scientific journals.

I. 学術雑誌研究の必要性

学術雑誌は、自然科学系の図書館にとって、利用サービスの中心となる資料であり、一般的に図書館資料購入費の50%~70%を費やしている。学術雑誌に関する知識は、自然科学分野の図書館員にとって、欠かすことのできない基礎知識の1つである。それだけに学術雑誌を対象とした調査が、様々な視点から行われる必要がある。また、従来の学術雑誌を対象とした図書館界の論文は「図書館資料としての学術雑誌」といった実務的なものが多いだけに、「科学コミュニケーションの主要なメディアとしての学術雑誌」といった本来的な視点を強化しなければならない。

この論文は、学術雑誌をより深く理解していくための手引を提示することを目的としている。はじめに、学術雑誌をテーマにした研究調査を行うための、5つの視点と代表的なキーペーパーをあげた。そして、基本的な書誌、単行書、雑誌などを紹介し、どのように取り組むべきかを示した。なお、5つのアプローチか

らみたキーペーパーリストは第II章末尾に、基本的な単行書リストは第三章2節の末尾にまとめた。また、とりあげた文献は、英語のものが中心になっている。

II. 学術雑誌研究のための5つのアプローチ

学術雑誌は、科学コミュニケーションにおける情報伝達の主要なメディアとして発展してきた。図書館資料として学術雑誌をとらえようとしたのでは、あまりに片寄ったものになってしまう。図書館という枠組みを取り去り、より広い視点から接近する必要がある。そこで、1. 生態学的アプローチ 2. 歴史的アプローチ 3. 未来論的アプローチ 4. 本質的アプローチ 5. 図書館的アプローチ といった5つの視点を設定してみた。そして、それぞれのアプローチの内容を説明し、読まれるべき基本的論文をあげてみたい。

1. 生態学的アプローチ

学術雑誌とは何かといった本質的な問を発する前に、学術雑誌と呼ばれているものを、数量的、形態的にとらえようとする試みが第一にあるであろう。現在の世界の学術雑誌数、その発行国別分布、主題分野による分布状況などを調査するアプローチである。これは、

* Shigeaki YAMAZAKI : The Jikei University School of Medicine Library, 3-25-8 Nishi-Shinbashi, Minato-ku, Tokyo 105, Japan.

世界を対象とした巨視的な調査だけでなく、日本国内で発行されている学術雑誌を対象に、主題分布、発行頻度、発行母体、掲載論文量、などといった形態を詳細に把握することにもつながる。いわば学術雑誌のセンサス(国勢調査)とでもいえるものである。

British Library Lending Division (BLLD)の現行受入目録を調査し、世界の学術雑誌の国別・主題別分布を示した Carpenter & Narin (1980)の論文はその代表的ペーパーといえる。また、Carpenterらのペーパーのなかで、調査結果を比較されている各国のナショナルリストを分析した Gottschalk & Desmond (1963)の論文、そして、26,000タイトルにおよぶ NLL (National Lending Library)の1965年受入雑誌を分析した Barr (1967)の論文などがある。なお、Martyn (1978/79)の論文は、短い総説論文であるが、雑誌数の成長というテーマで、それまでの主要な論文を批判的に検討しており、まず手始めに読まれるべきものである。

2. 歴史的アプローチ

1665年に、フランスの *Journal des Sçavans* とイギリスの *Philosophical Transactions* が創刊され、学術雑誌の歴史がはじまった。その後、3世紀以上にわたって、科学コミュニケーションにおける最も主要なメディアとして成長してきたわけである。学術雑誌とは何であるかといった学術雑誌のアイデンティティを捉えるために、その発生時に帰って検討する必要がある。学術雑誌を産み出した17世紀の社会状況や、そこにいたるまでの出版と学術世界の歴史などが、整理されなければならない。

Porter (1964)により、学術雑誌生誕300年を記念してまとめられた論文は、1665年の2つの学術雑誌の発生に焦点をあわせながら、さらに現在を科学コミュニケーションの危機の時代とみなした。そして、科学文献を伝達するための新しいフォームとシステムの必要性を示唆した重要なペーパーである。McKie (1948)は、学術的私信(scientific letter)から学術雑誌へと移らなければならなかった理由として、私信は新しい知識の広く速やかな伝達に不向きであり、先取権(pri-

ority)の確定ができないという欠点をあげていた。

Barnes (1936)は、初期の学術雑誌の編集実態をまとめている。とくに、学術雑誌の発生とその性格に影響を与えたものとして、1564年以来フランクフルトで出版された書籍市目録の存在を指摘した点はユニークであろう。また、*Journal des Sçavans* や *Philosophical Transactions* だけでなくドイツの最初の学術雑誌であり、当時の国際語であったラテン語で刊行され、ヨーロッパ全域への流通を目指した *Acta Eruditorum* とその編集者 Otto Mencke も紹介している。Garrison (1934)は、生態学的アプローチを加味し、17～18世紀の学術雑誌の書誌を作成した。17世紀の学術雑誌数は27誌であり、18世紀になると755誌がリストされており、各々の発行国別分布も知ることができる。日本の文献では、小野寺 (1957)により明治以後の医学雑誌の歴史がまとめられている。

各国の学術雑誌の歴史、特定分野における学術雑誌の変遷史、さらに個々の雑誌の歴史など、様々なレベルで史的検討がなされるべきである。

3. 未来論的アプローチ

学術雑誌のフォームに物理的变化がおきつつある。従来の印刷体からエレクトロニック・フォームへの変化である。しかし、学術雑誌の中身が変わる訳ではない。大切なことは、変わるものと変わらないものを、明確に識別することであろう。electronic journal や ADONIS 計画を紹介したわが国の論文は、変化する部分にばかり目がいつているのではないだろうか。物理的な伝達フォームの変化のなかにありながら、それにもかかわらず変化しないものこそ、学術雑誌の本質であろう。変わらないものは何かを捉えるために、学術雑誌の未来を展望し、現在を再検討する必要がある。

まず、electronic journal がどこからやってきたのかを考える必要がある。Index Medicus に代表されるような大型二次資料誌のコンピュータを用いた自動編集システムの成果、イギリスやオランダを中心とした EPC (Editorial Processing Center) 方式による小規模学術出版へのコンピュータの応用、そして

EIES (Electronic Information Exchange System) に示されるようなコンピュータ・コミュニケーションの実験, このような動向が集約され electronic journal が生まれたのである。

Bamford (1973) は, EPC の構想を最初に提出し, Hiltz (1978) は, EIES の実験を記述し, 科学コミュニケーションと生産性に与える影響と評価について考察した。EIES は, Hiltz も述べているように, アメリカで1960年代に行われた IEG (Information Exchange Group) の実験を継承したものであろう。electronic journal の考えを最初に提示したのは, Sondak & Schwarz (1973) である。彼らは「microform の学術雑誌は, 人々に受け入れられないけれど, paperless journal は10年以内に主要な情報メディアになるだろう」と述べていた。70年代の後半になると, Senders (1977) が本格的な検討を行い, Greaster (1976) が, 一次雑誌の最も有望な代替物について印刷体の学術雑誌の改良を含めて調査した。そして, 80年代に入って, イギリスで BLEND-LINC プロジェクトが行われ, Shackelら (1983) が成果をまとめている。なお, Senders への批判を行いながら, コンピュータ技術の学術出版への影響を冷静に論じた Montagnes (1981) の論文は, 示唆に富んでいる。

4. 本質的アプローチ

学術雑誌をメディアとしたフォーマル・コミュニケーションの在り方は, 常に批判の対象となってきた。プレプリントの流通促進, マイクロフィルム, マイクロフィッシュ, マイクロカードの出現, そして electronic journal の創生といった形で, その批判が表現された。しかし, これらの代替フォームを論ずる華々しさよりも, 地道に生き抜いてきた学術雑誌の強靱さが印象深い。この強さを根底で支えているものこそ, 学術雑誌の本質 (変わらないもの) ではないだろうか。

速報性は学術雑誌の強さを支えているのだろうか。たしかに, 多くの人々に新しい知見を迅速に伝達するシステムとして学術雑誌は支持されてきた。しかし, 速さだけでなく遙かに優れたシステムが, すでに存在し

ていたはずである。学術雑誌が今日まで発展してきた理由は, どこにあるのだろうか。それは, 学術雑誌が人々にもたらす情報の質的信頼性の高さにある。そして, この情報の質を制御するメカニズムこそ, レフェリーシステムに他ならない。レフェリーシステムは, 信頼性のある情報を公衆へ伝達していく際, フィルターとして機能するだけでなく, 論文評価をめぐって著者・レフェリー・編集者の三者による真剣な意見交換を可能にするフォーラムを提供してきたのである。学術雑誌が, 科学コミュニケーションにおける中心的メディアとして維持されてきた理由は, ここに集約できるであろう。

レフェリーシステムを対象とした本質的アプローチは, Zuckerman & Merton (1971) によって, 本格的に行われた。彼らは, 分野による論文却下率パターンと, 物理学の代表誌である Physical Review を例としたレフェリーシステムの現状を分析した。その後の主要な調査は, 15ヶ国・43分野からの約150誌を分析した Juhaszら (1975) のものや, イギリスの32の自然科学雑誌を対象にした Gordon (1978) の調査などがある。また, 論文審査をめぐる様々な問題, 例えばレフェリー間の判定の不一致, 審査の匿名性のあり方, レフェリーの保守主義, レフェリーによる盗用など, が整理される必要がある。とくに, New England Journal of Medicine の編集委員長であった Franz Ingelfinger によって示された「研究者は学術雑誌に受理された論文を注意深く扱うべきであり, 医学ジャーナリズムに公刊前に発表すべきではない」というルールは, 学術情報の伝達において, 速報性と信頼性のどちらが重要であるかという論争的になっている。この Ingelfinger ルールの問題点は, Culliton (1972) によってまとめられている。そして, このルールへの代表的批判は, JAMA の編集者である Grouse (1981) によってなされた。

5. 図書館的アプローチ

図書館資料としての学術雑誌という視点から調査するアプローチであり, 私たちにとって最も理解しやすい。学術雑誌の選択, 受入, 排架, 貸出, 目録, 製本

といった、業務に基づいた実務的な内容をまずあげることができる。さらに、コア・ジャーナルと蔵書構築、相互利用と雑誌、分担収集と共同利用、雑誌の欠号と流通、抄録・索引誌の分析、文献記載法と標準化、雑誌管理システムの開発、総合目録とネットワーク、貸出や複写による利用調査など、様々な対象が存在する。

本稿の目的は、図書館的アプローチ以外の視点の重要性を明示することであり、このアプローチによるキーペーパーは、L. T. Morton “How to use a medical library” (London, Heinemann Medical Books) の最新版や、後述する基本的単行書の文献リストから見つけ出してもらいたい。ここでは、一例として、利用調査のキーペーパーをあげるにとどまっている。

アプローチ別文献リスト

① 生態学的アプローチ

- 1) Barr, K.P.: Estimates of the number of currently available scientific and technical periodicals. *Journal of Documentation*, 23: 110-116, 1967.
- 2) Carpenter, M.P. and Narin, F.: The subject composition of the world's scientific journals. *Scientometrics*, 2: 53-63, 1980.
- 3) Gottschalk, C.M. and Desmond, W.F.: Worldwide census of scientific and technical serials. *American Documentation*, 14: 188-193, 1963.
- 4) Martyn, J.: The growth of journals; a short review. *Journal of Research Communication Studies*, 1: 259-262, 1978/79.

② 歴史的アプローチ

- 1) Barnes, S.B.: The editing of early learned journals. *Osiris*, 1: 155-172, 1936.
- 2) Garrison, F.H.: The medical and scientific periodicals of the 17th and 18th centuries. *Bulletin of the Institute of the History of Medicine*, 2: 285-343, 1934.

- 3) McKie, D.: The scientific periodicals from 1665 to 1798. *Philosophical Magazine*, 1948: 122-132.
- 4) 小野寺俊治: 初期の日本医学雑誌. *日本医事新報*, 1728: 47-50, 1957.
- 5) 小野寺俊治: 1891-1956年の日本医学雑誌. *日本医事新報*, 1736: 88-95, 1957.
- 6) Porter, J.R.: The scientific journal; 300th anniversary. *Bacteriological Reviews*, 28: 211-230, 1964.

③ 未来論的アプローチ

- 1) Bamford, H.E.: The editorial processing center. *IEEE Transactions on Professional Communication*, 16: 82-83, 1973.
- 2) Greaser, C.U.: Alternatives to traditional forms of scientific communication. *Scholarly Publishing*, 8: 54-66, 1976.
- 3) Hiltz, S.R.: Impact of computerized conferencing system upon scientific specialities. *Journal of Research Communication Studies*, 1: 111-124, 1978.
- 4) Montagnes, I.: Perspectives on the new technology. *Scholarly Publishing*, 12: 219-229, 1981.
- 5) Senders, J.W.: An on-line scientific journal. *Information Scientist*, 11: 3-9, 1977.
- 6) Shackel, B. et al: The BLEND-LINC project on 'electronic journals' after two years. *Aslib Proceedings*, 35: 77-91, 1983.
- 7) Sondak, N. E. and Schwarz, R. J. The paperless journal. *Chemical Engineering Progress*, 69: 82-83, 1973.

④ 本質的アプローチ

- 1) Culliton, B.J.: Dual publication; Ingelfinger rule debated by scientists and press. *Science*, 176: 1403-1405, 1972.
- 2) Gordon, M.: Disciplinary differences, editorial practices and the patterning of rejection rate for UK research journals. *Jour-*

nal of Research Communication Studies,
1: 139-159, 1978.

- 3) Grouse, L.D.: The Ingelfinger rule.
JAMA, 245: 375-376, 1981.
- 4) Juhasz, S. et al: Acceptance and rejection
of manuscripts. IEEE professional Com-
munication, 18: 177-185, 1975.
- 5) Zuckerman, H. and Merton, R.K.: Patterns
of evaluation in science; institutionalisation,
structure and functions of the referee system.
Minerva, 9: 66-100, 1971.

⑤ 図書館のアプローチ

- 1) Kilgour, F.G.: Use of medical and biolo-
gical journals in Yale Medical Library.
Bulletin of the Medical Library Associa-
tion, 50: 429, 1962.
- 2) Wood, D.N. and Bower, C.A.: Survey of
medical literature borrowed from the
National Lending Library for Science and
Technology. Bulletin of the Medical Libra-
ry Association, 57: 47-63, 1969.

III. 基本的な書誌, 単行書, 雑誌

学術雑誌研究のための主要な書誌, 単行書, 雑誌を紹介してみたい。書誌は, 過去のキーペーパーを遡及的に調査するうえでの情報源となり, 雑誌は current awareness のための資料となる。単行書は, 体系的な理解を得ることができ, 過去の研究動向や現在の課題を知ることができる信頼性の高い情報源である。単行書の中には, 教科書的なものだけでなく, 論文集や会議録も入っているが, いずれも学術雑誌を知るうえで忘れることのできないものである。単行書は, 総合的なもの, 歴史, 未来, 論文の書き方・編集・出版, そして科学コミュニケーションの5つにわけて示した。

1. 書誌

学術雑誌を扱った主要な論文を知るには, 主要な教科書の文献表や, 各自が関心を抱いた論文の引用リス

ト, そして定評あるレビューを利用する方法がある。ここであげる2つの書誌は, より広い視点から学術雑誌研究の全体像を捉えることができるものであり, 有益なツールとなるであろう。

- 1) Hills, J.: A review of the literature on
primary communications in science and
technology. London, Aslib, 1972.

この本は, タイトルから示されているように, 書誌というよりは総説といえるものである。1950年から1971年までの期間をカバーし, 8つのトピックスに分けて551の文献をリストしている。学術雑誌を中心としたフォーマル・コミュニケーションが中心であるが, 会議での予報的な伝達やインフォーマル・コミュニケーションまで, 幅広く収載している。とりあげているトピックスは, ①会議と会議録の機能と利用についての調査, ②予報的伝達のための種々のフォーム, 例えばレターや短報について, ③著者と編集者に関するもので, 著者性やレフェリー制度も含む, ④雑誌出版の経済性, ⑤学術雑誌, ⑥出版方法をめぐって, 刊行遅れとインフォーマル・コミュニケーション, プレプリントやマイクロフォームといった代替メディアについて, ⑦文献情報の利用傾向とその伝達に関するもの,

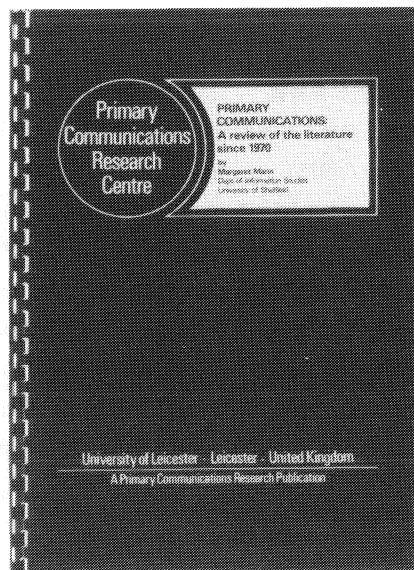


写真 1

利用調査, 利用者調査, 引用分析などを含む, ⑧二次資料の出版を扱ったもの, となっている。

- 2) Mann, M. : Primary communication; a review of literature since 1970. Leicester, Primary Communication Research Centre, 1982. (写真1)

学術情報の一次伝達を扱ったこの書誌は, 前項で触れた Hills の著作を引きついだものであり, 1970年から1980年までを対象に, 627文献をリストしている。Hills の著作は, 書誌というよりは総説であったが, Mann の方は主要な文献に注釈を付けたものであり, review ではなく annotated bibliography となっている。一次情報伝達に関する総合的な研究 (General), 知識の作り手としての研究者 (Scholar), 編集や雑誌出版の代替方式を含んだ学術出版活動 (Publisher), 学術雑誌を中心とした出版物 (Product) の4つのセクションにわけられている。そして, さらにこれらの4セクションを系統的に細分しており, 使いやすい。

Hills と Mann の書誌は, いずれも英語で書かれた文献に限られているが, 学術雑誌を中心とした一次情報伝達の全体を知るうえの最良の書誌となっている。

2. 単行書

1) 総合的な教科書

学術雑誌の最も基本的な教科書を選択するとしたら, Houghton (1975) と Lambert (1985) (写真2) の著作があげられるであろう。この2著は, 同じ出版社から刊行されており, Lambert の著書の方が歴史的記述を減らし, 逆に electronic journal や electronic document delivery systems といった将来の動向に紙数をさいている。しかし, 基本的な構成は良く似ているようだ。また, 引用分析についても, それぞれ独立の章をもうけており, 小型本でありながら学術雑誌にかかわる主題を簡潔にまとめている。文章も読みやすく, 標準的な教科書であり, 図書館学の学生を主な対象として書かれたものである。

Warren (1981) (写真3) と Kronick (1985) (写真4) の著書は, 生物医学分野の学生, 大学院生, 臨

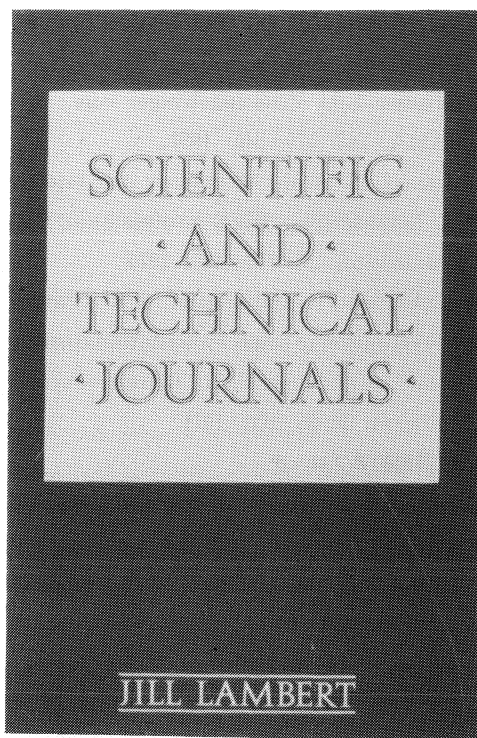


写真2

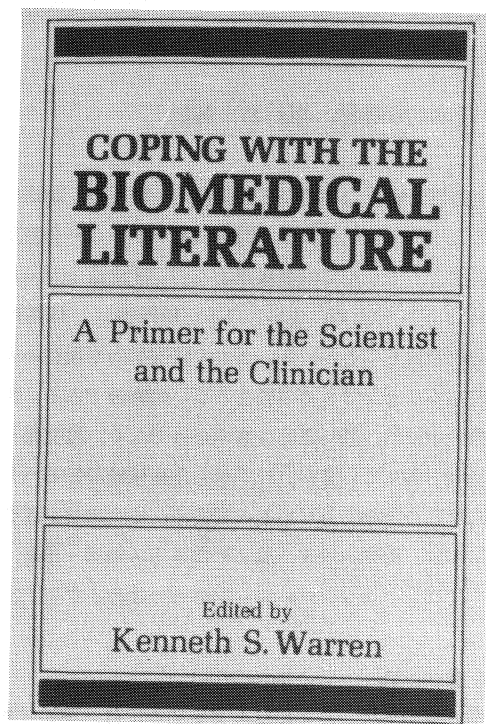


写真3

床家研究者を読書対象としている。Warren のものは、著名な執筆者により分担して書かれている。New England Journal of Medicine 誌の現在の編集委員長である A.S. Relman, 引用索引の創始者 E. Garfield, Bulletin of the Medical Library Association 誌の有名なコラム “Journal Note” を担当している W.K. Beatty, National Library of Medicine の M.M. Cummings, そして科学史家の D.S. Price など、いずれも大家の名がならんでいる。Kronick の著書は、文献を読み、実験・調査を行い、論文を書くという研究活動全体に役に立つガイドとなっている。Warren のものが、やや読み物的であるのに対して、Kronick の著作は単独で書かれていることもあり、まとまりのある構成となっている。研究者自身による個人文献ファイルの作り方、二次情報源のガイドといった実践的な章から、科学コミュニケーションの将来像を検討する章まで、広いパースペクティブを示しており、巻末に484の文献リストを掲載している。

Osborn (1980) の著作の評価はすでに定まっている。図書館資料としての学術雑誌を中心とした逐次刊行物の全体を、実際の業務にそって詳細に記述している。図書館の雑誌担当者が、自らの業務指針として信頼しえるものである。Meadows (1979)(写真5)の編集した Aslib readers series の第2巻は、学術雑誌についての基本的論文を7主題にわけて集めたキーパー集である。英国の最も著名な学術雑誌研究者の1人である Meadows の解説が各章ごとにつけられている。第7章の学術雑誌の将来に関するキーパーとして、1948年イギリスの王立協会が主催した科学情報についての国際会議で発表された J.D. Bernal の論文を第一にあげていた。electronic journal について語る時、約40年近く前の Bernal の革新的提言にまでもどることが示唆されている訳である。

2) 歴 史

Kronick (1976) の著作は、彼が1956年にシカゴ大学大学院の博士学位を受けた論文を印刷したものであり、1962年に初版が刊行された。1665年から1790年までの学術雑誌の史的発展を、多くの引用を示しながら記述した研究書である。わが国では見ることのでき

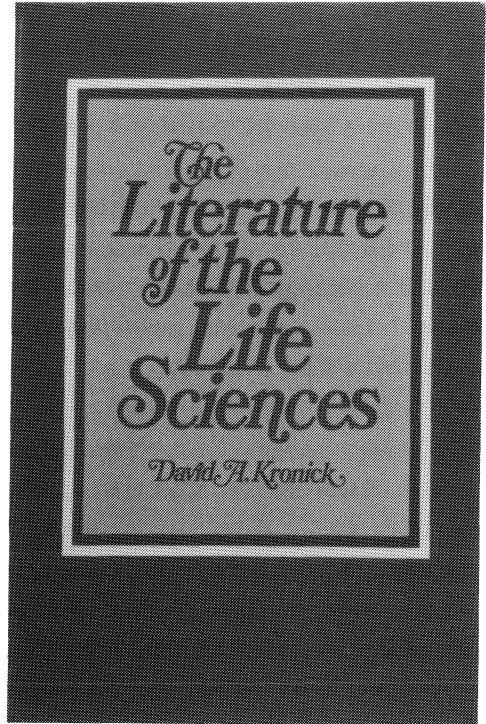


写真4

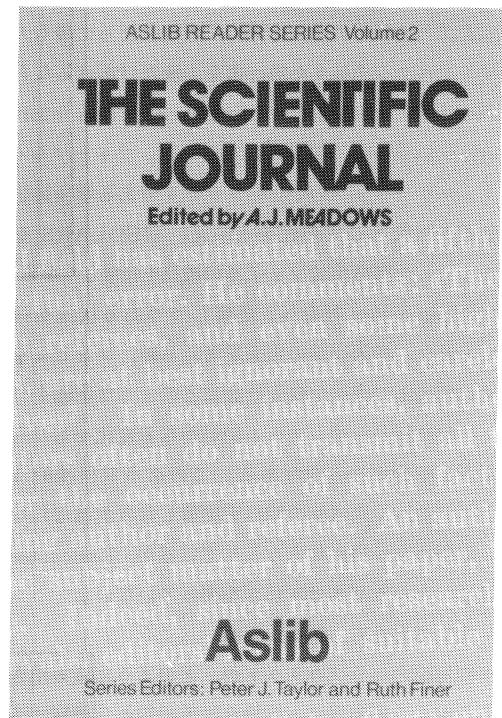


写真5

ないような雑誌を、巻末のタイトル索引を引くことで、それらの概要を知ることができる。学術雑誌の歴史的研究には不可欠の資料である。

世界を代表する学術出版社の1つにオランダのエルゼビア社(Elsevier)がある。1580年 Leiden で本格的な出版と販売活動を開始してから400年が経過している。これを記念してエルゼビア社から Meadows (1980)により出版史の本が刊行された。その著作の巻頭を飾った Manten の論文は、1850年以前の学術雑誌出版の歴史を理解するうえで有益であろう。写本を求めて各地を旅する学者、書籍巡回販売人といった中世末期の学術コミュニケーションの特徴から説きおこしており、興味深い読み物になっている。

中山(1974)(写真6)の著作は、日本語で読めるだけに、学術雑誌や学会の歴史を知るうえでの必読書である。Thornton (1966)(写真7)の著作は、医学に関する書物と書誌を扱った医学文献学の古典的な大著といえる。1949年に初版が刊行され、日本の医学雑誌や医学中央雑誌についても言及している。

3) 未 来

図書館と情報をめぐる分野で、戦後私たちに最も大きなインパクトを与えた単行書を1冊だけあげるならば、Lancaster (1978)の“Toward paperless information systems”ではないだろうか。フォーマル・コミュニケーションの中心的メディアである学術雑誌の危機の時代として現在をとらえ、MEDLARS を始まりとした機械可読ファイルの成長を指摘しながら、すでに paperless 社会へと変容しつつある状況を描いてみせた。学術雑誌の未来を考える時、コンピュータや通信技術の発展が研究社会にどのような影響を与え、科学情報の伝達システムにいかなる変化をもたらすかを、推測する必要がある。このような巨視的な視点に立ち、学術雑誌の明日を展望しなければならない。出版後9年目になろうとしているが、Lancaster の提示したシナリオは新鮮さを失っていない。

4) 論文の書き方、編集、出版

学術雑誌というプロダクトが、どのように産み出されるのかを、研究者による論文執筆過程から理解する必要がある。

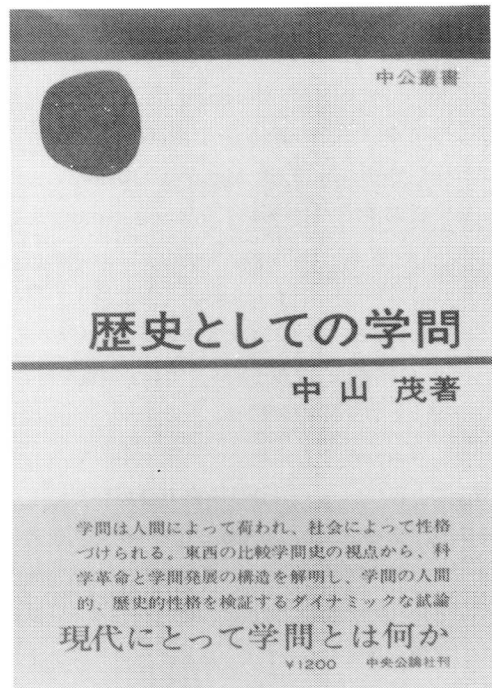


写真6

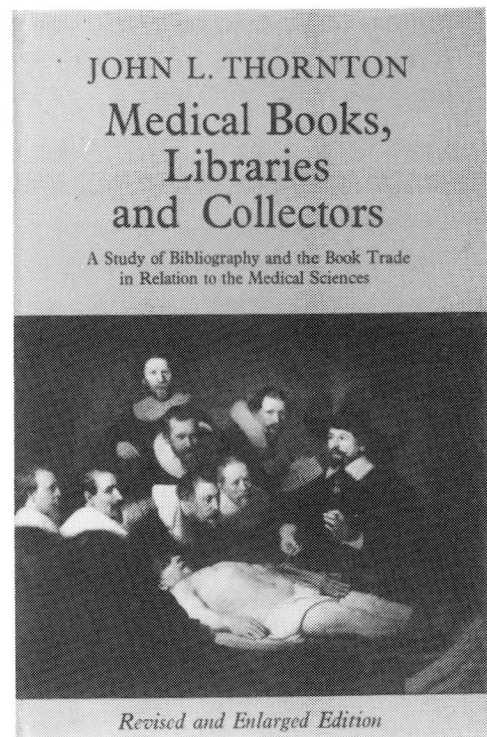


写真7

Day (1979)(写真8)の著作は、彼が編集者の立場から科学論文の書き方を教えてきた経験に基づいて書かれたものである。各章はHow to 式のアプローチでまとめられ、抽象的な議論を廃している。彼は、科学者に対する教育や訓練が、あまりに研究中心であり、コミュニケーションのための技術が無視されていることを批判している。科学論文とは何かということからはじまり、編集、論文審査、出版、別刷請求についても言及している。ユーモアを混えた文章は、この種の単行書にありがちな堅苦しさを払拭しており、好感がもてる。増補された第2版が1982年に出版されたが、個人的には第1版の簡潔さをお勧めしたい。

O'Connor (1978)(写真9)は、ELSE (European Life Science Editors) を代表する編集者である。編集や出版・印刷について詳しく説明しており、編集者の役割を理解することができる。レフェリーの機能についても一章をもうけており、編集の将来像も展望している。学術情報の流通システムの全体を、編集者の目を通して具体的に知ることが可能である。

Balaban (1978)(写真10)の編集した686頁にわたるこの書は、1977年エルサレムで開催された第1回 International Conference of Scientific Editors の会議録である。科学情報をめぐる過去の著名な会議、1948年のロンドンで開催された Royal Society Scientific Information Conference と1958年のワシントンで行われた National Academy of Sciences International Conference on Scientific Information の二つの会議を、批判的に継承している。学術情報の流過程に果たす編集者の役割を強調しながら、情報流通の諸問題を、より現実的に検討しようとしたものである。なお、1977年の会議を契機に、国際的な編集者組織が IFSEA (International Federation of Scientific Editor's Associations) として形成された。本書は、科学情報についての歴史的な会議記録となるのではないだろうか。

5) 科学コミュニケーション

学術雑誌は、科学コミュニケーションのなかで、いかなる位置を占め、今後どのような役割を果たしていくのだろうか。これは、学術雑誌を考えるうえでの、

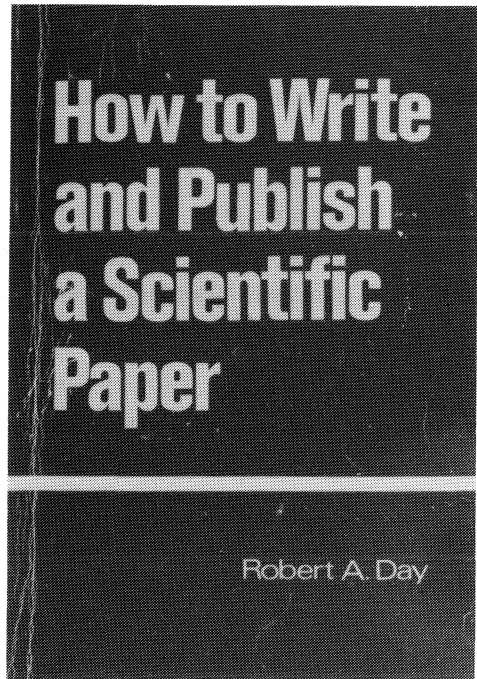


写真8

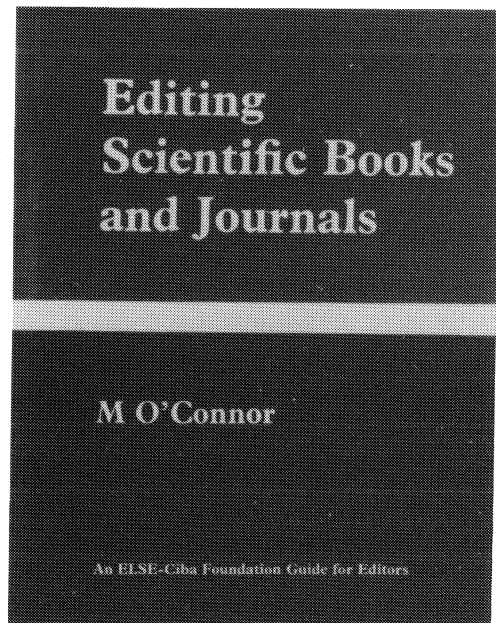


写真9

最も中心的なテーマである。

Bernalの著作は、1939年に第1版が出版され、科学社会学の古典といえる。彼は、学術雑誌を否定し、プレプリントを中心とした情報交換システムを提示した。一方、Ziman(写真11)は学術雑誌を支持し、とくに信頼性の高い情報を公衆へ伝達する重要なメディアであるという認識を示した。また、Lancetの編集者であったFox(1965)は、伝達を目的とした newspaper journal と、記録を主にした recorder journal にわけ、前者の伝達機能を強化することによって学術雑誌の改革を主張した。この3者の学術雑誌への考え方は、各々異なっているが、学術雑誌の問題点や本質を正確にとらえている。Meadows(1974)の著作は、絶版になって久しいが、イギリスにおける学術雑誌研究の中心である Primary Communication Research Centre の主導者による代表作である。Price(1970)の著作は、情報の指数的成長を示したことで、多くの人々に引用されているが、一方では批判的な読み方も必要ではないだろうか。Garvey(1981)の翻訳書は、原本の完全訳ではないが、調査データが豊富であり参考になるだろう。

基本的な単行書

- ① General; textbook and readings
 - 1) Houghton, B.: Scientific periodicals; their historical development, characteristics and control. London, Clive Bingley, 1975.
 - 2) Kronick, D.A.: The literature of the life sciences. Philadelphia, ISI Press, 1985.
 - 3) Lambert, J.: Scientific and technical journals. London, Clive Bingley, 1985.
 - 4) Meadows, A.J.: The scientific journal. London, Aslib, 1979.
 - 5) Osborn, A.D.: Serial publications; their place and treatment in libraries. Chicago, American Library Association, 1980.
 - 6) Warren, K.S.: Coping with the biomedical literature. New York, Praeger, 1981.

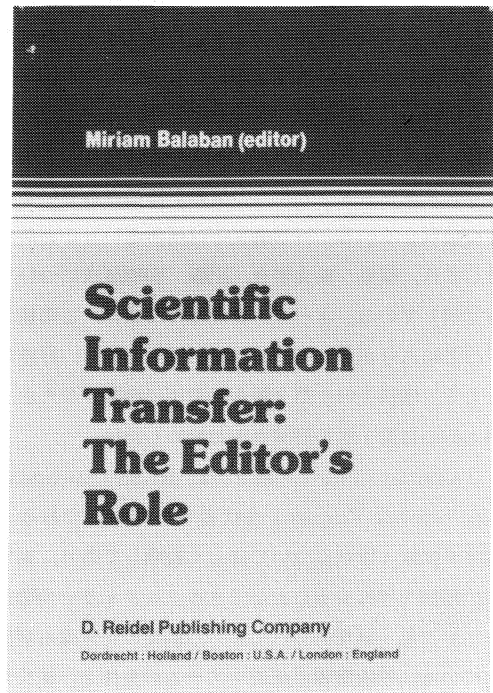


写真10

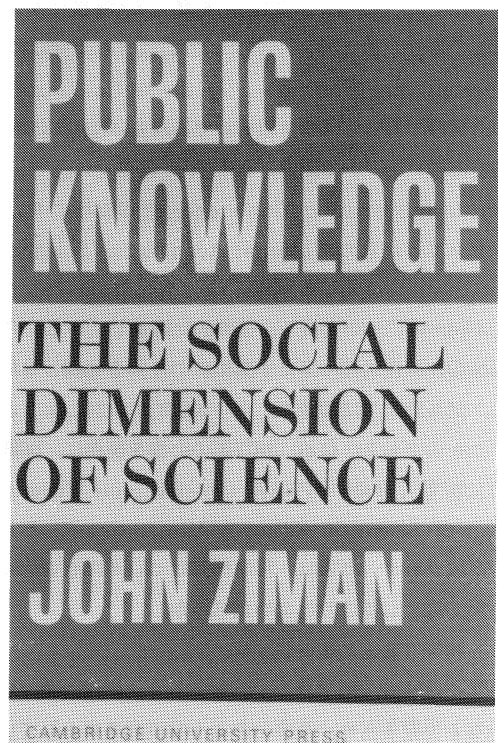


写真11

② History

- 1) Kronick, D.A.: A history of scientific and technical periodicals; the origins and development of the science and technical press 1665-1790. Metuchen, Scarecrow Press, 1976.
- 2) Manten, A.A.: The growth of European scientific journal publishing before 1850. In: Meadows, A.J. (ed): Development of science publishing in Europe. Amsterdam, Elsevier, 1980. pp.1-22.
- 3) 中山茂/歴史としての学問. 東京, 中央公論社, 1974.
- 4) Thornton, J.L.: The growth of medical periodical literature. In: Medical books, libraries and collectors. 2nd Rev Ed. London, Andre Deutsch, 1966. pp. 215-235.

③ Future

- 1) Lancaster, F.W.: Toward of paperless information systems. New York, Academic Press, 1978.

④ Writing, Editing and Publishing

- 1) Balaban, M.: Scientific information transfer; editor's role. Dordrecht, Reidel Pub., 1978.
- 2) Day R.A.: How to write and publish a scientific paper. Philadelphia, ISI Press, 1979.
- 3) O'Connor, M.: Editing scientific books and journals. Wells, Pitman Medical, 1978.

⑤ Scientific Communication

- 1) Bernal, J.D.: 科学の社会的機能. 東京, 創元社, 1970.
- 2) Garvey, W.B.: コミュニケーション. 東京, 敬文堂, 1970.
- 3) Fox, T.: Crisis in communication; the functions and future of medical journals. London, Athlone Press, 1965.
- 4) Meadows, A.J.: Communication in science.

London, Butterworth, 1974.

- 5) Price, D.J.de S.: リトル・サイエンス ビック・サイエンス, 東京, 創元社, 1970.
- 6) Ziman, J.: Public knowledge; the social dimension of science. London, Cambridge University Press, 1974.

3. 学術雑誌

〈学術雑誌〉に関する論文を多く掲載している雑誌をあげることにする。カナダのトロント大学出版局から発刊されている Scholarly Publishing, 米国電気電子工学協会が発行されている IEEE Transactions on Professional Communication, 図書館員向け実務誌である Serials Librarians, EASE (European Association of Science Editors) のニュースレターである Earth & Life Science Editing(写真12), MeadowsやGarfieldらが編集に参加している Scientometrics, そしてこの Scientometrics に



写真12

吸収合併された Journal of Research Communication Studies などあげることができる。

総説誌としては, Advances in Librarianship, Annual Review of Information Science and Technology (ARIST), Progress in Communication Sciences などがある。例えば, ARIST の1983年版を見ると, P.J. Hills が学術情報伝達プロセスに関するレビューをまとめている。

なお, 二次情報源としては, Index Medicus が有用であろう。「Periodicals」や「Writing」という MeSH のもとで必要な文献を見つけることができる。また, Bulletin of the Medical Library Association 誌の文献紹介コラムである “Journal Note” も忘れられない。

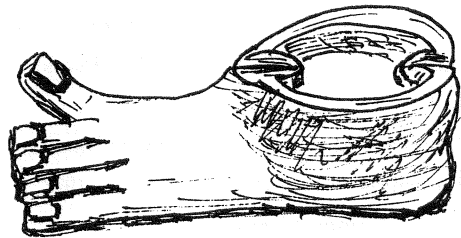
*

*

*

IV. おわりに

学術雑誌をテーマにした調査や研究をはじめようとする人々を対象に, 5つのアプローチのしかたとキーペーパー, そして基本的な書誌・単行書・雑誌などを紹介した。学術雑誌というテーマを, 様々な視点から解き明かしてもらいたいと考えている。とくに, 図書館資料としての学術雑誌といった視点だけでなく, 科学コミュニケーションの主要なメディアであるという認識のもとに考察していく必要がある。学術雑誌の未来を考えることは, 科学コミュニケーションの明日を展望することになる。



山崎茂明著：『学術雑誌研究への手引』の転載にあたっては、著者と日本医学図書館協会から転載許諾を得ました。

日本医学図書館協会発行「医学図書館」99-110ページ、33巻、2号、1986年より転載。

Librarianship : 遠くまで歩いていくために

山崎 茂明*

1. はじめに

1989年8月末、フィラデルフィアに滞在していた私のところへ、10月26日に開催される日本薬学図書館協議会研究集会の件で、日本から航空便が届きました。7月から3か月の予定で College of Physicians of Philadelphia 図書館へ、アメリカ初期医学教育史をテーマにした調査を行うために、訪問研究員として短期留学している時でした。アメリカ出発前に、研修会での講師を依頼されており、その時はどんなテーマで話すのかも確認しないままに返事をしていました。

1週間69ドルのホテルの室で、“研修テーマ：Librarianship”という1枚の文章を読んだ時、少々驚きました。Librarianshipというテーマである以上、自分自身を離れて、客観的なデータや事実を並べ話をまとめることはできそうにありません。30歳近くになり図書館員としての遅い出発をし、その後十数年をへた時間の流れを意識せずに語り出すことは不可能です。それにしても、企画された側で書かれた文章の内容は、とても意志的なものであり、これを書いた人自身が話してくれることが最も適切だと思えるものでした。発表の中にもり込むべき内容が箇条書きされており、それらは私自身がいつか語ってみたい内容でした。

9月になり、宿舎に近いペンシルベニア大学キャンパスは、新学期に入り学生達で賑わいはじめました。街を吹き抜ける風も、すっかり冷たくなり、朝晩は上着が必要な季節になってきました。9月初旬は、調査結果を論文にしていた頃でした

が、夕食後36丁目の角のスーパーで買った85セントのコーヒーを飲みながら、3日間ほどで研修会の原稿をまとめることができました。手紙や日記を書くのと同じような自然な気持でした。今回の私の文章は、研修会場で話したものと異なっているかもしれませんが、この時の原稿をもとにしたものです。なお、“研修テーマ：Librarianship”の文章は、国立衛生試験所の加納さんによって書かれたものであることを、帰国してから知りました。

フィラデルフィア滞在中に、留学先の College of Physicians だけでなく、ジェファーソン医科大学やペンシルベニア大学の図書館をよく利用しました。そして、それぞれの図書館員と知り合いになりました。ペン大の生物医学図書館のレファレンスをしているスーザンから、週1回英会話のレッスンをうけました(写真1)。日米医学図書館比較、CD-ROMとレファレンスサービスの将来、アメリカのポピュラーマガジン、ペン大キャンパスめぐりなど、楽しみながら話し合ったように思います。この文章は、日本からの封筒の中に入っていた企画者側のメッセージをガイドにして、Librarianship についてフィラデルフィアで考えたものです。

2. レファレンスと伝記

過去の知識が集められ、図書館が形成され、そこに働く人々が生まれました。“the Book”と書けば、それは聖書のことであり、西欧世界において人々が自分の道を失いかけたり、悲惨なできごとに直面し悩んだりした時の、最良のレファレンス・ブックでした。15世紀に活字印刷術が発明され、口伝えや高価な写本で伝達されてきた知識や、人々に知らせたい新しい情報が印刷され、多くの

* Shigeaki YAMAZAKI
東京慈恵会医科大学医学情報センター
〒105 東京都港区西新橋 3-25-8

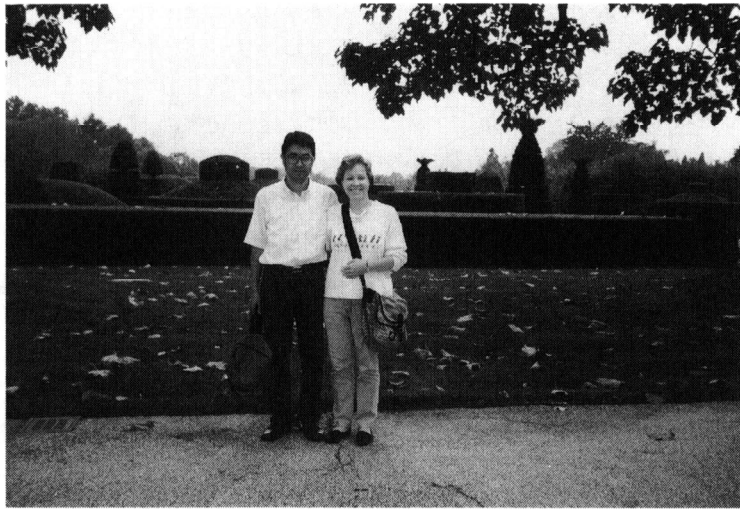


写真1 ペンシルベニア大学生物医学図書館のシーズンと筆者

人々に伝えられるようになりました。料理書、家庭医学書、暦などの実用書が、宗教関係出版物のほかに印刷されていました。そして、新聞が発行され、社会のできごとや市民の求める情報を提供するメディアになったのです。さらに、天上の世界を見つめるだけでなく、地上の世界に目をやり、あるべき世界へいたる現実的な方策を考えるようになりました。こうして学術世界に科学的思考がもたらされていき新しいさまざまな学問が生まれ、学会が形成されていったのでしょう。

知識は、いつも人間が遠くまで穏やかに歩いていくためのレファレンスでした。レファレンス・ブックは、図書館の書架に並んだ辞書・事典といった狭いものではありません。例えば、アメリカの書店に入って感じるのは、“Reference”と“Biography”の棚の豊富さです。伝記を読む人々は、そこに書かれた人間の歩行の軌跡と自分の歩みを重ね合わせながら、自省し生きてきたのではないのでしょうか。自己の歩いていく方向を修正したり、自分の歩みが正しいかどうかを検討するためには、指針が必要です。その伝記が、自分と同じ職業や環境を共有している人のものであれば、おそらく、より有益なものでしょう。色彩豊かにならんだ“Biography”の棚の前に立った人間は、自分とどこか似ていたり、そうなりたいと憧れている人々の書物を求めているはずで

す。冗談を言ったり、ふざけたり、人に悪態をついたり、小さな嘘を言ったり、恋をしたりしながら、それでも時々自分の道を目を細めて眺めやる時があるものです。人間はレファレンス・ブックを必要とし、それを書き記録する人々、出版し流通させる人々、そして過去のそれらの記録を保存し資料を求める者にサービスする人々など、さまざまな集団が形成されていきました。このなかに、図書館員も含まれています。

図書館員は、人々と“情報や知識”とを結びつける役割を果たし、両者のより適切な出会いをつくりあげる職業だと思います。情報や知識を組織化し、利用者へのアクセスをサービスとして提供していくものです。組織化は整理業務 (technical services) であり、利用者へのサービスは public services です。図書館は教会のような魂の救いの場でもなく、病院のような肉体的いやしの場でもありませんが、学問的知識にもとづいた理性的な救済といやしの場が図書館であると思っています。

3. 利用者としてみたフィラデルフィアの図書館

3.1. College of Physicians of Philadelphia 図書館

College of Physicians of Philadelphia は、1787年に設立されたアメリカ最古の医学専門家の組織

です。イギリスの Royal College of Physicians をモデルにした医師のギルドにあたります。おそらく、米国国立医学図書館とハーヴァードのフランシス A. カウンティー図書館などと並んだ、アメリカの代表的な医学史コレクションを所蔵している図書館でしょう。私はこの College of Physicians of Philadelphia 図書館の資料を使い、アメリカ初期医学教育史に関する2つの調査を行ってきました。

歴史コレクション部門の閲覧室には、2つの大型閲覧機と2人のライブラリアンのいる机があり、部屋のまわりの壁に書物が並べられていました。ここには、参考図書だけでなく、これまでに出版された医学史の研究書が分類され配架されています。例えば、アメリカ各地の州の医学史は、“PK 2 R”です。1960年代から受入れられた資料は、米国国立医学図書館(NLM)の分類に変更されていますが、必要とする資料が一次資料と二次資料の別なくすぐ利用できます。“Bibliography of History of Medicine”をはじめとした医学史の索引誌や、“Bulletin of the History of Medicine”など主要な医学史専門誌が創刊号から置いてあります。この部屋にいれば、資料を求めて各地の医学図書館を訪問したり、相互貸借で本当に重要なものかわからないような文献のコピーを依頼する

必要がありません。そして、調査に行き詰まった時には、すぐ近くにいる館員にたずねると、彼らが的確な助言をしてくれます。歴史コレクション部門の主任司書のトムは、ペンシルベニア大学の博士課程に在籍している歴史家でもありました(写真2)。

7月にフィラデルフィアに着き、私が最初にやったことは、この部屋の周囲に並べられていた本を棚から取り出し、手に取って眺め、自分に必要な本のカードをとることでした。書名や著者を知っている本も多くありましたが、実際にページを開いてみると、本当に著者が力をこめて書いたものか、そうでないものかがすぐわかりました。豪華な造本の書籍であっても内容の無いものもありました。この作業を4~5日やり、私は自分の計画していた調査がうまく行くという感触を得ることができました。そして、これらのコレクションが、200年という年月をかけ、多くの図書館員や研究者の努力によって形成されており、突然日本からやってきた人間が、すぐに利用できるように組織されていることに感心しました。それは、当りまえのことであるかもしれませんが、とても気分の良いものでした。

私の調査のひとつは、南北戦争以前のアメリカ各地の医学校の創立時の教授たちの個人データを

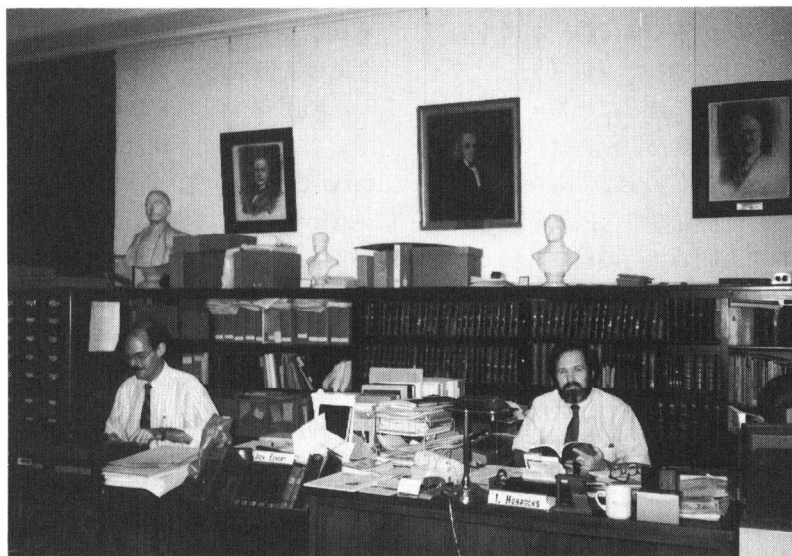


写真2 College of Physicians of Philadelphia 図書館のトム(向かって右側)とジャック

もとに、アメリカにおける医学教育発達史を実証的に示すことが目的です。有名な人は、主要な人名辞典から判明しますが、マイナーになればなるほど困難になってきます。その中で、ニューヨーク州の Albany の医学校の教授について、もう一步踏み込めずに少々迷っていました。そこで、初心にもどり図書館の目録をしてみることにしました。学校名を探し、そこに並んでいたカードを見ていたら、創立時の歴史的スケッチにあたる資料のカードがありました。私は、Index Medicus を 1879 年の創刊から現在まで、医学校史や医学教育史に関する約 300 枚の文献カードを書きためていました。ですから、歴史的スケッチに類するものは、ほとんど把握していました。ただし、カードボックスで見つけた文献の出典となっていた雑誌名は、学術誌でなくアメリカの大学紹介誌のようなものでした。なんとなく気になり、この資料を書庫から出してもらいました。黄ばんではいましたが、自家製の袋の中に、雑誌から切りとられた 10 ページほどの資料が出てきました。論題とキーワードが手書きされていました。この資料は、100 年ほど前に一人の図書館員によって、学術雑誌でない広告誌のようなものの中で見つけられ、彼が必要と考え、切り抜き、カードにとり整理したものでしょう。ちょうど、歴史コレクションの部屋で、アシスタントをしているジャックが、古書の修復をやっていました。仕事とは、このような地味なものなのだと感じました。資料は利用されるものもあるけれど、一度も顧みられないものもあるかもしれない。それでも、このような努力の集積があって、知識がレンガ積みされ、後の人々に引きつがれていくのでしょう。おそらく、私がこの時感じたものは、“Librarianship”という言葉であったと思っています。それは、華やかさはありませんし、エネルギー的なものでもありませんが、静かな意志が底に流れていることは確かでした。自分の知りたいことは、この資料からも得ることはできませんでしたが、良いものを見たと感じました。

3.2. ジェファーソン医科大学図書館

フィラデルフィアで 2 番目の医学校として、ジェファーソン医科大学が設立されています。この

図書館は、ジョージ・タウン医学センター図書館が開発した LIS (Library Information System) を全面的に採用した近代的な図書館です。Jeffline と呼ばれているネットワークが形成されており、目録情報はもちろんのこと、MiniMedline システムにより約 260 の重要誌の 4 年分を検索できるようになっています。Jeffline へのアクセスは、パソコン、モデム、通信ソフトなどを持っていれば、研究室や家庭からの利用もできます。CD-ROM 専用ワーク・ステーションも 4 台用意されていました。コンピュータ・ターミナルを通して、求める情報を迅速に検索できるようにシステム化されていました。情報や知識を活用することで、医療の質を高めていこうという方針を持っています。図書館を中心にして、学内の情報資源を統合的に管理していくことで、医療サービス、教育、研究のさまざまな側面を支援していくことを目標にしています。館長は 38 歳の若さであり、大学は彼に図書館の将来を託したように感じました。私は、2 度ほど会い昼食をともにしたりしましたが、彼の肩の力を抜いたプラグマティックな姿勢に感心させられました (写真 3)。

週末と夜間に利用できるパスを発行してもらい、コピー代も 1 枚 5 セント (7 円) と安いので、よく利用しました。調査結果を論文にまとめる段階になると、3 階の LRC (Learning Resources Center) に行き、マッキントッシュのおいてある個室の鍵を借りて原稿をつくりました。投稿しようとした雑誌の引用文献スタイルが、ファースト・ネームを省略しないで記入することになっており、同じフロアにあるターミナルから図書目録や MiniMedline のメニューを選択して必要な書誌事項を打ち出して利用しました。図表の作成についても、LRC で相談したら、2 種類のソフトを使い簡単にできるということで、教えてもらいながら投稿用の図表をつくりました。日本に帰ってから、使いなれた道具で作成できることはわかっていましたが、一人の利用者として徹底的にこの図書館を使ってみようという気持でした。

ジェファーソン医科大学の図書館には、学習や研究を行うための資源が、印刷物からコンピュータまでそろっている訳です。この図書館からも

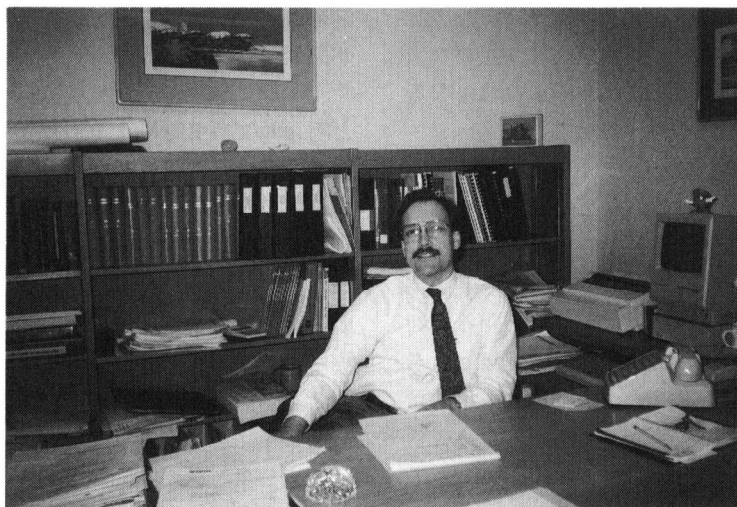


写真3 ジェファーソン医科大学図書館長のエド

Librarianship を感じることができました。図書館を印刷物を中心とした読書やコピーの場とするだけでなく、教育・研究・臨床活動のすべての面で、情報とコミュニケーションに係わることは、できるだけ図書館サービスのなかで展開しているとしています。

3.3. ペンシルベニア大学生物医学図書館

もうひとつ私がよく利用した図書館に、ペンシルベニア大学の生物医学図書館がありました。ペンシルベニア大学の医学校は、1765年にジョン・モーガンを中心にアメリカ最初の医学校として設立されたところです。全学の図書館システムである Pennline が形成されており、目録情報ばかりでなく、各分野の代表的抄録・索引誌が学内システムから無料で検索できるようになっていました。着実にやるべきことを実行している図書館という印象を持ちました。

宿舎から歩いて5分ほどの生物医学図書館に、はじめて訪問した時、私自身図書館員でありながら、かなりまごつきました。自分がコピーしたかった雑誌の所在場所、コピーカードの買い方、1976年以前のバック・ナンバーが配架された地下2階の電動書架の操作法、フィラデルフィア地区の総合目録のことなど、知ってしまえば簡単なことですが困惑しました。この時、レファレンス担当の若い女性が、館内を歩きながら具体的にひとつひ

とつ教えてくれました。この30分ぐらいのガイドをうけられたことで、その後スムーズに利用できるようになりました。利用者は高度な質問でレファレンス担当者をうならせることもありますが、簡単なことで迷っている場合も多いと思います。このような時、相手の立場にたって、きちんと教えてくれる人がいると助かります。CD-ROMなどが導入されると、もちろん利用者講習会を行います。一番大切なのは現場で一人一人に対しその人のレベルに合わせて教えてあげることだと思います。それは図書館員にとり時間のかかるものになりますが、嫌な顔をせず同じ説明を繰り返すことのできる優しさが必要だと思いました。

この親切な心（ホスピタリティ）は、学歴や経験に関係なく、誰でもがすぐ持ちえるものであり、Librarianshipの基本だと痛感しました。

以上の3つの図書館を利用した体験から、つぎの3点が図書館員に必要なだと思っています。第一は、主題知識を理解し自ら研究する姿勢をもっていること。第二は、新しい技術への応用力をもっていること。そして、第三は、ホスピタリティです。

4. 図書館とサービス

私はフィラデルフィアで出会った図書館員や図書館の利用体験を書いてきましたが、サービスと



写真4 デバイン・トレシー・ホテルの自室

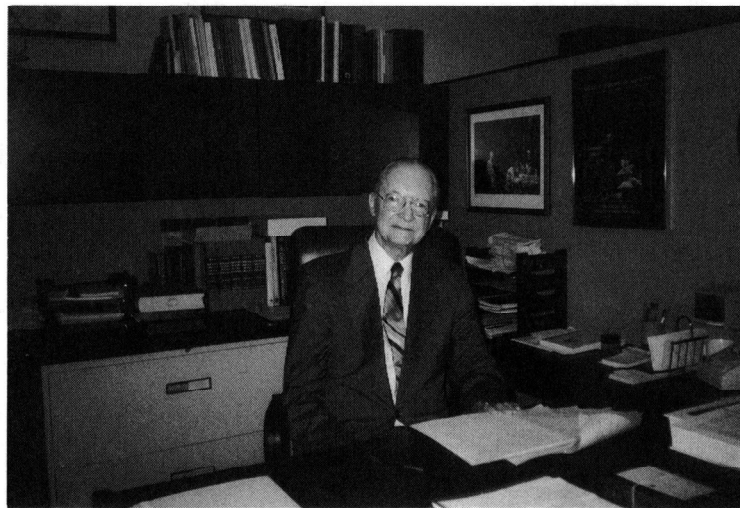


写真5 ジェファーソン医科大学のウェグナー博士

いうことに関して3か月の生活の中で考えたことがありました。7~8月はペンシルベニア大学が運営している留学生会館 (International House of Philadelphia) に住んでいましたが、9月は近くのホテルで過ごしました。アメリカは9月から新学期ですので、長期に滞在する予約が優先され、私は留学生会館に9月末まで住むことができなかったのです。会館事務室の助言もあり、デバイン・トレシー・ホテルという、キリスト教団体によって非営利で運営されている宿舎に入りました(写真4)。1日わずか10ドル(1,400円)で、バ

ス付の個室を利用できました。宗教団体が経営していることもあり、宿泊規則が少し厳しいところがあり、ホテル内ではすべて禁酒・禁煙で、フロアは男女別にわけられています。宿泊者のゲストでも、室内への入室は許されておらずロビーを利用することになっています。しかし、この規則のおかげで、安宿ですが静かで安全な環境を維持することができ、安心して住めるわけです。地下に食堂があり、全くかざり気のない料理が並んでいます。しかし、食べてみると自然な風味であり、体の中にしっかり入っていく感じがしました。鳥

肉のソテー、ブラウン・ライス、トウモロコシ、ニンジンケーキ、ミルクといった夕食で5ドルぐらいです。また、このホテルではチップを受けとりません。ルーム・サービスの老人と話した際、私たちは神様のために、神の意志によって働き、人々にサービスしているのですと理由を説明してくれました。経済的なこと以外に価値観を見出し働いている人々に接し、仕事とは基本的にボランティアなのだと思います。そう考えてみると、私の調査データと論文を毎週一度見てくれたジェファーソン医大のウェグナー博士にしても、全くのボランティアだと思いました(写真5)。また、二百年をかけて形成された歴史コレクションを自由に利用させてもらえたことを含めて、十分な図書館サービスを提供してもらえました。

現在、情報や知識といったものが資源であると認識されるようになってきました。情報資源マネジメント (Information Resources Management) という言葉があり、これはマセソン女史らが提言した IAIMS (Integrated Academic Information Management Systems) のキーコンセプトにもなっています。人・物・資金の3要素をどのように管理するかというだけでなく、情報をいかに管理するかで、組織の発展が決定されるというものです。ただし、日本ではこのことを経済的な資源として認識してしまいがちです。情報は金であると決め、情報サービスの有料化を当然のように考える傾向もあります。たしかに、情報は大切な資源であるけれど、だからといってすべて経済的なものに換算できないし、そうすべきではな

いと思います。情報サービスが、情報産業という形態だけになったのではおかしなものになるでしょう。図書館は、経済的な価値観が優先する社会システムとは一線を画すべきだと考えています。公共的なサービスであり、無料を原則にしたボランティア精神で運営されるべきものではないでしょうか。これは、Librarianshipを支える精神のひとつであると思うようになりました。

5. おわりに

中世ヨーロッパで、学者は旅をしていました。彼らは、各地に点在していた修道院や大学を訪問し、写本を読み同学の人々と情報交換をしていました。一般の人々は、もし悩みができたり、相談事や過ちを告白したくなると、教会へ行き精神の安らぎと救済を得ました。もし病気やケガをしたら、病院に行き肉体的ないやしと救いを得たわけです。古来、教会と病院、そして修道士と医師は同義語に近いものでした。同じように、知識や情報の欠乏に出合った時、人々は図書館に足を向けます。教会も病院も、そして図書館も、身体と精神のオアシスであり、人々が遠くまで歩いていくために必要な場所だと思います。

自分たちの職業を定義する時、過去の歴史状況から学ぶこと、つまりヒストリカルな視点に立つこと。そして、広い同時代性をもつこと、つまり国際的な視点から検討していくことが大切だと思っています。

(原稿受付: '90.1.10)

山崎茂明著：『Librarianship：遠くまで歩いていくために』の転載にあたっては、著者と日本薬学図書館協議会から転載許諾を得ました。

日本薬学図書館協議会発行「薬学図書館」14-20ページ、35巻、1号、1990年より転載。

医学図書館員の専門性をみがぐために

山崎 茂明*

愛知淑徳大学文学部図書館情報学科

Alice pleads with the Cheshire Cat,
“Would you tell me, please, which way I ought
to walk from here?”
With great insight, the cat replies,
“That depends a good deal on where you want
to get to”

(出典：不思議の国のアリス)

I. はじめに

専門性をみがぐために、基本的な知識として何が必要かというよりも、「何がしたいのか」を問うことが大切だと考えています。現在の時間とエネルギーを不確実な将来に備えるよりも、自分が実行したいことや、そうあって欲しいことのために使うべきでしょう。学生時代は、教科書に記載されていたような標準的な知識を、幅広くかみ砕くよう求められていましたが、これから専門的な職業人に求められる基礎知識は、ひとりひとりが「何をしたいのか」によって規定されるものです。米国医学図書館協会は Handbook of Medical Library Practice を刊行し、医学図書館員の標準的な知識をまとめてきましたが、第4版を1982年から1988年の7年間を費やして出版したのを最後に、Handbook の出版を止めてしまいました。

*Shigeaki YAMAZAKI : 〒480-1197 愛知県長久手町片平9.
shige@asu.aasa.ac.jp

(1999年7月28日 受理)

1943年の Janet Doe 氏による第1版、1956年の2版、1970年の3版と継続されてきましたが、1990年代の激しい情報環境の変化を受け、Handbook という教科書形態で、基礎的な知識をまとめあげることの困難性が明らかになったのです。

II. ミッション指向で考えよう

新しいサービスの展開を考えている方は、海外の文献を調査し、必要に応じて直接電子メールを送り問い合わせることもあるでしょう。意志が伝えられるように英文レターを書き、海外文献を読み抜く力も必要になります。さらに、直接海外の会議に参加し、自分と同じように働いている海外の医学図書館員との交流が有益です。その時、まずは語学力を付けてから海外へ向かうという計画をするよりも、最初に会議へ行くと決めてから、それへ向けて努力すれば良いのではないのでしょうか。自分が実行したい目標をセットしてから、求める知識を獲得するやり方です。なによりも会議へ参加することが一番大切です。言葉を通して理解するだけでなく、そこに流れている雰囲気やトーン、参加者の表情に共通しているもの、街の空気や食事を通してより多くを学べます。行きたいという率直な気持ちが大切です。基礎知識よりも、あなたが何をしたいのか、どんな気持ちを職業を通して表現したいのか。それによって、必要とする具体的な基礎知識が明瞭になり、実際の勉強

や訓練がはじまります。ミッションや問題解決指向で、基礎的な知識を各自が明らかにしていくのが一番でしょう。

現在、大学で教育に従事していますが、論文の書き方も、プレゼンテーション技法も、書きたいものや表現したいテーマが明確になって、身に付くものです。論文を書く意志のない人間が、論文作法に類する図書を熟読できるものではありません。確かに、将来に備え、基本的な知識を列挙し、その獲得のプログラムやテキストを準備することは専門職の世界では必要です。学会や協会は、そのためのリソースの形成を企画しています。しかし、本気で実行したい対象が見えてきた人にとっては、既成のプログラムで間に合うものではありません。大学院で本格的に勉強したり、やろうとしているテーマにふさわしい専門家と直接会うことも必要になるでしょう。情報は専門家を通して得ることで、信頼のできるものとして定着します。情報それ自体では意味をもっておらず、人間が情報に意味を与えるものだからです。

Ⅲ. 歴史から学ぶ

1962年、ロックフェラー財団の支援を受けて、アメリカの医学図書館界のリーダーが来日し、日本各地で講演と討議をしました。その時の記録の一部に、「レファレンスサービスは図書館員の仕事であるか」をめぐる論争が展開されていました¹⁾。問題提起型の内容ですが、この講演会に参加した医学図書館員の多くは、「現時点では、レファレンスサービスは図書館員の仕事ではない」という方向でまとまっていた。参考図書や二次資料は、現在は図書館員と利用者が共有するリソースと考えられますが、当時は医師や研究者の世界に属していました。情報や知識は、自由に流れる水のようなものなのに、それぞれが壁をつくり、その流れを阻害していました。これは、今から35

年ほど前の、日本の医学図書館の空気を反映したものです。

ここで、「レファレンスサービスは図書館員の仕事であるか」と自問してみましょう。多忙であり、そこまで仕事を広げられないという意見も多く出てきそうです。貸出サービスを中心にした公共図書館に目をやると、レファレンスサービスへの力の入れ方や、それに付帯する教育サービスの展開など、前面に出てきません。情報や知識のそばにいる人間が、必要としている人に何がしかの案内をするのは自然な姿であり、それがレファレンスサービスであると思います。一方、レファレンスサービスは図書館員の仕事であると考えている方も、医療従事者以外のサービスの展開にはためらいをおぼえるかもしれません。しかし、医療サービスの最終的な受け手である消費者を除外するのは不自然です。学術情報の組織とサービスについての経験と知恵を、患者サービスの拡大に生かせるはずですが。

医学図書館誌や *Bulletin of the Medical Library Association* 誌、そして *Handbook of Medical Library Practice* の旧版など、私たちの指針となる知識が蓄積されています。どこか保守的と思われる内容でも、時代や技術情報環境を考えあわせるとき、さらに聞こえてくるメッセージがあるでしょう。仕事を通して医学図書館員が考えることは、今も昔も変わらない事項が多いものです。新しいオリジナルな疑問と思っていたものが、すでに提案されていたと気づく時もあります。

Ⅳ. 会議参加から学ぶ

会議は実際に参加するものであり、会議録を読んでもわかりません。1982年から仲間と医学情報サービス研究大会を組織してきました。時々、大会の会議録や報告集を刊行するように提案される時があります。確かに、そこまでやればとも

と思いますが、編集制作のエネルギーも考えなければなりません。個人的には、会議録不要論者です。それは、会議が雑誌のような書きことばに基づいたコミュニケーションの世界ではなく、口頭発表によるコミュニケーションの場であるからです。聴衆を前にしたプレゼンテーションは、抄録集などにもっともらしいことが書いてあっても、演者の肉声や態度から、その内容が本物か偽物かがすぐにわかってしまいます。それだけに口頭発表は怖いものですが、書きことばにはない魅力があります。そして、会議は選抜された信頼できる内容ばかりではありません。学術雑誌へ投稿されレフェリーシステムを経たような信頼性の高さはありません。しかし、会議では熟成された発表でなくても構いません。むしろ、発表者が投げかけたボールを聴衆の誰かが受け止め、批判や助言を通して、より良いものへステップアップする契機にすれば良いのです。会議は「参加するもの」であり、「読むもの」ではありません。そして、参加した人々と共有する時間のなかでつくりあげていくものです。

医学情報サービス研究大会では、生涯教育コースや講演を企画していますし、ラウンドテーブルを通して関心あるトピックスをテーマに、グループ討議を行っています。何が必要なのか、どんな知識と技術に関心をもつべきなのかを理解するチャンスになります。

V. 旅から学ぶ

実際のサービスの現場を訪問したり、各地の図書館や情報機関を訪れることは、とても重要です。例えば、ワシントン郊外にある National Library of Medicine (NLM) を訪問してみましょう。地下鉄の Medical Center で降り地上に出ると、NLM が National Institutes of Health (NIH) の研究所が広がったロックビルの丘の一

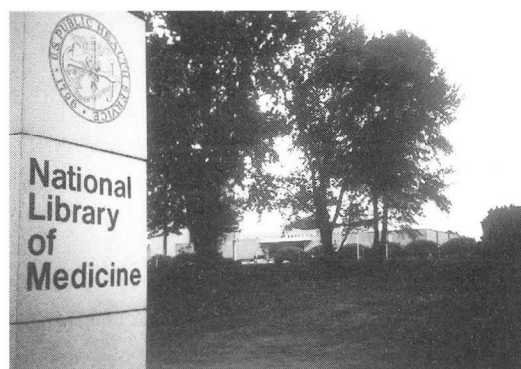


図1. 米国国立医学図書館を望む (1987年)

角を占めているのを実感できます (図1)。NLM は、まずはこの NIH に所属する研究所群の研究活動を支援することが優先されているのです。NLM の地下にある小さなコンビニエンスに行くと、お土産グッズを見つけることができますが、ほとんどが NIH の名前が入ったもので、NLM のロゴが入ったグッズは、コップなど数点だけです。近年は、NLM は PubMed や MedlinePlus などに示されるように一般の人々への医学医療情報の普及に力を入れていますが、Medline が基本的には生物医学研究を支援する研究指向の強いデータベースである理由を実感できます。また、ホームページ上にはほとんどの情報が公開されており、現地に行かなくても必要な情報を入手できます。しかし、それにもかかわらず、ホームページだけでは理解できないはるかに豊かな知識が得られるものです。中世の学者は旅をしながら、各地の寺院や大学を訪れ、同学の仲間と交流してきました。旅を通して多くを学べるからでしょう。

今から10年前、IAIMS (Integrated Academic Information Management Systems) のアイデアがアメリカで盛んに展開されていた頃、一か月ほどアメリカ各地の主要な医学図書館を一人で訪問しました。ポートランド、シンシナティ、ワシントン、ボルチモア、フィラデルフィア、ニューヨーク、ボストン、シアトルといった街を、飛行

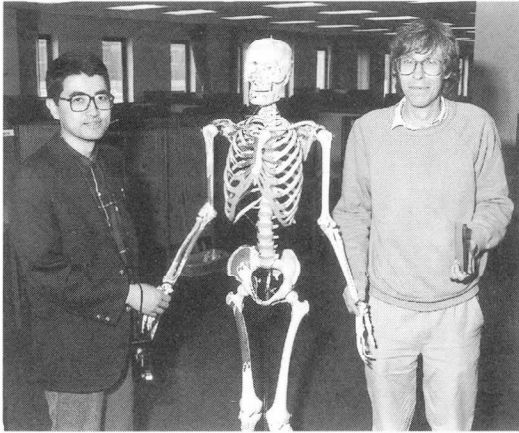


図2. シンシナティ大学医学部 Medical Center Information and Communications にて (1987年)

機と鉄道を利用して旅しました。訪問調査の前に関連する IAIMS ムーブメントのリーダーたちの論文を読んできましたが、現地では日本には到底知りえない興味深い情報と出会いました。例えばシンシナティ大学のナンシー・ロレンツィとジョージタウン大学のナオミ・ボーリングが犬猿の仲にあることを、シンシナティ大学の医学図書館員のアパートのベランダで雑談として聞いた時、「情報」に重きをおくロレンツィと「コンピュータ」を重視するボーリングの主張の違いが明確に理解できました(図2)。そして、その両者を統合したような位置にジョーンズホプキンスのニーナ・マセソンがおり、静かにその実力を発揮している姿が浮かびました。マセソンが館長をしていたジョーンズホプキンスのウエルチ医学図書館では、ネットワークの価値を決定するのはオリジナルな情報資源にあることを見すえ、既存のデータベースを導入するだけでなく、電子テキストブックの実験プロジェクトに取り組んでいたのです。また、東部の都市フィラデルフィアにアメリカ最初の医学学校として創設されたペンシルベニア大学では、論文発表などしていませんでしたが、実質的には IAIMS を実現しつつありました。生物医学図書



図3. MLA 大会プログラムと記念グッズなど (1998年, フィラデルフィア)

館の館長は、控えめな表情で私たちはやるべきことを実行するのであり、論文発表には大きな関心をもっていないと述べていました。情報技術の発展を背景にしたアメリカの医学図書館界のリーダーたちの華やかなことばとは裏腹に、停年を間もなく迎えるというシアトルのワシントン大学の館長は、IAIMS の理念であるさまざまな組織と資源を統合するのは、決して簡単ではないとその困難性を指摘していました。日本で知りえる IAIMS は、一部の主唱者の声でしかなく、アメリカの現実的な空気を反映したものではないと痛感しました。

VI. 図書館とライブラリアンから学ぶ

新しいテーマに取り組む時は、十分な資料を収集している図書館を見つけ、プロフェッショナルな図書館員に出会えるかが成功のポイントになります。1998年5月に、MLA(Medical Library Association)100年記念大会に参加するためにフィラデルフィアを訪問してきました(図3)。会議の開催されたホテルは、シティーホールとレディングマーケットの間に新しく建設されたマリオットホテルでした。10年前の夏に3カ月ほど滞在し、その後も何度か訪問してきた街であり、とく

に College of Physicians of Philadelphia 図書館とジェファーソン医科大学図書館をよく利用しました。当時は、アメリカ南北戦争以前の医学校の形成史や医学ジャーナリズムの発達を調べていました²⁾。

最近では、1980年代からアメリカ科学界を中心に問題になってきた科学研究の不正行為について調査をしています。MLA大会の展示ブースにケネディ記念倫理研究所が出ていましたので、案内を見ながら訪ねてみました。不正行為は倫理の研究対象でもあり、何かヒントがあるかもしれません。ケネディ記念倫理研究所のブースには見学者は誰もなく、大柄なおばさんがたたずんでいました。自己紹介し、scientific misconduct や scientific integrity について関心をもっているのだが…といった感じで、不明瞭な言葉でたどたどしく話していたせいか、厚い眼鏡の奥で笑いをこらえているような反応でした。それでも、BioethicsLine を中心にして、希望のテーマで検索結果を後で知らせてくれるとのことでしたので出版倫理を中心としたキーワードを書いた検索申込書を渡し、メールアドレスを記載しておきました。海外の訪問先などで、後で資料を送ると約束しても、その場限りのケースもかなりあり、「だいじょうぶだろうか」といった気持ちでした。日本に帰国してすぐ、大量な検索結果が電子メールで送られてきました。内容をチェックしてみましたが、とても有益で Medline に含まれていない多くの文献を見つけました。検索担当者のお名前は Martina Darraghm と書かれており、お礼の返事をすぐ出しました。そして、同じ年の9月にワシントンの The 2nd International AESE/CBE/EASE Joint Meeting でポスター発表する予定がありましたので、訪問することにしました³⁾。

ケネディ記念倫理研究所図書館は、ジョージタウン大学の正門に入ってすぐの建物のなかにあり、独立棟ではなくスペースも小規模でした(図4)。



図4. ケネディ記念倫理研究所図書館 (1998年)

ブックディテクション・システムのバーを押してなかに入ると、レファレンスデスクに一人だけ図書館員がいました。彼女が Martina Darraghm さんで、ブースにいた人でした。すぐに思い出してくれ、図書館の目録や所蔵について簡単にガイドしてもらいました。教えられたなかに、倫理関係の別刷やコピー、さらに雑誌からカットされた原報などが分類されて、直接ファイルされたケースがありました。私の関心あるテーマは、分類番号 1.3.9 の Scientific Research の項目にすべて含まれていました。日本でチェックしてきたリストからのコピーをとり、OPACで調べた単行書や雑誌を通覧してから、宝の山と思えた文献ファイルケースを攻めていきました。しかし、すでに夕方になり、もう一日を費やすことに決めました。翌日、Scientific Research の項目部分が著者順に並べられた2メートルほどのすべての文献を直接点検して、約400枚のコピーをとることができました。学術論文だけでなく、本のチャプター、一般雑誌、新聞記事なども入っていました。通常の文献集めの順序としては、二次資料を検索し、必要な文献が掲載された雑誌などを1件ずつ書架から探し出し、コピーをとらねばなりません。さらに、相互利用のリクエストも必要でしょう。しかし、文献ファイルを直接見えずにコピーがとれます。出版倫理についての重要な論文をこの2日

間で入手できたこととなります。Darragham さんが、電子メールでワシントンに来るなら必ず訪問するよう勧めてくれた理由がわかりました。私たちが最終的に欲しいものは、二次資料からのリストではなく、一次資料としての原報であり、この文献ファイルケースはその要求に応えたものでした。自分の取り組むテーマがはっきりしていれば、偶然の出会いもどこか必然的なものになります。

VII. 発表から学ぶ

私たちは論文を書いたり口頭での研究発表だけでなく、図書館ツアーの案内役やレファレンス講習会の講師役など、さまざまな発表のチャンスがあります。発表を通して、自らの考えを整理し、わかりやすくまとめる機会となるでしょう。そのなかで、論文や会議での発表は、自分も持っている知識や問題意識を、外部に表現するものです。実は、情報や知識を得るためには、まず自分の側から相手にそれらを与える必要があります。職業人となって、相手から一方的に受容するのは適当とは思えません。相手に与えてこそ得られるものです。年齢や経験の差からくる違いはあるかもしれませんが、逆に若々しさや新鮮な問題事項への感覚はベテランには無いものかもしれません。経験の浅い人々は、これらを率直にぶつければ良いでしょう。お互いが対等な関係で向かい合っこそ、情報交換と話し合いが可能になります。より多く学ぶためには、より多く発表することがポイントです。また、発表を通して新しい友人や知人を得られます。同じ組織のなかで働いていると、展望が開けないこともあります。新しいアイデアは、いつもと違う場所や人間関係のなかで生まれるものです。

VIII. 人から学ぶ

本や論文を読んだりするよりも、人との出会いを通して学ぶことが多くなり、最近それがとても楽しいと気付きはじめました。最も大切な情報は、いつも人間が持っている。そして、人間の優れている点は、相手の求めに応じて、適切な修正を加えて提供できることです。巨大なデータベースや数百万の図書が並べられた書架を探索すれば、膨大な情報のチェックが可能です。それでも、対話を通して得られる情報のほうがはるかに重要です。人間は、事実を述べるにしても、微妙なニュアンスや価値観を混ぜるものです。そして、その人への信頼感があれば、合理的と思えぬ意見であっても示唆に富むものです。一方、他者は自分の鏡といった要素もあります。自分と相手との話し合いから、多様な展開が開けます。個性豊かな人間というフィルターを通過した情報は、実感をもって受容できるものです。

IX. 大学院へのすすめ

私自身は約5年間のサラリーマン生活から医学図書館員となり、30歳の時に慶應の大学院へ入りました。職場と大学理事の理解を得ることができ、働きながら通学できました。当時の慶應には、医学情報領域をリードしていた津田教授がおられ、同級生にも恵まれ、勉強になりました。現在も、その当時の蓄積で生きているような気持ちです。課題レポートと翻訳ノートをつくる日々であったように記憶しています。図書館情報学は、実践的な学問領域であり、社会人として働きながら学ぶにふさわしいものです。専門的な職業人として、力量を高めるために、大学院で学ぶことを勧めます。

大学院は最新の動向や基本理論を「教えてもらう」場ではなく、むしろ自分自身の問題意識を明

確にし、それらを解決するための「リサーチを行う」場です。教員と院生の知識量の差はあるでしょうが、ともに問題解決に当たろうとしている年齢の違う相談がいのある仲間であると思っています。私自身、現在教員の側にいますが、一緒に勉強しているといった気持ちでいますし、実際その通りです。明確に社会人入試をうたっていないくても、以前より大学院へは入りやすくなったと思います。研究者を育てるよりも専門的職業人の育成を目標にしており、専門性をみがくために、大学院で学ぶことも十分選択肢になります。

なお、本稿の一部（6節）は、静岡県医療機関図書室連絡会の機関誌である「ぶくとらっく」に発表したものです。

参考文献

- 1) 第1回生物科学図書館研究集会要録. 東京：慶應義塾大学文学部図書館学科, 1962.
- 2) 山崎茂明. Librarianship : 遠くまで歩いていくために. 薬学図書館 1990;35(1):14-20.
- 3) Yamazaki S. Scientific misconduct in Japan's life science research. In: Manson CJ, ed. Science editing and information management. Alexandria, Geoscience Information Society, 1999:87-9.

山崎茂明著：『医学図書館員の専門性をみかくために』の転載にあたっては、著者と日本医学図書館協会から転載許諾を得ました。

日本医学図書館協会発行「医学図書館」254-260ページ、46巻、3号、1999年より転載。

電子版作成メモ

「学びの場としての学術雑誌塾」 電子版作成メモ

電子版を作成するために使用したアプリケーションソフト

- ・ 電子書籍作成ソフト : LeME (<https://leme.style/>)
- ・ PDF コンバーター : PDF to Image (<https://pdftoimage.com/ja/>)
- ・ PDF 加エソフト : pdf_as (http://uchi.jyu.s601.xrea.com/wordpress/pdf_as/)

電子版ファイルの公開場所


医学情報サービス研究大会ウェブページ

アプリケーションソフトの利用、公開場所選定にあたって考慮したこと

1. 無料で利用でき、作成した電子版の公開と閲覧も無料であること
予算がないため、無料で利用できるアプリケーションソフトを利用した。また、Amazon Kindle でも無料で作成できるが、本の希望小売価格を無料に設定することはできなかった (https://kdp.amazon.co.jp/ja_JP/help/topic/G200641280)。
2. 利用するためのサービス終了が告知されていないこと
電子版作成について参考にしたサイト The digital catalog journal (https://www.ebook5.net/journal/column/digitalbook_create.html) でパブーがすすめられていたが、パブーサイトでサービスの終了が告知されていた。
3. 容量に十分対応すること
ActiBookOne (<https://actibookone.jp/>) も手軽に電子ブックを作成できるとのことだったが、フリープランは 50MB まで。学術雑誌塾電子版は 150MB 程度以上必要と予想されたので選ばなかった。
4. 電子版が利用できる OS
LeME で作成した EPUB ファイルは、Windows 10 (Microsoft Edge)、Mac、iOS で開くことができ、Windows 7 で開くことができない。Windows 7 のサポート終了 (2020 年 1 月 14 日) が告知されているが、ユーザのため補完的に PDF 版も作成する。
5. 原稿のファイル形式
LeME の原稿として Word2016 で作成した文書を利用でき、読み上げ機能等に対応できる利点はあるものの、レイアウトがくずれてしまう。また、学術雑誌塾報告や通信が PDF 原稿のため、一旦すべて PDF にした。その後、LeME 用に jpg に変換した。

本の仕様

綴じ方向 右綴じ 左綴じ



主に横書きの本で使用します。
例: 英語の漫画・小説、技術書など。

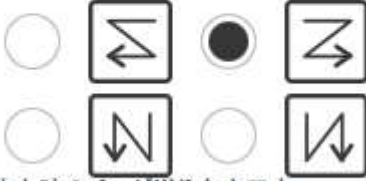
書字方向 自動 縦書き 横書き

横書きにします(強制)。

レイアウト リフロー 固定 見開き可

主に画像が中心の本で使用します。
例: 漫画など...
(ただし、Word・テキストはリフロー)

ページ送り



拡大時のページ送り方向です。
主に横書きの漫画で使用します。
(Kindleのみ)

LeME 「ステップ 2: 本の情報」での設定

メモ作成: 牛澤 典子

あとがき

「学びの場としての学術雑誌塾」を電子出版することは、「学術雑誌塾報告1～4」、「学術雑誌塾通信1～59」がインターネット上でいつでも誰でも読めるようになる、ということ。つまり電子ブック化は我々の学術雑誌塾活動が広く知られることを意味します。

私にとって学術雑誌塾のメンバーは「同期」と言う言葉がふさわしいです。学術雑誌塾で学んだ「同期」とは、同時期に医学図書館で働き始めた若手、そして学術雑誌塾で同時期に学びはじめた人たちです。同期とは「入学・卒業・入社などの年度が同じであること(明鏡国語辞典 初版 大修館書店刊 2002年)」ですが、学術雑誌塾で学び合い、仕事の悩みを言い合える仲間だったので、学術雑誌塾活動期(1985年から1990年)は、学術雑誌塾塾生はみな「同期」という間柄であったと考えられます。

2018年(平成30年)5月19日の『山崎茂明さん退官のお祝い』会で私は約30年ぶりに「同期」と再会し学術雑誌塾での思い出を語りながら同窓会気分には浸っていました。会の最後に、山崎さんから「学術雑誌塾の報告書や通信、今日のことを電子ブックにしてください」という課題が出されました。昨秋横浜の山崎さんを訪ねた時、牛澤典子さん、木下眞由美さんの名前が編集委員として挙がりました。そしてその後4人で12月、2月、3月、5月、6月に5回の打合せをしました。そして「学びの場としての学術雑誌塾電子版」は令和元年7月にまとまりました。

学術雑誌塾は昭和の終わりから平成初めにかけて活動し、平成の約30年間は活動を休止していました。しかしその30年間は塾生各自が学術雑誌塾で学んだこと経験したことを基盤に飛躍した期間であったと思います。そして学術雑誌塾電子版が平成の幕が下りる時期に企画されて編集が行われ、令和元年に出版されました。これも山崎茂明塾長、山口直比古顧問、青木仕顧問、そして学術雑誌塾「同期」の熱い思いがあったからだと思います。

学術雑誌塾同期の皆さんは、現在それぞれの分野で活躍しています。その活躍は同期の「学術雑誌塾の思い出」で語られています。同期の「その後の30年間と今」を知ってください。

廣田 住友

『学びの場としての学術雑誌塾 1985-1990』

2019年7月21日発行

編集制作 学術雑誌塾電子ブック制作委員会

廣田 住友（委員長・統括）

牛澤 典子（電子化設計）

木下(会田) 眞由美（査読・表紙デザイン）

山崎 茂明（塾長）

発行者 山崎 茂明（塾長）

shige@asu.aasa.ac.jp